
『烈火の拳聖』 魔法少女リリカルなのはStrikerS

南斗鳳凰拳・聖帝 サウザー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

『烈火の拳聖』

魔法少女リリカルなのはStrikers

【Nコード】

N6706S

【作者名】

南斗鳳凰拳・聖帝 サウザー

【あらすじ】

ミッドの違法研究施設で生まれた一人の少年が、同じ研究所で一人の融合騎と出会う。

ちよつと変わった家庭に引き取られた少年が繰り広げる、ドタバタホームコメディ？

たまにシリアス、バトルも有ります。

【注意】

これは『処女作』であり捏造、キャラ崩壊、独自設定がございます。『Vivid』や『Force』には繋がらない事を御了承ください。

はい。
ハーレム、チートの要素はありません。

【番外編】もしもの話『一つ屋根の下?』(前書き)

昨日思いついたやつを徒然なるままにそこはかとなく書いてみました。

設定とか細げえ事は良いんだよ。

実は先日、誕生日でした。

【番外編】もしもの話『一つ屋根の下?』

ここは都内のある場所。閑静な住宅街に一軒の家がある。一階部分には喫茶店が開かれ二階と一階の奥が住居のような作りになっている。白い壁と赤い屋根の一軒家だ。これはそこに住む兄弟のお話である。

「zzzzz……………」

カーテンが閉められて薄暗い部屋に一人の人物が寝ている。部屋は6畳程の広さで、窓際にベッドが置かれている。二人掛けのラヴソファーが置かれ、部屋の中心にはガラス製のテーブルがある。そのテーブルの上には児童表とファッション雑誌があった。そしてその向かいにはテレビが置かれている。ベッドの上にはファンシーな縫いぐるみが並ぶ。どうやら女性の部屋の様だ。だが、服は床に置かれ皺になっているし、雑誌や携帯ゲームも落ちていた。

分かりやすく言おう。散らかっているのだ。部屋の主は頭まですっぽりと布団をかぶって寝ているようで、長い金髪がはみ出していた。

「おねえちゃん!! 朝だよー!!」

金髪を一つ結びにした赤と緑のオッドアイの少女が勢いよく布団に飛び乗る。年は五歳位の様で、保育園生だろうか、水色のスモック

を着ていた。

「うげっ!？」

少女に乗られた女性は、女性とは思えないような声を出し体を起こす。

「うう、ヴィヴィオ。酷いよ、いきなり飛び乗るなんて」

「スバルおねえちゃんがこうしなさいっていったもん。フェイトおねえちゃん、御飯だからギンガおねえさんが起きてきなさいって」

「スバルの仕業か。ありがとう、ヴィヴィオ。でも、こういう事しちゃダメだよ。分かった？」

「はい!!! ねえ、フェイトおねえちゃん早く行こう? ヴィヴィオお腹すいた」

二人は一階に移動する。

「あ、フェイト姉さん。おはようございます」

「おはよう、エリオ」

食堂に向かう途中、廊下で赤い髪の少年がフェイトに挨拶をする。10歳位の年では新聞が握られていて玄関から取ってきたようだ。

三人は一緒に食堂に移動する。其処には大きな木製のテーブルがあった。

席には黒い髪を中心から分けた髪型の青年と蒼い髪をショートにし、

茶色のブレザーを着た少女が座っていた。

「姉さん、おはよう」

「フェイトさん、おはようございます。ではこれで」

「キョウ、おはよう。待ちなさい、スバル!!」

スバルと呼ばれた少女は席を離れようとするがフェイトにより止められる。食卓には六人分の食器が並んでいる。鮭の塩焼きにほうれん草のおひたし、出汁巻き卵という和食のメニューが並ぶ。

「あら、お姉さん。おはようございます。またスバルが何かしました?」

台所からは青いロングヘアーでピンクのエプロンを付けた女性がお盆に味噌汁を乗せてやってくる。

「おはよう、ギンガさん。ちょっと聞いてよ!! スバルがヴィヴィオに私に飛び乗れって言ったらしいのよ」

「はあ、またそんな事を……。こら!! スバル!!」

「ごめん、ギンねえ。それにフェイトさんも」

「早くしねえと姉さんは仕事に遅れるんじゃないかねえか? それにスバルも陸上部の朝練があるんだろ?」

キョウと呼ばれた青年が新聞を開きつつ言う。エリオとヴィヴィオも席についていた。

「いつけない！！ 早くしないと」

「ヤバい！！ 遅れたら、またティアナ先輩に怒られる」

「GINGAさん、ヴィヴィオお腹すいたよ。早くご飯食べたい」

「ごめんね、ヴィヴィオちゃん。すぐ支度するから。スバル、高校生なんだから手伝いなさい」

一同はそれから食事を取る。ここで彼らを紹介しよう。

席についていた青年の名はキョウ、年は21歳。エプロンの女性はGINGA、キョウと同じ年である。二人は夫婦であり、喫茶店を経営している。

金髪の女性はフェイト、保育士として働く23歳の独身女性である。美人なのだが何故か彼氏がいない。

女子高生はスバルといい、GINGAの妹だ。両親とも仕事で居ないので姉夫婦の家に下宿している高校一年生だ。

赤い髪の少年はエリオ、今年で10歳になる少年で小学生だ。サッカー部でフオワードを務める礼儀正しい少年である。

金髪の少女はヴィヴィオという。5歳でフェイトの勤める保育園に通っている。

フェイトとキョウ、エリオ、ヴィヴィオは兄弟である。彼女達の父親はかなりの浮気者で四人はそれぞれ母親が違う。父親は消息不明であり四人とも母親を亡くしている。長女のフェイトが全員を引き取り、一緒に暮らしているのだ。四人とも複雑な家庭事情を持っているのだがそれを感じさせない程の笑顔を見せていた。賑やかな朝食は進む。

「はい、ヴィヴィオ。沢山食べて大きくなりなさいね」

「ありがとう、フェイトおねえちゃん」

「あ、フェイトさん！！ それ私の！！」

「何か言った？ これで朝の件はチャラよ」

「キヨウ君、あ〜ん」

「サンキュー、ギンガ。あ〜ん」

スバルのおかずをフェイトがヴィヴィオに渡し、キヨウ達夫妻は食事を食べさせあっている。

「兄さん達、朝からイチャつかないでくださいよ。はあ〜」

「二人とも、見せつけてくれるね。この万年新婚夫婦が！！」

エリオはキヨウ達の様子にため息をつき、フェイトは一人身からか僻みが出ていた。

「「「「いつてきまーす！……！！」「」「」

「行ってらっしゃい」

「はい、ヴィヴィオちゃん。お弁当」

「忘れてた、ありがとうギンガおねえさん」

「ギンガさん、ありがとうね」

「いえ、お姉さんもお仕事頑張ってきてください」

一同は食事を取り終わると支度を済ませ出発していく。エリオとスバルは高校までエスカレーター式の学校に通っているのと同じ方向に向かう。フェイトはヴィヴィオと共に保育園へ足を進めた。

「さて、開店準備を始めましょうか」

「そうだね、キョウ君。キョウも一日ガンバるー！！」

夫妻は喫茶店の中に入っていった。

時間が少し経ち保育園では昼休みの時間になっていた。表ではヴィオが友達と鬼ごっこをしている。フェイトは職員室で書類を書きつつ同僚と喋っていた。

「聞いてよ、なのは。うちの弟って今朝もいちゃいちゃしてるのよ。少しは一人身の私の事も考えて欲しいよ」

「にやははは、それは大変だね。確かキョウ君とギンガさんだったっけ？」

「うん。ギンガさんは凄く良い子だよ。良く気が利くし、うちの弟にはもつたいたいなお嫁さんだよ。でも二人ともすぐ自分達の世界に入っちゃうんだ」

フェイトになのはと呼ばれた女性。彼女はフェイトの短大時代からの友人で同じ職場に就職している。茶色い髪をサイドポニーにしている可愛らしい女性だった。ちなみに彼女には博物館職員の彼氏がいる。

「なんか、うちの両親みたいだね。その気持ち分かるかも」

「そうだ、なのは。今日は仕事上がりに飲みに行こう。ヴィヴィオはキョウかギンガさんに迎えを頼むから。良いでしょ？」

「えっ、今夜は久しぶりにユーノ君が……」

「男と友情のどっちを取るの？まさか、なのはさんは男が大事とは言わないわよね？」

フェイトが凄む。顔は笑顔だったが目は笑っていない。

「は、はい」

「フェイト先生、なのは先生。仕事に集中してくださいね」

淡い金髪の髪的女性が二人を注意する。

「「申し訳ありません、シャマル先生」」

二人はそのまま仕事を続けていった。

「おじさん、ビール中ジョッキお代り!! あと、鳥皮2本と豚

「足一皿!!」

「はいよ!! 中ジョッキと鳥皮2、豚足だね」

「フェイトちゃん、飲み過ぎだよ……」

仕事が終わってなのはとフェイトは居酒屋に来ていた。二人は座敷に座り、机の上には枝豆や蛸わさ、酢モツに六杯程のジョッキが空になって並んでいる。なのははファジーネーブルを飲んでいる。彼女ははまだ一杯目だ。ジョッキは全てフェイトの物だった。

「ねえ、なのは？ 私ってどうしてモテないの？ ルックスには自身あるし、スタイルだって結構いい線いってると思うんだけどな」

「ぼそつ（こつこついう所を直さないと無理だと思つの）うーん、何でだろうね？ 不思議だね」

「最近の上の弟だけじゃなく下の弟にも女の影があるんだよ。確かサッカー部のマネージャーのキャロちゃんって言ったかな。二人とも小さい頃は「お姉ちゃんと結婚する」ってよく言っていたのに」

「ぼそつ（小学生にまで嫉妬するとかwww）そうなんだ、大変なんだね」

「おじさん!! ビールまだあ？」

「はいよ、お待ち!! ビールと、鳥皮二本と豚足！」

「来た来たあ。ん〜、ぷはあ。キンキンに冷えたビールは最高!!」

フェイトはビールを一口飲んだ後、豚足を食べ始める。

「コラーゲンが豊富だから美容に良いんだよ。なのはもどう?」

「わ、私は良いよ（年頃の女の子じゃなくおじさんみたいなの）」

「確かに私はギンガさんみたいにお料理出来ないし、掃除も苦手だけど絶対良い物件だと思うわよ。どこかに二十台の弁護士か開業医、大企業の御曹司はいないかな? ねえ、なのは合コン開いてよ。彼氏の大学の友達を紹介して」

「え、えっと、急には無理なの。ぼそっ（フェイトちゃん、高望みしすぎなの）」

その後もなのははフェイトの愚痴に付き合わされるのであった。店を出てからも……。

「ねえねえ、なのは。カラオケ行こう、カラオケ!! ナナニー・ミズキの新曲覚えてきたから」

「フェイトちゃんの歌は確かに上手だから聴きたいけど、明日も仕事だよ。もう帰らないと」

「ブーブー。分かったよ。じゃあ、かーいさーん!!」

解散したのは11時過ぎだった。

たぶん続かない。

【番外編】もしもの話『一つ屋根の下?』（後書き）

突然の番外編でしたがどうでしたか。フェイトを主人公にして展開しようと思いましたが。

短いな。

フェイトは喪女。なのはは彼氏持ちで腹黒みたいになってしまった。用語の説明ですが『児童表』という物は保育士などが、園児たちの隊長や生活態度を記録する物です。

ソースは保育士志望の短大に通っている妹から。

読んでいただきありがとうございます。

【15万アクセス記念】番外編 KOF 時空を超えた闘い（前書き）

尊敬する先輩、柳先生の作品『真・恋姫十無双』ジョインジョイン
ジョインキレイ』と拙作のクロス小説です。

先生の作品は私が目標にしている作品の一つです。

面白いです。拙作の読者の皆様も先生の作品を読んでいただけると
嬉しいです。楽しみを共有しましょう。

15万まであとちょっと足りてませんが『銀魂』だってDVDの
売上を鯖読んでたから気にしないでください。

バトルシーンを読む際Youtubeで『ESAKA』をBGMに
してもらえると良いかもしれません。ググればすぐ出ます。

柳先生とは同時掲載します。

では、本文の方をどうぞ。

【15万アクセス記念】番外編 KOF 時空を超えた闘い

ここは現実には存在しない夢の中にある世界。本来ならば巡り会うことのない人物達がここでは顔を合わせる事が出来る。どうやったら其処へ辿り着けるのかは誰も知らない。今日ここで二人の人物が闘いを繰り広げる。

「……、どこだ？」

一人の男が其処に立っていた。彼は『キヨウ・アーデルハイド』。機動6課に恋人と妹と共に派遣された魔導師である。彼のいる場所は地球のバリ島の様な場所だった。格闘場の様なステージがあり、その後ろでは現地の住民が『ケチャ』を奏でている。ステージの下ではマスコミや沢山の観客達がごった返していた。

「確か、仕事が終わって寮に戻ってから布団に入った筈だったけど……」

彼はパジャマではなく自身のバリアジアジャケットを着用していた。幸い、デザインが地球の人々の服装とあまり変わらないようので特に注目を集めることはなかった。

「キヨウ君……！」

「ギンガ？」

其処には彼の最愛の人物、ギンガ・ナカジマの姿があった。服装は

私服のようで、白のタートルネックのセーターとデニム生地のスカーツに革のブーツという出で立ちだった。

「どうして、お前がここに？ 他のみんなは？」

「分かんない。寝ていたら突然この場所について……」

「そうか。仕方ねえ、取り敢えず情報を集めるか」

彼等がステージの近くに足を進めると、彼のいる場所から20mほど離れた場所に光の柱が現れる。その光が収まると中から二人の人物が姿を現す。男女の様だ。年もキョウ達とあまり変わらない位か少し上に見える。

男性の方は赤いシャツの上に両肩にプロテクターの付いた黒い革のベストを着こみ、同色の皮のパンツをはいていた。右前腕部には黒いアームガード、左には包帯が巻かれている。

「此処は？ うわ、これってケンシロウの服じゃん？ 姉者の方は何時もと変わらないみたいだな」

姉者と呼ばれた方は銀色の髪をショートヘアにしている露出が多い黒のドレスを着ていた。彼女のドレスには桃色の蝶がプリントされている。男性の言葉から推測すると彼はここに来るまでに服装に変化があった様だった。

「どうしたのだ、頭？ 何時も冷静で居ると私に言っているお前が取り乱したりして」

「いや、いきなり訳の分からない場所に連れてこられたら普通はこ

うなるって。姉者」

「あ、あの。すみません？」

二人組にギンガが声をかける。彼女の顔を見て顕と呼ばれた男性は驚きの表情を浮かべる。

「嘘だろ？ ギンガ・ナカジマじゃん」

「顕、誰だその女は？ まさか浮気？ お姉ちゃんは悲しいぞ！！」

「違っつて！！ そんなんじゃないよ、姉者！！」

「ギンガの事を知ってるんですか？」

キョウも彼に声をかける。キョウの顔を見て男性はさらに驚く。

「うわっ、草薙京？ 本物？ 燃え太郎さん？」

「草薙京？ 誰ですか、それ？ 俺の名はキョウ・アーデルハイド
つていいですけど」

「アーデルハイドはルガールの息子の名前だろ？」

「キョウ君、この人は私達の事を知ってるみたいだから、この場所
の手掛かりも持ってるのかも？」

「そうだな、ギンガ。あの、失礼ですけどお名前を窺っても？」

キョウが男性に尋ねるが彼は何やら考えごとをしているようでブツ

ブツと呟いていた。

「此処つて確か97のステージにあつたよな？ それに草薙京のそっくりさんとリリカルのギンガの存在。俺達がいた世界とは異なる場所なのか？」

そんな彼を、姉者と呼ばれた女性が注意する。

「おい、頭！！ あの男から話しかけられているぞ！！ 名前を教えてくださいそうだ」

「うお？ ああ、ごめん姉者。俺の名は紀霊つていいいます。字は周英つていうんですけど。お二人は……、キョウ・アーデルハイドさんとギンガ・ナカジマさんで間違いない？」

「はい、そうです。所で、紀霊さんは何故俺達の事を？」

「（これは後で確認する必要があるな）いや、知り合いに似ていただけだ。それにしても名前まで同じつて不思議な事があるんだな？ はははは……」

「あの、そちらの女性の方は？」

ギンガが紀霊と一緒にいる女性に尋ねる。

「やっと私の番か。無視されているのではと不安だったぞ。私は華雄という。字は乾香だ。華雄と呼んでくれて構わん。私は頭のお姉ちゃんであり婚約者だ」

「華雄さんですね。俺の事はキョウウって呼んでください。よろしく

お願いします。それで、お二人は次元漂流者なんですか？」

「次元漂流者？ 何だ、それは？ 私はあまり難しい事は分からないのだが……」

「ああ、俺が答えるよ。キヨウ君、俺達は……」

キヨウの質問に紀霊が答える。何でも彼らは第97管理世界の出身であり現代から1800年程昔の人物であるとのことだった。紀霊は話の内容を華雄に聞こえないようにキヨウ達に伝える。キヨウ達は彼の話に半信半疑だったが、此処の様な不思議な場所があるんだからと無理やり自分を納得させる。紀霊と華雄はキヨウ達より年上の様だった。

「何だって？ キヨウは20歳じゃないし、ダブってもいないのか？」

キヨウがまだ二十歳ではない事に紀霊が驚く場面も見られたが……。

互いの自己紹介が終わった後、紀霊はキヨウに近付き耳元で声を囁く。

「あんたも転生者か何かか？」

「転生者？ 何ですか、それ？」

「違うのか。いや、何でもない。忘れてくれ」

それから四人は雑談をしていた。女性陣も仲良くなっているようだ。

華雄が紀霊の婚約者であるという事を聞いたギンガは彼女に馴れ初めなどを聞いていた。此処でも恋バナは人気の様だ。いつの時代でもそうだったことは変わらないみたいで、時代を超えた友情をはぐくんでいるようだった。

「何だこれ？」

紀霊が上着のポケットから白い封筒を取り出す。キョウの上着にも同じものが入っていたようで、四人はその封筒の中身の手紙に目を通す。

『キングオブファイターズに参加いただき、ありがとう。君達にはここで対戦を行ってもらおう。武器やそれぞれの特殊技能の使用も許される。時間は無制限だ。どちらか一方が戦闘不能となればこの勝負は終わる。それぞれ一回だけ、ストライカーという助っ人に5秒間力を貸してもらおう事が出来る。君と一緒に此処に来たパートナーがストライカーだ。この世界から出るためにはこの戦いを行ってもらわなければならない。勝敗に関係なく、終了後はもとの世界に帰れるので心配しないでくれ。健闘を祈る。 B y , R 』
中にはそう記されていた。

「Rって、ルガルルかよ？ まさか、俺がK O Fに出場して草薙京と対戦が出来るなんて夢みたいだぜ」

「紀霊さん、K O Fという物を御存じなんですか？ あと、草薙京って？」

「K O Fは対戦型格闘ゲームってやつだ。この世界は其れを再現されてるみたいだ。草薙京の事は、お前は知らない方が良い」

『キヨウ・アーデルハイド様、紀周英様。ステージにお上がり下さい。ストライカーの方もお願いします』

会場にアナウンスが流れ四人はステージに移動する。

キヨウと紀霊はステージで対峙し、言葉を交わしていた。

「へえ、こんな作りになってたんだな。2Dじゃ分かりにくかったぜ。キヨウ、どうやら此処から出るためには俺達は戦わなくちゃいけないらしい。正々堂々、勝負しようぜ！」

「はい、紀霊さん。一つ良いですか？俺は魔導師で、魔法を使えますけど紀霊さんは大丈夫ですか？見た感じ、何か拳法を使われるようですけど。得物もないですし……」

キヨウが紀霊を気遣う発言をする。其れが耳に入ったのかステージ脇にギンガと共に待機していた華雄が声をあげる。

「頭を甘く見るなよ！！ 頭は万夫不当の豪傑で、私の自慢の弟だ」

彼女の弟LOVEはこの世界でも健在の様だ。華雄の言葉を嬉しく思い、苦笑いしながら紀霊はキヨウに答えた。

「やれやれ、褒めすぎだ姉者。姉者は言い過ぎだけど、俺もそれなりにやるほうだから心配すんな！！それに『北斗神拳』と『南斗聖拳』を少々嗜んでいる。今回はこの拳で相手をしてやるよ。世紀末バスケを見せてやる。キヨウ、遠慮せずにかかってこいや！！」

「じゃあ、俺も一人の拳法家として『草薙流』で戦わせてもらいます」

二人はそれぞれの拳法の腕を競うようだ。ギンガと華雄はステージ脇で二人を見守っている。

「頭！！ 負けたら承知しないぞ！！ 危なくなったら、お姉ちゃんが見守るか？として頭の事を助けてやるからな！！」

華雄は何処からか大斧を取りだし紀霊に声援を送る。一方のギンガもリボルバーナックルを装備してキョウに声を送った。

「華雄さん、ストライカーです。キョウ君頑張ってるね！勝ったらキスのご褒美をあげる」

「そ、それなら頭！！ お前が勝ったらお姉ちゃんは抱きしめて接吻をして撫で撫でてやる！！」

「じゃあ、私は……、キョウ君が勝ったら膝枕を！！」

「むむむ、何をおおー！！」

「うう、負けませんよ！！」

ギンガと華雄はキョウ達異常にヒートアップしているようだ。その後も勝利のご褒美に何をしてやるかで競い合っていた。最後の方にはとても人前では言えないような事も口にしていたが、二人とも自分の言った事に気付いて赤面し、黙り込んでいた。

「応援してくれるのは嬉しいけど……」

「この場には俺達以外も居るってことに気付いて欲しかったですね」

キョウと紀霊は苦笑いをしていた。ステージ上ではそれまで『ケチヤ』が演奏されていたのだが、それが突然止まりシンセイザイとギターによるBGMに切り替わる。

「お、この曲は『ESAKA』じゃねえか？ 雰囲気が出て来たぜ。ごほん、っん、っん。あー、あー。これで良いか」

紀霊はのどの調子を整え始める。それまでと違い低い声を出す。闘いはもう始まるようだ。アナウンスからは『ザバトルオブレットビユーシヨンドゥサイドオブステニー』という声が聞こえる。アナウンスの後、紀霊は「転龍呼法」と呟き体に力をみなぎらせる。この技は人間の潜在能力を100%発揮させるものだ。一方のキョウも準備万端の様だった。

「行くぜ!!」

「キョウと戦うならこのセリフだな!! 『すぐ楽にしてやる』」
それから二人の対決は始まった。

「喰らえ!!」

キョウが地を這う炎『闇払い』を放つ。一方の紀霊は素早い腕の振りから鎌鼬を放っていた。

「烈風拳!! じゃなくて伝衝烈波!!」

キョウの炎と紀霊の鎌鼬が互いに相殺し合う。紀霊は空中に飛び上がり十字型の衝撃波をキョウに放つ。キョウは其れを『鬼焼き』で

迎撃する。

「南斗爆星波！！　ぐわっ！？」

「うおおおりゃあ！！」

キョウの攻撃が勝ったようだ。紀霊は鬼焼きを喰らうのだが、後ろに反転し着地を取る。

「『鬼焼き』か。優秀な対空技だぜ」

「紀霊さん、『草薙流』を御存じで？」

キョウと紀霊は手を止め会話をする。

「ああ。（『闇払い』を使っている所を見ると、95以前をベースにしているみたいだな……）なら接近戦で流れを掴む、行くぜキョウ」

「はい！！」

「ユクゾー！！」

紀霊はキョウの方へ一瞬で距離を詰める。この技は『北斗無想流舞』という技だ。発動後に一切の隙が存在せず、どのような攻撃もつなげる事が出来る一種のバグ技だ。目にもとまらぬ程のスピードで紀霊はキョウに向かい下段からの抜き手を放つ。キョウは何とか防ぐことに成功するが、紀霊は高速移動を続ける。上下左右、縦横無尽に動き回り、キョウのガードの隙間に攻撃を通していく。キョウは紀霊からダメージを与えられていった。

「出た！！ あれは頭の『ナギッ』」

「恐ろしい技ですね、『ナギッ』って」

外野では華雄とギンガが紀霊の高速移動について話している。紀霊はその声に反応し、動きを止める。

「姉者！！ これは『ナギッ』じゃないって前にも言っただろ？ 『行くぞって』言ってるんだけど……。ギンガちゃんも勘違いしないでね！！」

「でも『ナギッ』って聞こえましたよね？ 華雄さん」

「そうだな、ギンガ。確かに『ナギッ』って聞こえたよな」

「はあ。もう『ナギッ』で良いよ」

紀霊は二人の言葉にため息をつく。キョウはその間にある程度回復が出来たようで構えを取っていた。

「凄いスピードでしたね。じゃあ、こっちから行かせてもらいます！！」

「おっし、来い！！」

キョウは両手に炎を纏わせ紀霊の下に駆け寄る。

「ふんっ、ふん！！ てりゃ！！ ボディーがガラ空きだぜ！！ 真っ赤に燃えるおお！！」

キヨウは紀霊に『八拾八式』、しゃがんだ状態から起き上がりつつのジャブ、『荒咬み』から『七瀬』という連続技に繋ぐ。其れは紀霊にヒットし彼の体を浮かべる。其処に追い打ちで、『琴月』の炎を浴びせた。

「ぐわっ!? どういうことだ? 『荒咬み』を使うなら『闇払い』は使えない筈だろ? って今はそんなこと考えている暇はねえ!」

キヨウのラツシュを喰らった紀霊だったがまだ余裕があるようで、『北斗無想流舞』でキヨウに近付く。キヨウは紀霊の動きに合わせ『七拾五式』を放つ。

「北斗破流掌!」

「うわっ?」

キヨウは紀霊の当身技『北斗破流掌』により壁際に吹き飛ばされる。其処から紀霊の壮絶な連続技が炸裂する。

「ナギツペシツペシナギツハーンナギツペシカクゴハーントウケイ
コホウナギツ」

キヨウは紀霊のとめどない攻撃に反撃する事も出来ない。壁に叩きつけられる反動でキヨウの体は紀霊の下に近付く。それに紀霊は的確に反応し攻撃を加えていく。

「『北斗千手殺』!」

紀霊はキヨウへ向け乱舞技を放つ。今までの連撃が合計で27発ヒ

ツトした所で紀霊はキヨウへの攻撃を切り替える。地面へと叩きつけるようにしゃがんだ体勢から拳を放つ。キヨウの体はバスケのボールをドリブルしているかの様に地面と紀霊の間を行きかう。

「キヨウ君！！ たああ！！ ストームトウス！！」

そんなキヨウの姿を見てギンガが助けに入る。紀霊にとび蹴りをかまし、『ストームトウス』を放つ。攻撃に集中していた紀霊は其れをまともに喰らってしまう。

「大丈夫？ キヨウ君」

ギンガはキヨウを助け起こす。

「ああ、助かったぜ。ありがとな、ギンガ。紀霊さんは今まで戦った中で一番強い相手だ」

ギンガはすぐにステージ脇へと戻っていく。

「ストライカ か、忘れてたぜ」

ギンガの攻撃は紀霊にダメージを与えられたようだった。紀霊が立ちあがるとキヨウは彼の下に駆け寄り構える。

「受ける！！」

キヨウは構えから動こうとはしない。

「これって、何だったっけ？ 取り敢えずガードだ！！」

紀霊はキヨウの攻撃に備え防御を固める。しかしそれは悪手だった。

「このブロ……!!!!!!」

キヨウは『百八拾弐式』を放つ。最大限まで溜められたそれは紀霊のガードを抜き大ダメージを与える。

「がはっ!! 　　そういえばそんな技あったな。ってうわ?」

紀霊はキヨウの攻撃で体を浮かせ壁際まで吹き飛ばされる。キヨウは其処に向け追撃を放つ。

「うおおおおお!!」

キヨウは紀霊を壁際まで追い詰める。キヨウの体から噴き出る炎によって、紀霊はダメージを受けた。

「うぐあ!! (『MAX版・大蛇薙』かよ?あれを喰らったらやばい……)」

「喰らいや」 颯!! お姉ちゃんが助けてやるぞ!! とおりゃあ あああ!!」 ぐわっ!!」

キヨウが『大蛇薙』を放とうとした瞬間、華雄が紀霊を助けに入る。キヨウに向け斧による斬撃を放ち、技の発動を阻止することに成功する。

「あ、姉者?」

「ああ。私が付いているぞ。だから、颯。負けるな!!」

そういつと華雄もステージ脇に戻っていった。

「姉者が居る限り、俺は負けない。キョウ、行くぜ！」

「この勝負俺が貰います！！」

それから二人は至近距離で殴り合った。もはや技など存在しない。赤子同士の戦いだ。まるで北斗の長兄と末弟の闘いの様な光景になっていた。

「キョウ君！！ 負けないで！！」

「頭！！ 負けるなーーー！！」

外野にいる二人も声援を飛ばしている。二人とも互いの恋人が心配なのか、握りこんだ拳は白くなっていた。

その殴り合いはしばらく続くかと思われた。しかし、紀霊はキョウの攻撃の一瞬の隙を突き『刹活孔』を放つ。其れがキョウにきまり大きな隙が出来た。

何処からともなく『テレット』というBGMが聞こえてくる。

「北斗有情破顔拳！！ ハーン！！」

紀霊はその場に胡坐をかいたかと思うと両手から謎のビームを放つ。其れはキョウに命中し彼の体力をすべて奪っていった。

「紅の豚さん、ありがとう。キョウ、半人前の腕では私は倒せんぞ」

キョウに向け紀霊が言葉を放つ。倒れ込んだキョウも彼に言葉を返

した。

「はあ、はあ。俺の負けです。でも、何時かまた勝負してください。その時はリベンジして見せます」

紀霊はキヨウに手を伸ばし、彼の手を掴み助け起こす。そして言った。

「ああ、その時を楽しみにしてるぜ」

キヨウに向け言葉を放つと紀霊の体は光始めた。其れは華雄も同じのようだ。闘いが終わったので元の世界に変える時が来ているようだった。

それからキヨウはギンガに肩を借り二人を見送る。華雄も紀霊の傍らに移動している。

「楽しい時間だった、また勝負しような。キヨウ」

「はい、紀霊さん」

「二人には俺の真名を預けよう。顕だ。今度会った時はそう呼んでくれ」

「私も二人に教える。慧だ。今度は私とギンガで手合わせしてみたいものだな」

「はい、是非お願いします。慧さん」

「じゃあ、ふたりとも元気だな」

「はい、顕さんも慧さんもお元気で」

「またお話ししましょう！今度は私と華雄さんで勝負ですね！！」

紀霊はキヨウ達と言葉を交わすと華雄と共に光に包まれその場から消えた。

二人を見送ったキヨウ達の体も光に包まれる。キヨウ達も元の世界へと帰っていくのだった。

「むにゃ？ あれ？ ここって寮のベッド」

キヨウは自室のベッドの上で目を覚ます。服装は寝巻だった。

「夢だったのか？ 明日ギンガに確認してみねえと……」

翌日キヨウはギンガに夢の内容を話す。ギンガも同じ夢を見ていたようだった。

「顕さんと慧さんか。良い人たちだったな」

「うん、また会ってみたいね」

夢の中での闘い『KOF』は幕を閉じた。しかし二人は時空を超えた友人を手にしたのだった。

【15万アクセス記念】番外編 KOF 時空を超えた闘い（後書き）

いかがでしたでしょうか？

柳先生のキャラ二人をうまく表現できたか不安です。

先生の作品では展開が異なります。

読んでいただきありがとうございました。

一つ屋根の下?2 お酒も程ほどに(前書き)

ちよつと前にやった酒バトンの再利用です。加筆しました。
人物設定は前と一緒にです。
本編とは関係ないです。

一つ屋根の下?2 お酒も程ほどに

私の名前はフェイト・テストロッサ。

セントヒルデ保育園で保育士として働く、二十三歳のモテカワスリムの恋愛体質な愛されガール。

強いて人と違う所を挙げるなら、並はずれた美貌とスーパーモデルも顔負けのワガママボディを持つってところかな。

でも、どうしてか恋人がいないんだ……。私程の美女を放つとく様な男って有り得ないんだけど。そうだ、分かったわ!! きつと私が美しすぎてみんな声を掛けるのに躊躇っているのよ。

おほほほほ、美し過ぎるって罪だわ……。

私にふさわしい男って一体どこに居るのかしら!! 開業医、弁護士、御曹司、カムヒアー!!

「ねえ、ちい兄ちゃん。モテカワスリムって何い〜? 恋愛体質う?」

金髪に青いスマックを着た少女が、隣でサラダをがつついている少年に言葉の意味を質問する。

「えっ、ヴィヴィオ? 僕に聞かないでよ。姉さんがまた勝手に言ってるだけだよ」

「えつとねえ、ヴィヴィオ。恋愛体質ってのは」

少年の隣で、トーストにバターを塗っていた女子高生が少女の質問に答えようとすする。何やらよからぬ事を考えているのか、その顔は

ニヤついていた。

「こら、スバル!! ヴィヴィオちゃんに変なこと教えないの。あの、お姉さん……。ヴィヴィオちゃんが居るから、あまりそういつた事は……」

青い髪で桃色のエプロンを身につけ、女子高生の正面に座った二十歳そこそこの若奥様風の女性が、彼女に釘をさす。彼女の隣には夫と思われる青年が新聞を読みながら座っていた。青年は妻と思わしき女性とは反対の方に座っている金髪の女性へ声を掛ける。

「姉さん、一人で何ブツブツ言ってるんだよ。今日は早番だったんじゃないの?」

「あつ、そうだった。ありがとう、キョウ。ギンガさんもごめんなさいね。早くご飯食べないと」

此処は都内某所の閑静な住宅街にある一軒の家の中。六人の人物が一つの食卓を囲んでいる。そう、テストロッサさんちの朝の風景である。

「スバル、あなたも急がなくて良いの? 今日から陸上部の合宿なんですよ?」

「そうだった!! 早く行かないと、またティアナ先輩にどやされる!! 御馳走さま、ギンねえ。じゃあ、私は先に行くね!!」

食事をつこむフェイトと違い、マイペースに食事をとっていた妹に対しギンガは声を掛ける。スバルは慌ててトーストを食べ終わる

とスポーツバッグを肩に担いで席を立つ。

「頑張つてこいよ、スバル!!!」

「スバルさん、行ってらっしゃい」

「スバルお姉ちゃん、頑張つてね〜!!!」

「気を付けていってきなさいよ。忘れ物ない?」

「スバル、頑張つてね〜!!! 私は合コンを頑張るわ〜!!!」

それぞれが声を掛ける。約一名おかしい事を言っているのだが……。

「もう、ギンねえ。私はもう子供じゃないんだから。みんなもありがとう!!! あと、フェイトさんは自重してくださいよ。じゃあ、行ってきま〜す!!!」

スバルは元気良く駆け出していくのだった。残った一同はそのまま食事を続けていく。

それから10分程してフェイトが出勤する。早番という事で自分の保育園に通う、妹のヴィヴィオとは別に出る様だ。

「今夜は外で食べてくるから、夕食は要らないから。ヴィヴィオをよろしくね?」

「はい。分かりました、お姉さん。お仕事頑張ってくださいね」

「良く出来たお嫁さんよね、ギンガさんは。いつも助かってるわ。じゃあ、行っていきます!!」

弟の嫁に妹を託し彼女は駆け足で家を出ていく。

時間も八時に近付く頃、玄関からは少女の声が聞こえてくる。

「エ〜り〜オ〜くん!! 学校行こう!!」

元気が良く、少々間延びした可愛らしい声だった。

「エリオ、キャロちゃん来たみたいだぞ?」

洗面所で歯を磨いていたエリオに対し、髭を剃りながらキョウウが声を掛ける。

「ブクブク、ペっ。ホントですね。じゃあ、兄さん。行ってきます」

エリオは玄関へと駆けていく。台所からはヴィヴィオを抱いたギンガがやってくる。彼女達も出る様だ。

「おはよう、エリオ君。ギンガさん、おはようございます。ヴィヴィオちゃんもおはよう」

「おはよう、キャラちゃん。いつもありがとうね」

「キャラちゃん、おはよう!!」

「おはよう、キャラ。今日は朝練って無いんじゃないっけ？」

玄関には桃色の髪に白い帽子をかぶった少女が立っていた。エリオの所属するセントヒルデ小学校のサッカー部でマネージャーを務めるキャラ・ル・ルシエという少女である。赤いランドセルを背負っていて、育ちの良さそうな雰囲気を持っている。

この場に関係はないが、彼女の愛読書は『ドラグナーのマネージメント“デッドヒー”編』である。

「えっと、ボソツ（エリオ君と学校に行きたかったから）」

「えっ？ 何？ キャロ？」

「ううん、何でもないよ。早く行くこつよ、エリオ君!!」

キャラは一同に挨拶をし、エリオの質問に答える。だがその声は小さかった。その事をエリオに聞かれるのだが、慌てて誤魔化すように彼を急かす。

「二人のお邪魔になるといけないから、ヴィヴィオちゃん。私達は少し遅く出ましようか？ 自転車で行けば間に合うから」

「うん、良いよ。ギンガさん!!」

「えう。ギンガさん。ありがとうございます」

「いいえ。頑張つてね、キャロちゃん」

彼女達のやり取りをよそに、エリオはランドセルを背負い、靴もはき終えて居間にも出発しそうな様子だった。

「じゃあ、ギンガさん、ヴィヴィオ、行ってきます!!!」

「待つてよ、エリオ君。では、失礼します」

そう言つて二人は小学校へ向け出発するのだった。

それから遅れる事10分、ギンガとヴィヴィオが出発する。

「開店準備はやつておくから、心配すんなって。気をつけて行って来いよ。二人とも」

「ごめんね、キヨウ君。行ってきます」

「お兄ちゃん、行ってくるね〜!!!」

二人はキヨウに見送られて家を出る。

ギンガはママチャリの後部座席にヴィヴィオを乗せ、保育園へと向かう。その途中、赤いポニーテールの女性が、ギンガと同じようにママチャリの後ろに子供を乗せて先の方を走っていた。後ろに乗る子供はオレンジ色の髪を二つの三つ編みにしてその上にウサギのマスクのついた赤い帽子をかぶっていた。

ギンガはスピードを挙げて近付き、後ろから声を掛ける。

「おっはようございます！！ シグナム先輩！！ ヴィータちゃんもおはようー！！」

「おお、ギンガか。おはよう。お前も送りか？」

「はい。お姉さんが早番でした。忘れて居たみたいで慌てて出ていったんです」

「そうなのか。テストロツサは相変わらずみたいだな。この後、会うんだし、もっとしっかりするように言っとこうか」

ギンガにシグナムと呼ばれた女性は、八神シグナムと違ってギンガの高校の先輩である。なのはとフェイトとも同級生であり、従姉妹で同い年の八神はやての家に妹のヴィータと共に暮らしている。近所のスポーツジムでインストラクターをしている女性だ。

「ヴィータちゃん、おはようー！！」

「おう、ヴィーオ。おはよう」

ヴィーオは後ろに乗る少女へと声を掛ける。その少女はヴィータと違ってヴィーオの同級生である。ヴィータは、ちよつとムスツとした感じで挨拶を返す。そんな彼女を見てギンガが尋ねる。

「どうしたのかな、ヴィータちゃん？ せつかくお姉さんと一緒になの？」

「何でもねーです。シグナムが私のアイスを黙って食べた事に怒っ

てなんかいねーです」

シグナムが苦笑いしながら続ける。

「昨日の晩、風呂上がりについ食べてしまっただ。ずっとこの調子なんだ。いい加減、機嫌治せヴィータ。帰りに32アイスで奢ってやるから」

「ホントだなー？ シグナム？ トリップルギガ盛りアイスだかな？」

「うっ、あの高い奴か。仕方ない、約束するよ」

その言葉を聞いてヴィータは機嫌を直し、ヴィヴィオとお喋りしながら並んで保育園へと向かうのだった。

時刻も9時をまわった頃、キョウとギンガは自宅の一階部分に開かれた喫茶『翡翠屋』の店内に居た。キョウはその日の分のコーヒー豆をひいていた。豆は三日前に焙煎

した物を使う。焙煎したばかりのコーヒー豆は炭酸を多く含んでおり、二三日休ませないとコーヒーの味が薄くなるのだ。

ギンガは奥の調理場でランチ様の仕込みをしていた。この『翡翠屋』はフェイトの同僚のなのはの実家、『翠屋』でキヨウとギンガが修行したことから、なのはの父であり店長である師匠、高町士郎から『翠』の一字を貰っているのである。ギンガの師匠はもちろん高町桃子である。

『翡翠屋』は『翠屋』譲りのコーヒーとケーキを始めとするメニューで人気を博しているのだ。モーニングが無いのは家庭の都合であるが、それを差し引いてもこの若夫婦の店は人気があるのだ。ランチ時になると、外回りのサラリーマンや近所のマダム達によりごった返している。

キヨウは豆を挽き終わると店の前に出て、ドアにかけられたプレートをひっくり返す。其処には『OPEN』の文字が見える。それからキヨウは足元にある黒板に、その日のお勧めメニューとコーヒーを書き込む。喫茶『翡翠屋』開店である。

開店して20分程して一人の老紳士が店のドアを開ける。

「いらっしやいませ！！ おはようございます、グレアムさん」

「ああ、おはよう。キヨウ君、お勧めを頼むよ」

紳士はカウンターに座ると手に持っていた新聞を広げる。彼は常連客の一人でギル・グレアムという英国人だ。定年退職後、日本に移り住み、毎朝決まった時間になると店に訪れるのだ。

キヨウは彼と談笑しながらコーヒーを煎れる。ギンガも手が空いているので調理場から出て会話に混ざる。

「今日は良いコナが手に入ったんで、ブルーマウンテンブレンドがお勧めですよ。グレアムさんの好みは10%で良かったですよね？」

「ああ。10%が一番コクと風味のバランスが取れていると私は思っているのだな」

「新作のケーキもあるんです。フォンダンショコラをアレンジしてみたんですけど。オレンジピールで香りづけを試みました。甘さも抑えていますし、如何ですか？」

「そうじゃな、では戴くでしょう」

それからすぐ数人客が入り、店は徐々に忙しくなっていく。ランチタイムには二人の高校の先輩で保険外交員のヴァイス・グランセニツクや、二人の同級生で近くのIT企業に勤めるシャリオ・フィニーノも姿を現していく。

小学校では教壇にショートヘアで眼鏡をかけた教師が教べんをとっていた。エリオは真面目にノートを取っており、彼の右隣ではキヤロが同様に授業を受けている。左隣では薄紫の髪を腰まで伸ばした少女が静かに教師の話聞いていた。

「ではこの問題を、エリオ君。答えてくれないかしら？」

「はい、オーリス先生。0・45です!!」

「正解です。では、次をルーテシアさん!!」

「はっ、はい。えっと……。8・73です」

「正解です。良く解けましたね。この問題は今回の授業の応用問題でしたけど」

少女が問題を答えるとチャイムが響く。時間は12時であり、これから昼休みになるようだ。オーリスは号令を行い教室から去る。

「ねえ、エリオ。一緒にご飯食べない?」「エリオ君、一緒にお弁当食べよう?」

エリオは両隣の少女、ルーテシアとキャロから同時に声を掛けられる。周りの男子はそんな彼をジト目で見ていた。キャロとルーテシアは学年で人気を二分するマドンナなのだ。

「えっと、あのお……」

二人の間に立つエリオは少し戸惑った様子でいた。

「ルーちゃん、今日は私がエリオ君と食べるんだよ!!」

「それを決めるのは、あなたじゃないわ。ねえ、エリオ?私と一緒に食べましょう?」

「えっと、あのさ……。三人じゃダメかな?」

エリオは二人に微笑みかける。少女達は頬を染めつつ彼の申し出を受け入れる。小学生のくせに女性の扱いを心得ている、未恐ろしいエリオだった。

保育園の職員室ではフェイトが同僚のなのはと雑談しつつ昼食を取っていた。勤務時間外なのでシャマルも注意することはないようだ。

「ねえ、なのは。今夜よね？ 約束の合コンは！！」

フェイトがなのはに向け、物すごい剣幕で問う。なのはは若干引きつつ、苦笑いで答える。

「う、うん。ユーノ君の大学の先輩達が二人来るって。あと一人はどうする？」

どうやら合コンは三対三で行われる様である。なのはには彼氏のユーノがあり、彼も出席するようだ。

「私達だけで良いじゃん。別に誰か呼ばなくても」

「それじゃ、気まずくないかな？ ほら、はやてちゃんとかどう？
確かフリーの筈だし」

「あれ？ はやてって仕事と結婚するんじゃないの？ キャリアウ
ーマンでバリバリなイメージがあるんだけど？」

「それは酷いよ、フェイトちゃん。はやてちゃんも私達と同じ年な
んだから、きつと恋にも興味あるよ」

「そうね。はやても呼びましょう。関西人だから場を盛り上げてく
れるわ」

それから二人は食事を続けて行く。その後、なのはがはやてに電話
したところ、彼女は二つ返事で了解するのだった。

その日の夕方、なのはとフェイトは普段の居酒屋でなく、ダイニン
グに来ていた。其処にはショートヘヤーにスーツを着た女性の姿も
あった。八神はやてである。

「ありがとうな、二人とも。誘ってくれて。私の仕事って出会いに
恵まれてないんよ。周りはオジサンばっかやから」

「友達なんだし呼ぶのは当然でしょ？　ねえ、なのは？」

「うん、そうだね。フェイトちゃん（絶対、自分の引き立て役にする気だよ。この子）」

それからしばらくして男性陣も到着する。博物館で学芸員をするユーノ・スクライアと、彼の先輩で税務官のヴェロツサ・アコースという白いスーツに長髪というホスト風の男性と、検察庁でキャリア組だというクロノ・ハラウンという男性がそこに現れる。ユーノが連れて来た男性は良家の出であるらしい。三人が席に着くと自己紹介が開始された。

「私、フェイト・テスタロツサっています。なのはの同僚で、保育士をしています。よろしく」

フェイトは猫なで声で自己紹介をする。言い終わると男性陣に向けウインクを飛ばしていた。

「あはは。高町なのはです。ユーノ君とお付き合いさせていただいています。よろしくお願いします（フェイトちゃん、あざといよ）」

なのはは自己紹介をしつつ、友人の様子に呆れていた。

「ええっと私は、八神はやてっています。バニングス・コンツェルンで働いています。こう見えて、うち、料理が得意なんですよ？

関西の女は尽くすタイプなんです。よろしく」

「はやてって本当に料理が上手くなって家庭的なんですよ（っちはやてってばあからさまにアピールして）」

「ややわあ、フェイトちゃんったら（負けへんよ、フェイトちゃん）」

「お二人とも仲が良いんですね。僕とクロノみたいだ」

「そつだな、ロツサ」

「先輩達は大学では野球部でバッテリーを組んでいたんだよ」

「そうなんだ（クロノさんもアコースさんも騙されてる）」

「スポーツをしてる人って素敵〜。ちょっと二の腕を触らせてもらっても良いですか〜？」

「ああ、うちも。鍛えてる男の人って素敵やと思います〜」

合コンは進んで行くのだったが、やはり途中で問題が起こる。フェイトがいつもの調子で飲んでしまい、本性を現してしまったのだ。

アルコールが入る前のフェイトはどこかの『モテ女ブログ』にある様に、ケータイの最新機種の話をつたり、ひよこが可哀想でオムライスが食べられない等ふざけた事をぬかしていた。

はやては料理を取り分けたり、席替えの際にはナチュラルにボディタッチ等を行い、男性陣の好感度を上げていった。終わる頃にはユニノを除く男性陣ははやての両脇へと移動していた。そしてそのまま解散となるのだった。

「じゃあ、うちはクロノさんとロツサさんと飲みに行くから。今日は誘ってくれてありがとうなあ」

はやてはクロノとヴェロツサと腕を組み、夜の街へと消えていく。
フェイトはなのはとユーノと三人で店の前に立っていた。

「じゃあ、僕たちも「待ちなさい、ユーノ！！」はい！！ フェイトさん」

「ちょっと、フェイトちゃん？」

「何、二人して帰ろうとしてるのよ。カラオケ行くわよ、カラオケ！！」

「えっと、私達もこの後二人で「ダメ！！ 認めないよ。自分達ばかり、シツポリやろうとして」「フェツ、フェイトちゃん！！ 他の人も見てるよ」

「くっそ、はやてめ！！ 今日には歌いまくるわよ。ナナニー・ミズキの『Innocent Eternal Ambition』を歌わないと。あと、叫びたいわね。桜田JAM Projectの『スルーSkill』を歌うわ。二人とも付いてきなさい！！」

なのは達はフェイトにカラオケ店へと連行される。その日は朝まで帰してもらえなかった。

それから数日間、フェイトの機嫌は普段と変わらないものであったのだが、晩酌の量は増えていた。キョウとギンガは飲み過ぎだと止めていたのだが、なかなか止まらなかった。その日もフェイトは自宅で晩酌を行っていた。

「お姉さん、最近飲み過ぎですよ!!」

「ひつく!! 良いじゃない、ギンガさん。たまには」

「そんな事言つて、もう熱燗を一人で八合も飲んでるじゃないですか」

仕事が終わりにすぐに帰宅したフェイトは夕食後、食堂で晩酌をしていた。手酌で次々と日本酒を飲んでいる。

エリオは部屋で宿題を、ヴィヴィオはキョウと共に入浴中である。

スバルは陸上部の合宿で家には居なかった。

夕飯の片付けをしながらギンガはフェイトに酒をつけていたのだが、彼女の飲む量が多かったので注意をしていた。

「この間の合コンははやての一人勝ちって意味分かんない、ひつく」

なのはに開かせた合コンが原因らしい。

「この間からずっとそればかりじゃないですか。確かはやてさんが両手に花だったんですよね?」

「そうよらの!! 私となのはが誘ってあげたのに。関西人だからガンガン盛り上げてくれるって期待してたらあ、猫被っちゃって

さあ。家庭的な女を全面的に出してアピールするのよ。やんなっちゃう」

「はあ……。お姉さんにも何時か良い人が現れますよ」

「むづ。やっぱり既婚者は余裕があるのね。妬ましい」

「そんな事ありませんよ。もう時間も遅いですから、今日はこの辺で」

「やあだあ！！ ちょっと、ギンガさんもこっちに座りなよお。一緒に飲もう」

ふらふらになりながらフェイトはキッチンへ移動する。洗い物をしていたギンガの手を引き食堂に連れてくると自分の隣に座らせる。

「わ、私は良いですから。それより、もうお酒を飲むのは」

「だあめ！！ ギンガさんが飲んでくれなきゃお酒飲むの止めないもん。わたひの酒が飲めねえのか」

フェイトはギンガの口に直接徳利をあてがう。中には一合ほど入っていたようで、ギンガは其れを一気に飲みほした。

「ひっく、ギンガさんが飲んでくれた」

フェイトはギンガに酒を飲ませて上気分だった。だが、酒を飲まされてからのギンガは様子がおかしい。顔を俯けたまま動かない。

「ちょっと、ギンガさん。ギンガさんってば」

フェイトがギンガの肩を揺する。其れに反応し、フェイトの手を払いのけながらギンガは顔をあげる。

「ああん？ なんだあ、てめえ？ 何か用でもあんのか？ 金髪」

目が座り、いつも温厚で若奥様然とした彼女からは想像できない程のドスの効いた声で答える。口調も別人の様だ。

「ひゃ、ひゃい。ど、どうしちゃったのかなあ？ ギンガさん。あなたらしくないよ〜」

豹変したギンガをみて、フェイトは心なしか低姿勢になった様に思える。

「うつせんだよ、行かず後家！！ さつさと酒持ってこい。そういう所で気が付かねえから何時まで経っても男が出来ねえんだよ、夕コ！！」

「ふえ、ギンガちゃんが壊れた〜」

「さつさと取ってこい！！」

それからフェイトはギンガに言われるまま酒を用意するのであった。ギンガの様子を見て、フェイトの酔いはすっかり醒めてしまう。其れはキョウウが風呂から上がるまで続いた。

「ちよ、姉さんどうしたんだよ？ それにギンガも」

「キョウウ、助けて〜。ギンガさんが怖いよ〜」

風呂から上がったキヨウへフェイトは助けを求める。隣ではギンガが一升瓶をラツパ飲みしていた。だが、彼女はキヨウの姿を見ると瓶を置き、彼を見つめて言葉を放つ。

「にゃ？ ダーリンだ。ダーリン、こっちに来て」

「だ、ダーリン？」

普段のギンガと違い、甘ったるい声だった。

「キヨウ、早く行って！！ ギンガさん何するか分かんない」

フェイトはキヨウにギンガの意識が向いているうちに席から離れる。キヨウは先ほどまでフェイトが座っていたギンガの隣に座る。

「どうしたんだよギンガ？ 酒なんて今まで飲んだ事なかっただろ？」

「うん。分かんない。それよりダーリン、チュウしよ！！ チュウ」

ギンガはキヨウに抱きつき甘える。そして強引に彼の唇を奪う。

「フェイトおねえちゃん！！ お風呂上がったよ。次どうぞ」

キヨウより少し遅れてパジャマ姿で頭にバスタオルを載せたヴィヴィオが風呂から食堂へ移動してきた。

「ヴィヴィオ、見ちゃダメ。絶対ダメだから」

「ふえ？ 何？ だるまさんが転んだ？」

フェイトはヴィヴィオの後ろに素早く回り込むと彼女の目を手でふさぐ。

「ぶはつ。おい、よせよギンガ。みんな居るだろ？」

キョウは口では拒絶しているが満更ではなさそうだった。

「ヤダヤダ。ねえダーリン抱っこして。お部屋に行こう？」

ギンガはキョウの膝の上に移動し彼の眼を見ながらお願いした。その表情は扇情的なものだった。潤んだ瞳と水気を帯びた唇。酒により体温が上がっているのか、服のボタンを上から三つほど開けており、胸の谷間が見えている。

「うっ、分かったよ。姉さん、俺達もう二階に行くからヴィヴィオの事よろしく」

「おにいちゃん、ギンガおねえさんおやすみなさい」

「ヴィヴィオちゃん、おやすみ」

キョウはギンガをお姫様だっこして階段の方へ向かう。

その後、フェイトはヴィヴィオに今夜キョウ達の部屋にはくれぐれも近付かない様に言った。酔いが醒めた彼女はそれからすぐ風呂に入り、ヴィヴィオもエリオのいる子供部屋に移動した。

その晩、夫妻の部屋で何が起こったかは分からない。ただ、いろんな声が聞こえてきたとだけ言っておこう。

翌日、ギンガは昨晚の事を一切覚えてはいなかった。ただ、彼女の肌は何時も以上に艶々しており、キヨウは干からびているようだった。

「ちい兄ちゃん、ヴィヴィオ昨日ね。怖い夢見たの。お兄ちゃんとギンガお姉ちゃんが苦しそうな声を上げてる夢」

「えつとね、ヴィヴィオ……」

エリオは顔を赤らめてそれ以上言葉を続けられずにいた。

「ああもう！！ リア充は爆発しろー！！」

その日の朝、フェイトの叫ぶ声が家に木霊するのだった。

一つ屋根の下？2 お酒も程ほどに（後書き）

女教師オーリスって何かエロくないですか？

コーヒーの知識がないんで一応調べてみたんですが、間違っていたらすいません。

今回はパロディー多めです。

序盤のフェイト語りは『携帯小説を書いてみた』と『くそみそテクニック』が元ネタになっております。フェイトファンの方、お許しください。

『もしドラ』のドラって『ドラツカー』じゃなく、初めは『ドラグナー』だと思っていました。

【ネタ】もしキョウが『正義を貫くRPG』の世界に紛れこんだら（前書き）

以前、活動報告に書いたネタを我慢できずにやっつけてしまいました。
某格闘漫画の『塩漬け古代人編』の様に、どうしても書きたくなっ
てしまいました……。

テーマは『TOV』の世界にキョウが紛れ込んだらという物です。

【ネタ】もしキョウが『正義を貫くRPG』の世界に紛れこんだら

此処は『テルカリユミレース』という世界。魔法技術により発展を遂げた世界である。豊かな自然に恵まれた世界だが、町から一步出ると『モンスター』と呼ばれる生き物が溢れている。其処に、何が原因なのかは不明だがキョウ・アーデルハイドが迷い込んだ。そんな物語である。

「何だよ、此処は……」

キョウは見知らぬ部屋で目を覚ました。本来は機動六課の自室で眠りについていた筈であるのだが、彼が目覚めた場所は簡素なベッドとフローリングの床、小さな机と筆筒があるという、初めて目にする部屋の中であつたのだ。そしてそこには八神はやての『夜天の書』の守護騎士の一人、ザフィーラの姿もあつた。普段通り、守護獣形態で床に寝そべって休んでいる。

「ザフィーラさんも一緒でしたか。ザフィーラさん、此処って一体？」

「バウツ!!」

喋れるはずのザフィーラが、まるで犬の様に答えるのでキョウは首をかしげる。よく見るとザフィーラの姿は普段と少し違っており、口には煙管を加え、首からは『ダガ モード』に変形した『クロスミラージュ』を下げている。

ザフィーラの姿を見て、キョウは自分の姿も確認してみる。パジャ

マで休んでいた筈なのに、黒い上下の服を纏い足元は白いブーツを履いていた。左手には見慣れない金の腕輪と、慣れ親しんだ初代『フランメファウスト』を装備していた。そしてベッドの傍には鞘に収められた『レヴァンティン』が立て掛けられていた。其の時、部屋の扉から子供が飛び込んでくる。

「大変だよ!!!ユーリ!!!」

「ユーリ!?!って何やってんだよ、ヴィヴィオ。そんな男の子みたいな恰好して?」

それは短パンとTシャツを着たヴィヴィオであった。キョウの言葉を聞き、彼女は不思議そうな表情で返答する。

「何言ってるんだよ、ユーリ。僕はテッドだよ。何か、今日のユーリは変だよ?って、それよりも大変なんだよ!!!下町の『ブラスティア』が盗まれちゃったんだ!!!そのせいで水が溢れているんだよ。ハンクスじいさんがユーリを呼んで来いって。早くラピードと行っ
てきなよ!!!」

「ハンクス?ラピード?」

「バウツ!!!」

キョウは聞き慣れない言葉に首をかしげる。彼の呟いた『ラピード』という言葉にザフィーラが返事をするように吠えて答える。

「ハンクス爺さんはユーリとフレンが小さい時から面倒を見てくれた恩人だろ?それにラピードは騎士団時代からの相棒じゃないか。どうしちゃったんだよ、ユーリ?それより早く行って!!!爺さんが

お冠になっちゃうよ。下町の広場の噴水の所で待ってるらしいから
！！！」

「あっ、ああ。分かったよ、テッド？じゃあ、行ってくる。行くぜ、
ザ……ラピード……！」

「ワオーン……！」

「ああ、ユーリ……剣を忘れてるよ……！」

キヨウが部屋から出ようとした時、テッドが彼に『レヴァンティン』
を投げる。キヨウはそれをキャッチすると階段を降り、道なりに進
んで下町の中心へと向かう。

木やレンガでできた街並みが視界に入ってくる。それはまるで地球
の中世ヨーロッパの様な造りであったのだが、ミッド出身のキヨウ
にはそれが分からない。彼にはベルカ地方の田舎みたいに感じられ
ていた。

「遅いぞ、ユーリ……何をしていたんじゃ……！」

「おっ、親父？」

キヨウが広場に到着すると、辺りは水浸しであった。噴水からの水
の勢いは引いており、危機的な状況ではないようだ。それよりも驚
く事があった。ソウジが髭を生やした姿で彼に声を掛けたのだ。

「親父？何言つとるんじゃ。お前が来る前に『アスピオ』から来た

『魔導器』^{プラスティア} 研究者のモルディオさんが其の暴走を止めてくれたんじやが、肝心の『魔導器』が見当たらんのじゃよ。どうしたもんかの
お……………」

キヨウは更に聞き慣れない言葉に混乱をする。それを気にせずハンクス爺さん？は言葉を続ける。

「恩人を疑うのは気が引けるんじやが、もしかするとモルディオさんが持ち去ったのかもしれない。ユーリ、貴族街のモルディオさんの屋敷に行つて、話を聞いて来てはくれんか？坂を登つた先にあるじやろ？」

「あゝもう、訳分かんねえ。分かつたよ！！行つてくる。そのモルディオさんつてヤツに話を聞いて、もしその『魔導器』つてやつを持ってたら取り返してくれば良いんだろ？行こうぜ、ザフィいやラビード……！」

キヨウは投げやりな態度で答える。「もうどうにでもなれ」というのが彼の心情なのだろう。ラビードと共に飛行魔法でそこから飛び立とうとする。だが……………」

「つて、飛べない？どういう事だ？炎は……………」

キヨウは右手を掲げ炎を出そうとするが、それは失敗に終わる。

「魔法も炎も使えない……………。でも此処つて、もしかしたら御先祖様が見せる夢の世界かもしれないな。取り敢えず歩いていくか」

彼はポジティブだった。いや、図太いと言われるのか大雑把と言われるのか……………。気を取りなおして坂の方へと歩いて行く。

坂を上がると、そこには大きな広場が広がっていた。大道芸人や、ベンチで佇む人、子供と共に遊ぶその親などの姿が見られる。広場からは下町と反対の方はかなり大きな町真美が見えるようになっていた。

そして広場を上がった先、右の方には更に階段が続いているようであった。

「貴族街つていうと、この先か？」

キヨウが其方へと進むと、突然ある声に呼びとめられる。声の方に振り返るが其処には誰の姿もなかった。しかし声は続く。姿なき声は新聞記者だと説明をする。その声はキヨウのこれからの行動を記録し続けるとの事だ。その声が説明を行っている際、キヨウの頭の中には『RPG』のメニュー画面の様な映像が浮かび上がる。声はそのビジョンが見えているのか、それに対しての説明も行っていく。パラメーター欄やアイテム欄などキヨウはその説明に従い閲覧していく。其の説明が終わるとビジョンは頭の中から消え、声も聞こえなくなった。

「普通に声に従ったけど……。何、この世界。怖い……」

キヨウもまともな感覚は失っていない様だった。自分の知り合いに良く似た人物たちが暮らす、みた事もない様な世界。この世界の事を今になって改めて恐ろしく思い始める。

だが、彼は思い出す。下町の人たちが『魔導器』という物がない事で困っているという事を。目の前に困った人が居れば放っておけないという考え方の人間である彼は、重要なことである世界についての違和感を頭の隅に追いやり、自分を無理やり納得させて坂の方へと向かって、歩いて行くのだった。

坂の上には大きな城が建っていた。二人の門番が立っており、出入りは自由に出来なくなっているようだ。キヨウは事情を話して通してもらおうかとも考えていたが、それよりもラピードの行動の方が早かった。門番の頭に向かい、器用に尻尾を使って石を投げつけたのである。その石によって二人組は気絶してしまう。

「ってこれ、ヤバくないですか？」

「バウ！！」

キヨウはテンパって思わず敬語で話してしまう。しかしラピードは付いてこいと言わんばかりに門の方へと歩みを進める。キヨウは門番の近くを通る際、右手を顔の前に移動させ謝りつつ先へと進む。その後ラピードに追いつき、キヨウは叱る。「く〜ん」と鳴いて反省をした様な表情をラピードは見せる。

門を抜けると、城門と大通りが広がっていた。高級そうな服を着た人々が大通りを歩いている。キヨウは近くに立っているモーニングを着た男性にモルディオ邸の場所を訪ねた。声を掛けられた人物はキヨウの身なりを見て少し驚いているようだったが、ちゃんと教えてくれた。

男の言葉に従い、キヨウとラピードはモルディオ邸へと向かうのだった。

モルディオ邸は白い二階建ての洋館だった。周囲に人気がないようであり、キヨウ達は門をくぐり玄関の前に立つ。

「留守なのか？一度出直すか、それとも帰宅を待つか……」

キヨウが思案している間に、ラピードが再び勝手な行動を取り始める。庭の方に周り窓から不法侵入をしたのだ。

「って、おい！！さっきの事を懲りてねえじゃんか！！ラピードが変な事をしないうちに早く連れ戻さねえと……」

キヨウも何だかんだでラピードの後を追う。

屋敷の中は薄暗く、階段とエントランスが広がっていた。ラピードは二階に移動しておりキヨウもそれを追う。そしてキヨウが一番奥の扉の前に移動した時に、突然玄関が開く。

「ふう、上手くいった。後はこれを持ちかえれば……」

それは黒いフードをかぶった男の声だった。その様子から彼がモルディオという人物なのだろう。男は手に持つ袋から光か輝く球を取り出してそう呟く。それを目にしたラピードが階段から飛び降り、男の方へと向かう。

「ウォーン！！」

「って、おい！！」

キヨウの仕方なくそれに続く。突然現れたキヨウ達に対してモルディオらしい男は驚きの表情を浮かべる。

「何故こんな所に！！もしかこの『魔導器』を……」

そう言うと男は玄関から外に出ていく。男の言葉から光の球が『魔導器』という物らしい事が分かった。それに、彼が下町からそれを盗み出したという事も。キヨウはすぐに彼を追い、外に飛び出して

いくのだった。

たぶん、続かない。

【ネタバレ】もしキヨウが『正義を貫くRPG』の世界に紛れこんだら（後書き）

カオス過ぎるWWW

EP0 なまえをよんで（前書き）

はじめまして、筆者です。初めて文章を掲載させていただいたので至らない点が多々あると思います。

この作品は捏造、超展開、キャラ崩壊など原作ファンの方々には不快に感じられる部分がございます。

オリジナルの要素や独自設定は『キャラ紹介&設定』に載せていますのでそちらをご覧ください。

EP 0 なまえをよんで

ミッドチルダのとある違法研究施設にて。

薄暗い部屋の中、その中心にあるプールのような物の中で一人の少年が目を覚ます。黒い髪で五歳くらいに見える。

周りには白衣を着た研究者達があり、驚いた様子で少年の事を眺めている。

「今までの五年間産まれて一度も目覚めなかったのに、一体どういうことだ」

「何が切っ掛けなのか、これは。だが面白い。これで我々の研究が次のステップに進むというものだ」

「古代ベルカ人のDNAサンプルから炎の魔力変換資質をもったモノを再現し、融合騎とのユニゾンを実現するというこの研究がやっとなりになりそうだ。戦闘機人などという人形より我々の造り出す人造魔導師の方が有用であると最高評議会にも認めさせるチャンスが巡ってきたのだから」

「スカリエッティの『プロジェクトF』の技術から一部をを借りねばならなかったのが腹立たしいが、奴に一泡吹かせられそうだ。唯一人の形まで育ったコレは無駄には出来ん」

プールには少年の姿しかない。科学者の言葉から推測するに、彼は実験の唯一の成功例の様だ。男達はプールから少年を出すと手術着の様なものを着せ、ケーブルの繋がった椅子に座らせる。

ケーブルの先にはケージの様なものがあり中には30?ほどの大きな妖精か悪魔といった風貌の少女が眠っていた。赤い髪を持ち、年齢でいえば十代半ばと言ったところであろうか。少年と同じように手術着に似た貫頭衣を身に纏っている。ケージに繋がるケーブルからは幾筋もの更に細いケーブルが延び、それは少女の身体に接続されている。意識がないようで、男達が端末を操作しても、彼女の体から光が発せられても反応が無い。

光がケーブルを通り少年に届く。その光に包まれると少年は苦しみだした。

「『烈火の剣精』との適合率はまだ七割といったところか。これから更に上昇させる事が出来れば最高評議会もスカリエツティも我等を認めざるをえまい」

端末を操作していた科学者がデータの表示されたディスプレイを見つめつつ呟く。少女は『烈火の剣精』と呼ばれる存在の様だ。他の科学者たちは実験を続けていくのであった。

少年が目覚めて一週間、少年は「サンプル・0^{ゼロ}」と呼ばれ研究所内で生活している。目覚めてすぐ言語能力を植え付けられ、実験の毎日である。言葉を理解するだけで人としての自我を持たない少年は何も感じることなく同じように実験を繰り返されていくだけだったのだが、その日の実験はいつもと違った。

「今日は何時もとアプローチを変えてみよう。剣精からデータを引き出し適合させることでは、これまでで2・1%の上昇しか見られなかったが、逆にゼロの方から魔力を引き出すことにより何か変化が見られないのか？」

そういつて研究者達はゼロを機具に座らせ端末を操作していく。『烈火の剣精』は前と同じようにケージの中で眠り続けていた。ゼロの体から光がケーブルを通り『烈火の剣精』へと流れていく。

眠り続ける『烈火の剣精』に『ゼロ』から発せられた光が届いた時、彼女は実験で初めて反応を現す。光に包まれた瞬間、彼女は今までケージの中で仰向けに寝そべっていたのだが、そこから突如上半身を起こしたのだ。

【何も無い、真っ暗な空間に突然、光が見えた。何なんだ？ここは何処なんだ？私はその光に手を伸ばしていく。トンネルに光が差し込んでいるようで、私は光の方へ進んでいく。その先には子供がいる。ああ、私は今起動したんだ。こいつが私のロードになるんだ】

少女の頭の中では光の先に『ゼロ』と呼ばれた少年の顔が映し出されていた。彼女は何の根拠も存在しないが、少年が自分と深いつながりを持っていく事になるという予感を感じていた。

『ゼロ』からの光を浴び続け五分程経った時であろうか、彼女は意識を覚醒させたのかゆっくりと瞼を開く。彼女の目には自分の意識

の中に浮かんだ少年と同じ顔の少年の姿が映る。
その時『烈火の剣精』は件の少年と長い付き合いになるといふ予感が現実になるといふ事を夢にも思っていなかった。

これが、少年とその相棒との初めての出会いであった。この出会いが少年を変えていく。

「まさか、融合騎が起動するとはな。面白い、我々の研究は無駄にならないようだ」

笑みを浮かべる研究者達。彼らはその後末端を操作し、ゼロと融合騎との実験を続けていくのであった。

更にひと月が経ち、ゼロは融合騎と過ごすように研究者達にいわれた。それまで実験以外では他者と接することなく生きてきた彼は初めて自分以外の存在を認識した。衣食住をただ与えられ、実験を繰り返すだけの生活なのだ。彼にとっては研究者達は実験の付随品でしかなかった。それは人ではなくモノなのだ。彼と研究者達はお互いモノとして認識していたのである。ベッドと一人掛けのような机しかない窓もない部屋で融合騎との共同生活が始まった。

融合騎はどう接すればよいのか分からずにいた。起動時にゼロを『ロード』だと認識したのだが、彼はただ自分を実験の品としか感じていなかった。

自分は名前はないが自我や感情はある。だが少年にはそれが無かった。言われたことをするだけの人形のようなのだ。融合騎はそれがたまらなく悲しかった。

そして二人はある実験中の出来事をきっかけに距離を近づけていくことになる。

無意識に声を上げるといふのは初めてのことだった。それに研究者達に逆らうということも。

そして彼の体からは紫色をした炎が噴き出した。

「これは興味深い。感情によって力が発揮されるのか。それに適合率も80%を超えた？」

一人の研究者が呟く。それを合図にするように電流は止められた。

「今までにサンプルがこのような行動を起こしたことが無かった。人形が感情を得たようだな」

他の研究者も面白そうに、にやけながら言った。

「これまでは感情というものを無視した形で実験をしていたが、これはこれは……。そういえば、別の研究所でコレと同じくらいの戦闘機人があったと聞いたな。それに触れてどのような影響を受けるのか見てみるのも悪くなくろう」

「不安定だが炎の変換資質も発現したようだ、これからの実験にも新たな可能性が生まれたな。様々な感情を植え付け刺激を与える。楽しくなってきた」

研究者達は好き勝手なことを言うと実験室から出て行った。そしてそこには二人だけが取り残された。

「安心して、もう大丈夫だよ」

少年は『融合騎』をケージから出してやり言った。融合騎は痛みに

顔を顰め、怯えた表情で彼を見る。

少年は『融合騎』を労わる様にその身体を腕の中に包み込む。

「僕が頑張るから、君に酷い事をされないように僕が頑張るから！」

少年の言葉に彼女は只一言「ありがとう」と呟いた。

そして安心したような表情で少年の腕の中で眠りに就いた。

「ありがとう」「その言葉を聞き彼の胸はほかほかやさしい気持ちに包まれていくように感じた。これが彼が初めて知った喜びという感情なのだ。

融合騎を腕に抱き、部屋に戻った少年はやさしくベッドの上に寝かせた。そして彼は

「僕がもっと頑張つて、君を守つてあげられるように強くなるから」と『融合騎』の頭を撫でながら声を掛ける。

その時、それまで眠っていたように見えた『融合騎』が口を開く。

「マイロード、名前を呼んで」

「えっ？ 『ロード』って？」

少年は初めて聞く言葉に疑問を持ち少女に尋ねる。

「『ロード』は『融合騎』の主のこと……。私には名前が無いから……。お願い、あなたが私の名前を付けて」

少年の疑問に対し『融合騎』は答える。

「ロードって、それに僕なんか君に名前を付けていいの？」

少年は『融合騎』の答えにより、その言葉の意味を理解する。だが、少女の言った事に対して本当に自分で良いのかと考えたのか、そう言葉を返した。

それに対して微笑みながら彼女は言う。

「あなたにつけてほしいの、私の初めての友達だから」

「友達？ 本当に僕が……」

「……うん。あなたは始めて私に優しくしてくれた。私の為に頑張るって言うてくれた。私はそれがすごく嬉しかったんだ。私達、友達じゃないのかな？」

『融合騎』の言葉を聞き、少年はゆっくりと頷き、笑顔で言葉を返す。

「ありがとう。僕と君は友達だよ」

少年の言葉によって『融合騎』も笑顔を浮かべる。少年は更に言葉を続ける。

「『アギト』。君の名は『アギト』。可愛くないと思うかもしれないけど、君にはどんな困難も咬み破っていける強い人になってほしいから。僕も強くなるから、一緒に……」

「アギト、私の名はアギト。マイロードが付けてくれた名前」

アギトは少年から貰った名前を噛みしめるように自分の口で言葉にする。その姿は嬉しくてたまらないという様子であった。

「僕に名前はないけど、ゼロって呼ばれてる。ゼロって呼んで。これからよろしくね、アギト」

「うん。ゼロ……」

微笑みあう二人。

こうして彼らの夜は更けていくのであった。

EP 0 なまえをよんで（後書き）

駄文にお付き合いくださり真にありがとうございます。アギトが誰だこいつ、ってくらいキャラが違います。主人公との生活を通して原作様に近い性格にしていこうと考えています。ヒロインは一応決めています。もともとその人とのイチャラブを書きたかったので、これからよろしく願います。

Ep1 出会い(前書き)

データが消えた。はあ。

読みにくかったので修正しました。

Ep1 出会い

S i d e ? ?

突然、私と妹は呼び出された。妹といっても同じ母親から生まれたというわけではない。そもそも私達は生物としては歪な形で産まれてきている。『戦闘機人』と呼ばれるそれは機械と人間の融合。機械を埋め込むことが前提で生み出された存在。それが私たちなのだ。

私はそこで一人の男の子と可愛い妖精と出会う。彼らとあのような関係になるとは思いもしなかった…。

いきなり話が変わるけど、私と妹の出会いもそれはいきなりだった。何時ものように実験が終わり私室に戻る。其処には私の嫌いな研究員と蒼い髪の小さな女の子がいた。私よりも2歳位幼いショートヘアのその子が怯えた目で私の事を見ていた。

研究員は

「そいつがお前の妹だ」
とだけ言って部屋を去っていった。部屋には私達だけが残された。
その子もアイツが嫌いだったのか、それとも寂しいだけなのか私の
方に近づいてきて
「おねえちゃん」と呟いていた。

初めて見る子に突然そんな事を言われて少し驚いたけど、私はその
子に自己紹介をした。

「私の名前は『Type 0 Ⅱ First』。あなたのお名前は？」
私はこの名前が大っ嫌いだ。人ではない、機械「モノ」として嫌で
も自覚させられるものだから。こんな体で産まれなくなかったとい
つてもどうしようもない。

でも、私の気持ちを察したのか少し心配そうにその子は見えた。自
分より小さい子に心配されるのが少し恥ずかしかったので、さっき
よりちよっぴり早口で

「あなたのお名前は？」
と聞いた。その子は驚いたのか少しビクっとなっていた。そして恥
ずかしそうに

「あっ、あの、あたしのなまえは、たいぶぜろ。せつ、せかんどで
す。へう」

と可愛らしく答えてくれた。私も5歳なので小さいのだけれども、私よりも小さい彼女は触れれば消えてしまいそうなくらい儂くて、それで私はこの子を守ってあげなくちゃってという気になってしまった。

それから私はその子の姉として振舞うようになっていった。といっても、この研究所に子供は私達二人しかいなかったんだけれど。気付いたらあの子はいつも私の後ろについてくるようになっていた。その姿を見ていると今まで嫌いだった実験も少しは我慢できるようになっていた。私はお姉さんなんだからって。以前よりも心が穏やかになっていく気がした。

でも、許せない出来事があった。妹も実験を受けさせられるようになったのだ。泣きながら嫌がる妹。助けを求められても何もできない。私が泣きながら

「私が代りになるから」

と頼んでも聞き入れてはもらえなかった。それでも妹は部屋に戻ると

「おねえちゃん、ありがと。でもあたしのためにないちゃメツよ。」

おねえちゃんがないたらあたしもかなしくなるから」

と微笑みながら言ってくれて、私は泣くのを我慢するので精一杯だった。

自分がつらい目にあっただのに私の事を気に掛けてくれるなんて…。

それからだ、私達は本物の姉妹になったのは。

それからしばらくして場面は冒頭へ戻る。

部屋の中にはうちの研究員と見知らぬ研究者がいた。それと私と同じ位の年の黒髪の男の子、その子の肩に座っている紅い髪に悪魔みたいな羽をもった女の子がいた。

「その2体が戦闘機人とやらか」

「ええ。それで？其れがおたくらの研究成果ってやつですか」

「今回、これの感情のフィードバックについて少し役に立ってもらおうかと連れてきたのだ」

と、研究者達は話をしていた。その場に居た二人の子供。ああ、この子たちも私達と同じなのかって気付いた。

それから暫らくして私達と男の子と妖精さんはモニターで監視されている部屋に連れてこられた。

S i d e E n d

S i d e Z e r o

初めての外出だったけどそれは何時もとあまり変わらない研究所の中だった。

其処には、きつと僕達と同じ存在であろう二人の女の子がいた。一人は僕より小さい子で綺麗な蒼い髪をショートにした可愛い子だった。そしてもう一人は……。

何だろう？胸のあたりがドキドキする。其れに何だか顔が熱い。その子は青紫色の綺麗な髪を肩の辺りまで伸ばした女の子だった。

僕達4人が連れてこられたのは中庭の様な部屋で地面があり、木が生えていた。一先ず僕は自己紹介をすることにした。

「初めまして。ぼっ、僕の名前はサンプル0です。よろしくお願ひします」

産まれて初めての自己紹介で失敗してしまった。最近ではアギトとしゃべることが多いからうまくいくと思ったのに。隣ではアギトが……。

「アギト。私の名前はアギト。ゼロが付けてくれた名前！」と嬉しそうに言っていた。僕があげた名前を、喜んで名乗ってくれて嬉しい。

でも、紫の髪の子の番になるとその子は一瞬だけ悲しそうになった後、

「私の名前はType・Firstです」

と答えた。少し気になったんだけど蒼い髪の子がちょっぴり恥ずかしそうに

「あたひのなまえは、たいぷぜろ。せかんどです」

って舌つ足らずに自己紹介したことで空気が少し軽くなった。

それから30分位はみんな遊ぶのが初めてでぎこちなく過ごしていたけど

「ねえ、おにいちゃん、おねえちゃん、アギトちゃんあっちまでかけっこしよっ！」

「私はお姉ちゃんだから負けないもん」

「僕だつて男の子なんだから」

「私が一番になる。みんなには負けないんだから」

こんな風に打ち解けることが出来た。良かった、仲良くなれたみたいだ。

Side End

>Side First<

気付いたらみんな楽しく過ごせてたみたい。でもゼロ君ってば、私と話すときだけ顔が赤くなったりちよつと様子が変なの……。アギトちゃんや妹としゃべる時は平気なのに。私も何か変。私以外とゼロ君が喋ってる胸の辺りが何だかもやもやする。

S i d e E n d

その時間は終わることとなる。

突然の爆発音とともに……。

「時空管理局だ！全員動くな！この違法研究施設を摘発する！」

Ep1 出会い（後書き）

うわぁ、原作崩壊させまくってしまいました。ギンガああああああああ。すいません、取り乱しました。

ヒロインはズバリ、ギン姉です。姉属性大好き。ISだと千冬姉、ゼロ魔だとマチルダにイザベラのファンです。

こんなオナ駄文にお付き合いくださりありがとうございます。お目汚し申し訳ありませんでした。

随時更新していきますのでご注意ください。

はやて「遊びは終わりやあ！泣きい、叫びい！そしてラグナロク！」

(誰なん？八神庵って？)

原作キャラは変更点を中心に記述します。

技の読み方とか加えました。

【注意】

私は基本的にオリキャラにCVは付けません。ですので読者のみなさんが自由に想像した声でキャラ達のセリフを受け取ってください。

『KOF』が大好きならそのCVを想像するのも有りでしょう。

書いていない部分を想像して補うという、読者の皆さまの楽しみを奪いたく有りませんので……。

【主人公】

名：ゼロ（仮） キョウ・アーデルハイド

身長：176？

体重：70kg

戦闘スタイル：草薙流古武術＋近代ベルカ式魔法

魔力光：赤紫（炎も同じ色）

魔術術式：近代ベルカ式。

趣味：釣りとツーリング

大切なもの：単車と彼女ギンガと親しい人達

アギトとの融合適性：通常70%代。（これは調整が不十分であったせい）

ポジション：フロントアタッカーとガードウイング。

使用デバイス：アギト（アギトはあくまで妹であり相棒なので協力していると考えている）

フランメ・ファウスト？

魔導師ランク：総合A＋

ギンガと組む際はスピードを生かしてガードウイングになる事が多いが、タイプのには二人ともフロントアタッカータイプである。

バリアよりシールドのほうが得意。

彼は防御が薄いわけではないので誤解しないで欲しい。

ギンガの攻撃力が高いだけだ。

ユニゾン後は魔力光は普通のオレンジ色に変わりランクだとAA＋。感情が昂ると原作のシグナムと同じ位にまで融合適性が上がる。

最大Sランク。（『無式』をユニゾン中に放った瞬間のみ）

違法施設でプロジェクトFにより誕生。

特定の人物の記憶を複製しているわけでなく、言語や日常生活を送る上での最低限の知識しか与えられなかった。

融合騎とのユニゾン適性の高い人造魔導師を誕生させるという研究により産まれた。

ギンガとは研究所で会い、一目ぼれをした。

近接戦闘タイプで遠距離は苦手だが出来ないわけではない。

炎の変換資質を利用したインフアイター。

ストライクアーツを基礎だけかじり、養子先の一子相伝の武術『草薙流』で戦う。

幼少の頃から養父に鍛えられているので純粋な戦闘技術は高い。

一方で魔法はそれほど得意ではないのだが改善されつつある。

遺伝子提供者となったベルカ人（草薙瞬火）がその拳法の開祖で、それがその家系に伝わってたということになっている。（保存状態の良いものが見つかり、欠損部分は現生の魔導師のもので代用されている）

日常パートが書きたいのでナカジマさんちの御近所に引き取られ、姉妹とは幼馴染ポジ。

アーデルハイド家で過ごしていき口調や性格が大きく変化していった。

普段は口が悪いが目上の人には敬語を使うよう養父に躡けられている。

変わらないものは『大切な人を助けたいと思い、その力を欲すること』。

ゼストの影響で自分の周りの人だけでなく、手の届く範囲の人も助けられる存在になりたいと思っている。

身体能力ではギンガに一步後れを取るのも、多彩な技やスピードで渡り合う。

空港火災での行動を反省し、自分を犠牲にしないと誓う。

モデルはですね、火出してぶん殴るから分かる人には分かるでしょう。

某格ゲーのキャラです。初代の。でも実験の中断で、全力？というか想定されていたほど力が発揮できない。

悪の組織に捕まってクローン造られたわけじゃないのに。ねえ……。ルックスはモデルになった人物を検索してみてください。ただし、2000以降を！

幼いころからヒロイン一筋。

ネタバレ

炎が赤紫なのは『オロチの血』の影響。詳しくは本編をどうぞ。

【アギト】

キョウの相棒であり妹。

原作よりも素直で口調も若干大人しい？

明るい性格ですぐに人と仲良くなれる。

キョウの為に健気に尽くしてくれる相棒思いの優しい娘。

二人の間に恋愛感情はない。

魔法が苦手なキョウの為に補助系の魔法や、射撃魔法など彼の欠点を埋める魔法を多く覚えている。

キョウが『フランメ・ファウスト』を手に入れてからは彼女が魔法

をインストールした。

キョウとユニゾン状態でランク試験を受けるのでランクは彼と同じ。『草薙流』の技も一部はマスターしている。(アギトキックや『闇払い』など。遂には奥義の一つ『八酒杯』までも再現出来るようになる)

インファイトだとリイン？は絶対アギトには敵わない筈。

料理や家事も得意。

原作と違いゼストの事は『さん』付けて呼んでいる。

話を書いているうちにどんどん愛着が湧いてしまいました。

魔導師ランク空戦A+。ユニゾンせずに二人で戦う方が効率良いかも。

ポジションはフルバックだが、キョウ達は遠距離が苦手なのでセンチガードの役割を負うこともある。前衛もこなせなくもないので実は凄い娘？

ネタバレ

瞬火により産み出された融合騎であり当時の記憶を失っている。彼女はキョウの『オロチの血』を抑える機能を与えられている。

『犬夜叉』で言う所の『鉄碎牙』の様な役割。

【ギンガ・ナカジマ】

身長：158?

体重：??? (かなり鍛えており戦闘機人ということも影響して見た目より重い)

戦闘スタイル：近代ベルカ式魔法とシューティングアーツ

趣味：料理と裁縫による小物作り

大切なもの：家族、友人、恋人、^{キョウ}シルバーのアクセサリー (キョウ

から貰った物)

魔導師ランク：陸戦A+

ポジション：フロントアタッカー

ヒロインです。主人公が幼馴染です。ギャルゲ的な展開が書ければと考えています。

もともと書き始めた動機がそれなので。

ゲンヤ譲りの妄想癖がある。

キヨウとアギトと三人で多くの人を救えるようになるうという誓いを立てている。

家族や友人等大切な人を守るために日夜努力を続けている。

主人公よりも身体能力が高く、パワーファイターに分類されるキャラ。技術も高い上にキヨウとの組み手を通して、自分より素早い動きの相手との戦いも苦手としなくなっている。

彼女自身のスピードも遅い訳ではない。

訓練校では一時、劣等感を持っていた事があった。

食事の量をからかわれるとキレるし、よくキヨウを殴るが、これは二人の一種のコミュニケーションとなっている。

料理や裁縫など家事も得意。

良いお嫁さんになれると良く言われる。

草薙流の技を使用した場面があるが、動きを真似ただけであり習得しているわけではない。

「Ep21」でキヨウに思いを告げ、「Ep25」で付き合いたした。そして「Ep64」で遂に……。

【スバル・ナカジマ】

ナカジマ家次女。キヨウを兄の様に慕っている。
キヨウと姉の仲をネタにからかったりもする。

原作の様に明るく前向きな性格だがちよつと小悪魔な面もありキヨウを誘惑？したことがある。

アギトとは親友で「アギちゃん」と呼び慕っている。

魔法や格闘技の才能があり、物覚えがすさまじく良い。

見ただけで『草薙流』の技を幾つか覚えたり（もちろん練習をする）魔法のアレンジなども思いつく。

訓練校ではキヨウ達の鍛錬に参加しさらなるパワーアップを目指している。

原作でも訓練校を首席で卒業出来ていたのでこの位は出来るだろうと独自の設定にしました。

原作で使っていた技も本作ではアレンジが加えられている。

空港火災でなのはに助けられるが原作ほど彼女に傾倒してはいない。キヨウ達の背中を見て育ったからなのだが、彼やなのはの様に誰かを助けられるような人になりたいと思っている。

キヨウ達4人の中で最も魔法と武術の才能がある。

姉達を超える日も遠くはない？

【ソウジ・アーデルハイド】オリキャラ。

ゼストやレジアスとは同期で友人だが、修行を終えてから入局したので二人より年上。

灰色の髪に顎鬚を生やしたおっさん。

何時も袖に日輪がプリントされた着流しの様なものを着用している。地上部隊に配属されゼスト達ほどではないがそこそこ活躍していた、知る人ぞ知るといいうレベルの人物。

新人の頃のゲンヤやクイントの面倒を見た事があり、面識がある。何の偶然か、ナカジマ夫妻は彼の隣に越してくる。

ナカジマ夫妻からは「やる時はやるマダオ」というレッテルを貼られている。

第四陸士訓練校ではキョウウ達の教官のカーネル・ハイデルンと同期だった。

長らく連絡を取り合っていなかったが、今日が入学した際に手紙をしたためていた。

使用するのはベルカ式と草薙流古武術。

ランクは陸戦A A A。第一期のなのはに劣ると思われるが、陸ではかなりの高ランク。

其れに技術で補う人なので、闘い方ではS t Sのなのはさん（リミッター付き）を倒せる可能性もある。

キョウウ達が束になっても敵わない。

男寡婦。以前、テロで妻を亡くしておりそれが原因で管理局を辞めた。その後、無気力に生活していたが、キョウウを引き取ることとなり……。

収入は道場を開いているが弟子をとっていないため、退職金や貯蓄を崩していた。とは言ってもあまり使う事が無かったので、実はかなりの額を持っている。

キョウウ達が管理局に入ってから一人で家にいる。その際は鍛錬を続けていたり、町内会の行事に参加したりと普通に御隠居である。食事等は自分で作ったりもするが、よくお隣のクイントにお呼ばれする。

ゲンヤとは週に何度も晩酌を行っている。

たまにレジアスも彼の下を訪ね、二人で酒を片手に語らう事もある。モデルは草薙柴舟など。キヨウ達より強いが『るる剣』の比古師匠の様に直接は動かないキャラ。でも、出番は終盤に考えています。

【ティアナ・ランスター】

スバルとは一つ年上で、同期。

原作との変更点は、教導隊から来た実習生のセーラ・ウィップから鞭の手ほどきを受けており若干インファイトが強くなっている。スバルと共にキヨウ達の鍛錬に参加しているので身体能力も高くなっている。

なのはとは良好な関係を築いており、原作の様に一人で抱え込んで失敗はしなかった。

独自設定で、訓練校時代にみっちり鍛えているので本編より強化される。

キヨウに少し憧れを抱いていた。その時は既にキヨウとギンガが付き合っていたので邪魔にならない様に自分の思いを心に封じ込めていた。

だが、それをスバルに看破されキヨウに想いを告げる事にする。

その後もキヨウ達とは良好な関係にある。その出来事を通して「一人の大人の女性」へと近付いていく。

【草薙（八尺瓊）瞬火】

過去編の主人公であり、ミッドでの『草薙流』の開祖。

キヨウの遺伝子の基になった人物でもある。

三兄弟の末っ子で『オロチ一族の一人（恐らくゲーニッツ）』に操られた真ん中の兄を止める為に闘った。

『オロチ』の封印は解けてしまい、魂の一部が古代ベルカへと逃れ

てしまう。その際、『オロチの力』を身に受けてしまう。そして、彼も『オロチ』に巻き込まれベルカへと移動する。兄から『八尺瓊』の家を起こすよう言われ、一度受け入れるがすぐに返上する。地球では彼の兄の子孫『八神（八尺瓊）家』が存在していると思われる。（はやてとは関係は無い）

ベルカでは当時の聖王の娘（次代聖王）に保護され、その後は騎士として仕えていく事になる。

同じく騎士である「キハーダ・アーデルハイド」と結ばれ、婿養子となる。

聖王ローランと妻キハーダと共にオロチを封印する事に成功する。だがキハーダはオロチとの戦闘で命を落としてしまう。それから彼は融合騎を作る研究の後援者となり、亡き妻の面影を残す「アギト」が誕生する。

ソウジの先祖であり地球出身の非魔導師。だがその戦闘能力は凄まじく、『免許皆伝』を受けたキョウウよりも技の精度は上である。

時を超える映像をキョウウに見せるがこの能力は一切が不明。

『シャーマンキング』風に言うと長い年月を経て『幽霊』が『精霊』にランクアップしたのではないだろうか？

【レジアス・ゲイズ】

地上の英雄。ソウジとゼストとは互いに夢を語り合いその夢を共有する盟友と呼べる関係にある。過去に地上の戦力不足を解消するため『人造魔導師』の研究に関わった事があり、その事を悔い改めて、キョウウ達に謝罪をした。

現在の地上は彼なしでは廻らない状況にあり、次代の局員達が育つまでは中将としての仕事を続けていく。その後、然るべき罰を受け

るつもりである。

「地上を守りたい」という思いは本物であり、上記の告白後もキョウ達には尊敬されている。

むしろ隠す事が無くなったせいか、それまで以上に距離が近づいている。キョウからはプライベートで「レジーおじさん」と呼ばれる程に。

罪の意識からか仕事にそれまで以上に打ち込むようになり、娘のオリスからは心配されている。

拙作のレジアスさんは『きれいなレジアスさん』ですwww

【ゼスト・グランガイツ】

キョウの尊敬する人物。ソウジとはレジアスと同様、盟友である。

キョウ達を保護したのも彼の部隊である。子供好きの一面もあり、キョウ達の小学校の運動会にも顔を出したりしている。

『戦闘機人事件』の前夜、キョウと立ち合い自分の夢を彼へと託す。キョウ、アギト、ギンガに一番影響を与えた人物である。

事件から数年後、キョウ達の前に敵として現れるが、これには理由があった。

その戦闘能力は凄まじくキョウ達では歯が立たない。だが……。詳しい事は本編で。

【ジェイル・スカリエッティ】

原作との変更点は、後述する『レリック』から『オロチの力』を引き出し、それを手に入れている事。だが、それは不完全なものであり制御が出来ない。

結構好きなキャラなんです、拙作では悪役に徹してもらいます。

【オロチ】

過去に地球からベルカへと逃れた『星の意志』である。だが、魂の一部であるため、その力は完全ではない。力の波長が合う人間や、心に不の感情を持つ人間、『オロチの因子や血』を持ち人間の身体を借り具現化する。瞬火は封印が解けた際にその力を浴びて『血』を取りこんでしまい、それはキョウウへも引き継がれている。ソウジは代が下った事により血が薄くなっているので影響を受けない。

『オロチの因子』は聖王ローランが受けてしまい、彼女の子孫『聖王オリヴィエ』のクローンであるヴィヴィオにもそれは受け継がれている。

聖王の身体はオロチの力と相性が良いようだが関係性は不明。これが『レリック事件』に大きく関わってくる。

【ヴィヴィオ】

原作と違い、クイントが生存している事等が関係してナカジマ家に引き取られる事が決定している。よって、本作ではヴィヴィオ・ナカジマという名前であり、ナカジマ姉妹の三女になっている。

オリジナル設定ですが、オロチを瞬火と共に封印した聖王ローランが彼女のもとになった人物オリヴィエの母という捏造設定があります。

キョウウと同じでオロチの因子も受け継いでしまっている。彼女の存在がスカリエッティの計画には重要な役割を持つ。

オリキャラの存在が影響して原作キャラの数名が改悪されます。

例) ゼストさん。ナカジマ夫妻。グリフィス君にシャーリー。特にゲンヤさんはオチで使われる事が多いです。ソウジ、レジアス、ゼストの「三親父」が主役で良いんじゃないだろうか……。

【KOFキャラ達】

チヨイ役や(チヨイ・ボンゲじゃないよ!)キョウ達の同期等で多数出演。

訓練校ではアテナとケンスウが登場機会が多い。

これからも沢山出てくると思われる。

【八神はやて】

この物語では一番不幸な目に会っています。前書において名前ネタで弄られます。

最近やつと本編に出ました。

若いが優秀な人物。

108部隊で研修が行われていた時期、キョウ達は訓練生だったので六課に配属されるまで面識がなかった。

八神ですが、炎は使いませんし、暴走もしません。もちろん、三段笑いも。

たまには月を見るたび思い出してあげてくださいwww

【独自設定】

・草薙流古武術

KOFの旧主人公が使っていた『炎』を用いる流派。

古代ベルカに一族の一人（瞬火）が次元漂流者として流れつき、聖王の下で闘ったと記録されている。

一般には知名度が無く、その血脈も一部ベルカ以外では知られておらず途絶えていると思われる。

しかし彼の子孫たちは門外不出の武術として一族の中で伝えていた。だが失伝しているものも多い。

本来魔力を炎に変換しているわけではないのでAMF下でも問題なく使えるはずなのだがソウジは混血によって血が薄いまっている事、キョウは遺伝子データの破損を補修するさいに魔導師の情報が入っている事により少し制限される。（二人とも魔導師なので魔法という恩恵があり、デメリットばかりではない）

なので炎の変換資質があればだれでも使えるというわけではない。ミッドチルダにおいては『草薙一族の血』がソウジ以外途絶えていて、ソウジとキョウ以外に使える人間はいない。

主な技

『奈落落とし（ならくおとし）』

『八拾八式』
はちじゅうはちしき

『百式・鬼焼き（おにやき）』

『百八式・闇払い（やみばらい）』

『式百拾式式・琴月陽』
しきひゃくしゅうしきしき ことしつき よう

『九百拾式・鶴摘み（ぬえつみ）』派生で『虎伏せ（とらふせ）』と『龍射り（りゅういり）』

『七拾五式』
ななひごしごしき

『百壹式・朧車』
ひゃくいちしき おぼろぐるま

『七百貳拾式・炎重』
ななひゃくにじゅうしき へんじゆう

『百拾四式・荒咬み（あらがみ）』派生で『百貳拾八式・九傷』
『百貳拾五式・七瀬』
『百貳拾七式・八鑄』
『外式・砌穿ち（みぎりづがち）』など。キョウウの得意技で攻撃の起点になる事が多い。

『七百七式・独楽屠り（こまほふり）』

『百拾五式・毒咬み（どくがみ）』派生で『四百壹式・罪詠み（つみよみ）』
『四百貳式・罰詠み（ばつよみ）』等がある。

『参百拾壹式・爪櫛』
さんひゃくしゅういちしき つまぐし
アギトが主に使用する。

奥義

『伍百貳拾四式・神塵』
ごひゃくにじゅうしししき かむくら

『千百貳拾七式・都牟刈』
せんひゃくにじゅうしちしき つむがり

『裏百八式・大蛇薙』
うらひゃくはちしき おおづちなき
この技はある意味『草薙流』の代名詞。

『裏百八式・八酒杯』
うらひゃくはちしき やさかずき
何故かアギトも使用だが別物。『大蛇薙』

とは対になる技であり本来は『八神流』の技だが、瞬火は草薙と八神が別れる前の人物であり使用可能。もちろんキョウとソウジもやるうと思えば使用可能。

『最終決戦奥義・無式』さいしゅうけつせんおくぎ・むしき

『百八拾弍式』ひゃくはちじゅうにしき

オロチの血を継ぐ者のみの技

『禁千弍百拾弍式・八稚女』きんせんにひゃくじゅうにしき・やちよめ

詳しい事は本編、またはWikiの『草薙流古武術』のページを参照ください。

オリジナルの草薙流

『外式・鳳凰錬気』げいしき・ほうおうれんき ソウジが編み出した技でキョウに伝授される。自身に炎を放ちそれを取りこむ『ブースト技』である。カートリッジ要らずだが、その分それ以上に体に負担が掛かる。カートリッジなど道具に頼るのではなく純粹な戦闘技術なので、キョウはそれほど使用に対して悪い感情を抱いていない。

モデルは『幽遊白書』の『邪王炎殺拳』です。使用するイメージは『仮面ライダーBlack』の『バイタルチャージ』に近いかもしれませんが。いや『DB』の『界王拳』の方が分かりやすいかな？『北斗の拳』だと『転龍呼法』でしょうか……。

『草薙流』はナカジマ姉妹に一部パクられている。特にスバルが顕著である。

・『フランメ・ファウスト』

そのまま『炎の拳』という意味のアームデバイス。

見た目は金色の日輪がデザインされた黒い指抜きグローブ。

ソウジが訓練生時代に使っていたもので型は古いが処理速度等が早い。

キョウは『草薙流』で戦うので、バインド系やバリア、シールド系、身体強化や飛行魔法等しか使わない。

よって、あまり魔法が登録されていない。

補助系統や遠距離用の魔法はアギトが多く習得しているという事も影響している。

とにかく頑丈。どんなに相手を殴っても、どんなに衝撃を受けても壊れない事を優先して作られている。

スタンバイモードがなくキョウは常に手に装着している。

・『フランメ・ファウスト？（ツヴァイ）』

A+ランクでのシグナムとの模擬戦でガタがきた『フランメ・ファウスト』に変わり、新しくキョウが手に入れたグローブ型アームデバイス。マリエル・アテンザとシャリオ・フィニーノの手により開発された。以前の物より強度や処理速度の面で大きく強化が施されている。見た目は新しく手の甲の部分に金色のラインが入った事以外に変化はない。材質はとある管理世界で見つけた新素材が使用されている。親友のシャリーの思いのこもった一品である。新しくブレスレット状の待機モードが追加された。人格とカートリッジは非搭載。シンプルにとことん機能を減らし、頑丈さを追求されている。デバイスマスターの二人からは弄りがいがないと言われる。

カートリッジが搭載されていないのは、強度が落ちる事と、キヨウがカートリッジを嫌っているため。

彼は、道具に頼って自分の持てる以上の力を無理やり引き出す事に、武道家としてはあまり良い感情を持っていない様である。その事は親しい者にも言っていない。

・『クロスミラージュ+』

魔改造デバイス。後輩のティアナの為にシャーリーが本来予定されていた物と別の装備を加えている。通常の形態からグリップを九十度動かし棒状に変形する。その状態でトリガーを引くと下部の銃口からワイヤーが射出される『ウィップモード』に変化する。ワイヤーはキヨウの『フランメ・ファウスト』と同じ素材で出来ており、魔力を通すことが可能。変形させずに魔力ワイヤーを出す事も出来る。

セカンドモードでは原作の『ダガーモード』ではなく『ガンブレイドモード』になる。

『ガンブレイドモード』の起動は『ウィップモード』とほぼ同じ手順を踏み、トリガーを引く前に銃身のエンブレムをタッチすることで行われる。その際、銃身の上部から新たなグリップが出現する。魔力刃は通常形態でのグリップを中心に発生される。二つの『クロスミラージュ+』を上下反対に合体させることで『ツインエッジモード』にもなる。

対話を目指すガ ダムの追加装備に近い。

・第四陸士訓練校

フアーン・コラードが校長を務めている。（今作では未登場）

その下には『KOF 怒りチーム』に似た教官たちが居る。

全寮制で食堂や訓練施設は男女共用。

一般局員を目指すクラスと通信科がある。

その中でも短期プログラム（実戦経験者用）や一年間の中期プログラム（普通科）、三年間の長期プログラム（特進科）に分かれている。

一年で卒業も可能だがキョウ達は三年間の長期型を専修した。

三年を選択した場合、入局の際に在学中取得した魔導師ランクや資格が加味される。

（キョウ達がいきなり二等空士なのもこのため。）

キョウ達の代は多くの生徒が魔導師ランク試験に合格しているので「当たり年」といわれている。

在学中は様々な研修も受ける事が出来る。

今作の主要キャラ達は皆、長期コースを選択しているので『原作』より入局時期が遅い。

・レリック

『オロチ』を封じる際にその力が結晶となった物。聖王や騎士たちの能力を高める研究により分割された。本来はアーデルハイド家が管理していた物だが、過去の戦乱でその所在が不明となった『ロス・トログリア』である。スカリエツティはこれから『オロチの力』を引き出し、手に入れようとしている。複数が『オロチの因子』を受け継ぐヴィヴィオに使用されたら『聖王』以上の存在、『オロチ』が

復活する恐れがある。

今の所こんな感じですが、
では、ごきげんよう。

加筆、修正しました。

筆者は「DANZAI」とか「SEKKYOU」はさせるつもりないんで悪しからず。

真が可愛すぎて生きるのがつらいwww

まっこまっこりーん

アン、せくすいー

フェロモン、バリバリですっ！

EP2 初戦闘(前書き)

キャラ崩壊が止まらない。

微修正と加筆しました。前半に張った伏線がちょっと弱い気がしたもので……。

なので、ある人たちが出しました。

E p 2 初戦闘

Side ゼスト

ミッドの郊外にある施設で違法な研究が行われている。地上本部に民間から情報提供がなされた。

その施設は表向き魔導師の先天性疾患の治療法の確立目的とする遺伝子研究施設だとされている。その施設には以前から黒い噂があった。「様々な人物のデータが集まるそこでは実は人造生命の研究が行われている」というものだ。

そこで発見された治療法は実際有用なものも有り、その発表で救われた人たちもいる。

しかし「火のないところには煙は立たない」と施設に関連するものを管理局は調査した結果、医療センター内部に賄賂を貰い情報を流していた人物が見つかった。その事が決め手となり、ミッドということでは隊が踏み込むこととなった。

我々はその施設への捜査に動いたのは、匿名のタレコミを受けてからすでに二週間が経っていた。その情報が得られた時にレジアスが「まさか、奴が。いったい何を？」と呟いていた。その言葉に引っかけりを覚えたが、我々がやることは決まっている。

「ゼスト隊、出動する！」

Side End

「時空管理局だ！全員動くな！この違法研究施設を摘発する！」

その声とともに施設内部に突入してきたゼスト隊の面々はあつという間に制圧を完了した。観察をしていた研究者達数名が逃げようと抵抗したがゼスト達にとっては問題ではなく、ゼストの槍や薄紫の髪の女性の拳により鎮圧され、その相棒と思われる女性や他の隊員達のバインドにより捕縛されていた。

だが、一人だけ物陰に隠れていた研究者の一人が難を逃れていた。彼は戦闘中何もできずに固まっていた4人の子供達から蒼い髪の短髪の少女を捕え言い放つ。

「止まれ！！こいつを離して欲しければ武器を捨て解放しろ！」

粗方の鎮圧を終えて4人を保護しようとした一瞬のすきを突いた出来事だった。護身用の銃の様なものを少女に向ける男にゼスト隊の一同は動きを制限されてしまう。

「可笑しな事を考えるなよ。お前達が魔法を発動させる素振りを少しでも見せたら、コイツを撃つ」

「助けてえ、おねえちゃん！」

人質にとられた少女は自分に良く似た少女に向けて声を上げる。

「妹をはなしてっ!」

その声に対して、姉と呼ばれた少女も涙を浮かべつつ叫ぶ。

Side 0

怖い。それが初めて戦闘を目撃した感想だった。でもそれ以上に怖いのは今日の前の光景だ。さっきまで一緒に遊んでいた子が捕まってる、あの銃で撃たれでもしたらもう会えなくなってしまつかもしれないということが怖かった。どうすればいいのだろう。僕には何の力もない。助けようにも僕にできる事はなにもない。その時、

「私の力を使つて……」

アギトが僕に囁く。

「今あいつの意識は局員達の方に向いている。だから私とユニゾンしてあの子を助けようよ。ユニゾンの研究を今までされていたのだから私とマスターならきつとうまくいくわ」

「でも、僕は怖い。もしうまくいかなかったら?」

躊躇する僕に悲しそうな目で彼女は言う。

「嘘吐き！強くなるって、私と一緒に強くなるって言ってくれたのはウソだったの？」

その言葉を聞いて僕はふっきれた。アギトは僕の言葉を信じてくれていたんだ。アギトの信頼を裏切りたくない。そう思って

「やろう！アギト！」力強く言った。

「ユニゾン イン！」

S i d e E n d

突然、光が上がった。その場にいた者たちの注目は人質を捕った男に向けられていたのだが、その光の方に目が向く。

光の中からは黒い髪が少し赤みがかり炎を体に纏わせた少年が飛び出してきた。そして……。

「ウオオオオオオ！喰らいやがれえええ！」

「うっっ！！」

少年は自分の身体をすっぱり覆ってしまう程、巨大なオレンジ色の炎を右手に纏わせる。少年は人質を盾にする男に向けて炎を放つ。オレンジ色をした炎が男の背中に叩きつけられた。

「ぎゃああー！」

人質にされていた少女は衝撃により、男の腕を離れ飛びあがった。

「すぐに確保しろ！」

ゼストの言葉に素早く反応した隊員達は男を取り押さえる。

少年の攻撃により投げ出された少女は薄紫の髪的女性にキャッチさ

れる。

「怖かったでしょう、もう大丈夫よ」

その言葉に安心したのか

「おねえちゃん、こわかったよお……」と涙を流し始める。

「うう、良かった。ホントに良かった。無事でいてくれて」

少女の姉は妹を抱く女性に近づいて言う。余程不安だったのか姉妹は揃って泣き始めた。

男を攻撃した少年の髪は黒く戻り、その隣には融合騎が浮かんでいた。炎も消えてしまっている。二人は少女達の方に駆け寄る。

「大丈夫？怪我はない？怖い思いをさせてごめんね」

少年の言葉に気がついた蒼い髪の少女は

「こわかったんだよ。でも、おにいちゃんたすけてくれてありがとう」

と涙を流しつつも笑顔で答えた。

「ゼロ君、危ないことしちゃダメ！ホントに心配したんだよ！でも良かった、無事で」

少女の姉に言われる。

「あなたの行動には助けられたわ。でもね、勢いで考えなく飛び出す事は褒められるものではないわ」

少女を抱いた女性から厳しい口調で言われた。

「そうね、でも君も無事でよかったわ。保護する対象に何かあったら、私達が来た意味が無くなるんだから」

後ろから、その女性の相棒と思われる女性が声をかける。

「助けたいと思って……。思わず飛び出しちゃったんです。ごめんなさい」

自分の行動で皆を心配をさせてしまったと知り情けなくなり、少年は申し訳なさそうに答えた。

二人の女性はそれまでの厳しい口調からやさしい口調で言う。

「あなたも無事で本当によかった。助けたいってその気持ちは誇っていいわ、でも危ない所に飛び出していくのはダメ！」

「あの時一歩間違ったら君も無事では済まなかったかもしれないんだから。でも、助かったわ」

「「ありがとう」」

二人にそう言われ少年は心が温かくなるのを感じた。

「隊長からは何かないんですか？」その言葉にゼストは少年に近づき答える。

「言うべき事は、クイントとメガーヌにほとんど取られてしまったのだがな。素人が危険な事をするな。子供には難しいかも知れんが、力を持つても使いこなさねばそれは自分の大切なものを奪うことにもなる。それとよく頑張った」

少年や少女達の頭を大きな手でガシガシとなでてそう言うと彼は部屋を後にしていった。

「もうあなたたちはこんな所に居る必要はないわ」

そう女性達に言われ、4人は管理局に保護されることになった。

子供達は疲れ果てたのか移動車の中で眠ってしまった。シートには少年を中心に両サイドに姉妹が、膝の上にはアギトという形で……。

少年たちが保護されてからゼストは数名の隊員達と研究施設に残り、そこに残る資料を集めていた。此処で行われた研究のデータ等で、他の場所で行われているかもしれない違法研究の手掛かりを探していたのだ。

施設の資料を接収する中でゼストは呟いた。

「少年があのおとき使った技は、アイツの……。だが、何故あれを？」

その場にいた隊員達にその言葉は届いていなかったのか、作業の手を止める物はなかった。ゼストもそのまま作業を続けていく。

【?????Side】

「どうやら、お前の流した情報で施設は地上部隊に接收されたみたいじゃない」

「ええ、優秀な事で。まあ、私に言わせればあのような無意味な研究を続けることに意味などあったのかと疑問に思いますよ」

「過去の人物を再現する事がか？」

「ええ、過去から学ぶことも大切ですが。それにあの研究に対する興味などもうありませんし。今進めている研究の方が優れていますよ、ご老人方」

「貴様もその過去の人物であろうに。のお、ドクター？」

薄暗い部屋の中、紫の髪の白衣の男が巨大なディスプレイを通して顔の見えない三人の老人と会話をしていた。

EP2 初戦闘（後書き）

ふう。

感想お待ちしております。

Ep3 新しい場所（前書き）

今回も原作レイプが酷いです。オリキャラ出ます。

初めて感想をいただいて、感激しました。

文章を少しでも面白く出来るよう頑張ります。

本来、主人公達は本局の特別保護施設に入れられるべきなのですが物語の都合上、地上本部の宿舎に預けられたという捏造設定にさせていただきます。

E p 3 新しい場所

違法研究施設から子供達が時空管理局に保護されて二週間が経った。その間、子供達は医療センターで精密検査を受けた後、地上本部の宿舎で生活を送っている。彼らはまだ幼いという事で、特別な監視体制を組まれることはなく、日中は宿舎で4人で遊んだり近くにある地上部隊の訓練施設への見学へ行ったりしていた。宿舎に住む局員達は彼らの生い立ちをゼスト隊に所属する入居者に教えられたので、共に暮らす事に反対する事はなかった。むしろマスケットに近い扱いになっていた。訓練施設ではゼスト隊の面々も当然訓練を行っており、彼らの訓練を見ることは子供たちの楽しみの一つとなっていた。ゼスト隊も面々も、自分達にあこがれの様な目を向ける子供達を可愛がった。

クイント・ナカジマは特に顕著だった。施設より手に入った情報や検査の結果から、戦闘機人の姉妹は彼女の遺伝子を使われた事が判明し憤りも覚えたが、それ以上に子供のいなかった彼女は姉妹を本当の娘のように可愛がっていた。子供好きの性格だったのか、少年やアギトの事も分け隔てなく可愛がった。メガーヌも似たようなもので……。

「こんにちは、よく来たわね。今日も見に来たの？」

「私達の訓練ってそんなに面白いのかしら？ここは危ないからあっちの方で見学しなさい。後でまた一緒にご飯を食べに行きましょう」
など二人して世話を焼くようになっていた。

戦闘機人の姉妹は……。

「うん。魔法とかストライクアーツとかすごくカッコイイもん！」

「おねえさんたち、やさしいからすきい」

と懐いていた。

「こんにちは。クイントさん、メガーヌさん。今日もよろしくお願
いします」

「ねえねえ、今日はどんなことするの？」

と少年と融合騎も二人の事を好意を持って接していた。

少年は検査の結果、古代ベルカの武道家らしき人物の遺伝子が使わ
れていると判明した。聖王協会に残る文献に、『聖王の下、戦場で
炎を纏い闘った者があつた』等と具体的な事は分からずじまいでは
あつたが……。

アギトの方も数年前にあつた、遺跡の盗掘事件に何か関連するので
はということしか分からなかった。古い時代の有力者の墓らしき所
から発見されたと当時の事件の資料が見つかっている。

その日ゼストは一人、ある人物に会いに行っていた。彼はちょうど非番だったので旧友の下へ向かっているのだ。その人物は彼やレジアスと同期で地上部隊ではゼストほどではないが名の知れた魔導師であった。ベルカ式の使い手で、魔法よりも彼の家系に伝わる格闘術を中心に使う一風変わった近接型の魔導師だった。その人物はすでに管理局を引退し、ミッドで暮らしていた。ゼストはその旧友の自宅に行き、そこにある第97管理世界の地球という星の武道場に似た建物に入って行った。其処には、ぼさぼさの灰色の髪をした170後半で細身ながら鍛えられた身体をした男が気だるそうに胡坐をかいていた。

「久しぶりだな。ソウジ。此処は相変わらず寂れているな。いい加減弟子の一人でも取ったらどうだ？」

ゼストは同上の入口に立ち、男へと声を掛ける。男はゼストの方を見ながら気だるそうに答えた。

「久しぶりに来てそんな事を言うか……。大きなお世話だ。ウチの流派は門外不出だと言っていたじゃろう？かみさんが死んで、跡継ぎもおらんのだから、わしの代で終わりだ」

そう返す男。

彼の妻は数年前、彼が局員だった時テロに巻き込まれ命を落としている。それが切っ掛けで彼は局員を辞め隠棲していたのだ。

「あの事件は俺にとっても忘れることは出来ん。あの悲劇を繰り返さないためにも俺やレジアスは働いているんだ。お前もいい加減腐ってないで、前を向いたらどうだ？」

「うるさい、わたしにはもう何も残ってはおらんのだ。放っておいてくれ！」

そう言うとソウジは立ち上がり、道場の入口へと向かう。どうやら庭に出ようとしているようだ。

ソウジの隣に立つゼストが彼を引きとめる。

「今日はお前に伝えたい事があったのだ」

「何じゃ？」

「一週間ほど前に人造魔導師の少年を保護したのだが、以前お前が見せてくれた奥義に似た技を使ったんだ。威力は大したことなかったがな……」

その言葉にソウジは足を止める。

「何じゃと？『大蛇薙』を？あの技を使えるのは今はワシしかおらん筈じゃが……」

ソウジはゼストの言葉に首をかしげる。

「その少年は古代ベルカの人間のクローンだ。お前の武術と何か関係があるんじゃないのか？」

ゼストの言葉を聞き、それまでソウジから感じられた無気力さが消えた。

「面白い、一度そいつに会わせてもらおうか！」

先ほどと違い覇気にあふれた声でゼストに返す。ソウジの目には光が灯っていた。

「ああ、必ず」

「その前にかみさんに拜んでいってくれ。今日は休みなのじゃろう？久しぶりに飲まんか？」

「ふふ。そうだな……」

笑顔で母屋にゼストを招待するソウジ。ゼストも彼の言葉に笑顔を浮かべる。その晩その屋敷からは男たちの笑い声があふれていた。

それから一か月。子供達は地上の宿舎で生活していた。

その日はナカジマ夫妻が戦闘機人の姉妹を引き取る日だった。子供のいなかったクイントは夫であるゲンヤに子供達の事を話していた。子供を欲しがっていたゲンヤは妻と血が繋がるといふ姉妹と快く受け入れることにした。ちょうど一戸建てをクラナガンに購入したので引越すのと同時に引き取ろうとその日は妻の職場に足を運んだのだ。妻との予定を揃える為にゲンヤは数日前から仕事を普段以上に行っていた。その甲斐もあり、二人揃ってこの場に居られるのである。

姉妹は大好きなクイントと親子になれる事を喜んでいた。管理局に保護されてからクイントにとっても懐いていたからだ。しかし姉妹は喜びを浮かべた後、暗い表情を浮かべる。

「もうゼロ君とは会えないのかな？」

「おにいちゃんとお別れなの？」

其れに対し少年と融合騎は気にしないでと言う。クイントがまた会わせてくれるだろうし。もし引き取られても関係は切れないと二人は思っていた。

一方、ナカジマ夫妻も都合が合えば必ず会わせようと考えていた。

クイントは初め、4人とも引き取ろうと考えていた。夫に其れを話

して反対されなかった。いや、むしろゲンヤは積極的だったといえよう。「うちで4人とも育てようじゃないか」と賛成してくれていたのである。

しかしそれは叶わなかった。隊長であるゼストが「少年の引き取り先は私に伝手がある。だから待つてくれないかと」首を縦に振らなかったのだ。ゼスト隊の面々とゲンヤは何度も4人を引き離すのは可哀想だと意見したがゼストの意見を変えることは出来なかった。

「絶対悪い事にはしない」と告げるゼストの意見を一同は認めざるを得なかったのである。

子供達が別れを悲しんでいるときにゼストがある人物とともにやってきた。その人物を見てナカジマ夫妻は驚きの声を上げる。

「先輩!？」

二人は時期は違うがソウジの下で研修を受けた事があった。だが、ソウジが管理局を去ってから暫らく疎遠となっていたのである。

「ああ、久しぶりだなお前ら。元気だったか？」

ソウジはナカジマ夫妻に笑顔で手を振りながら答える。夫妻はソウジの下に駆け寄り「元気だったか？」等の質問をし再会を喜び合う。

「ゴホンっ。再会を喜んでいる所すまんが、良いか？」

旧交を温め合う三人の間に、咳ばらいをしつつゼストが割り込む。彼は少年の手を引きソウジの傍へ来ていた。少年の頭の後ろにはアギトが張り付いている。初めて見る人物に対して警戒でもしているのだろうか？それによりソウジも本題を思い出したのか話を進める。

「おお、すまんすまん。それで、こいつがお前の言っていた子僧か？」

「ああ、そつだ」

「この人は、誰ですか？」

少年はゼストに尋ねる。

「こいつは俺の古い知り合いで……」

ゼストがそう言おうとするとソウジが遮る。

「わしは、ソウジ。ソウジ・アーデルハイドじゃ。坊主、炎の変換資質をもっとるのじゃろ？わしに見せてはくれんか？」

突然の事に戸惑う少年。だが言われたとおりに炎を体から発する。右手をゆっくりと前に伸ばし手のひらから10cmほどの赤紫色の炎を燃え上がらせる。

「ほづ、こいつは……」

ソウジはその炎を見て何か感じたのかそう呟く。

「のう坊主、うちの子にならんか？」

ソウジのその言葉に対し少し、キョウはアギトを見つめ少し考えた後に

「この子も、アギトも一緒に良いなら……」と答える。

「なっ、この子は……。……良いぞ、構わんよ」

ソウジはアギトの姿を見て少し驚き答える。

「私はアギト。烈火の精！」

アギトは元気よくソウジに名前を告げる。ゼストやクイントの知り合いという事や、先ほどのからのやり取りを見て警戒を解いたようである。その姿にソウジと少年は微笑みをうかべるのだった。

「それで坊主、おめえさんの名前は何ってんだ？」

ソウジは少年に対して名前を問う。少年は只一言だけ答える。

「僕の名前は『サンプル・ゼロ』です」

その言葉を聞いて、ソウジは悲しい目をしてナカジマ夫妻とゼスト達の方を向く。

「もしかして、こいつら？」

「ああ。あの子たちには名前が無い！」

ソウジの問いに対し、ゼストが答えた。彼の言葉からは命をもて遊ぶ違法研究者達に対する怒りの感情が込められているようだった。

ソウジと少年たちが対面を果たした後、暫らく大人達だけで話が行われた。

その間子供達は4人で喋っていた。話題は先ほどと同じようにもう会えないのかということだった。戦闘機人の姉妹はやはり二人と離れ離れになる事が不安なようである。

「別に、一生会えないってわけじゃないから心配しなくていいよ」

少年は姉妹を安心させようと優しく言葉を放つ。

「知ってる人同士みたいだからまた会えそうよね」

少年の言葉に不安が薄れたのか姉の方がそう答える。

「おにいちゃんとアギトちゃんとバイバイしなくてすむの?」

妹に対し、妹も首を傾けながら問う。

「少しの間、離れるだけかもしれないけど我慢しよ?」

そう言われ、妹は不満そうに「うん」と告げる。彼女の中ではまだ納得できていないようだ。

「少し会えなくても私達は友達!!!だからお互いが思っていれば、いつか必ず会えるよ!!!」

アギトの声に三人は笑顔を浮かべる。

一方でゼスト達は、話し合いの中で「我々で名前を付けてあげるの
はどうか？」と意見が出る。

その言葉に、ナカジマ夫妻はすでに考えてあり、引き取る際に付け
てあげるつもりだったと答えた。

「そんなら坊主だけか……」

ソウジの言葉を聞いて一同は彼へと意識を向ける。

「かみさんとの子供に付けるつもりのがあったんだが……」

その言葉に面々は暗い表情を浮かべる。ゼストはもちろん、ナカジ
マ夫妻もソウジが管理局を止めた経緯を知っているようである。

「本当に良いのか？」

ゼストが代表してソウジに尋ねる。彼がこの中で一番ソウジと付き
合いが長いのだ。

「これからあの坊主はワシの息子になるんだから構わん」

ソウジは笑顔で答えた。

それからナカジマ夫妻が引越すという話になり、その住所を聞い
てソウジは悪戯を思いついた子供の様な笑顔を浮かべた。夫妻は子
供達を会わせる際に役立つようソウジの住所も聞いたのだが、後
のお楽しみと答え、決して言おうとはしなかった。其れを見たゼスト
隊の面々は困ったものを見るような視線を向けていた。

「4人ともこっちに来てくれ！」

ゼストの言葉でかたまってお喋りをしていた子供達は彼らの方へと集まる。そこで三人は新しい名を得ることになる。

「あなた達二人に、名前を考えておいたの」

そのクイントの言葉に姉妹の姉は嬉しそうな笑みを浮かべる。妹の方はよく分からず、キョトンとしていた。

「お姉ちゃんの方は、『ギンガ』、そしてあなたは『スバル』よ」

その言葉に意味が分かったのかスバルと名付けられた少女も笑みを浮かべた。

ギンガとスバルを羨ましそうに見ていた少年にソウジが声を掛ける。

「坊主、お前さんの名前を付けさせてもらっぞ！」

その言葉に少年は喜びの表情を浮かべた。

「『キヨウ・アーデルハイド』、今からこれがおめえの名だ。ワシの事は親父とでも呼べ」

「僕の名は『キヨウ』ですか。うれしいです、ありがとうございます。親父さん！！」

それから、子供達は別れる前にお互い自己紹介をする。

「僕はキヨウ・アーデルハイド。改めてよろしくね」

「私はギンガ・ナカジマ。キヨウ君もアギトちゃんもスバルも、よろしく願います」

「あたしは、スバル・ナカジマです。キヨウにいちゃんもギンねえちゃんもアギトちゃんもよろしくね」

「私はアギト。アギト・アーデルハイド。これが私の新しい名前！」
四人は笑顔に包まれていた。ギンガも以前の自己紹介と違い、心からの笑顔を浮かべていた。嫌っていた名前から解放されて嬉しいのだろう。

ギンガの顔を見てキョウはまた顔を真っ赤に染めたのだが、その場の誰にも気づかれなかった。

その後、四人はそれまでお世話になったゼスト隊の隊員を始めとする局員達に挨拶をし、それぞれの家族のもとに移動していった。

局員達からはまた遊びにおいでなど温かい声が返された。

それぞれ車で別れた後キョウとアギトはギンガとスバルの姿が見えなくなるまで手を振っていた。それはギンガ達も同じだった。

40分程してソウジ達は家に着いた。ソウジの車は一人暮らしという事もあり軽自動車であった。三人が到着した屋敷は日本の平屋造りの武家屋敷に似たものだった。門と塀に囲まれ、門を一步通ると広い庭があった。池もありその傍には大きな木が生えている。庭の

奥には一階建ての建物が見える。屋根は紺色の焼き物が貼られているようで、壁は木と白い漆喰で作られていた。

そしてその建物からは渡り廊下の様なものが伸びており、その先には少し小さな建物が建てられていた。入り口は二つあるようで、母屋に繋がる物と、庭から入れるようになっていた作りだった。

「此処が今日から暮らす家だ、ささ、入れ入れ」

ソウジは荷物を母屋の玄関の上り口に運びながら二人に声を掛ける。

「お邪魔します」

キヨウとアギトは遠慮がちに声を揃える。そう言うキヨウとアギトにソウジは苦笑いを浮かべる。そしてこう言葉を続けた。

「そうじゃねえだろ？ここはお前達の家なんだから、『ただいま』だ」

「『ただいま！』」

ソウジの言葉を聞き二人は顔を向かわせ合い頷くと、彼の言う通りに大きな声を上げた。それを聞き、ソウジも優しげにほほ笑む。

これからこの家で三人の新しい生活が始まるのだった。

それから15分ほど経ち、ナカジマ一家も新居へと到着していた。彼らの車は一般的なセダンタイプだった。後部座席にギンガとスバルの姉妹は乗り込んでいた。

其処は庭付き一戸建てでありクラナガンでは平均的な大きさの家だった。場所も閑静な住宅街であり、治安もよさそうに暮らしていくにはかなり良い場所だった。

「此処が新しい我が家だ！」

ゲンヤが車の運転席から降り、右手で家を指さし左手を腰に当てながら自慢げに発言する。ナカジマ夫妻は今まで管理局の局員用の団地に住んでいたのだが、ゲンヤがこの物件を購入したのだ。やはり男は『一国一城の主』という物に憧れるのだろう。そういう部分はミッドの人間も我々地球人も変わらないようだ。

「やっぱ、良い家ね。あなた、良い買い物したじゃない？」

助手席から降りたクイントはゲンヤの左手に抱きつき、満面の笑みを浮かべてそう言い放つ。

「此処が新しいおうちかあ。楽しみだね、スバル？」

スバルに優しく微笑みつつギンガは口を開く。

一方でスバルはワクワクが抑えられないようので「早く中に入ろうよ！」「ギンガの手を引き急かす。」

「スバル、慌てないの。あれ？なんか、隣の家は変わった形だね」

そうした中で、ギンガは隣の家を見ながらそう呟く。

「あれは、日本家屋って言って、うちの御先祖様が住んでた地球って星の建物らしいぞ。次元漂流者の建築家が設計したらしい。後で引越しのあいさつをしないといけねえな」

ゲンヤがギンガの質問に対して答える。彼は姉妹の荷物を両手に抱えていた。

「中に入りましようか、もうしばらくしたら引越し屋さんが荷物を持ってくるから」

クイントの言葉で一家は家に入って行った。

「荷物が届くまでまだ時間があるから、ご近所に挨拶しに行こうかしら？」

一家が中に入り寛いでいるとクイントはそう言った。一同はまだ家具の置かれていないリビングで足を延ばしていた。ギンガとスバルは、ゲンヤに対してもすぐに懐いたようで彼と遊んでいる。ギンガはゲンヤの胡坐を組んだ足に座り、彼と言葉を交わしていた。スバルはゲンヤの背中にもたれかかり、首に手を伸ばしてぶら下がる様な姿勢を取っていた。

ゲンヤが少し苦しそうにしているのをクイントは可笑しそうに笑いつつ眺めていたのだ。

「あたしもいきたい！ねえ、ギンねえちゃんもいこう！」

スバルが元気よく声を出す。その際、腕に力が入ったのかゲンヤが「グエツ」と言葉を発する。それを見たクイントはスバルにいい加減腕を離すように言い、彼女を抱き上げる。

「うん、そうだね。母さん、私達も付いてっていい？」

ギンガもそれに続く。

「はあ。俺が留守番しとくから、お前達は行って来い」

ゲンヤは首を擦りつつそう答える。

彼の許可が出たのでクイントと娘達は引越しのあいさつに向かうのだった。

一方のアーデルハイド家では、キョウ達三人は居間の様な部屋で寛いでいた。部屋の中にはちゃぶ台が置かれ、人数分のお茶が用意されている。部屋には木製のたんすと部屋には余り合わない新し目のテレビが置かれていた。

「親父さん、どうしたんですか？さっきからそんなニヤニヤして」

「いやあ、何でもねえぞ。（そろそろ着くころじゃないか？）それより、そんな他人行儀な喋り方はやめろ。ワシらは親子なんだからそれに親父で良いって言ったじゃねえか」

「はい。うっうん、分かった。親父」

「まあ、追々慣れていけばいいさ。ってこら、アギト！テーブルの

上で寝るな！よだれ垂らすな！」

「むにゃむにゃ……。ZZZ……」

こちらではそんなやり取りが繰り返り広げられていた。

「「ごめんください。「「

そんな時、玄関の方からインターホンの鳴る音が届く。そして、それに続き女性の親子連れの声が聞こえてきた。

「着いたようじゃな……。よし、キヨウ。お客さんじゃ、お前が見て来い」

「うん、親父」

キヨウは立ち上がると駆け足で玄関へ向かう。

「はい、どなたですか？つて、え？」

ガラス製の扉をあけるとキヨウは素っ頓狂な声を上げる。

「「「すいませ、ええええええええ？「「

それはアーデルハイド家を訪ねた親子も同様だった。

キヨウが扉を開けた先、そこにはよく知った顔が並んでいた。

EP3 新しい場所（後書き）

やっと名前が出せた。これからキヨウ君をよろしく！

彼らの家ですがFateの衛宮邸をちょっと小さくしたとイメージしてください。

オリキャラのこともよろしくお願いします。

彼の名の由来は某格ゲーのアドベンチャーに出てきた人物の名前で
す。

主人公の元ネタの一つである「燃え太郎さん」の従兄から頂きました。
モデルは普通に親父さんです。あの飄々とした雰囲気が出せれば
良いのですが。

Ep4 初日(前書き)

キョウ「けりをつけようぜ、八神!!!」

はやて「キサマの死をもってな!!!」(なんでやねん!)

Ep4 初日

ちやぶ台を囲み五人の人間が座っている。

ソウジは苦笑いを浮かべ、スバルはその部屋が珍しいのか目を輝かせキョロキョロしている。

他の三人は呆れた様な目でソウジを見ていた。

「全然住所を教えてくださいなかつたのはこういうことだったんですね。先輩のうちがお隣なら教えてくださいなれば良かったじゃないですか？」

「それだと面白くはないじゃないか。それにしても可笑しかったぞ、玄関でフリーズするなんて……」

「忘れてください!!」

クイントがソウジへ向けて鋭い右ストレートを放つがそれは空を切る。

「新人の頃のお前にインファイトのテクを教えたのはワシじゃろ？ まだまだ修行がたらんわ」

「んっもう、いい歳なんだからすこしは落ち着きをもったらどうなんでしょうか？」

「お前もすぐ手が出る癖を早く治さんと。ゲンヤも苦勞しているんだろな……」

「大きなお世話です!!」

そんな大人達のやり取りとは無関係に、キヨウ達は再会を喜び合う。

「ギンガちゃん達はお隣さんなんだ。知らなかった!!」

「さっき引越してきたばかりだし、私もびっくりだよ!!」

キヨウとギンガは互いに驚きを伝えあう。

「やた、またお兄ちゃんたちとあそべるんだ」

「これらまた遊べるね。嬉しい」

一方でスバルとアギトの妹組は純粋に再会を喜んでいた。四人ともとても嬉しそうな様子であった。

「」「」「これから、よろしくね!!!!」「」「」

少しして、引越しの業者が来たようで、クイントは自宅へ戻ってい

った。ギンガ達はそのままアーデルハイド家に片付けが終わるまで預けられることとなった。

クイントは先輩であるソウジのことを信頼しているのである。同時に、再会を喜ぶ子供たちを引き離したくはないと考えていたのだ。少しでも一緒に過ごさせてやりたいという彼女の思いやりからの行動だった。

「おじちゃん、おうちたんけんしていい？」

スバルの申し出をソウジは快諾し、子供達は珍しいその日本家屋の中を見て廻った。

アーデルハイドの屋敷は畳敷きの部屋や道場などミッドチルダではあまり目にしないものばかりであり、子供達はとてもはしゃいでいた。

キョウ達四人は研究所以外では地上部隊の宿舎など限られた場所しか行った事が無く、初めて目にする物ばかりであったからだ。

「ねえ、キョウ。この写真の女の人って誰だろう？」

母屋に戻り、新しく入った部屋の中で仏壇の様なものをアギトが見る。其処には黒い髪をショートに切りそろえた二十代後半の女性の写真があった。写真の女性は優しそうな笑みを浮かべている。アギトは隣に立つキョウへと質問をする。

「綺麗な人だね……」

「それに優しそう。この人って誰だろうね？」

キョウとギンガがアギトの問いに答える。スバルも含め、一同は仏壇の前まで移動していた。

その時、四人の後ろから声が聞こえる。

「その人はワシのかみさんだよ」

その声はソウジの物だった。彼は部屋の入口に立ち、花を手に持って更に言葉を続けた。

「その人はもう二度と会えない場所に居てしまったんじゃ……。ワシの奥さんじゃよ。お前さん達がお参りしてくれると、アイツもきつと喜ぶじゃろつて……」

そう言うとソウジは仏壇の前に移動して写真の隣に花を生ける。古くなった花を入れ替えたのだ。ソウジが持ってきたのは淡い桃色の花であった。

「この花はかみさんが好きで……。若い頃はよくゼスト達に手伝わせてプレゼントの為に摘んでいたよ」

それからソウジは瞼を閉じ、頭を少し俯けながら両手を胸の前に組み、お祈りを始める。

子供たちもソウジに倣うようにお祈りをした。

静かな時間が流れていった。

「さて、家の中は粗方探検し終えたじゃろ？子供は元気に外で遊んで来い」

「……は〜い!」「……」

お祈りを終えるとソウジがキョウ達へと声を掛ける。それに対して、四人は元気よく声を揃えた。

その後、子供達は庭で縄跳びをしたり鬼ごっこをしたりと楽しく過ごしていった。ソウジもそんな子供たちの姿を縁側から眺めていた。

「ワシも親になったか……。キョウとアギトをしつかりと育てていなくてはな……。答えは得た。これから頑張つてゆくよ、ユキ……」

ソウジは亡き妻へ思いを込めて一言呟くのだった。

夜になり、今度はゲンヤがギンガ達を迎えに来た。キョウ達一家もそのまま呼ばれし、晩御飯をごちそうになった。

「先輩も人が悪い。お隣なら教えてくれれば良かったのに。昔っからそういふ悪戯好きでしたよね?」

「すまん、すまん。せつかくだから黙っていた方が面白くなると思つたもんでな」

ソウジとゲンヤがリビングで晩酌をしている。二人の前には数本の缶と焼き魚が並んでいた。つまみはクイントのお手製の様である。

「……おいしい!」「……」

子供達はクイントの料理に舌鼓をうっていた。思わず声を揃えてしまっていた。

「まだまだ沢山あるからおなかいっぱい食べてちょうだい」

子供達の様子を見て、可愛らしいと思ったのか笑顔でクイントは答える。普通ではありえない量の料理が並べられ、ギンガとスバルはそれをすごい勢いで食べていた。

保護された宿舎でもその光景を目にしていたキョウとアギトは苦笑いしつつも一緒になって食事を楽しんだ。

「そっちも美味そうだな、どれワシにも」

そう言って近づいてきたソウジに対してスバルが声を掛ける。

「おじちゃん、おさけくさい」

「うっ！ー臭い……。なあ、ゲンヤ、ワシってお酒臭いってスバルちゃんが……」

「こおら、スバル。先輩に臭いって言うちやダメだろ？」

「おとうさんも、おさけくさいよ。やあ〜」

そう言ってスバルはクイントの下に避難し、台所から料理を運んでいた彼女の足に抱きつく。

「あらあら。うふふふ」

クイントは優しく笑う。その間、二人の親父はスバルの言葉にシヨ

ツクを受けたのか頂垂れていた。そんなソウジとゲンヤを見て、その場にいる一同は大きな笑いに包まれるのだった。

「キヨウおにいちちゃん、アギちゃんも一緒にお風呂入ろう？良いよね、ギンねえちゃん？」

食事の後、スバルが元気よく良い放つ。

「うん。良いね、スバル。キヨウ君達も一緒に入ろうよ？」

「僕も？ うん、良いよ！！」

「やった、みんなでお風呂だ！！楽しみ」

キヨウもアギトも笑顔でその提案を受け入れる。その時、酔っぱらったソウジがキヨウにニヤニヤしながら声を掛ける。

「キヨウ、今のうちに入つとかなないと、大きくなったら一緒に入れなくなるからな？」

「ギンガ、スバル！！ 明日は父さんと一緒に入ろう！！」

ゲンヤもソウジに便乗して娘たちに言った。ギンガとスバルは笑顔で「良いよ」と返す。それを聞きゲンヤは満面の笑みを浮かべるが、その後すぐに不安そうな表情を浮かべる。

「そのうち、二人はお父さんとは入らないとか言いたり、俺の風呂の残り湯を捨てたりするようになったりするんじゃないだろうか……。洗濯物も一緒に洗わないでとか……。なあ、クイント。どう

しよじ……」

そう言うとゲンヤは隣に座り食事を取っているクイントへ継りつく。

「あなた……。そんな先の事を今から心配してどうするのよ？はあ……」

クイントは若干呆れ交じりに自分の額に手を添えつつ、ゲンヤに答えるのだった。その間、ソウジは二人の様子を見て大笑いしていた。子供達は何の事が、よく分かっているようではないよ。きょんととしていた。

「キョウくとアギトちゃんの着替えは私が取ってきますから。先輩、鍵を貸して下さい」

ゲンヤを振りほどき、立ち上がってクイントがソウジに言う。

「おお、すまんな。ホレ！！着替えは居間に置いてある荷物に入っているからの。おら、ゲンヤ。いつまでも凹んでないで、飲め飲め」

ソウジはクイントに家のカギを投げ渡し、向かいの席で落ち込んでいるゲンヤに酒を飲ませる。

子供達はその後、一緒にお風呂に入った。まだ小さいので恥らい等は無い。

その間、クイントはソウジの家から二人の着替えを取ってくる。そしてギンガとスバルの着替えも用意して、脱衣所の籠に四人分を置くのだった。

それから食堂へと戻りゲンヤ達に加わり晩酌を楽しんだ。一同は楽しいひと時を過ごした。

10時を回ったころ、スバルが眠たそうにし始めたので、その日はそこで解散になった。

アーデルハイド家はその日はまだキヨウ達の部屋が用意されていなかったもので、三人一緒にソウジの部屋で寝ることとなった。キヨウとアギトは一つの布団で、その隣にはソウジが自分の布団に入り、キヨウを中心に川の字になって床についている。

「ねえ、親父？」

キヨウが隣にいるソウジに声を掛ける。

「うん？どうした？」

「僕、こんなに遅くまでみんなと過ごしたの初めてだった。こんな日が続くといいな」

「アギトもすつごく楽しかった！」

「ああ、続きさ。これからはこんな日々が。こういうのが当たり前の毎日なんだ。これからよろしく頼むぞ、息子よ、娘よ」

「うん」「」

そう答え、キヨウ達は眠りについていった。

じじじで、一日目の夜は終わった。

EP4 初日（後書き）

短いなあ。

アーデルハイドってルガールの息子の名から取りました。ベルカはドイツ語っぽいってところから、ドイツ風の名前でバーンスタインで考えてたんですがそのままだと捻りが無かったので、倅から取るうと。

EP5 お買い物もの 前編(前書き)

キョウ「炎がお前を呼んでるぜ！」

はやて「なら燃え尽きろ、潔くな！」(もう嫌や…。)

やっと日常パートが書けた。

EP5 お買い物 前編

一夜明け、アーデルハイド家の三人は朝食をとっていた。日本のお茶の間風の部屋の中で三人はトーストに目玉焼き、サラダと部屋の雰囲気のマツチしないメニューを食べる。ミッドでは日本食というものがまだメジャーではなかったので材料の問題があったからだ。

「キョウにアギトや。食事が済んだら道場に来てくれ。お前さんらに話したい事がある」

「此処じゃ、ダメなの？」

「ああ、あっちの方が都合がいい」

「私はキョウと一緒になら何でもいいよ！」

その後三人は道場に居た。上座にソウジ、下座にはキョウとアギトが並んで座っている。

「キヨウ、お前さんに昨日炎を見せてもらったじゃろ。うちには炎を用いた格闘術がある。古代ベルカ時代から『草薙流古武術』といつて代々細々と受け継がれていたんだが、一族も今やワシしかおらん」

その言葉にアギトが反応した。首をかしげつつ彼女は口を開く。

「私は目覚める前の記憶がほとんどないんだけど『草薙』って言葉に聞きおぼえがあるよ……。なんでだろ？」

「もしかすると、アギト、お前さんはワシの御先祖様の誰かと関わりがあつたんじゃないかなろうか？『烈火の剣精』という言葉はワシも聞いた事がある」

ソウジはそうアギトの言葉に対して答えた。

「それでだ、お前にこの『草薙流』の跡継ぎになって欲しいんじゃない」

「ええ？僕が？僕は何にも出来ないよ。ホントに僕で良いの？」

キヨウは自信がなさそうな表情を見せる。

「お前さんじゃないと駄目なんじゃ。ワシ以外に『草薙流』を使えそつなのはお前さんしかおらん。ちよつとワシの炎を見てくれ」

そう言うとソウジは立ち上がり右手から紅い炎を出す。それはキヨウの炎と違い強く、荒々しく燃え上がっていた。

「魔力の変換資質もあるんじゃないが、この炎には魔力以外の力も籠つておる。『草薙流』の技を収める為にはその力が必要なんじゃ。お前さんの炎もワシのと一緒に魔力以外の力が混ざっているようじゃから、お前さんじゃないと駄目なんじゃよ。それにゼストから聞いたぞ？研究所で力を使ったらしいな。その力を持っていても、制御できねば宝の持ち腐れじゃ」

そう言うとソウジは拳を握り、炎を消してキョウの目をじっと見る。

「頼まれてくれんじやろうか？」

キョウはソウジの言葉を聞き考えていた。あの時の自分は人質にとられたスバルを助けるために無我夢中で突っ込んでいった。アギトが実験で苦しんでいた時も助けてあげたいと思った。しかし、自分は弱い。そのせいで目の前で苦しむ人がいる。大切な人を守るような力が欲しい。

「僕も強くなれる？誰かを助けてあげられるような力を手に出来るの？」

キョウはソウジの目を見ながら問う。キョウの目には強い光があった。

「ああ、お前さんがその気持ち忘れなかつたらきつと……」

ソウジはキョウの問いに対し、深く頷くと言葉を返す。

「私も良いと思う。キョウ、やるべきだよ！！一緒に強くなるうつ

て約束したでしょ？」

アギトもキヨウを後押しする。その言葉に勇気づけられキヨウは力強く答えた。

「やります！！『草薙流』を僕に教えてください！！」

キヨウの言葉を聞き、ソウジとアギトは笑みを浮かべるのであった。

その後ソウジにより説明を受けたのだが、いまはまだ身体も出来ていないので『草薙流』の修行はキヨウがクラナガンの小学校に入ってから始めるということだった。

それまでは二年間、朝にランニングをし、それに加えて軽い筋力トレーニングや、初歩的な身体の使い方を指導することだった。よって、キヨウは幼稚園には通わない事となるのだが、彼はそれで構わないとソウジに伝えた。

三人が道場で話をしていた時、庭の方から女の子の声が聞こえてきた。

「ごめんください！！」

三人が表に向かうとそこにはナカジマ姉妹が立っていた。

「キヨウくん、アギトちゃん遊ぼ？」

子供達は午前中アーデルハイド家で鬼ごっこやかくれんぼ、おままごとをして遊んだ。

おままごとはクイントが遊び方をギンガ達に教えていたようだ。スバルとアギトが子供役でキョウとギンガが夫婦役をしていた。

「あなた、ご飯にする？お風呂にする？それともわ・た・し？」

「うっ、えええ？僕はご飯にするよ？」

「ダメだよ、キョウおにいちゃん。そこはギンねえちゃんって言わないと駄目だって、お母さんが言っていたよ？ねえ、あぎちゃん？」

「だよな、スバル！！」

女の子達は楽しそうに遊んだが、キョウは照れてしまいうまくお父さん役が出来ていなかった。

それからしばらく経ち、遊び終わると四人は縁側に移動した。

「お昼からお母さんと買い物に行くんだ!!」

「たのしみだねえ、ギンねえちゃん!!」

ナカジマ姉妹が楽しそうに言ったのを聞き、子供達をお茶を飲みながら眺めていたソウジは反応した。

「キョウ、それにアギトちゃんや。お前さんたちも必要なもんを買わなくちゃなんねえな。ワシからクイントに頼んでみるからお前らも連れて行ってもらったらどうだ?」

「ホント?良いの?」

アギトは期待をもった目でソウジを見る。

「そんな、悪いよ。其れにお金は?」

キョウはまだ遠慮してしまっているのか、ソウジに尋ねる。

「子供が変な心配すんじゃないねえ、金もワシが渡すしアイツならきつと良いって言うはずだ!!」

ソウジは力強く笑顔でそう言い放つ。その後、ソウジと子供達はナカジマ邸に向かって移動をする。

ナカジマ邸に着くと、すぐにクイントがOKを出すのだった。その日は、子供達はソウジの家でお昼を食べることとなった。

ソウジは再び子供達と共に自宅へと戻る。塀で仕切られたすぐ隣なので、戻るまで一分もかからない距離なのである。

一緒に行けると聞いて子供達はとても喜んだ。特にアギトとスバルは飛び跳ねて喜んでいた。

そして食事が終わり一時過ぎになってクイントが迎えに来た。残念ながらその日、ゲンヤは仕事があるそうで不在だった。

「すまねえな、いきなり頼んじまって」

ソウジがクイントへ頭を下げる。クイントは車を出しており、アーデルハイド家の門の前に停めていた。

「良いですよ、あの子たちも喜んでいるみたいです。それに、これからもお互いお世話になるでしょう？キョウ君、アギトちゃん今日はよろしくね」

クイントはソウジに笑顔でその言葉を返すと、キョウとアギトに向かい声を掛ける。

「すみません、お世話になります」

「クイントさん、ありがとう」

キョウとアギトも笑顔でクイントに礼をする。

「キヨウ君達とお買い物ものかあ、楽しみだねスバル」

「わあ〜い、みんなでおかいものだあ」

ギンガとスバルも一緒に買い物が出来ると、とても嬉しそうな様子ではしゃいでいた。

「そう言ってくれると助かる。それで、これがうちの子の分だ。任せるぞい」

ソウジはクイントへキヨウ達の分のお金を渡す。

「はい、任せました。みんな、車に乗ってね」

クイントはそれを受け取ると、ハンドバックの中に収納する。そして子供たちに車に乗る様に指示を出す。子供達はクイントに従い後部座席へと乗り込んでいく。

席はキヨウを中心に、ナカジマ姉妹が彼を挟むよう両サイドに座った。アギトはキヨウの膝の上に腰掛け、シートベルトを掴む。

「それでは行ってきますね」

「「「「「いってきますー!」「」「」

クイントに続き、子供達も声を揃える。

「うむ。みんな、楽しんでくるんじゃぞー!」

ソウジは笑顔で手を振り、彼女たちを送り出すのだった。

EP5 お買ひもの 前編(後書き)

今日中にもう一話を。

めーぞせー後篇今日中にー 頑張るよ イエイ

Ep6 お買い物もの 後編(前書き)

妄想の垂れ流しWWW

買い物先で事件?ないない。筆者は平穩好きです。

感想募集しています!

一時間ほどしてクイント達一行はクラナガンのショッピングモールに到着した。

其処はかなり大きい建物であり、我々に分かりやすく例えるならば、東京ドーム三つ分に近い広さがあった。四階建ての建物で、駐車場も広く、数えるのが億劫になる程の車が止められていた。駐車場の入口には大きな看板が見える。

ショッピングモールの隣には映画館やレストランも併設されていた。

「大きい!!!ここがショッピングモールかあ」

キヨウは車から降りると、初めて見るショッピングモールに驚嘆の声を上げる。

「うわあ、おおきいねえ。それに人も車も沢山……」

キヨウの隣では、ギンガも同様にショッピングモールの大きさに驚いていた。

「楽しみだね。私お洋服を早く見てみたいな。かわいいのはあるかな？」

スバルは早く中に行きたくてたまらない様子だった。彼女はギンガと違い、既に洋服等に興味が出ているようだ。

「キヨウ、人が沢山!!!何かあるんだろ?ねえ、早く行こうよ!」

アギトも大はしゃぎだった。キヨウの周りをぐるぐると飛び回って

いる。

「こおら、はしゃぐのは良いけど、勝手に遠くに行ったりしてはダメよ。スバルは小さいから私と手をつなぎましょう」

クイントは車にカギを掛け、スバルに手を差し出す。スバルはクイントの右手を勢い良く掴む。

「あゝスバルだけずるい、母さん！！私も！！」

スバルの行動を見てギンガも対抗意識が湧いたのか、そう声を放ち、クイントの左手を掴む。

「あらあら、お姉ちゃんは甘えん坊さんね？」

クイントはギンガに優しく微笑む。

「ねえ、キヨウ君も手を繋ごう？」

アギトと共に立っていたキヨウにギンガは提案する。

「うっ、うん。ありがとう、ギンガちゃん」

キヨウは照れて、少し頬を赤く染めていた。クイントは子供達の様子を笑顔で見つめる。それは母性愛の満ちた表情であった。

クイントの両側にギンガとスバルが手を繋ぎ、少しもじもじしつつも頭にアギトを乗せ、キヨウはギンガと手を繋いでシヨツピングモールの中に入っていった。

周りから見れば、とても仲の良い家族に見える光景だった。

「まずは雑貨からね」

初めにクイントの言葉で雑貨選びが始まった。

雑貨コーナーは一階にある様でクイント達が居る場所からは一番近かったのである。

「ねえ、ギンガ？これとかどう？」

「あゝ！！可愛い！！私、それにするね！！」

ギンガはクイントに進められて可愛らしいキャラクターがデザインされたものなどを選んでいった。

「スバルは、これとか好きなんじゃない？」

「うんつとね、私はこっちが良いかな？母さんが選んだのも好きだけど」

「あら？それもギンガとお揃いじゃない？本当にお姉ちゃんっ子ね」

彼女自身クイントが選ぶものを気に入っていた。だが、多くの場合スバルも姉とお揃いがいいのがギンガの色違いのものばかり選んでいた。そんなスバルを見てクイントは微笑ましく思うのだった。

「クイントさん、私のこれってどうかな？」

「アギトちゃん、センス良いわねえ！！とってもかわいいわよ！！」

アギトも何だかんだで買い物を楽しんでいた。サイズが合わないの
で自分は使わないのだが、やはり女の子だから買い物は好きなのだ
ろう。

「ほら？キョウ君はこんなものどう？」

「いや……。僕はこっちで……」

一方のキョウもクイントから勧められてはいたが、女の子向けに近
いデザインの可愛らしいものばかり勧められるので、途中から自分
で選びたいと言い、アギトを頭に載せながら自分で選んでいた。
彼が選ぶものは、地球の無用品にありそうなシンプルな雑貨が多
かった。

「次はお洋服が良い！」

ギンガの発言で次は洋服選びが始まった。彼女も決して服に興味
が無い訳ではないのだ。

初めはナカジマ姉妹のものからだだったが、クイントが大はしゃぎで
二人の服を選んでいった。それまで、三人は地上から支給された地味
な子供服を着ていた。アギトは何処から調達したのか、黒いワンピ
ースを纏っている。

ちなみに現在の服装だがクイントは白のサマーセーターにデニムの
スカートと黒のブーツ。

ギンガは白いブラウスの上に紺のカーディガンとブルーのスカート、
赤のスニーカー。

スバルはラグランの上に袖なしの黄色いパーカーとデニムのミニスカート、黒いスニーカー。(『アイマス』の『とかち』の私服をイメージしてください)
キョウは白いロンTに黒いパーカー、青のデニムと白いスニーカーだった。

「ねえ、母さん。これってどうかな？」

試着室から少し恥ずかしそうにギンガが出てくる。

「あああ。すっごく似合っているわよ、ギンガ」

クイントは目をキラキラさせて賞賛を送る。その時のギンガの服装は少しボーイッシュな水色のパーカーとデニムのホットパンツに、太ももまである白と黒のストライプのソックスだった。爽やかで健康的な魅力を放つコーデイナートだ。

「じゃじゃ〜ん!! どう? 母さん?」

隣の試着室からは、スバルが元気よくカーテンを開ける。スバルは赤いチエックの膝上丈のフレアスカートに黒いTシャツという出で立ちだった。Tシャツにはチェーン等の装飾が付いており『ゴスパン』って感じのコーデイナートだった。

「スバルもとっても可愛いわあ!! ねえ、二人とも、今度はこっちを着てみて?」

クイントは両手に持つ大量の衣服を二人に手渡していく。
服を選ぶのには二時間ほど費やされた。その間、姉妹の分が選ばれ

ているときはキヨウにとって平和だったが、それが終わると様々な服を着せ替え人形のように着せられた。

「どっ、どっですか？」

キヨウは白いボトムスに赤い襟のついた黒いドレスシャツを纏っていた。どう見ても五歳児が着る服ではない……。どこかの「遊びは終わりだ」と叫ぶ赤毛のバンドマンが、炎を放てなくなった時の服装の様であった。

「キヨウ君、とっても格好良いよー!!」

ギンガは頬を染めつつそう答える。基本的に彼女はキヨウがどんな服を着てもこう返してしまふのだ。キヨウもギンガから褒められると、すぐに顔を赤らめてしまう。

「キヨウにいちちゃんのイメージにはあんまり合わないと思うけど、でも、にあってるよね？」

「そうだな、スバル。キヨウはもつと落ち着いた雰囲気の方が合いますよな？」

スバルとアギトが意見を出す。スバルは割とセンスが良いようでクイントと共に様々な服を見つけてくる。アギトは服に対してはそれほど興味が無いのだが、それなりにセンスはある様だった。

「ちょっと派手すぎるかしら？でも、悪くはないわね」

クイントはそう言いながら新しい服を用意し始める。ナカジマ姉妹とアギトもクイントに倣って服を探しに行く。

少女達もクイントと一緒に嬉々として参加していた。

今まで描写はなかったが、キヨウは黒いストレートの髪をセンターで分け目の辺りまで伸ばすという髪型で、幼いながら顔もそこそこ整っており、そのまま育てば10人のうち5人位はかっこいいと評価される位のものだ。まだまだ幼さは残っているが、目鼻立ちは整っている。

お約束の下着選びだが、まだそう言った事が気になるような年齢ではなかったので全員一緒に子供服売り場で買い物を済ませた。それぞれに様々な服を買っていたのでそこそこな荷物になっていた。

「アギトちゃん用の服は普通にはないから布地を買いに行きましょう」
う

キヨウとナカジマ姉妹の買い物が終わると、クイントはそう提案する。

「うえ、わっ私は良いよ!!」

キヨウの先ほどの様子を見て、アギトはそれを断ろうとする。

「だあめ、女の子なんだからお洒落しなくっちゃ!私こう見えても裁縫得意なのよ。うちの人はボタンさえ付けられないんだから、いつ

も私が修繕しているの。小さい女の子の服を作るなんて楽しみだわあ。アギトちゃんって小さくてとっても可愛いし、スタイルもスマートで腕が鳴るわあ!!」

目が輝きだしたクイントにアギトは若干引いていた。

「そつだよ、アギちゃん!!お母さんが言う通り、アギちゃんもお洒落しようよ!!ねえ、ギンねえちゃん?」

「そつよね、スバル。アギトちゃんも可愛いんだから、もったいないよ」

ナカジマ姉妹もクイントに賛同する。どうやら退路は塞がれつつあるようだった。アギトはキョウに助けを求める。

「なあ、キョウ。お前から三人に言ってくれよ」

「ごめん、アギト……。とにかく、ガンバっ!!」

キョウは服選びで疲れ果てているようで、何とか元気を振り絞りアギトに向けて親指を立てる。此処で反対でもしたら後が怖いと感じているのだろうか。

「この薄情者!!」

「さあ、選びましょう!!ギンガ、スバル。二人とも手伝ってね?」

「はい!!母さん!!」

アギトはナカジマ母子に連行されていく。キョウはそれを見ながら

心の中でアギトに詫び続けるのだった。

後日、アギトはナカジマ邸でクイントと、その時たまたま遊びに来ていたメガーヌに文字道理、着せ替え人形にされた。やたらと女の子っぽいデザインのものや黒いゴスロリドレスなどクイントの腕前は確かだったといえる。

その際、ギンガも裁縫に興味を持ちその腕は継承されていく……。

「うわあ、可愛い。スバルもそう思わない？」

「本当可愛いね、ギンねえちゃん。ねえ、お母さん。あのくまさんかって」

粗方買い物が終わり、おもちゃ売り場に来たところスバル達は言いだした。

「良いわよ、キヨウ君にアギトちゃんも遠慮しないでね」

クイントはキヨウ達に対しても声を掛ける。

「じゃあ、僕はこれ」

「あたしはこれが良いな」

ギンガは60センチ位ある茶色いティディベアで首に青いリボンのついたものを選んだ。

スバルはギンガとお揃いでリボンの色が水色のものを買ってもらっ

た。

アギトは二人のものを20センチ位に小さくし紅いリボンを付けたものを手に取る。自分とあまり変わらないぬいぐるみを抱く姿はシユールだった。

キヨウは何に惹かれたのかワゴンに並んでいた、頭の先に紅いボンボンのついた白い謎の生き物の人形を買ってもらった。

一言だけいえばその人形は大層腹の立つ顔をしていたと言えよう。

後日ギンガに「何でそれにしたの？」と尋ねられた時、「買う権利が与えられたようだったから。」とだけキヨウは答えた。

ぬいぐるみを買えば終わると、一同はショッピングモール内のアイスクリームショップへと足を延ばす。

ここではスバルが三段重ねのアイスを注文していた。他の四人は普通に一段の物を食べている。アギトはそのサイズの所為もあり、キヨウと一緒に一つのアイスを食べていた。

「スバル、あんまりたくさん食べ過ぎるとお腹を壊すわよ？ほら、ほっぺにクリームが付いてるわ」

クイントがハンカチを取り出し、スバルの頬を拭う。

「ありがとう、お母さん！！」

スバルは満面の笑みでクイントに対して礼を言う。

「スバルってアイスが大好きみたいだね？」

「そうね、ギンガ。ほら、あなたもほっぺにアイスを食べさせているじゃない」

スバルの様子を見ていたギンガも、同様にアイスをつけていたようにクイントが其れを拭う。ギンガはそれが恥ずかしいのか、少し顔を赤らめる。

「ケプツ。私はもうお腹いっぱいだよ」

「そりゃあ、半分も食べればそうなるよ……」

アギトはキヨウのアイスを半分ほど食べてしまったのか、彼の頭の上でお腹をさすりながら合向けに寝転ぶ。キヨウは苦笑いをしながらアギトとの言葉に答えるのだった。

その後、子供達は帰りの車の中で疲れたのか並んで眠っていた。キヨウを中心に膝の上にはアギト、両側にギンガとスバル。全員買ってもらったぬいぐるみ（例外も有）を大切そうに抱えて、手を繋ぎながらすやすやと眠っている。四人とも楽しそうな寝顔だった。一体どういふ夢を見ているのだろうか……。

「今日は楽しんでくれたみたいで良かったわ。四人とも可愛い」

クイントは信号待ちの際、後ろを振り返る。そして四人の寝顔を見て、優しくそうな声でそう呟いたのだった。

これはクラナガンに住む一風変わった、でも平凡なとある家族の物語である。

Ep6 お買い物もの 後編(後書き)

キヨウ君が買ってもらったのはワゴンの帝王の人形ですwww

箱のアイマスも真のレッスン着ってそそられませんか？へそ出しの黒のタンクトップって。

E P 7 修行開始（前書き）

書きたいことはいろいろあるのに文章にするのは難しいですね。

うちでは『ストライクアーツ』は軍隊格闘術の様に様々な技術を取り込んだ格闘技という事になっています。

それとクイントさんは三日有給を貰っていたということ。

E P 7 修行開始

買い物から帰った翌日からキョウ達の生活は変わった。

帰って夕食後に「いきなりだが明日から修行を始める！」とソウジは言い、トレーニングウェアを渡し修行の内容を説明したのだ。

「まだ、お前は身体も出来てないし、修行と呼べるほどの内容じゃないが、これから毎日朝食の前にランニングをし、帰ったら道場で軽く身体づくりを行う。其れから朝食をとり、組み手を少し教える。その後は勉強だな。午後からは自由にしても良いぞ。明日から朝は早いからな、今日は早めに休んでおけ」

翌日、キョウとアギトは五時にソウジによって起こされた。キョウは朝が弱いらしく、寝ぼけており、一方のアギトは元気いっぱい飛び回っていた。

「むにゃ、おはよう。親父」

「おはよう、親父。キョウ、ほらしっかりしなよ!!」

アギトはキョウの肩を揺さぶり、意識の覚醒を促す。

三人は門の前へ移動する。まだ太陽は上っておらず、辺りは薄暗い。時折、新聞配達のバイクの音が聞こえてくる。朝もやが掛かっているようで空気は少し湿っぽかった。

「今日は初日だから地理を覚えることも兼ねてニキロほどジョギン

グをするぞ。ついてこい!!」

そう言うとソウジは駆け出す。キョウも後ろからフラフラと彼を追った。アギトはキョウが目を覚ますよう、隣を飛びながら頭をペチペチとはたいていた。

それから三人は早朝のクラナガン市街を走り（アギトは飛行し）道場で筋トレを行った。

初めてという事で、少ない回数数の筋トレを数セット行うだけに止められていた。

キョウの身体能力は年相応の様で朝食時にはヘトヘトになっていた。疲れからか食事のペースがいつもよりも遅かった。

「キョウ、しっかり食べるとこの後の鍛錬で力が出ぬぞ?」

「分かったよ。親父」

「ほら、キョウ。頑張つて食べなよ?」

アギトはキョウの口に食事を運んでやる。アギトは面倒見が良いようだ。

食事の後、三人は道場へ移動する。以前の様に、ソウジが上座でキョウとアギトが下座に並んで座り、ソウジと向かい合う。

「これから『ストライクアーツ』で訓練をする」

ソウジの『ストライクアーツ』という言葉にキョウは疑問を抱く。

「『ストライクアーツ』？親父、『草薙流』じゃないの？」

「『ストライクアーツ』って何？」

アギトも同様で初めて聞く単語をキョウに追従するようにソウジに尋ねた。

「『ストライクアーツ』ってのはミッドで最も普及している武術じや。『草薙流』は特殊な技を使うから、まだ身体の出来ていないお前には耐えられない。炎を使うだけじゃないしな」

そう言うとソウジは立ち上がり、道場の中心へと歩を進める。そして深く息を吸い込み、精神統一をした後、キョウ達の方を見ながら声を発する。

「ちょっと『草薙流』の体術を実演してやろう。よく見てろよ。百壱式・隴車！！！」

ソウジは空中に飛び上がりつつ二連続で回し蹴りを放ち、最高点で踵落としを放つ。その蹴りはとても鋭く、キョウ達の下へ風を切る音が届く程であった。

「こんなもんじゃな。身体強化の魔法無しでこれ位で来てもらうようになってもらわねばならん。それにしても衰えたわい……」

着地したソウジは首を回しながら口を開く。これでも衰えているというのだ。

ソウジの動きを見てキョウとアギトは目を輝かせた。

「凄い、凄い！！キョウもアレが出来るようになるんだろ？」

アギトが称賛を贈る。

「そうじゃ、アギト。キョウにはワシの後を継いでもらわねばならんからな。これ以上の技を会得してもらうぞ」

ソウジはアギトの言葉に対してそう答えた。

「うわあ、親父かつこいいな……」

キョウもソウジの技を見てアギトと同じく賞賛を送った。

「こんな感じじゃ。『草薙流』の技はある程度武術の基礎が出来てからでないと使えんもんが多いからな。今のままだと身体を壊してしまうじやろうて。まずは『草薙流』を学ぶ前に管理局でも使われる『ストライクアーツ』で近接戦闘に慣れてほしいのじゃ。多くの人が学ぶだけに、様々な動きが取り入れられているから基礎を学ぶにはもってこいじゃ。様々な格闘技の良い所取りが『ストライクアーツ』の特徴じゃからな。ワシも局員の頃は新人に教えられるくらいには使えたんじやぞ？」

「それってクイントさんが使ってるやつ？」

キョウがソウジの言葉に対して質問をする。彼に身近な武術家として、クイントは真つ先上がる程影響を与えているようだ。

ソウジは少し笑いつつ、キョウの言葉に首を振る。

「クイントが使つのは其処から更に派生した『シューティングアーツ』というやつじゃ。あれは習得が難しいんじゃないがアイツは才があったからのお」

「やっぱりクイントさんって凄い人だったんだな」

アギトはクイントの事を自分の事のように喜んでる。

「話が逸れてしまったがまずは基礎固めからじゃ。良いな？」

「はい！」

ソウジの言葉に対して、キョウは元気よく返事を返すのだった。ソウジの技を見た事によりやる気がわいたのだろう。ソウジの判断は正解だったようだ。

それからキョウはソウジから身体の動かし方や、筋力トレーニングの指導をされた。アギトもキョウの隣で彼の動きを真似していた。

二時間ほど時間が立つとその日の鍛錬は終了した。

「今日はこれ位で良いじゃろ」

「ええ？僕はまだ大丈夫だよ！」

ソウジが終了を告げるが、キョウはまだまだ余力がある様で、続行を望む。だがソウジは彼に対して言葉を続ける。

「駄目じゃ、小さいうちからあまり無理にやると身体の成長を阻害するからな。無理をしても良い事はないぞ？自分では気づかないだろうが、筋肉には疲労がたまっておるのじゃ。鍛錬の内容は、これから徐々に増やしていくし、初歩的な『草薙流』の体術も混ぜ

ては行くから心配せんでも良い。それに『草薙流』を習得するのが一番の目的じゃ。この後はワシが演武を見せる。所謂、見取り稽古じゃ。しっかりと目に焼き付けるんじゃぞ?」

「うん、分かったよ親父」

ソウジの言葉に対してキョウウは納得をする。その言葉は真実が述べられていると彼の声やその目から伝わったのだ。

それから一時間ほどソウジはキョウウ達に技を見せたり理合の教授を行った。時間は11時を回っていた。

「今日のところはこれ位じゃな。其れに昼飯の準備もあるしの。午後からは自由時間じゃ。これからお前が学校に入るまで毎日続けていくつもりじゃから覚悟しろよ!」

「はい、ありがとうございます!」

「ありがとうございます!」

キョウウとアギトはソウジに向かい合って座り挨拶をする。そして母屋の方へ移動するのだった。

「キョウモアギトもなかなか筋が良いわい。これはかなり化けるやもしれんな……」

ソウジは道場で一人そう呟く。彼の顔はとても嬉しそうな笑顔だった。

「へえ、訓練を始めたんだ？先輩も張り切ってるわねえ」

キヨウとアギトは昼食後ナカジマ家に遊びに来ていた。

「はい、結構しんどいですけど楽しいです」

「こっね、びゅーって動いてズバーンってやって親父カッコよかつたんだあ」

「そうなの？アギトちゃんも鍛錬に加わっているんだ？頑張ってるみたいね」

クイントは笑顔でキヨウ達の話聞いていた。

アギトは答えるとすぐ興味が移ったのかスバルの方へ飛んでいく。

「お母さん、私にも訓練で使ってたやつを教えてください！」

突然、キヨウとクイントが話しているのを聞いてギンガがそこに加わる。

「それって『シューティングアーツ』の事かしら？ギンガ、あれはまだあなたには早いわよ。まだ五歳でしょ？」

クイントは優しく諭すようにギンガに言う。

「あの時のお母さんカッコ良かったもん。其れにキヨウ君達もやってるよ！！私もやってみたい！！」

クイントの言葉を聞いたギンガはそれでも彼女に強請る。それを見て、キヨウは助け船を出す。

「あの、僕達はまずストライクアーツで身体づくりをやってるんですけど、ギンガちゃんも一緒に出来ないか親父に聞いてみましようか？」

「ホント？キヨウ君も良いって言ってるよ。ねえ、お母さんお願い。お手伝いもするから！！」

キヨウの援護もあり、ギンガはそれまで以上にクイントへ迫った。

「仕方ないわね。そうね、それなら先輩に頼んでみましようか。母さん明日から仕事だし、あなた達の幼稚園が始まるまでは先輩のところでお世話になれないか聞いてみるつもりだったのよ」

そんなギンガを見てクイントは苦笑いをしながら答えた。クイントも娘には甘いようである。

「ホント？やった！！お母さん大好き！！」

「シューティングアーツは母さんが休みの日に教えてあげるわ」

「やった！絶対だからね！」

鍛錬の許可だけでなくクイント直々に教えてもらえる事となり、ギンガは喜びクイントに抱きつく。

「ギンガは『シューティングアーツ』をやりたいって言ってるけど、スバルはどう？」

一方、くまのぬいぐるみでアギトと遊んでいたスバルに対してクイントは問う。

「わたしはいいよ。それよりアギトちゃんとあそんでたいもん。はい、ジュラルミン、御飯ですよ?」

「ほら、ジュリエッタ。おねんねしましょうね?」

スバルはそう答えるとアギトと共にぬいぐるみ遊びを続ける。二人はぬいぐるみでおままごと中の様だ。アギトも先日のぬいぐるみを持って来ている。普段は割と大人っぽいアギトも、こういう部分では子供としての面が現れる。
それよりもスバルのぬいぐるみの名前が微妙であるが……。

「それはそうと、キョウ君は幼稚園どうするの?」

クイントが話題を変える。ギンガはそろそろ幼稚園に通わせようと考えているので、キョウへも確認を取った。

「小学校に上がる前の二年間は武術の基礎をやるみたいです。それに知識とかは研究所で……」

キョウは少し暗い表情で答えた。彼は『プロジェクトF』の記憶転写技術によって、ある程度、日常生活に困らない知識を与えられている。記憶は実験の邪魔だと研究者達が考えたのか、与えられてはいないのだが……。

「じゅめんなさい……」

クイントはキヨウ達を保護したのももちろんそれを知っていた。だからそういった配慮に欠けてしまったと、すぐさま謝罪をする。

「いえ、気にしてませんよ。それに僕にはみんながいるし『草薙流』の修行もありますから」

クイントの謝罪に笑顔で返した。だが、キヨウの言葉を聞いて、ギンガが声を上げる。

「ええ、キヨウ君と幼稚園で一緒じゃないの？」

「キヨウにいちやんいかなければスバルいきたくない！！」

ナカジマ姉妹は不機嫌になる。スバルもギンガと共に幼稚園に通う事となっているようだ。三人の会話が耳に届き不機嫌になる。

「だめよ。幼稚園が始まるまでは一緒だから我慢なさい。キヨウ君？もちろん小学校には通うのよね？」

クイントがギンガとスバルを注意する。そして二人を安心させるためかキヨウに問う。

「はい、親父が修行と並行して通わせると言っていました」

「それなら良かった。ギンガ、キヨウ君と同じ年なんだから小学校では一緒よ。それにお隣だから幼稚園が終われば毎日会えるからスバルも心配しなくていいわ」

それを聞いて安心したのかギンガとスバルは機嫌を直したようだ。

その後、子供達は一緒に遊び、クイントが作ったホットケーキをおやつを食べたりして夕方まで過ごした。

次の日から一週間、キョウ達の朝食後にスバルとギンガが道場に姿を見せるようになった。

キョウとギンガは一緒に組み手などを行い、スバルはその間アギトと遊んだ。

訓練が終わると子供達はみんなでアーデルハイド家の庭で遊んだ。その時にアギトとスバルはソウジが育てている盆栽に悪戯をして叱られたりする一幕もあった。

子供たちが遊んでいる間のソウジはと言うとキョウ達が来るまでのブランクから以前の力を取り戻すため、道場でハードな訓練をし、それが終わると遊んでいる子供たちの世話をして過ごした。

幼稚園が始まってからは平日はキョウ達はそれまでどおり鍛錬を、ナカジマ姉妹は共働きの両親が帰るまでソウジの家で過ごすという日々を過ごした。

ソウジは午後の鍛錬を続けており、キョウもそれに参加するようになっていた。

幼稚園が終わってから、ギンガもお稽古ごと替わりにキョウ達の鍛錬に参加をするようになっていった。

ナカジマ家では休みの日は家族で過ごしたり、ゲンヤがソウジ達を招待し晩酌するなど平和な日々が続いた。

ギンガは休日クイントから『シューティングアーツ』を習うことになり、スバルはアギトとともにソウジとゲンヤを主なターゲットに悪戯をして遊んだ。

キョウは休日は鍛錬が休みにされていたので鍛錬後のギンガに連れられて、公園で彼女の幼稚園の友人たちと混ざり遊んだ。もちろんスバルとアギトも混ざっていたが……。

ギンガがキョウを誘ったのには幼稚園に通っていない彼が小学校で孤立しないようにという思いも込められていた。

初めは距離があったがキョウはうまく溶け込んでいき、みんなで仲良く遊ぶようになっていった。

おにごっこ等をする際は、日ごろの鍛錬のたまものなのか、キョウは大活躍をした。

しばらくして公園にいじめっ子の上級生が現れたりした際もキョウは活躍をする。只の子供では敵わない程に強くなっていたのだ。

だが、家に帰るとソウジにより激しく叱責された。武道を学ぶ者は決して暴力をふるってはならないと……。

悪戯にその力を振るってはならない。力を振るうのは自分の大切な人が本当に危険にさらされた時だとキョウに言葉を伝える。

それを受けて、キヨウは心を入れ替えて、今までよりも一層、鍛錬に集中していく。

再び公園でいじめっ子が現れた時は話し合いで解決しようと心がけるように彼は変化する。殴りかかれてもそれを捌き、かわして言葉を続ける。その姿勢にやがていじめっ子達も根負けをする。それからはいじめっ子達も暴力を振るをないようになり、キヨウ達と混ざり遊ぶようになっていった。

そうして二年の月日が流れた。

EP7 修行開始（後書き）

明日は講義ないからもう一話あげよう！

Ep8 ピクニック前篇（前書き）

ちよつと駆け足ですが今回で幼年期編の最後にしようと思います。といつても次回からは小学校編ですが。

あと、キヨウ達のキャラが別人のごとく変わってます。前回より時間が経っているのでソウジに染まったということ。

『よつばと！』みたいなほのぼのが書けるようになりたい。感想募集してます。よろしくお願いします。

Ep8 ピクニック前篇

それはキョウ達が小学校に入る少し前……。

「先輩、来週末空いてますか？」

その日キョウ達は何時ものようにナカジマ家で夕飯を御馳走になっていた。ソウジはゲンヤと共に晩酌を楽しんでいる。その時、ゲンヤが予定を聞いてきたのだ。

「それは働いていない俺に対する厭味か？」

ゲンヤの言葉にビールを飲むのを中断し、厭らしい笑顔で返すソウジ。彼がこういった表情をするときは大体ゲンヤは反撃される。彼の若いころの失敗談を面白おかしく娘達に暴露するのだ。以前にゲンヤが如何わしい飲み屋に行った時の話をした時は、娘たちから一週間ほど口をきいてもらえなくなった。もちろんクイントの折檻もおまけつきである。

なので、被害を受けないためゲンヤは慌てて答えた。

「ちっ、違いますよ。俺とクイントの休みが重なったんで今度ピクニックに行こうと思ってるんです。それで、もし良ければ一緒にどうですか？」

「へえ、でも良いのかい？家族団欒を邪魔して」

手酌でビールをコップに注ぎ、それを飲みつつソウジは答える。例の笑顔は消えて、いつもの好々爺とした笑顔を浮かべていた。

「いつもうちの子たちがお世話になってるんですから気にしませんよ」

エプロンで手を拭きつつ台所からゲンヤの隣に移動してきたクイントが答える。

「そうですね。それに、邪魔だなんて思ってたらくらゝして一緒に飲んでませんよ!!」

ゲンヤもクイントに続く。彼絵の言葉は心からの物であった。夫婦そろって家にいない事が多いので、娘たちの面倒を見てくれるソウジに対してナカジマ夫妻は感謝をしているのだ。

「そりゃそうじゃな、すまんかった。それにしても嬉しい事言ってくれるなあ、二人とも……。おいつ、キョウ、アギト!!」

ソウジはリビングでナカジマ姉妹と遊んでいたキョウとアギトを食堂へ呼ぶ。

「何だよ、親父？」

「今いいとこだったのに……。スバルに負けたの親父のせいだからな!!」

ソウジの声を聞いて、すぐにキョウとアギトがリビングからキッチン前の食卓にやってきた。子供達はリビングのソファでゲームをしていたようで、ソウジの声で中断されたうえに、アギトはスバ

ルとの勝負に負けた様子であり不機嫌な表情だった。

「すまん、すまん。だがいい知らせがあるぞ。それはだな……」

「もったい付けてないで、早く教えてくれよ！」

キョウが急かす。リビングの方からは「もう、キョウ君達早くー！
！！」とギンガの声が聞こえる。

「来週末、ウチとナカジマ家合同でピクニックに行くこととなった
！！」

それを聞きキョウとアギトの表情は明るくなった。

「マジで？」

「やったー、スバル、私達も一緒にピクニック行けるみたいだぞー
！」

嬉しそうにリビングの方飛んで行くアギト。どうやら子供達の間で
ピクニックの話題が出ていたらしい。

「クラナガン郊外の湖に行くつもりだから釣りでもどうだ？」

笑顔でゲンヤがキョウに言う。しかも釣り竿を上げるジェスチャー
付きで。

「釣りがあ……。やった事ないけどうまく出来るかな？」

キョウは初めてのことであり、自信なさげに呟く。それを見てソウ

ジがキヨウの肩に手を置く。

「そこは俺とゲンヤがいるんじゃ。ばつちり教えてやるぞい!!」
ソウジもゲンヤに続く。二人とも釣りの腕に自信がある様だった。それからソウジとゲンヤは、キヨウに釣りがどういうものかを少年の様にはしゃぎながら伝えていた。キヨウも二人の話を興味津津といった様子で、目を輝かせながら聞いていた。

「あらあら、楽しそうね。男の人っていつまでも子供みたい……」
クイントはやさしく微笑みながら男性陣を眺めていた。

週末、アーデルハイド家とナカジマ家は合同でピクニックに出かけた。

「着いたぞー!!」

ゲンヤの声に子供達は車から勢いよく飛び出していく。ゲンヤもテンションが上がっているのか、普段からは想像がつかない様な大声を上げていた。ゲンヤは動きやすそうな白のポロシャツとベージュのチノパンにスニーカーという出で立ちだった。

「うわぁー!! 凄いね。アギちゃん？」

「そうだねえ、スバル。早く行こ行こ！」

スバルとアギトはこの日を特に楽しみにしていた。前日は楽しみであまり眠れなかったようで、車の中で二人で寝ていたのだ。そして着いた途端に目覚め、車から飛び出しているのである。二人は元気いっぱいといった様子であった。

二人はお揃いの黒のハーフパンツとスバルは黄色の、アギトは白のＴシャツを着ていた。アギトの物はもちろん『メイドイン・クイント』である。スバルの服を参考に拵えているようであった。

はしゃぐ二人を見て、ゲンヤは提案して良かったと心の中でガッツポーズを取っていた。

その日、ナカジマ家とアーデルハイド家の車二台でクラナガンの市街地から40分程の所にある湖にやってきた。子供達は一緒の車に乗りたがっていたのでソウジの車にいつぺんに載せ、ゲンヤ達は荷物を積み夫婦水入らずでのドライブとなっていた。

「私、こんなきれいなとこ初めて。良い所だね？キヨウ君」

車から降りたギンガは、キヨウに向けて言葉を放つ。彼女は桃色のキャミソールに白いハーフパンツという装いだっただ。髪は普段と違い、後ろにアップに纏めていた。

「うおおー！！親父、おっちゃん、早く釣りしようぜ！！」

だが、キヨウは数日前にソウジとゲンヤに話された『釣り』という物に対しての興味が勝っているのか、ギンガの言葉が耳に入っていなかった。キヨウは黒いポロシャツにブルージーンズというコーディネートだ。

「っん、もう!」

そんなキョウの様子に、ギンガは頬を膨らませて抗議をする。

「こら、チビども。まずは荷物をおろしてからだ!」

キョウとギンガの様子が目に入り、ソウジは苦笑いをしていた。二人の仲を取り持つかのように意識を荷物へと向けさせる。ソウジは普段、和服の様な着流しを着ているが、釣りをするという事もあり、灰色のTシャツにジーンズという装いだった。上からはルアーなどが付いたベストを着こんでいる。相当本気の様だ。

「ギンガとスバルは私と一緒に弁当とシートをお願いね。アギトちゃんのこれお願いね」

クイントは車から降りると女の子達三人に指示を出す。彼女は足首まである青いロングスカートに白いブラウス、その上から桃色のサマーカーディガンを羽織っていた。

「はぁーい!」

ナカジマ姉妹とアギトは声を揃えて返事をし、クイントに頼まれた荷物を車から運び出していく。

「じゃ、俺達はクーラーボックスと釣り具とかだな。先輩、そっちお願いします。キョウ、重たいから気をつけんだぞ!」

ゲンヤも同様に、自分の車に積み込まれた荷物を運び出すよう、ソウジとキョウに声を掛ける。彼も何時の間にかソウジと同じようなバス

トを着こんでいた。

「おう、任された!!」

ソウジは笑顔で頷き、車のトランクから荷物を取り出す。

「大丈夫だよ、おっちゃん。親父に二年近く扱かれてんだぜ？」

キヨウもサムズアップで答えた後、荷物を運ぶ。ゲンヤの心配をよそに、危なげなく荷物を運んでいくのだった。

車から荷物を運び出し、ピクニックの準備をする一同。

その様子はとても楽しげだった。

ナカジマ家とアーデルハイド家、合同のピクニックは始まったばかりだ。

EP8 ピクニック前篇(後書き)

ほのぼのしたのを書くのが一番楽しい。一部になってしまったorz。
z。

Ep9 ピクニック後篇(前書き)

本編と一切関係ない前書。

千早の『Shiny smile』ええわぁ。「ピカピカ」の歌い
方可愛すぎるwww

『アイマス』を始めて『ニコ動』で知った時、私は千早にハマりま
した。それで当時の彼女に振られました……。。

Ep9 ピクニック後篇

荷物を降ろし終えてから男性陣は釣りを始めた。三人は真つ先に湖畔にかかる栈橋へと向かい、用意していた釣り竿を取りだす。

「釣り針にこの餌を付けてだな。それっ、っとこんな感じで」

ソウジがキヨウに釣りのレクチャーを行う。息子と初めて釣りをするという事で、彼はとても良い笑顔をしていた。

「へえ、すげえ。んところかな？」

キヨウは慣れない手つきで、ソウジの真似をする。その手つきは危なっかしく、隣で糸を垂らしていたゲンヤもついつい口を出す。

「針が指に刺さんねえように気をつけろよ。そおら！！」

キヨウ達三人は並んで釣りを始めた。

娘しか居ないゲンヤも、息子同然であるキヨウと共に釣りをすることが嬉しいのか、その顔には笑みを浮かべていた。

「お母さん見てみて、鳥さんがいるよ？」

ギンガが空を舞う鳥を指さす。それに対し、彼女の隣でレジャーシートの上に座っていたクイントも微笑みつつ答える。

「あら、ホントね」

「アギちゃん、あつちにお花畑があるよ。行こうよお」

「ホントだなスバル。クイントさん、ギンガあつちのお花畑に行ってみよう!」

アギトとスバルは相変わらず、元気いっぱいにはしゃいでいた。

一方の女性陣はスバルが見つけた菜の花や蓮華草に似た植物が生える花畑に足を進めた。

彼らがピクニックに選んだその場所は、清んだ大きな湖があり、周りは野原が広がるのどかな所だった。湖畔にはボートの貸し出しも行われており、彼ら以外の家族連れもちらほら見られた。

女性陣は花畑で穏やかな時間を過ごしていた。辺り一面には満開の色取り取りの草花が広がり、ふんわりと頬を撫でる風がその香りを運んでいた。

「此処をこうして、はい出来上がり。どうぞギンガ」

クイントは華の冠を作りギンガに被せてあげた。裁縫の腕があるクイントは当然手先が器用なのである。

「うわぁ、可愛い。母さんありがとう」

クイントから花の冠を貰ったギンガは嬉しそうな笑顔を浮かべる。

「ギン姉だけズルい。私も私も」

ギンガを見て、スバルも対抗心を持ちクイントを急かす。

「慌てないの、はい。スバルも。アギトちゃんの方もあるわよ」

クイントはその行動を予測していたのか、ギンガの物よりも少し小さい冠を作っていた。しかもアギトの方も用意していたのである。

「やったあ、お母さんありがとう」

スバルは冠を貰い大喜びだった。嬉しさのあまり、クイントに抱きつく。

「うえ、あたしの分も。あっ、ありがとう」

自分の分も用意されているとは思っていなかったアギトは少し驚いていた。そして冠を貰うと少し照れつつクイントに礼を言う。

「お母さん、私も作ってみたい!!」

初めに冠を貰ったギンガがそう提案する。スバルとアギトもその意見に賛同していた。

「それならみんなで一緒に作ってみましょうか？」

クイントは優しく微笑みつつそう答える。

「「「はい!!!!」」」

それに対してナカジマ姉妹とアギトは声を揃えるのだった。
それから女性陣は花で冠やブレスレットなどを作り過ごした。

一方、棧橋で釣りを行つ男性陣はというと……。

「先輩、引いてますよ!!」

ソウジの竿に当りがあつたのか、それをゲンヤが知らせる。

「うお、よっしゃー一番乗り!どうだ、キヨウ、父ちゃんスゲえじやろ?」

ソウジが真つ先にマスに似た魚を釣り上げた。魚は棧橋の上で勢よく跳ねている。ソウジは魚から針を外すと、湖の水を張ったクーラーボックスの中にそれを離す。

「負けてらんねえ。俺のにも早くかかんないかな……。あつ、ゲンヤのおっちゃんも引いてる!!」

次はゲンヤの竿に魚が掛かった様だ。キヨウがゲンヤに知らせた。

「よしきた。それっ!!どうです?先輩のより大きそうじゃないですか?」

魚を釣り上げたゲンヤが得意そうに言う。

その後も彼らは一時間ほど釣りを続け、ゲンヤは五匹ほどソウジは四匹釣り上げた。だが、キヨウはまだ一匹も釣れていない。

「ううう……」

「初めてなんだから、気にすんなって。」

「そつだぞ、キヨウ。おじさんだって初めての時は全然だったんだ」

キヨウは只一人辺りが無く、少々落ち込んでいた。ソウジとゲンヤは彼を励まそうと優しく声を掛けていた。

つとその時……。

「キヨウ君……！」

ギンガが棧橋へとやってきた。頭の上には先ほどクイントが作った華の冠が載せられている。

「これ、母さんに貰ったんだ、どう？」

ギンガは顔を赤らめ尋ねる。クイントが作った花の冠は白い花を中心にして作られており、ギンガの青紫の髪にとてもマッチしていた。普段は『シューティングアーツ』の様な格闘技をする活発なギンガに、可憐さを引き出していた。

「……うん。すっごく可愛いと思うよ……」

普段とは違う雰囲気のギンガを見て、キョウも頬を染めつつぶっきらぼうに答えた。一種のテレ隠しであろう。

「ラヴ臭が、ラヴ臭がするぞ。いってえ」

暴走状態に入りそんなゲンヤをソウジが凸ピンで正気に戻らせる。

「ありがとう。（可愛いって言われちゃった）それで、どう釣れた？」

花も恥じらうような笑顔でギンガが聞く。この日のギンガはとても可愛い雰囲気を放っていた。

「ただだけど……」

少し元気なくキョウはその問いに答える。

「そうなの？でも一杯釣れてるみたいだね。これ、父さんとおじ様の？」

クーラーボックスを覗く。ゲンヤ達は苦笑いをしていた。キョウはギンガに良い所を見せたく思っていたので悔しかった。まだ一匹も釣れていない事を悔しく思っていたのだった。

「母さんがそろそろお昼にするから戻って来いって。あつ、キョウ君の竿引いてるみたいだよ……」

ギンガはクイントからの伝言を三人に伝える。だが、そのタイミングでキヨウの竿のも辺りがあり、彼女は大声で知らせる。

「わっ、ホントだ!!」

やっと自分の竿に当たりがあり、それが嬉しいのかキヨウは元気を取り戻す。

「かかったみたいじゃな。慎重にいけよ!!」

「竿をこう持ち上げてリールを、そうそんな感じ」

ソウジとゲンヤもアドバイスを送る。どちらも子煩悩な父親だった。

「見えてきた!!大きそうじゃない?」

魚影が水面に近付くと、ギンガはそう言葉を発する。彼女も釣りあげる瞬間に立ち会えるという事で興奮しているようだ。

「うーんっ!!とりゃー!!」

キヨウは元気に声を上げながらリールを巻き取った竿を、勢いよく湖から引き上げる。

キヨウが釣り上げたのは50cm以上あるバスに似た魚だった。

「やったー!!」

「やったね、キヨウ君!!かっこいいよ!!一番大きいんじゃないの?」

キヨウは喜びの声を上げる。その嬉しさはギンガにも伝わったのか、彼女も笑顔を浮かべていた。

「良かったなキヨウ！！流石ワシの息子じゃわい！！」

「初めてでこんなのが釣れるって凄いじゃないか！！」

ソウジとゲンヤもそれを喜び称賛の声を送る。キヨウが魚を釣った事により、その場の一同は笑顔に包まれるのだった。

キヨウはギンガに良い所を見せられて嬉しかった。それよりも彼女に褒められた事の方が嬉しそうであったが……。ギンガの言葉で顔が真っ赤だった。

「マセガキめ」

そんなキヨウを見てソウジはニヤニヤしていた。

「駄目だぞ、キヨウ君にもギンガはやれない。クイントお、ギンガがギンガがあ。アウツ！！」

「お父さん！！」

若干暴走し始めたゲンヤは、愛娘のギンガの愛のこもったキックを脛に受け、正気を取り戻した。

「ホントに良かったね、キヨウ君」

ギンガの笑顔を見て、キヨウの心の中には喜びがいつぱいに広がっていったのだった。

「早くいらつしゃーい！」

そうしている時に、レジャーシートを敷いている方向からクイントの声が聞こえる。

「そつだ、キヨウ君早く行こう！！」

キヨウはギンガに手をひかれクイント達の方に駆けて行った。ギンガは特に意識をしていないようだがキヨウは頬を赤らめていた。

その姿にまた暴走しようとする娘の父親の姿が見えたり見えなかつたり……。

その後一同はクイントが用意していたお弁当を食べた。様々なおかずがレジャーシートの上に並んだ弁当から見えている。

「みんなで外で食べるお弁当は美味しいな、スバル」

「そおだね、アギちゃん」

下の子たちは相変わらず仲良く食べていた。二人ともご飯粒を鼻に付けており、その姿はとても微笑ましい物であった。

「えつとね、キヨウ君。このサンドイッチ私が作ったんだ。どう？」
ギンガがちよつと自信なさげにサンドイッチの詰まった小さいお弁当箱をキヨウに差し出す。

「ホントに？うん！！美味しいよ、ギンガ」

キヨウはその中からサンドイッチを一つ取りだすと、それを口に運ぶ。そしてそれを味わい、飲み込んでギンガに笑顔で感想を伝える。

「あつ、ありがとう……」

キヨウに美味しいと言ってもらえて、顔を赤くするギンガ。娘のそのような姿を見てクイントがからかう。

「あらあら、ギンガ。良かったわねえ、大好きなキヨウ君に美味しいと言ってもらえて。昨日の夜から……」

「あー、母さんダメダメ！！何でもないよ。ホント。ホントだよ！！」

言い終わらないうちに、クイントの口をギンガは両手で慌てて塞ぐのだった。

「良かったなスバル、大きくなったら兄ちゃんが出来そうじゃぞ？」

「っえ、ホント？」

ギンガの様子を見たソウジはスバルにそう声を掛ける。ソウジの顔

は笑顔だった。

彼の言葉にゲンヤはまた暴走しそうになる。

「ダメだあ、ギンガ！キョウは将来有望そうだし俺も気に入ってるがまだ早い！！嫁になんか行かないでくれえ！！！！」

ゲンヤの頭の中では色々とすつとばして、美しく成長したギンガが純白のウエディングドレスに身を包みタキシード姿のキョウと並んでいる妄想が浮かんでいた。

「はあ、あの人ったら。しっかりしなさい！」

今度はクイントの拳骨によってゲンヤは正気に戻される。ギンガはかなりクイントに似てきているようだった。

クイントに折檻されるゲンヤの姿で一同は笑いに包まれる。当事者のキョウとギンガも少し恥ずかしそうにしながら笑った。

その後、みんなまでボートに乗ったり、持ってきていたボールで遊んだり、ゲンヤとソウジが草笛の吹き方を子供達に教えるなど楽しい時間が過ぎて行った。

例のごとく、子供達は完全燃焼したのか帰りの車の中で爆睡する。

キョウ達が釣った魚はナカジマ家に到着した後にバーベキューが行

われ、みんなの胃の中に消えて行った。

これはクラナガンに住むとある一家と隣人の物語である。

Ep9 ピクニック後篇(後書き)

ふう。何とか書けた。次はいよいよ小学校編です。そこに原作キャラを入れて行こうかと思えます。あと、オリキャラが多数。

ミッドで話が進むのである程度まではオリルートになると思われま
す。

読んでいただきありがとうございました。

リア充爆発しろ!!!

。
ハーンナギツペシナギツハーンセツカツコウハーンナギツテン
シヨウナギツテンシヨウヒヤクレツナギツゲキリュウニゲキリュウ
ニミヲマカセテドウカスルハーン……………

Ep10 入学式と新たな出会いと（前書き）

ヒヤッハー！今回も捏造とキャラ崩壊の嵐だぜ！！！！

原作キャラが出ます！

感想募集してますんでよろしくお願いします。

Ep10 入学式と新たな出会いと

その日はキヨウとギンガの入学式。ソウジとナカジマ夫妻の意向で二人は同じクラナガンの小学校に通うこととなった。その小学校では一般の生徒と魔法が使える生徒が一緒に通えるシステムとなっており、魔法を学びたい場合は選択授業で初歩的なものを習得する事が出来るという方式を取っている。

AM7:00 アーデルハイド家

「おーい！！キヨウ、起きろー！！」

アギトがフライパンとお玉で音を立てながら布団を頭から被っている少年の周りを飛び回る。その身にクイントお手製の割烹着を身に着けていた。彼女の世話の焼き方は、まるでどこかのリングにかけると世界チャンピオンの姉の様であった。

「ムニヤ、あれえ？今日は修行は休みじゃなかったっけ？入学式だし」

寝ぼけ眼でキヨウが答える。その頭には寝癖が付いておりピンピンと髪の毛の束がはねていた。

「その入学式だからだよ！8時にはうちを出るって昨日親父も言ってただろ？早く着替えて居間に来いよ！」

そう言うとアギトは居間の方に飛んでいった。

「ふああ、眠う。でも着替えないとまたアギトにどやされんだろうな」

そう言うとキヨウはハンガーに掛けてある真新しい制服に袖を通すのだった。

「おう、来たか。もう二年も早朝から鍛錬しているのに朝が弱いのは治らん」

ソウジが席に着き湯のみでお茶を啜りつつ新聞を読んでいた。

「親父、おはよう。アギトも起こしてくれてサンキューな」

キヨウはソウジと、台所から目玉焼きの乗った皿を運んできたアギトに挨拶をした。

アギトはキヨウと共にソウジに引き取られてからの二年間で、ある程度の家事スキルを身に付けていた。ソウジの料理は男の一人暮らしという感じで簡単なものが多かったので、ギンガと供にクイントの手伝いをたまにやっていたアギトの料理の腕は、いつの間にか彼に勝るようになっていたのだ。

朝、キヨウとソウジが道場で組み手を行っているときに朝食を作り始めたのがその始まりだった。

しかし最近では料理はアギトの担当というほどの腕前になっていた。

「今日も美味そうだな。ありがとさん、アギト。ほら、キヨウも早く席つけ」

「うん」

ソウジの言葉に従い、キヨウは彼の隣に座る。アギトもキヨウの隣に座り、自分用の小さい食器をちゃぶ台の上に置く。これは彼女が引き取られてすぐにソウジからプレゼントされた物だった。少し値の張る人形屋に依頼をして作らせたのである。その店の名は『薔薇乙女』であつただろうか……。

「じゃあ、いただきますす!!」

「「いただきますす!!」」

キヨウとアギトが席に着くと、ソウジの合掌の声により何時も通りの朝食風景が広がるのであつた。

「キヨウ、食いながらで良いから一寸聞け」

「何だよ、親父？」

「以前言つたと思うが、学校が始まつてから鍛錬の様式を変える。朝のランニングと筋トレは変わらんがなあ、放課後はお待ちかねの『草薙流』の『技』の鍛錬を行う」

「マジで!!! やつたー!!!」

ソウジの言葉にキヨウは喜びの声を上げる。日々の鍛錬が師匠であるソウジに評価された事がよほどうれしいうでであつた。

「良かったな、キヨウ!!!」

アギトも自分の事の様に喜んだ。彼女もキヨウと共に鍛錬に参加し

ていたし、それ以外にも彼のサポートを影に日向に行っていたからである。

この二年間、キヨウは身体を造る事と基礎固めのため『ストライクアーツ』による体捌きを中心に学んでいた。加えて『草薙流』の理合いや、炎を用いない体術をある程度身につけていたのだが、この日やっと炎を用いる『技』の修行に入る許可が出たのだ。

「親父、あたしも何か出来る事ないか？」

「アギトは何時も俺や親父にご飯作ってくれてんじゃん。すげー助かってるんだぜ」

アギトは更に手伝えることが無いかソウジに問う。

しかしキヨウはそれに対して少し否定的なニュアンスを含んだ言葉を返す。彼は今までアギトが自分達の為に色々と頑張ってくれていた事を感謝しており、今以上負担を掛けたくないと思いついてしまっているのである。

「でも、あたしもキヨウと一緒に強くなるうつつて約束したじゃんか……」

アギトは少ししょんぼりしながら口を開く。

それを聞いて、キヨウはアギトと出会った時に交わした約束を思い出す。『二人で強くなっていこう』そう誓っていたのだ。彼は日ごろの鍛錬の日々で、その約束に対する意識が薄れていたようである。

「そうだよな……。ごめん、アギト。出来れば俺はアギトに危ない目に会って欲しくはねえんだけど……。でも二人で強くなるうつつて誓ったもんな……。本当にごめん」

キヨウはアギトへと深々と頭を下げる。自分の発言が彼女を傷付けてしまったという事に対して謝罪の意味を込めて。

「いいよ、キヨウ。誰だって失敗はあるんだし。それに私の事を大切に思ってくれてるんだろ？それが伝わったから良いよ。さつきも私の負担を増やしたくないって思ってたんだろ？」

アギトはキヨウの謝罪を受け取る。そして彼の先ほどの発言の真意も汲み取った。長い間、一緒に過ごしている二人は『以心伝心』が可能となる様な絆を持っているようだ。

続けてキヨウはソウジに頭を下げる。アギトも一緒に鍛えてやって欲しいと。

ソウジは何てことないように答えた。

「もちろんええぞ。アギトはうちの長女じゃ。炎を使えるから幾つかの技は覚えられるじゃろ？」

「ホントか？ありがとう、親父！！」

さつきより深く頭を下げ、嬉しそうな声で感謝するキヨウ。

「うわぁ、ありがとな、親父！」

嬉しさのあまりソウジに飛びつくアギト。

「良いってことよ」

アギトとキヨウの互いに思いあう姿を見て笑顔になるソウジ。

アギトが抱きついた事も要因の一つではあろう……。どここの家庭も父親は娘には甘いようだ。

食事の後、出発前に仏壇にお参りをし三人は表に出た。

「今日から一緒の学校だね？楽しみだね、キョウ君！！」

「うん、楽しみだよギンガ！！」

校庭に、有給をとったナカジマ夫妻とアーデルハイド家の一同は来ていた。アギトは何時の頃からかキョウ達と同じ位のサイズに変身

出来るようになっていた。謎の多い融合騎である。大きくなれるようになったせいでもスバルとの悪戯もエスカレートしてしまったが……。
家の前で記念写真を撮っていた両家はそのまま一緒に学校に移動したのだ。スバルも一緒に行きたがっていたが写真を撮り終えた後、すぐに幼稚園のバスが来てしまったので参加できなかった。

「ほら、あなた達。何時までもいちゃついてないで講堂に向かいなさい」

クイントの言葉で互いに微笑み合っていたキヨウとギンガは真っ赤になって、慌てて講堂の中に入っていく。当人は気付いていなかったが、その様子は幼いカップルといった所でよくゲンヤ以外の面々はからかう様になっていた。

一方のゲンヤは、相変わらず「ダメだ、ダメだぞキヨウ。うちのギンガはやらん!!」と暴走し、クイントからお仕置きを頂戴するのだが……。

「あら？あなた達は？」

キヨウ達を見送った彼らに、眼鏡をかけた綺麗な女性が後ろから声をかけた。

キヨウとギンガは掃除たちと別れた後、講堂の中に来ていた。そこには入学式ということで彼らと同世代の子供たちが数多く詰め掛けしており、雑談するなど思い思いの方法で式の開始を待っている状況であった。

「席ってこつちみたいだな」

「うん、そうだね」

案内の表示を見つつ二人はぎこちなく喋っていた。キョウとギンガは、からかわれるといつもそのようになってしまつのだ。何度もからかわれるのに一向に変化する様子が無い。

「グリフィス君こつちこつちー！」

「待ってよ、シャーリー」

新入生の多い中、席に着こうとしたキョウ達の所に眼鏡をかけた二人の子供がやってきた。

「あなた達も新入生なの？私はシャリオ・フィニーノ、彼はグリフィス・ロウランっていうの。これからよろしくね」

茶色い髪の子がキョウ達に声を掛け自己紹介をする。

「俺は、キョウ・アーデルハイド。これからよろしく」

「私はギンガ・ナカジマです。よろしくね、シャリオ」

キョウとギンガも笑顔で彼女に返す。

「自分で自己紹介出来るよお。僕はグリフィス・ロウランっていいです。キョウ君、ギンガさんよろしくね」

少女と共にやってきた青紫の髪をした少年も、続いて自己紹介をした。

「グリフィス君堅いよ。キョウ君にギンガちゃんね。私の事はシャリーって呼んで!!」

「俺の事はキョウって呼び捨てで良いよ。俺もシャリーって呼ばせてもらうから。それとグリフィスもよろしく!!」

「私もギンガで良いわ。よろしくね、グリフィス君」

四人は早くも打ち解けたようである。この出会いも、この後、長くにわたる付き合いの始まりになるのであった。

「これは、レティ提督。もしかしてお子さんが？」

声を掛けてきた女性にゲンヤが答えた。彼女と面識がある様である。

「ええ。そちらもそのようですね」

レティと呼ばれた女性はクールな外見とは裏腹に、朗らかな笑みでゲンヤに言葉を返す。

「うちの上の娘が入学するんです」

クイントもゲンヤに続き、口を開いた。

「母親同士、色々相談事も出てくるだろうからお互い仲良くしましょう。あら、お久しぶり。アーデルハイドさんじゃないですか？」

クイントに笑顔で答え、握手をしていたレティは、ソウジに気付いたのか彼にも声を掛ける。彼は本気で彼女が誰だか気付いていなかったようだ。

「おお、レティさんか久しぶりだな。元気してたか？」

ソウジは局員時代そこそこの名が売っていたのでレティ・ロウランとも面識があつたようだ。

「そちらの子はアーデルハイドさんの娘さん？早く中に入らないで大丈夫？」

「可愛いだろ？アギトっていうんだ」

ソウジが笑顔でレティの質問に答える。アギトの両肩に手を置き、娘自慢をする父親の姿が其処には有った。

「あたしはこう見えて、実は融合騎だから学校には行かないんです。アギト・アーデルハイドです。よろしくお願いします」

アギトはレティに可愛いと言われ、少し照れ気味に自己紹介をした。ちなみにアギトとキヨウは普段の言葉づかいはあれだが、ソウジによって目上の人には敬語を使う様に教育されている。

「へえ、そうなの。私はレティ・ロウランよ。アギトちゃん、よろしくね。うわあ、アギトちゃん礼儀正しくてかわいい。うちは男の子だからなあ。ねえ、アーデルハイドさんアギトちゃんをうちのk「ダメだ」ケチい」

「うちは倅が入学するんだ」

ソウジがレティの言葉を遮る。そして強引に話題を変えるのだった。

「それなら男の子同士仲良くなってもらいたいわ。アーデルハイドさんもよろしくお願いしますね」

レティはクイントに続き、ソウジとも握手を交わす。

親達はこのようなやり取りが行われていた。

入学式は滞りなく進められた。一部の親がハイテンションになり、自分の子供の写真を撮ろうとして連れ合いに沈黙させられたりしていたが……。どこぞの部長さんとその奥さんとかではない、断じて違う。G・ナカジマ氏の名誉のためにそう追記しておこう。

これからキョウ達の小学校での新しい生活が始まる。

Ep10 入学式と新たな出会いと（後書き）

ロウラン親子とシャーリーが出ました。誰だこれって位キャラが変わっていいそうですいません。

主人公達とシャーリー、グリフィスも幼馴染になるって捏造で進んでいきます。

読んでいただきありがとうございました。

Ep11 ある日の風景1（前書き）

はやて「くたばりぞこなつたか。」（もうないと思つたのに…。）

キョウ「テメエの都合で生きちゃいねえよ。」

自分で書いていてなんですが、クイントさんみたいな嫁が欲しい。

クイントさんの扱いなんですが、生存させるべきか、原作通りにするべきか悩んでいます。生存させても魔導師を引退させ、専業主婦になっていただくつもりですが。

そこでアンケートを取りたいと思います。

明日の午後九時まで受け付けますので感想欄にて『生存ルート』か『原作ルート』か書き込んでいただけませんか？
特に意見が出なければ『原作ルート』にしようと思っています。

皆様のお力をお貸しください。よろしく願います。

キョウの朝は早い。ソウジに引き取られてから、平日は毎日五時に起床しランニングを続けているからだ。

小学生になり身長が120?ほどに成長した彼は、魔法により同じくらいの大きさに変身したアギトとともに毎朝5kmほど走るようになってる。

「おはよう、キョウ君、アギトちゃん!!」

キョウ達が表に出ると、お隣のギンガが元気よく挨拶してきた。クイントと『シューティングアーツ』の鍛錬を始めてからは彼女もキョウ達とランニングをするようになっていた。

「ううん。おはよう、ギンガ」

キョウは寝ぼけたままで挨拶をする。相手をかろつじてギンガだと認識している程度だった。

「おはよう、ギンガ。今日は公園の方に回ろうと思ってるけどいいか?」

一方でアギトはしっかりと覚醒をしていた。しっかりとした言葉でギンガに返答する。

「うん、良いよ。ほら、キョウ君走るよ。アギトちゃん行こう!!」

キョウは朝に弱い。毎朝アギトに起こされている。ランニングをする際もいつも初めは寝ぼけていて、途中から意識を覚醒させる。な

ので、それまではアギトとギンガの間でしか会話が成立しないのだ。

「ハア、ハア。ギンガってほんと体力有るよな」

「フウ。ついて行くのがやっとだよ」

キョウとアギトがギンガの後から声を掛ける。二人とも消耗しており、肩で息をしていた。

「そうかな？そんなに飛ばしているつもりはないんだけど？」

三人の中ではギンガが最も身体能力に優れている。キョウ自身も同じ年の子供たちと比べれば破格の身体能力を持っているのだが、戦闘機人である彼女には一步譲る。

「ハア。その分、燃費は良くないけどな」

「もう、キョウ君。女の子に対してそれは失礼だと思うな？」

「そうだぞ、デリカシーがないよな」

「「ねえ」「」

ギンガとアギトは同性なだけあり、このような場面では息ぴったりである。いつの間にか息を整えてギンガと共にキョウを非難する。二対一だと分が悪く、キョウはすぐさま頭を下げる。

「悪かったよ。ごめん、ギンガ」

「よろしい」

キョウの謝罪に対して、ギンガは腕を組み頷きそれを受け入れる。もし結婚したら『カカア天下』になりそうな二人だった。

「あたしは今から朝食の準備があるから行くわ。じゃーな、ギンガ」
アギトは本来のサイズに戻りふわふわと飛びながら家の中に入っていく。

「じゃあね、アギトちゃん。キョウ君もまた後でね」

ギンガは玄関の郵便受けから新聞を取り、牛乳配達の箱から牛乳を取りだすと、自宅へと向かう。

「うい、後で」

キョウも同様に新聞を取り、右手を上げてギンガに挨拶すると、門をくぐり自宅へと戻る。

ほぼ毎日このようにして解散するのであった。

「さてと、親父殿を呼びに行きますか」

キョウ達がランニングをしている間、ソウジは基本的に道場におり

自らの鍛錬をしている。キョウは帰宅するとソウジを道場に迎えに行く事が日課となっていた。

「ふん！ほう！はあっ！」

道場からはソウジの声が響いてくる。キョウはその声の下へ足を進める。道場ではソウジが型の演武を行っていた。

道場の中心で、黒い道着を着たソウジは素早いジャブを放ちそこから流れるような動きで技に繋いでいた。

ひじ打ちから、裏拳のように手を伸ばし、炎を纏わせながら一回転し飛び上がる。

「『百式・鬼焼き』か？」

入口に立っていたキョウは言葉を漏らす。

「ああ。学校が終わったら『鬼焼き』を伝授する」

それが耳に入ったソウジは、着地をすると『息吹』の様な呼吸法で息を整えて答える。

「ついに『鬼焼き』か……。ああ、そうだ！！親父、飯だぜ。早く行かねえとアギトが臍曲げる！！」

キョウは新しい技を教えてもらうという事で感慨深そうにしていたが、本題を思い出す。

「そうじゃな。しかし、あの怒った顔もまたプリチーなんじゃがの。そうじゃ、夕方の鍛錬では『闇払い』のお浚いもやるぞ。お前、飛び道具はあんまし上達せんな」

ソウジにとっては娘の怒った顔も悪くは無いらしい。確実にゲンヤの影響を受けているようだ。加えて、キヨウの苦手分野の指摘もする。

「うっ。飛び道具は性に会わないんだよ。そんな代わり『荒咬み』からの追い撃ちは物にしただろ？」

「あの『九傷』や『八鏑』がか？ワシから言わせればまだまだじゃ。技の繋ぎの部分にまだ隙があるからの。もっと一つの流れを意識して身体を使わねばな？それはそうと、こうしてはおれん。キヨウ早く行くぞ！！」

「なるほど、流れか……。って、待てよ！！親父！！先に行くとかずるいぞ！！」

ソウジはアギトが呼んでいるという事を思い出しキヨウを置いて母屋へ向かう。キヨウはソウジの後ろを駆け足で追いかけるのだった。ソウジはゲンヤに感化されたのか、キヨウが小学校に通うようになると、娘のアギトをそれまで以上に可愛がるようになっていた。当のアギト本人は……。

「げえ、親父。キモい！」

とあまりいい顔はしていないのだが…。

「キヨウ君、学校行くっ!!」

八時ごろ玄関の方からチャイムの音が聞こえ、ギンガの声が屋敷の中に響く。

キヨウは食後に学校へ行く支度をし、仏壇に手を合わせてから玄関に向かう。

「おはよう、ギンガ。んじゃ、親父、アギト、行ってきます!!」

ギンガは家が隣という事でキヨウとともに通学している。このように毎朝迎えに来るのだ。

「ちよつとちよつと!!」

「待たんかキヨウ!!」

ソウジとアギトが出てきた。二人はキヨウを引き留める。

「おじ様、アギトちゃん、おはようございます」

「おう、ギンガちゃん。おはよう。ギンガちゃんは相変わらずいい子じゃな。将来、キヨウの嫁に来てくれんか？」

ソウジはふざけてよくこういった事を口にする。

「あうう……」

その度にギンガは頬を染めて黙り込んでしまうのだ。

ギンガはクイントの教育か、きちんと毎朝挨拶をする。ソウジ達だけでなく通学中に会う人達にもだ。ナカジマさんちのギンガちゃん
は近所でも『良い子』として評判になっている。

「なっ、何言つてんだよ！親父。ギンガが迷惑してるじゃねえか。
それに何なんだよ、呼び止めて」

キヨウが照れ隠しか早口で注意をする。彼も、もう何度目か分からない位、同様にからかわれているのだが、いつまでも耐性が付かないようだ。

「すまん、からかい過ぎたわい。だが、お前も満更じゃなさそうじやがな？そうじゃ、アギトや」

ソウジはキヨウとギンガをからかう事に夢中になっていたのか本題を忘れていた。途中で思い出し、アギトに声を掛ける。

「ほら、キヨウ。弁当忘れてたぞ。しっかりしろよな……」

弁当を抱えて飛んでいたアギトがキヨウに渡す。

「悪い悪い。弁当ありがとな、アギト。それに親父も」

弁当を受け取ったキヨウは、礼を言つとギンガと共に出発をする。

「気を付けて行くんじゃぞ、二人とも!!」

「帰ったらあたしが『アギト流百八式・闇払い』を見せてやるよ!!」

アギトはソウジにより一部の『草薙流』の技を伝授されていた。特に飛び道具系の技や空中で出す技はキヨウ以上に適性があるようで、飛び道具が苦手なキヨウをこうしてたまにからかうのだ。

「ふん、いつか追い抜いてやらあ。ギンガ行こうぜ!!じゃ、行つてきます!!」

「うっ、うん。じゃあ、おじ様、アギトちゃん、行つてきます」

家を駆けだすキヨウをギンガが後ろから追う。持久力ではギンガが勝っているが、瞬発力ではキヨウに軍配が上がる様だ。

「「いつてらっしやい!!」」

それからキヨウ達は走って学校の方へ向かうのだった。

「あつ、キョウ君、ギンガちゃん。おはよう！」

「おはよう、キョウ君にギンガちゃん」

「おう、グリフィスとシャーリーか。おはよう、今日も二人仲良いな」

「おはよう、グリフィス君、シャーリー」

途中で、二人はグリフィスやシャーリーと合流し四人で学校へ向かう。グリフィスとシャーリーは家と同じ方向のようで、毎朝ほぼ決まった時間に顔を合わせる。

「キョウ君、それってあなた達にも言える事なんじゃないの？」

「べつ、別にそんなんじゃないわ（ないわ）よ」「」

「ほら、息ひいたり」

「ふふふ。ホントだね」

学校に着くまでこのようなやり取りで楽しく学校に通学するのだ。

これが、キョウたちのよくある朝の風景である。

Ep11 ある日の風景1（後書き）

早く付き合えばいいのにコイツら。ってやりとりを陸士訓練校まで
続けていければなって思ってます。

筆者はKOFは97が一番好きです。小学校の頃よく近所の兄ちゃん
たちとプレステでやってました。

アンケートの方よろしく願います。
読んでいただきありがとうございます。

Ep12 ある日の風景2（前書き）

サブタイトルがもろ『あるゲーム』のパクリになってますが、よろしく願います。

今回は修行編。

何か味気なかったので修正しました。

実際にはつながらないコンボが出てきますが大目に見てください。

それとアンケートの方もよろしく願います。

感想募集中です！

Ep12 ある日の風景2

ある日の放課後、帰宅したキョウはソウジと道場の中心で向き合っ
て立っていた。

ソウジは黒い着流し、キョウは黒い道着を身に纏っている。

道場の中は物音一つ立ってはいない。向かい合う二人の呼吸音だけ
が道場の中に木霊している。真剣な表情で多事し合うキョウとソウ
ジ。二人の間には張り詰めた空気が流れる。

だが、その静寂をキョウが破壊する。

「今日こそ一撃当ててやる。いくぜ!!」

キョウはソウジから目を離さず構えをとる。身体を半身に開き、足
で軽くステップを踏む。右手は肘を曲げた状態で前に伸ばし、左手
は顎の近くに拳を握る。ソウジからいつ撃ち込まれてもいい様にと
すぐに動けるような構えであった。

「何をぬかす、ひよっこが」

一方のソウジは構えを取らず、自然体でキョウを正面に捉えていた。
だが、キョウはソウジの姿を見て警戒を強め得る。ソウジは一件隙
だらけにも見えるが、キョウの目から見れば少しの隙も見当たらな
いのである。

「準備良いか？親父、キョウ？」

道場の上座に近い場所にいたアギトが、二人に声を掛ける。それに
対し、キョウとソウジは頷く事で返答する。

「よし！！では、始め！！！」

アギトはその小さい身体から、精一杯の大声を発する。そしてその声によりキヨウがソウジに向けて攻撃を放つ。

「ボディーが甘っ、無駄じゃ。」くそっ！よっつと」

キヨウが炎を纏った横殴りのボディーブロー『百拾四式・荒咬み』を繰り出す。だが、それはソウジに簡単に受け止められる。行動を読んでいたのか、彼はキヨウの右手首を掴み、そのまま投げ飛ばす。身体を浮かせられたキヨウだが、空中で何とか身体を捻り、着地をする際は受け身を取る事に成功する。

「てえいや！！！」

攻撃を防がれたキヨウだったが、諦めずソウジに向かい攻撃を試みる。ソウジに対して距離を詰め、飛び上がりつつ身体を捻る。其処から鞭の様に撓る蹴り『七百七式・独楽屠り』を放つ。

「ほうあああ！！！」

だがキヨウの放った『独楽屠り』は、それに合わせて放たれたソウジの『鬼焼き』により迎撃される。

キヨウはソウジの反撃により、背中から床に叩きつけられる。

「ケツホッ……」

受け身が取れなかった事により、肺の中の空気が一気に抜けてしまいキヨウは咳き込む。

「どうしたキョウ？そんなものか？」

ソウジは未だに無傷だった。受け身を取れずに床に転がるキョウをニヤニヤしながら眺め、言葉によって挑発をする。

「くっ、いつてえ〜」

キョウは上体を起こし後頭部を撫でている。どうやら頭も強打したようだ。少し涙目になっていた。

「早く立ち上がらんか。そんなに軟に鍛えたつもりではないぞ？早うせんと、こっちから行くぞ？」

ソウジが右手をアンダーロー投法のように振りつつキョウを急かす。キョウは彼の声に従い立ちあがり、再び構えをとる。

「それで良い。てええい！！」

ソウジはキョウに向かい、地を這い進む紅蓮の炎『闇払い』を放つ。そのスピードはかなりの物で放たれたと思った時には、既にキョウの足下へと到達していた。

「あっちい。おわっ？」

『鬼焼き』のダメージはまだキョウの身体に残っていた。しかし彼は何とか、自分の足元にまで迫った炎『闇払い』をジャンプして回避することに成功する。間一髪のタイミングだった。

「一度避けた程度で安心するな！！そらっ！！」

キョウが床に着地をすると、ソウジは彼に向け続けて『闇払い』を放つ。

「喰らええ！！うわっ？」

キョウはソウジの放った『闇払い』に自分も『闇払い』を放ち相殺しようとした。

だが、ソウジの放った赤い炎はキョウの青紫色の『闇払い』ではその勢いを止めるに至らない。そのままキョウの炎はソウジの炎に取り込まれ、自身の下に跳ね返ってきた。

「勝負あり！そこまで！！！！」

キョウに『闇払い』が命中した所でアギトからの声が道場に響く。キョウとソウジの組み手はこれにて終了の様である。

「ふん、まだまだじゃの」

ソウジが炎を喰らって床に倒れているキョウに向かい手を伸ばす。

「くっそお。今日もダメだったか……」

キョウもその手を取り言葉を返す。ソウジによって絶妙な具合に手加減が為されているようであり、キョウは怪我をしてはいない様だった。手を掴むとすぐに立ち上がる事が出来ているし、足取りもしっかりとしている。

「炎の練りが足らんかったのお。それにあそこで『独楽屠り』にせ

ず、耐えた後に『鵜摘み』や『鈇鉄』に繋げばチャンスはあったかもしれないの？」

「当て身や投げ技は性にあわねえんだよ」

ソウジがキヨウに改善点を述べる。だがキヨウも反抗期なのか、彼の忠告を受け入れたがってはいない様だった。

「何を言っておるか、未熟者めが。それに何だ、あの『闇払い』はアギトの『闇払い』の方が齒こたえあるぞ」

ソウジはアギトを引き合いに出す。それに対して当のアギトは……。

「ホントか？親父。へっへん、どうだキヨウ。あたしがお前に『闇払い』教えたげよっか？」

純粹に褒められ嬉しくなったのか、胸を張り腰に手を当て得意そうにキヨウをからかう。

「うるせえやい。なあ、親父！『闇払い』よりも『毒咬み』の練習を増やしてくれよ」

それに対してキヨウは憎まれ口をたたく。そしてソウジに鍛錬の内容を提案する。どうやらそれは苦手なメニューではなく、彼が得意と感じている物の様だ。

「バカ者。『荒咬み』すらまともには使えておらんだろっが。あれは『荒咬み』が使ってこそその技だぞ。それに『闇払い』は炎を使う全ての技においての基本じゃ。夕飯までに二百本、壁に打ち込め。アギトも付き合っやってくれ」

(道場は技の練習に耐えられるよう堅固に造られています。)

当然の事だがそれを受け入れる程ソウジも甘くはなく、キョウに対して彼の苦手とする『闇払い』の特訓メニューを言い渡すのだった。

「げえ、二百も?……分かったよ」

キョウもソウジに従う事が強くなる近道であると、これまでの経験を通して学んでいるので、割と素直に従うのだった。

「了解、任された。やるぞ、キョウ!!」

監督を頼まれたアギトはキョウ以上に気合十分だった。先ほどの組み手を見学していた事で、自分も身体を動かしたいというフラストレーションがたまっているのだろう。

「こんにちは!! やってるようね?」

ソウジが母屋に移動を開始し始め、キョウとアギトが『闇払い』の特訓を始めようとしたその時、庭に面している方の道場の入り口から女性の声が聞こえた。

「ああ、クイントさんだあ!!」

その声はクイント・ナカジマの物だった。夕飯の支度を始めようとしていたのか、クイントはエプロンを付けたままの姿だった。そのような姿で尋ねてくる程に、アーデルハイド家とナカジマ家の結びつきは強くなっているようである。クイントに懐いているアギトは喜びの声を上げ、彼女の方へと飛んでいく。

「道場の方に来るとはめずらしいのお。それで、どうしたんじゃ？」
母屋に戻ろうとしていたソウジも、彼女に気が付き道場へ戻ってくる。

「それがですね、いきなりで申し訳ないんですけどギンガとキヨウ君で他流試合でもどうかと思って……。あの子も二年近く私と鍛錬を続けてますし。軽い組み手で良いんで、キヨウ君と先輩がよろしければ明日ここでやらせてはもらえませんか？」

彼女はいつもの母親としての顔ではなく、ギンガの師としての顔で答えた。だが彼女の周りをはしやぎながら飛びまわるアギトの存在があつたので少々締まらない物になっているのだが……。

「ギンガと？俺は別に良いよ。なんなら今からでも」

『闇払い』の特訓を課せられたキヨウがクイントの提案を受け入れる。彼もクイントの傍まで移動しているのだ。

「バカ者。お前は苦手な稽古をサボりたいだけじゃろ？」

キヨウの魂胆が読めているのか、ソウジは少し呆れた様子で彼の発言を却下する。

それを見て、クイントは断られるのではないかと首を傾け人差し指を自分の頬に添えて尋ねる。

「だめかしら？」

正直、三十路に近付きつつある主婦が取る様な仕草ではなかった。

だクイントは年齢を感じさせないような若々しい外見をしており、その仕草には違和感が感じられない。

「いい年して、なんじゃそれは……。まあ、構わんぞ。まだ早いとも思うが、互いにいい刺激になるじゃろうて。明日は休みじゃし昼からならええぞ」

先ほどはキヨウに対して呆れていたソウジは、今度はクイントに対して呆れていた。それでも彼女の提案を受け入れる。キヨウに対して、ギンガが良い刺激になって欲しいというのは心からの言葉の様であった。

「ホントですか、先輩？助かります！！じゃあ、キヨウ君も鍛錬頑張りなさいね」

ソウジの許可も出た事によりクイントはテンションを上げる。ナカジマさんちの奥さんはリアクションが若々しいようだ。キヨウとアギトに笑顔で手を振り声を掛けると道場を後にするのだった。

「武術関係だと台風のようなヤツじゃわい。ゲンヤと結婚して少しは落ち着いているようだったんじゃが……」

クイントが去った後の道場で、ソウジが呟く。

「ねえ、親父？キヨウとギンガが明日戦うのなら速い所、鍛錬を終わらせなくても良いのか？」

静かになった道場の中でアギトが尋ねる。彼女はクイントが去り、普段通りの様子に戻っている。クイントが来た時は別人の様にはしやいでしまっが、切り替えは上手な娘なのである。

「アギトの言う通りじゃな！よし、キョウ！明日はギンガちゃんとの試合じゃから、百本にまけてやるぞ」

「マジか？親父」

ノルマが減った事によりキョウは喜びの声を上げる。だが……。

「ただし、『荒？み』から『九傷』と『八錆』へのコンビネーションも百本じゃ！！」

「おい、ノルマ増えてねえか？」

「お前の好きな近接技の訓練を入れてやったのじゃから感謝してほしいぞい。アギトや、サボらんように見ていてくれ」

「おうよ。ほらキョウ、早くやんねえと終わんないぞ」

ソウジは再び渡り廊下へと歩いていく。その日の夕飯はソウジが作る様だ。道場にはキョウとアギトが残されていた。それからしばらくキョウの鍛錬は続くのだった。

翌日の午後、道場にはアーデルハイド家とナカジマ家が全員揃っていた。

「うっし、じゃあルールを説明するぞ。といつても目や急所への攻撃がダメなのと片方が参ったというまで、そんだけだ。あともう戦えないと判断したらワシらで止めるからな」

「審判は、私と先輩でやるからね。キヨウ君、ギンガを女の子だと思つて甘く見ない事ね。ギンガも頑張んなさいよ」

師である二人が審判の様だ。キヨウとギンガが道場の中心で対峙し、その間にソウジとクイントが立っていた。

「キヨウー！負けんじゃねえぞー！！」

「キヨウ兄もギン姉も頑張れー！」

アギトとスバルは道場の壁際でヒートアップしていた。熱のこもった声援をキヨウとギンガに送る。

一方でゲンヤもアギト達と共に壁際でキヨウとギンガを見つめていた。彼の傍にはタオルや水筒等が置かれている。

「キョウ！うちのギンガに傷一つ付けてみる、俺がウガツ！？」あなた、いい加減にしなさい！」イタタタ。すまん、クイント」

ゲンヤはギンガを心配して、キョウに野次を飛ばそうとした。だがクイントが恐るべき速さで彼に近付き突っ込みを入れる。そして再び、目にもとまらぬ速さで元いた場所へと戻るのだった。

「こつ、ちゃんとした形での組み手は初めてだな、ギンガ」

「そうだね、キョウ君。私、結構強くなったんだから負けないよ！」

道場の中心で向かい合っていた二人は、短く言葉を交わす。どちらの声も闘志がこもっていた。

キョウとギンガは互いに礼をし構えをとる。キョウの構えは、昨日ソウジと組み手を行った時と同様の物だった。一方のギンガは右足に重心を掛け、左手を顎に近付け右手を前に出すという『サウスポースタイル』の構えだった。軽快にステップを踏むキョウと違い、重心を低く取りスピードよりも重い一撃を与えんという雰囲気を感じられる。

「それでは、始め！！！！」

クイントの言葉を合図に二人は同時に動き出した。キョウのフットワークは軽やかで、その動きは俊敏だった。だがそれはギンガも同じであり、キョウの動きについていく。

「えい！！！！」

「ぐおつ。ギンガ前より拳に威力が増したか？」

ギンガがキヨウの腹部に向けて左手でパンチを繰り出す。可愛らしいかけ声からは想像できないが、かなりの破壊力がある様だ。腕一本では止められないと判断したキヨウはそれを肘と膝で挟み受け止める。

「まだまだコレからだよ。てえええええりやあ！！」

ギンガはそこから強引にペースを掴もうとする。ワンツーから下突き、フック、下段回し蹴りとキヨウに向かい継ぎ目のないコンビネーションを繰り出す。まるで嵐の様な勢いだ。その猛攻で腕が痺れたのか、キヨウのガードが開いた。

「ぬおつ、なんて力だよ。つて、やばい」

「カッチーン。でもチャンス！！てやあ、ストームトゥースツ！！！！」

キヨウの発言に対してギンガは少々気分を害したようだ。彼女が放つ上下からの二連撃がキヨウを捕えた。

ギンガの攻撃を受けたキヨウは、そのまま3m程後ろに飛ばされ倒れこむ。

「うわあ、キヨウ兄痛そう……」

「何やってんだよ、キヨウ。負けちゃったかあ……」

吹き飛ばされたキヨウの姿を見てスバルとアギトは勝負がついたと

判断する。

「いや、まだよー!!」

だが、スバルとアギトの言葉をクイントが否定する。事実、ゲンヤもソウジも何よりギンガも倒れたキョウの方を見ている。

「痛つつう。なんて技覚えたんだよ……」

キョウは吹き飛ばされて床に叩きつけられた割にはダメージのない様子だった。腰を擦りつつ立ちあがる。

「実は其処まで効いてないはずだよ。思ったほど手ごたえ感じなかったし。自分から後ろに飛んでダメージを軽減したんじゃない？」

左手の拳を右手で掴みつつ、ギンガがキョウへ声を掛ける。まだ闘いが終わらない事が嬉しいのか、その顔には笑みが浮かんでいた。

「自分から飛んだって、そうなのか？親父？」

ギンガの言葉を聞き、審判として近くに立っているソウジにアギトが尋ねた。

「ああ。アイツはワシの攻撃を喰らい続けてタフさが上がってるみたいだな。それに、ギリギリの所を避ける能力も身につけるとるようじゃ。これもワシの鍛錬のおかげじゃ」

ソウジはキヨウの動きが彼の中での現在の及第点に達していたのか、得意そうに笑顔で答えた。

ソウジ達が話している間にキヨウとギンガも仕合を再開する。

「よし、じゃあ今度はこつちから行くぜ！！たあああ！！」

「速い、でも。はあああああ！！」

キヨウとギンガはお互いに打ち合う。スピードではキヨウが、威力ではギンガに分があるようだ。キヨウが三発撃つ間にギンガが一発返すという展開だが、ギンガの拳には一撃でも喰らったら終わりと感じられるプレッシャーが放たれている。キヨウは確実にギンガの攻撃を避ける。一方のギンガも多少は被弾するが、キヨウの攻撃をガードし続ける。

「先輩、キヨウ君は『草薙流』の技を出してないんですけど、手加減してるんですか？」

二人の様子を見てキヨウの動きに疑問を持ったクイントが聞く。キヨウの動きは『ストライクアーツ』に近いものを感じられている様なのだ。

「いや、出したくてもギンガちゃんが隙を見せてくれないんだよ。それに自分で思っている以上にさっきの攻撃でダメージを受けたんじゃない」

しばらく続いた二人の打ち合いに変化が訪れる。ギンガに比べてスタミナの乏しいキヨウの動きが乱れたのだ。其処を見逃さないギンガは一度距離を取り、『ストームトウス』を放つための溜めを作っ

た。
それをみて、キヨウは逆に攻撃を仕掛けた。どうやら隙を見せギンガの大振りを誘ったようだ。素早く距離を詰める。

「ふっ、ふっ！ボディーがガラ空きだぜ！！」

「きゃー！！」

キヨウは二連続の蹴り『七拾五式』でギンガを蹴りあげ、浮かび上がった彼女へ『百拾四式・荒咬み』から派生技の『百弍拾八式・九傷』（炎を纏ったひじ打ち）、『百弍拾五式・七瀬』（鳩尾への直蹴り）というコンボに繋いだ。

今度はギンガが身体を浮かべる。彼女はキヨウの攻撃により床へと落ちる。

「痛たたた。今の技、すごいね……」

キヨウの猛攻を受けるが、ギンガは何とか立ち上がった。しかし体力を消耗しているようでその表情はそれまでより余裕がなくなっているようだった

「今ので倒れないか……」

技を出した後、ふらふらになっているキヨウ。彼も確実に倒せると思い、力を振り絞って連撃を放った。しかし、それでもギンガが倒れなかった事により精神的な疲労もたまった様である。
二人ともすでに満身創痍のようだ。

「お互い、次で最後の一撃になりそうだね」

重心を前に取り、攻撃中心の構えをとるギンガ。

「ああ。これで終わらせる」

同じくキヨウも構えを取る。彼は足を使うという選択肢を止め、ギンガと似たような構えをとる。実際、フットワークを活かせるほど体力に余裕が無いのである。

「ストームトウース！！！！」

先に動いたのはギンガの方だった。疲れもあり一撃目を空振ったが、構わず二撃目をキヨウに向けて繰り出す。

「喰らええ！！」

何とその二撃目を、キヨウは受け止めギンガに『百拾五式・毒咬み』を叩き込んだ。炎を纏う右の拳を放つ直前に、左手を胸の前に一度動かす。そしてその左手を引く勢いで右拳を伸ばすのだが、その左手でギンガの攻撃を受け止めたのである。キヨウの炎を纏うフックをその身に受け、ギンガは倒れこんだ。

「それまで！！！！！！」

ソウジとクイントの声が道場に響く。

「はあ、はあ。俺の、勝ちだ！！」

拳を突き上げるキョウ。

「はあ、はあ。負けちゃったか……」

ギンガも怪我はないよう得上半身だけ起こす。

キョウはギンガに手を伸ばし彼女が立ちあがるのを手助けする。ギンガはキョウの手を取り置き上がった。

「イテテ、途中までは勝ってたのに……」

ギンガはやはり悔しそうな顔であった。だがそれ以上に全力でぶつかれた事による清々しさも感じられていた。

「へへっ。歴史が違っただよ」

キョウも鼻を人差し指で書きながら笑顔で答える。キョウの笑顔でギンガも笑顔になるのだった。

「キョウもギンガもよくやったな」

珍しくソウジが褒めた。彼は普段、厳し目の指導をキョウに課しているのである。普段の好々爺とした様子からは余り想像がつかないのだが……。

「母さん、ごめん。負けちゃった……」

「気にしなくていいわ。とても良い試合だったわよ」

ギンガはクイントの下に着くと肩をしょんぼりと下げる。やはり負けて悔しいという思いは無くならないのである。そんなギンガにクイントは優しい笑みで答えるのだった。

「俺は格闘技は良く分かんが、キョウもギンガも良くやったと思うぞ。お疲れさん」

ゲンヤも二人に優しく声を掛ける。彼は用意していたコップに水筒からお茶を注いで、キョウとギンガにタオルと共に渡すのだった。

「キョウ兄もギン姉も、凄くカッコよかった！！ねえ、アギちゃん」
「？」

「ああ、そつだなスバル。キョウもギンガも、カッコ良かったぜ！」

アギトとスバルも二人を褒めていた。二人はジェスチャーでキョウ達の動きを真似するのはしゃぎっぷりだった。

「お互い良い刺激になると思うから今後も月一位で試合してみんか？」

キョウ達の試合が終わり揃って談笑していた際にソウジがクイントに声を掛ける。

「そうですね、良いと思いますよ。ゲンヤさんも良いでしょ？」

「おう。それじゃあ先輩、今後ともお願いしますね」

「そんなの今更じゃぞ。何度も言わるでないわ」

ソウジの提案はすんなりとナカジマ夫妻に受け入れられた。ゲンヤの発言に対しソウジは彼の肩をバシバシと叩く。

「楽しかったあゝ。今日は負けちゃったけど、次は負けなければね、キョウ君！！」

「俺も楽しかった。次も負けないように頑張るよ。お互い頑張ろうな、ギンガ！！」

キョウとギンガは互いに拳を合わせる。二人は再戦に向け決意を新たにするのだった。

「今日は二人とも疲れたでしょうから、精のつくお肉にでもしましよつか？」

「「「「「やったー！！！！！！」」」」」

何時もの優しい母の顔に戻ったギンガの言葉に子供達は大喜びだ。

「先輩、この前言ってた酒、手に入りましたぜ」

「何？本当か、ゲンヤ」

「あなた！それに先輩も！お酒は程ほどにしてくださいよ！」

「はい、申し訳ありません。」

「お父さん達、カッコ悪い」

スバルの言葉により道場は笑い声に包まれた。

その後一同は道場からナカジマ家に移動し、おなじみの夕食会となった。

これはクラナガンに住むとある一家と隣人の物語である。

Ep12 ある日の風景2（後書き）

初めてちゃんとしたバトルシーンを描いたつもりですがどうだったでしょうか？

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

余談ですがアギトが使える技。

『闇払い』、『アギトキック（真吾キックのパクリ）』、『鬼焼き』
、どっやって習得したかは不明だが『参百拾壹式・爪櫛（庵の技）』
などを使えます。

Ep13 ある日の風景3（前書き）

キョウ「前々から聞いてみたかったんだがな、八神。もし万が一、俺を倒せたとしたら、お前その後どうするつもりなんだ？」

はやて「聞いてどうなんねん？」（やっと普段の喋り方で出れた。）

キョウ「別に。ただ聞いてみたくなっただけだ。」

はやて「そう言うアンタは、どないするん？」

キョウ「俺か？そうだな、てめえをぶちのめしたらまず、クラナガに居るギンガに電話だ。っと、彼氏のいないお前には悪い事言っちゃまったか？」

はやて「それがアンタの辞世の句なんやな。闇に沈めてやるわ、真つ暗な闇にな。」

アンケートを明日の朝六時までには延長させていただきます。よろしくお願いします。

学校にて

【ケース1】「この学校何か変だ」

学校での初日、キョウ達は割りあてられた教室に入っていた。入学式で仲良くなつた四人は皆同じクラスの様だ。

「こら、みんな。もう授業が始まるよ。席に着きたまえ！」

豹柄のスーツを着こみ、長い金髪を逆立てた細身の教師が教室に入ってきた。服のセンスは残念だが、顔は物凄い美系である。

「私が今日からこのクラスの担任になるベニマール・コレダーだ。これから一年よろしく頼むよ、小さいレディー達。それと少年諸君。それじゃあホームルームを始めようか」

それから行われたホームルームは特筆すべき点もなく普通であった。内容も自己紹介等、当たり障りのない物ばかりであった。

ベニマール先生は男女の扱いに微妙に差があつたが、その後の彼の授業内容のいたって普通で、昼休み等は生徒達に対しても進んで交流を取っていく良い教師だった。

体育の時は臍出しの服装など残念だったが……。生徒達だけでなく、保護者、特に母親達からも人気は高かつた。

それだけに、「顔は格好いいのに服のセンスが良ければ……」とい

う意見がかなり多いようだった。

この学校には「悪は許さん!!」が座右の銘の笑顔の時に歯が輝く爽やかな教師や、常にトランクス一丁の熱血教師、いかなる時も天狗の面を外さない教頭、普段は普通だが水泳の際は赤い有り得ないほどの露出の水着を着る女性教師など一風変わった教師達が沢山いて、ある意味それが名物になっていた。

【ケース2】「なんか知ってるぞ、この展開」

キョウ達はクラスにうまく溶け込んでいるようだ。ギンガは特に産まれ持った運動神経で体育などでは大活躍だった。しかしそれを良く思わない生徒もいる。

ある休み時間の教室で、ギンガが彼女をよく思わない男子のグループからちよっかいを掛けられていた。

「やあーい、男女!!」

「ご飯も沢山食べるし、お前ホントは男なんじゃねえのか？」

「違うもん、私女の子だもん」

たまたま、ギンガが一人でいた時に彼女の事を快く思わない生徒が数名、その周りを取り囲んだのである。ギンガは初めての事で少し泣きそうになっていた。周りの生徒も『いじめ』という初めて見る光景でオロオロするばかりだ。

「こんな似合わないリボンなんかしちゃってさ」

ギンガの髪に結ばれた青いリボンを、いじめっこの中の一人が外そうと手を伸ばす。

「やめろよ!!」

その時、キョウがギンガの下に駆けつけてきた。

「何だよ、キョウ。お前には関係ないだろ？すっこんでるよ」

リボンを取ろうとしていた少年の仲間が、キョウに声を掛ける。

「ギンガに酷い事いうな。それにリボンだって凄く似合っていて可愛いじゃんか!!」

キョウは前に出てギンガを庇った。彼女を自分の身体の陰に隠すように。

しかし、それは余り良い手段ではなかった。

「ああ、こいつら何時も一緒に学校に通ってるから夫婦なんだ」

「……夫婦、夫婦!」

ギンガをからかっていた生徒達はキョウも含めてからかいだしたの

である。

「ふっ、ふええ……」

ギンガは泣き出しそうになっており、それによってキョウウの我慢が限界に達してしまった。

「こっのお!!」

泣く一歩手前の表情のギンガを見て、キョウウは思わず手が出てしまっていたのである。

「先生、こっちです!」

「こらっ!! やめないか!!」

それからすぐ教室にいた生徒の一人がベニマール先生を連れてきたようだ。

その日の放課後、当事者達は生徒指導室に呼ばれた。他の生徒に様子を聞いたベニマール先生はギンガを虐めていた生徒をこっぴどく叱った。

ギンガを虐めていた生徒達は意外にも素直に反省した。

彼らは心からギンガを憎く思っているわけではなく、実は「好きな子ほど、なんとやら」という小さいころ特有の行動に出ってしまっただけなのだ。

キヨウも手を出した事で叱られる事となった。

「女の子が虐められているのを助けるその気持ちは素晴らしい。でもな、手を出してしまったのはダメだぞ。他にも方法があったはずだ。それに彼らは素直にギンガに話かけることができず、結果あんな形になってしまったと今は反省しているぞ。正しいと思って行動しても、そこで安易に力をふるうのはそれはただの暴力だ」

ベニマール先生に諭されキヨウも素直に反省した。以前クイント達からも似たような事を言われていたので真摯に受け止める事が出来た。

その後、キヨウは殴ってしまった相手に謝り、ギンガとキヨウをからかっていた少年達も二人に謝り、無事に仲直りする事になる。

翌日のホームルームでベニマールはクラスの生徒達に「いじめを目撃しても何もしない事もいじめだ！」という事を話した。その言葉でクラス一同反省したようである。

それからの一年間、キヨウ達のクラスは「いじめ」等の問題が起こる事もなく平穏に過ぎていった。むしろギンガの一件でのベニマールの言葉で団結が強くなったようで、他のクラス以上に中の良いクラスと見られるようになったのである。

【ケース3】「別に不思議な出会いはない」

三年生になったある日の昼休み、キヨウとギンガとシャーリー、グリフィス達は屋上で弁当を食べていた。

「はあ……」

「どうしたんだ？グリフィス」

「元気ないよ？」

「何か心配ごとでもあるの？」

三人はため息をつくグリフィスを心配した。

「いや、悩みすぎてほどじゃないけど。今日の授業で『将来の夢』について書けて課題が出たよね」

「ああ、あれね。私は将来メカニックデザイナーになりたいわ！！」
シャーリーが真っ先に元気よく答える。

「俺は、うちの流派の跡を継がなきゃなんねえけど……。親父はまだ当分元気そうだし管理局員にでもなっかな？」

「そっか、キヨウ君は武道やってたよね。ギンガちゃんは？」

グリフィスがギンガに尋ねる。ギンガは頬を染めつつキョウを見ながらブツブツ独り言を吐いていたのだが、グリフィスの言葉に反応する。

「（私はキョウ君の、おっ、お嫁さんに）ふえ！？わ、わたし？」

「何か変だぞ、ギンガ。お前も調子悪いの？」

キョウはギンガの顔を覗き込んだ。いきなりキョウの顔が近づいたので、ギンガは頬を赤く染める。

「だっ、大丈夫！！何でもないよ、キョウ君。ごめんね、グリフィス君。私はうちの両親みたいに管理局員かな。それでグリフィス君は？」

慌てて誤魔化して答えるギンガ。たまに妄想してしまう所はゲンヤに似てしまったようだ。

「そうなんだあ、みんなもう色々考えてるんだね……。僕はまだ将来の事なんて考えられないよ……。みんなみたいな取り柄ないし……」

元氣なく答えたグリフィスの言葉をキョウ達は否定する。

「何言ってやがんだよ。お前、いつもシャーリーやギンガと学年トップ争いしてんじゃねえか？」

「グリフィス君に取り柄がないなら私達はどうなるの？それに、そんな悲しい事言わないで……」

「グリフィス君は優しいじゃない。小さい頃、友達がいなくて一人で居た私に話しかけてくれたの忘れたの？ 凄く嬉しかったんだから！ それに今決めなくても良いじゃない。時間もまだあるんだし」

「そうだぜ！！」

「うん、そうだよ！！」

「そうだね、みんなの言う通りだよ。まだ時間はあるんだから母さんとか周りの人にも相談して色々考えてみるよ」

三人の励ましによりグリフィスは元気を取り戻したようだ。

その後、普段通り四人は昼食を済ませ、午後の授業を受け帰宅した。四人とも塾には通っていないし、夢で声を聞いたりもしなかった。下校中に近道などもせず、途中で傷ついたスクライア族の少年を見つけることもなかった。

そもそも、その少年は現在、無限書庫に居るのだし。

『魔法少年リリカルぐりふいす』始まりません。

Ep13 ある日の風景3（後書き）

今回、オリキャラやパロディーが多かったと思います。

ネタは『IS』と『リリなの・無印』でしたが、お分かりいただけただろうか？

読んでいただきありがとうございました。

アンケートの方もよろしく！

Ep14 ある日の風景4（前書き）

十話以上続けているので筆者の判断で【習作】の部分を取りました。

タイトルも微妙に変わってますが、これからもよろしく願います。

感想いただけると私のやる気が増します。

誤字脱字、表現や設定におかしな部分がある等、指摘も大歓迎です。

微修正しました！

クイントさんが生きるか死ぬかのアンケートの方もお願いします。

Ep14 ある日の風景4

『アギトの日常』

まだ太陽が昇らず外が暗い中、一人の少女が目を覚ます。八畳ほどの部屋の中、勉強机やまんが本が並べられた本棚が周りに存在する。その部屋の中心にある二組の布団の中から30?程の身長少女が顔を出した。二組といっても、一つは50cmほどの大きさの布団なのだが。桃色のパジャマを着た少女は上半身だけ起こすと両手を伸ばし伸びをする。

「ううん。良く寝た」

朝四時。毎朝彼女はこの時間に起床する。朝の早いアーデルハイド家では、朝食の準備をする彼女はその時間になると何時も起きるのだ。

目を覚ましたアギトの隣の布団ではまだ黒い髪の少年が眠っていた。アギトは布団から出ると普段着に着替える。

「さて、今日も一日頑張りますか!」

そう言うと彼女は部屋を出て行った。

居間に向かうと、仏壇のある部屋の方から家主であるソウジがやって来た。

「親父、おはよー!」

「おう。おはようさん、アギト」

挨拶をした後、アギトも仏壇を拝みに行く。

其処にあるのは、優しそうにほほ笑む茶色いショートヘアの女性の写真。ソウジの死に別れた妻『ユキ・アーデルハイド』のものだ。ソウジは以前から毎日拝んでいたが、キョウとアギトも引き取られてから（E p 3）ソウジの様に毎日拝むよう習慣になっていた。

其処からアギトはキッチンへ移動する。冷蔵庫からベーコンと人参、玉ねぎ、ピーマン、バターを取り出す。そして調理台の上からジャガイモを取り、野菜をシンクにあるボールに入れ洗いだした。洗い終わった野菜を今度は小さな体で包丁をつかみ器用に皮を剥き出す。

剥き終わった野菜とベーコンを今度はまな板の上で、ベーコンは短冊状に、玉ねぎとピーマンはみじん切りに、人参は半分は棒状に、もう半分はみじん切りに切っていた。

みじん切りした玉ねぎとピーマンと人参の一部はキョウの弁当に使うようだ。

熱した鍋の中にバターとベーコンを入れ火を通し、その後切った野菜を水と共に投入しコンソメを入れた。

鍋に入れなかった分も並行して、冷蔵庫から取り出した前日クイン

トから分けてもらったひき肉と一緒に、フライパンとバターで火を通し、塩こしょうして皿においた。

沸騰し灰汁が出るまでの間、アギトは最近やっとミッドの一般家庭にも普及しだした米を研ぎ、水を入れ、炊飯器（ソウジが購入してきた）にセットした。

その日の朝食はコンソメスープがつくようである。

沸騰したら灰汁を取り、塩こしょうで味を調べ、火を止めた。

「うん、ばっちり!!」

そして使い終わった調理器具を洗った。

壁の時計は「4:50」を指している。

「そろそろキョウウを起こさなきゃな」

洗ったフライパンとお玉を持ち彼女は少年のいる部屋の方へ飛び立った。

（カンカンカン!!!）アギトはお玉でフライパンを打ち鳴らす。

「おーい！キョウウ、起きろー!!」

その音とアギトの声により、今日はもぞもぞと布団から這い出して来る。

その後、二人は幼馴染である隣に住む少女と合流し日課のランニングを行う。

アギトはランニングを終えキッチンに戻る。時間は6時。

彼女は冷ましておいた具材を使ってキヨウの弁当用にオムレツを作った。それ以外にもアスパラベーコンなどを作り、これまたクイントにおすそ分けされたポテトサラダなど幾つかのおかずを弁当に詰める。

そして炊き上がったご飯も弁当に詰めて悪くならないよう蓋を開けた状態で冷ました。

洗いものも終わると一時間程経っていた。

「キヨウ、そろそろ朝飯だから。親父を呼んできてくれ！」

「了解！いつもありがとな、アギト」

其処からは家族一同で食卓の準備をし食事を始める。朝食は基本的に前日の夕飯の残りと、余った弁当のおかずである。

「キョーウくん。学校行こっ！」
八時ごろになるとギンガがキョウウを迎えに来る。

朝食の片付けは基本的にソウジが担当する。

片付けが終わると、ソウジとアギトは道場で『草薙流』の稽古を行う。その時のアギトは、ランニングの時の様に変身魔法で子供サイズになり技の稽古をする。

人間ではなく身体も鍛えられないので、魔法を使い技を真似するといった風だがアギトもセンスがあり一部の体術もマスターしている。

「親父、喰らえ！！アギトキーパーック！！」

アギトは勢いよく飛びあがりソウジの後頭部めがけて蹴りを放つ。動きを読んでいたソウジは右手一本で何なく受け止める。そこが魔法で身体を大きくしてはいるが、軽量級の辛い所である。

「何じゃ？その技は？『独楽屠り』か？」

「あたしのオリジナル『アギトキック』だ！！」

そんな感じで二時間程度鍛錬を行うと、キョウの為にソウジから彼が局員時代に使っていた魔法を幾つか習う。

「『バインド』の術式はこんな感じじゃ。アイツはこういうの覚えたららんからな……」

「キョウに足りない分はあたしが補ってやるんだよ。なんたってパトナーなんだから！！」

アギトの発言をソウジは微笑ましいものを見るように眺め、聞いていた。

昼食は基本的にソウジを作る。決して不味くはないのだが、某騎士王風に言わせると「雑です……」
この一言に尽きる。

午後からはアギトは子供サイズで散歩をしたり、公園で未就学児達と遊んだり、夕飯の買い出しに行く。

日本と違いミッドでは昼間に子供が出歩いても特に注意を受けることもない。

公園に着くと小さい子たちが……。

「あつ、アギトちゃんだあー!!」

「ねえ、アギトちゃんはやくすなばいこつ!!」

といった風に寄って来て手を引いてくる。小さい子たちに人気があるようだ。

中には「ぼくね、おおきくなったらアギトちゃんとけっこんするんだ!!」

という男の子等もあり、そういう場合……。

「ごめんなあ、あたしにはもうキョウが居るんだ」
と微妙に母親達に誤解を招く発言をしたりしている。

近所でも顔が売れているようで、買い物に行くと店の人や客の奥様方からも声をかけられる。

「あら、アギトちゃん。お手伝い、偉いわね」

等と褒められることもよくある。外に出る時は大きな姿に変身しているのも、よく家のお手伝いをしている子供という印象を近所の人たちに与えている。地域の人たちに溶け込んでいるのだ。その日は何故か魚屋の店主から魚の切り身をまけてもらっていた。

「おっちゃん、サンキューなー!!」

「良いつてことよ。アギトちゃん、気を付けてお帰り!!」

四時頃になると、お隣のスバルが幼稚園から帰宅するのでそれに合わせ彼女も帰宅する。

そして二人でナカジマ邸で遊んだり、アーデルハイド家でソウジに悪戯したりして過ごす。

(家に居る時は基本のサイズ)

「アーギちゃん。遊おぼ!!」

幼稚園の制服から普段着に着替えたスバルが駆け寄ってきた。ゲンヤもクイントも仕事で家を空ける事が多いので、二人で過ごす時間は自ずと多くなる。

二人は何時ものようにソウジに対する悪戯を企み始めた。

「おう、スバル。耳かせ。今日はな、親父がヒソヒソ……」

「うわあ、それ面白そうだね。じゃあ、あれをヒソヒソ……」

「ただいま、今帰ったぜ!!」

暫らくして、学校が終わりキョウが帰宅する。

その後はまちまちであり、ギンガが遊びに来るとスバルとともに女の子三人で遊んだりする。それ以外にも鍛錬を見学したりする事もある。

(キョウの鍛錬には、たまにギンガも参加する)

キョウの鍛錬が休みだと、彼が連れてくるグリフィスなど学校の友人と遊んだり、お隣りへ行きギンガの友人たちと遊んだりする。そ

の二組が途中で合流するという事もよくある。

キョウやギンガの友人たちは、初めて会った時は妖精の様なアギトの姿に驚いていたのだが、時が経つにつれ気にしなくなっていた。

そして暗くなりクイント達が帰宅し、迎えに来た時に解散となる。

その後、夕飯の支度をし、食後に鍛錬後のキョウやソウジとともにお風呂に入る。

アギトにとっては家族で触れ合う大切な時間となっている。風呂ではキョウとアギトがお互いにその日あった事を報告し合い、ソウジはそれを優しい目で眺めながら聞いている。

風呂からあがるとキョウは宿題を、アギトはテレビを見たりソウジと将棋の様なゲームで対戦をしたりする。

293

そして一家は九時か遅くても十時過ぎに就寝する。

「おやすみ、キョウ」

「ああ。お休みアギト」

二人はまた隣り合わせの布団で眠りに就く。

「だがアキートのふくめる口癖の風潮である。」

Ep14 ある日の風景4（後書き）

さらっとソウジの奥さんの名前出してみました。

ちょっと短かったかな？

にしても、アギトは良い子やわぁ。

読んでいただきありがとうございます。

Ep15 ある日の風景5（前書き）

アンケートありがとうございました。

皆さんにいただいた意見を参考にさせていただこうと思います。

感想や指摘も大募集です!!!!!!

リン？「行くですよ、アギト。」

アギト「うんうん……。」

Ep15 ある日の風景5

キョウ達が三年生になり、2歳下のスバルも同じ小学校に入学した。

「キョーウくん!!」

「おう、来たか。ギンガ、スバル」

「おはよう。キョウにい、早く学校行こ!」

「おはよう、キョウ君。来週は体育祭でしょ。朝の練習に遅れるよ」

体育祭を一週間後に控え、キョウ達のクラスは朝に運動場で競技の練習を行っているようだ。

キョウ達と一緒に学校に通える事が嬉しいスバルはその練習をよく見に行くのだ。

「そうだな。親父、アギト、行ってくる!!」

「おう、行って来い」

「行ってらっしゃい。スバル学校終わったら遊ぼうな」

途中で何時ものようにシャリー達と合流し学校へ向かう。

【一週間後】

その日は雲ひとつない快晴だった。校庭には沢山の生徒や保護者達が集まっていた。

たまたま休みが取れたゼストとメガーヌも見に来ていた。

彼らはソウジ達とともに保護者用テントに居た。ナカジマ夫妻は娘達の晴れ姿を見ようと有給を取っており、アギトもよそ行用に子供サイズに変身していた。

その集団の中にはやはり有給を取ったのかレティの姿も見える。

「うお、ゼストさん達も見に来てるぜ」

「カッコ悪い所見せらんないね」

キョウとギンガは気合を入れなおすのであった。

「それでは開会の宣言を体育担当のキム先生お願いします」

生徒達が整列している前の壇上にさわやかな印象の教師が立った。

「みんな、怪我がないように気をつけ精一杯頑張ってほしい。それと、不正は許さん。ハアツ!!!」

一件爽やかに見えるが、彼は某忍者漫画の「ゲジ眉先生」のような熱血教師だ。生徒たちにも人気が高い。

その日のキョウの出番は全員で行うもの以外は、ギンガとの二人三脚と最後のクラス別リレーだった。

一方のギンガはその運動神経から個人種目はほぼ出ずっぱりのようだ。

午前中のプログラムにキョウは出番がなかったので応援に徹していた。

借り物競走ではグリフィスが教頭の「天狗の仮面」など無茶ぶりとも思えるカードに当たったりする一幕もあった。

筋骨隆々の教頭の下に向かう時、グリフィスは少し泣きそうになっていたが、厳つい見た目に反して子供好きの教頭は快く懐から同じような仮面を取りだし渡した。

教頭の娘であり可愛らしい見た目で生徒のみならず父親たちにも人気の高いユリ先生はそんな父の姿に呆れていた。

「お父さん、何やってるツチ……」

教頭の素顔は謎に包まれたままだ。

その他も様々な競技が消化されていった。玉入れではシャーリーが意外にも活躍をし勝利に貢献した。彼女の活躍を目にしたバスケット顧問のクローバー先生が彼女をスカウトする場面も見られた。

「Hey! You! その才能を生かしてはみないかい？」

「うっ、ごめんなさい先生。遠慮させていただきます」

「我がナム……もといバスケット部は何時でもYouを待っているぞ！」

失敗に終わったが……。

昼休みキョウ達は保護者席で親たちと昼食を取った。

「出番は午後からか。頑張れよ」

「はい、ゼストさん！」

ゼストにキョウは笑顔で答えた。其れを見てソウジは対抗意識を燃

やす。

「こら、ゼスト！ワシのセリフを奪うな！」

「良いじゃないか。俺にとってもキョウ達は子供の様なものだ」

おっさんが年甲斐もなく子供の様な言い合いを始める。

「はいはい、隊長もソウジさんもいい加減にしてくださいね」

メガーヌが窘める。喧嘩するほど仲がいいという言葉がぴったりな二人だ。

「スバル。午後の部の一発目に出るんだってな。頑張れよ！」

「うん、アギちゃん。一杯練習したんだ！！」

「へえ、一年生はダンスなのね。母さん楽しみだわあ」

「スバル！お前の可愛い姿は父さんがバッチリカメラに収めてやるからな！」

「もう、父さん恥ずかしいよ」

ゲンヤの言葉にスバルは答えたが、実は満更でないようである。

「キョウとギンガは二人三脚か。二人とも息ぴったりだから楽勝じゃないか？」

「キョウにいとギンねえは仲良いもんね。大きくなったら結婚する

のかな？」

「ぶっ！！！！親父い、それにスバルも！」

「ちょ、ちょっと。おじ様あ、変な事言わないで下さいよ。それにスバル！こつちに来なさい！」

「きゃーーーーー！」

お茶を飲んでいたキヨウは嘔き出し、ギンガはスバルと追いかけてこを始めた。

「あら？二人三脚はうちのグリフィスとシャリオちゃんのパアが一番をいただくわ」

「レティ提督、それは聞き捨てなりませんわね」

今度は母親達がい合いに発展しそうになる。

「ちょっと、母さん！それにギンガちゃんのお母さんも」

「ほら、良い大人がみつともないわよ。クイント。レティ提督も落ち着いてください」

グリフィスやメガーヌによって防がれたが。

「おばさん達、カツコ悪いなあ」

シャーリーの漏らした、的を得た一言で二人は反省したようである。

「これからもこういう日が続けばいいのだがな」

「そうじゃな」

最初に喧嘩を始めたおっさん二人はその光景を眺め呟いていた。

午後の部の一年生による創作ダンスはスバルが元気いっぱい笑顔で踊っていた。

「可愛いなあ、スバルちゃん。私も娘が欲しいわ」

「それならまずは、結婚しなさいよ！」

クイントとメガー又はスバルの姿を見ながら喋っていた。

「うおおお！スバル、スバル！こっちだぞ！」「あなた、周りの人に迷惑でしょ！」「すまねえ、クイント」

いつものように「トアップしたゲンヤのせいで中断されたが…」。

「次は二人三脚です。出場する生徒は1番集合場所のダイヤモンド先生の所に集合してください」

アナウンスが聞こえる。

「キョウもギンガも頑張れよ！あたしも応援してるからな！！」

「任せときな、アギト。一番になってきてやるぜ」

「アギトちゃん、応援よろしくね」

「私とグリフィス君が一番はいただくわ」

「キョウ君達には負けないよー！」

「キョウにい達が勝ったら私がチューし「スバルう！！！！！！」ごめん、ギンねえ」

子供達はテントから集合場所へ移動した。

「みんな、怪我しないようにな……」

ダイヤモンド先生は大きな体で口数は少ないが心優しい人物であり、保護者の中でも特に父親たちから人気が高い。

彼らからは「古き良き、強い父親の様な姿だ。」と一種の尊敬を集めている。

余談だが彼はベニマル先生と仲が良く、ふたりで飲みに行き教育理念について語り合う姿がよく見かけられる。

そういった姿を仕事帰りの父親たちから目にされているのも彼の人気の一つかもしれない。

「いくぜ、ギンガ！」

「うん、キョウ君」

このペア分けは授業中キョウが居眠りしていた間にギンガが立候補して決めたものだ。

他の生徒達はギンガの妙なプレッシャーに何も言えずすんなりと決まったのだが。

「僕達も負けないよ！」

「息の合い方なら私達も負けてないわよ！」

同じクラスだがシャーリー達も立候補した。各クラス2組ずつ枠があった事と、個人の能力で勝利が決まらないので勝算があったからだ。

「頑張れー!!！」

「負けるんじゃないわよ、ギンガ！」

「グリフィス！ギンガちゃん達に負けちゃだめよー!!!!！」

応援する母親達も熱がこもっていた。

「よーい!!『パーーン!!!!!!!!』」

競争の結果だがキョウ達ペアとグリフィス達ペアはほぼ同着だった。この2組みは他のペアに大きく差を広げてゴールした。わずかばかりグリフィス達の方が先にゴールをしたのだが。

「くっそ、負けたか」

「残念だったね」

「でも良い勝負だったわよ!!」

「僕達の勝ちだね。やったね、シャーリー」

普段から仲の良い4人はこれ位で仲違いするわけはなくその後、お互いを讃えあった。

その後も様々な競技が消化された。クラス別リレーでは毎朝ランニングをしているキョウ達の活躍もあり、彼らのクラスが一番になった。

体育祭が終了し、キヨウ達一家はナカジマ邸にてプチ打ち上げを行った。其処にはゼストやメガーヌも参加したいへん賑やかなものとなった。

これがキヨウ達とゼスト達が過ごす最後の穏やかな日となる事を、その時は誰も知らなかった……。

Ep15 ある日の風景5（後書き）

次からはいよいよ物語が進んでいきます。
読んでいただきありがとうございます。

Ep16 得たものと失ったもの(前書き)

戦闘機人事件って書くのが難しい。

本編でもあまり取り上げられてない気もするし。

アニメの知識だけしかないんでちょっと自信がないんですが……。

意見や感想募集しています。

Ep16 得たものと失ったもの

戦闘機人の研究施設。それは以前ゼスト隊の手により捜査が行われずでに存在しない過去の物と一般には思われていた。しかし、ゼスト隊の面々は以前の捜査で得た情報からそれ以外の施設の存在も想定し引き続き捜査を行っていたのである。

キヨウ達の体育祭も終わり、季節が変わっていくさなか、ゼスト隊による捜査が実を結び新たな違法施設が見つかった。

この事がある悲劇につながる。

ゼストはソウジの家に訪れていた。彼はキヨウの鍛錬を覗いた後、ソウジ達と夕食をとり、現在は縁側でソウジと酒を飲みつつ語らっていた。

「新しい施設が見つかったか……。明日、施設に突入するんだっとな？」

「ああ。戦闘機人の研究はまだ続いているらしい」

「胸糞悪いことしやがる。うちのチビどもやゲンヤの娘達みたいな子供が今も増え続けてるってえのか!!」

ソウジの杯を持つ手が怒りで震えている。

「人の命を何とも思わない研究を許しておくわけにはいかない」

一口で杯を空にし、怒りのこもった目でゼストは答えた。

「おい、キョウ！！ずるいぞ！！ボム使っなよ！！」

「当る方が悪いんだよ！！ザマあみろ、アギト」

二人の後ろからはテレビゲームで遊ぶキョウ達の声が聞こえていた。

「一人でも多く、こんな日常を子供達に送らせてやりたいものだな」

ソウジが空になったゼストの杯に酒を注ぐ。

「ミッドの平和を守る事がそれに繋がると、お前も、そして俺やレジアスも思っただって戦っていたものだな。俺は自分の出来る事をやるだけだ」

ソウジの言葉に答えた後、ゼストはキョウを呼ぶ。

「おい、キョウ！！」

「何です？ゼストさん」

キョウはゼストから声が掛かると、ゲームを中断して縁側にやってくる。

「お前は以前、大切な人たちを守れるようになりたいと言っていたな。まだその気持ちを忘れてはいないか？」

「はい。俺はそのために親父から『草薙流』を教わっているんです！！」

真剣な表情のゼストに対しキョウも普段とは違い意志のこもった声で答えた。

「お前の覚悟をみてやる。ソウジ、悪いが道場を借りるぞ」

「ああ。好きにせい」

その晩、道場にてソウジの立ち会いの下、キョウとゼストの最初で最後の「仕合」が行われた。

「喰らええ！！」

「ふん！！」

キョウの『毒咬み』をゼストは槍で何無く払い落とす。

「どうした。お前の思いはその程度のものなのか？」

キョウは自身の体を包み込むほどの大きさの炎をゼストに向け放つ。ゼストもそれに槍を合わせる。かなりの衝撃が道場に広がった。壁にかかっている掛け軸の様なものが床に落ちる程だ。

「ふふふっ。強くなったなキョウ」

衝撃の収まった道場に立っていたのはゼストだった。キョウは全力を使いスタミナを使い果たしたのか、片膝をついている。

「お前の思い、決意、確かに伝わったぞ!!」

満足そうにほほ笑みゼストは言う。

「でもゼストさんには通用しませんでしたよ……」

技を防がれたキョウは疑問に思い問う。現時点での自分の精一杯の力が全く通用しなかった事に少々凹んでもいる様だった。

「俺も自分の力で誰かを守りたいと願い鍛錬を続けてきた。お前はこれからもどんどん強くなる。その気持ちを忘れなければ……。さっきの一撃でその思いは伝わってきたぞ」

ゼストはキョウの頭をガシガシ撫でながら言葉を続ける。

「俺はそのうち、どこかで倒れるかもしれない。だが、お前がその思いを継いでくれ。お前の手の届く範囲で良い。助けを求める人がいるならその手を取ってやれる人間になってくれ!!」

真剣な、そして思いのこもった言葉にキョウは頷く。

「それではな。ソウジ、キョウ、アギト。世話になった」

「おう、また何時でも来い!!」

「ゼストさん、ありがとうございました」

「またね!!ゼストさん!!」

振り向かず右手を掲げ答え、そのままソウジの家を後にする。これが彼らの交わした最後の言葉となった。

この晩、ゼストがソウジ達の下に訪れたのは、きっと自分がもうこの場所に来る事が出来なくなるという事を感じていたからなのかもしれない。

「いよいよ、明日か……」

ナカジマ邸では可愛らしい顔で眠るギンガとスバルの顔を眺めながらゲンヤとクイントが言葉を交わしていた。

「ええ。戦闘機人の研究施設を野放しにしておくことは出来ないわ」

「あいつ等だっているんだ。絶対に死ぬんじゃないぞ。お前の帰る場所は此処だからな」

ゲンヤはクイントをギュツと抱きしめる。

「もちろんですとも。私が居ないとあなたや、あの子たちの面倒はだれがみるんです?」

「うっ、うるせいやい」

「ふっ、ありがとう。あなた。愛してるわ」

クイントはゲンヤの唇にそっと自分の唇を重ねた。

翌日、キョウはギンガとスバルとともに帰宅しようとして三人で校庭に出た。

すると、校門にはソウジが立っていた。

「あつ、おじちゃんだ!!」

「親父、わざわざ迎えに来てくれたのかよ?」

キョウとスバルの問いにソウジは悲痛な面持ちで答えた。

「ゼスト達が……。違法施設の潜入捜査で、全滅した」

その言葉を聞きギンガがソウジに詰め寄る。

「嘘……。おじ様、それじゃ、母さんは。母さんは?」

「奇跡的にクイントだけ生きていたらしい。今は先端医療技術センターに搬送されている。ゲンヤとアギトもそっちに向かっていて。予断は許さない状態らしい」

「そんな、じゃあ。ゼストさんは、ゼストさんはどうなったんだよ……」

「いやあああああああ！！！」

「お母さんが、お母さんが死んじゃうの？うええええん」

「取り乱すな！今車を付けている。これからクイントの下に向かうぞ！！！」

それから彼らは医療センターでゲンヤと合流した。ランプのともる

手術室の外のベンチにゲンヤは憔悴しきって座っている。アギトも泣き出しそうな表情でゲンヤの隣に座っていた。その場にいる一同は、皆無言で手術が終わるのを待ち続ける。

それから暫らく経ち、手術室のランプが消え医師が出てきた。ゲンヤは医者に詰め寄る。

「先生、クイントは、うちの女房は……」

「持てる手立てはすべて尽くしました。あとは彼女次第でしょう。こちらの方々もご家族で？」

ソウジ達をみて呟いた。アーデルハイド家とナカジマ家は家族同然の付き合いを続けていた。その場にいる全員が医師の言葉に頷き肯定をする。

「全力を尽くしましたが今夜が峠でしょう」

「そんな。先生、たった一人の女房なんだ。俺の命を引き換えにしても良い。お願いします。助けてください!!!」

こらえきれず泣きながらもゲンヤは医師に縋った。

「私達にはこれ以上はどうする事も出来ません。失礼します」

医師も辛そうに答えその場を去って行った。

「嘘だ。嘘だああああ!!!」

娘達も涙を抑える事が出来なかった。それはキョウもアギトも同じ

だった。

ソウジも彼らを抑えることなく立ちつくしていた。

その後落ち着いた一同はクイントが眠る病室に入った。ゲンヤその晩病室に泊まるようだ。

ギンガとスバルはソウジのうちに泊まることとなった。帰りの車の中、泣き疲れたのか子供達は全員眠っていた。

その日の晩、キョウはみんなが寝静まった後、家を飛び出していた。それに気付いたギンガも彼の後を付ける。

キヨウはランニングコースにある海の見える丘に来ていた。
其処で海に向かい激しく慟哭をあげるキヨウ。

「うわあああああああああ！……！」

「キヨウ君……」

思わずギンガは彼の下に寄っていった。

「ゼストさんに、これからゼストさんに、助けてもらった恩返しが出来るって思ってたのに……」

キヨウはギンガの存在に気付き振り返ると、めそめそとした声でそう答える。

それを聞きキヨウの頬をギンガは張った。

「辛いのは私達だって一緒よ……。母さんも容体がまだどうなるの
か分かんないし……。今のあなたの姿を見たらゼストさんはどう思
う」

そう言ってギンガはキヨウを抱きしめた。彼女も泣いていたのだ。

それからしばらくして二人は落ち着きを取り戻す。
二人並んで崖に腰掛けていた。

「昨日、ゼストさんに言われたんだ。思いを継いでくれって。助けを求める人の手を取ってあげれる人間になれって……」

「……うん」

「俺、局員になるよ。これからもっと強くなって、そして局員になってゼストさんの代わりに誰かを助けてあげたいんだ」

思いっきり泣いた後、キョウが発した言葉には意思がこもっていた。

「私も一緒じゃダメかな？」

「へっ？」

「私も一緒に強くなって、管理局に入るよ。一人よりも二人ならもっとたくさんの人を守る事が出来ると思う」

「三人だよ!!」

アギトもそこに現れた。二人の事を付けていたらしい。

「そうだな。三人で沢山の人を守るようになろう」

「うん!」

「これからもっと修行に打ち込むぞ。見ていてください、ゼストさん」

三人は無きゼストの遺志を継ぐために決意を新たにすのだった。

「これからはさらに厳しくしていこうぞ」

少し離れた場所にソウジは立っていた。三人の姿に涙を浮かべながら……。

こうして夜は更けていった。

翌日、医療センターのゲンヤから連絡があった。クイントが一命を
取り留めたと。

ソウジ達はすぐに向かった。

その日、一同が病室で見守る中、クイントは奇跡的に意識を取り戻
した。

一同は大いに喜び、泣いた。

これはクラナガンに住むある家族と隣人の物語である。

Ep16 得たものと失ったもの（後書き）

今いち資料集められなかったんで丸投げしました。

どこかに描写があるか知っている方教えてください。

ただし、アニメ本編で。

いかがだったでしょうか？クイントさんは生存という方向で物語は進みます。

意図的にゼストとクイントには死亡フラグを盛り込みました。

これからもよろしくお願いします。

読んでいただきありがとうございます。

Ep17 ある日の風景6（前書き）

ただいまGW中という事で実家に帰省しています。なので更新スピードがかなり落ちるとは思いますがよろしくお願いします。

今回はギンガ視点での話を少し書いてみました。

母さんが意識を取り戻して一週間が経った。

その間、父さんは毎日仕事終わりに母さんに会いに行っている。

もちろん私とスバルもその一週間、学校が終わったら毎日バスを使
って母さんの見舞いに通っているけど……。

事件の後の父さんと母さんは前以上に仲がいい。事件前の父さんた
ちも、娘の私から見ればすごく仲が良いって思ってたんだけど、
最近は輪を掛けてイチャイチャしてる。

一度、病室に入って時なんか父さんが母さんにリンゴを「あ〜ん」
って食べさせてあげている場面に遭遇したんだもん。

学校でそれをシャーリーや他の女の子達の話したら、うちの両親み
たいな夫婦を『おしどり夫婦』っていうらしい。

でも母さんは自分一人だけ生き延びたという事を聞いてとても落ち
込んでいた。

親友だったメガー又さんも、ゼストさんもあれからずっと行方不明
だ。私たち家族も、キョウ君のうちのみんなもゼスト隊の人たちに
関わったみんながあ的事件を悲しんだ。

身内びいきと思われるかもしれない。でも、母さんが助かってくれ
た事は凄く嬉しかった。

ひと月程経ち、母さんの容体や精神がある程度安定したのでお医者
様が母さんの体の事を話した。

その頃は私達もゼスト隊の事件からある程度立ち直る事が出来た。

お医者様の話だと、一般的な生活を送る分には問題がない位には母さんの体は治るみたいだ。

でも、戦闘はとてもしゃないけど無理みたいだと……。

少しぐらいの運動には耐えられるみたいだけど魔法を使う戦闘はもう身体が耐えられないそうさ。

魔導師としてはもう戦えない、事実上の引退勧告だったんだけど母さんはショックを受けている様子はなかった。

母さんはそれを聞いても

「命が助かっただけでも良かったんですもの。他の隊員達の方まで私は生きるわ。これからは専業主婦として生活をするから、あなた達と一緒に時間が増えるわよ。今まで寂しい思いをさせてごめんね、ギンガ、スバル」

と私達にほほ笑んでくれた。母さんはそのまま管理局を辞めて専業主婦になるみたいだ。

母さんが引退するのは残念だけど、うちに居てくれるって聞いて嬉しかった。

あの日からキョウ君は今まで以上に訓練を頑張っている。

朝のランニングも私のペースとあまり変わらない位で走るようになっていて、アギトちゃんもそれについてきている。

おじ様から聞いたけれど、それまではあまり熱心ではなかった魔法の訓練も積極的に参加するようになってきているそうさ。相変わらず苦

手みたいなんだけど。

訓練が休みの時はおじ様の車でよく母さんのお見舞いにきてくれる。アギトちゃんもスバルと一緒に病室で騒いでしまっただけで、私や父さんやおじ様から注意を受けるけど……。

キョウ君たちのみんなも母さんが助かった事が凄く嬉しかったみたい。

私も負けてられない。

だって一緒に強くなるうつつで誓ったんだから。

母さんが入院している間、朝食は私がつくった。其れまでもよくアギトちゃんと一緒に料理の手伝いをしていたからある程度の物は作れたんだけど、仕事をしながら毎日やっていた母さんってホント凄いなってことが分かった。

夕飯はキョウ君のうちでアギトちゃんと一緒に作る。スバルも最近には手伝ってくれるようになった。

病院から帰った父さんも合流しみんなでそのまま食事を取る。

うちに帰ってからスバルとお風呂に入ったり宿題をやって一日は終わる。

基本的に学校が終わると、キョウ君の家の道場を借りて私も訓練をする。

それまでは時々しか道場で訓練してなかったんだけど、母さんの容体が安定してからはほとんど毎日参加をしている。

内容は、母さんに今まで教えてもらった『シューティングアーツ』の型やそれまで覚えた技のお返し。それに筋力トレーニングをしている。キョウ君に触発されてノルマを前以上に増やして頑張っている。

おじ様も『ストライクアーツ』は出来るらしく、共通する部分は色々アドバイスをくれる。

接近戦のアドバイスとか凄く参考になっている。母さんも昔おじ様に習った事があるんだって言ってた。

母さんのお見舞いに行った時には新しい訓練の内容を教えてください。それを実践している。

退院したらまた稽古をつけてくれるみたいだから楽しみ。

お医者様もそれくらいなら大丈夫って仰ってたし。

それまで、母さんに褒めてもらえるように訓練を頑張らなくっちゃ。

加えて、キヨウ君との組み手の機会も増えた。

前にやって以来、時々行っていた仕合の様に魔法や技を使つての組み手を行っている。

あれから私もキヨウ君も使える技が増えたから結構激しい組み手になっている。仕合の方も今まで通りやっていて、勝率は五分五分位かな。

キヨウ君はわたしよりも沢山の技を持っているし、動きも速いから一度流れをつかまれると何もできずに一方的な展開になることがよくある。

そういう時は私の負けだ。

一方で私がガードを固めて、キヨウ君に一撃でも与えられると其処からは私のペースになる事が多い。

キヨウ君が撃たれ弱いわけではないっておじ様は言ってたけど、それじゃ私の力が強いみたいじゃないですか。

「ギンガの攻撃つて、どんどん重くなってるよな。技のキレとかも増したし。悔しいけど腕力じゃかなわねえな」

キヨウ君、それつて女の子に対して失礼だと思うな。

彼がそういつた事を口にするとは私はアギトちゃんと一緒にお仕置きする。最近はずバルも面白がつて参加してるけど。

おじ様はそんな私達を良く苦笑いして見ていた。

たまに見学に来る父さんと一緒に「若い頃のクイントみたいだ」つて二人で言ってる時もあるけど。

私の腕力が強いんじゃないかとキヨウ君が撃たれ弱いだけだよ。

私のペースになるとこれも一方的になる。キヨウ君も途中でガードを固めたりするけど、撃たれ弱いからガードが開いてそこに何発か良いのが当たるとすぐダウンする。

打ち合いになつても、こう着状態になるとキヨウ君が先に根をあげるんだもんな。

男の子なんだからもっと頼もしくなつて欲しいんだけどなあ。

休みの日は今まで通りシャーリー達と遊んだり母さんのお見舞いに行つてる。

そんな感じで私達は過ごしています。

クイントが入院をしているある日、ソウジは一人とある場所に来ていた。

クラナガンの市街の大通りから少し裏道に入った所に小さな喫茶店があった。そこに入っていく。

「おう、ソウジ。久しぶりだな」

「そうだな、レジアス。お前も元気そうで何よりだ」

ソウジをその店で待っていたのはレジアス・ゲイズ。地上の英雄と呼ばれる人物だった。彼はゼストとソウジの友人であり、これまでソウジが管理局を引退してから多忙であったので会う機会がなかったのだ。

二人はコーヒーを注文しそれが届くまで近況報告等の話を続けた。

「それで、ワシをこんな所に呼び出して。何か用事があったのじゃろ？」

「ああ。お前は、ゼスト達の事聞いたか？」

その言葉でそれまでのにこやかな雰囲気が変わった。

「もちろんだ。ナカジマ達がうちの隣に越してきていたからな。レジアス、施設の突入捜査の件はお前さんにも報告が入っていた筈じやろ？」

「もちろん聞いていた。しかし、地上はお前がおった頃から人手不足の問題に悩まされ続けている。どうする事も出来なかつたんだ……」

二人とも悲しそうであつた。共通の友人であるゼスト・グランガイッスを失つたのだから。

「ワシはここで立ち止まるわけにはいかんだ。ミッドの平和を守るためには改革を進めねばならん。だがな、ゼストを失いお前も管理局を辞めている。これでは両翼をもがれたようだ」

レジアスの言葉に用件が分かり、ソウジがゆっくりと口を開く。

「……ワシは復帰できんぞ」

「何故だ？お前、まだ鍛錬を続けてるみたいじゃないか。戻ってきてはくれんのか。頼む」

レジアスがソウジに頭を下げる。その店に客は現在彼らだけだったのだが、もし他の客が居たのならば、地上の有名人であるレジアスが頭を下げるという光景に大騒ぎになっていた事だろう。

「すまん。ワシはもう魔導師として戦うつもりはないんじや。じやが、ワシの息子があゝる」

「以前、ゼスト達が保護したという人造導師の少年か？そつういえばゲンヤ・ナカジマも戦闘機人の少女を養子にしていたと聞くが……」

レジアスの言葉にソウジは反応した。

「うちの倅や、嬢ちゃん達をそんな風に呼ぶな……！」

珍しく声を荒げた。ソウジの言葉にレジアスは謝る。

「すまん、配慮が足らなかつた」

「いや、ワシも取り乱してしまつた」

二人はぬるくなり始めたコーヒーを飲み、心を落ち着かせ話を続ける。

「それで、お前の息子がどうしたんだ？」

「ワシの息子にはうちの『草薙流古武術』を叩き込んであゝる」

「ほう、あのベルカから伝わっている拳法をか？一応あれもレアスキル扱いに出来るんだつたな」

「あゝ。それでの、ワシの代わりに息子が局員になるんじやよ。ゼストの後を継ぎたいと最近鍛錬に力を入れてあゝるわい。ナカジマの上の娘も鍛錬を頑張つてあゝるぞ。その子も入局したいらしい」

「本当か？それで、腕前の方はどうだ？」

「息子の方はまだ免許皆伝とはいえんが、そこそ物にはなっている。嬢ちゃんの方もまだまだじゃが『シューティングアーツ』をある程度は使えておるよ」

「ほう。なかなか楽しみじゃあないか」

「二人とも小学校を出たら陸士訓練校に行くつもりじゃから、あいつらが局員になればきつとお前さんの力になると思うぞ」

「そうか、それならば待っているでしょう。次の世代か。ワシもお前も歳をとったもんだな」

「そうじゃな。そう言えば、オーリスちゃんは どうしておる？」

「あいつも管理局に入ったよ。ワシの娘に恥ずかしくない局員になると張り切っておるよ。子供が大きくなると嬉しくもあるが、寂しくもあるな」

それからしばらく二人は語り合っていた。互いの子供の事や、亡き親友ゼストの事について。

それからしばらく経ちその日はクイントが退院する日になった。
ゲンヤが荷物を持ち、ギンガとスバルがクイントの両手を引き車ま
で移動する。

「母さん、早くー!!」

「お母さん早くおうちに帰ろっ!!」

「あらあら。そんなに慌てないで。父さんを置いて行くの?」

「へえ、へえ。ふう〜。おら、お前ら!!俺を置いてくつもりか?
荷物あるんだからちよっと待てよ!!」

「お父さん、遅ーい!!」

一家は車の乗り込み帰宅していった。

「おかえりなさい!退院おめでとうクイント(さん)!!」

「

家に帰るとソウジ達一家が退院祝いのパーティーを準備してくれていた。

「料理は私とギンねえとアギちゃんで作ったんだよ！！」

クイントの手を引き入ってきたスバルが言った。

「飾りつけは、俺や親父やゲンヤのおっちゃんで作ったんだ」

キヨウも答えた。

「私の為にこんなことしてくれるなんて……。ありがとう、みんな嬉しいわ」

涙を浮かべつつも、クイントは笑顔で一同に礼を言った。

その後、みんな楽しく過ごす事となった。夜までナカジマ家からは笑い声が聞こえていた。

クイントは退院してから日中も家に居る事になり、アギトがよく遊びに来るようになっていた。

アギトがクイントから料理を教わったりするのでソウジ達の食事は

以前よりさらに充実する事となる。

ギンガもスバルもクイントに負担をかけないように夕飯の支度に手伝いをよくしている。

クイントは組み手などは行えなくなったが、以前に増してギンガを鍛えるようになった。まるで自分の持てる技を全て教え込むようにギンガもそれをどんどん吸収していった。

学年が変わり、それからまたいくつかの季節が流れ、スバルが三年生になると彼女も鍛錬に加わるようになった。

なのでクイントは娘達二人に『シューティングアーツ』を伝授した。ギンガはクイントに教えられて母親譲りの正統派とも呼ばれそうな戦闘スタイルに育っていった。

一方のスバルは始めたばかりで未熟ではあるのだが、幼いころからキョウ達やクイント達自身の鍛錬を見ていた事の影響かセンスに溢れ、ものすごいスピードで技をマスターしていった。

見て覚えたのか、アギトに教わったのか『草薙流』の動きを取り入れている部分も随所に見られるのだが。

キョウはソウジにより様々な技を伝授された。以前は苦手としていた遠距離戦もある程度はこなせる様にはなっていた。

キヨウとギンガは小学校の間様々な鍛錬を行い自らを鍛えていった。卒業後、陸士訓練校に入り、局員になって多くの人を救えるようになるために。

それからまた幾つかの季節が過ぎた。

「キヨウくん！」

何時の様に朝ギンガが迎えに来る。キヨウ達はユキを拝んでいた。

「おい、キヨウ。ギンガちゃん来たみてえだぞ」

「おう、親父。じゃあ、行ってくるぜ！アギト準備は良いか？」

「もちろんだつて、キヨウ。これからはあたしも一緒だ！親父、しばらく帰らねえけど寂しがんじゃねえぞ！！」

「何を言っておるか。キヨウ、それにアギト。頑張つて来いよ！」

「行ってきます!!」

これから、また新しい日々が始まる。

Ep17 ある日の風景6（後書き）

家だと何か調子が出ない。

次から訓練校編となります。

レジアスさん出しました。

また変なオリキャラが出たり独自展開があつたりしますがよろしく
お願いします。

読んでいただきありがとうございました。

EP18 新しい出会いと(前書き)

今回から陸士訓練校編です。

また新キャラとかが出ます。

感想等よろしくお願いします。

Ep18 新しい出会いと

キョウ達は第四陸士訓練校へ入学する事となった。そこは彼らの家から少々離れておりバスに乗って移動していた。バスを用いても一時間程度かかる距離だ。

「キョウ君、これ何だ？」

「うん？そのチョーカーがどうかしたのか？」

バスの車内で隣同士にキョウとギンガは座っていた。ギンガはその日、キョウが初めて見るチョーカーを首にはめていた。それは中心に青い宝石が佇んでおり彼女にとても似合っているものだった。

「これ、母さんから貰ったデバイスなんだ。母さんが両手にはめていた『リボルバーナックル』ってアームデバイスだけど、左手の方だけ私につて。右はそのうちスバルにあげるみたい」

「へえ、クイントさんの」

「うん、それでキョウ君はデバイスはどうするの？キョウ君も魔導師になるんだし必要なんじゃない？」

二人の会話にキョウの肩に座っていたアギトが割り込んだ。

「へっへーん！ギンガ。キョウは私を使うからデバイスなんか必要ないんだよ。なあ？」

彼女は古代ベルカの融合騎。ユニゾンデバイスである。非常に珍し

いデバイスだが、数年前に起こった『闇の書事件』においてユニゾンデバイスの存在が確認されていた。

加えて、彼女はそれ以前に管理局に保護されていたのだ。

その際に、現存する唯一の融合騎であると管理局に登録が為されている。

彼女を調査した結果、保護される前の実験の後遺症か、キヨウしかユニゾンが出来ないようになっていた。

なのでキヨウ専用のデバイスとして登録され、使用するには問題がないとされているのである。

「そうだな。アギト以外には考えられねえな」

キヨウの言葉にアギトは満足そうな笑顔を浮かべる。

だが、キヨウは言葉を続けた。

「でもな、アギト。俺は今までお前の事を道具だなんて思った事はないぜ。俺にとってお前は妹、家族なんだ。だから自分を物みたいに使うとか悲しい事言わないでくれ」

キヨウの言葉にアギトは少々落ち込んでしまったようだ。自分の事を家族だと思っているというキヨウの気持ちを自分の言った言葉が裏切ってしまったように感じられたからだ。

「う、うん。ごめんなキヨウ……」

シユンとしてしまったアギトを膝の乗せ、頭を撫でながらキヨウは言う。

「そう落ち込むなよ。俺達は相棒なんだ。デバイスとマスターとし

てじゃなく、兄弟として二人で強くなつていこうぜ！！」

アギトは静かに涙を流しながらキョウに抱きついた。キョウはそんなアギトの頭を優しく微笑みながら撫で続けていた。

「ホント、初めて会ったときから二人って仲良しだよな」

一人蚊帳の外にされたギンガも二人の事を微笑ましく思いつつ呟いていた。

それから十分ほど経ち、落ち着いた様子のアギトが、何かを思い出してキョウのバッグをあさり始めた。其処からは白い封筒が取りだされた。

「これ、親父が訓練校に着いたら教員に渡せつて。忘れるとこだったよ」

「へえ、親父が。そんなのあつたんだ。あんま、良い予感はしねえな」

「きつと、おじ様の事だから、また何か私達を驚かせるような事書いてるんでしょ？」

「だよな。担当教官が決まったらすぐに渡せつて」

「……はあ……」

ソウジの性格を理解している三人は思わずため息をついてしまった。

「どうやら着いたみたいだな。行こうぜ、ギンガ、アギト！！」

三人はその日入学するであろう少年少女でこった返している第四陸士訓練校に足を進めた。

「おい！キョウ君。ギンガちゃん」

「あつ、シャーリー！」

校門の近くに居た少女がキョウ君に声をかけた。それは小学校の同級生だったシャリオ・フィニーノだった。彼女と仲の良いギンガが真っ先に反応した。

「そう言えばグリフィスはこっちに来ないんだっけ？レティおばさんみたいにキャリア組を目指すっつてたっけ？」

「キョウ君、そんな言い方しているとレティさんまた落ち込んだじゃう

よ

以前キョウがグリフィスの家に遊びに行った際、おばさんと口にしてしまいレティがショックを受けてしまった事があった。

その様子を見ていたシャーリーはすぐに今の発言を訂正するよう諭す。

クイント以外、友人の母親に「君ちのおばさん」と言ってしまうキョウは癖でレティもそう呼んでしまう事があるのだ。

「そうだった。ゴメン、シャーリー」

「グリフィス君、無事に合格出来たから良かったよね。それはそうと、シャーリーって通信科に通うのよね？」

「そうだよ。ギンガちゃん達は一般だったよね。ってあれ？アギトちゃんも一緒なんだ。もしかしてキョウ君と？」

「そうだけ、シャーリー！私とキョウは一心同体なんだから！」

「そっか。融合騎なんだよね？凄いなあ」

魔導師としての能力を持たない彼女はデバイスマスターの資格に興味を持っていた。何よりデバイスが大好きなのだ。以前アギトに自身が融合騎であると告げられていたのだが、改めて本来のサイズに戻ったアギトを見て血が滾ったのか目を輝かせている。

「なあ、シャーリー。アギトは俺の相棒であり妹なんだ。あんまりそついう目で見ないでくれよ」

「そうだね、ごめん……」

キヨウの言葉に彼女は心底反省しているようだった。親友の妹であり何度も遊んだ友人に対して明らかに向けてはいけない視線を送ってしまったのだ。

「私の事は気にすんなよ。事実なんだし。それに友達だろ？」

アギトの言葉に少し元気を取り戻すシャーリー。その後、四人は暫らく談笑し本来の調子を取り戻していった。親友同士なのだ。彼女の友情はそう簡単に壊れるものではないようだ。また同じ学校に通えて嬉しいとお互いに笑顔を浮かべていた。

「じゃあ、私はこっちだから。授業とかで一緒になったらまたよろしくね！」

「うん、また一緒にご飯とか食べようね！」

「おう、またな。あと、ギンガお前は食べる量をへ「キヨウ君、何か？」いや、なんでもねえ」

「「キヨウ（君）、デリカシーで言葉の意味分かる？」

キヨウの発言に冷めた目で言葉を遮るギンガ。キヨウにつっこむアギトとシャーリー。

何時もの様なやり取りをし笑顔で別れていった。

入学式は滞りなく終了し、その場で入学後の説明が行われた。アギトの事は事前に教員の方へ連絡があったらしく特に問題はないようだった。一部の生徒は少し反応していたようだが、「可愛い！」などの声上がる位でおおむね好意的な反応だった。寮生活となりもちろん男女は別の棟である。授業に関しては男女同じコースのものは一緒に授業を受ける事が出来るようだ。キョウとギンガはもちろん同じクラスの様である。キョウ達は割り当てられた教室に移動していった。

「席は、ここみたいだな」

「うん、そうだね。（隣同士じゃないんだ……）」

「うわあ、初めての学校だから楽しみだなあ」

キョウとギンガの席は前後となっていていようだ。少々ギンガのテンションが落ちているようだが。一方のアギトは初めての環境で嬉しそうだった。

「おつ、あんさんがワイの隣なんか？ユニゾンデバイス使っとるっちゆう」

キョウの隣に割り当てられた少年が席に移動してきた。個性的なしゃべり方で話しかける。

「キョウ・アーデルハイドっていうんだ。よろしく。それとアギトはデバイスじゃない。俺の妹だ。あんたは？」

「そうなんか、すまん。アギトちゃんもすまんかったな。ワイはシイ・ケンスウっちゆうんや。ケンスウって呼んでな！」

「私は気にしないからいいよ。私はアギト・アーデルハイド。よろしくな！」

素直に謝罪した少年にアギトは悪感情を抱いてはいないようだ。キョウも初対面では仕方がないと思う部分もありそれ以上は続かなかつた。むしろ知らない人間に少々とげのある言い方をしてしまったと謝罪をした。

「いや、こつちも悪かった。ちょっと言い方が刺々しかったし。俺の事はキヨウって呼んでくれ。よろしくな、ケンスウ！」

「おおきに、キヨウ君、アギトちゃん。言いにくいなあ。そうや、キヨウはんって呼ばせてもらうわ」

「ああ、いいぜ。ああ、それと……」

「隣の子、来たみたいだね」

キヨウが言葉を続けようとしたら後ろからの声が遮って来た。

ギンガである。

「おう。そつちはまだみたいだな」

「この子誰や、キヨウはん？えらい別嬪さんやないか。ワイにも紹介してくれや！」

後ろから話しかけてきたギンガに反応したようだ。

「別嬪だなんて。私はギンガ・ナカジマって言います。キヨウ君とは幼馴染なんだ。ケンスウ君だよな？よろしくね」

「ギンガはんって言うんやな！聞いてったかもしれんけどワイはシイ・ケンスウて言います。それよりギンガはん、今付き合って「もう！ケンスウ！また可愛い女の子にデレデレしてるんでしょ！！」のわあ、堪忍やあ。アテナ！！」

ギンガを口説き始めようとしたケンスウに、いつの間にかギンガの

隣に座っていた桃色の髪の可愛らしい少女が怒声を浴びせた。

「うわ、何時の間に？」

「こんな近くで気配を感じさせねえって……」

「ウソ、私気付けなかった……」

キョウ達に気配を感じさせずに席に移動したアテナと呼ばれた少女が自己紹介を始めた。

「私アテナ・アサミヤって言います。キョウ君、アギトちゃん、それにギンガさん、よろしくね。それとケンスウ！何時になったらその癖直すのよ！あれだけ私に「好きだ！！」だの「愛してる！！」って言うてたくせに！」

話しつつもピンポン玉サイズの桃色の魔力弾を放つアテナ。ケンスウの頭に見事にヒットした。威力はあまり込められていないようだ。

「堪忍やあ、もうせえへんから、許してえな」

キョウ達も自己紹介を行う。

「あ、ああ。俺はキョウって呼んでくれ。アサミヤさんよろしく」

「わ、私はアギト。よろしくお願ひします」

「ギンガ・ナカジマです。よろしくね、アサミヤさん」

キョウとアギトは彼女の剣幕に少し引いてしまった。ギンガは特に動じていなかったが。

「みんな、よろしくね。私の事はアテナでいいですから。ギンガさん、これからお隣みたいですけどよろしくお願ひしますね」

ケンスウに対する態度とは一変してとても礼儀正しく答える。

「俺はアテナって呼ばせてもらうぜ。それより、いきなり背後に現れて驚いたけど、アテナって？」

「アテナはワイの幼馴染なんや。小学校の間ずっとワイが片思いしてたんやけど、ついこの間付き合う事が出来るようになったんや」

ケンスウの言葉に照れつつアテナが続ける。

「ごめんね、ケンスウが迷惑かけたみたいで。ギンガさんも迷惑だったでしょ？」

「ううん、大丈夫だよ。ケンスウ君面白い人だね」

「俺の知り合いには居なかったタイプだからちよい面喰ったけど良い奴みたいだな」

ケンスウの言葉にキョウとギンガは互いの顔を見合ってしまい赤くなってしまう。

誤魔化すようにアテナの問いに答える。

ケンスウは気付かなかったがアテナには気づかれましたよ。彼女は何も言わなかったが面白いものを見つけたという顔をしていました。

「アテナはな、レアスキルの『瞬間移動能力』つちゆうんを持つてるんや」

「レアスキル？スゲーー！！瞬間移動とか！！」

「そんな便利なものじゃないよ、アギトちゃん」

アテナがアギトの発言に答える。

「私の能力は10m以内でしか使えないし、結界が貼られてたりすると内側には入れないんだ。現れる時も魔力光で位置が分かっちゃうし」

「それでも後ろを取られたのは驚いたぜ」

「うん。私達五歳位から一緒に鍛錬していたから、気配を探るのが結構自信あつたんだよ」

「ほんと、私も感知できなかつたんだ。スゲーよ、アテナ！！」

「いきなり現れてズドンやさかい、身体が持たんわ」

「ケンスウが変なことしなければ良いだけじゃない」

五人は喋っている間に互いに打ち解け合う事が出来たようだ。

「キヨウはん達ももしかして武道かやってるんか？」

ケンスウの問いにキョウが答えようとした時、教壇の方から声が届く。

「一同、席につけ！！今日から貴様らは訓練生だ！気を引き締めろ！其処には眼帯を付け、軍服の様な服を着た長身でやせ形の男が立っていた。」

Ep18 新しい出会いと（後書き）

はい、三人出しました。

いい加減付き合えばいいのにつて二人を。

主人公達の刺激となつて欲しく思います。

最後の人もバレバレだな。

陸士訓練校編もよろしく願います。

もう一話あげたらいいな。

読んでくださりありがとうございました。

Ep19 炎の担い手1（前書き）

おかげさまで20話を超える事が出来ました。
PVも三万を超えてこれも皆様のおかげです。

ありがとうございます。

少しでも面白い文章が書けるよう、今後とも精進いたしますのでよろしく願います。

ケンスウ「どないですか？」（このねえちゃん、ごつつ可愛いな。）

はやて「ぼちぼちでんな。」（久しぶりに出たと思ったたらまたこれかあ。）

教壇に立つ男性。

どうやら彼がキヨウ達の指導教官のようだ。

彼の声にそれまで席を離れ談笑をしていた訓練生たちは一斉に席に着き、彼の言葉に耳を向ける。

「私が今日から貴様らの指導を行うカーネル・ハイデルンだ。教官とでも呼べ。私の仕事は貴様らひよっこを使い物になる人材に育てあげ送り出すことだ。私の言う事をよく聞いて理解しろ！返事は？」
高圧的な態度だが多くの訓練生は事前に訓練校とは厳しいものであると理解しているようであり、返事を返した。

「気合が足らんな。それと頭と終わりにサーを付ける」

((((((サー、イエッサー！！！！)) ((((

不思議と全員の返事は同じものとなっていた。

その後、入学式では言及されなかった細々とした規則や説明がなど行われた。

午前に入学式があり三時ごろにはこのオリエンテーションも終了した。

「以上で説明は終わる。何か質問があるならこの後私の下に来い。」

明日からは訓練を始める。厳しくしていくぞ。弱音を吐くものは要らん。寮については配布されている資料を見る。以上だ」

そう言うと彼は教室を出て行った。

「なあ、キョウ。親父から預かった封筒を渡しに行かなくて良いか？」

「そうだな。行くぜ、アギト。じゃあ、ギンガにケンスウ、アテナ。また後でな」

キョウとアギトは一同と別れハイデルンの後を追った。

教室を出て職員室近くの廊下で彼を引きとめることに成功する。

「失礼します、教官」

「何だ。用件があるならまず名乗れ」

「はい、申し訳ありません。一回生のキョウ・アーデルハイドと申します。父から担当の教官に渡すよう言われているものがありましたので届けに参りました」

「アーデルハイド？そうか、ソウジの奴の……」

「父を御存じで？」

「ああ。私と奴は此処の同期だ。それで届けモノとは？」

「はいこちらです」

アギトが封筒を渡す。アギトもしっかりと敬語で話している。

「ふむ。お前は、融合騎か……。話には聞いている」

「はい。アギト・アーデルハイドです。よろしくお願いします」

「ああ。よろしく」

そういうとハイデルンははがきの中身に目を通した。

「ほう、お前も『草薙流』を使うのか？」

「はい。未だ未熟ではありますが」

「明日からの訓練で使うデバイスについて書いてあった。アイツが此処に居る頃に使っていたものだ。まだ倉庫に保管されているはずだ」

「教官。それでは私はどうなるのでしょうか？」

デバイスという言葉にアギトが反応した。

「アームドデバイスを支給するから問題はない筈だ。明日の実技訓練の際に渡せるよう手配をしておく。友人の息子だという事で甘くするつもりはない。明日からビシビシ扱いて行くから覚悟しろよ。」

それではな」

「ありがとうございます。よろしく願いします」「

その後キョウとアギトは男子寮の自分の部屋に荷物を運びに移動していった。アギトも荷物を持つために変身魔法で大きくなっている。男子寮の中に女の子がいるので他の生徒達の注目を集めているようだった。二人は特に気にしてはいないようだが。

「203号室か。サンキュー、アギト。どうやらここみたいだな？」

「寮って相部屋みたいだけど、どんな奴が一緒か楽しみだな」

キョウ達の部屋はシングルベッドが二つと備え付けの机が二卓。それとクローゼットに本棚と質素なものだった。中には荷物を広げたまま筋トレをしているケンスウがいた。

「何やあ。ワイの同室ってキョウはん達やったんか。これからよろしく頼みます」

「うおっ、ケンスウか。よろしくな」

「よろしくー！」

キョウとアギトとケンスウが同じ部屋になるようだ。ケンスウは大きくなったアギトに目を向けた。

「アギトちゃん大きくなれるんか？それやと男子寮じゃ、まずくならへんか？」

「私は何時も小さいサイズで生活するから大丈夫だろ？今は荷物があつたからこうしてるだけだし」

「ああ。それにアギトは俺の妹だし何時も俺の部屋で寝ていたもんな」

「そうなんか。アギトちゃんもホンマ可愛ええな。ワイと「おい、ケンスウ」なんやあ、キョウはん」

人間サイズの変身したアギトは今までの訓練で技術が向上したのかキョウより一つ二つ小さい程度の容姿になれるようになっていた。その見た目は非常に可愛いのだ。ケンスウがそんなアギトを口説こうとしたのでキョウは釘を刺す事にした。

「妹に手を出すとどうなるか、分かってんだろっな？」

笑顔だが妙に迫力のあるキョウにケンスウは引き下がる事にした。

「そつやそつや。ワイ窓際のベッド使わせてもらってもええ？」

「おう。よし、アギト荷物を片づけようか？」

「そうだな。つつつか、クイントさん私の服までギンガに渡してくるんだもんな」

キヨウ達は荷物をクローゼットや棚に収納し始めた。アギトの服はバスの中でギンガに渡されていたようだ。

「クイントさんって誰や？」

「ああ、ギンガのおふくろさんだよ。家が隣なんだ」

「私用の小さいサイズの服を作ってくれんだよ。魔導師を引退して主婦になってから、前以上に量が多くなっただよな」

アギトの服を作るのがクイントの日課となっているようだ。

「ギンガはんの母ちゃんか。きつと別嬪さんなんやろうな？」

「クイントさんは私の憧れる人なんだ。それとギンガには、二つ下にスバルって妹もいるんだぜ。私の親友なんだ!!」

「おお。美人姉妹にその母親かあ」

ケンスウは鼻の下を伸ばしている。

「ケンスウ。自重しなよ。またアテナに怒られるよ」

「そうだが、それよりお前も荷物を片付けたらどうなんだ」

「せやった。すまんすまん」

それから彼らは談笑しつつ荷物を片付けて行った。

「おっ、ギンガからか」

七時頃になり部屋で寛いでいたキヨウにギンガから念話が届いた。

キヨウとギンガは入校前にそれぞれある程度の魔法も訓練してきている。

ギンガは何でもそつなくこなせるようになっており、アギトも不得意なものはない。

一方のキヨウは『草薙流』の修行と同じで射撃魔法が苦手であった。補助系統の魔法も不得意で、身体強化や高速移動以外は平均に劣るかもしれない。その二つは目を見張るものがあつたのだが。努力は続けていたがあまり上達はしなかつたようだ。なので、補助系の魔法は相棒のアギトがカバーをするという形にある程度落ち着いているのである。

だがギンガにはない飛行魔法の適性がキヨウにはあつた。

ソウジが試させた所すんなり空を飛んだのだ。

キヨウ本人は『草薙流』が使い辛いとあまり好んではないようだった。それにゼストの様に地上で

働きたいと思っているのだ。

もちろん、使えるものは使っていくと訓練もちゃんと行ってはい

る。念話の内容は夕飯を一緒に取ろうというものだった。寮自体は男子

棟と女子棟で別れているのだが、二つの建物はその間にある食堂や訓練室などの施設棟で繋がっており、自由時間等は交流が取れるようにされているのだ。

ギンガによるとシャーリーとアテナも一緒の様で、二人とも打ち解けているとのことだった。

「アギト、ケンスウ。ギンガが今から食堂で飯でもどうかって？アテナと、それともう一人俺の幼馴染が居るんだけど……」

「シャーリーか！キヨウ、早く行こうぜ！」

「キヨウはんの幼馴染って、もしかして女の子かいな？楽しみやなあ」

「アテナもいるんだし、お前それ直した方が良いぜ。アギト、せっかくなんだしクイントさんから貰った服に着替えれば？」

「ええ、動きにくいし良いよ。フリフリのレース付いてるし」

「何い？アギトちゃんぜひ！！」

クイントは相変わらず可愛らしいデザインが好きなようだ。二人に勧められアギトはシャワールームで着替えるようだ。彼女自身見られるのが恥ずかしいだけで、クイント製の服を嫌っているわけではない。大好きなクイントからの贈り物でもあるのだし。

「うわあ、ぐつつ可愛いらしいな」

「あんまりじろじろ見んじゃねえ！」

アギトは黒のミニスカートタイプのワンピースに着替えた。肩ひもで吊ってあり所々、黒のレースがあしらわれている。クイントの作る服はアギトによく似合うものばかりなのだ。

「可愛いじゃん、良く似合ってるぜ」

「ボソツ（それをギンガにも言ってみれば喜ぶのに）」

「アギト何か言ったか？」

「いや、何でもねえ。それより早く行こうぜ！」

「そうだな。ケンスウも待たせてワリいな。んじゃあ、行くとするか」

キヨウ達は食堂へ移動していった。

Ep19 炎の担い手1 (後書き)

今日中にもう一話あげます！

読んでいただきありがとうございます。

ハイデルンのファーストネームが分からないので某漫画の神の国の人から借りました。

見た目似てるんで。

Ep20 炎の担い手2（前書き）

続き行きます！

前回のアギトの服装はテイルズオブヴェスペリアのリタのゴスロリ衣装をイメージしてください。

キョウの新デバイス（中古）とバリアジャケットも出します。

新キャラもね。バリバリでギャラクティカなあの人を。

前書のネタで登場人物達の事を考えるとK、とかクリザリッドのネタが使えない。

E p 2 0 炎の担い手2

キョウ達が食堂に移動するとギンガ達三人は席についてお喋りをしていた。

何やら、ギンガを二人がからかっている様子なのだが。

「ワリい、待たせちまったか？」

「おや！ギンガ、愛しの彼がおいでなすったよ」

「もう、シャーリー！私達はそういうのじゃないから。アテナも笑っていないで止めてよ」

「ふふふふ。だって二人とも面白かったんだもの」

キョウが話しかける際も何やら盛り上がっているみたいだった。シャーリーは小学校の頃のギンガの様子でキョウに好意を抱いていると見抜いていた。

アテナも教室でのやり取りで感じているようだ。二人にとってギンガはからかいがいのある人物として映っているようだ。

「シャーリー！！」

「アギトちゃん！！ うわあ、その服クイントさんでしょ？ 良く似合ってる」

「ええ。凄く可愛いわ。ギンガさんのお母さんって手先が器用なんだね？」

「私も練習はしてるけど、まだまだ母さんにはかなわないな。アギトちゃんさっそく来てくれたんだ。可愛いわよ。母さんも喜ぶと思っわ」

「そっか？キヨウ達が着換えろってうっさいからさ。へへへ、似合ってるかあ」

合流したアギトとともに4人でガールズトークが再開された。

「わ、ワイはシイ・ケンスウっていいいます。シャーリーちゃんよろしくな！」

其処に混ざっていくケンスウ。ある意味尊敬できる。シャーリーも自己紹介をした。

「私はシャリオ・フィニーノっていいいます。私は魔法使えないし通信科なんだ。もう呼んでくれるけど、シャーリーで良いから。ケンスウ君よろしく」

「うわあ、キヨウはんの知り合いの子って可愛い子ばっかやな。ってスマン、アテナ」

アテナからプレッシャーを感じたのかケンスウはすぐさま謝った。

「シャーリー、彼がさっき私が言ってた彼氏のケンスウなの。ごめんね、言い聞かせとくから」

ケンスウの様子を見て一同は笑ってしまった。

「そんなじゃ、いい加減飯にしますか。ギンガ達待っててくれてたんだろ？」

「ありがとうキヨウ君。うん。みんなで取りに行こう」

一同は一緒に夕飯の席を囲んだ。ギンガの食事を初めて見て驚く二人の姿があったり、小悪魔のような外見のアギトに周りの女子たちが群がる場面も見られた。

他にもケンスウとアテナの馴れ初めを聞く場面もあった。

「へえ、それじゃあアテナ達も幼馴染なんだ？」

「そや、小さい頃から同じ道場で稽古しとった兄弟弟子なんやで」

「それなら私とキョウウ君に近いんだね」

「俺とアギトは『草薙流』でギンガは『シューティングアーツ』なだけでどな」

「私達の家って隣同士だからうちの道場にギンガも良く来てたんだもんなあ」

「二人とも鍛錬するってなった時はアギトちゃんが一緒に遊んだんだよね」

「四人とも本当に仲が良いんだね」

「こんな美少女に囲まれて。キョウウはんホンマ羨ましいな」

「ケンスウって昔からこんな感じなんだ。私と付き合う前もいろんな女の子に声をかけるし。自分から私に告白したくせに付き合い始めてからも治らないんだもの」

「うーん。ケンスウ君。そういうのやめた方がいいよ。ねえ、シャーリー？」

「ちょっと、女の子としては嫌だね、ギンガちゃん」

「ケンスウって変身魔法を使った私にも声掛けたんだ」

女性陣からの評価が下がるケンスウ。

「ちやうんや。綺麗な子みたら声をかけるんわ男の習性さかい。なあ、キヨウはん？」

「お、俺か？人それぞれと思うけど、アテナが居るんだし辞めとけよ」

「ワイかて別に声掛ける子と付き合いたいとは思ってへんねん。アテナが一番なんや！でも人生が少しでも鮮やかな色になるように可愛い子と知り合いになりたいだけなんや！！」

「私が一番か。でも程ほどにしてよケンスウ」

「おお。アテナが一番可愛いで！」

周りを置いてきぼりに良い空気になりだしたケンスウ達。

「キヨウ君にギンガちゃんも羨ましいとか思ってたない？」

「お、おい。シャーリー。変な事言いだすなって！！」

「ちよつと、私達は別に……」

キヨウとギンガはシャーリーに突っ込まれて顔を赤らめ慌てだした。

「図星かよ。いい加減二人とも素直にくっ付けばいいのに」

アギトの眩きは届いてはいないようだ。

そんな感じで楽しい夕食の時間は過ぎて行った。

翌日、朝後に一般の訓練生達は訓練用の服装で運動場に集められた。其処には赤いバンダナを巻いて黒いベストを着こんだ体格のいい男が待っていた。

その隣には無骨なコンテナがある。

「よし！集まったか！俺は今日からおめえたちの実技を担当する事になったラルフ・ジョーンズだ！よろしくな！」

陽気で豪快な感じの人物だった。彼ははこう見えて陸戦AAA+ランクの一流の魔導師である。近代ベルカ式を使い、彼の最強魔法『ギヤラクティカファントム』はあらゆる障壁を突き破ると有名であった。

昇級試験を受けないだけで実際はSランクを優に超えるとも噂がさ

れるほどだ。

近年『エースオブエース』と呼び名の高い高町なのはSLBに匹敵、いやそれを上回る威力かも知れないと管理局で一時話題に上っていた人物であり現在は局を辞めこの第四陸士訓練校で実技教官となっている。

彼の存在を知っている生徒も多々おり歓声等が上がった。

「魔術師も身体が資本だから先ずはグラウンド50周と言いたいとこだけ。待ちきれねエみたいだし、自分のデバイスを持ってない奴らにデバイスを支給しようか。その後でお待ちなかのランニングだ。よっしゃ、デバイス持ってねえヤツら、こっちに並べ！」

ラルフはコンテナから様々なタイプの支給品のストレージデバイスを生徒達に渡していった。本来は杖型のみのはずだが、最近は近代ベルカ式の生徒も入学してくる事があり何種類か用意されるようになってきているのだ。

「キョウ・アーデルハイドってやつ居るか？」

「通りデバイスを渡し終わったラルフはキョウを呼び出す。」

「はい、自分です！！」

「お前か。昨日隊長いやハイデルン教官からこれを渡すように言われてたんだ」

ラルフは過去にハイデルンの部隊に居たようで未だに隊長と呼ぶ癖が抜けきっていないようだ。

キョウがラルフから渡されたのは黒い指抜きグローブだった。前腕

部分には金色に日輪のマークがあった。

「聞ってるかもしんねえが、お前の親父さんが昔使っていた非人格搭載型アームドデバイス、炎の拳。『フランメ・ファウスト』ってやつらしい」

「『フランメ・ファウスト』ですか？」

「ああ。型が古くて普段からこの形のまんまだけど、こつ見えてかなり頑丈に出来ている。処理速度も現役世代のストレージには一歩劣るが中々のもんみたいだぜ。親父さんに感謝するんだな」

「はい。教官。ありがとうございます！！」

それからデバイスを渡された訓練生達はバリジャケットを展開するよう言われた。

訓練校に来るようなものばかりなので皆ある程度の魔法は使えるようでありどんどん展開をしていった。

ギンガも母から貰った左手の『リボルバーナックル』を展開しバリジャケットを纏う。

白いインナーの上に黒く短い上着を羽織る形のものだった。

「キヨウ君どうかな？」

「うん？凄く似合ってるって思っぜ？」

「そっか。良かったあ。ありがと！」

キヨウに褒められギンガも機嫌が良いようだ。

「キヨウ君も早く展開したら。心に浮かんだイメージをそのまま形にするとうまく行くよ」

キヨウは『フランメ・ファウスト』を両手に装着しイメージを浮かべる。と言っても動きやすさを重視するものを思い浮かべていたが。

「よし決まった！」

そうしてキヨウの体は彼の魔力光、赤紫色の光に包まれた。

そして一瞬でバリアジャケットが構成された。

白いヘアバンドを額にまき、白いインナーを身に纏う。

下半身は黒いボトムスにかわり、ブーツは白く先のとがったものへと変化した。

上着は肘ほどの長さの袖に裾は臍の位置の少し上位で、その内側にはベスト上のインナーが重ね着されているようだった。

そして背中にはデバイスと同様の金の日輪のマークがあった。

装甲等はなく接近戦に特化したようなデザインだった。

「キヨウ君、良い感じに似合ってるよ！」

「キヨウ！結構いいじゃん！」

「そうか？」

ギンガとアギトに褒められまんざらではない様子だ。

ケンスウは赤い鉢巻に、赤で縁取られた緑の拳法着の様なデザインで、アテナは赤い上着に赤のミニスカートと黒のスパッツといったバリアジャケツトだった。

それから彼らはジャケツトを展開した状態でグラウンドを50周走らされ基礎的な鍛錬を行った。キョウ達は日ごろからの鍛錬で慣れており息もほとんど乱れなかった。ケンスウとアテナも同様の様だ。

それから午後はハイデルンによる座学が行われた。キヨウはアギトのサポートもあり何とか内容を理解しているようだ。その時もグローブ型のデバイスを付けたままだった。日常生活もそれで送るつもりらしい。

ギンガとアテナは優秀なようで当てられても問題なく答えていった。ケンスウは居眠りで注意されそうになる場面が見られたが、キヨウとアギトによって免れていた。

その後、夕食を済ませ入浴などを終えたキヨウは私室で授業内容の復習を行った。

ケンスウも無理やり付き合わされてはいるが、その間アギトは、自身が覚えている魔法でキヨウが使えるものや、役に立ちそうなものを『フランメ・ファウスト』にインストールさせていた。

自分がキヨウと一緒に居ない場合も想定しているのだ。

その後、12時頃に一同は就寝した。

アギトはキヨウと同じ布団に入り、それを見たケンスウは少し羨ましそうにしていたが。

その後ニヤニヤした顔で布団に入った。そしてあっという間に眠りについてしまった。

寝る前の表情から、きっとアテナと念話でもしたのかもしれない。

アギトは作業に疲れたのかすぐに眠りに就いた。

キヨウは眠るアギトの頭を撫で呟く。

「俺の為に頑張ってくれたんだな、アギト。ありがとな」

そう言ってアギトの反対側の枕元に『フランメ・ファウスト』を置き眠りに就いた。

E p 2 0 炎の担い手2（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

キヨウの服装は94～98の衣装を、ケンスウは最近よく見るあれで、アテナは98の頃の衣装でイメージしてください。

ケンスウのパーカー好きなんですけどバリアジャケットのイメージではなかったの。

キヨウの服は白ジャケットの99以降の奴が一番好きですがあれは局員になって、デバイスの改良後にしようと思っています。

超必殺が「大蛇薙」のみなんで96が一番近いかな？

後書きでの長文失礼しました。

Ep21 もしも君が泣くならば（前書き）

もうゴールしようと思う。

早く本編に行きたい。

でも書きたいシナリオがまだある。

ジレンマですね。

物語の中くらい初恋って実らせても良いでしょ？

Ep21 もしも君が泣くならば

キョウ達が訓練校に入り半年ほど過ぎた。

キョウ達は新しい環境にも慣れ、訓練校で着実に力を付けている。アギトもその可愛らしい容姿から男女問わず人気者となり、男子寮ではマスコットの様に思われるようになった。

キョウは訓練校に入る前まで、同じ程度の腕前の相手はギンガくらいしか居なかった。

だが訓練校で知り合ったケンスウやアテナを筆頭に、他にも色々なタイプの魔導師の卵たちと腕を磨く事が出来るようになったのでとても充実していた。

授業が休みの日は良く訓練施設内で模擬戦をするようになっていた。一番良く模擬戦を行うのはやはりギンガ相手でその次にケンスウ、アテナと続く。

その日はキョウ対ケンスウで模擬戦を行っていた。

「キョウはん、勝った方が昼飯おごりって約束守ってや!」

「ああ。好きなだけ肉まん食わせてやるよ。俺に勝てたらな」

「ケンスウもキョウ君も張り切ってるみたいね」

「キヨウ君ってば昔っから勝負事には熱くなるんだから」

アギトは審判をする事になっていた。

以前授業でユニゾン状態での模擬戦を行った際、キヨウの能力が飛躍的に上がり訓練にならなかつたからだ。

それでもランクに直すとAランク程度だったのだが。

それに魔法制御をアギトが担当するのでキヨウのプラスにはならな
いとラルフが判断し、ラルフ達教官相手の時にしかユニゾン状態の
模擬戦は行わないようになった。

ギンガとアテナは見学である。アギトの合図で模擬戦が開始されよ
うとしていた。

「準備良いか？」

「ええで、アギトちゃん!!」

「いくぜ!」

「始め!!!」

「こっちだぜ」

開始早々キヨウが『独楽屠り』で奇襲をかける。一気に畳みかけて
主導権を掴むつもりようだ。

だがケンスウはキヨウの着地時を見計らいカウンターを合わせた。

「龍顎砕やあ！」

ケンスウは逆立ち状態で身体を捻って連続蹴りをキョウに浴びせる。

「ぐをつー！」

攻撃を受けたキョウは何とか受け身を取る。

「やっぱ、いきなり隙の多い技は厳しいか……」

「前の模擬戦でいきなりやられた時は驚いたけど、もう通用せえへんで」

二人は距離を取る。

「喰らええー！」 「超球弾や！」

互いに遠距離から攻撃を仕掛ける。キョウは以前苦手としていた『闇払い』を、ケンスウは魔力を球状にして放つ「超球弾」をぶつけ合った。

二人の攻撃は互いを打ち消し合った。

「やっぱ接近戦が性に合ってたな」

「せやな、キョウはん。ほんならいくで。よっ、はっ、うりゃー！」

「ちいっ」

ケンスウとキョウが互いに突進する。キョウは肘打ちから相手の首

を掴み燃やす『貳百拾貳式・琴月』を放とうとするが、ケンスウの連続蹴り『龍連牙』の方が発動が早く技を潰されてしまう。蹴りをまともに食らい後ろに吹き飛ぶキョウ。

「つくつそお」

立ちあがりはしたがダメージは大きいようだ。

「まだまだいくで!!」

ケンスウは追い打ちをかけようと突進しつつ拳を打ち出す『せんしゅぽ箭疾歩』を放つ。

「さっせるか!」

キョウはケンスウの攻撃に『九百拾式・鶴摘み』という当身技を放つ。ケンスウの放つ拳を捌き、そこから派生技『虎伏せ』を放った。キョウの肘打ち『虎伏せ』を喰らいケンスウに大きな隙が出来る。

「ボデイがお留守だぜ」

キョウはケンスウに炎を纏う拳の三連打であり『荒咬み』からの派生技、『百式拾七式・八錆』を放った。今度はケンスウが吹っ飛ぶ。

「痛たた。やっぱ炎の乗った拳は効くなあ」

「歴史が違っんだよ」

互いに言葉を交わすと今度は接近し殴り合った。

闘いの結果はダブルノックアウトでの引き分けに終わったが……。

女性陣は慣れてはいるが若干呆れていた。

「途中まではきちんとした技の応酬だったのに。結局最後は殴り合
いって。格好ワリい」

「うん。でも何時もの事だから大丈夫でしょ。それより次は私達の
番だね、ギンガさん」

「そうだね、アテナちゃん。今日は負けないよ。最近負け越してる
し」

「おう、面白そうだな。俺も混ぜてくんねえか？」

ギンガとアテナが模擬戦を始めようとした時、乱入者が現れた。

「ラルフ教官！」

ラルフなのだが。彼はたまに生徒達の模擬戦に参加してくる事がある。もちろんかなり手加減をしてくれるのだが、それでも歯が立たない。

「今のキヨウ達の闘いを見ていたが、あいつら今年のランク試験受けてみても良いんじゃないかな？」

「Bランクをですか？あれって卒業後に受けるのが普通じゃないんですか？」

アテナが尋ねる。

「ああ。でもあいつらを含めてお前ら四人なら大丈夫そんな気がするけどな。今までも在学中に受かったやつは居るんだし」

実際四人は一年生だが実技の成績はトップクラスで、三年生にも勝てる場合があったのだ。ケンスウは座学が赤点ぎりぎりだが、四人は成績優秀者なのだ。

「キヨウ君達が気が付いたら伝えてみますね」

「おう。それよりギンガ。其れにアテナ。二対一のハンデで模擬戦しようぜー！」

「うづ。はい」

「フェニックスアロー！」 「ナツクルバンカー！」

アテナは空中から魔力を纏った突進を、ギンガはりボルバーナツクルにフィールドを貼り拳を放つ。

「ぐおっ！痛てて。良い連携するじゃないか？」

ラルフは二人の攻撃をまともに食らうがあまり効いてはいないようだ。

ギンガはアテナのテレポートにより一瞬で距離を取る。

「あれが効かないなんて、教官凄いな」

「ホント。ギンガさんあれをやるから、教官の注意を引いて！！」

「ええ、良くつてよ!!」

「何その喋り方？」

「言わなきゃいけない気がしたから。じゃあ、うまく合わせてね」

そう言つてギンガはラルフに接近戦を挑む。その間にアテナは技を放つため魔力をチャージし始める。

「はあああああああ！」

アテナの体の周りを魔力弾が駆け巡る。

ギンガは全力でラルフにくらいついて行った。

「ギンガさん！」

ギンガはうまく時間稼ぎが出来たようだ。アテナが合図を送る。

「分かった!!」

ギンガはラルフから距離を取る。ラルフも二人の狙いに気づいていたようだ。ギンガを追わずアテナの攻撃を待ち受ける。

「へえ、誘導弾か。よっしゃー、とつととかかって来い」

「行きます、教官！シャイニングクリスタルシュート！いつけえ！」

アテナが誘導弾を放つ。かなり魔力が込められているので当たったら大ダメージを受けるはずだ。

ラルフに命中し土埃があがる。

「今度こそ、いけたよね？」

「あれが効かないなら私シヨックだな」

土埃が収まる。ラルフは健在だった。

「良い攻撃だったぜ。ご褒美に俺の最強の技を見せてやる。加減するけど、しっかり防御をしろよ！！」

ギンガとアテナは全力でシールドを貼った。ラルフの代名詞とも呼ばれる技が来るのだ。

「ギャラクティカファントム！どっかーん！」

どこか気の抜けるようなトリガーワードだが次の瞬間ものすごい衝撃が二人を襲う。自身が砲撃魔法と化したラルフのタツクルが決まったのだ。

二人は壁まで吹き飛び気を失ってしまった。

「ありゃ、手加減したんだけどやりすぎたか？」

「やりすぎだぜ、ラルフ教官……」

アギトが苦笑いしつつ答えていた。

キヨウが後にラルフに聞いたところ、この技は砲撃魔法が使えないならその分の魔力で身体を包み自分が砲弾になればいいという発想で生まれたものだそうだ。

四人が目を覚ましてからラルフが話を行った。

「お前ら四人は此処に来る前にある程度の基礎が出来ていたから、その方向に力を伸ばしていけばいい。荒削りな部分は訓練校に居る三年間の間に俺達教官で指導してやるから」

「……はい、ありがとうございます。教官」「」「」

「キヨウとケンスウはすぐ熱くなる所を直さなきゃな？」

「」「はい」「」

その後も今回の模擬戦の評価が行われた。
粗方の評価が終わりラルフは試験の事を四人に伝える。

「それでだ、四人とも年末のBランクの試験を受けてみないか？今から試験に向けて訓練すれば受かるかも知れねえ。こっちで推薦も出来るしな」

「ホントですか、教官？」

「ああ。キョウ、お前は空戦の適性もあるからそっちのランクの習得に挑戦してみる。アテナもな」

「私も空戦かあ。大丈夫かな？」

試験の際自分はどうすればいいのか気になったアギトはラルフに尋ねた。

「教官。キョウが試験を受ける時は私はユニゾンしても良いんですか？」

「ああ、もちろんだぜアギト。多分空戦は、お前がいないとキョウは厳しいかもしれないねえ」

「本当ですか？やった、一緒に頑張ろうな！！」

「うん。絶対受かるうな、アギト！！」

陸戦型の二人にも話をする。

「ギンガとケンスウは陸戦の方だな」

「ワイもBランクかあ」

「陸戦……。はい」

ギンガはどこか元気がない様子だった。

「ううん。不安だなあ」

「アテナ、大丈夫やて。自身持つてえな!!」

「ありがとう、ケンスウ」

「そんじゃあ、決まりでで良いか？試験用に特別に来週からコーチしてやるからな」

「……………はい。よろしくお願いします」「……………」

その後ラルフは去って行った。

キョウ達も訓練施設から出ようとした時、ギンガが一人、施設の屋上に向かう階段の方に足を進めていた。アギトとケンスウとアテナの三人は試験についての話で盛り上がり上がっており気付かなかった。

「ギンガ？」

一人気付いたキヨウが声をかけても、その声に気づいていないのか
そのままギンガは進んでいった。

「どうしたんだよキヨウ？あれギンガは？」

「ああ、ごめんアギト。みんな先に戻っていてくれるか？」

そう言うとキヨウは一人ギンガの後を追った。

ギンガは訓練施設の屋上の展望スペースに一人佇んでいた。

「ギンガ？」

「えっ、キヨウ君？」

「試験の話ん時、何か元気なかつたけど、どうしたんだ？」

試験の話から何時もより元気のないギンガに尋ねる。

「ううん。何でもないよ」

「何でもねえはずないだろ？何年一緒だと思ってたんだよ」

「そっか。分かるよね。何で私って空戦適性なかつたんだろ」

「ウイングロードがあるじゃねえか」

「うん。でも陸戦魔導師って括りから出られないんだよ。ねえ、キヨウ君。空戦に受かってそのまま卒業後に海に行ったりしない？」

「はあ、しねえよ。確かに他の管理世界の平和を守んのも大切だけど、俺はこの生まれ育ったミッドの平和を守りたいんだよ。ギンガ。お前、俺やアギトが離れて行っちまうって思ってた落ち込んでたのか？」

「……うん。だって不安だったんだよ。ユニゾンした二人って凄く強いし私だけ飛べないし。ケンスウ君もアテナちゃんも初めて会った時よりずっと強くなってるし、シャーリーもデバイスマイスター

の資格取って本局勤務になるかもとか言ってたし。グリフィス君は士官学校だから。みんな私を置いてっちゃん気がして」

ギンガは知らないうちに焦りを募らせていたようだ。話すうちに涙を流し始めていた。

「馬鹿だな、ギンガ。誰も追いつたりしねえよ。お前だって前よりずっと強くなってんじゃねえか。其れに三人で一緒に強くなるうっていつたる？そんで三人で地上の平和を守るうって」

「あの約束だけじゃ不安だったの！」

ギンガは声を荒げる。

「じゃあ、約束するよ。今此処にアギトは居ねえけど、俺らはずっと一緒だ」

「それだけなの？」

「えっ？」

「私は確かな証が欲しいの……。私、小さい時からずっとキヨウ君の好きだったんだよ！初めて一緒に遊んでくれて凄く嬉しかった。小学校の時、男の子達からかわれた時に助けてくれたのも凄く嬉しかったんだから。何時も何時もキヨウ君のこと見ていたんだよ。訓練校も一緒だって凄く嬉しかったんだから」

「俺もだよ」

「……………」

「俺も初めて研究所出会ったときからずっとギンガの事気になってた。親父に引き取られる時も、もうギンガに会えなくなるのか凄く不安だった。お前がいじめられた時は何も考えられず飛び出してた。訓練だって自分の目標も大切だったけどお前にもいい所見せたいって思ってた部分だってあったんだぜ。アギトや親父にお前んちのみんな、友達、周りの人を守るように力が欲しかった。でも、お前の事を一番に守りたい、そう思ってたんだ」

「ホント？」

「ああ。ギンガ。俺お前の事が好きだ」

「うわああああああん!!!!!!!!!!!!!!」

ギンガは泣く事を抑えられなかった。ギンガが泣いている間、キヨウは彼女を抱きしめ頭を撫でていた。

ギンガはしばらくして泣きやんだ。彼女は落ち着いたようで、キヨウに話しかける。

「前の逆みたいになったね。あの時は私がキヨウ君を慰めてたんだっけ？」

「ああ、そうだったな。それで、ギンガ、証ってうむっ……………」

キヨウがそれをギンガに聞こうとした時、彼の唇はギンガによって塞がれた。

「これが証ってことじゃダメかな？」

キヨウは突然の事に反応できずにいた。

「キョウ君、私初めてだったんだよ？」

「う、うん。ギンガ、その……」

「何？」

「改めて、これからもよろしくな」

「うん。ずっと一緒だからねー！」

それから二人はアギト達の所へ向かった。それからいつもと変わらない態度で二人は過ごした。

試験に向けて訓練が始まって以降もいつもと同じ様子で過ごしていた。

ただギンガはシャーリーやアテナを筆頭に女友達に綺麗になつたとよく言われるようになっていた。

勘の良い二人はキョウとの間に何かあつたのだろつと予想していた。キョウについてはアギトが勘付いているようので彼女も機嫌が良かった。

そして時が過ぎ、キョウ達は無事全員合格する事が出来た。

E p 2 1 もしも君が泣くならば（後書き）

もっといいタイミングもあったと思います。訓練校卒業直前にと考えていましたが、我慢できなかつた。

キヨウ達四人は無事にランク試験をクリアする事が出来た。キヨウとアテナは空戦Bランクに、ギンガとケンスウは陸戦Bランクに。幼い頃から続けていた鍛錬や、教官たちの指導のおかげだろうとキヨウは感じている。

受かってすぐ四人はラルフやハイデルンを始め指導してくれた教官たちにお礼をして回った。

その後、それぞれの家族にも連絡を取った。

教室ではクラスメート達がささやかなお祝いの席を設けてくれた。

合格を伝えた人たちはみな自分の事のように喜んでくれていた。第四陸士訓練校に入って本当に良かったと幸せを噛みしめるのだった。

それから、二週間ほど経ち冬休みに入った。

キヨウとギンガとアギトは一緒に帰省をする。ケンスウなど他のクラスメート達の多くも帰省するようだ。

「ほな、キヨウはん達も良いお年を！！」

「ああ、ケンスウも良いお年を」

「来年もよろしくね、アテナちゃん」

「うん。ギンガさん、アギトちゃんも良いお年を」

「うん。またな！おい、キョウ。バス来たみたいだぜ？」

「おつ、サンキュー、アギト。じゃあ二人とも身体に気を付けるよ
！」

そう言っつてキョウ達は別れていった。

本来ならばシャーリーもいるはずだが彼女は、年明けに通信士の資格を取るつもりらしく年内ぎりぎりまで訓練校で勉強するつもりらしい。

なので年が明けたら帰省するはずのグリフィスも含め小学校の頃の親友みんなが集まるという計画が建てられている。

「「ただいま！」」

「おつ、お帰り。Bランク受かったみてえだな。オメデトさん」

キョウとアギトはギンガと別れ自宅に入った。

「親父、デバイスの件ありがとうな。それにハイデルン教官と同級生って知らなかったぜ」

「デバイスは使ってるようじゃな。アイツは昔からまじめだったから、厳しいじゃろ？」

「厳しいけど私達の事をすっごく考えてくれる良い先生だよな、キョウ」

「ああ。厳しいけど丁寧に教えてくれるし、一人ひとりの特性に合った指導してくれんだ。訓練校って同期の中に面白い奴も色々いるんだぜ」

キョウ達は久しぶりの一家団欒を楽しんでいた。アギトが寮で人気者だとか訓練校での事をキョウとアギトはソウジに話して聞かせ、ソウジも楽しそうにそれを聞いていた。

「おお、そうじゃった。クイントが今晚お前らとギンガちゃんのお格祝いをするって言ってたから夜はお隣でお世話になるぞ」

「ホントか。やったなあアギト!!」

「うん！クイントさんのご飯おいしいもんな。服のお礼も言いたかったし」

「ゲンヤも今日は仕事を早く切り上げてくるつもりらしいから久し

ぶりにみんなで過ごせる様じゃな」

その後、七時頃にキョウ達はお馴染みのナカジマ邸に訪ねていった。

「「こんばんわ！」」

「あら、キョウ君、アギトちゃん久しぶりね。空戦Bに受かったんですって。おめでとう」

エプロン姿のクイントが奥から出てきた。

「クイントさん、ありがとう」

「洋服も着させてもらってるよ。クイントさん、ありがとう！」

二人がクイントと喋っていると奥から走って来る足音が聞こえる。

「あー！アギちゃんだ！！キョウにいも！！」

「スーバルー！久しぶり！！」

「おう。スバルも元気そうだな。ってかお前大きくなったな」

小学五年生になるスバルだ。まだ小柄だが120cmほどの身長に成長している。

「何時までも玄關に居るのはあれだから中に入って。ギンガも料理

を作って待つてるわよ」

「「お邪魔します」」

「ゲンヤはまだ帰ってないか？秘蔵の酒を持って来たんじゃないか……」

「うちの人は今こっちに向かっているみたいですよ。先輩、ゲンヤさんにあんまりお酒勧めないでくださいよ。健康診断で引っかかりそうになったみたいですから」

キョウ達がない間もソウジとゲンヤは晩酌をよく行っていたらしい。

家上がるとアギトはスバルと共にTVゲームをリビングでやり始めた。

ギンガはクイントと共に作った料理を配膳していた。ピンクのエプロンを纏い髪の色と合わさってとても可愛い姿だった。

「よう、ギンガ」

「あつ、キョウ君。いらっしやい。アギトちゃんは？」

「スバルとあつちの部屋で遊んでるみたいだぜ。何か手伝う事あつ

か？」

「ありがとう。もうほとんど終わりだし大丈夫だよ。私達も父さんが帰るまであっちで遊んでよっか？」

「あら、あなた達？前よりも仲良くなっただんじやない？」

キョウとギンガが喋っているとクイントが入って来た。

「ふえ？そつ、そんなことないよ。前から仲良しだよね？」

「う、うん。そつすよクイントさん」

「そうなの？もしかして二人とも訓練校で少し進展したのかなって母さん思ってたから。キスとか済ませちゃったり？」

「」「」「」

「うふふ。冗談よ。残りは母さんがやっておくから二人ともスバル達の所は行っていいわよ」

キョウとギンガはクイントから逃げるようにスバル達の下に向かった。

三十分ほど経ちゲンヤが帰宅すると食事が始まった。

「ギンガ、キョウ、アギトちゃん。ランク試験の合格おめでとう。」

今日はお前達のお祝いだから沢山食べるよ!」

「ゲンヤ!例の酒持って来たぞ!」

「ホントですか?」

「あなた、それに先輩もお祝いだからって飲み過ぎないようにしてくださいよ!」

いつものように一同は食事を楽しんだ。

キヨウ達は冬休みぎりぎりまでこっちに居るつもりであると伝えた。訓練校での事を三人は面白おかしく話していた。スバルは少し羨ましそうにそれを聞いていた。

そして食後は、子供達はリビングで遊び、大人達は食卓で晩酌というお馴染みの流れとなった。

親達はキヨウとギンガの仲を肴に飲んでいた。

「キヨウ君、少し凜々しくなりましたよね?」

「そうじゃな。だがまだまだじゃろうな。それに比べギンガちゃん

はぐつと綺麗になったようじゃな。」

「うちの可愛いギンガに向こうで変な虫がつかないか心配ですよ」

「あなた、その心配はないと思うわよ。キョウ君が居るんだし」

「ギンガちゃんがうちに嫁に来てくれたら良いのお……」

「キョウ君が貰ってくれたらお隣ですし、良く知ってるから安心してもの」

「キョウならどこの馬の骨か分からんような男よりでしたが、うわああギンガ嫁になんか行かないでくれええええ！」

ゲンヤの妄想は健在のようだ。

「あなた、もし二人が結婚したとしても毎日会えるわよ。キョウ君も最終的に道場を継ぐだろうし。其れに気が早すぎるわ。まだ二人とも13歳よ。もう10年位待たないと」

「う、うん。そうだな」

「じゃがそうなって二人に子供が生まれるとワシもお前も爺さんじやぞ?」

「先輩は元々爺さんみたいな喋り方じゃないですか。でも孫かあ。ギンガの子供が俺の事をお祖父ちゃんって呼んで、グハツ。良い。良いぞお！」

ソウジの言葉にゲンヤは小さい頃のギンガに似た子供がよちよち歩

きで自分の下に歩いてくる映像を想像し、その可愛さでダメージを受けていた。

「そうだったら私は40歳位でお祖母ちゃんか。子供って大きくなるのが早いわあ」

「ホントじゃな、時間が経つのはあつという間とは良く言ったもんじゃない」

「そう言えば、二人の様子が今までと少し違いますか？私がこの部屋に入った時前より二人の距離が近づいてるような気がしたんですけど？」

「ホントか、クイント？キョウの奴、うちのギンガに手を出したんじゃないねえだろうな」

「あなた、さっきまで孫の事なんか考えてたのに何言ってるのよ。いい加減、娘離れしなさい！！」

「そうじゃぞゲンヤ。其れにまだスバルちゃんが居るではないか。しかし、クイントが言った通りかもしれないの。夕飯の際、ワシらにからかわれても前ほど慌てなくなっただし」

「冗談で、キスでも済ませたって聞いたら二人とも前みたいに慌ててましたけど？」

「キスだと？」「あなた！」「うん、すまん。クイント」

クイントもゲンヤの暴走を防ぐのは慣れたものだった。

「二人がこの先どうなるか分からんがワシらは見守っていくとしようかの」

三人はその後酒を飲みつつ語らっていった。

子供達は子供たちで楽しんでた。アギトは久しぶりにスバルと遊べたのが嬉しかったのか、はしゃぎ過ぎて疲れて眠ってしまっている。

「ねえねえ、キョウにい。明日暇？」

「特に予定はねえけど？」

「それじゃ、私と組み手やってよ。母さんから鍛えてもらったんだ
!!--」

「スバル、私とじゃダメなの？」

「ギンねえとは何度も組み手やったじゃん。キョウにいとはまだだからさあ。ねえ、お願いキョウにい。良いでしょ？」

「ああ、良いぜ」

可愛い妹分の頼みをキョウは快く引き受ける。

「なら、明日の昼から道場に来てくれ。午前中は親父に稽古付けてもらうつもりだから。ギンガも一緒にどうだ？」

「うん、それなら」

「やったー！見てもらいたい技もあるんだ。キョウにい大好き！」

「ちょっと。スバルう！」

キョウに抱きついたスバルにギンガは抗議の声をあげる。スバルは舌を出しながら答えた。

「ごめん、ギンねえ。でもギンねえがもたもたしてると私がキョウにいを取っちゃうよ？」

「ばあか、何言ってるんだよスバル」

キョウはスバルを引き離し優しくでこピンをあてた。威力は全然込められていない。

「へへっ、冗談冗談。ギンねえ慌てると面白いんだもん。じゃあ、

明日は約束だよ」

「おう！」

その日は11時ごろ解散となった。

久しぶりの家族団欒を一同はとても楽しんだようだった。

Ep22 ある日の風景7（後書き）

やっぱりナカジマ家やソウジを書くのが一番楽しいかも。

家に居る時のクイントさんの性格のイメージは、私の中ではおっとり
りと天然を除いてしっかりものにした『アイマスのおずささん』っ
て感じですよ。

母性にあふれるまさに「おかあさん」って感じで。

EP23 BURNING SUBARU(前書き)

スバル「ほー、これこれ。フツ、燃えたる？なーんちゃって。」

キョウ「なーにやってんだか。」

「へへへっ、ありがとう。親父」

「キョウ君にアギトちゃん、それにおじ様もお疲れ様です」

ギンガが三人に飲み物とタオルを渡す。

「サンキュー、ギンガ」

「私の分も、ありがとうギンガ」

「うむ、すまぬなギンガちゃん。ギンガちゃんも動きをみていた限り、腕をあげたようだのお」

「どういたしました。えへへ、そうですか？」

「そうじゃとも。腕も良いし、良く気が利いて器量よし。大きくなったらうちのキョウの嫁に来てほしいわい」

「ちよい、親父い」

「やですわ、おじ様ったら」

テレ隠しに笑いながらもソウジをバシバシ殴る。地味に効いているようだ。

「うぐっ。最近どんどん昔のクイントに似てきたのお」

その頃、娘と料理中のナカジマさんちの奥さんがクシヤミをしていた。

「母さん、風邪？」

「大丈夫よ、スバル。あら？誰か噂でもしているのかしら？」

一方アーデルハイド家では一同、居間に移動していた。

「お昼は私が作りますね。結構上達したんですから」

「おお、すまんの。ギンガちゃん」

「ギンガの手料理は久しぶりだな。楽しみだ」

「ふふ。キョウ君楽しみに待っててね」

「ギンガ、私も手伝うよ」

女性陣は台所に移動した。

「キョウや、ギンガちゃんから絶対に愛想を尽かされないようにし

るよ。あんない子はめったにおらんぞ！」

「って、親父。うん、まあギンガは凄く良い子だよな」

「早うくつ付いたらいいんじゃないかな。ギンガちゃんならお前を公私ともに支える良い嫁さんになると思うぞ」

「き、気が早すぎるぜ。それに俺とギンガはそんなんじゃない」

「よし。ワシが手を貸そう！」

ソウジは立ち上がり戸棚の引き出しから映画のチケットを取り出した。

「この間、スーパーのクジ引きで当たったんじゃが期限が今週いっぱい迄じゃし、お前にやる」

「はあ？それならお隣にあげるよ。クイントさん達なら喜んで観に行くだろ？」

「ゲンヤが仕事で行けないらしい。ギンガちゃんを誘って明日にも行つて来い！」

「はあ、分かったよ。ありがとう」

「あれ、何の話？」

「また親父が変な事思いついたんじゃないの？」

台所からギンガとスバルが料理を持って戻って来た。

「何でもないぞ。のう？」

「ああ。そうだけ」

「変なの。はい、今日のお昼御飯だよ！」

「私とギンガの特製オムライスだ！」

「うおお、美味そう」

「それじゃあ食べるとするかの」

「」「」「いただきます！」」「」

オムライスはとても好評だったようだ。キョウはおかわりまでして食べていた。

ギンガは何時も通りの超大盛りだった。

昼食から一時間ほどしてスバルがやって来た。キョウ達は道場に移動した。

スバルはクイントから右のリボルバーナックルを借りてきているようだ。

ギンガの話だと小学校を卒業したら正式に渡されるらしい。

「キョウにい、私も結構強くなっただからね!!」

「そうか?なら楽しみだな」

キョウがバリアジャケットを展開する。しかしスバルは展開しようとしな

不思議に思いアギトが尋ねた。

「なあ、スバル。バリアジャケットは?」

「あはは、まだ術式知らないや。アギちゃん教えてくれない?」

アギトがリボルバーナックルに術式をインストールした。どうやらクイントは右側にはあまり魔法を入れていなかったようだ。キョウが確認する。

「スバル、術式があんま入ってないけど大丈夫か?」

「うん。デバイスなしでも使えるように幾つかの魔法を覚えたから。体術もあるし」

「そっか。なら良いや。早く展開しろ」

「うーん、デザインはキョウウにいのを参考にさせて」

「ああ。良いぜ」

スバルが展開したバリアジャケットはキョウウに似たものだった。

違う点は、色が青いのと、インナーが臍出しになっている事。其れに下半身がホットパンツになっている事。

加えて、左手には白のリストバンドが巻れている事と、背中には日輪のマークも入っていないという事位か。

額にはキョウウの様な白いヘアバンドがあった。

「結構似合ってんじゃないかねえか？」

「へへっ、そう？」

「キョウ君とお揃いってその手があったか」

「あははは。ギンガ、ドンマイ」

アギトがギンガを慰める。スバルの方がギンガよりも一枚上手のようだ。

「キョウ。スバルはまだ小さいから炎は使っな。身体強化の魔法や体術中心で行け！」

「分かったよ、親父。よし。じゃあ始めようぜ」

「うん。お願いします!」

「よろしい。では始め!」

ソウジの言葉で組み手が始まった。

「てえいや!」

「見よう見まねスバルキック!」

キョウの『独楽屠り』に似た技をスバルは合わせて出してきた。二人の蹴り同士が空中でぶつかる。

戦闘機人の身体能力もあるのか相打ちとなり二人は着地する。

「うおつ。『独楽屠り』を使えんのか?」

「アギちゃんと一緒に練習したんだ。ねえ!」

「おつ。私の『アギトキック』と一緒に練習したもんな」

「まだまだあるんだ。キョウにい、行つくよ!」

スバルが接近しラッシュを仕掛ける。スピードはギンガほどではなかったのだが威力の方は彼女に匹敵していた。ガードを固めるキョウの腕が痺れるほどだ。

「ナツクルダスター! ボディが甘いぜ!」

スバルはリボルバーナツクルに魔力を圧縮しキョウを殴りつける。

そのフォームはどう見ても『荒咬み』だった。かなりの威力で、ガードの上からキョウにダメージを通していった。

「つちい。今度は『荒咬み』まで……」

「母さんにこの魔法教わったんだけど、キョウにいの技がカッコよかったからさ」

「嬉しい事言ってくれんじゃねえか。他にもあるんだろ？撃つて来い、受けてやるよ！」

「ありがとうキョウにい。いつくよー！リボルバーキャノン！喰らええー！」

スバルは右手に衝撃波を纏わせ『毒咬み』のフォームで攻撃をする。あまりの威力にキョウのガードが開いた。

「うわっ、ヤベエ」

「チャーンズ！燃えろ、スバル！」

スバルはキョウに『ナツクルダスター』を当てアッパーやフックなどの連続技に繋ぎ、最後に『草薙流』の『鈇鉄』に似た裏拳を放つ。キョウはスバルの猛攻に3mほど吹っ飛ばされた。持ち前の反射神経でうまくダメージを減らしているようだ。

「いててて。やるじゃねえかスバル！」

一方でギンガはソウジに質問していた。

「おじ様がスバルに草薙流を教えたんですか？」

「いや、ワシは何もしとらん」

「じゃあなんで？」

その質問にアギトが答えた。

「スバルは私と一緒にキョウやギンガの鍛錬を見ていたんだ。アイツには才能があったんだろうな。幾つかの技は見ただけでマネしちまうんだ。そんで一緒に遊んでるときに練習とかもしてたんだぜ」

「うむ。見取り稽古というやつじゃな。クイントも技や魔法を教えるのは楽しかろう。どんどん吸収していくのじゃから」

「もしかして母さんは……。私のリボルバーナックルには魔法を幾つか残していたのに、スバルの方には殆ど入ってなかったのはきつところという場合を想定していたんじゃない？」

「恐らくそうじゃろうの。習った魔法に独自の改良を加えていく才能か。この先スバルは強くなるぞ！」

「結構効いたぜ、スバル。今度は俺がホントの『草薙流』を見せてやる。もちろん炎は使わねえけどな。」

「うそー。その割にあんまし効いてないみたいじゃん」

「そんな事ねえって。いくぞ?」

今度はキヨウが攻撃を仕掛ける。スバルに近付きしゃがみ込んで足元に蹴りを叩き込む『八拾八式』を放つ。スバルは突然の下段攻撃に反応できずに喰らってしまう。

其処からキヨウは立ち上がりつつ腹部にジャブを当て、『荒咬み』から顎への肘打ち『九傷』へとつなぐ。

「ふっ、てい。ボディがお留守だぜ」

「うわっ?」

そして止めに肘打ちから飛び上がりながらの裏拳『鬼焼き』を放つた。

「うおおりゃあ!」

一連のラッシュがスバルにクリーンヒットした。攻撃を受けたスバルは受け身も取れず道場の床に落ちる。

「うう、痛い。やっぱりキヨウには勝てないか。降参です」

「そこまで!?!?!」

スバルの宣言により、ソウジの言葉で組み手は終了した。

「ふっ、燃えたる?」

キョウは左の人差し指から炎を出し吹き消す。
そしてスバルを抱き起した。ギンガとアギトもキョウ達のそばに駆け寄る。

「アギちゃん、ギンねえ。負けちゃった」

「なかなか良い組み手だったぜ。スバル、頑張ってたんだな」

「スバル、結果は負けだけど、とてもいい闘いだったわ。ねえ、アギトちゃん？」

「うん。見よう見まねであんだけ『草薙流』を使っつてスゲえーよ」

「ホントじゃな。序盤は流れを掴んでおったしの。良い内容じゃったぞ。キョウも炎なしでの闘いを経験出来たしな。今までどれだけ炎に頼っていたかも分かったじゃろ？」

「ああ。良い経験になった。ありがとなスバル」

「うん。私も何時かキョウにいやギンねえに追いつくからね！」

「ええ。今度はお姉ちゃんともやろうね？スバル」

「それじゃあ、今日はこれ位にしておくかの」

そう言ってソウジは道場を後にする。

「そんじゃあ行くところか？」

キョウが母屋に向かおうとしたがそれをスバルが引き止める。

「キョウにい。抱っこして。疲れたー!!」

「おう、良いぜ。よっと」

キョウはまだ身体の小さいスバルを抱きかかえる。

「ちよっと、スバル！ズルイよ！」

「良いじゃん、組み手で疲れたんだもん。行こうキョウにい！出発
進行ー！」

「了解しました、お姫様。ギンガ、今日位良いだろ？久しぶりなん
だし」

「はあ。キョウ君、何だかんだでスバルに甘いよね？」

「キョウは私にも甘いけどな。スバルも妹って思ってたんだよ、安心
しなよギンガ」

そうやって四人は母屋に入ってしまった。

それから夕方まで一緒に遊んでいた。
帰り際にキョウはギンガを呼び止める。

「なあ、ギンガ？」

「何？」

「明日って予定あるか？」

「うん？ないよ」

「それじゃ、一緒に映画でも見にいかねえ？親父からチケット二枚もらったんだけど今週迄しか使えないんだ」

「えっ、ホント？私と、良いの？」

「ああ。それで大丈夫か？」

「うん！もちろん行くよ！」

「そっか、じゃあ明日の朝九時に迎えに行くからな？」

「分かった、ありがとう。凄く楽しみにしてるね。」

キョウはうまくギンガを映画に誘う事が出来たようだ。

ソウジ達は空気を読んで離れていたが口元に笑みを浮かべていた。

Ep23 BURNING SUBARU (後書き)

今回はデート回ですよ、デート回！

友人がうちに来ていたんで予定より少し遅くなってしまった。

最後までありがとうございました。

次回もよろしくお願いします。

Ep24 Kiss me again1 (前書き)

本日は皆に〜。

最近デートしてねえな、はあ。

彼女いない歴二年の筆者が通りますよー！負のオーラに当たりたくない
かったら避けてください！

今回のネタバレ。「女の子と一緒に見る映画じゃねえー！」
午前と午後に分けます。

Ep24 Kiss me again 1

「ねえ母さん。こっちの服と、これ、どっちが良いかな？」

「昨日の夜も同じ事聞いていたじゃない」

「ううん。でも……」

「ギンねえ！！ こっちがやっぱり良いって！！」

キョウと映画を見に行く約束をした日の朝、ナカジマ家ではギンガの服装選びが続いていた。

昨晩も行われていたのがギンガはまだ悩んでいたらしい。

「そだね、スバルの選んだ服がギンガには似合うと思うわよ」

「そう？ ありがとう、母さん、スバル！！」

ギンガは着替えるために慌ただしく階段を上り私室へ向かう。

「早くご飯を食べましょうか？ お父さんもお腹をすかせてるわよ」

「そだね。でもギンねえ張り切ってるなあ」

「それはそうよ。キョウ君と初めて二人っきりでお出かけするんだから」

「おーい、クイント。朝飯まだか？ 仕事に遅れちまうー！！」

「はいはい、今行くわよ」

食堂からゲンヤの声が聞こえる。クイントとスバルはそちらに向かい朝食を準備するのだった。

「はあ、ギンガがキョウとデートをする日が来てしまうか。キョウ、ギンガ、ダメだぞ。お前らにはまだ早い。いかん、いかんぞ」

ゲンヤが顔をしかめつつ頭を勢いよく横に振る。

「うふふ。夜とかはロマンチックな展望台でキョウ君が……」

その向かいではほほに手を当てつつ、ギンガがにやけながらつぶやいていた。赤面しつつイヤンイヤンと蕩けた表情で自分の世界に入り込むギンガを見れば、100年の恋も冷めてしまうかもしれない。それ程、乙女としてはやってはいけない表情を浮かべていたのだ。

「はあ……。二人とも、妄想はいい加減にしなさい。其れに、ギンガ。食事をしながら妄想していると服に汚れが付くわよ」

「ギンねえも父さんも、口から妄想の内容が漏れてる」

妄想癖のある夫と娘をクイントはため息混じりに注意した。スバルも慣れてはいたが、二人の姿に呆れていた。

「クイント（母さん）ごめん」「

「分かったなら、早くご飯を食べましょう。キヨウ君来ちゃうわよ。それにあなたも自分で仕事に遅れそうだって言ってたじゃない？」

ナカジマ家では賑やかな食事の光景がみられていた。

ゲンヤが出勤する際、「手を繋ぐのは良いが、それ以上は許さんぞ！！」と騒いでいたがクイントに大人しくさせられていた。それから一時間ほどが経ちキヨウが迎えに来た。

「おはようっす。ギンガ、準備できてますか？」

その日のキヨウの服装は黒のレザージャケットに白のシャツ。ブルーのデニムにウォレットチェーン付きのベルトと黒のブーツという出で立ちだった。

もちろん両手には『フランメファウスト』が装備されていたが。

「あら？いらっしやい。ギンガはもうすぐ支度が済むからリビングで待っていて」「

クイントが家にかかるように言う。

「はい。お邪魔します」「

「うわぁ。キョウウにい、その格好似合ってるね」

「そうか？アギトが選んでくれたんだけど。似合ってるのなら良かったぜ」

キョウはソファアーの上でスバルと喋りながらギンガを待っていた。といっても五分程だったのだが。

「ごめん、キョウ君。待たたでしょ？もう出発できるよ」

ギンガが慌ててやって来た。キョウはソファアーから立ちあがる。

「ギンガ、それよりもキョウ君に聞く事がないかしら？」

ギンガの後に続いて入ってきたクイントがギンガに向かって言う。

「う、うん。キョウ君この格好どうかな？」

頬を赤らめつつ上目遣いで尋ねた。

ギンガの服装は冬だという事もあり、白いダッフルコートの下に桃色のタートルネックのセーター。ブラウンのひざ丈ほどのスカートとその下に黒のレギンスという装いだった。手にはブラウンの手袋が持たれている。

「おお。うん。似合ってる。凄く可愛いと思うぜ」

キョウはギンガの姿に赤面し答えた。

「ホントに？良かった。ありがとう、キョウ君。其れに母さんとスバルも」

「良かったね、ギンねえ！あの服装、私達を選んだんだ。ギンねえなかなか決められないんだもん」

「もう、スバル！余計なこと言わないの」

「あらあら。ほら、そろそろ出かけなくて良いのかしら？」

クイントの言葉に促され二人は出発した。出がけにクイントがギンガに

「今日が勝負よ。キス位はしなさい。帰るのが遅くなっても構わないわよ？」

と耳打ちしていたようだった。

以前のギンガなら慌てふためくはずだが、頬を染める程度に止まっていた。

その後ギンガが黒のロングブーツを履きキョウと出かけていった。

「やっぱりあの二人。うふふふ」

クイントは二人の間に起こった事を勘付いたようで、嬉しそうに笑っていた。

クラナガンの繁華街に向かうバスにキヨウとギンガは乗り込んだ。休日だが幸運にも人が少なく二人掛けの席を確保できたようだ。

「キヨウ君、映画ってどんなの観るの？」

「親父から聞いたけど、ある拳法家がさらわれた恋人を助けに行く話らしい。何部作か続けて作られるみたいらしいぜ？」

「そうなんだ。楽しみだね。映画見てからの予定は？」

「飯食って、後はごめん。考えてねエヤ。門限とかはどうなんだ？」

「そうなの？じゃあ二人でその時その時で色々回ろうか。遅くなっても良いって母さん言ってたけど八時ぐらいに帰ろうかな。父さんも心配するし」

「そうだな。でもホントにゲンヤのおっちゃんは過保護だよな」

「そうだよ、私も何時までも小さい子供じゃないんだから！」

「きつと、そんだけギンガが大切なのさ」

バスが繁華街に到着するとキョウウ達はそのまま映画館に向かった。

映画館でキョウウはギンガの為にポップコーンとコーラを買った。映画のチケットは割引があるということでカップル用のものを購入している。ギンガは少し恥ずかしそうだったが、キョウウは特に気にした様子はなかった。

そして二人は一緒に映画を見始めた。

『暴力が支配する世の中か。良い時代になった』

『ケーン!!!!!!』

『さて、何本目に死ぬかな』

『ぐおおおお』

(なんてチヨイスなんだろ？ でもキヨウ君ってば食い入るように
見てるし。でも今のうちに手を……。でもはずかしいし……)
映画館では映画に夢中になっているキヨウに対し、ギンガが手を重
ねようと苦悩していた。

ギンガが何もできずしばらく経つ。

『うをおおおお！！ あーたたたたたたたたたたた！！！！！！』

『たわぱっ！！！！』

『お前はもう、死んでいる……』

「よっし！！ やった！！！」

「えっ？キヨウ君？」

キヨウは映画のクライマックスに興奮して意識することなくギン
ガの手を掴んでいた。

それから映画が終了するまでキヨウはギンガの手を掴んだままだった。その間、ギンガの心臓はドキドキと高鳴りをしっぱなしだった。

「いやあー、面白かったな。俺もケンシローみたいな強い男に憧れるぜ!!」

「でも、ユリアさんが死んじゃうなんて思わなかったな。『ケン』っていうセリフ以外、殆どブヒブヒ言ってるか分かんなかったけど。ライバルだったシンも一途に彼女の事を想っていたのに、悲しかったな」

映画館から出ると、二人はその感想を言い合っていた。キヨウはジエスチャーを交えて印象に残ったシーンの話を続ける。

一方のギンガも何だかんだでその映画にハマっているようだ。

「来年には続編が公開されるらしいから楽しみだな。次も一緒に観ような?」

「うん!絶対だよ。そろそろお昼みたいだけど、どうする?」

「そうだな。ああ、そう言えばこの辺にバイキングレストランが出来たってアギトが言ってたな。デザートが美味しいらしくて一回行

つてみたいって。バイキングならギンガも腹いっぱいになれるぜ？」

「もう！キヨウ君ってば。そんなに食べないよ、ほんのちよっと普通の女の子より量が多いだけじゃない！知らない！」

「悪かったって！ごめんギンガ！機嫌治してくれよ」

それからキヨウはレストランに着くまでギンガに謝り続けた。

ギンガはレストランに入るまで不機嫌だったが、食事が始まると美味しい料理により機嫌が治っていった。

「大丈夫か？そんなにデザート食べて。太るぜ？」

「甘いものは別腹なんだよ。それにその分は鍛錬で消費するから大丈夫。今度は、母さんやスバルやアギトちゃんもさそって来ようかな？」

キヨウは食後に紅茶を、ギンガは大量のケーキやパフェを食べていた。

「それはそうと、女の子の食事の量を指摘するなんてデリカシーがないんだよ！」

甘いものを食べているからか何時もよりは優しい口調で注意するギンガだった。

「そうだな。ごめん。ってか、この後は何処に行こうか？近くのデパートのでも寄ってみる？」

「そうだね。キョウ君にお任せしまーす」

ご機嫌なギンガと、甘いものを見過ぎて胸やけがしそうなキョウは会計を済ませ、店を後にする。

二人のお出かけはまだまだ続く。

E p 2 4 K i s s m e a g a i n 1 (後書き)

よりもよって『北斗』かよ！って言われそうだな。
すいません、自重出来ませんでした。

読んでいただきありがとうございます。

二人のデートはまだまだ続きます。

Ep25 Kiss me again2 (前書き)

『もしドラ』見逃したから動画をネットで探しました。
そしたら『もしもドラ もんのキャラが格闘ゲームに出たら』みた
いなの見つけました。
面白かった。

本編行きます。感想や指摘等よろしくお願いします。

Ep25 Kiss me again2

レストランから出たキョウとギンガは近くのデパートの中にいた。
現在二人は雑貨屋を見て廻っている。

「うわぁ、キョウ君このマグカップ見て。可愛いくない？」

「へえ、良いじゃん。使いやすくもありそうだし。なあ、こっちの
ソファー凄いで！」

「凄いフカフカだね。収納も出来るんだ。でもちょっと高いね？」

同棲を始めるカップルのような会話をしていた。

その後もいろいろな店を見て廻る。

「キョウ君、これ似合うかな？」

ギンガは洋服店で試着を楽しんでいた。
白のワンピースの上にピンクのカーディガンを羽織る。

「髪の色にもマッチしてて良いと思っぜ？」

「良かった、ありがとう。そうだ！次はキョウ君の服を選ぼうよ？」

「いや、俺は良いって！！」

「だめだめ！ほら行こうよ」

その後キョウは男性用の洋服屋でギンガに一時間ほど着せ替え人形にされた。

「うわぁ。良いよ、似合ってる」

「そっか？何時とイメージが違うけど似合ってるのならしいや。サンキョ」

そんな感じで二人はウィンドウショッピングなどを楽しんだ。

「次は何処行こうか？」

「そうだな。水族館まで足を延ばしてみるか？こつからだだとバスで30分位で行けるし」

「良いね、さんせいーい！」

それから二人はクラナガンの水族館に移動した。

「へえ、初めて来たけど面白い所だね？うわあ、この魚小さくて可愛い」

「ああ、本当だな。お、この魚。昔に釣った事あるやつだ。美味かったよな？」

「キョウ君、キョウ君。水族館でそういう事言わない方が良いでしょう……」

「ふえ、お兄ちゃんこのお魚さん食べちゃうの？」

近くにいた子供がちよっと泣きそうになっていた。

「あつ、いやあ。ごめんな？」

「このお兄ちゃんはお姉ちゃんが叱つとくからね。ごめんね？」

キョウは以前のピクニック以来、釣りが趣味になっていて、ソウジヤゲンヤと共に休日に釣りに行く事がある。そういう日は大体、アーデルハイド家もナカジマ家も夕食が魚料理になるのだ。

キヨウ達は子供に謝ってからその場を後にした。

「なあ、悪かったってギンガ。なんかショーが開かれるみたいだぜ？観に行かねえか？」

「仕方ないなあ。そうね、行こうかな」

それからキヨウ達はアシカに似た生き物やイルカに似た生き物のショーを観て楽しんだ。

水族館を五時頃に出て一旦繁華街の方に戻り、食事を取る事にした。

二人は食事の後に公園で少し休憩を取る事にした。

キヨウ達が公園に着く頃には、辺りが少し暗くなり始めていて公園に飾られたイルミネーションが灯りだしていた。

「わあ。綺麗だね」

「良い時期に来れたよな」

その公園は市街から少し離れた高台にあった。

「あっちは展望台になってるみたいだよ。行ってみよう？」

「ああ、良いぜ。おい、ギンガ。走らなくても展望台は逃げねえぞ」

二人は展望台に移動した。そこからはクラナガンの町並みが一望出来る様になっていた。

街の明かりが見えて綺麗なようだ。

キョウ達以外にもカップルが何組か来ているようだった。

「良い景色だけどちょっと落ち着かないね？」

「カップルばつかだもんな。そんなら、あっちの方に行ってみねえか？」

そこより少し高い位置にある展望スペースには人が居ないようだ。キョウ達はそちらに移動する。

暫らく二人は景色を楽しんだ。

「今日は本当に楽しかったなあ。キョウ君、誘ってくれてありがとう」

ギンガは笑顔でキョウにお礼を言う。

「こちらこそ。また来ようなギンガ。それでさ、ちょっと話があるんだ」

キョウが真剣な表情で答える。

「えっ？何？」

「前の時はお前から言ってくれたもんな。俺から言わせてくれ！ギンガ、お前の事が好きだ。俺と付き合ってくれないか？」

キョウの言葉を聞きギンガは涙を流し答える。

「はい。よろしく願います」

「あん時は、なんか有耶無耶になっちまってごめんな。それと渡したいものがあるんだ」

そう言うとキョウはポケットからシルバーのネックレスを取り出す。細いチェーンに中が抜かれたクロスクロスの装飾が施されている。

それは二人が公園に移動する途中で露店で売られていたものだった。ギンガがそれを欲しそうにしていたのでキョウが内緒で購入したのだ。

「これって……。良いの？」

「ああ。受け取ってくれ」

ギンガは受け取り首に掛ける。

「どうかな？」

「凄く似合ってる。綺麗だぜ」

「うふふ、ありがとう。これはお礼だよ」

ギンガがそつとキョウウと唇を重ねる。

「ギンガ、お前」

「これからもよろしくね。私がキョウウ君の彼女さんかぁ。嬉しい！」

ギンガはキョウウの腕に抱きつく。

「俺だつて夢みたいだ。ずっと好きだったギンガとこつという関係になれたんだから」

それから二人はまた暫らく景色を楽しんだ後、バスで帰宅していた。

Ep25 Kiss me again2 (後書き)

「歪みだ、リア充は世界の歪みだ。リア充を駆逐する！トラザム
！！」

失礼しました。私の先輩が以前そんな事を言っていたので。

砂糖吐きそうな文が書けるようになりたいです。

Ep26 ある日の風景8 (前書き)

今回は久々に登場する人達が。

感想や指摘いただけると嬉しいです。

こういう物語じゃおなじみのナンパイベント書いてみたけどどうまく出来ただろうか？

Ep26 ある日の風景8

キョウとギンガが映画を見に行ってから数日が経った。

付き合い始めたと家族に伝えても「やつとか？」など言われる位で、それまでの生活と特に変わる部分はなかった。

ゲンヤが多少騒ぎはしたが……。

「キョウ、ギンガを泣かせる様な事したら許さねえぞ!!」

という言葉の後、二人の交際を認めた。

特に関係が悪化するという事もなく、本当に今まで通りの生活に戻った。

スバルは以前と同様にキョウに対してちょっかいを出しギンガをからかったりしていた。

457

その日は久しぶりに小学校時代の親友で集まる日だった。

キョウはアギトを肩に乗せギンガと共にバスで目的地へと向かう。

三人が向かったのはクラナガン市街にあるファミリーレストランだった。

「おい!! キョウ君達!! こっちこっち!!」

店に入るとシャーリーの声が聞こえた。向いにはグリフィスも座っている。二人は先に席を取ってキョウ達を待っていたようだ。

「遅いよー!!」

「ワリい、急いだつもりだったんだけど。ってお前らが早く着きすぎだろ?」

キョウ達を待っていたシャーリーが抗議の声をあげるがキョウが反論する。

事実、シャーリーは久しぶりに集まるのが楽しみで集合時間より早く来ていたのだ。

家の近いグリフィスを引き連れて20分程前に店に来ていた。

「まあまあ、二人とも。それよりも久しぶりだね、キョウ君、ギンガちゃん、アギトちゃん。元気だった?」

グリフィスがその場を収めた。

「ああ。おかげさまで。そっちも元気そうじゃん」

「グリフィス君、久しぶり。元気そうだね」

「グリフィスー!! 久しぶりー!!」

五人は久しぶりの再会を喜んでいた。

それからしばらく五人は近況報告などを話した。
話題は尽きず様々な事を喋っていた。

「へえ、シャーリーは今度、通信士の三級の試験を受けるんだ？」

「うん、言っていなかったっけ？ あと訓練校にいる間に、B級デバ
イスマイスターの資格を取ろうかなって思ってるんだ。」

「俺は空戦Bを取得したぜ、アギトのおかげだけだな」

「スツゲーだろ？ ギンガだって陸戦Bに受かったんだぜ！！」

「教官や周りのみんなのおかげだよ。私一人じゃ無理だったと思う
よ」

「そんな卑下しなくても、ギンガちゃんは今から優秀だったじゃない。
僕もシャーリーみたいに通信士の資格を取ろうと思うんだ。講
義の関係で四月の試験になるけど。将来は指揮がとれる立場になり
たいんだ。だからそのために必要な資格を取るつもりだよ」

「スゲーな。小学校ん時は将来の事が決めらんねえって相談してき
たのにな。俺らん中じゃ出世頭か」

「それは言わないでよキョウ君。それより、みんなは訓練校を出て
からどうするの？」

「私はメカニックマイスターかな。やっぱり機械をいじるのは楽しいし。私が作ったものが人の役に立つようになったら嬉しいけど。同員になってA級デバイスマイスターの資格を取ったらキョウ君達のデバイスも見てあげるよ!!!」

「そっか、ありがとな。期待しとくぜ。俺はあ、地上の平和を守る局員になりてえかな。資格とかよりも、ランク試験をどんどん受けていくつもりだ。空戦はアギトに力を借りるけど、陸戦も取るつもりだぜ。そっちは自分の力だけでやろうと思ってる」

「ふえっ？ キョウがそのつもりなら私はそれで良いよ。私はキョウがまだ頼りねえから面倒を見ていくつもりだ。なんたって妹であり相棒なんだから。手の掛かる兄貴だぜ」

「何だと、アギト」「やるかキョウ？」

「二人ともやめなさいよ。周りに迷惑よ」

「はい、ギンガさん。ごめんなさい」「」

キョウとアギトをギンガが窘める。といっても二人はじゃれているだけでコミュニケーションの一環だから本気ではない。

実際、ギンガ達もそれは理解している。みな長い付き合いなのだ。二人はすぐさま謝った。

「なんかギンガちゃんって、クイントさんに似てきたよね？」

「ホント。ギンガちゃんとこのおじさんも良くあんな風に怒られてたわよね？」

「そうかなあ？ そんなつもりはないんだけど」

「親父がよく言ってるぜ。俺を殴る姿がおっちゃんを叱るクイントさんにそっくりだって」

「クイントさんに似てて良いじゃんか、なあギンガ。料理も美味しい優しくてきれいだし、私もクイントさんみたいになりたいぜ」

「ありがとうアギトちゃん。それとさ、キヨウ君。あなたが私を怒らせる様な事言つのが悪いんじゃない！！」

キヨウ達のやり取りを見てグリフィスは懐かしく思っていた。知らず知らずのうちに笑ってしまった。

「あははは。それでギンガちゃんは訓練校を出たらどうするの？」

「私はキヨウ君とアギトちゃんと地上の平和を守ろつって約束をしてるんだ。そのために母さんみたいに捜査官の資格を取ろつと思っ
の」

「そんで、キヨウと私とトリオを組むんだよな？」

「へえ、良い目標だと思っよ」

三人は将来について語りあった。その後、お決まりの話題につつま。

「グリフィス君、士官学校で気になる子とか見つかった？ もてるんじゃない？」

「いやあ。そんなことないよ。シャーリーの方こそどうなのさ？」

「私は今はそんな事に興味が持てないかな」

「へえ、お前らの間でそういう話題出るんだな？」

「私もてつきり二人はそういう仲だと思ってた」

「キョウ君やギンガちゃんじゃあるまいし、私達はそういう関係にはならないよ！！」

「そうだよ。小さい頃から一緒だし兄妹みたいなものだよ。キョウ君達こそどうなのさ？」

「そうそう。小学校の頃も何時くっ付くのか気になってたし。そう言えばアテナと話してただけど、キョウ君と訓練棟の屋上から帰って来た時様子が変だったじゃない？」

「アテナって？」

「訓練校の友達だよ。良く一緒にいるんだ。って、シャーリーもアテナちゃんもそんな事話してたの？」

「やっぱり、うら若き乙女だから気になるし。教えてよ、なんなら

キョウ君の口からでも……」

「この間、二人で映画にも行ってたもんな。キョウ、ギンガがあったのか教えてやれよ!」

「ふえっ。あのおー」

「ああ。教えてやるぜ。俺とギンガは晴れて付き合う事になりました!」

「「やっ」とー?」

「やっとして何だよ?親父たちもみんなそう言うんだぜ」

「いやー、キョウ君達の態度を観ていたら、誰だって気付くと思うな」

「そうだよな、グリフィス君。そうかー。おめでとっ、ギンガちゃん!」

「う、うん。ありがとう、シャーリー」

「これでキョウの面倒をみる負担が減ったぜ。まあ、前とあんまし変わらねえけど……」

それから一同は思う存分喋り店を後にした。

途中で公園に寄ろうとシャーリーが提案したのでキョウ達は公園に向かった。
クレープの屋台があったので、じゃんけんで負けた男二人はパシラされ店に並んでていた。
女性陣は無駄にそういう勝負が強いらしい。

アギトはせつかくなんで変身魔法を使い大きい姿になり、ギンガ達とベンチに座りキョウ達を待っていた。
そんな彼女らの下にガラの悪そうな三人組が現れた。
年はギンガ達より二つ三つ上で、三人とも恵まれた体格をしていた。

「ねえ、君達。誰か待ってるの？」

「暇なら俺たちと一緒に遊ばない？」

「いえ、待っているひとがいるんで。其れに間に合っています」
ギンガが代表して答えた。
それでも三人はしつこくからんでくる。

「良いから行こうぜ!!」

「きゃっ。離してよ!!」

一人がシャーリーの腕を引っ張った。力がこもっていたのか彼女は声を出していった。

「うるせえ、来いっつってんだ!!」

それまではギンガ達はなるべく穏便に済ませようと拒絶の言葉を繰り返すだけだった。

だがシャーリーに手を出されたので、ギンガ達は我慢できずに動くとする。

しかし……。

「もう頭に来た!! ギンガちゃん、アギトちゃん、やっちゃって!!」

シャーリーが真つ先に切れた。

「よし、ギンガ。やってやろうぜ!!」

「そうね、アギトちゃん!!」

「なんだこのアマ!! やっちまえ!!」

ギンガとアギトは男達と乱闘を始めた。

「アギトキーク!!」

「ぐえっ!!」

アギトはシャーリーを掴んでいた男を一撃でのした。

空中に飛び上がり、下降しつつ撓る蹴りを放つ『独楽屠り』によく

似た技を放つ。アギト独自のアレンジが加えられた『アギトキック』が男の頭部に炸裂した。

キョウの『独楽屠り』と違い、飛び上がる高度が低い代わりに勢いが付いている。『独楽屠り』は空中の敵を叩き落すことも可能だが、『アギトキック』は地上の敵に焦点が絞られているのだ。

軽い体重でも相手に痛手を与えられるようにこのようなアレンジが加えられているのである。

「怪我しないように弱めにと。ボディが甘いわよ？」

「がっ!!！」

ギンガも男の一人にボディブローを放つ。見た目以上に思い一撃が、決り込む様に男の腹部に叩き込まれた。食らった男は、一撃で膝を着く。

何度もキョウと組み手を行っていたので彼の得意技『荒咬み』の型を模倣したようだ。

何気にナカジマ姉妹はハイスペックである。

「「受ける、このブロー!!！」」

「ぐほっ!!！」

アギトとギンガは二人で一人残った男にショートブローを決めた。体を大きく後ろに反らし、全体重を乗せた一撃が放たれる。

その動きは偶然であるが、まだキョウが会得していない奥義『百八拾貳式』にそっくりなものだった。

もちろん二人とも手加減していて、アギトも炎は使っていない。

結局二人で三人をのしてしまった。

「うわぁ、ギンガちゃんもアギトちゃんも強いねえ!!」

シャーリーは何事もなかったように賞賛した。

時間になると三分足らずの出来事だった。絡んできたチンピラをギンガとアギトがKOしてすぐ、キョウとグリフィスがクレープを持ってその場に戻ってくる。

「あれ？ 此処に倒れてる人たちは？」

「私達の事をナンパして無理やり連れて行こうとしたんだよ」

「シャーリーに乱暴したんだ。だから私とギンガでお仕置きしてやっただけだよ」

「無理やり私の手を引いて行こうとするんだもん。頭に来たわよ」

「へえ、そうなのか？」

男達はすぐに気がつくとその場から逃げるように去っていった。その足取りからして、幸い三人とも怪我はしていないようだった。

「それにしてもこの三人に声を掛けるなんて、不運なやつらだよな」

「三人とも黙っていれば可愛いんだから仕方ないよ」

「外面菩薩、内面夜叉つてやつか……」

キョウとグリフィスは顔を見合わせて笑っていた。だが彼らの言葉に女性陣が反応する。その背中からは黒いオーラのようなのが立

ち上っていた。

「失礼ね、二人とも!!」

「うわー、ごめん。三人とも。ほらクレープあるから許してくれよ」

「そ、そうだよ。三人とも笑っている方が可愛いよ?」

キヨウはひたすら低姿勢に謝る。グリフィスは持ち前のイケメンスマイルで懐柔しようと試みる。

だが、二人の行動は失敗に終わるのだった……。

それから一同はクレープを持ったまま追いかけてこをした。

途中で女性陣の怒りは収まったのか、後半は純粹にそれを楽しんでいた。

彼らはその後、夕方になり解散した。

その日一日をとて楽しんでいたようだった。

Ep26 ある日の風景8（後書き）

普通、主人公が助けるパターンが多いけど素直にそれやるのもつまらないので、こうなりました。

あとは、空港火事も書かなきゃな。

読んでいただきありがとうございました。

Ep27 若さゆえの過ち（前書き）

空港の火災の時期間違えました。新暦71年ってことは知ってましたけど四月って知らなかった。

なので申し訳ないんですが『原作』より十か月近く遅くに起こったという捏造設定にさせていただきました。

感想や指摘を募集しています。よろしくお願いします。

キョウ達の休暇も後残り二日となった。

その日、ゲンヤは家族を部隊の見学に招待した。

加えて、訓練校を卒業したら地上部隊に所属しようと考えているキョウもアギトと共に招待されるのだった。

ゲンヤの所属する陸士108部隊へはミッドチルダの北部にある臨海第8空港を経由して移動する事になっているようだ。ナカジマ家の3人とアーデルハイド兄妹はクイントが運転する車で空港へと足を運んでした。

「父さんの部隊かあ、楽しみだね？ アギちゃん!!」

「そうだよな。私達も後二年したら管理局に入るから色々と参考にしたいて」

父の部隊を見学するという事でストライプのロンTにミニスカートという他所行きの出で立ちのスバルは、同じくクイントから用意されたのであろう白いワンピースを纏ったアギトと共に無邪気に空港のロビーではしゃいでいた。

彼ら以外にも空港には多くの人があり、二人の姿はとても目立っていた。道行く人々は小さな子供がはしゃいでいる姿を見て微笑ましく感じているようであった。

「おい、アギトもスバルも自分達ばかりで先に行くなよ!!」

「そうよ、迷子になっても知らないんだから」

キヨウとギンガが自分達の前を歩くスバルとアギトに注意を促す。楽しみで仕方がないといった様子の妹達は二人の声に耳を貸さない様だった。

「二人とも嬉しいのよ、みんなで出かけるのは久しぶりだし。ほら、あなた達も楽しんできていいの」

兄や姉という立場で注意をしていたキヨウとギンガに向かい、クイントが後ろから声を掛ける。彼女にはキヨウとギンガが自分達の立場を考えて楽しみな気持ちを抑えているという事が伝わっていたのだ。流石は母親である。

「スバル、それにアギトちゃん。出発までもう少し時間があるから私と色々見て廻りましょうか？」

「ホント？ やったー！！」

「クイントさん、早く行こうよ！！」

クイントの提案にアギトとスバルは全力で飛び付く。二人の歩くペースが速かったのは、やはり空港の中が気になって仕方がなかった事が原因なのだろう。

「それじゃあ、キヨウ君とギンガは二人で楽しみなさい。邪魔者は消えているから。二時間後に向こうのロビーの時計前で合流しましょう」

「ちょっと、クイントさん？」

「はあ、仕方ないよキヨウ君。じゃあ二時間後ね、母さん。ボソッ。
(ありがとう)」

「どういたしまして。じゃあ、はぐれないように手を繋ぎましょ
うね」

キヨウは突然の事に少々戸惑っていたのだが、一方のギンガはクイ
ントの提案に乗る事にした。その際、小声でクイントに礼を言い、
クイントはそれに対してウインクをして返すのだった。

それからクイントはアギトとスバルの手を取りその場を去っていっ
た。

それから平穏な時間が過ぎていったが、集合時間になる少し前にそ
れは突然起こった。

空港内で巨大な爆発が起こったのだ。
それによって広がった炎が空港を包んでいく。

「きゃあー!!」

「ギンガ!!!!!! 大丈夫か?」

突然の振動にキョウの隣を歩いてきたギンガは体勢を崩す。彼女が転ぶ前にキョウがその手を掴んでいたようで、怪我をすることは無かった。

「うん。ちょっとバランスを崩しただけだよ」

自分の身体には問題が無いという事をアピールするために、ギンガはキョウの手をほどくと力瘤を作って見せ、笑顔を彼へと向ける。そんなギンガの姿を見てキョウも一安心するのだった。

二人は自分達の周囲の状況を確認する。どうやらキョウ達の居る場所は幸いな事に炎が広がっておらず、振動で壁や床が崩壊しそうになっただけだった。

「一体何が起きてんだよ」

「それより、母さん達は?」

自分達の安全は確認できたのだが、その一方で離れ離れになっているクイント達の事が気になりだしギンガは顔を不安で染める。

「早く母さんたちを助けにいかないと!! 嫌だ、前みたいに母さんが大怪我をするんで嫌だよ!! それにスバルもアギトちゃんも居るんだし!! うわあああ!!」

ギンガは三人の事が不安になり、取り乱してしまふ。居ても立っても居られない。そうとしか言いようのない様子であった。

「落ちつけギンガ。向こうにはアギトが居るんだ。実験の影響のせいか、俺とアギトはある程度の距離内だとお互いを感じる事が出来る。早く三人を探すぞ!!」

キョウはギンガを落ち着かせるために彼女の手を掴み、その瞳をじつと見つめながら言葉を掛ける。

「うっ、うん。そうだよ、私が慌てても事態は好転するわけじゃないよね……。ありがとう」

キョウの言葉でギンガは冷静さを取り戻したようであった。二人は災害現場を移動する為にバリアジャケットを展開する。

「「セットアップ!!!!」」

それから二人は近くに人がいないか確かめるため、炎の上がる方へ飛び込んでいくのだった。

「怖いよ、母さん。ギンねえ。キョウにい。アギちゃん。みんなどこー！！！」

スバルはその時クイント達とはぐれ一人になっていた。炎が燃え盛り、崩れかかった空港の中を一人彷徨い歩く。

クイントとアギトの二人が売店にいる間に、スバルは他の所を観ようと一人で行動してしまったのだ。その顔は恐怖と不安の色でいっぱいだった。

「うわっ！？」

途中、倒れた柱の破片に足を取られ躓いてしまう。右の膝小僧を床にぶつけてしまい擦り傷が出来ていた。

「グスツ。もう、嫌だよ。誰か助けてよー！！」

スバルの膝からは赤い血がにじみ出していた。傷の痛みや一人でいることの恐怖によりスバルは疲弊しているようだ。幼い子供にこの状況は過酷過ぎるであろう。助けを呼ぶ彼女の声には少しだけ涙声
が混じっていた。

「スバルー！！！！ 何処だー！！！！」

「スバルー！！ お願いよ！！ 近くにいるなら返事をして！！」

クイント達は売店の近くで、自分達の元から消えたスバルに呼び掛けていた。

例えスバルにその声が聞こえてはいなかったとしても、わずかな希望を捨てずに二人は声をあげ続ける。

クイントは魔導師としての力を失っており、出来る事が限られているのだ。今彼女に出来る事はその場にはいない娘に向けて声を送り続けることや、自分達のもとに逃げ込んで来た人達の不安を減らすために声を掛ける事くらいしかなかった。

クイントとアギトの周りには10名程の民間人の姿が有った。彼らはたまたま二人の近くで火災に遭遇した人達であった。

スバルを呼ぶ二人の声に引き寄せられてその場に集合しているのだ。アギトはクイントと共にスバルへ向けて声を張り上げながらも、近くにいる人々を結界で保護をしている。魔法が使えるのはその場には彼女しか居なかったのだ。

彼女が使用している結界魔法は自分の周囲で決められた範囲を守るという物であった。自分の周りに近くにいた人たちを集めて結界を

展開しているのである。

アギトがその場から動くとその結界は消失してしまう。自分のもとへと避難してきた人たちを見殺しにすることなど絶対に出来ないのがアギトだ。

幸いな事に現在結界にいる人々の中に怪我人はいないようであり、皆不安な表情を浮かべながらもアギトの展開した結界の中で肩を寄せ合い助けを待つのであった。

既に確認を終えている事であるが、二人の近くにいた人たちはそれで全部の様であった。

アギトの結界の中に避難した人々は通常ならパニックを起こしていても不思議ではない。

だが彼らは落ち着いていた。アギトとクイントが時折、励ますように声を掛けているのだ。

そうした中で、この場に姿の無い娘に向かいクイントが声を挙げ続けているのである。

彼女の心中を他の人々は察しているのである。

「キョウはまだ近くにいないみたいだ。あいつ等、無事なのかよ？」

「アギトちゃん、ここから声を出して救出を待ちましょう。スバルも声が届いたらきつとこっちに来るわ。キョウ君もギンガも強いんだよ。さあ、頑張って声を出しましょう。みなさんもこの中でじっとしててください。きつと助けが来る筈です！！」

「何い！？ 臨海第8空港で火災だと？」

「はい、突如起こった爆発により空港施設が炎上しています」

家族の到着を部隊長室で待っていたゲンヤのもとにも火災の情報が届いていた。ゲンヤは部下のラッド・カルタスからその情報を知らされるのである。

「あそこには今、俺の家族やソウジ先輩んちの子供が居るんだぞ！
！ すぐに出動だ！！」

自分の家族も火災に巻き込まれているという事もあり、ゲンヤは珍しく取り乱してしまうのだった。

「落ち着いてください。隊員達の出動準備がまだ出来ていません！
！」

ラッドがゲンヤの肩を掴み、彼の身体を揺さぶりながら声をかける。その声によってゲンヤは気がついたようで、はっとした表情を浮かべた後、冷静さを取り戻したように取り繕う。

「すまん、ラッド。冷静に対応しなきゃいけないよ……。一度、かみさんを失いそうになったから家族を失う事が怖いんだ。頼む、みんな無事でいてくれよ！！ 隊員達には至急出動準備を完了させる！！！」

「了解！！！！」

災害の連絡が入った際、部隊員たちも数名ほど部隊長室に詰め掛いていた。その場にいた全員が慌ただしく行動を開始する。

「うおおりゃあー！！」

「リボルバーシュートー！！」

キョウとギンガは魔法や体術を使い障害物を破壊しつつ家族を探していた。

途中で見つけた逃げ遅れた人たちは、ギンガの『ウインググロード』
によって火の回っていない所に避難させ、動けない人は二人で抱え
て移動させた。

「くっそ。どこにいるんだよ？」

「母さーん！！ アギトちゃんー！！ スバルー！！ 返事をして
ー！！」

二人の近くには誰もいない様だった。再び彼らは自分達の家族や逃
げ遅れた人々を探して空港内を進むのであった。

「大丈夫か？ 君達！！」

離れ離れになったクイント達を捜し歩くキョウ達の下に、救助部隊
の人間達が駆けつけてきた。先ほどの場所から5分ほど歩いた地点
での合流だった。

「君たちか？ 逃げ遅れた人たちを避難させたのは？」

救助隊員はキョウ達が避難させた人々を既に保護しているような口
ぶりであった。キョウとギンガは敬礼を取りつつ所属や名を伝える。

「はい、第4陸士訓練校のキョウ・アーデルハイド訓練生です」

「同じくギンガ・ナカジマ訓練生です」

「そうか、ナカジマ三佐の。二人とも良くやった。ここは私達にま

かせて君達も早く避難しなさい」

まだ管理局員でもないキヨウ達を危険な目に遭わせたくないと思い、救助隊員は二人を避難させようと言葉を放つ。

「でも、母と妹と幼馴染がまだ見つかっていないんです!!」

「お願いです。僕たちにも協力させてください!! 妹が!!」

自分達の身近な人が巻き込まれているという事もあってか、キヨウとギンガは引き下がろうとはしなかった。ゼストの言葉によってミッドの治安やそこに生きる人々を守ろうと誓っているキヨウ達であったが、やはり家族という物は大切なのである。

「ダメだ!! 君達にはまだ早い!!」

「でも!!」

その時クイントとアギトの声が、声を揃えて救助隊員に反論するキヨウとギンガの下に届いた。かすかな声であったのだが二人はそれを聞き間違える筈もない。常日頃から大切に思っている母と妹の声だったからだ。

「自分はユニゾンデバイスとの距離が近い場合、その地点を把握する事が出来ます。お願いです。連れて行って下さい」

「お願いします。声が聞こえたんです」

キヨウとギンガは必死で救助隊員に頭を下げた懇願する。

「そうだな、こうしている時間が惜しい。構わん、行くぞ！」

状況も状況であり、救助隊員が折れた様だ。

キョウ達は遅れて合流した、他の救助隊員達と共にアギト達の方へ向かった。

「大丈夫か？ みんな！」

「母さんどこも怪我はない？」

それから少し奥の方へ進んだ場所でキョウ達はクイント達と合流した。壁を破壊しながら進んだキョウ達の力も大きかったのだろう。短時間で見つける事が出来た。

彼らの姿を見たその場にいた人々は揃って安堵の表情を浮かべた。彼らは救助隊員達の誘導に従い避難を開始していった。

「ええ、アギトちゃんのおかげで私達は何とか……」

彼らが避難をしている間、キョウとギンガはクイントとアギトに声をかけていた。クイントは流石元管理局の捜査官といったところか、気丈な振る舞いであった。

しかしそれは表面上だけであり、心の中では泣き叫びたくなってい

るのだらうと二人に守られていた人々にはバレているようであった。保護されていく中でそれらの人々はクイントへ向けて心配そうな目を向けても居たのだ。

「それより、スバルの奴が何処にもいねえんだよ!!」

「そんな!! 嘘!？」

アギトによってスバルの不在が告げられたギンガは、シヨックによって力が抜けたのかフラフラと倒れそうになる。しかし先ほどキヨウに注意された事を思い出し何とか踏みとどまるのであった。

「取り敢えず此処にいる人は全員無事の様だな。ほら君達も一緒に避難しなさい!!」

救助隊員達は手早く被災者達を避難させ続ける。その対象はキヨウ達も例外ではない。キヨウとアギトとギンガは訓練校に所属しているとはいえ、正式には一般人であるからだ。

キヨウは自分とアギトの力なら何か出来ないものかと考えた。炎に対する耐性も他の魔導師達より高い事も影響している。

考え事をしていたキヨウは、突然何かを決心したかのように言葉を放つ。

「ギンガはみんなと一緒に避難してくれ。キヨウ・アーデルハイド訓練生、独断専行します!! 行くぞ、アギト!!」

「キヨウ君、アギトちゃん、ダメだよ!!」

「おう!! キヨウ!!」

「ユニゾンイーーーーン!!!!!!」

「こら、待ちなさい！君達、危険だ!!!!!!」

ギンガとクイントは救助隊員達に手を引かれて避難をさせられている最中であつた。キョウとアギトも手を差し伸べられたのだがそれを振り払いユニゾンを行う。

キョウとアギトは救助隊員達の声を見殺して炎の中に飛び込んだ。

「かあさーん!!! ギンねえー!!! キョウにいー!!! アギちゃーん!!!」

スバルは一人彷徨っていた。バリアジャケットを纏っているの大きな怪我等はないようだ。先ほどよりはだいぶ落ち着きを取り戻しているようである。

よろよろと膝を庇いつつ歩いているその時、一本の柱がスバルの上に倒れこんでくる。

「リボルバーキャノン！！　喰らえー！！」

スバルはクイントから伝授された『シューティングアーツ』の技を使用し自力で柱を破壊した。

だがそれだけで危険が去ったわけでは無かった。死角となる彼女の後ろから大きな女神像が倒れてくる。

振り返ったスバルであったが、とっさの事に反応する事ができなかった。

「嘘、私死んじゃうの。嫌だー！ー！ー！！」

スバルが覚悟を決めて目を閉じる。彼女は幼いながらに考えていた。

まだ死にたくない。やりたい事だつてたくさんあるし、もっとアギトや家族のみんな、姉の友人たち等多くの人たちと共に過ごしたい。

心からの叫びを挙げたのだった。

そのままスバルは瞼を閉じ続ける。

だが、何時まで経っても女神像が自分にぶつかるといふ衝撃が伝わって来ない。

変に思った彼女が恐る恐る目を開けると、自分の方へと倒れ込んで来た女神像が桃色のバインドによって止められていた。

「良かった、間に合ってた」

そこには白いバリアジャケットに茶色い髪を二つに結んだ女性が立っていた。

その女性は今、管理局で最も知名度のある女性。

『エースオブエース。高町なのは』だった。

「うをおおおおお！！ 喰らいやがれー！！！！！！」

なのはがスバルを救ったその時、僅かに遅れたキヨウが壁を破りその場に入ってきた。

「大丈夫かスバル！！」

「キヨウにい！！」

キヨウはスバルの姿を確認すると、すぐさま彼女のもとへと駆け寄りギュッと抱きしめる。

「あれ？ 君は？」

「キヨウにい、なのはさんが助けてくれたんだよ」

抱きしめながらどこかに怪我を追ってはいないかキヨウは確認していた。大事な妹分の事であり周りが見えていない様子であった。スバルの言葉でキヨウはなのはに気付く。

「失礼しました。自分はキヨウ・アーデルハイド訓練生です。妹分を助けていただきありがとうございます」

スバルを腕の中から解放すると慌ててなのはの方へと向きなおり敬礼する。

「大切な人が無事でよかったね。それでなんで訓練生の君が？」

「はい、なのはさんのお陰です……。えっと、それは……。救助隊の方の制止を無視して駆けつけてきました」

管理局員でもないキヨウがその場にいる事に対して、なのはは疑問の声を挙げる。それに対してキヨウは悪びれるといった様子もなく正直に話した。

「ダメだよ。そんな危険なことしちゃ!! でも、早く脱出しないと。やるよ、レイジングハート!!」

キヨウをその場で叱ろうとしたのはだが、いつこの建物が崩壊してしまうか分からないので脱出を優先する。

「デイバイー……ンバスター……!!……!!」

なのはの代名詞とも呼べる砲撃魔法『デイバインバスター』が天井を貫く。

桃色の閃光が空を走る。エースと呼ぶにふさわしい豪快な砲撃であった。

「連絡によるとあなた達二人で最後までだから早く脱出しよう? アーデルハイド訓練生は飛べる?」

「はい!! 空戦Bを取得しております」

「じゃあ、私がスバルちゃんを抱えて飛ぶからついてきてね」

それからキヨウ達はなのはが開いた脱出口から空に飛び立ち、脱出する事に成功するのだった。

「何考えてやがる！！ この馬鹿野郎が！！！」

「ぐっ！！！」

キヨウとアギトはなののはによってスバルと共に救出された後、現場で指揮を行っていたゲンヤのもとに呼び出された。ゲンヤはキヨウを観るなり彼の頬を殴りつけた。

「まだ、未熟なお前が飛び込んでいつてどうするんだ！！！」

ゲンヤは今まで見せた事が無い程の怒りをキヨウに対して向けていた。キヨウはゲンヤの姿に委縮してしまっていた。

「でも、スバルが中に……」

アギトが二人の間に入りキョウを擁護する。

「だからと言って中に飛び込んでどうする。お前はゼストさんの様にみんなを救いたいって言ってたよな！！ お前が死んだら残された周りの人間はどうなるんだ！！」

ゲンヤの言葉にキョウは返す言葉がない。

「自分を大切に出来ない奴が人を助ける事なんて出来ない！！ 本当に心配したんだぞ！！ 俺以外にもクイントもギンガも、お前に助けられた人たちも、救助隊員達も！！」

ゲンヤ達が本当に自分の事を心配していたのだと、ゲンヤの様子からキョウには非常に強く伝わるのだった。

「う、うう……。ごめん、なさい……」

キョウは幼子の様に涙をこぼし始めた。独りよがりの行動が沢山の事に迷惑をかけた事、心配をかけた事、自分の事を考えていなかった事を恥じていた。

もし自分が命を落としてしまったらどうなるのか。残された側の人間に自分を置き換えた際に自分がどれだけ愚かな事をしてしまったのかをはっきりと理解するのだった。

「お前が自分を犠牲にして人を助けても、助けられた方はどうなる？ お前が無事で本当に良かった」

ゲンヤはキョウを強く抱きしめた。その力強い抱擁からはゲンヤが

どれだけ自分の事を心配していたのか、しっかりと伝わってくるのだった。

その後キョウは暫らく泣き続けた。アギトも一緒になって反省した。

その後キョウ達が落ち着きを取り戻してからゲンヤは話し始める。

「お前が人助けのために行動した事は素晴らしい。その時の気持ち
を忘れないでくれ。ただ、自分の事を考える。お前の事を大切に思
っている人間は沢山いるんだ」

そう言つてゲンヤは部屋の扉を開けた。

そこにはナカジマ家の面々が立っていた。

「キョウ君！！ 無事でよかつた。本当に良かった！！」

ギンガが泣きながらキョウに抱きつく。

「キョウ君、前に言ったわよね？考えて行動しなさいって。言いた
い事はゲンヤさんが言ってくれたからいいけど。本当に心配したの
よ」

「キョウにい、アギちゃん助けてくれて本当にありがとう。でも危
ないことしちゃだよ。キョウにい達に何かあったら私、私……」

スバルまで泣き始めてしまった。

「俺、絶対に自分を犠牲になんてしない!!」

キヨウは誓うのだった。

「それだけで帰れるとは思うなよ、キヨウ？ アギトもだ!! お前達は現場で働く隊員達にどれだけ迷惑をかけたのか分かるか？」

先ほどとは一変して、ゲンヤは再び怒りのオーラを放ち始める。それから暫らくゲンヤによる説教がキヨウとアギトに対して行われた。いつの間にかその場にはキヨウ達と途中まで行動を共にしていた救助隊員達の姿もあった。彼ら一人一人からもキヨウとアギトは自分の行動がどれだけ危険な物だったのか、どれほど多くの人たちに心配をかけたのか伝えられるのだった。

長い長い説教の時間は続いた。

その後、夜半過ぎになってしまったがキヨウ達は一人も欠けることなく帰宅する事が出来た。

帰る前にキヨウとアギトはなのはからもこっぴどく叱られた。それ以外にも多くの人たちに叱責された。

キヨウは一人ひとりの言葉を受け止め、今後はこのような軽はずみな事はしないと心に誓った。

帰宅後もソウジによりかなり怒られ、その後何時も以上の鍛錬が課された。ソウジなりのお仕置きであった。限界以上まで扱かれ続け、鍛錬が終わったのは辺りが明るくなりかけた時間帯であった。

それから二日後、休暇が終わりキョウ達は訓練校に戻る事となった。

訓練校でも教官たちから叱責を受ける。本来ならば放校処分も考えられるほどの行いだっただが、救助活動を手伝った事やアギトが身を呈して結界を張り人々を守っていた事を考慮して、反省文を書く事と数日間の停学。復学後は訓練用具の片づけや学校中のトイレ掃除などのペナルティを与えられるだけで済んだ。

二人に助けられた人々から訓練校に感謝の手紙が届いていた事も大きいだろう。

キヨウはその後、訓練校でのトレーニングに今まで以上に励んでいた。鬼気迫る勢이었다。

もちろんオーバーワークにならないように気を付けて……。

「自分を大切に出来ない人間が人を救える筈がない」というゲンヤの言葉が強く胸に残ったからだ。

それからまた暫らく月日が流れる……。

EP27 若さゆえの過ち（後書き）

文章書くのって難しいですね。

さらっと、なのはさん出しました。

読んでいただきありがとうございます。

Ep28 Growing up! (前書き)

30話にもなつてまだ『原作』の本編に入れないとは……。

アニメを見直していると結構うる覚えの部分が多くて凹みました。

「私の兄さんの魔法は役立たずじゃない!!」
私はそれが証明しなかった。

兄さんは両親が死んでから男手一つで私を育ててくれた。
両親が居なくとも兄さんとの暮らしは幸せだった。

でも、私が10歳の時に兄さんも私の前から居なくなった。

首都航空隊所属の一等空尉で、執務官志望のエリート魔導師だった
兄さんは、職務中に次元犯罪者の手によって命を落としたのだ。

兄さんの上司が、葬儀の時に兄さんの事を無能呼ばわりした。
ティータ兄さんは無能なんかじゃない。

それを証明するために、私は管理局に入って執務官を目指す事にした。

兄さんの夢は私が引き継ぐんだって決意したんだ。

管理局に入るために私は魔法学校を出た後、空戦魔導師を目指した。
士官学校と空隊の試験を受けたけど合格する事が出来なかった。
それなら、空戦がダメでも陸戦魔導師になって兄さんへの汚名を雪ぐんだ。

この春から私は第4陸士訓練校に通う。力を付けて兄さんの夢を私が代りに叶えるんだ。

キヨウは空港火災を経験してそれまで以上に訓練に励み、訓練校の二年次には陸戦Bランクを取得し、アギトと協力して空戦のA-を取得した。

もちろん、教官たちの力を借りての結果である。ハイデルンやラルフ達は生徒達を積極的にバックアップしていったのだ。

ギンガもその年に陸戦A-を取得した。

キヨウ達のグループはキヨウに触発されて、積極的に上のランクを目指したり資格を取っていた。他の訓練生もそれに影響され二年生にしてDランクやCランクを取得するものが増えていった。

その学年は近年稀に観る当たり年と言われるようになっていた。

加えてキヨウは、夏休みや春休みには帰省してソウジに修行を付け

てもらい『草薙流』の腕を磨き続けた。新しい技も覚え、飛躍する一年だった。

そして訓練校での最後の一年が始まる。

「今年はそういやあスバルが入ってくんだっけ？」

キョウ達は入学式の日も訓練施設で鍛錬を行っていた。現在は休憩中ではあるが。鍛えてばかりだと思われるが四人組はケンスウ以外成績上位者である。

もちろん彼も、キョウに付き合わされ勉強をしているので平均以上をキープしている。

「うん、今ごろ母さんと講堂に來ていると思うけど。」

「ほな、ギンガはんのおかんと妹はんが來とるんか？見てみたいわあ。」

「ケンスウ？」

「のおお、すまんアテナ！純粹に興味があっただけや、変な意味はないで！」

「クイントさんは式が終わったら帰ると思うから会えないと思うぜ。」

「スバルなら、施設見学の時にこっちに来るんじゃないかしら？」

ケンスウの問いにギンガとアギトが答えた。

「んなら、休憩が終わったら兄貴分と姉貴の良い所を見せてやらなきゃな？付き合ってくれるだろ？ギンガ。」

「もちろんだよ、キヨウ君！」

「ズリーぞ、キヨウ。アテナ、私と模擬戦やってくれ！」

「ええ。良いわよアギトちゃん。」

「ワイは審判かあ。それにしてもキヨウはん達、付き合いだしてからもあんま変わらへんなあ。」

一年の冬休み以降、キヨウ達が付き合っているという事はクラスの中で広まっていた。

それ以前も仲が良い二人だったので、皆いつ付き合うのだろうと疑問に思っていたが。

やはりそこでも「やつと？」という声が多く聞かれた。

キヨウもギンガも整った容姿をしているのでそれなりに人気があった。

ギンガはその容姿と性格、成績も優秀という事も相まって隠れファン等も存在していた。

だが二人は何時も一緒なので、お似合いのカップルというのがクラ

スの位置づけだった。

「もう少ししたら再開しますか？」

キョウ達はその後、訓練を続けた。

「えっと、私の席はここか！」

入学式を終えたスバルは教室に移動した。スバルの席はオレンジの髪をツインテールにした少女の隣だった。

「私、スバル・ナカジマって言います。これからよろしくね！」

スバルに少女が答える。

「私はティアナ・ランスター。よろしく、ナカジマ訓練生。」

必要最低限の事しか答えないティアナにスバルは積極的に声をかけていた。

その後、彼女達の担当教官が教室に入るとホームルームが始まった。ちなみに担当はクラーク・スタイルというキャップとサングラスを

付けた寡黙な男だった。

彼はラルフの親友であり、ともにハイデルンの部隊の出身である。

ホームルームが終わるとその後は自由時間となるのでスバルは寮へ移動した。

スバルは席が隣だったティアナと同室だった。

「部屋も一緒みたいだね？色々迷惑掛けるかもしれないけど、よろしくね。ランスターさん。」

「ええ。でも私の足をあまり引つ張らないでね。それにしてもあなた、なんでそんなに嬉しそうなの？」

部屋に入ってからテンションが高いスバルに尋ねる。

「私のお姉ちゃんと幼馴染が訓練校にいるんだ。何時も休暇の時しか会えないから」

「ふーん」

ティアナはあまり興味が無いようだ。

「そうだ、ランスターさん。夕食まで時間があるから訓練場を見に行かない？」

それまでと違いスバルの言葉にティアナは興味を示した。力を付ける上で訓練場に早くなじむ必要があると考えたからだ。

「良いわよ」

「やった。行こう！」

スバルはティアナを連れて訓練場に向かう。

「うける、このブローー！」

「くっ。ナックルダスター！」

「どつしたー！闇払い！」

「サイコリフレクター！ええい！」

キヨウ達は模擬戦を続けていた。

ギンガとキヨウはクロスレンジで、アテナとアギトはミドルレンジで戦っている。

キヨウ達のグループ意外にも何組か模擬戦を行っている。

「あつ、アギちゃん達だー！」

訓練場にスバルの声が響く。

「いくよ、キヨウ君！たああ！」

「チヨイ待ち、ギンガ！」

スバルの声にキヨウが気付く。ギンガの拳を受け止めて彼女を制止する。

「スバルが来てるみたいだぞ？」

「ホント？あ、スーバルー！こつちよー！」

キヨウ達は模擬戦を中断する。

スバルはキヨウ達の下に向かった。ティアナも無理やり連れていかれる。

「スバル！久しぶりだな！」

「アギちゃんも元気そうだね」

「スバルも今日から後輩かあ。よろしくな」

「うん、よろしくキョウにい！」

「何かあったらお姉ちゃんに言いなさいね。あらそっちの子は？」

「ありがとう、ギンねえ！えっと、この人はランスターさん。同室なんだ」

ギンガの言葉にスバルはティアナを紹介する。

「私はティアナ・ランスターと言います。ティアナで構いません」

「よろしくね。ティアナさんて呼ばせてもらうわ。私はスバルの姉のギンガ・ナカジマって言います。こっちは私の彼氏の」

「キョウ・アーデルハイドだ、よろしくな。スバル達とは幼馴染なんだ」

キョウ達も自己紹介を始める。

「私はアギト・アーデルハイドってんだ。キョウの融合騎であり、妹で相棒なんだ。よろしく！」

「ランスターさん、アギちゃんは私の親友なんだ！ギンねえ、最近さらっと言えるようになったね」

「スバル、余計なこと言わないの。お姉ちゃん怒るよ？」

「照れなくても良いって、ギンねえ」

ナカジマ姉妹は何時ものやり取りを始めた。
ティアナの言葉で中断するが。

「あの、そちらの方々は？」

「わたしはアテナ・アサミヤです。よろしくね？」

「はい、先輩方。よろしくお願ひします」

「ちょっと待ってえな！酷いで、みんな。ワイの事も忘れんといて
！」

ケンスウが割り込む。彼はたまにこういう扱いを受ける。

「ワイはシイ・ケンスウって言うんや。ティアナちゃんと、ギンガ
はんの妹ちゃんか。よろしゅう」

「スバル・ナカジマです。ケンスウさんよろしくお願ひします」

「ティアナ・ランスターです。よろしくお願ひします、先輩」

「先輩かあ。ええ響きやあ。二人とも可愛ええし。何かあったらワ
イに言いや！手取り足とり……」

「おい、ケンスウ」

「すんまへん、キョウはん。アテナもギンガはんもそう怖い顔せん

といてや。可愛い顔がだいなしやで」

「もう、ケンスウったら」

「ふふふ、仕方ないわよね」

ケンスウは何時も通りだった。キョウは彼を窘めた。

「あの、先輩達はよくここで訓練を？」

「そうだな、放課後や休日によくやってるぜ」

「キョウにい達しいんだよ。空戦A - だし、ギンねえは陸戦A - のランクを取得してるんだ」

「アテナちゃん達もランクは同じなのよ」

「せやで、ワイらこう見えても成績良いんやで!!」

「ケンスウはキョウのお陰だけだな」

「アギトちゃん、それは言わん約束やる？」

賑やかなキョウ達にティアナは聞く。

「先輩方、私はある目標があって管理局に入ろうとしているんです。私も一緒に訓練に参加させてもらえないですか？」

「訓練に、かあ。どう思う？ギンガ」

「まだティアナさんの实力を見てないから判断に困るんだけど……」

「お願いします。どんなきつい訓練にもついて行きますから!!」

「そう言っても、俺やギンガにアギトは小さい頃から鍛えてるからなあ。もちろんケンスウ達もそうみたいだし」

「頑張りますから!!」

「キョウにい私も訓練に混ぜてくれるってこの間約束したよね？それならランスターさんも」

「今すぐには無理だろうし、一学期に成績が学年20番以内に入ればってことにしようか。二学期からならある程度、訓練校のメニューに慣れてくる頃だろうし。あとスバル、お前もちょっと待て!!」

「そうね、スバルも二学期からってことにしましょう。慣れない環境で無理をしたら身体を壊すかもしれないし」

「本当ですね？絶対20番以内に入って見せます!!」

「仕方ないな、私もそれまで待つよ」

それからスバル達はキョウ達の模擬戦や訓練を見学していった。夕飯の時間になると一同は食堂でシャーリーと合流した。

スバルは姉の友人であり、昔よく一緒に遊んだシャーリーとの再会をよろこんでいた。

訓練校で新しい生活が始まる。

E p 2 8 G r o w i n g u p ! (後 書 き)

地の文が少ないかもしれない。

修正するかもしれませんが。

読んでいただきありがとうございます。

Ep29 強敵と書いて友と読む(前書き)

サクサク進めていこうかと思えます。

一部加筆と修正しました。

リン? 「知ってるです……。あなたを。」

ティアナ「……。」

スバル達が入学して少し経った。ティアナとスバルは学年でトップの成績を取り、二学期からはキョウ達の訓練に混ぜてもらえる事になった。

ティアナは驚いていた。

訓練校のカリキュラムが始まると、あのスバルが想像以上に優秀だったからだ。

射撃魔法は自分の方が優れている。

しかしクロスレンジや一対一での闘いでは彼女にまだ勝った事がないのだ。

どうやら母親が元局員であり、英才教育を受けているという話を本人から聞いた。

姉達と共に鍛錬に参加していたとも聞いている。

実際ティアナはスバルの話聞き、それまでの努力を評価していた。

しかし自分は、一人で兄の為に努力を続けている。

一方のスバルは周りの人たちに囲まれて今の自分以上の力を手にしている。

気付かないうちに嫉妬の感情を抱いてしまう。

「ねえ、ナカジマ訓練生？」

「何？ランスターさん」

その日、二人は寮の部屋にいた。

「あなたは何のために訓練校に入ったの？まさか、知り合いが居るからとか、そんな理由じゃないわよね？」

ティアナの表情は真剣だ。

「もしそうなら、私は悔しい！」

ティアナは声をあげた。

「どうしたの、ランスターさん？なんか変だよ？」

「私は、私は兄さんの夢をかなえるために。そして兄さんを無能だつて罵つた人たちを見返してやるためにこの訓練校に入ったの。そして兄さんの代わりに執務官になるんだ！あなたはそれだけの力を持って一体何のために使うの！」

スバルと比べると自分は劣っているのではないかという不安があった。

このままで自分は本当に強くなれるのか不安だった。

まだ入学して三カ月ほどだが彼女は優秀なルームメイトの姿を見て心に余裕がなくなっていた。

その日、抱いていた感情が爆発してしまったのである。

「落ち着いて、ランスターさん！何時ものランスターさんじゃないみたいだよ」

「私はこんな所で躓くわけにはいかないのよ！」

ティアナはその言葉を最後に泣き始めた。

知らないうちにストレスやスバルへの嫉妬の感情をためていた事。そしてそれをスバルにぶつけてしまった事に後悔しているのだ。

ティアナが落ち着くとスバルは話し始める。

「最初はね、訓練を始めた頃はギンねえ達がやってたから私もって、そう思ってたんだ。それから、いろんな技や魔法を覚えて、それを自分でアレンジするようになったらもっと楽しくなったし」

ティアナのスバルへの視線が強くなる。

だが、スバルはさらに続ける。

「二年位前に空港で火事があったって、ニュースがあったでしょ？私、あの場にいたんだ。家族みんなとキョウにい達とで、父さんの部隊に見学に行こうとしたの。火事の中、一人はぐれちゃって。でも魔法を幾つか使えるから大丈夫だって自分を過信していたんだ」

「それで？」

「危ない場面も何度か切り抜けたんだけど、大きな像が後ろから倒れてきて、もうダメだって思った。そのときにあの高町なのはさんが助けてくれたんだ。その後すぐにキョウにいも駆けつけて来てく

れて。それから私も誰かを助けられる人になりたいって思ったんだ。キヨウにい達が何時もあんなに鍛錬してるのも、自分の力で人を救いたいって思ってるからって言うってた。そんな姿を見て育ったからかな？あの事件の後、私もそういう人になりたいって思いだしたんだ」

ティアナのスバルへの視線が弱まり、申し訳ない気持ちがいっぱいな表情に変わる。

「そんな事があつたんだ。ごめん、知りもしないで強く当たっちゃって……」

「そんなことないよ。誰だって、そういう時あるんだから。それにお兄さんの遺志を継ぐって凄く良い事だと思うよ。お兄さんの為に頑張れるランスターさんは凄いよ!!」

「ありがとう。そのためにも今以上に力が必要なんだ。そうだ、私の事ティアナって呼んで？」

「良いの？私年下だし」

「良いの。其れにあなたを超える事が、先ずは強くなる一歩だと思っし」

「それなら私もスバルって呼んで！私はティアって呼ぶから」

「分かった、スバル。これからはライバルね。改めてよろしく」

「うん、ティア。私も負けられないように頑張るから。よろしくね」

それから二人は色々な話を話した。ティアナは兄との思い出を。スバルはキョウ達と過ごした日々を。

家族に話ではティアナの表情が少し暗くなったのでスバルは今まであまり人には言わなかった秘密を打ち明けた。

「私とギンねえって両親の本当の子供じゃないんだ。キョウにい達もなんだけど」

「良いの？私にそんなこと教えて」

「キョウにはあんまりその事気にしてないから、多分同級生の人たちは何人も知ってる人が居ると思う。管理局では私達の事を知ってる人たちも結構いるし」

「そうなんだ」

「それに私って人間じゃないんだ。戦闘機人って言って、人造魔導師と機械の融合した存在らしいって。怖くなった？」

その言葉にティアナは反論した。

「そんな事ない！スバルは人間だよ！誰かを助けたいって思える優しい女の子だよ！どんな存在だってスバルは私のライバルで、友達だよ！」

「ありがとう、ティア。嬉しいよ」

それから二人は眠るまで色々な話を喋っていた。

後日、スバルがティアナに自分の事を話したと伝えると、キョウとギンガも彼女に自分の事を話した。

二人はケンスウ達や他にも仲の良い友人達、それに教官の一部に自分の事を話してはいたのだ。

ギンガは自分がスバルと同じ存在だという事を、キョウはアギトとのユニゾンの為に調整され産まれた人造魔導師であるという事をティアナに伝えた。

これから一緒に鍛錬を行う彼女と少しでも距離を近づけたかったからだ。

ティアナも自分が管理局に入る目的を話した。

二学期に入るとキョウ達のグループに新しくスバルとティアナが加わった。

以前から近いメニューで鍛えていたスバルと違い、ティアナは初めのうち、ついて行くのがやっとだった。

だが彼女は必死に努力し、くらいついていった。

二人は学年トップとして恥じない実力を付けていくのだった。

それからしばらくして、本局の教導隊からラルフ達の後輩が派遣されてきた。新人ということらしく訓練校で教導の実習を行うという目的であるようだ。

現代の日本と言う教育実習の近いものだろう。

セーラ・ウィップという名の女性でクールな雰囲気美人であったが、教導隊だけに教える内容はスパルタだった。各学年を実技で指導をするようにキョウ達も模擬戦を行った。

「てえいやっ！」

「ブーメラン！」

「ぐあー！ー！」

「不用意に飛び込んで来るのを待っていたの。わざと隙を作っていたのがわからなかったようね」

キヨウの『独楽屠り』を鞭型のデバイスで巧みに捌き、そのまま捕えて地面に叩きつける。

彼女は闘いの時、かなりエキセントリックな性格に変わり、普段のクールな雰囲気と違い口調も荒荒しくなる。それが一部の男子生徒には人気だった。

キヨウは模擬戦で手も足も出なかったとティアナ達に伝えると、ティアナはウィップに師事を仰ぐようになった。

ウィップは銃型のデバイスの扱いにも長けていた。ティアナとの相性も良かったのか、短期間ではあったがティアナは『アンカーガン』のワイヤーを用いたクロスレンジの技術を伸ばしていった。

射撃魔法も習おうとティアナは考えていたが、時間がなかった事と、ウィップがその魔法を使う際に、

「この外道が!!!」

と恐ろしい表情でトリガーワードを叫んでいた事もあり、教わるのを諦めた。

ティアナはウィップの指導で様々な技術を身につけていった。しかし、それに伴い多少ティアナの口が悪くなるというデメリットもあったが。

ウィップが実習を終えて教導隊に帰って暫らくたった。それからティアナはキヨウと模擬戦をよく行う様になっていった。実際、彼女はウィップから教わった戦い方がキヨウとの戦いで相性がいいのか、10回に1回位は勝てるようになった。キヨウに一度も勝った事のないスバルからは尊敬の目を向けられる場面もあった。

もちろん短期間で追いつけるわけはなく、少しするとキヨウには通用しなくなったのだが。

キヨウは苦手な闘い方を克服できてティアナに感謝をした。キヨウもティアナもまた一歩成長する事が出来たのである。

一同は訓練校でさらに鍛錬を積み、実力を付けていくのだった。

E p 2 9 強敵と書いて友と読む（後書き）

もっと先に出そうかと考えていたキャラをある方に予想されたので、
思い切って今回出してしまいました。

読んでいただきありがとうございました。

EP30 サバイバル(前書き)

コロコロ視点が変わって読みにくいかも知れません。

Ep30 サバイバル

第四陸士訓練校では最終学年で、修学旅行の代わりにあるイベントが存在する。

それは、管理世界の中から毎年ランダムで選ばれる場所に行きサバイバル訓練を行うというものだ。

といっても、一般局員を目指すクラスのみなのだが。

シャーリーの様な通信課のクラスは地上本部や本局への見学と実習が行われている。

そちらは地球で言う職場体験学習に近い物だ。

だから通信課の生徒達はこの場におらず現在もミッドにいる。

このサバイバルでは寝具や調理機材等の与えられた機材を使い過ぎず。

そして食糧等は現地で調達するようになっていた。その際は魔法の使用も許される。

サバイバルとはいうものの、実際は宿泊学習の様な感じなので訓練生に人気のイベントだ。

キョウ達の学年では第七管理世界の密林地帯でサバイバル訓練が行われる事となっていた。

「よし！！ 全員いるな？ 今から最終説明を行うぞ！！ 班ごと
に整列しろ！！」

ラルフが号令をかける。
キョウ達三年生はハイデルンとラルフの引率の下その第七管理世界
に来ていた。

グループは男女別で集められている。サバイバル用に三人ずつの班
が作られているのだ。

班ごとに分かれそれぞれで行動していく事になっている。

なるべく他の班と接触せずに自分達だけで行動するというルールが
決められているのである。

アギトはキョウ達と別れ、ギンガとアテナと女子グループで参加し
ていた。彼女の班では特例として、もう一人参加する事になってい
るのではあるが……。

その場所は人があまり足を踏み入れないような山の中だった。
うっそうと繁る植物のせいで少し薄暗い。

「細々とした事は訓練校で説明をしたから、俺から言う事はねえぞ。
隊長、いやハイデルン教官からは何かねえですか？」

「うむ。サバイバルキットの確認は出来ているか、全員もう一度確
認をしる。其れを、使って二日間此処で過ごしてもらうからな。お
前達で対処できないほどの危険な生き物はいない筈だが何が起こる
か分からん。アクシデントに見舞われたらすぐに連絡するように！
！」

「ハイデルン教官、ありがとうございます。それじゃあ二日後の
正午に此処に集合だからな。此処を見失わないようにマークすんの

を忘れんなよ！！ あと、生水には注意すんだぞ！！」

ハイデルン達の話が終わるとそれぞれの班で別れて行動していった。教官たちは二日間、集場所からサーチャーを飛ばし、訓練生を守る事になっている。

「キヨウ、お前と同じ班になるなんてな。よろしく頼むぜ！！」

「ああ。こつちこそ。楽しんでいこうな、テリー！！」

キヨウに金髪をポニーテールに結った少年が声をかける。

彼の名はテリー・R・ボガード。同じクラスの友人だ。

彼もキヨウと同じく、クロスレンジを得意とする近代ベルカ式使いの魔導師の卵だ。

何時も赤いキャップを手放さない。

ちなみに陸戦B+を取得している実力者だ。

この学年は当たり年と言われるだけに優秀な人材が多い。

「テリーはん。よろしゅう頼みます」

「OK！！ ケンスウ。仲良くしていこうぜ！！」

陽気な彼はクラスでもケンスウとは違うタイプのムードメーカーだ。三人は山の中に入っていった。

「あなた達と行動するのは始めてね。よろしく」

蒼い髪をアップで束ねる少女がアギト達の班に参加している。

「ええ。よろしくね、レオナちゃん」

ギンガが答えたその少女の名はレオナ・ハイデルンといい、あのハイデルンの娘だった。

アギトがユニゾンデバイスという事で彼女達の班は四人編成なのだ。レオナはクールであり口数が多い方ではない。

「よろしくなー！！レオナ！！」

「仲良く楽しみましょうね、レオナさん」

「ええ」

女性陣も出発する。

「おっじゃー！ー！二匹目！ー！」

「Oh！ー！ 凄くないか！ー！」

「ワイらも負けてられへんな、テリーはん！ー！」

キョウ達は山の中で見つけた池で釣りをしていた。釣った魚を食料にするらしい。キョウはすでに二匹、ケンスウとテリーは一匹ずつ釣りあげている。彼らは池のそばにあった大きな木の根元を拠点にするようである。釣り竿はその木の枝が丈夫そうだったので、それを加工し、サバイバルキットから糸や針を組み合わせて使用している。餌は、土を掘り起こしたら、ちょうどよさそうなミミズもどきが居たのでそれを利用した。

「キョウは釣りが巧いな」

「小せえ頃から親父やギンガんとこのおっちゃんによく釣りに行ってたからな」

「キョウ君がおっいたら魚も釣れて食料に困らんし、火も起こせるからホンマ助かるわ」

「確かに。こういう時には大活躍だよな？ 一家に一人欲しい位だぜ」

「うっせえ、人を電化製品みたいに言うなよ。おい、ケンスウの竿、引いてるぞー!!」

「ホンマや!!! ぬおおおおお!!! そりゃああああ!!!」

「頑張れ、ケンスウ!!!」

ケンスウの竿には大物が掛かっていた。

「捕ったでええええ！！！！！！」

ケンスウは80cmほどあるバスの様な魚を釣り上げる。

それからしばらく三人は釣りを続け、合わせて10匹ほど釣りあげる事が出来た。

「こんだけありや二日分持つんじゃねえか？」

「そうだな。さっそく調理するか」

それから三人は釣った魚をさばき食事を取った。

キヨウは自分で釣った魚を食べる事があるので調理は問題なかったが、他の二人も調理に関しては大丈夫だった。

一応、訓練校ではこのように人のいない所で生き抜く事を想定した内容が教えられていたからだ。

その後、余った分の魚の身は三人で木を削って箱を作りキヨウの炎を使って燻製にした。

箱を作るのには時間がかかり夜になっていたので、燻製が完成すると三人は寝袋にくるまり就寝するのだった。

一方の女性陣は山の中で見つけた洞穴を拠点にするようだ。
荷物をそこに置き、アギトに留守番をまかせて食料調達に向かった。

530

「ハートアタック!!」

レオナがイヤリング型のデバイスから魔力弾を放ち、野ウサギを仕留める。

「レオナさん。魔法を殺傷設定で撃って怖くないの？」

アテナが戸惑いの表情を浮かべつつ尋ねた。

「ええ、問題はないわ。父との山籠りで何度か経験しているから」
レオナが淡々と答える。彼女は表情をあまり変化させるタイプではない。そのせいで周囲からはクールな人間だと思われる。このサバイバル訓練では食料を調達する際に限り非殺傷設定を解除する許可が下りているのだ。
訓練校が管理局に申請し、ちゃんとした手続きを踏んでいるのだが、詳しい事は割愛する。
一般でも、狩猟目的やこういった訓練を行うと管理局へ報告すれば許可が下りるのだ。

「アテナちゃん。このサバイバルは、魔法が生きるために必要な技術である事を再認識するためって目的もあるみたいだから、躊躇しちゃダメだよ。私達が生きるためには他の生き物の命を貰っているんだから」

アテナはクラナガン市内でも都会部の出身なので生き物の死を見る機会が少なく、食糧を得るのに戸惑っていたのだ。
ギンガは、キヨウ達の釣りにたまに付いて行く事があった。
釣った魚を食べる際にゲンヤヤソウジから言われていたのだ。

「生きるためには他の生き物の命を貰っている。だから感謝しないといけない。残すなんてもっての外だ」という事を。

もちろんキヨウとアギトもそれを一緒に聞いていて理解している。

「だから、可哀想とは思っけどやらなきゃ」

そう言つてギンガはシューターを放ち野鳥を仕留める。

「そつだよね、ごめん……」

その後、捕えた獲物の血抜きや解体をする際、アテナはしっかりとそれに参加した。

レオナは慣れているようで手際が良かった。

ギンガとアギトも動物の解体は初めてでアテナの様に少しは戸惑う事もあつたのだが、それを表に出さず作業した。

その日は野鳥を調理し、ウサギの方はアギトの炎で火を通し保存食にして翌日に食べる事にした。

ギンガとアギトは下ごしらえの面ではレオナにかなわなかったが、料理に関しては家にいる際によくやっているので文句なしの腕前だった。

「これならいつでもキョウ君のお嫁さんになれるね？」

とアテナがギンガに呟き、ギンガが真っ赤になり照れて、それを他の二人が笑つという一幕もあつた。

一緒に過ごし、同じ釜の飯を食べるといふ事を経験してギンガ達にレオナはうまく打ち解けていくのだった。

こちらも問題なく一日目を終了した。

二日目も二組は特に問題がなく過ごした。

食料も問題なく、時間もあるのでそれぞれ鍛錬を行ったりして過ごした。

キヨウは暇になるとすぐ釣りを始め、結局ケンスウとテリーの二人も参加してしまっていたが……。

必要な分だけ捕り、それ以外は逃がしていた。

女性陣の方は、果物やキノコをウサギの肉と共に食べた。
食べられるものかどうかはレオナがやはり詳しくかった。

だが三日目にある出来事が起こる。

集合時間が近づいたので二組はそれぞれ教官たちの下に向かった。

「おい！… キョウウー！…」

「おう、アギトか？ お前らも戻るところか？」

「うん。だから一緒に戻ろっぜ。近くで合流するのは別にいけないってことないらしいし」

それから二組は一緒に集合場所に向かう。

だが、そこから少し進んだ所で思いもよらない事態に直面する。

「グギャー………!!!!!!」

鳴き声をあげ地面に降り立つ存在。

着地と共にキョウ達の下へ地響きを上げつつ突進をしてくる。

「うお、なんだよあれ？」

キョウ達が集合場所に向かっていている途中に、黒い鱗と羽を持ち頭に角を生やした15m程の龍が現れたのだ。

「うお、あぶねえ!! みんな避ける!!」

キョウの声によって何とか全員避ける事が出来た。

「どっいうこっちゃ。この辺には危険な生き物はおらんって話やなかったんか？」

「ケンスウ、そんなこと言っても現れちゃったんだから仕方がない

「じゃない!!」

アテナとケンスウはそれを避けながら話をしていた。

「アギトちゃんあれて龍だね?」

「だよな、なんでこんな所に?」

ギンガとアギトの問いにレオナが答える。

「あれは恐らく第六管理世界から逸れて来た龍だと思う……。他の世界にまで足を延ばすものもいると以前聞いた事があるから」

「Hey!! アテナ!! 君のレポートでどうにかして逃げられないのかい?」

「無理だよ、そんな遠くまで行けないし……。何よりも人数が多すぎてみんなを運べないよ!!」

テリーがアテナの能力でどうにか出来ないか聞いたが無理の様だ。

「教官たちもサーチャーで見ているはずだから、それまでどうにかして逃げようぜ!!」

「でもアイツ空も飛べるみたいだし、私とキョウとアテナしか飛べないのにならう?」

キョウの言葉にアギトが問いかける。

「ギャー……!!……!!……!!」

龍は更に攻撃を仕掛けてくる。キヨウ達に向かい勢いよく尻尾を叩きつけた。

「つちよ、あつぶねえ!!」

キヨウ達は尻尾に反応し距離を取り、どうにかかわす事に成功する。

「俺らで教官たちが来るまで時間を稼ぐしかないのか？」

「でも危ないわよキヨウ君!!」

キヨウとギンガの会話にレオナが割り込む。

「遠距離攻撃をしてこないから、もしかしたら逃げる事が出来るかもしれない」

レオナはギンガの方を向いた後に答える。

「どうやって？ そうか!!」

キヨウはレオナの言いたい事に気づいたようだ。

「もしかして私の？」

ギンガも心当たりがあったのか、驚きつつもそう答える。

「ええ。ギンガさんのウイングロードを利用してなら私達、陸戦魔導師も逃げられるはず」

「そうと決まれば、アギト!!」

「おう!!」

キョウとアギトは他のメンバーから距離をとり、ユニゾンを開始する。

その間にレオナは全員に向け念話で作戦を伝える。

「作戦開始!!」

レオナの声で全員は行動を開始する。

「喰らえー!!!!!!」

「サイコボール!!」

キョウとアテナが空から射撃魔法で注意を惹き、その間にギンガがウイングロードを展開して距離を取っていく。

空が飛べないケンスウ、テリー、レオナの三人は展開されたウイングロードに乗り、龍に攻撃を与えつつ後退する。

その際はギンガに龍の意識が向かないようにするのである。

ギンガはなるべく気付かれないように、少しでも集合場所に近づけるようにウイングロードを展開していくのだった。

「超球弾や!!」

「パワーウェイブ!! Rock You!!!!!!」

「ハートアタック!!」

全員の攻撃を受けても龍にはあまりダメージがないようだ。

「これは大技を使わざるをえねえか？ みんなイケるか？」

「「「「おう!!!!!!」」」」

ギンガ以外は龍に技をあてるために距離を埋めた。と言っても龍はずっと追ってきているのだが……。移動速度がそれ程速くないことが救いとなっている。

「「おおおおお、喰らいやがれ!!!!!!!!」」

「はああああ!! っつけええええ!!!!!!」

キヨウは『大蛇薙』を、アテナは魔力スフィアを指先に集めて『シヤイニング・クリスタルシュート』を龍の頭めがけて放つ。

「オーバーヒート!!!!!! ゲイザー!!!!!!!!」

テリーは龍の左前足をめがけてタツクルをし、アツパーを放った後に巨大な魔力弾を地面から吹きあげさせる。彼の必殺技『ハイアングル・ゲイザー』だ。

「いくでえ！！ はああああああ！！！！！！！！」

ケンスウは右前足に接近し、ゼロ距離で自身の体ほどある巨大な青い魔力弾『仙気発射』をぶつけた。

四人の攻撃が同時に炸裂する。

「グギヤアーーーー！！！！！！！！」

龍は体勢を崩した。そこにレオナが追撃する。

「さよなら！！」

龍の腹部に魔力を纏わせた抜き手を叩き込み、すぐに距離を取る。レオナが抜き手を引き抜いた龍の腹からはオレンジ色の爆発が起こった。

レオナの『リボルスパーク』が決まったのだ。

一同の攻撃によって龍の動きが鈍る。どうにかダメージが与えられたようだ。

「よし、今のうちに逃げるぜ！！」

「何でや、キョウはん！！ このままなら勝てるかもしれへんで！！」

キョウの「逃げる」という言葉にケンスウが反論する。

ラルフが魔力を込めた思いこぶしを叩き込み、怯んだ所にハイデルンが手刀で龍に麻酔薬を撃ち込んだのだ。流石は教官といったところだろうか。キヨウ達が苦戦した龍をあっという間に鎮圧してしま

う。

「お前達、無事でよかった。すぐに駆けつけられず済まなかった」

「すまねえ、おめえらホントにすまねえ」

ハイデルンとラルフはキヨウ達が無事だという事が確認出来ると、彼らに頭を下げた。

なぜすぐに駆けつけられなかったかということ、第七管理世界の自然保護官との連携に手間取っていたからだという。

普段は危険な生物がいないので引退間際の魔導師がそこに割り当てられていた。

その魔導師は龍の種族を調べ、それ用の麻酔を調達するのに時間がとられてしまっていた。

保護官に龍の存在を伝えてから、麻酔が届くまでに時間がかかったのだ。

それにハイデルンもラルフも空戦適性がなかった事でその場にすぐ

に駆けつけられなかったのだ。

キヨウ達の下へ向かったが、彼らは集合場所の近くまで逃げてこれたので其処で合流したのだった。

キヨウ達は理由が理由なので納得した。

それにハイデルンとラルフが精一杯やってくれていたと分かったからだ。

二人の闘いを見てその気持ち伝わったのだ。

取り押さえられた龍はその後、第六世界に送られたらしい。

その龍はプレスなどの技は持っていなかったが、身体能力や防御力が高く、管理局の魔導師でもオーバースランク以上でなければ取り押さえられない程の強さを持っていたらしい。

七人がかりで怪我せず逃げおおせた事は奇跡だった。

終わりにはとんでもない事に巻き込まれたが彼らのサバイバル訓練は一人も掛けることなく、無事終了したのだった。

EP30 サバイバル（後書き）

明日休みなので、もう一話行きます。

読んでいただきありがとうございました。

EP31 再会と門出（前書き）

ダメだ、ダメだ。文才が欲しい。

こつなったら霸王翔煌拳を使わざるを得ない。

ご意見ご感想を募集しております。

EP31 再会と門出

「ボデイが甘いよ？ ティア。ナツクルダスター！！」

「つちい。掛かったわね？ 受けて！！ 見なさい！！ 手錬の！
！ 鞭を！！ はああ！！」

「きゃあ！！」

「そこまで！！！！」

第四陸士訓練校の訓練場でスバルとティアナは模擬戦を行っていた。審判はキヨウである。

スバルは『ナツクルダスター』を放ったのだが、プロテクションで阻まれティアナの『アンカーガン』のワイヤーを用いた連撃『ウィップショット』で反撃を喰らう。

「スバル、お前は結構立ち回りがうまくなったよな。でも不用意に飛び込むのはよくねえぞ。動きが素直すぎるし。俺が言えた事じゃねえけどな」

「イテテテ。うん、気を付けるよキヨウにい」

「ティアナは苦手だったインファイトがある程度克服できるようになったよな。魔法の使い方もうまいし。ただ、簡単にスバルを懐に入れ過ぎだ。そこはお前の距離じゃねえだろ？」

「はい。先輩。気をつけます！！」

キヨウは二人にアドバイスをした。
キヨウが訓練校にいるのも、もうあと僅かだ。

訓練終了後、キヨウとティアナとスバルはドリンクを片手にコート
内で雑談を行っていた。

「そういえば、先輩は進路の方は決まってるんですか？」

「俺か？俺はな……」

キヨウはティアナの問いに答えようとする。だがその時、訓練場の
入り口から彼を呼ぶ声が聞こえてくる。その声の主はギンガであっ
た。

「キヨウ君……！」

「うお、ギンガ？」

キヨウの下にすさまじいスピードで駆けつけてきたギンガによって、
その答えは遮られた。

「ちょっと、ギンガさん。今、私の質問に先輩が答えようとしてた
んですよ？」

「ごめんね、ティアナ。でもハイデルン教官がキヨウ君を呼んで来
たって仰ったから。職員室まで来て欲しいって」

「そうなのか？ありがとうな、ギンガ。それでな、ティアナ。俺は尊敬している人たちの様に生まれ育ったこのミッドチルダの平和を守りたいんだ。だから地上部隊に行こうと思うんだ」

「地上にですか？空戦魔導師なのに？飛行できない場所だってありますよね？」

「ああ。だからその時の為に陸戦も取得してるだろ？」

「ティア。キヨウにはギンねえと離れたくないからそう言ってるんだよ。ねえ？」

スバルもニヤニヤしながら会話に割り込む。

「ちげえって。ってスマン、ギンガ。それもあるけど、ゼストさんやゲンヤのおっちゃん達みたいになりてえんだよ」

キヨウの否定の言葉に一瞬だけ悲しそうな表情をしたギンガだが、続く言葉を聞きすぐに機嫌が良くなった。

「ゼストさん？ですか？」

「その人は私達を助けてくれた人なんだ。ねえ、ギンねえ？」

「うん。もう亡くなってただけだね。今の私達があるのもゼストさんのおかげなんだ」

ギンガは昔を振り返りつつ答える。

「あれから、もう6年か……」

キヨウは呟く。その言葉には様々な思いが詰まっていた。最後にゼストと立ち合った時の事、ギンガとアギトと共に誓った事、それから続けている鍛錬の事。それ以外にも今の自分を形作るさまざまな思い出が頭の中に過ぎっていった。

「キヨウ君、早く行かないと怒られるかもしれないよ？」

ギンガがキヨウを引き戻す。

「そうだな、ちょっと行ってくるか。ギンガ、二人に稽古を付けてやってくれ」

「了解。じゃあ、そろそろ始めましょうか？」

「はい!!」「」

キヨウは訓練場を後にし職員室に向かう。

「俺、少しはあの人に追いつけているのかな」

「キヨウ・アーデルハイド。本当に本局ではなく地上勤務を希望するのだな？」

「はい。自分は今からそのつもりであります」

キヨウは職員室でハイデルンから進路の最終確認を受けるのだった。

「お前は先のランク試験で空戦Aを取得したではないか。本当に良いのか？ お前をぜひ本局にと仰っておられる方がこの後来られるんだが……」

「その方とお会いすればよいので？」

「ああ。応接室を使わせるから、直接その旨を伝えるといい」

「了解しました。失礼します」

そう言つとキヨウは職員室を後にし、応接室へ向かうのだった。

その後、暫らくキヨウが応接室で待っていると、その人物がやって来たようだった。

キヨウは椅子から立ち敬礼する。

「キヨウ君、久しぶりねえ？ 元気にしていたかしら？」

「あれ、レティおばさん？」

その人物とはレティ・ロウランであった。キヨウは懐かしく思い、昔シャーリーに注意された呼び名で呼んでしまう。

「うう、またキヨウ君にオバサンって言われた……。そうよね、キヨウ君達からしたら私もオバサンよね」

昔と変わらず若々しい姿だったがやはりおばさんは禁句であったようだ。昔の様に落ち込んでいる。というよりいじけているという方が正しいか。

「すみません、ロウラン提督。失礼な事を言つてしまい本当に申し訳ありません。」

キヨウは慌てて謝罪する。だがレティはそれ迄の態度がブラフだったのか普段の調子に戻り言う。

「そんなに畏まらなくて良いわよ。息子の友人なんだから。何時も通りで良いわよ?」

「しかし……」

「良いのよ、私達しかここに居ないんだから」

「分かりましたよ、レティさん。ホント久しぶりですよね。お元気そうだなによりです」

キヨウも普段通りに喋る。提督としてではなく友人の母親として接する態度でだ。

二人はそれから互いの近況を話したり思い出し話に花を咲かせていた。グリフィスが話題になる事も多かった。

「ホントに月日が経つのは早いわね。小さかった子がこんなに凛々しくなつて。そうだ、ここに来た目的を忘れる所だつたわ。キヨウ君、あなた進路を地上部隊に決めてるって本当かしら?」

レティが話題を変える。というより本題に移したのであるが。

「はい。俺は空戦魔導師ですけど地上に所属したいんです」

「それはゼストさん達の事があつて?」

レティも管理局でそれなりの地位についている。地上の情報は入っているのだ。

「はい。ただそれだけじゃないんです。俺は、この生まれ育つたミ

ツドチルダの平和を守るような人間になりたいと、ずっと鍛錬を続けてきました。ゼストさんやゲンヤのおっちゃん、それに親父のように」

「アーデルハイドさんの事も知っていたの？」

「はい。以前休暇の際にゲンヤのおっちゃんやクイントさんに聞きました。親父は自分の昔の事を喋りたがらないので」

「そう。考えは変わらないのかしら？あなたなら息子の親友という事を抜きにして航空武装隊への推薦状も出していいと考えているのだけど。最近は訓練校を出る際にAランクを取得するような子ってほとんどいないから」

「すみません。お心遣いは嬉しいんですが、俺は……」

「そうね、なら仕方ないか。頑張りなさいよ！！ 気が変わったらいつでも連絡を頂戴ね」

「はい。ありがとうございます」

それからまた雑談に戻った。レティはその日は午後の仕事が無事以外なかったらしい。

キヨウも卒業間際で授業が入っておらず、鍛錬くらいしかやる事が無かったのだ。

「それにしても今年は優秀な子が多いみたいね。キヨウ君達の学年ってみんなCランク以上なんですよ？」

「そうですね、俺以外だとギンガや、あとケンスウってやつとアテ

ナって子もAランクですよ。もちろんアギトも」

「ギンガちゃんとアギトちゃんか。懐かしいわ。みんな元気にしてる？ってそういえば、ようやくギンガちゃんと付き合い始めたんだってね？」

「それグリフィスから聞いたでしょ？」

「そうよ。あの子もやっと二人が素直になっただって笑っていたわ」

「アイツも元気そうですね？」

「ええ。キヨウ君が本局に来てくれたら一緒に仕事が出来るって楽しみにしていたわよ」

「すみません」

「良いわよ、キヨウ君もやりたい事があるのだし」

少し暗くなったので今度はキヨウが話題を変えた。

「そうだ、このあと時間があるんでしたらギンガ達に会って下さいよ。みんな喜びますよ」

「そうね、そう言えばスバルちゃんも此処にいるのよね？」

それからキヨウ達は食堂に場所を移し再開を喜んでいた。相変わらずレティはスバルが大好きだった。

彼らは賑やかな時を過ごしていった。

それからまた少しの時が過ぎる。

キヨウとギンガとアギトは訓練校を卒業して、ゲンヤが指揮を取る陸士108部隊に所属する事となった。

ケンスウは陸士098部隊に、アテナは1211航空隊に、テリーは自然保護隊へ、レオナは訓練校の教官を目指し教育隊へ進む事になった。

卒業式の際はキヨウ達のクラスはみんな涙を流していた。

教室での最後のあいさつでは、あのハイデルンでさえ目に涙を浮かべていた。
キヨウ達はラルフやハイデルンなどお世話になった教官たちに礼をして、思い出が詰まった第四陸士訓練校を後にした。

地上部隊に配属される際に、三人とも高ランクを取得していたのでキヨウとアギトは二等空士、ギンガは二等陸士からのスタートとなる。

「キヨウ、準備は出来たか？」

真新しい制服に身を包んだアギトが、仏壇にお参りをしていたキヨウの肩に乗る。

「ああ、大丈夫だぜ、アギト」

二人は玄関に向かう。

「ゲンヤの奴にあんまり迷惑をかけるなよ」

ソウジも二人を見送りに玄関まで移動する。

「分かってるって、親父。じゃあ行ってきます」

「行ってきます!!!」

「おう、二人とも。しっかり、頑張ってきて来い!!」

新品の制服を着たキヨウは二つのヘルメットを持って家を出る。家の前には一台のバイクがあった。

訓練校を出た後すぐに、免許を取得して購入した白いカウルのレーサータイプのバイクである。

その近くには青味があった紫の髪的女性が佇んでいる。キヨウの最愛の人であるギンガだ。

「行こうかキヨウ君。」

「ああ。しっかり捕まってるよ。アギトもな!!」

「もちろんだつて。私達は何時も一緒だろ？」

キヨウはギンガにヘルメットを渡しバイクにまたがる。その後ろにはギンガも乗り込んだ。

彼らの新しい生活が始まる。

E p 3 1 再会と門出（後書き）

駆け足で進んじやいました。

へビィD「ついてこれるか？」

読んでいただきありがとうございます。

何話かオリジナルを挟んだ後、JS事件編に入っていくことと思います

E p 3 2 新米管理局員（前書き）

今回から章が変わります。

今後ともよろしく願います。

オリジナル要素は『キャラ紹介&設定』に載せていますので目を通
していただけるとありがたいです。

キヨウ達は陸士108部隊の隊舎に来ていた。

これから管理局員として働いていくので、その日は隊員達との顔合わせだ。

隊舎に入り、会議室に通される。

20?程の広さで、先方にはホワイトボードがあり折り畳みの机と椅子がならんでいる。

そこにはキヨウ達以外にも数名の新人が待機しており、同世代の者やスバルと同じ年位のものもなかにはいた。

同じ第四訓練校出身の者もいたのでキヨウ達は暫らく彼らと雑談していた。訓練校時代にAランクを取得していたので同じ訓練校では後輩だったものにも知られていたのだ。

キヨウ達が入室して15分ほど後にゲンヤの部下であるラッド・カルタスがやってきた。

「俺はこの陸上警備隊第108部隊で捜査主任を務めているラッド・カルタスだ。お前達新人はこれから此処で簡単なミーティングを行い、その後隊員達の前で顔見せをする。事前に聞いていると思うがこの108部隊では密輸品のルート捜査やミッド西部の治安維持を主に行っている。今から具体的な事を説明するのでよく聞いておくように」

ラッドによる新人への説明はその後30分ほどで終了し、新人同士の自己紹介等に20分ほど時間がとられた。

それから一同は隊舎のロビーに移動し、そこに集合していた108部隊の隊員達の前で自己紹介が行われた。新人たちは前の方に一列で並ばされ、一人ひとりがゲンヤに呼ばれ隊員達の前で自己紹介を行う。

新人たちは初めての事に緊張しながらも挨拶を述べていく。キョウの番は最後から二番目だった。

「次は、俺の先輩の息子で近所に住んでいるキョウ・アーデルハイドとその妹アギト・アーデルハイドの番だ。おい、キョウ！！アギト！！」

「はい！！」

ゲンヤに呼ばれキョウアギトと共に前に出て自己紹介を始める。

「自分はこの度、陸上警備隊第108部隊に配属になりました。キョウ・アーデルハイド二等陸士です」

「同じくアギト・アーデルハイド二等陸士です」

アギトは変身魔法を使わず自己紹介をした。アギトがユニゾンデバイスである事は事前に伝えられているのだ。

何人かの女性隊員達からは「可愛い」等の声も上がり、アギトは照れて顔を赤らめていた。

それが余計に可愛く見えたのか声が大きくなり始めるが、ゲンヤが一喝しておとなしくさせた。

「キョウとアギトはすでに空戦のAランクを取得している。期待の

新人だぜ」

ゲンヤも言葉に隊員達は反応をしキョウ達を興味深く見ていた。

「自分は陸戦Bランクも取得しております。みなさんの足を引つ張らないよう努力しますので、ご指導のほどよろしく願います」

「よろしく願います」

キョウとアギトの挨拶は無事終了した。

「次で最後だな。最後は俺の娘のギンガだ。ギンガ!!」

「はい!!」

ギンガが前に向かうと、一部の男性の隊員達からは「可愛い」「や」「隊長に全く似てない」とか「あれが隊長の秘蔵っ子か」等の声が聞こえた。

ゲンヤはギンガが喋りだす前にそれらの声に反応した。

「誰に似てねえって？ お前ら後でグラウンド20周な。あと、うちのギンガに手を出したら只じゃおかねえからな!!」

声を出していた隊員の一部からは「えー、横暴だ!!」とか「お父さんと呼ばせてください!!」等の声も聞こえてきたが彼らはギンガが喋りだすと静かにした。

「本日をより、ここ陸上警備隊第108部隊に配属になります。ギンガ・ナカジマ二等陸士です。至らない点もあるかと思いますがよろしく願います」

ギンガが挨拶を終えるとまた一部の隊員達から

「「「うおー！！ ギンガちゃん！！」」」

「「「可愛いー！！」」」

などの言葉が飛ぶ。ギンガはその言葉に真っ赤に顔を染めるも、そのままとの位置に戻る。

ギンガはアギトと違い男性の隊員達に人気が出るようだ。

新人たちの自己紹介がすべて終わると、彼らは会議室に向かうよう指示が与えられた。

入隊してから三ヶ月間は指導する隊員の下で新人研修が行われるのだ。

キョウとアギトとギンガの三人は同じ隊員が指導する事になるようだった。

会議室に入ると数名の隊員が待っていた。新人たちはそれぞれ自分を指導する隊員の所に分かれていく。

「君達が私の部下か？」

キョウ達が向かった先には薄い金髪を背中まで伸ばした美しい容姿の男性が待っていた。

「はい、キョウ・アーデルハイド二等陸士であります」

キョウが自己紹介をしたのでアギトとギンガも続こうとしたがその男性に遮られる。

「アギト君とギンガ君だろう。ちゃんと君達三人の事は聞いているよ。三人ともその年でAランクを保持している期待の新人だそうだね。私は君たちをこれから指導していくジョン・フーンという。階級は準陸尉だ。捜査官資格も持っているよ。今から私達はチームだ、よろしく頼むよ」

三人に手を差し出す。

キョウ達は彼と握手をする。

ジョンはとてもさわやかな感じの男だった。年は30に近いように見える。

全く似ている所が見当たらないが何故かキョウ達は小学校時代の体育教師を思い出していた。

「私は基本的に治安維持の方を担当させられているが、ギンガ君は捜査官の資格を取得したいと考えているのだよね？」

「ええ、そうです」

「他のチームも言えることだが、基本的に指導する隊員は捜査官資格保持者なので勉強の事で相談があれば何時でも言いなさい」

「はい、ジョン准尉。ありがとうございます」

「キョウ君は『草薙流』を使うのだろうか？」

「はい。ジョン准尉、ご存じで？」

「ああ。君の父上の活躍は新人の頃によく耳にしていたからね。それに、こう見えて少々武術の心得もあるんだよ。アギト君は古代ベルカの融合騎か。三人とも何か困った事があれば遠慮なく言いなさい。今日は以上だ。出勤があるまでは自由にすると良い」

「「「ありがとうございます!!!」」」

初顔合わせは非常に簡単に終わった。

だが、後日分かった事だが、ジョンは面倒見の良い人物であった。キョウ達が地上部隊で働くときによく相談に乗り様々なアドバイスを与えてくれたのだ。

教え方も丁寧で、細やかな所もすぐ気がつく優秀な隊員だった。

顔合わせの後、キョウ達はジョンと別れ食堂に向った。

そこでは多くの女性局員がアギトに群がり、シフトのない独身の男性局員はギンガの方に群がっていた。

キョウの見た目も整っては居るのだが二人といるとあまり目が向かない程度なのだ。

三人は少し疲れたのだが良い機会だと隊員達と交流を取り馴染んでいこうとするのだった。

一方その頃ゲンヤはというと、部隊長室でラッドと話をしていた。

「ギンガちゃん達も大きくなりましたね。三人とも陸士訓練校では優秀な成績を収めていたみたいですし」

「ああ。頑張ってたみたいだからな。それにしても時間が経つのは早ええな」

ラッドとキヨウ達は面識がある。ラッドも何度かナカジマ邸に訪れる事があったのだ。

その際はよく遊びに来るソウジとゲンヤに晩酌を付き合わされるという事もあった。

「はあ、ついにギンガも管理局に入ったか」

「やっぱり反対していたので？」

さつきまでと違い、ゲンヤは少し暗い表情でため息をついて呟いた。それはラッドにも分かったようだ。

ゲンヤは表には出していなかったが、ギンガが管理局に入る事をあまりよく思っていないなかった。

ギンガの生い立ちの事もあり普通の女の子として生きて欲しいと願う部分があったのだ。

だがギンガはゼスト隊の事件以来、キヨウと共にゼストの遺志を継ぎ管理局に入ると鍛錬を続けていた。

自分の事も尊敬してくれているようで嬉しくもあったのだが、やはり娘には危ない事をして欲しくないという気持ちがあった。

「子供は誰しも何時かは親の下から巣立っていきますからね」

「蝶よ花よで可愛がついてても、やっぱりクイントの娘なんだな。

地上の平和を守るために何かしたいって、よく口にしてたぜ。先輩のところにもしょっちゅう鍛錬しに行ってたしクイントにも稽古を付けてもらってたもんな。いつの間にかすっかりお転婆娘だよ」

「妄想する所なんかは隊長に似ていらっしやるじゃないですか？」

はにかみつつラッドが言う。

「うるせえやい。それにアイツは小さい時からキヨウが大好きだったからな。一度だってお父さんのお嫁さんになる！とか言ってくれた事ないんだぜ」

その話を何度か聞かされているのか、若干げんなりしながらラッドは問う。

「それでよくキヨウ君と付き合う事を許しましたね。いつも溺愛だ

「つたじゃないですか？」

ゲンヤは机の上に目を移す。

彼のデスクの上には二つの写真立てが飾られている。

一つは家族写真だ。

今よりも少し若いゲンヤとクイントが隣り合って座り、幼い頃のギンガとスバルが二人のひざの上に座っている。一同はとても幸せそうな笑顔で写っていた。

ゲンヤはその写真を見ながら仕事に精を出すマイホームパパなのだ。もう一枚の写真は7歳ごろのキョウウが60cm位の魚を釣り上げて笑っている写真だった。

キョウウの後ろにはソウジとゲンヤの姿も写っている。それは男二人で釣りに行った時の写真だった。

「アイツも俺にとっては息子みたいなもんだからな」

「ギンガちゃんから伝えられた次の日には隊員達をやけ酒に付き合いわせていたのですか？」

キョウウ達が付き合う事になったと聞いたあと、ゲンヤは仕事上がりにラッドを始め数人の部下を連れて飲みに行った事があったのだ。

「どこの馬の骨とも分からん様なヤツよりは何百倍もマシだからな」

「キョウウ君の事もお気に入りでしたものね。よくソウジさんとキョウ君と釣りに行った翌日にはその話を私達にしていましたし」

「ふん。まあ、あいつ等には管理局員として頑張ってもらいてえもんだ」

そう言うとゲンヤはデスクの上に乗っていたコーヒーを飲みほし、仕事に取り掛かるのだった。

キヨウ達は幸いにも初日は出勤がなかった。

新人たちはその日、少しでも部隊に馴染もうと先輩の隊員達と積極的に話をしていった。

キヨウもジョンを始めその他の隊員達に交流をとっていった。

だが翌日から忙しく働いて行く事となった。

我々の住む日本に比べ、ミッドチルダの犯罪発生率が高い。

キヨウ達のチームも他のチームも何度も出勤する事となった。

新人たちは108部隊で過ごしていく中で、管理局員として地上を守る心構えや、事件に対処するノウハウを学んでいくのだった。

そして新人たち一同は108部隊に馴染んでいった。

その後、キヨウとギンガが付き合っているという事が部隊内に発覚した時は、ギンガに思いを寄せている隊員達が騒ぎ出すという事もあったが、ゲンヤが公認している事が分かるとすぐに収まった。

それ以後、二人の事をからかったりする者も現れたが、悪意のあるものでもなかった。

部隊全体が家族の様なものであるのだ。

キヨウ達三人はジョンの指導の下、管理局員として経験を積んでいくのだった。

EP32 新米管理局員（後書き）

また性懲りもなく新キャラを出しました。

今後ともよろしく願います。

EP33 ある休日 前編（前書き）

サブタイトルを付けるのに一番苦労します

本作では『ストライクアーツ』は『北斗の拳』で言う所の『南斗聖拳』のようにさまざまな流派が存在しているという事になっています。

北斗的には『シューティングアーツ』は『剛の拳』寄りの流派ですかね。

クイント「じょいやー！ペチペチペチペチ」

スバル「母さん、何やってんの？」

どこの職場でもそうであろうが、地上部隊での生活は基本的にスケジュールが決められている。

朝六時に起床し、訓練場で早朝にロードワークが行われ、その後に小隊別でミーティングが行われる。

朝食後、八時頃から前のシフトと引き継ぎがされ、終了後にデスクワークを行っていき、事件等が発生すれば出勤する。

夜八時までが勤務時間で、一日の締めくくりにはまた小隊別のミーティングが行われ、その日の反省等が為される。

その後、引き継ぎを行い業務を終える。

終業時刻は事件の発生件数やその事件の内容によって変わり、勤務時間が伸びる事も多々ある。

上記は早番の代表例であり、時間帯はシフトにより違うので部隊員全てがこの通りではないが、平時はこのような業務を行っている。

早番と遅番で12時間のシフトに小隊ごとで分けられているが、必要に応じて時間外の出動もある。

訓練等はシフトのない空き時間で行われたり、週に一度、集中して行われる演習によって隊員達の実力の低下を防いでいる。

完全なオフシフトは二週間に一回あり、キョウとギンガはその日を利用してデートに行ったりしている。

二人とも鍛錬中毒的な所もあり、休日を返上してオフの日まで他の隊員と訓練をすることもよくあるのだが……。

地上では高ランクの魔導師の数が限られており、多くの隊員はBランクなのでキョウ達の出動もシフト外によくあるのだが、ワーカホリックになっっているという事はない。

手の足りない部分は高ランクでない隊員達の努力により、言い方は

悪いが『質ではなく量』でカバーされミッドの治安は守られている。平和は一部のエリートのみでなく、多くの一般隊員達の弛まぬ努力によって成り立っているのだ。

此処は第108部隊の訓練場である。其処では二人の男が模擬戦を行っていた。

「ふん!!」

「ぐをつ!!」

ジヨンの魔力で強化された足から、鋭く撓った回し蹴りがキョウに放たれる。

キョウはそれを何とか両腕で受け止め防ぐ事が出来たが、長い時間訓練をしているのか、かなり消耗しているようだ。

「キョウ君、疲れからか重心がぶれて来ているよ？ 集中しなさい。我々は如何なる時にも市民を守る盾とならなければならない。頑張りましたまえ」

「はい、ジヨン准尉!! うおおりゃあ!!」

キョウ達の隊はその日オフであったが、ジヨンに午前中稽古を付けてもらっているのだ。

その場にいないアギトとギンガは女の子だけでクラナガン市街に買い物に行っている。

ジヨンは顔合わせの際に武術の心得があると言っていたが、その腕前はかなりのものだった。

足技主体の『ストライクアーツ』の一派の使い手であり、キョウは何故か気になったキム先生の事をジヨンに尋ねていた。

彼の話によるとキムとは同門だったらしい。

「うん、良い撃ち込みだ。今日はこれ位でやめておこうか？」

ジヨンはキョウの放った『鬼焼き』を受け止め言う。

「はい、ありがとうございます」

キョウは稽古で疲れていたが、そこまでひどいものではないようだ。休日といえども何時出勤要請が来ても良いように、ある程度の所で終了するのだ。

「いやあ、若い君が羨ましい。私くらいになると疲れが抜けにくくなってるね」

「ジョン准尉だってまだまだ若いですよ。俺の『独楽屠り』に空中で蹴りを合わせられた事なんて初めてです」

キョウとジョンは鍛錬を終えてロッカールームで着替えながら雑談していた。

「そうだ、キョウ君。君は午後から暇かね？」

「はい。とくに用事はないですけど……」

「そうか。ならば付き合って欲しい事があるのだが、一時づろロビーに来てくれないか？」

「構いませんが。どこかに行くんですか？」

「ありがとう。それは着いてからの楽しみだ……！」

その後、キョウは私服に着替えて昼食を取ってからジョンに言われたとおりにロビーに向かった。

其処にはジョンが待っていた。

それは何も問題がないのだが彼の服装に問題があった。

彼は私服の上に桃色のハッピを纏いその頭には同じく桃色の鉢巻が巻かれていた。

ハッピーには『ユカリーン帝国』の文字がプリントされ、両手には何やら荷物の入った紙袋が持たれている。

「うわぁ……。ジョン准尉、何ですかその格好？」

「今日は私の好きなアイドルの『ユカリーン様』のライブがあるのでね。親睦を深めるために君を招待するのさ。さあ、君も着替えたまえ」

キョウは無理やりハッピーと鉢巻を付けられる。

ジョンはこう見えて熱狂的なアイドルオタクなのだ。部隊内でも結構有名のだが、キョウはその時まで知らなかった。女性隊員達がほっとかないようなルックスだったのにジョンには不思議と女っ気がなかった。

それにはこのような秘密があったらしい。

その後、キョウはジョンの車でライブ会場まで移動した。車内では今から見行くアイドルの曲が流れていた。

「めろめろーーーん!!」

（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）（ ）ユーカリーン!! はい!! ユーカリーン!! は

い！！））））

会場でジョンはかなりハッスルしていた。

普段は知的で穏やかな雰囲気の彼だが、アイドルの親衛隊に所属しているらしく、似たような恰好の人物達と不思議な動きをしてアイドルの掛け声に反応していた。

両手には蛍光塗料の入ったスティックを持ち声援を送っていた。

キョウもその中に加えられ、彼らと同じように声援を送った。

「どうしてこうなった？」

「何か言ったかね、キョウ君。動きが乱れているよ。しっかりついできなさい！！」

「（何で俺がこんな事を。絶対ギンガ達にはこの姿を見せらんねえな。）はい、頑張ります。ジョン准尉殿」

その後、三時間ほどでライブは終了した。ジョンは大量のグッズを購入していた。

キョウはライブ終了後、すぐに着替えようとしたのだが

「ライブは隊舎に戻るまでがライブだ」

とジョンに謎の理論で止められた。

二人が車に戻り、隊舎に帰ろうとした際に、第108部隊から連絡が入った。

クラナガン市街で武装した集団が暴動を起こしたというのだ。管轄は違うのだが応援要請が来たとのことだった。

武装集団は新しく管理世界に組み込まれた世界の出身者が首謀者の様で、質量兵器の規制に反対するとの声明を発表しているとのことだ。

実際、魔法文化のない世界ではある程度の保持も認められているのだが、それでも納得がいかないと暴動を起こすものがたまにいるのだ。

休暇中の隊員もそこに駆けつけるようにと連絡された。

キヨウ達が来ていた会場は現場からあまり離れておらず、車で10分程の距離だったのでそのまま向かう事となった。

「今すぐ抵抗を辞めて投降しなさい!!」

キヨウ達が現場に到着すると其処には30人程の管理局員達があり、武装集団に投降を呼びかけていた。

武装集団は二階建てのビルに立てこもっているようで中には人質が取られているとのことだった。

「これじゃ、迂闊に手を出せないですね……」

「そうだね。人質さえいなければやりようがあるのだが……」

キヨウとジョンは現場の状況を見ながらそう述べていた。

このような場合、対テロの部隊も出動するのだが、どうやら他の場

所でも同時にテロが起こっているらしくその場にいる人員で対処しなければならぬようだった。

本局にも応援要請をしているようだが時間がかかるとのことだった。

ビルに面した道路には管理局の車両が多く止められており、その陰では局員達がどのように対処するのか話し合っていた。

「自分に意見があります、よろしいでしょうか？」

様々な意見が出る中で、末席にいたキョウが声を放った。

「良いだろう、言ってみる！！」

その場を仕切っていた局員が発言を許す。

「はい。自分はキョウ・アーデルハイド二等空士であります、飛行許可が下りるのであれば空から突入し人質の解放を行いたいと思うのですがどうでしょうか？」

キョウの意見は危険性が多いとのことで反対された。

だが、その後すぐに武装集団から要求をのまなければ一時間ごとに人質を殺すとの声明があがり、その案を採用せざるを得なくなった。飛行許可はすぐに連絡し10分ほどでありた。その場にいる局員達はキョウの案を補足していく。

作戦の流れはキョウが上空から突入し、人質に紛れ込み、催涙弾と

閃光魔法を放ちその隙に隊員達が突入するというものになった。

とても作戦と呼べたものではなかったが、時間が限られているのだ。すぐにキヨウは犯人達に気付かれないように飛行しビルの屋上に下りた。

その前に管理局員が調べたところ、探知魔法は使われては居ないとのことだった。

計画的な犯行の筈だが、犯人達は微妙に頭が悪いようだ。ただ魔法文化のない世界の出身者達が多いので探知魔法が使えないだけかもしれないのだが。

キヨウはそのまま中に入っていった。

「おい、貴様。何をしている？」

暫らくは何も無く潜入していたが犯人達に見つかった。

「いや、トイレに……」

「そんなら俺が逃げねえようについて行こう」

犯人の一人がキヨウについて行き、その後は人質達の所に連れていかれた。

幸いなことに人質は全員一階に集められているようだ。

キヨウは突入時にバリアジャケットを解除していたので人質と区別がつかないようだった。

『フランメファウスト』も見た目は普通のグローブなわけではない。

うまく第一段階は成功したようだ。

EP33 ある休日 前編（後書き）

ザタイムオブプレビューションバトワンデッサイトダーデステニー
ギンガ「ナギツ！ペシペシナギツ！トラエキレマイ！ナギツ！セツ
カッコー！ハアーン！ナギツ！」

本編とは一切関係ないのでご了承ください。

EP34 ある休日 後編(前書き)

オリジナル展開ばかりでもはや『リリカルなのは』の名を使った別物になっているような気がしてならないです。
原作ファンの方、お許しください。

E p 3 4 ある休日 後編

キヨウは人質たちとともに拘束されている。

といても一か所に集められ見張りに数人が付いているだけだったのだが……。

人質の数は10名ほどであり、警備がざるなのでうまく行きそうである。

ただ、キヨウの服装は目を引いていた。

現場に駆け付けた際は、ジョンと共にバリアジャケットを展開していたから問題にはならなかったが、現在はあのハツピ姿なのだ。

「ママ、あのお兄ちゃん変なカツコだよ」

「しっ、ダメよ。世の中にはああいう趣味の人もいるんだから、変なんていっちゃ」

キヨウは地味に人質の中の親子から精神的ダメージを与えられた。

キヨウは気を取り直して小さな声でささやく。

「みなさん、落ち着いて聞いてください。私は管理局のものです。

私が合図を出したら一斉に息を止めて目を閉じてください。何とか脱出する隙を作ります」

キヨウの言葉に人質達は従い声を出すものはいなかった。

「おい、お前。何を話している!!」

銃を持った犯人の一人がキヨウに声を掛ける。

キヨウはその男の鳩尾にフックを決めて気絶させる。

「今です!!」

キヨウの合図で人質たちは息を止め目をつぶる。

「お前、何しやがった!!」

キヨウが一人を気絶させたのに気付いた他の犯人が駆け寄るが、キヨウは一瞬でバリアジャケットを展開し閃光魔法を放つ。そして、デバイスの中に収納していた催涙弾を放った。

「ぎゃー、目があ」

「先ずは一人、うをおおりや!!」

目を押さえて声を挙げる犯人の一人に『鬼焼き』が決まる。

「くそ、催涙弾か」

「二人目。ちいつ、燃えろ!!」

キヨウは更にもう一人の犯人に肘打ちをあてそのまま首を掴んで持ち上げ炎を放つ。

『式百拾式式・琴月』である。

キヨウはすぐに人質達にフィールド型のバリア魔法を展開し、犯人達を鎮圧するのだった。

そのまま気絶した犯人をバインドで縛り上げる。

以前は苦手としていた魔法だが、特訓の甲斐あってBランク程の魔導師なら解けない程のバインドを放てるようになっていたのだ。

「みなさん、裏口の方から逃げてください!!」

キヨウは人質達に脱出するよう指示を出す。

「ありがとう、変なピンクのお兄ちゃん」

「うっ、どういたしまして。さあ、早く逃げるんだ」

何だかんだでまたさっきの子供の言葉で傷つくキヨウだった。

「光ったな。よし突入だ!!」

キヨウの閃光魔法が合図となり外にいた隊員達は一斉に突入していった。

「満月斬!!!」

ジヨンも宙を舞い、弧を描くような両足の蹴りで犯人達を鎮圧していく。

魔導師が居ないようで、その場にいたメンバーで十分対応が出来るようだった。

「くっそお、こうなったら……」

まだ取り押さえられていない首謀者らしき人物が上着を脱ぎ言つ。

「動くな。俺の体にはこの建物位なら木っ端みじんに来る位の爆弾が付いている。お前らは銃位なら防げるだろうが建物の重さまではどうかな？」

「なん…だと……」

中に突入した隊員の一人が口にする。

「こうなったら、お前らも道連れだ。同志達が別の場所できっと成功させてくれている!!」

「アクセルシューター!!」

爆弾を体に巻き付けた首謀者の頭部に桃色の誘導弾が命中する。

「応援が遅くなつてすいません。本局武装隊所属の高町なのは二等空尉です」

ビルにあの高町なのはが現れた。

なのはの手により首謀者は取り押さえられた。

その後、犯人達は連行された。別の場所で起こったテロも無事に鎮圧されたようだった。

キヨウも人質を解放してから隊員達と合流した。
その場にはギンガとアギトも駆けつけていた。

「高町二等空尉、協力感謝します!!」

その場では隊員達がなのはに謝辞をのべていた。

「いえ、私が駆けつけた時にはもうほとんど終わっていましたし。
あれ？」

なのははキヨウ達に気付いた。

「君は確か、キヨウ君だったかな？それとアギトちゃんにスバルの
お姉ちゃんの……」

「はい、キヨウ・アーデルハイド二等陸士であります。協力してい
ただきありがとうございます」

「同じくアギト・アーデルハイド二等陸士です」

「以前は妹を助けて下さりありがとうございます。ギンガ・ナカ
ジマ二等陸士です」

キヨウとアギトは直接空港火災でなのはと会っていたが、ギンガは
スバルが助けられた際にお礼を言った位しかなのはとは喋っていな
かったので印象が薄かったようだ。

「へえ。みんな大きくなったね。管理局に入ったんだ。これからよ
ろしくね」

「「はい！」」

キョウ達がなのはと再会している場に更にもう一人加わった。

「おおお、あなたは！高町なのは二等空尉！！！」

「えっ、はい。そうですが……」

ジョンである。彼は生粋のアイドルマニアだ。管理局の広告塔にもなっている『エースオブエース』と呼ばび名の高いなのはの事も当然知っているし、実は密かなファンであったのだ。

「失礼。私はキョウ達の小隊で隊長を務めるジョン・フーン準陸尉と申します。お会いできて光栄です」

「は、はい……。よろしくお願いします。ジョン準尉さん」

なのはを前にして興奮気味なジョンになのはは若干引いていた。

「いやあ、あなたに協力していただけるとは感激です。高町二尉のご活躍は何時も耳にしておりましたので」

「あ、ありがとうございます。そう言えばキョウ君、いつまでバリアジャケットを展開しているの？」

ジョンから逃れるためか、なのははキョウに話題を移した。

他の隊員達はすでに制服や普段着に戻っており、キョウだけがまだバリアジャケット姿だった。

「忘れていました、ありがとうございます」

「「「うわっ！！」「」」

キヨウがバリアジャケットを解くと、例のハッピー姿になった。本人も完全に忘れていたのだ。

「あははは……。変わった服装だね？」

なのはは乾いた笑いを浮かべて言う。

「うわぁ、キヨウ。何だよそれ？」

アギトは若干呆れているようだ。

ギンガに至っては

「キヨウ君、私。キヨウ君がどんな趣味を持つとも理解していくつもりだから……」

悲しそうな表情で言う。

「キヨウ君、恥ずかしがることはないじゃないか。其れは我々『ユカリーン様ファン』の正装だよ。君に今着ているものはあげよう！」

凄く良い笑顔のジョンがキヨウに声を掛ける。無駄に爽やかな笑顔だった。

「うわあああああ！！　ギンガに見られた！！！！　違うんだ、ギンガ！！　誤解しないでくれ！！　これはジョン准尉に！！」

「うっん、良いんだよ。キョウ君。周りがどう思ったとしても、私はキョウ君の味方だからね。分かってるよ……」

「絶対、分かっちゃいないって!!!!!!」

その後キョウは隊舎に戻るまで必死にギンガに説明し、何とか誤解を解くのであった。

後日、キョウとジョンはゲンヤに呼ばれ部隊長室に来ていた。

そこにはテロの際に駆けつけていた第108部隊のメンバーも揃っていた。

テロの際の行動で叱咤されるのかと一同は思っていたが、あの状況では仕方がないという事で注意されるにとどまった。

その後、限られた時間と状況下でよく犠牲者を出さなかったとゲンヤは一同を褒めた。

一同が部屋を退出する際、キョウだけ一人残された。

「おい、キョウ。こっからはプライベートだから普段の喋り方で良

いぜー!!」

「分かった、おっちゃん」

「お前、一人で突入したそうじゃねえか？」

ゲンヤが厳しい表情で問う。

「ごめん、おっちゃん。前にも注意されたけど、人質の人たちの事を考えたら。其れに空戦魔導師が俺しか居なかったし」

「だからと言って、他に手がなかったわけじゃねえだろ？」

「ごめん。あの時はあれしか思いつかなかったんだ。其れに俺、成功させられるって思ったんだ……」

キョウの言葉を聞いて、ゲンヤはそれまでの厳しい表情から普段の表情に戻る。

「そうか、今回は誰も犠牲にならなかったから良かったな。お前なりに考えて行動したってわけか。成功させられるって思ったんなら構わねえ。お前は自分の力をちゃんと把握できているからな」

「おっちゃん……」

「自分を過小評価して何も出来ないよりはマシだ。でも自分を過信すんじゃないぞ。お前を大切に思ってんのはギンガ達だけじゃねえんだ。あんまし、心配をかけるな」

ゲンヤは優しい目でキョウに言葉を掛ける。幼いころから知ってい

る、息子同然の彼を大切に思っているという事が其処から伝わってくるようだ。

「分かったよ、おっちゃん」

「それにお前が居ねえと、孫の顔が見れないってクイントがキレるからな」

「途中まで良い事言ってたと思ったのに……」

「今回は大目に見るが、あんまし無茶すんじゃないぞ？ 周りにはギンガやアギトちゃんを始めにみんなが居るんだから」

「ありがとう。自分で出来る精一杯をやって、それでもダメならみんなの力で頑張るよ」

キョウはその後退出していった。
ゲンヤは一人、部屋の中で呟く。

「若いうちはどんどん失敗してそこから学んでいけよ。キョウ」

それはキョウ達が入局一年目の出来事だった。

EP34 ある休日 後編(後書き)

短くなったorz。

読んでいただきありがとうございました。

EP35 ある日の風景9 前編(前書き)

アギトの新技は私が大好きな技です。
日常パート。

ここはミッドチルダの西部にある某所。

首都クラナガンほ場所では悲しい事に犯罪の発生件数も増加する。何か罪を犯したのであるうか、一人の男が路地裏に逃げ込んできた。後ろからは十代後半であろう紫色の長い髪の毛、美しい少女がそれを追いかけてくる。

「キョウ君！犯人はそっちに行つたよ！！」

「了解、ギンガ！！ アギト、合わせろ！！」

「おうよ！！」

男が逃げ込んだ先には先回りしていたのか二人の人物が待ち構えていた。

「喰らえー！！」 「どうしたー！！」

逃げ込んだ男に、黒い髪で同じく十代程に見える170半ばの身長の少年と、赤い髪で妖精か悪魔の様な姿の小さい少女が地を這う炎を放つ。

紫の炎が先に男に命中し動きを鈍らせる。

その技は『草薙流古武術・百八式闇払い』である。

それに続くように赤い炎が命中する。当たった瞬間、赤い炎は火柱をたて犯人と思われる男を拘束する。

赤い炎にはバインドが仕込まれていたようだ。

二人はそのまま男を確保する。紫の髪の毛の少女もそれに合流した。

少女は男に告げる。

「あなたを市街地における危険魔法の使用で現行犯逮捕します」

犯人を捕らえた三人の下に一人の男が近づいてくる。

「三人ともよくやったね。もう私が教えるべき事はほとんど無いんじゃないかな」

その人物は三人の直属の上司であり彼らの小隊の隊長であるジョン・フーンであった。

「そんな事ないっすよ。まだ教わる事は沢山あります。それよりもさっきのアギトの技、凄くなかったですか？」

黒髪の少年が答える。この物語の主人公、キョウ・アーデルハイドだ。

「へっへーん！！ スゲえだろ。私のオリジナル『アギト流・裏百八式 八酒杯』だぜ！！」

赤い髪の少女、アギト・アーデルハイドが胸を張る。

「オリジナル技ってまるでスバルだな。でも、犯人を取り押さえられたのはギンガがうまく誘導してくれたからだろ？ 一番のお手柄はギンガだよ」

「そんな事ないって、みんなの力で逮捕できたんだから……」

キョウの言葉にはにかみながら紫の髪の少女が答える。ギンガ・ナカジマである。

「君達はどんどん成長して、教える側としては本当に鼻が高いよ。さあ、隊舎へ戻ろうか？」

ジヨンの言葉で三人は犯人を連行していく。

これはキョウ達が第108陸士部隊に配属されそろそろ一年になる頃の出動風景の一つである。

キョウとアギトとギンガは隊舎に戻ると部隊長であるギンガの父、ゲンヤ・ナカジマに部隊長室に呼び出された。

キョウ達は入室時に敬礼を取ろうとするがゲンヤが止める。

「三人とも来たか？俺達四人だけしか此処にいねえから普段通りにしていいぜ」

「父さん、用って何なの？」

代表してギンガが尋ねる。

「お前ら三人はうちの隊の中でもあまり有給を使ってねえからな。来週はA+ランク試験を受けるんだろ？ リフレッシュの意味も込めて明日と明後日は休暇を取れ！！」

「おっちゃん、急に何言い出すんだよ」

「そうだぜ、私達が抜けた穴はどうすんだよ？」

急な事でキョウとアギトが反論する。

「大丈夫だ、二日分位は人も揃ってるからな。おめえら新人が抜けたってどうにかなる。それにアギト、クイントがお前に会いたがってるぜ。新作も結構出来てるみたいだぞ」

「うわあ、ホントかよ」

クイントの新作という言葉聞いて、アギトは少しげんなりとした表情を浮かべる。また着せ替え人形にされると感じているのだ。

「良かったなアギト。明日はファッションショーだぜ。クイントさん、スバルまで訓練校でうちにいないからきつと寂しがってんだと思っぜ」

「キョウとギンガも他人事じゃねえぞ。二人とも休日まで訓練してるみてえじゃねえか。最近デートとかしたか？」

ゲンヤがキヨウとギンガをからかう様に、にやけながらその言葉を放つ。

「父さん、何言ってるのよ!！」

「そつだぜ、おっちゃん」

キヨウとギンガが顔を赤らめつつ反応をする。何時まで経ってもこの部分が治らないようだ。

「最近、帰省してねえだろ？俺もこつちに泊まる事が多いんだし、お前ら明日から帰省しろ。これは命令だ。文句言つなよ」

「了解です」

キヨウ達は急ぎよ、翌日から二日間の休暇に入る事となった。

翌朝。キヨウはアギトと共に支度を済ませ、愛車のバイクをガレージから出し、ギンガを待っていた。

「あら？ キヨウ君達お出かけ？」

緑色の髪をショートにし、眼鏡をかけ白衣を纏った女性が二人に声を掛ける。

「あ、マリーさん。おはようございます」

「マリーさん、おっはよー！！」

彼女の名はマリエル・アテンザ。彼女はギンガ達姉妹の定期健診を担当している。

それにデバイスマイスターでもあるのでアギトも彼女にお世話になる事が多いのだ。

そうだった理由からキヨウ達とは面識があった。

キヨウ達の親友のシャーリーは彼女の事を尊敬しており、メカニックとして師弟関係に近い。

「二人とも、おはよう。アギトちゃん、今日も元気いっぱいね」

「今日は久しぶりに親父やクイントさんに会うんだ!!」

アギトはメンテナンスでお世話になっているマリィに懐いている。彼女は親しい人物の前だと、この様に少々子供っぽい態度が出てしまう。

「それはそうと、今日はどうしてこちらに？」

キョウはマリィに尋ねる。マリィは本来、本局第四技術部に所属しているので108部隊で見かける事は稀なのだ。

「聞いてないの？ ナカジマ三佐があなたとギンガの新しいデバイスを用意して欲しいって言われていたから」

「俺にもですか？」

ギンガは『リボルバーナックル』をクイントから受け継いでいたが、キョウ達に機動力が劣るのでローラーブーツ型デバイスを以前から欲しがっていた。

その事はキョウも知っており、その話をマリィにゲンヤが伝えていたという事も聞かされてはいた。

だが自分にも新しいデバイスが用意されるとは知らなかった。

「あなたの『フランメ・ファウスト』はもう何十年も昔のデバイスだから、処理速度も現行のストレージには敵わないでしょ？ アームドデバイスだし酷使もすると思うから、私としてはつまらないけど処理速度と魔法効率をあげ、今以上に頑丈な非人格搭載型デバイスを開発中よ」

「そうなんですか？ ありがとうございます」

「シンプルで機能をとことん突き詰めた無骨なデバイスだから、私としてはもつと複雑なものを作りたいんだけど。キョウ君の戦い方に合わせるとそうなっちゃうのよね。魔法もそれほど使用しないみたいだし」

「あははは、すみません」

「シャーリーも二人のデバイスの開発に関わっているわよ。親友の為に頑張るんだって張り切っているわ」

「シャーリーもですか？アイツ、A級デバイスマイスターの資格を取ったらしいじゃないですか」

「あの子、執務官補佐をしながら空いた時間で二人の為にデバイスをいじっているわ。ホント、良い友達をもったものね。あなた達のA+ランク試験の後には届けられると思うわよ？」

キョウはマリーから自分達のデバイス開発を、シャーリーが行ってくれているという事を聞き絶対にランク試験に合格しようと決意するのだった。

「ごめん！！ キョウ君、待たでしよ？ あれ、マリーさん？」

ギンガが駆け足でその場に到着する。

「おはよう、ギンガ。キョウ君達ずいぶんと待っていたみたいよ」

「よっ、ギンガ。おはよう！ー！ー」

「ギンガ、おせーぞ。私待ちくたびれちゃった!！」

「ごめんね、二人とも。マリーさん、おはようございます」

「ふふふ。楽しそうね。ああ、そうか。ごめんなさい。邪魔者は退散しますか。交際は順調のようね?」

「もう、マリーさん。からかわないでくださいよ!！」

そういつとマリーは隊舎に向かっていった。

「じゃあ、俺らも出発しようか?」

「そうだね。失礼します」

キョウがバイクのまたがり、後ろにギンガが座る。

「よっしゃー!!! 出発進行ー!!!」

アギトは指定席であるキョウの肩に捕まる。

三人は自宅へと向かうのだった。

「母さんただいま!!」

ギンガは一旦キョウ達と別れ自宅に戻る。

「あら、ギンガ。おかえりなさい」

家の中からはクイントが出てきた。昔と変わらない若々しい姿を保っている。黄色いひよこのイラストと『PIYO PIYO』という文字が書かれた桃色のエプロンを身につけている。どこかの『管理人さん』のようだ。

「ゲンヤさんから連絡が入ってるからこの後、キョウ君達もうちに来るわよ。その為に、今御馳走を作っているの。手を洗って着替えてから手伝って頂戴」

「そうなんだ、わかった。すぐ支度するね」

ギンガはクイントの様に髪を伸ばしており、彼女の面影を色濃く残している。

クイントは見た目が若いので美しく成長したギンガと並ぶ姿はまる

で姉妹の様だ。

その後二人は食事の支度をしていく。ギンガも幼い頃から手伝っていたので手際が良かった。彼女もクイントと同じデザインのエプロンを身につける。その姿はまさに瓜二つといった所だった。

その後キョウ達が訪ねてきた。

久しぶりに集まったので、ゲンヤとスバルはいなかったが楽しいひと時となった。

午後からは、アギトはクイントに衣装合わせをされることが決定していた。

しかし、キョウとギンガは予定がなかったのでソウジやクイントの強い勧めもありクラナガン市街へデートに行く事となった。

EP35 ある日の風景 9 前編（後書き）

続きますよ。

読んでいただきありがとうございました。

EP36 ある日の風景 9 中編(前書き)

ある日の風景って9迄しかないからサブタイトルをこれからどうしよう。

退きません、媚び入っつらいません、でも反省はしています。

キヨウとギンガはクラナガン市街に向っていた。

ギンガはキヨウのバイクの後ろに乗る際、何時も彼の腰を掴んで乗っている。

だが、たまにある悪戯を仕掛ける事がある。

「おい、ギンガ」

「なあに？キヨウ君？」

ギンガもキヨウも16歳、身体は以前よりも成長し大人とあまり変わらない。

キヨウは鍛錬を続け、引きしまった身体をしている。身長も170半ばまで伸びている。

顔も、幼さない面影は残しつつも精悍な顔つきに変化している。

一方のギンガも、食事の量は多いがその分はキヨウの様に鍛錬で消費しているのでスタイルは良いのだ。

部隊内の女性局員から羨ましがられる程だ。早く言えば出る所は出て、ひっこむ所はひっこんだ身体なのだ。

ゲンヤにも、若い頃のクイントによく似てきたと言われる。

ギンガが行う悪戯とは、運転中のキヨウに体を密着させることだ。

「当ってるんだけど？」

「何が、当っているの？」

キヨウの背中にはギンガの豊かに育つ二つの丘が当てられていた。

ギンガは以前と比べ、二人で居る時には結構大胆な行動に出るよう

になった。

キョウは周りに対しては交際の事で照れるという事は無くなったのだが、ギンガと二人っきりの時は未だに照れる事がよくあるのだ。今現在も、ギンガの悪戯でドギマギしており、自分の背中に当たる柔らかい二つの丘を指摘できずにいる。

「どうしたのかな？ キョウ君？」

「わざとだろ、ギンガ。当ててるのって」

「ばれたかあ。あれが言ってみたかったんだ。『当ててるのよ』って」

「そついつの似合わねえから辞めといたほつが良いぜ？」

「そつかな？ドキドキした？」

「ああ。凄く」

「じゃあ、このまま。こつするとキョウ君のぬくもりが凄く伝わってくるから……」

ギンガも自分で言っただけで恥ずかしくなっていた。二人はそのままでクラナガンに向かっていった。

その後、10分程で二人はクラナガンに到着した。

バイクを駐車場に止め、これからどこに行くか相談する。

「ねえ、キヨウ君。そう言えば最近、前に一緒に見に行った映画の続編が出てるみたいだよ?」

「ホントか? 『北斗星の神の握り拳』のエピソード2が?」

「うん。部隊の人達に教えてもらったんだけど、観に行こうよ!!」

「そうだな。続きが気になってたし」

以前デートで観に行った映画の続編が上映中らしく、二人はそれを見に行く事にした。

その日は運が良い事にカップルデーらしく、いつもより割引されていた。

二人は上映室に行ったが、カップルは彼らだけらしい。

その映画はバイオレンスな表現が多く、男性ファンが多いのだ。

二人は若干浮いていたが気にせず映画を見始める。

『俺の名を言ってみろ!!』

『俺は天才だー!!』

『ナギツペシペシナギツハアーンゲキリユウニミヲマカセドウカス
ルナギツセツカツコーテーレッテーホクトウジョウハガンケンハア
ーン!!』

『ヒヤッハー!! 汚物は消毒だー!!』

『この石段は【シュー】ウイ悲しみ。一が一步ずつ噛むのが極上で
す』

『さあ、刺して濃厚なケンシロー!! 刺せ!! 来ます、これ?』

『北斗星の神の握り拳の奥深い意義の日の足の不自由な人は生んで
殺します』

『テメエらの血は何色だー!!』

キョウ達の見る映画は相変わらずカオスだった。
正直、何故カップルでこの映画を見に来たのか周りの客達は理解で
きなかった。

「映画、面白かったね」

「ああ。ハートは冷めてしまっちゃ愛せないって心に響いたぜ」

「夜明けは待ち続けてるだけじゃ来ないんだよね。主要キャストが声優じゃなく俳優を使ったのがちよつと違和感あったかな。前の方が良かったかも？」

「同感。でもあの病人強すぎだろ？ 主人公の兄だから強いのは分かるけど、ストロングな柔の拳って何だよ」

「s a u z a 將軍も強かったよね？ ケンシローの技が通用しなかった時はどうしようって思っちゃった」

二人は映画館から出て感想を語っていた。

映画を観終わると、時間は三時頃になっていたので二人は新しく出来たカフェに向かった。

家を出る前にクイントから教えられていたのだ。

「キョウ君！！ カップル限定のDXパフェがあるんだって！！
これにしよう？」

「結構ボリュームあるな？ ああ、良いぜ。あと俺はコーヒーマシンのブ
ラックで良いや。ギンガはアイステイーで良かったよな？」

店は大通りに面していてガラス張りになっていた。

日当たりがよく、中ではモダンジャズが流れている。カウンターには髭を生やし髪をオールバックにした40代ぐらいのマスターがカップを磨いていた。

なかなか人気のある店の様で、キョウ達以外にも多くのカップルがいた。

二人は窓側の席に案内され、メニューを選ぶ。

他の席のカップルもギンガの様にカップル限定パフェを注文しているものが多いようだ。

暫らくして注文の品が届くと二人はそれを食べ始める。

「美味しい！！ キョウ君、このパフェ凄く美味しいよ！！」

「そうか、良かったな」

キョウはそこまで甘いものが好きではなかったのでコーヒーを飲み、ギンガが一人でパフェを食べていた。

彼自身はパフェを美味しそうに食べるギンガの姿を見るだけで満足しているようだ。

だが、キョウの素っ気ない態度が気に入らなかったのかギンガが言った。

「もう、本当に美味しいんだから。少しぐらい食べてみなよ。はい、あ〜ん」

「えっ、俺はいいよ。ギンガが俺の分まで食べてくれればいいし」

周りの目も気になるのか、キョウはギンガの『あ〜ん』を断る。

「キョウ君、私の勧めるもの食べてくれないの？」

キョウの言葉にギンガは悲しそうな表情で続ける。

「そうだよ。こんな女の子らしくない子と一緒にいるのは嫌だね。キョウ君、私の事嫌いになっちゃったんだ……」

ギンガの言葉にキョウは慌てる。

「違っつて、ギンガ！！ 嫌いになんかなるかよ。それにお前が女の子らしくなかったら世界中に女の子らしい人間なんて存在しねえっつて！！ 他の誰かが何と言おうとお前は俺にとって可愛い女の子だ！！」

キョウの言葉を聞きいたギンガは、パフェをスプーンに載せて彼に向ける。首をコクンと横に傾け、とても魅力的な姿だった。

「じゃあ、食べてくれる？」

「もちろん！！」

ギンガはそれまでの悲しそうな表情を一変させ、キョウに笑顔でパフェを食べさせる。

「はい、あ〜ん！！」

「あ〜ん」

キョウはギンガによってパフェを口の中に入れられた。

「ふふふ、計算通り。美味しかったでしょ？」

ギンガの悲しそうな表情は演技だったようだ。さっきまでのが嘘の様にまぶしい笑顔で笑っている。

「ひつでえ、嘘だったのかよ？ でも確かに、アンマ甘くなくて美味しいな」

ギンガの笑顔の頬を染めつつキョウは答えた。

「母さんが言ってたんだ。涙は女の武器だって。母さんってば結構スバルにもこういう事教えてるみたいなんだ」

「確かにスバルならやりそうだよな。クイントさんが元凶だったのかよ？」

「スバルってキョウ君にちょっかい出して、それ見て慌てる私をからかっていたもの。二人には困ったものだわ、まったく」

ギンガは何時ものスバルの様子を思い出し、ため息交じりに呟く。

「スバルってやたら俺に抱きついて来るもんな。酷い時なんかはうちに泊まってアギトと二人で俺の布団に潜り込んで来たってこともあったし」

「スバルったらそんなことまでしていたの？ 私だってまだなのに……」

「アイツ、小学校の三年生くらいまで風呂にもやっけてきたよな？」

「そうだったね。私にまで入ろうって無理やり風呂場まで引っ張ってきて」

「でもやっぱり姉妹なんだなって思ったぜ。今思うとさっきのギンガはスバルにそっくりだった」

「そうかな？でもキヨウ君。私から話を振って悪いんだけど、デート中に他の女の子の話するのはあんまり良くないんじゃないかな？それが母親や妹だとしても」

ギンガは話題がスバルの事中心になってきていたので、キヨウに釘をさす。

「悪い、ギンガ。でもさっきのお返しだぜ？」

それから二人は30分程経ってから店を出た。
キヨウはバイクをとってきて、帰りがたらどこかに寄ろうかとギンガに提案した。

家の方に向かう途中に、そこまで大きくはないがそこそこ綺麗な池があり二人はそこに寄っていく事にした。
其処はキヨウ達の家からも近く、ソウジやゲンヤとたまに釣りに行っていた場所だった。

池の近くには大きな木が生えておりギンガはその根元に腰掛ける。

「此処に来るのも久しぶりだな？」

「うん。小さい頃はよく此処で父さん達と釣りをしていたよね？」

「ああ。ゲンヤのおっちゃんは休みになると、俺と親父を連れてよく釣りに行ってたもんな。はああ、それにしても眠い。今日は何だかんだで朝は早かったもんな」

キョウがあくびをしながら答える。

「それなら、はい。どうぞ」

ギンガが自分の膝をポンポンとたたく。

「良いのか？ 恥ずかしいぜ」

「二人だけしか居ないんだし、大丈夫だよ。其れに私達は付き合っているんだし」

「そうか。ならお言葉に甘えて……」

キョウはそう言うとギンガの膝の上に頭を載せる。

「喫茶店で私に言ってくれた事、凄く嬉しかったよ」

「何が？」

「私の事を可愛いって力説してくれたじゃない」

「そっか。でもあれは本心からだぜ」

「ありがとう」

ギンガは膝の上に頭を乗せたキョウウに口づけをする。そつと触れるように二人の唇は重なる。

「今日は疲れたでしょ？暫らくこつして休みましょ」

「あ、ああ」

二人とも未だに慣れないのか頬が赤く染まっていた。

その後、キョウウはギンガの膝枕で気持ちよさそうに眠った。寝息を立てるキョウウにギンガが呟く。

「キョウ君、好きだよ」

それから二時間くらい休憩して、二人は帰宅した。

EP36 ある日の風景9 中編(後書き)

リア充爆発しろ！

EP37 ある日の風景9 後編(前書き)

クロスがやってみたいです。

どなたか一緒にやりませんか？

今回はバトル回です。

ふと思ったんですが、シグナムってイグニス永久コンボ出来そうじゃないですか？

そう言えば、ゲージMAX版を使うのは久しぶりだな。

今回の親父は何時もと違いかなり強いです。

突然始まった休暇の二日目。

キョウはソウジと道場にいた。二人はこれから立ち会うのだ。

今回はアギトとのユニゾン状態で戦うようで、キョウの髪は赤みが
かっている。

ソウジは何時になく真剣な表情でキョウと向かい合う。

いつもの着流し姿ではなく、ソウジはバリアジャケットである袖に
日輪の紋章の入った黒い着物風の上着に、緑がかった袴を身に纏う。

「親父、いつもと様子が違うみてえだけど？」

キョウもそんなソウジの様子が気になって尋ねる。

「お前も今年で16になるからな。そろそろ免許皆伝にしても良い
かと思つてな」

「じゃあ、今から行つ立ち合いは？」

「そうじゃ。お前達の実力をワシ自ら試そうと思つておる。全力で
来い！！」

「ああ。行くぜ！！」

キョウとアギトの『草薙流』免許皆伝を賭けた闘いが今始まる。

キョウはソウジに向かい駆け寄り、飛び上がる。

ソウジに向けて空中から両の拳を組んで振り下ろす『外式・奈落落とし』を放つ。

何度も何度も。

ソウジはそれを防いでいるが、あまりにしつこいので口を出す。

「おい、何じゃ？その攻め方は」

「いや、なりふり構っていらねえって思ったから」

「それは良いが、あまり褒められたもんじゃないぞ。そうりゃ！！」

ソウジはキョウの『奈落落とし』の隙を突き『鬼焼き』を放つ。

「ぐをっ」「」

キョウは喰らいはしたが何とか着地する。ユニゾン状態で耐久力も上がっているのだ。

だがソウジはキョウに追撃してくる。

「そうりゃ、気を抜くな！！ ふん！！ とつりゃ！！！！」

「「つちい！！」「」

ソウジは『闇払い』を放つ。キョウは『闇払い』を防ぐが、それはおとりだったようだ。

接近したソウジは裏拳からフックを放ちキョウのガードを崩す。そして炎を纏った掌底『七百式拾式・炎重』をキョウに放つ。キョウはまともに喰らってしまい、道場の壁に叩きつけられる。

「どうした？ お前の力はそんなもんか？」

「くっそお!!」

キヨウは立ち上がるとソウジに近付き接近戦を試みる。

ソウジはそれに応じ、二人は乱打戦にもつれ込む。

キヨウのアップアがソウジにヒットすると今度はキヨウの猛攻が始まった。

「ふっ、てや!! そら!! ボデイがガラ空きだぜ!!」

屈んだ状態からの二連続の蹴り『八拾八式』をあて、先ほどは防がれた『奈落落とし』を決め、そこから更に得意技の『荒咬み』、『九傷』、『八錆』へと繋いだ。

ソウジはキヨウのラッシュを喰らい倒れるがすぐに立ち上がった。

「なかなかやるようになったようじゃな？」

「嘘だろ？ 今で倒れねえって……」

「強くなったのお。じゃが、これはどうじゃ？」

そう言うとソウジの体から炎が噴き上がる。ソウジは胸の前で両手を構え、その間には炎が浮かんでいる。

(なあ、キヨウ。あの技は……)

キヨウの中でアギトが話しかけた。

(ああ。あれは親父の『大蛇薙ぎ』だ。合わせるぞ、やれるか?)

(もちろん!! 任せとけ、相棒!!)

キョウの体からも炎が上がる。キョウは左手を掲げ、その手からは炎が浮かぶ。

「これで――!!」

「喰らい――!!」

「終わりじゃ――!!」

「やがれ――!!」

二つの『草薙流奥義・裏百八式・大蛇薙』がぶつかると、道場内にはすさまじい衝撃と熱波が広がる。以前のキョウ達はすぐに押し負けたが、今回は拮抗している。

「はあああああ!」 「うおおおおお!」

二つの炎はやがて一つとなり二人の間ではじけ飛ぶ。

キョウとソウジはその衝撃により道場の壁まで吹き飛ばされた。その衝撃はすさまじく、強化の魔法が掛けられているはずの壁はひび割れ、二人の体はそこにめり込んでいる。

「ふふふ。腕をあげたな。じゃがこれはどうじゃ?」

驚くべき事にソウジはそこから抜けキョウの方へ向かう。

「うっ。くそ、親父を倒すにはまだ足りないか」

キョウもふらふらになりながらソウジを迎え撃とうと歩を進める。ソウジはキョウに『荒咬み』を放つ。だがそこでは終わらない。

「覚悟！」

そこからソウジは『炎重』へと繋げ、更にキョウへ火柱をあげる。かなりの威力を持つであろう火柱はキョウを包み込む。

「ほりゃああああ！！！」

『草薙流』の奥義の一つ、『千百弐拾七式・都牟刈』を放ったのだ。

「ぐわああああ！！！！！！」

キョウはそれを喰らい倒れ伏した。

「立てキョウ。お前達はそこで終わるのか？ゼストとの約束は、誰かを守りたいという想いはその程度のものじゃったのか？」

ソウジがキョウに問いかける。

キョウの体はボロボロになっていた。いくらユニゾン状態で能力が底上げされていたとしても、ソウジの攻撃によるダメージはかなりのものになっているのだ。

（体中が痛ええ。俺たちじゃ親父には勝てないのか？）

キヨウが心の中で弱音を吐く。

(キヨウ！あきらめちゃダメだ！！)

アギトがキヨウに声を掛ける。

(私やギンガと約束しただろ！ゼストさんの遺志をついで、沢山の人を守るようになるうって！此処であきらめるのか？お前にとつてあの誓いはその程度の物だったのかよ！お願い、立ってよ！キヨウ！)

アギトの願いがキヨウの心を打つ。此処で倒れるのならば、三人で誓った事が嘘になってしまう。

(そうだよな、アギト。ここで倒れるわけにはいかねえ。其れに親父はきつと俺達の事を試したかったんだ。俺達の思いがどれ程の物かを。そしてそれを貫ける程に俺達が成長できているのかを！！)

(キヨウ……)

(ありがとうな、お前の言葉で力が湧いたぜ。やるぜ、アギト。これが最後の一撃だ)

(うん。私達の力を親父に見せてやろう！！)

キヨウの体からはまた炎が噴き上がった。立ち上がりソウジの下へ向かう。

「親父、これが俺とアギトの全力の一撃だ！！」

ソウジは立ち上がるキョウの姿を嬉しく思い声を放つ。

「撃つてこいキョウ！お前達の想い、ワシにぶつけてみる！！」

キョウはソウジと接近する。そして技を放つ。

「これがあああ！！ 草薙の拳だああああ！！」

キョウはソウジに火柱を放つ。そしてその中を突っ切り、炎を纏いながら渾身の『毒咬み』を放った。

「ぐはああ！！（この技は、ワシでさえ会得できなかったあの……）」

ソウジはキョウの攻撃を受け、壁に激突する。その衝撃はそれでも止まる事はなく、ソウジは壁を突き破り庭の方まで吹き飛ばされた。

「はあ、はあ。おれの、俺達の勝ちだ！！！！」

そう言うとキョウはその場に倒れ込んだ。アギトもユニゾンが解け、キョウの上に倒れ伏す。

「本当に、強くなったわい」

ソウジは庭から道場内に戻って来る。

バリアジャケツトも解けており、かなりダメージがあったらしく足取りが覚束なかった。

「未完成ながらも、『最終決戦奥義・無式』もどきを放つとは。本

当によくやったな」

キヨウとアギトは気を失ってしまっているようだ。

ソウジの言葉は二人に届いてはいなかったが、その表情はとても嬉しそうなものだった。

その後、二人はソウジに介抱され、意識を取り戻した。

ソウジによって二人は『草薙流』の免許皆伝と言い渡された。

それから三人はナカジマ家にお呼ばれをし、夕食をともに取った。免許皆伝の事をギンガに伝えると彼女は自分の事の様に喜んでくれた。

キヨウとアギトとギンガは夕食後、隊舎に戻るためバイクにまたがる。

「キヨウ、アギト。免許皆伝は与えたが、まだお前達には伝えていない奥義もまだある。また帰って来た時は稽古を付けてやる」

「ギンガ、キヨウ君達に負けなないように頑張りなさいね。それと三人とも身体には気を付けるのよ」

「ああ。親父、クイントさん。ありがとう」

「うん。母さんもおじ様も元気だね」

「親父、クイントさん。行って来るね！キョウ、行くっぜー！」

「おう。じゃあ、行ってきます！！」

三人は108部隊に戻っていった。

三人の突然の休日は終わった。

明日からはまた忙しい毎日が始まるが、三人とも良い表情だった。

「アギト、ギンガ。俺、これからも頑張っていくから。ついてきてくれ！！先ずは来週のA+ランク試験からだ！！」

「おう！！ 任せとけて！！」

「うん！！ 絶対合格しようね」

三人は決意を新たにするのだった。

EP37 ある日の風景9 後編(後書き)

結構、難産でした。

『無式』は一番好きな技です。

まだ未完成ですが近いうちにマスターします。
読んでいただき、ありがとうございました。

EP38 A+ランク試験(前書き)

ランクがずれていたorz

「」の最後つて『。』がいらないつて知らなかった。

修正とききます。

自分が読みやすく感じる形式で書いているので、今後も修正を行っていくと思います。

こうしたら良いとかアドバイスを戴けると嬉しいです。

行頭は1マス空けるといのは、バランスが悪いように感じたので修正しません。

今回も独自設定満載で申し訳ないです。

EP38 A+ランク試験

休日から一週間後、キヨウ達三人は魔導師ランクA+を取得するために試験会場に来ていた。

キヨウとアギトは空戦でギンガは陸戦のだが会場は同じのようだ。アギトは試験を受けるが、キヨウのデバイスとして登録されているのでランク自体はキヨウの物に依存する。

彼女自身は、キヨウ以上に魔法の運用能力が長けているので、単独でも試験を受ければ空戦A+は堅いと部隊内では言われているが、二人でしか受けないと頑なに言い続けている。

試験会場内で一旦三人は二組に分かれ、それぞれの試験内容を確認する。

その後、ロビーで落ち合った。

試験内容かというと、キヨウ達は試験官との模擬戦で、ギンガはジヤマーとターゲットを時間以内に破壊し、ゴールへ向かうというものだった。

「キヨウ君達は良いなあ。私も一対一の模擬戦が良かった。『シユーティングアーツ』の鍛錬をずっと続けてたのに……」

「まあまあ。ギンガだったら今回の試験内容も余裕でクリアできそうじゃねえか」

「そうだが、私達は自分よりも強い魔導師との一対一だから苦労しそうだが」

「その割には二人とも嬉しそうじゃない。良いなあ」

キヨウとアギトは試験の内容に満足をしていたが、ギンガは不満そうだった。

「ギンガ・ナカジマー等陸士。ギンガ・ナカジマー等陸士。試験会場に移動してください」

キヨウ達が喋っているとアナウンスでギンガを呼ぶ声が聞こえる。

「私、呼ばれたみたいだから先に行くね」

「おう、頑張つて来いよギンガ!!」

「絶対合格しろよ!! 私達三人でA+ランク突破しようぜ!!」

「キヨウ君もアギトちゃんも頑張つてよ。私だけ合格なんて嫌だからね」

そう言うとギンガは試験会場に向かった。

そのすぐ後、キヨウ達も呼ばれ試験を受ける事となる。

ギンガの試験は廃ビルが並ぶ市街地で行われるようだ。スタート地点には一人の人物が立っていた。

「お前が今回受験するギンガ・ナカジマってヤツか？」

ギンガを待っていた人物、それは赤い髪を二つのお下げにした9歳位の少女だった。

彼女の問いにギンガは敬礼しながら答える。

「はい、私がギンガ・ナカジマ一等陸士であります」

「そうか。私は今回お前の試験官ってことになってる八神ヴィータ
準空尉だ」

「はい、ヴィータ准尉。よろしくお願ひします」

「おう。近代ベルカ式と『シューティングアーツ』使いか」

「はい、そうですが。何か問題がありましたでしょうか？」

「いや、私もベルカ使いだからな。ちょっと気になっただけだ。試験の内容は聞いてると思うから私は何も言わねえけど、危険行為は

減点ってことだけはちゃんと頭に入れとけよ」

「了解しました」

ギンガは試験が始まると、次々とターゲットを撃ち落としていく。彼女は接近戦に目を奪われがちだが魔法運用もなかなかのものであり問題なく課題をクリアしていく。制限時間を充分に残して試験を終えた。

「うん、特に問題な点もなかったし合格だ。今の調子だと、もう一つ上も狙って良いんじゃないかねえか？」

「ありがとうございます。次回の試験も挑戦してみたいと思います」

ギンガ・ナカジマー一等陸士、陸戦A＋ランク取得。

一方のキョウ達は室内の訓練場の様な場所に通された。

窓などはなく、壁はコンクリートの様なもので出来ており、床は地面の様だった。

そこには赤い髪をポニーテールにした一人の女性が二人を待っていた。

年は19歳位か、非常に美しい顔立ちで凜とした雰囲気醸し出す女性だった。

「私がお前達の試験官の八神シグナム三等空尉だ」

「八神だと？ 自分はキョウ・アーデルハイド一等陸士であります」

「同じくアギト・アーデルハイド一等陸士です（何だ、あの試験官、私の無くした記憶と何か関係があるのか？）」

キョウの発した言葉の最初の方は聞こえていなかったらしい。そのままシグナムは続ける。

「珍しいな、古代ベルカの融合騎か。分かっていると思うが、試験は私との模擬戦だ。女だからと手を抜いたら只じゃおかない。それに私は貴様らよりも数段強い」

キョウ達はハナっから油断するつもりはない。格上が相手なのは承知の上だ。

幼い頃からの鍛錬により培われた観察眼でシグナムの実力が、自分たちよりもずっと上だという事は理解出来ている。

「はい、胸をお借りします。やるぜ、アギト!!」

「おう!!」

「ユニゾン・イン!!!」

キョウとアギトは空戦ランクを取得する際は常にユニゾン状態で受験している。

陸戦はキョウが単独で受けているが、空戦は一緒に受けようとアギトと約束をしているのだ。

二人は一心同体、相棒なのだからと。

キョウの髪が赤みがかり背中からは炎が二枚の翅の様に噴き上がる。

シグナムもその間に騎士甲冑を展開していた。その手には長剣型アームドデバイス『レヴァンティン』が握られている。

「無手か、珍しい。準備は出来たようだな。いくぞ!!」

「はい!! いくぜ!!」

キョウは開始と同時にシグナムに接近し拳を放つ。だがシグナムはそれを拳で受け止める。

「手甲ではなくグローブ型のアームドデバイスか……」

「はい、父から譲り受けました」

二人は剣と拳で押し合いつつ会話をする。

耐久性重視で作られているだけあり『フランメ・ファウスト』は『レヴァンティン』の刃を受け止めていても切り裂かれる事がないようだ。

当然、斬れ味を落としてあるが、押し返されていない所はキヨウ達の成長がつかがえる。

「ほう。そこそこは鍛えているようだな」

「まだ未熟ですが。いきますよ、シグナム三尉！喰らえ！！！！」

「

「はあ！！」

「うおつと！！」

キヨウはシグナムに向け『毒咬み』を放つ。シグナムは身体を捻りそれをかわす。そこから袈裟切りを放つがキヨウはバックステップでそれを避けた。

「貴様も炎熱の変換資質を持っているのか」

そう言うとシグナムは『レヴァンティン』に炎を纏わせる。

「あなたもですか。親父以外には初めてです」

二人はそれから接近戦を繰り広げる。地上のみならず空中でも拳と剣が交差する。

キヨウの方がスピードでは僅かに分があるようでシグナムに向け炎を纏わせた攻撃をあてていく。

だがシグナムの防御力はかなり高いようで攻撃を喰らいつつも反撃をしてくる。

「大したものだ。その腕前なら、A Aランクでも受かりそうだなぞ」

「ありがとうございます」

二人は一度距離を取り言葉を交わす。

キョウはまだ一撃も攻撃を受けてはいない。スピードで勝っているという事もあるが、シグナムの剣に秘められた威力を考えると一撃でも当ればむこうのペースになると分かっているからだ。

その為、攻撃を喰らわないように必死で回避しているのだった。

「今回は試験なのでこれを使うつもりはなかったんだが……」

シグナムはカートリッジをロードする。

「特別に私の得意技を見せてやろう」

彼女の体からはそれまで以上の魔力が感じられる。

炎を纏った『レヴァンティン』からもすさまじい魔力が放出されている。

アギトがキョウに話しかける。

（キョウ、ヤバいぜ。あの技、かなりの威力がありそうだな）

（ああ。でも発動前に何とか出来ればチャンスがありそうだな。やるぜー！！）

(もちろん!!)

剣を構えるシグナムの懐にキョウは潜り込む。だがシグナムもキョウに向けて技を放とうと剣を振る。

「紫電一閃!!!!」

「うける!このブロー!!!!」

互いの攻撃により生じた衝撃が部屋中に広がる。キョウはシグナムの『紫電一閃』により吹き飛ばされる。

「ぐわあ。効いたぜ……」

キョウは受身を取る事に成功し再びシグナムの方へ向かう。『紫電一閃』の発動より早く奥義の『百八拾弍式』を当て威力を削いでいたのだ。

その時、シグナムが声を放つ。

「良い。合格だ!!」

シグナムの言葉でキョウは立ち止まった。

「えっ?合格ですか?」

「ああ。まさか『紫電一閃』をAランクにすぎない魔導師に防がれるとはな」

シグナムも騎士甲冑の腹部がひび割れていた。

「このまま続けても楽しそうだが、これは試験だ。十分お前達はA+ランクの実力に達している」

そう言うとシグナムは騎士甲冑を解き地上に降りる。キョウもそれに続いてユニゾンとバリアジャケットを解き地上に降りた。

「ありがとうございます」

「その年でそれだけの腕前を持つとは才能があるのだな」

シグナムは賞賛するがキョウは否定する。

「いえ、それなりに努力を続けてきたつもりですが、自分だけの力じゃありません。俺に技を教えてくれた父や、訓練校や108部隊で出会った沢山の人たち。そんな、私の事を支えてくれる人たちのお陰で、今の自分があるんです。それに頼れる相棒である妹も付いていてくれますから」

キョウの言葉を聞いてアギトは嬉しそうな笑顔になる。

シグナムもそれを観て微笑ましく思う。

「そうか、すまなかった。良い人たちとの出会いで成り立っているのだな」

試験前とは違い母性あふれる表情でシグナムは言った。

無事合格したキョウとアギトは先に合格していたギンガと合流し、試験会場を後にした。

その後、部隊では三人の合格を隊員達全員が喜んでくれた。

クイントやソウジにも連絡を入れるとかなり喜んでくれていた。

だが、残念なことも一つあった。『フランメ・ファウスト』に寿命が来たのだ。

これまでのソウジとキョウの二代にわたる使用についてに限界が来てしまったのだ。

キョウにデバイスが無い間は幸運にも大きな事件がなかったのですが、ジョンに言われデスクワークに専念することとなった。

三人が出動するのをキョウは羨ましそうに眺める事しか出来なかった。

それから三日ほどが経ち、三人は部隊長室に呼ばれた。そこにはゲンヤのほかにもリエル・アテンザの姿もあった。

「キョウ・アーデルハイド並びにアギト・アーデルハイド、ギンガ・ナカジマ入室いたします」

三人は部屋に入ると、いつものように敬語は不要だと言われ、楽にするよう指示される。

「おめえら、A＋ランクの合格おめでとう」

「おめでとう。キョウ君、アギト、ギンガ」

二人も喜んでくれているようだ。ゲンヤは当日にも聞かされて自分の事に喜んでいただけだ。

「突然だが昇進してもらった事になったぜ。今までの働きと今回の合格によって本日付でキョウとアギト、ギンガは陸曹だ!!」

「ホントかよ、おっちゃん？」

アギトが尋ねる。

「ああ。それと……」

「前言っていた新しいデバイスよ」

マリーがキョウとギンガにデバイスを手渡す。キョウには赤いクリスタルのついたシルバーのブレスレットを、ギンガには紫のクリスタルのネットレスを。

「ありがとう、マリーさん」

「マリーさん、これって」

キヨウは今まで使っていたデバイスには待機モードが存在しなかったので珍しがっている。

「キヨウ君に渡したのは『フランメ・ファウスト？（ツヴァイ）』よ。ある管理世界内で見つかった魔力伝導率と耐久性に優れた新素材が使われているの。耐久力は『フランメ・ファウスト』の250%、処理速度は現行のストレージデバイスの140%と計測されたわ」

「凄い！！　ありがとうございます」

「ギンガに渡したのはローラーブーツ型デバイス『ブリッツキャリバー』よ。AIも搭載されているわ。これでキヨウ君達にも付いていけるわよ」

【よろしくお願いします、マスター】

「嬉しい、凄く嬉しいです。マリーさん、ありがとうございます。」

よろしくね、ブリッツキャリバー！！」

「二つともシャーリーが頑張ってくれたんだから大切にしなさいよ。あの子に会った時にはお礼も言っときなさい」

「はい！！　絶対大切にします」

キヨウとギンガは親友の想いの籠ったデバイスを大切に胸に抱いた。
「せっかくだから二人ともバリアジャケットのデザインも変えたら
どうだ」

ゲンヤが提案する。キヨウ達はその意見に賛成し、すぐに術式をインストールしバリアジャケットを展開した。

キヨウは黒いハイネックにクロスの意匠が施されたインナーを着こみ、その上から白いライダーズ風のジャケットを身に纏う。
蒼いボトムスにチェーンが腰から下げられ、靴は黒いブーツへと変わっていた。

額にあつた鉢巻が無くなっている。
両手には『フランメ・ファウスト？』が装着されたのだが以前とはあまり見た目には変化がなかった。
一つ違う所は、手の甲の部分に金色のラインが入った事位だ。

ギンガは白いインナーの上に長袖で裾は臍より上の位置にある黒いジャケットを着込んだ。

背中には金色の日輪のマークがあり、左手には『リボルバーナックル』が展開されている。

右手には黒い指抜きグローブが。
下半身は黒のミニスカートの下に白いレギンスの様なインナーが展開され、両足には『ブリッツキャリバー』が装着された。

腰の辺りからは後ろから見ればロングスカートの様に見える黒い布が装着されている。

早く言えばキヨウの真似をしたスバルを更に真似た様なデザインだった。

「うそ？ キヨウ君、今までと全然デザインが違っじゃない」

「ギンガ、それってお前……」

「せっかくお揃いだと思ったのに」

ギンガは悔しがった。キヨウはフォローを入れようとアギトに話を振る。

「でも、なかなか似合ってると思うぜ？なあ、アギト？」

「そうだぜ！！ でも姉妹揃ってプツ、プハハハハハ」

「キヨウとお揃いにしたかったのか？ 乙女だな、ギンガ。あははははは」

「良いと思うわよ。でもスバルともお揃いなんですよ？」

「もう、アギトちゃんも父さんも笑わないでよ！！」

「ギンガ、怒んなって。それホントに似合ってるし、スゲえ嬉しいぜ」

「ホント？ キヨウ君？」

「ああ。俺の事思ってくれてんだって伝わったぜ」

キヨウとギンガは甘い雰囲気醸し出す。

「「「はあ、こいつら時と場所を考えて欲しいよ。まったく……」」

三人は二人に呆れながらもその光景を楽しんでいた。

それからまた時が経ち、翌年にキヨウは総合のA+ランクを取得する。

今まで受けてきた空戦と陸戦の経験を生かし一発で合格を果たした。しかもアギトとのユニゾンをせずに。

アギトは単独で空戦A+を取得した。八神はやてのリンクフォース？がランク取得を認められていたので彼女も単独で取得したのだ。

加えて、小隊指揮資格も取得をした。

ギンガは捜査官、そして2級通信士の資格を取得した。

多忙なこともあり、ランク試験は受けていなかったがそれ以外の資格の取得に力を入れており、魔導師としての実力も伸ばしてはいる。そして三人は揃って曹長の位に昇進した。

キヨウ達の小隊は108部隊の中でも特に活躍していたのだ。

昇進が早いのは、高ランク魔導師であり、出勤機会が多いことも影響している。

ジオンは三尉に昇格をしており、忙しくてアイドルのライブに行けないとぼやく様になっている。

その日はキヨウ達三人とも休暇を取っていた。

相変わらず有給をためていたので、消化するようにとゲンヤに言われたからだ。

三年のプログラムを一年早く切り上げ、陸士386部隊に配属されたスバルとティアナに三人は久しぶりに会いに行くのだった。

だが、その帰りにある悲劇が起こる。

Ep38 A+ランク試験（後書き）

シグ姉とヴィータ嬢を出しました。

本編前なので階級は低いですけど。

シグナムも大好きだあああああ！！！！

ギンガのバリアジャケットのデザインは原作のスバルの物の色違いに、所々キョウの面影が見えるものって感じですよ。

キョウは99以降の『草薙京』の服装とえば分かりやすいかと。読んでいただきありがとうございます。

Ep39 二つの再会、新たな力 前編（前書き）

小説の書き方を紹介されている作家さんがいらっしやっただので、それを読んで共感した部分などは取り入れてみました。

Ep38も設定に矛盾があったので修正しました。

皆さまのご感想やご指摘が頂けたら嬉しいです。

くそー、ラストサムライめ！貴様のせいになかなか筆が進まないではないか！！

キョウ達はその日、陸士386部隊の隊舎に来ていた。

三人は休暇を利用して386部隊で災害担当として働くスバルとティアナに会いに来ていたのだ。

スバルとティアナは本来ならば陸士訓練校で三年間のプログラムを選択しておりまだ卒業していない筈だった。

だが、キョウ達の108部隊での活躍を聞き、自分達も早く人の為に働きたいという思いが堪えきれなくなり、一年早く切り上げて陸士386部隊に配属されているのだ。

キョウ達と違い、二人は三等陸士からのスタートであったが、気にする事なく災害担当としてコンビを組んで働いていた。

キョウ達はスバル達の仕事が終わるまで食堂で待っていた。

部隊によりシフトは違うので、その日は二人とも早めにシフトが終わり昼にはそこに来るようだった。

「あつ、アギちゃん！！ ギンねえ！！ キョウにいー！！！」

スバルが三人の姿を見つけ駆け寄る。ティアナもその後ろから近づいてきた。

「久しぶりだな二人とも」

「元気そうね？ 頑張っているみたいじゃない」

「スーバル！！ それにティアも久しぶり！！」

スバルは嬉しいのかアギトと共にはしゃいでいた。まるで飼い主が近付いた時の犬の様なテンションだった。

「はあ、スバル、あんたももう14歳なんだから少しは慎みを持ちなさいよ。先輩、ギンガさん、アギト先輩、お久しぶりです」

ティアナはスバルの様子にため息をつきつつもキョウ達に挨拶をする。

「ごめんなさいティアナ、妹が迷惑をかけているみたいね。こらあ、スバル!!」

「アギトも少し落ち着け!!」

「ごめん、ギンねえ(キョウ)!!」

キョウとギンガは二人を注意する。二人も落ち着きを取り戻し、キョウ達が座るテーブルに着く。

スバルとアギトが席に着く頃にはティアナはすでに席に座っており、キョウに話しかけている。

「先輩達もお元気そうだなによりです。そう言えば総合A+ランクに合格したんですね?おめでとうございます!!」

「ありがとうティアナ。そっちも頑張ってるみたいじゃなか?聞いてるぜ」

「ありがとうございます」

「ティア、ずるいー!!自分ばかり良い子ぶって!!」

「あんたが騒ぐのがいけないんでしょ?ねえ、ギンガさん?」

「そうね。ふふふ、二人とも仲がよさそうで良かったわ」

それから一同はそれぞれの近況報告を行い、その後は様々な話題でお喋りを続ける。

女性が多いのでお決まりの話題ももちろん上がるのだが……。

「だから、スバルはもてないのよ！！ 少しはギンガさんを見習ったらどうなの？」

「いいもん！！ 私別に恋愛には興味はないし。それよりティアの方が問題じゃない！！ いろんな人に告白されても、うんって言った事ないじゃん！！」

二人は顔立ちも整っており実際、訓練校時代はもとより部隊でも人氣が高い。スバルはその性格から告白前に撃沈させる事が多いのだがティアナはよく告白されることが多いようだ。

「聞いてよ、ギンねえ！！ ティアってばキョウウにいの事がお兄ちゃんみたいだって「スバル、うるさい！！」何よ、ティア！！」

二人は取っ組み合いに発展しそうになる。

「二人とも喧嘩はやめなさい。目立っているわよ?」

「「うう、ごめん(なさい)」」

ギンガが未然に防ぐのだが……。

「分かったのなら良いけど、キョウ君は渡さないわよ? ティアナ」

スバルが言った事に思う所があるのかギンガはティアナに釘をさす。

「ちょ、ちよつと違いますよ!! 先輩ってお兄ちゃんみたいで良いなって言っただけですし!! そういった感情はありません!!」

「キョウは私の兄貴だもんな? 私も渡さねえよ、ティア。なあキョウ?」

「むにゃ? あ? ああ」

キョウはガールズトークには付いていけず、少し居眠りをしていた。アギトの声で目を覚ましてそれに答える。

その後は別の話題に移る。其れは近年巷を騒がせるある事件についてだった。

「以前の空港火災はレリックっていうロストロギアが関わっていたって管理局内では言われていますけど、最近起こっているロストロギアの盗難事件もそれに何か関係しているんでしょうか?」

「あの事件は、私達姉妹もキヨウ君達兄妹にも大きな影響を与えた事件だから、少し調べていたんだけど……。あれはロストロギアの暴走によって起こったと言われているけど、それだけじゃないって気もしているわ」

「ねえ、最近の事件って、槍を持った男が現場でも目撃されているっていう、あの？それってまさか……」

スバルのその言葉でキヨウとギンガとアギトの顔色が曇る。

その事件は最近よく話題に上がっているのだが、その現場で目撃される人物の特徴が、ある人物に似ているのだ。目撃者達の話を統合すると余計にその人物がキヨウ達の恩人に思えてくる。

「あの人がそんなことするわけがねえ！！もし俺達はその事件に関わる事があるなら、犯人を捕まえてあの人の無実を証明する。大体あの人は七年前に……」

「そ、それより、私達、今度陸戦Bの試験を受けるんですよ！！」

キヨウ達が沈んでしまったので、ティアナが話題を変える。

その後はランク試験の話題で盛り上がり、キヨウ達は夕方ごろ386部隊の隊舎を後にした。

キヨウ達が再会を楽しんでいた時、ミッドのある場所で二人の男が会話をしていた。其処は薄暗く、研究施設の内部のような造りの部屋だった。

その男の一人はキヨウ達の恩人であるゼスト・グランガイツでありもう一人は研究者としても次元犯罪者としても有名なジェイル・スカリエツティだった。

「ジェイル・スカリエツティ、俺は何時までこのような事を続けなければならぬ！！」

「ふむ。騎士ゼストよ。君はレリックウエポンとして蘇ったのだよ。私の指示に従ってもらわなくては困る。君にはレリック及びロストロギアの回収という重要な役目を負ってもらっているのだ」

ゼストは死亡したかと思われていたが、スカリエツティにより蘇らされていたのだ。

近年起こるロストロギアの盗難事件の犯人は彼らだったのだ。

「君が従わないのなら、メガーヌ・アルピーノやその娘、ルーテシアがどうなるか分からないのかい？それよりも早く今日行われるロストロギアのオークション会場から目的の物を持ってきてくれない

かい？」

「くっ。外道が!!」

そう言うとゼストは退室する。

「くはははは。地上の英雄と呼ばれた男が人質があるだけでこれほど簡単に言う事を聞くとはね」

「ドクター、ナンバーズの調整は順調です。今稼働中のものも問題なく」

スカリエッティの後ろから紫のロングヘアを持つ女性が現れる。彼が造った戦闘機人『ナンバーズ』の1番目、ウーノである。

「ありがとう、ウーノ。ガジェットの方はどうだい？」

「そちらのほうも現在500機以上が製造されております」

「そうか。ふふふふふ、楽しくなってきたよ。もう少しだ、もう少しで……」

ゼストはその後、オーディション会場からロストログギアを盗み出し
アジトに戻ろうとしていた。
だが、その途中思いもよらない再会を果たす。

キョウ達は386部隊から帰る途中に公園で一度休憩を取る事にした。そこはその日、ロストロギアのオークションが行われている会場に近い場所にあった。

「八時前には隊舎に着きそうだな？」

「そうだね。もう少ししたら出発しましょうか？」

「おい、キョウ、ギンガ！あれって！！」

その場にはキョウ達の恩人にして尊敬する人物、ゼストの姿があった。

「久しいな。キョウ、アギト、ギンガ」

EP39 二つの再会、新たな力 前編（後書き）

すいません、続きは出来れば今夜中にあげたいと思います。
読んでいただきありがとうございます。

Ep40 二つの再会、新たな力 後編（前書き）

テレッテー

ゼストの豪槍が唸り、キョウの拳が炎を燃やす！！

三人の前に突如現れた彼は何故槍を向けるのか！！

此処に悲しき宿命を背負う二人の男の戦いが幕を開ける！！

次回！烈火の拳聖第40話！二つの再会、新たな力！

キョウ「ゼストさん、俺はあなたを超える！」

北斗次回予告風前書です。

次回じゃないですけどお付き合いください。

千葉先生ボイスが脳内で再生された方、友達になりましたよう。

Ep40 二つの再会、新たな力 後編

「久しいな。キョウ、アギト、ギンガ」

公園で休憩を取るキョウ達の前に現れたのは七年前の違法施設の捜査で死んだと思われていたゼストだった。

「うそ、ゼストさん？」

「ゼストさん、生きてらっしゃったんですか？」

「ゼストさん、本当にゼストさん？どうして私達に生きてるって教えてくれなかったんですか！！」

「ああ。ゼスト・グランガイツだ。三人とも大きくなったな」

ゼストが生存していた事を喜ぶ三人は彼の下に駆け寄ろうとする。だがゼストはデバイスを三人の方へ向ける。

「ゼストさん、どうしたんですか？」

「近寄るな。俺はお前達の知る、以前の俺とは違うんだ。先を急ぐのでな、さらばだ」

ゼストはそこから立ち去ろうとする。だが三人はそれを引き止めようと彼に近づく。

「待ってください！ゼストさん！」

キョウがゼストのマントを掴んだ際に彼の懐から黒い箱が落ちる。箱は自然に落ちた衝撃でふたが開き、中には宝石の様なものが入っていた。ただ、普通の宝石と違う事はそれから膨大な魔力が出ている事である。

「ゼストさん、何か落としましたよ？」

キョウがそれをゼストに手渡そうとする。だがギンガがそれを遮る。

「待って、キョウ君。其れは確か、すぐ隣のオークション会場で」

ギンガが言葉を続けようとした時、オークション会場から黒服を着た男達が出てきた。

「待て！！ それは今回のオークションで出品されるべきロストロギアだ！！ 返してもらおう！！」

その場に現れた黒服の一人が声をあげる。

「嫌だと言ったら？」

ゼストが男達に槍を向ける。

「ちょっと待ってください！！ どういう事なんですか！！！！」

ギンガが声を張り上げる。黒服達はオークションの主催者から雇われた魔導師だったようで、全員バリアジャケットを展開し戦闘態勢をとる。

「力づくでも取り戻すまでだ!!」

「何なんだよ？ 一体何が起こってるんだ!!」

キヨウが声をあげている間に黒服達は公園に結界を貼りゼストと闘い始める。

闘いが続くと思われたがゼストが集団を通り過ぎると黒服達は次々と地面に倒れ伏していった。

すさまじい魔力が槍から放出され黒服の男達を打ちのめしたのである。

一瞬にして戦闘が終了したのだ。

恐るべきスピードと威力だった。三人とも何とか攻撃を見る事が出来たが一步も動けなかった。

「お前達もこうなりたくなかったら、俺にかまうな!!」

ゼストがキヨウ達に言い放つ。

「どうしてだよ!!何でこんなことするんだよ!!」

「アギト、言っただろう。以前の俺とは違うのだと」

ゼストがそのまま去ろうとするが、キヨウが彼の前に立つ。

「ゼストさん。どうしてこんなことをするのか、俺達に教えてください!!」

「お前達には関係がない事だ」

「話す気がないというのなら、力づくでも教えてもらいます！いくぞアギト！！」

キョウはアギトとユニゾンしゼストに飛びかかる。

だが、ゼストの槍がキョウの体を捕える。横薙ぎに振られた槍がキョウの胴体に当り、オークション会場の外壁までキョウを吹き飛ばした。

キョウの体は崩れた外壁に埋もれている。

「ゼストさん！！ 何で、何ですか！！」

「三人とも感情を制御できていないな。お前も向かってくるなら容赦はしないぞ」

ゼストはギンガにも槍を向けた。

ギンガもバリアジャケットを展開しゼストに攻撃を仕掛ける。その際、周りに被害が出ないよう結界も貼り直した。

「はあ！！」

「ふん！！」

ゼストの槍がギンガの拳を受け止める。それでもギンガは攻撃を続ける。

「教えてください！！ 何故、こんな事を！！ 盗難事件の犯人はゼストさんなんですか？」

「キョウ達より多少は冷静の様だな……。だが、お前達に語る事はない」

槍で攻撃をはじめながらゼストは答える。その間もギンガは攻撃を繰り返すのだがゼストをとらえきれないでいた。ゼストがギンガの攻撃をはじめ、彼女に槍を振り下ろす。

「きゃあー!!」

「眠れ、ギンガ」

「「やめろー！ー！ー！ー!!!!」」

キョウが二人の間に割り込む。二人が打ち合っている間に近くまで移動していたのだ。『フランメ・ファウスト?』がゼストの槍を受け止めている。

ゼストの槍をキョウは何とか受け止めているが長くはもたなそうだ。

「キョウ君!!」

「お前も成長しているな。少しは冷静になったようだな」

「「何故です、理由を教えてください!!」話せば俺達でもどうにか出来る事があるかもしれない!!」」

「話す事はないと言っている。二人がかりでも良い、来るなら来い」

キョウはゼストの槍を押し返しギンガと共に距離をとる。

「「いくぜギンガ!!」」

「うん!!」

「うおおおおお！！！！」

「たああああああ！！！！」

キヨウとギンガは二人でゼストに攻めかかる。二人は幼い時からとにも鍛錬を行ってきたので初めてインファイトの連携をとったのだが、初めてとは思えないほど息があっただい。

鋭い拳や蹴りの連打がゼストを襲う。

だが、ゼストは一本の槍だけでそれを防いでいた。

ゼストはSランク魔導師である。魔導師とはその魔力や魔法の腕が評価されがちであるが、ゼストは違う。

もちろん魔力や魔法運用も優れているのだが、彼の強さを支えているのはベルカの騎士としてのその槍や武術の腕前なのである。

「俺達は、あなたのような管理局員になるために今まで鍛えてきたんだ！！」

「ミッドの平和を守るために付けた力をあなたに向けるなんて！！ゼストさん、お願いです！何故こんな事をするのか教えてくださいー！！」

「くどい！！」

ゼストの槍が高速で振るわれる。キヨウ達の猛攻をはじき、二人に向かい槍の連打が襲いかかる。

その縦横無尽の攻撃は防ぐことも避けることも困難なものだった。ゼストは一人で二人を圧倒する。

「ぐわあああ!!」

「キヨウ君? きゃあああ!!」

キヨウとギンガはゼストの攻撃で吹き飛ばす。ギンガは近くにあったベンチに突っ込み、それを破壊し地面に叩きつけられる。ギンガが叩きつけられた地面には5mほどのクレーターが出来ていた。

キヨウは近くの自動販売機に突っ込むが、それだけでは勢いが殺されておらず、その後ろの林の方まで吹っ飛ばす。キヨウが通った所は木々が倒れていた。

「もう立つな。これ以上お前達に槍を向けたくはない」

再度ゼストは立ち去ろうとする。ギンガはダメージにより立ち上がれそうにない。

だがキヨウは林を抜け空からゼストの下にやってきた。

ゼストの前に着地をし、構えをとる。だが体中至る所から血を流しており満身創痍の状態だった。

最初に槍を喰らった場所も骨が折れているようであり、白いバリアジャケットにも血が滲んでいる。気力だけで立っているようなものだ。

「キヨウ君、やめて!!これ以上やったら死んじゃうよ!!」

「がはっ!行かせない!理由を聞くまでは絶対、ここから先には行かせない!!」

血を吐きながらキヨウは言う。内臓も痛めているようだ。ギンガがキヨウを心配し声を出すが闘志は衰えていないようだ。

「ぐつ、あなたは俺達の憧れなんだ！！俺の使える最高の技であな
たを止める！！」

「退いてはくれないか……。ならばその礼に応じよう。完膚なきま
で叩き伏せる！！」

ゼストも構えをとる。其れは以前キヨウと立ち合った時と同じ構え
であった。

「うおおおおおお！！」

キヨウの体からは炎が噴き上がる。キヨウの切り札『裏百八式・大
蛇薙』だ。その独特の構えをとりゼストへ向かう。

「喰らいやがれええええええええええ！！！！」

「はああああああああ！！！！」

二人が一瞬で交差し周りにはすさまじい衝撃が走る。

公園の木々はその衝撃で葉を散らしていた。

キヨウとゼストは10mほどの距離を開け背を向けて立っていた。
だが二人のうち、片方がその場に倒れる。

「なかなかやるようになった。だが、まだまだだな」

「ぐわああああ！！！！」

倒れたのはキヨウの方だった。ユニゾンもバリアジャケットも解け
アギトはキヨウの上につぶせて倒れ伏している。

ゼストはギンガへ歩み寄る。そして彼女にこう告げる。

「お前達三人は本当に強くなったな。その成長していく様を見る事が出来なかった事を悔しく思う。もう俺に関わるな」

「うっ、待つてください！！ 待つて下さいよ、ゼストさん！！」

ゼストはそう言い残すと何処かに去っていった。

「くう、キヨウ君、アギトちゃん……」

ギンガはゼストが去った後、ふらふらの状態でキヨウ達の下に向かう。

二人の下にたどり着き様子を見たが、キヨウとアギトは意識がないようだ。

「うそ、そんな？ キヨウ君！！ アギトちゃん！！ いやああああああああああああ！！」

三人しかいない公園にはギンガの悲鳴が響き渡った。

その後、三人は医療センターに搬送された。ギンガは三人の中でも比較的軽症の様で意識は保っていた。アギトも搬送され数時間後に意識を取り戻し、駆けつけたシャーリーとマリーによりメンテナンスが行われる事となった。

だがキヨウはその日、目覚める事がなかった。心配して駆けつけたソウジやクイント、仕事上がりそのまま駆けつけたゲンヤやスバルの見守る中、キヨウは病室のベッドの中で眠り続けていた。翌日になってもキヨウは目覚めていない。

医師の話では何時目覚めるか分からないらしい。

アギトは本局のデバイス用の機材が整えられている場所に移動していたのでキヨウの近くにはいない。治療を受けてある程度動けるようになったギンガはキヨウの病室でソウジと共に彼を見守っている。

夜になってもキヨウは目覚めない。

見舞いの終了時刻となりソウジは病室を後にしたがギンガはキヨウのベッドの隣に椅子を置いて座り、その場所から動かなかった。

キヨウの手を握り彼女は語りかける。

「こんなにボロボロになっちゃったんだね」

キヨウの体には沢山の包帯が巻かれていた。その手も包帯で覆われている。

「あんなに力強い拳もこんなになっちゃって……。私に向けてくれるあの優しい笑顔も、もう見れないのかな……。あの優しい声も聞

けないのかな……」

ギンガは何時しか涙を浮かべていた。

「ねえ、キョウ君。目を覚ましてよ！あの優しい笑顔を、声をもう一度見せてよ！聞かせてよ！」

ギンガはキョウに縋りついて泣いていた。

（真つ暗だ。何も聞こえない。あれから俺はどうなったんだ？そうか、ゼストさんと戦って負けたんだ。でも本当にここはどこなんだ？なんにもないな。もしかして、俺。

くそっ！まだ死ぬわけにはいかない。まだ助けていない人もいるのに、それにギンガやアギトと一緒にいたいんだ。親父やおっちゃん、クイントさん、それにみんなにもまだ恩返しができるねえのに！死にたくない！まだやり残したことも沢山あるんだ、もっとギンガ

やみんなと一緒にいたい!!

何だ、あれ？暖かい光が見える。この手のぬくもりは何だ？ギンガの声も聞こえてくる。ギンガ！ギンガああああ!!（）

「キョウ君！お願いだから目を覚ましてよ!!!!!!!!!!」

ギンガの涙がキョウの頬に落ちる。

その時キョウの瞼が開いた。

「う、うん？ギ、ギンガ」

「キョウ君!!キョウ君!!」

「ギンガ、会いたかった。眠ってるときにお前の声が聞こえたんだ」

「うん」

「いろんな人たちの事が思い浮かんだんだ。でも一番先に思い浮かんだのはお前だったんだ」

「うん」

「会いたかった。俺、生きてるんだな？」

「うん、そつだよ。キョウ君は生きてるよ」

「ギンガ、愛してる。心から……」

「キョウ君!!」

二人は誰もいない病室で口づけを交わす。

その後すぐにギンガはキョウが意識を取り戻した事を連絡し、医師達が駆けつける。

夜だというのにソウジやゲンヤ、クイント、スバル、それ以外にも部隊や訓練校、小学校で知り合った人達が駆けつけて来てくれた。それから数日間、何人もの人がキョウとギンガの下に見舞いに来た。

戦闘機人の肉体のせいか、ギンガの怪我は驚異的なスピードで治っていき、一週間で退院する事が出来た。

退院後も毎日キョウの看病をしに駆けつけるようになった。

キョウはあれほどの怪我だったが全治三カ月とのことだった。

ゼストが急所を避けてくれていたらしい。

三人とも後遺症は残らないようだ。

キョウは生身の人間とは思えないほどの治癒力を持っているのか三カ月と言われていた所が一カ月に短縮されるようになった。

医師の話に因れば、人造魔導師として調整されている影響ではないかということだった。

アギトは本局での調整作業が続いているようで、一か月程は戻ってこないらしい。

キョウの退院の時期と重なるようだった。

キョウが入院して二週間が経った頃、ある人物が病室を訪れた。その日はギンガも非番だったのか、一日着いている事が出来るらしく朝から病室に来ていた。

リンゴの皮をむき、キョウに食べさせようとしていた。

「はい、キョウ君。あ〜ん」

「お、おう。あ〜ん」

「ごほん、失礼。お邪魔だったかな？」

その人物は地上の英雄と名高いレジアス・ゲイズだった。

「「すみません！！ 見苦しいところをお見せしたようで！！」」

二人は慌てて敬礼をとった。

「二人ともけが人なんだ。楽にしている構わん」

レジアスの言葉で二人は敬礼を解いた。

「お前がソウジの息子か？」

「はい、キョウ・アーデルハイド陸曹長であります」

「そうか。お前の親父とは古い付き合いでな。それでおまえは？」

「ギンガ・ナカジマ陸曹長であります」

「元ゼスト隊のナカジマの娘か。ゼストの関係者ばかりだな、ここは。ワシはゼストとソウジと同期だったんだ」

「そうなのでありますか？」

「ああ。二人に聞きたい事があって此処に来たんだが、お前達と戦ったのはゼストなのだな？」

「はい、そうであります」

「私達の事を知っていたのでゼストさんに違いありません」

「そうか、アイツは生きていたか。良かった……」

「ゲイズ閣下、ゼストさんはロストロギアの盗難事件と何か関わりがあるのでしょうか？あの時もオークション会場から……」

キヨウはずつと気になっていた事をレジアスに尋ねた。
レジアスは悲痛な面持ちで答える。

「ああ。複数の目撃証言や同一の手口から時空管理局はアイツを容疑者として捜査を進めていく事と決まった。何かの間違いであってほしいのだが……」

「そんな……」

「ゼストさんが容疑者だなんて……」

三人の表情が曇る。レジアスは話を続ける。

「二人にはそれとは別件で頼みたい事があったのだ」

「何でしょうか。私達のような一般の隊員に閣下から頼み事とは」

キヨウが尋ねる。

「二人には半年後にある部隊に出向してもらいたいのだ。八神はやて二等陸佐が部隊長を務める事となる古代遺物管理部 機動六課にな」

「機動六課……」

「うむ。其処は地上にありながら本局からの影響がかなり強い部隊になりそうなのだ。そこで二人には出向して地上の現状を理解させて欲しいのだ。もちろん指揮系統は向こうになるが、地上本部からの命令を優先させるようにする」

「首輪ということでしょうか？でも私達に務まるでしょうか？」

ギンガが不安に思い聞く。

「君たちに頼みたい。ゼストの遺志を継ごうと努力してきた君達にお願いしたいのだ。ソウジとゼストとワシの想いを引き継いでくれている君達に」

レジアスが一般隊員である二人に頭を下げた。

二人はそれを引き受け半年後に機動六課に出向することとなった。もちろんアギトも一緒に。

レジアスはその後、時間の許す限りソウジとゼストの思い出を二人に話し病室を後にした。

キヨウは退院後、三ヶ月間なまつた体を鍛え直すため休職した。他の108部隊員やゲンヤもそれを快く認めた。それまでの功績や半年後の出向を考慮してくれたのだ。

キヨウは鍛え直す事と同時にソウジに新たな奥義の稽古を付けてもらっていた。

怪我から治り復帰したアギトもキヨウと共に休職し修行に付き合った。

「この奥義は愛するものを守りたいという想いが極限まで高まらな
いと会得できない技と言われている」

「愛するものを守りたいという想い」

「ああ。『最終決戦奥義・無式』じゃ。以前、お前が免許皆伝の際に最後に放った技だ。未完成じゃったがな」

「それを会得したらゼストさんを止める事が出来るのか？」

「出来るのかじゃない！止めるんじゃない！ワシやレジアスの代わりにお前達の手でヤツを止めてくれ！」

その三ヶ月間は今までとは比べ物にならないほどハードな修行が行われた。

ソウジは心を鬼にして二人に当り、キョウ達も弱音を吐く事なく修行に明け暮れた。

そして三カ月が経った。

「いくぜアギト！！」

「ああ！！」

「ユニゾン・イン！！」

キョウとアギトがユニゾンをして技を放つ。

「見せてやるぜ！！草薙の拳をおおおお！！！」

キョウは目の前に火柱を放つ。それを突っ切りながら身体に炎を纏わせて六回の『毒咬み』、拳を振り上げる技『罪詠み』を三回、反

回転しながら飛び上がりつつの肘打ち『罰詠み』を三回、そこから『鬼焼き』に繋げる。

「みごとじゃー!」

『最終決戦奥義・無式』を完成させたのだ。

キョウは技を放つと、力を使い果たしたのか片膝をついた。

「はあ、はあ。なんとか物に出来たな」

それからソウジに全力は本当に愛する物を守りたい場面でしか使うなど指示され、幾つか技を減らした簡易版『無式』の練習もさせられた。

それは火柱から四回の『毒咬み』に繋ぐという、キョウが不完全ながら放った物に近い物となった。

簡易版ですら力を消耗するらしく、ユニゾン状態でしか使えない技となった。

キョウとアギトは新しい力を手に入れる事に成功した。

それから復職しあつという間に三カ月が過ぎた。ギンガもゼストとの戦闘の傷が癒えてから修行を積んだらしく、かなり実力を伸ばしているようだった。

三人は機動六課に向向していく。

「三人とも頑張つてこいよ!!」

ゲンヤや108部隊の仲間達に見送られ三人はバイクで機動六課へ向かっていくのだった。

Ep40 二つの再会、新たな力 後編（後書き）

ゼストを強くしすぎたかもしれません。

キヨウの最初の吹っ飛ばされっぷりはセ ゲームのサタンばりです。キヨウも弱くないですよ。一般的な魔導師となら、魔法発動する前に近付いてボコボコに出来る位の実力はあります。

魔法であまり攻撃しないので攻撃時の隙はあまりないんです。やっと、『無式』が出せた。

この技は大好きで絶対に使わせようと思っていました。

次回からいよいよ本編に入ります。

ここまで長かった。

詠んでいただきありがとうございます。

Ep41 出向！機動六課（前書き）

いよいよ本編に入ります。

なるべく矛盾を少なくし、オリジナル設定とのバランスを取るよう頑張ります！！

はやて「やっと私の出番が来たー！！」

Ep41 出向！機動六課

時空管理局本局・古代遺物管理部・機動六課。

それがキヨウ達三人の出向する部隊の正式名称である。

その部隊の部隊長室には二人の人物がいた。

一人はデスクに座り、何やら資料の様なものに目を通してている。茶色いショートヘアーにクロスさせたヘアピンを付けた10代後半の女性であった。

その女性こそ機動六課の部隊長である八神はやて二等陸佐だった。もう一人は色素の薄い青紫の髪で眼鏡をかけた男性だった。デスクを挟み、女性に向かいあい立っている。二人は何やら会話をしているようである。

「これが今日からうちの部隊に配属される三人のデータか」

「はい。キヨウ・アーデルハイド空曹長、アギト・アーデルハイド陸曹長、並びにギンガ・ナカジマ陸曹長です。もう間もなく隊舎へ到着すると思われます」

「それぞれ総合A+に空戦A+、陸戦A+ランクかあ。ようこんだけの魔導師を派遣するなんて事が通ったね？ ギンガはスバルのお姉ちゃんか。それにこの子とこの子は魔力変換資質持ちでユニゾンデバイスとそのマスター……」

「地上本部から辞令が108部隊に渡っていたそうです。何でも、レジアス・ゲイズ中將から直接指示されたとのことですが」

「何や？う ちの部隊に対する地上からの首輪みたいなもんなんか？」

男性の言葉にはやては顔をしかめる。

「三人とも私の友人であり信用できる人物達です!!」

冷静そうな男性が大きな声を出し、はやては一瞬だけビクツとする。その後すぐに、しかめっ面から普段の表情に戻る。

「三人ともシャーリーと一緒に、グリフィス君の幼馴染なんやてね？」

そう、はやてと会話していた人物。其れはキョウ達の幼馴染であり無二の親友、グリフィス・ロウランであった。

「はい。彼らと同じ部隊で働ける事を嬉しく思っています」

「そうか。私にとってのなのはちゃんや、フェイトちゃんってことか。良かったなグリフィス君」

はやては笑顔になりグリフィスに言葉を掛ける。

機動六課の隊舎前には五人の人影があつた。

二人の人物が先を歩き、その後ろから三人の人物が歩いている。先を歩く二人の人物はスバルとティアナ。キヨウ達の後輩であり、彼らより先にこの機動六課に配属になっていたのだ。

「おーい！！ エリオ、キャラ！！ 早く来ないと置いてくよ！！」

「はあ、はあ。待つてください、スバルさん！！」

「こら、スバル。二人は私達より小さいんだから少しは待つてあげなさいよ！！」

「スバルさんも、ティアナさんも凄いです。なのはさんの教導の後もあれだけ元気があるなんて……」

スバルとティアナより少し遅れ10歳位の男の子と女の子が歩いている。

「二人ともキャラやエリオより大きいってのもあるけど、ここに来る前から自分たちで訓練を行っていたみたいだから体力があるんだよ。頑張れば二人にも追いつけるから大丈夫！！」

女の子に声をかけた女性。明るい茶色の髪をサイドポニーにしたそ

の女性は、高町なのは。空港火災の際にスバルを助けてくれた恩人である。
五人が隊舎の正面に差し掛かった時、一台のバイクがそこに停まった。

「ティア、もしかして？」

「先輩！！ アギトさん！！ ギンガさん！！」

「よう、久しぶり！！」

運転していた男性がヘルメットを外し声を掛ける。後ろに乗っていた女性も彼に続く。

「元気そうね。スバル、ティアナ」

「元気だったか？ 二人とも！！」

男性の肩に襟を掴んで座っていた少女もスバルとティアナに声をかけた。

その三人とはキョウと、アギトと、ギンガだった。

五人のうち最後尾を歩いていたなのはも三人に声を掛ける。

「久しぶりだね、三人とも。元気そうじゃない」

「……お久しぶりです、なのはさん！！」「……」

三人はバイクから降り敬礼をとる。

「今日から同じ部隊で働くんだから畏まらなくても良いよ」

なのはの言葉にキョウ達は敬礼を解く。

「なのはさん、あの人たちは？」

エリオと呼ばれた少年がなのはに尋ねる。だがそれが耳に入ったキョウが自己紹介を始める。

「俺は本日付でこの機動六課に出向するキョウ・アーデルハイド陸曹長だ。そんでコイツが妹のアギト」

「アギト・アーデルハイド陸曹長だ！！ よろしくな、ちびっこ！
」

「アギトちゃん、初対面の子にちびっこって言うてはだめよ。ごめんね。私はスバルの姉のギンガ・ナカジマっていいいます。階級は陸曹長よ。よろしくね」

ギンガは先ほどエリオと呼ばれていた少年にほほ笑む。その少年は頬を染め、自己紹介を返す。

「自分はエリオ・モンディアル三等陸士であります。みなさんよろしくお願ひします」

「エリオ君か。ちゃんと自己紹介できて偉いね」

エリオの様子が可愛らしかったのか、ギンガは彼の頭を撫でる。エリオはさらに顔を赤くする。

「もう！！ エリオ君！！」

そんなエリオの様子を見て、桃色の髪を持ち、小さい龍を従えた少女が彼に声をかけ正気に戻す。そして彼女もキョウ達に自己紹介をする。

「キャラ・ル・ルシエ三等陸士です。よろしくお願いします。この子は私の使役龍のフリードリヒです。フリードって呼んであげてください。フリード」

「きゅるー!!」

キャラロの言葉にフリードも挨拶のつもりか声をあげる。

「あなたも小さいのに偉いわ、よろしくね。キャラちゃん」

ギンガはキャラロの頭もつつい撫でてしまう。エリオとキャラロの姿はギンガの母性本能を刺激したのだろうか。キョウもギンガの様子を笑顔で眺めていた。

「お前、フリードっていうのか。なかなか賢そうなやつじゃねえか!! 私アギトだ、よろしくな!!」

「きゅるるー!!」

アギトもフリードと打ち解けているようだった。

「先輩、同じ部隊で一緒に働けるなんて感激です!!」

「そう言ってくれると嬉しいぜ、ティアナ」

「ティア、またいい子ぶってる！！ キョウにい、私だつてすつごく嬉しいんだよ！！」

「あははは、スバルもありがとうな」

キャロとエリオに付きっきりのギンガに対して、キョウはスバル達から声を掛けられる。

二人の言葉に喜んだキョウは、スバルとティアナの頭を撫でた。スバルは幼い頃のように身体全体で喜びを表していたし、ティアナも頬を染めて為されるがままになっている。

「キョウ君達、再会を楽しんでいる所を邪魔するようで悪いんだけど……。部隊長室ではやてちゃんが待っているから行ってあげて」

「はい、すみません。なのはさん。行くぜ、二人とも！！」

キョウはなのはの言葉で用件を思い出しギンガとアギトを連れ、隊舎に入ってしまった。

「二人とも、せっかくだから部隊長室まで案内したら？」

「ありがとうございます、なのはさん！！ 待ってよ、みんなー！！」

スバルは礼を言うとキョウ達の下に駆け出す。

「はあ、少しは落ち着きなさいよ。なのはさん、ありがとうございます！
ます。行ってきます」

ティアナもスバルの様子に呆れつつなのはに礼を言って彼女の後を

追った。何だかんだ言っただけでティアナの後ろ姿も嬉しそうに感じられた。

「あれがスバルさん達が憧れているって言っていた人たちですか？」
エリオがなのはに尋ねる。

「そうだよ、これからは同じ部隊だから仲良くしていこうね。ふたりとも」

「はい!!」「」

なのはの言葉にエリオとキャラは元気良く返事をした。その後三人も隊舎に戻っていった。

「此処が部隊長室だよ、ギンねえ」

「ありがとう、スバル」

「じゃあ、私達はまだ仕事がありますので失礼します。行くわよ、スバル！！」

「ギンねえも、アギちゃんもキヨウにいもまた後でね！！」

「うん！！ また後でなあー！！」

スバル達はキヨウ達を案内すると去っていった。アギトは二人に声をあげ、手を振っていた。

キヨウ達二人は部隊長室に着くとはやてに挨拶を済ませる。その後、機動六課についての説明等を受ける筈だった。

室内にはキヨウ達とはやて以外にも、グリフィスとシャーリーがいた。

二人はキヨウ達が挨拶を済ませると、我慢できずに話しかけてしまい、説明が開始されるまで五分程お喋りをしてしまった。

五人の会話の内容は、シャーリーに対してのデバイスの礼だったり、入院後に後遺症が出ていないということや同じ部隊で働けてうれしいなどのことだった。

シャーリーには見舞いに来てくれた際に一度礼をしていたのだが、再度キヨウ達は礼をした。

五人はその後、気付いてはやてに謝罪をしたが、彼女は気にしない

で良いと微笑んで答えてくれた。

「幼馴染が久しぶりに揃ったんやろ？ 邪魔すんのは無粋やから……。でも、時と場所を考えような？」

もちろん釘をさす事も忘れなかった。伊達に若くして部隊を持つ人物ではないようだ。

キョウ達ははやてにもう一度謝罪をする。

それが終わると機動六課についての説明がグリフィスとシャーリーによって行われた。

施設の説明だったり、命令系統や小隊の編成などが中心だった。

粗方の説明が終わると、はやてがキョウ達に声を掛ける。

「三人ともうちの部隊の命令系統に組み込まれてはいるけど、地上からの命令を優先させるってことになってるんよ。単刀直入に聞くけど、レジアス中將からこの部隊の情報を盗んでこいとかそういう命令を受けていないんか？」

はやては三人の事を疑っているようだ。いきなり直球が来るとは思っていないかった三人は面を喰らうが、はやての言葉に対し一番早く立ち直ったキョウが答える。

「そういつた命令は一切受けておりません。中將は地上の現況を理解する私達を、本局の影響が強いこの部隊に入れる事で、本局と地上の連携を少しでも取りやすくしようとお考えになられているのであります」

本局と地上の連携が治安維持に繋がると考えているキョウは出来るだけ包み隠さず答える。治安の維持、其れはソウジ達の誓いを果たすことにも大きく関わってくるからだ。

情報に関してだが、盗むつもりは元々無い。正規の手段で手に入れた情報をレジアスのもとに定期連絡として送ると説明する。六課の情報を送る事も仕事のうちだが、上げ足を取る為ではなく連携強化の為だという事も伝える。

六課の情報の取り扱いに対しての件を聞き、はやては僅かばかり顔をゆがめる。キヨウの言う事は所詮は綺麗事にすぎないからだ。

しかしキヨウは続ける。

キヨウ自身も地上と本局の軋轢は肌で感じた事が有ったのだが、双方が手を取り合う事でミッドが平和になるならその方が良いと考えているのだ。

そしてレジアスも自分と同じ考えを持っているとはやてに力説する。その頃にはギンガもアギトも普段の長を取り戻しており、キヨウと共に話しに参加するのだった。

「今までの話に何か裏はないんか？」

「はい。今まで中将は地上の治安を少しでも良くしようと努力してこられたのであります。その為にはこれから本局と地上が歩み寄りなければならぬとお考えのようです。それに中将は私の父や我々の恩人であるゼストさんとともに若い頃に誓った事を忘れてはいらっしゃいません」

「誓い？ それはどんな誓いや？」

レジアスがキヨウの父やゼストと共に誓いをたてたという事にはやては興味を示す。話を聞いている時の目が先ほどまでとは比べ物にならないほど真剣なものになっていたからだ。

「自分達の力でミッドの平和を守り、助けを求める人たちに手を差し伸べようという事であります。自分達三人も先達三人の意志を受け継ごうと努力をしております」

「ホンマか？」

はやてはキヨウ達三人の目をじっと見つめる。

「はい！！！！」

三人の力の籠もった返事を聞き、はやては笑顔になる。

「疑ってしもうて、本当にすまんかった。高ランクの魔導師を一遍に三人も送ってきたから、何か裏があるんかって思ったんや。これから三人ともよろしくお願いします」

はやてがキヨウ達に頭を下げた。キヨウ達は慌ててはやてを止める。

「ええんや、三人を試すような事もしてしまったんやから」

その後、部隊長室では様々な話が行われた。雑談ではなく、当然仕事関係の内容だが。

キヨウ達の入院の原因もはやての耳に入っていたらしく、その事にも聞かれた。

それから一連の事件の話にもなり、恩人であるゼストがこれ以上罪を重ねて欲しくないとキヨウ達ははやてに語った。シャーリー達もゼストとは面識があったのでその話の間、二人の表情は暗かった。

「はやてちゃん！！ 新しく部隊に配属される人たちはきたですかー？」

事件の話の終了後、沈んだ雰囲気吹き飛ばすような元気な声が部屋に響く。

ドアの方から水色のロングヘアを靡かせアギトと変わらない位のサイズの少女が部屋に飛び込んできた。

「行儀が悪いで、リイン」

はやてが彼女に注意する。だがその少女のお陰で、部屋の雰囲気は明るいものへと一変した。

「うう。ごめんなさいです。この人たちが新しく来た人たちですか？」

リインと呼ばれた少女は部屋にいる一同に謝罪した後、キヨウ達に視線を向ける。

「そうや。キヨウ・アーデルハイド陸曹長に、その妹のアギト陸曹長。スバルのお姉さんのギンガ・ナカジマ陸曹長の三人や。この子はうちの末っ子の『リインフォース?』。アギトちゃんと同じや」

はやての言葉に反応しアギトはリインに自己紹介をする。

「私はアギト・アーデルハイド陸曹長であります。よろしくお願ひします」

「はあ、礼儀正しい人ですう。リインは『リインフォース?』と云います。三人とも私と同じ階級ですか。リインと呼んでくださいです」

「私と同じ階級なのか？　ならリンって呼ばせてもらっぜー！
私の事はアギトで良いから、これからよろしくなー！」

「さっきと喋り方が全然違うです。よろしくです、アギトちゃん！
！」

二人のやり取りを部屋にいた一同は微笑ましく思っ見ていた。

その後、キョウとギンガもリンに挨拶をすませる。キョウはさん
付けで、ギンガはちゃん付けでリンから呼ばれる事となった。

はやくも自分の事は公式な場以外では気軽に名前で呼んでくれと言
った。アギトとギンガはすぐ受け入れたが、キョウは何故か頑なに
『八神さん』としか呼ぼうとはしなかった。

キョウ達は部隊長室を後にすると隊舎内や施設の見学を行った。その日は見学が終わると好きにしていとのこと、他の部隊員達との顔合わせは翌日の朝礼で時間がとられる事となった。オフィスではスバル達と会い、少しの間会話を行ったりしていた。ガレージの方へ向かうと一人の男性隊員と出くわした。

「お前達、見ない顔だな？ 新人か？」

「自分は本日よりここ機動六課に出向してまいりました、キョウ・アーデルハイド陸曹長であります」

「同じくギンガ・ナカジマ陸曹長であります」

「アギト・アーデルハイド陸曹長であります」

キョウ達が敬礼をとると、その男性局員は慌てて敬礼をとった。

「失礼いたしました。自分はヴァイス・グランセニック陸曹であります！！ 無礼をお許してください」

「いえ、初対面ですし仕方がないですよ。それにヴァイス陸曹は我々より年長者ですのでヴァイスさんと呼ばせてください。我々は呼び捨てで構いませんから。なあ？」

「うん。ヴァイスさん、よろしく！！」

「はい。普段通りの喋り方で構いませんから」

キョウ達三人はソウジによって年長者や目上の人物を敬う様にしっ

かり教育されているようだ。ただし、ある程度親しくなれば言葉遣いを崩すのだが。ソウジもそれに対しては何も言わないので黙認しているのである。

「それじゃあお言葉に甘えて。三人ともよろしくな！！ アギトはもう呼んでるみたいだけど、さん付けで構わねえぞ」

その後、キョウ達とヴァイスは雑談をし、打ち解けていった。特にキョウとヴァイスは二人ともバイクを持っていたので、それが共通の話題となり盛り上がっていた。

それからヴァイスと別れたキョウ達は他の施設等も見学を済ませ、その日の予定は終了した。

寮についてはキョウは一人で男性寮に入る事となり、ギンガとアギトが女性寮で同室という事となった。

隊長陣ははやとなのは以外はその日は出払っているようで会う事は叶わなかった。

夕飯を食堂で済ませると、三人は寮に入って休む事としその日一日を終えた。

E p 4 1 出向！機動六課（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

原作と違い、エリオがギンガに対して少し憧れを持った様なので、今後にご期待下さい。

リンとアギトも仲が悪くないです。

キョウがはやてを八神と呼ぶ理由？

モデルとなった人物を意識してみただけで深い理由はありません。オリ主じゃないのに『ニコポ』装備のギンガさんって……。

Ep42 ファーストアライト前編(前書き)

オリジナルの要素も加えていますので違和感があるかもしれませんが、お付き合いください。

誤字脱字等がありましたら指摘くださると助かります。
勝手にランキングという物を貼ってみました。

評価や感想も戴けると嬉しいです。

キヨウ達が機動六課に出向した翌日。

三人は朝礼ではやてにより部隊員達に紹介された。キヨウ達が合流したのは機動六課が始動して一週間ほど経っていた時期だったので、遅れて合流する三人に部隊員達の注目は集まっていた。キヨウ達が自己紹介を済ませるとはやてが話を続ける。

「ということ、この三人は本日より機動六課のメンバーとなります。でも正式に参加するわけではなくて108部隊からの応援ってことになってるから予備戦力ってことやな。この三人は地上の命令が最優先される事になってる。平時は新人たちの訓練の補佐やデスクワークも行ってもらう事になってるから、早く馴染める様にみんなも協力してあげてな。じゃあ本日の朝礼は以上や。時間になったらそれぞれの仕事を始めてな」

はやての言葉で朝礼が終了するとキヨウ達は新人たちと共に食堂へ向かおうとした。だが、それを呼びとめる者達が居た。ある人物がキヨウに声を掛ける。

「アーデルハイドとアギトか。久しいな」

「シグナム三尉ですか？」

キヨウを呼びとめた人物。其れは以前試験で模擬戦を行ったシグナムだった。シグナムの隣には金髪のロングヘアの女性と、赤い髪のお下げの少女が立っていた。少女はギンガに声を掛ける。

「ナカジマも元気にやっってるみたいだな」

「はい、おかげさまで。ヴィータ准尉、ご無沙汰しています」

「ねえ。シグナム、ヴィータ、三人とは知り合いなの？」

「ああ、テストロッサ。アーデルハイド兄妹は以前、ランク試験の試験官を頼まれたときに一度手合わせをしているんだ。アーデルハイド。こちらはフェイト・Ｔハラオウン執務官だ。私の所属するフォワードの『ライトニング分隊』の隊長をしている。それと私は今は二尉だ。三人とも私の事はシグナムと呼んで構わん」

「フェイト・Ｔ・ハラオウンです。三人ともこれからよろしくね。私の事もフェイトで良いから」

「ナカジマ。私も今は三尉だぞ。フェイト、私とギンガもその時のランク試験で会ってるんだ。私がギンガの試験官だったんだからな。私も新人たちの訓練を見るから、訓練の際はお前達の直属の上司として立場に近いかもな。三人ともよろしくな。私を呼ぶ時もヴィータで良いぞ」

「自分の事もキョウと呼んでください。名字だとアギトとややこしくなりますので」

「アギト・アーデルハイドです。アギトと呼んでください」

「私も名字だと妹と被るのでギンガとお呼びください。三人とも至らない点もございますがよろしくお願いします」

前日に会わなかった隊長陣との顔合わせが終わると、キョウ達は食堂に入っていった。

「キョウ・アーデルハイド。この名前、以前どこかで……」

キョウ達が去った後、フェイトが呟く。

「キョウがどうかしたか？ テスタロッサ」

「いえ、キョウ君の名を聞いた事のある様な気がして。何でもありません。私達も行きましょう」

「わあ、ギンガさんってスバルさんのお姉さんだけあって……」

「キャラロ！！ それ以上先は言っな！！」

キヨウ達は新人たちと共に食事をとっていた。ナカジマ姉妹とエリオの前には大量の食事が並んでいる。キャラロがギンガの食事の量に驚いて、その量を指摘しようとしたのをキヨウが止めた。キャラロはキヨウの剣幕に少し驚いている。

「ふえっ？は、はい！！」

「先輩！！ キャロが驚いているじゃないですか！！」

「ティアナ、ワリい。いや、幾度となく俺が犠牲になってるからその被害を「キヨウ君？ 何か？」いえ、何でもありませんよ、ギンガさん」

「いつもとあんまり変わらないね。なんか懐かしいな。ねえ、アギちゃん？」

「そうだな、スバル。ゲンヤのおっちゃんとクイントさんを見てる様だぜ」

場所が違ってもキヨウ達のやり取りは何時も通りだった。

「エリオもよくそんな小さい体に入るよな？ 俺でもそんなに食べらんねえぜ」

「そうですか？いつもこの位食べていますけど……」

「育ち盛りなんだから沢山食べても良いのよ。貧弱なキヨウ君みた

いにならないようにエリオ君は沢山食べて大きくなりなさいね」

ギンガがエリオの頭を撫でながら言い放つ。エリオは照れて顔を真っ赤に染めていた。

「私も早く大きくなってくっちゃ。スバルさん、それ分けてもらっても良いですか？」

「良いよ、キャラ。はいどうぞ!!」

キャラはエリオの姿に焦りを持ったのか食べる量を増やす。

「俺ってそこまで貧弱かな？」

「いえ、先輩の食事の量は一般的な量ですし。力だって結構強いじゃないですか」

「だよな。この後訓練なんだろう？みんな、動ける位にしとけよ」

賑やかな朝食の風景だった。

食事を済ませたキョウ達三人と新人たちは、なのはとヴィータと共に訓練場に来ていた。

「新人たちは知ってると思うけどキョウ君達は施設の事、大丈夫？」

「はい。昨日見学の際に説明を受けてますから」

「なら、新人たちの参考にしたから突然で悪いんだけど、ちょっと三人の動きを見せてもらっても良いかな？」

「構いませんよ。ギンガもアギトも良いよな？」

「うん。私は良いよ」

「私だつて行けるぜ!!」

「ユニゾン状態だと参考にし辛いからアギトちゃんには待機していて欲しいんだ。キョウ君とギンガちゃんに模擬戦をやってみて」

「ちえ、仲間はずれかよ」

「まあまあ、アギト。今回だけじゃないんだから。アギトがすいません、なのはさん。了解しました」

「了解です!!」

「それじゃあ、アギトと新人たちはキョウとギンガの模擬戦の見学な！私となのはに付いてこいよ！」

ヴィータの指示で新人たちは移動する。キョウはシミュレーターに

ギンガと共に向かった。

それから二人は互いにシューターを打ち合ったり、ミッド式に近い闘いを行った。普段と違い、距離をとって魔法中心の闘いを繰り広げているのだ。

「なんか二人ともらしくない戦い方をしているね、ティアア？」

「私達新人に分かりやすいようにああしているんじゃないの？」

スバル達の言葉を耳にしたのはがキョウウ達に通信を送る。

「二人とも、自分達本来の戦い方をしてくれないかな？ 基礎的な部分は私とヴィータちゃんが教えてるから」

「失礼しました！！ 了解です！！」

それから二人はクロスレンジで壮絶な打ち合いを繰り広げる。キョウウは飛行魔法を駆使し多元的な攻めを見せ、ギンガも『ウイングロード』を使い追いつがる。

『ブリッツキャリバー』によって機動性を得たギンガはキョウウの動きについていつている。

二人のスピードはゼストとの戦いの前よりも数段早くなっていた。

「喰らえ！！」

「ナツクルバンカー！！」

キヨウ達は幾度となく打ち合う。鋭い拳や蹴りが交差する。キヨウは早さと手数でギンガを攻め立て、ギンガはそれを力でねじ伏せようとする。炎を纏ったキヨウとギンガはダンスを踊っているようだ。

「なあ、なのは。あの二人は近代ベルカ式の魔導師なんだよな？」

「そうだよ、ヴィータちゃん」

「あの戦い方はどっちかというと古代ベルカ式の騎士に近いぜ」

「キヨウにいの家には古代ベルカから伝わっている『草薙流』って武術があるんです。ギンねえも小さい頃からキヨウにいと腕を磨いていたから、古代ベルカ寄りの戦い方になったんじゃないでしょうか？」

ヴィータの疑問にスバルが答えた。

「炎を用いた古武術、『草薙流』か……」

「どうかしたんですか？なのはさん」

「なんでもないよ、エリオ。私の実家でも剣術だけど、『御神流』って武道が伝わっているから、二人を見て実家を思い出しちゃった」

「先輩達、凄く腕をあげたんですね？ アギトさん」

「退院してから鍛え直したからな。ていうかティアナ、タメ口で良いつて！！ なかなか治らねえな？」

「アギトさんだって訓練校の先輩じゃないですか。努力しますけど……」

「キョウさんのデバイスって、私と同じでグローブ型なんだ」

「キョウ君のはアームドデバイスだから、キャラのブーストデバイスとは全然違うわよ」

シャーリーもその場に現れる。

「ベルカの騎士……。僕もあんな風になれるかな」

「みんなで訓練を積んで強くなるう、エリオ！ 私もキョウにとギンねえに追いつけるよう頑張らないと」

「はい、スバルさん！！ 頑張らしましょう！！」

その後キョウ達は模擬戦を終えなのは達の下に戻ってきた。

「二人は基本的にはフロントアタッカーで、クロスレンジが得意だからああいう戦い方をしていたけど、みんなは自分の得意な距離の戦い方をちゃんとマスターしてね！！」

「……はい！！」「……」

「スバルとエリオにはクロスレンジの戦い方の参考になったと思うし、ティアナやキャラも回避技術の参考になったと思う。キョウ、

ギンガ、二人ともお疲れさん」

「「ありがとうございます、ヴィータさん」」

「二人ともいきなりのお願いだったけどありがとう。じゃあ、新人のみんなはこれから訓練を開始するよ!!」

新人たちはなのはの指示でガジェット相手に市街地戦を繰り広げる。

「あれが『ガジェット・ドローン』ですか」

キヨウがヴィータに尋ねる。

「ああ。自律行動型の兵器で『AMF』っていう魔力を減退させる厄介な装備を持っているんだ。キヨウ、お前ならあれをどうする？」

「俺ですか？そうですね。取り敢えず近付いて、ぶん殴って破壊すると思います。あの感じだと行けそうですね。なあ、ギンガ？」

「そうだね。一番単純だけど効果がありそう。スピードや威力の面で問題はなさそうだよ」

「はあ、二人ともシグナムみたいな事言いだすんだな」

「くしゅん!!」

「どうしました？ シグナム姐さん？」

「いや、何でもない。それよりも手を動かさせヴァイス。仕事が終わらんぞ!!」

隊舎では噂されたせいにかシグナムがくしゃみをしていた。

新人たちはガジェット相手の訓練でポロポロになっていた。だがスターズの二人はまだ余力がありそうだった。それでもエリオ達に比べると多少といったところであるが。

「それじゃあ、早朝訓練の最後は私と五分間のシュートイベーションをやるうか？ みんないける？」

「」「」「はい!!」「」「」

「キヨウ君達の模擬戦でみんなやる気が出たみたいだね？私の攻撃を被弾なしで避け切るか、私にクリーンヒットを入れたらクリア。一人でも被弾したら最初からやり直しだからね。頑張って行こう！」

なのはは周りに誘導弾を放つ。その一つ一つが意思を持っているかのように彼女の周りを飛び回る。

「みんな、五分間捌ききれそう？」

「私はちよつと厳しいかも」

「僕も同じです」

「じゃあ、攻撃しかないか。キャラも頑張れる？」

「はい、ティアナさん」

「準備は良いみたいだね？ レディー！！ ゴー！！」

なのはがシューターを放つ。

「みんな、いい？ なるべく早く終わらせるよ！！」

「了解！！！！」

ティアナの指示で新人達はそれぞれ行動を開始する。

ティアナの作戦はこうだ。自分とスバルがおとりとなりシューターを引き付け、キャロがエリオをブーストし彼がなのはに攻撃を加えるというものだ。

「うおおおおー！」

なのはの後ろからスバルが攻撃を仕掛ける。それと同時にティアナもビルの窓からなのはにシュートバレットを放つ。だがそれは読まれていたようで、シューターがスバルに命中しティアナの方にも向かう。命中したかと思われたが、二人の姿は幻影だったようでのなのはの攻撃でかき消える。

「ティアナ、凄いね。私達が訓練校にいた頃は幻術魔法なんて使ってなかったのに」

「キョウ、私も覚えようか？」

「いや、いいぜ。アギト。武道家としての俺にはそういう戦い方は合わねえだろうし。でもティアナは凄いな。器用に何でも吸収して

いくし。苦手なものってないんじゃないか？」

「ホントだよな。スバルもアレンジや格闘のセンスがあるし、ウカウカしてらんないな。ティアナが術式だけでも教えてくれそうなら貰っとくよ。使うかどうかはキョウウに任せる」

「サンキュー、アギト」

キョウ達はティアナ達の成長ぶりを話していた。

「アギト、お前後輩からも技を学ぶのか？」

アギトの発言に対してヴィータが問う。

「はい。私はキョウをサポートする事が使命なので、なるだけ沢山の魔法を覚えようと思ってるんです」

「そうか、頑張れよ」

「スバルキーック!!!!!!」

スバルがウイングロードの上から飛び降り、なのはに『独楽屠り』を放つ。どうやら今回は本体の様だ。だがその攻撃はなのはのシールドによって阻まれる。

「くっ、なんて威力」

蹴りの威力になのはは半歩ほど後ろに下がる。だがなのはは二発の誘導弾を操りスバルにカウンターを仕掛ける。

「うおっと！危ない！」

スバルはそれを後ろに宙返りをして避け、ウイングロードで距離を散る。

「スバルの身体能力は凄いね」

「へへっ、鍛えてますから。うわああ!!」

なのはの放った魔法は彼女を執拗に追いかける。スバルはそれから逃げようとするが様子がおかしい。

捕えられてはいないがローラーブーツからは火花が出ている。彼女は自作でローラーブーツで戦っているのだ。以前のギンガもそうだったが、シューティングアーツには必要な装備なのである。だがマインナーな流派なので自作するしかなく、お世辞にも性能が良いとはいえない。其れが以前のギンガの悩みの一つであった。

「あれじゃ、ヤバい！援護を！はあああ！！」

ティアナはアンカ・ガンに弾丸を込め射撃魔法を放とうとするが、彼女のデバイスも不調の様だ。

「肝心な時に！！でもまだいける！」

弾丸を詰め直し、四発の魔法弾を放つ。二発は誘導弾の方へ、残り
はなのはに向けて。

「ナツクルダスター！！」

スバルは一つの誘導弾を自力でたたき落とす。もう一つの方はスバルに届く前に、ティアナによって撃ち落とされた。

「プロテクション！！」

なのはは自分に向けられた魔法弾を防ぐ。そこに僅かな隙が出来た。

「エリオ君、これで良いと思うけど。かなり加速がつくから気を付けて」

キャロの魔法『ブーストアップ・アクセラレーション』によりエリオのアームデバイス『ストラダー』が桃色に発光する。

「ありがとうキャロ。スピードは僕の取り柄だから、行くよストラダー！」

なのはがキャロ達に気付く。しかしティアナとフリードの攻撃がなのはを引き付ける。

そこにエリオが『ストライダー』から光を放ちつつ突っ込む『スピアーアタック』を放った。

なのはとエリオは衝突し爆煙に包まれる。エリオは弾き飛ばされたが何とか着地する。煙がはれるとなのはは健在だった。

「お見事、ミッションコンプリートだよ。ほら」

なのはのバリアジャケットの胸の部分に僅かな攻撃の跡が残っていた。

その後、訓練は終了し一同は隊舎へ戻った。

シャーリーが訓練場に駆けつけていた理由は、新人たちに新しいデバイスを渡すためだったらしい。

ちょうどいいタイミングだったのでスバルとティアナの二人はとても喜んでいた。

一度シャワーで汗を流し、一同はジャーリーの待つデバイスルームに向かう事となっている。そこでデバイスが渡されるのだ。

キョウはエリオと共に女性陣を待っていた。

「皆さん遅いですね」

「そりゃあ、女の子は男と違って色々時間がかかるのさ。こつこつ
時待つのも男の仕事だぜ」

「僕、まだそういうこと分かりません」

「追々分かるようになるさ」

キョウはエリオの頭をガシガシと撫でた。

「キョウにい、ごめん！！待ったでしょ？」

「うおっと！スバルか？」

キョウの後ろにスバルが負ぶさる。

「こら！スバル！！」

「何やってんのよ！スバル！！」

ギンガとティアナがスバルに声をあげる。

「キョウにい疲れたからおんぶ！！」

「ダメだ。もう小さい子じゃないんだし。ほら、エリオやキャロだ
って自分で歩いているだろ？」

「けちい！！！！」

キヨウはスバルを諭す。スバルはたまにキヨウに対して甘えてくる事があるのだ。其の度にギンガやティアナに叱られている。小さい頃は良かったのだが、今は昔と違い成長している部分があるので、色々almazイのだ。キヨウの精神的な意味で。

「でも、どうだった？私、ギンねえには敵わないけどティアより大きいんだよ」

「バカやる」

キヨウはスバルに拳骨を落とす。スバルは過度のスキンシップを分かってやっている節があるのだ。女性陣はシャワーでどうやらある話題があがっていたらしい。

ティアナとキャロのテンションが若干低かった。

「はあ、早く大きくならないかな」

「ナカジマ家の遺伝子、恐るべし……」

「スバルもあまり調子に乗らない！キャロちゃんもティアナもまだまだ時間があるから大丈夫よ！」

ギンガが二人を励ましていた。アギトはそう言った事に興味がないのかキヨウの肩の上に座りにいった。エリオは女性陣の会話に顔を赤らめている。

「エリオはマセてるんだな。まだ早いぜ」

アギトがエリオに声を掛けていた。

一同はそれからデバイスルームに向かった。そこにはなのはとリーンの姿もあった。

「みんな、遅いですよ！」

「お待たせしてすみません」

「良いよ、キヨウ君達も待たされていたんでしょ？」

「ギンガちゃんも訓練校の寮にいる頃から長風呂だったもんね？つてそれより、これが四人の新しいデバイスだよ」

新人たちはそれぞれのデバイスを渡される。エリオは腕時計型、キヤロはブレスレット型、スバルはギンガと色違いの蒼いクリスタルのついたネックレス型、ティアナはカード型の物が渡された。

エリオ達の物は形状に変化は無いらしい。その後シャーリーとなのはとリーンからリミッターの事等の説明が行われた。

一通りの説明が終わるとシャーリーがティアナとスバルのデバイスの説明を補足した。

「スバルの『マツハキャリバー』は以前使っていたローラーシューズとギンガちゃんの『ブリッツキャリバー』からデータが引用されているから。あなた、ギンガちゃん以上に無茶な使い方しそうだから、ブリッツ以上に頑丈にしたつもりよ」

「ありがとうございます、シャーリーさん」

「ティアナの『クロスミラージュ+』は本来付けるつもりがなかった機能が増えているわ。ウィップ先生仕込みの鞭捌きが使えるよう、

キョウ君のデバイスに使われているのと同じ素材で出来た鞭がグリップに収納されているんだ。グリップを九十度動かしてトリガーを引くと射出されるから。今までのアンカーの五倍以上の強度よ!」

「凄い!!ありがとうございます、シャーリーさん!!」

「ティアナのアンカー捌きってウィップさん仕込みなんだ……」

同じ教導隊に所属するなのは彼女の事を知っているようだ。

「じゃあ、ギンガとスバル、俺とティアナはそれぞれ兄妹機ってわけか?」

「うん、そういうこと」

「スバル、お揃いね」

「うん!ぎんねえ!」

「先輩と兄妹機、先輩と兄妹機……」

「良かったわね、ティアナ。ふふふふふふ」

「ちょっと、ティアア!!」

「ごめんスバル。ってギンガさんもその笑顔やめてくださいよ!」

その後、隊長陣のリミッターの話等が行われたが突然出勤要請がかかる。

「キョウ君達、すまないが聖王教会から出勤要請がかかった。なのはさん、よろしいですか」

グリフィスがその場の面々に伝えた時はやてからも連絡が入る。

これが新人たちの機動六課での初めての出勤となるのだった。

Ep42 ファーストアライト前編（後書き）

アニメと見比べ書いていると長くなるので、これから会話等は独自の物にして本筋をなぞって行こうと思います。

アニメ見直したら結構忘れていた事が多くてびっくりしました。読んでいただきありがとうございました。

Ep43 ファーストアライト後編(前書き)

完成された料理である原作にオリジナルというスパイスを足す二次創作。

劇物にならないよう頑張ります!!

感想や指摘等戴けると嬉しいです。

評価もしていただけたら助かります。

まだ未熟な腕ではありますがよろしくお願いします。

通信部分とユニゾン中のアギトのセリフは()で表現する様に差し替えました。

Ep43 ファーストアラート後編

突然の出動要請。はやてはモニターからデバイスルームの一同に情報を伝える。フェイトとも同時に通信をしているようで彼女の声もキョウ達に届いていた。

はやてはその日、聖王協会に用があり隊舎にはいない。フェイトがはやてを送っているとの事だったので彼女もその場にはいない。

「教会騎士団の調査部からの情報や。エーリム山岳丘陵地区でレリツクラしきものがみつかった。それは山岳リニアレールで移動中のようや」

「はやて、移動中って」

「まさか……」

「そのまさかや、なのはちゃん。最低30体と思われるガジェットがリニアレール内に侵入し、車体の制御を奪っているようや。大型や飛行型の未確認タイプも出てるかもしれへんし、ハードな初出勤になるけど……。なのはちゃん、フェイトちゃん、行けるか？」

「私は何時でも」

「私もいけるよ、はやてちゃん」

隊長二人に確認をとると、はやてはスバル達新人にも声を掛ける。

「スバル、ティアナ、エリオ、キャロ！皆もオツケーか？」

「「「はい!!」「」」

出動準備を始めるフォワード陣をよそに、指示の与えられていないキョウははやてに問う。

「八神部隊長、自分達は？」

(キョウ君達三人も出動してくれ!! 指揮は隊舎から僕が出すよ!! よろしいですね?)

(グリフィス君に先に言われてしもうたわ。現場指揮はなのはちゃんとフェイトちゃんにお願いするから三人も現場でのフォローを手伝ってな!!)

「「「了解!!」「」」

その後通信で細かな連絡を受けつつ、キョウ達は新人たちとヴァイスの操縦するヘリで出動していく。

ヘリの中ではなのが一同に指示を出していった。

「キョウ君とアギトちゃんは空戦魔導師だから私とフェイトちゃんと一緒に空から抑えるのを手伝って」

「了解」

「ギンガは新人たちのフォローをリインとお願いするね」

「了解です!!」

「ギンガさん、よろしくですう」

「新人のみんな、新デバイスになっていきなりぶっつけ本番になっちゃったけど、私達みんなでフォローするから、思いっきりやってみよう!!」

新人たちは元気良く返事を返す。だがキャラだけ何か様子がおかしかった。不安があるのか表情が暗い。

「どうしたのキャラ?」

「うっん、何でもないよ。ありがとう、エリオ君」

キャラはその時、ある事を思い出していた。

彼女は現在エリオと共にフェイトに引き取られて生活をしている。フェイトが身寄りのないキャラの保護者なのだ。彼女が思い出している事、それはフェイトに引き取られる前、自分が部族を追われる事になった時のことだった。

彼女のいた部族は龍を役する集団だった。キャラは幼いながら二体の龍、それも片方は部族の守護龍という強力な使役龍を持ち、巫女として将来を囑望されていたのだ。

しかし大きすぎる力が危険視され、部族を追われた。その後、管理局に保護されたのだが、龍の制御が不完全でそこでも厄介者扱いをされていたのだ。

そんな彼女をフェイトは引き取り、自分の下で育てているのだ。キヤロは不安だったのだ。自分の大きすぎる力がもし制御できなかつたら、それが周りの人間を傷付けてしまう事になつたらどうしよう。

「キヤロ、そんなに緊張しなくても大丈夫だよ。離れていてもみんな繋がっている。何かあつてもみんなで助け合えるし、キヤロの魔法は皆を守つてあげられる、優しくて強い力なんだから」

キヤロの様子に気付いたなのは優しく声を掛ける。

「キヤロ、初めての实战は誰でも緊張するもんだぜ。そんな時はこう考えるんだ。もし自分が此処で行動を起こさなきゃ、どこかの誰かの笑顔が失われるかもしれないって。俺やギンガにアギトは困難に直面した時はそう考えるようにしている」

「誰かの為に頑張ろうって思うと、人って普段の自分以上の力を発揮できる時があるんだよ。知らない人の事を考えるのは難しいけど、それを自分の周りの人や大切な人に置き換えて考えてみて」

「それになのはさんや私達もいるんだぜ！先輩にはどんどん頼れよな！」

キヨウ達三人もキヤロを励ます。キヤロの不安がった表情が薄れる。

「大切な人の為に……。はい、頑張ってみます！！」

キヤロは決意を固めた様子で返事を返す。どうやら彼女は大丈夫の様だ。

その後リインが全員にリニア車内の様子を伝え具体的な指示を与えた。ライトニングとスターズの二人ずつでコンビを組みレリックを確保するというものだ。ギンガも後詰めとして新人たちと共にリニアに加工しフォローに回るといったものだった。

「じゃあ、私達は先に行くね。行こうか、キヨウ君、アギトちゃん。ヴァイスくんお願い!!」

「うっす、なのはさん。曹長達も頑張れよ!!」

ヴァイスがヘリの降下口をあける。

「了解です、なのはさん!! ヴァイスさん、キヨウで良いですって!! 行こうぜアギト!!」

「おう!!」

三人はバリアジャケットを展開し空に飛び立つ。なのはがすさまじいスピードで飛んでいくのでキヨウ達はユニゾンしてそれに着いていった。ユニゾン状態ではなのはのスピードと比べても遜色はない様だ。それからしばらくして三人はフェイトと合流する。

「じゃあ、私達もいこうか。危なくなったら私がフォローするからね」

「もう、ギンねえってば心配性なんだから」

「ありがとうございます。ギンガさん。私達だけでどこまで出来るかやってみます!!」

「わ、私も頑張ります。ね、フリード？」

「きゆるー!!」

「僕もキャロに負けらんないな。行きます!!」

新人たちはギンガと共にへりから飛び立った。

新人たちは危なげなく新デバイスを起動させリニアの屋根に降り立つ。バリアジャケットのデザインも変化しているようでへりから降りてきたリインが説明を行う。

「みなさんのジャケットの性能とデザインは各分隊の隊長さんの物を参考に出しているですよ。スバルさんの物はキョウさんの物も参考に出しているから前とあまり違和感がない筈です。他の皆さんの癖があるかもしれないですけど高性能ですから」

新人たちの物はそれぞれの隊長に似た部分もあったが彼らに適したデザインだった。

ティアのバリアジャケットは赤と黒のインナーに白の袖なしジャケットとミニスカートとブーツ。腰からは茶色のベルトと白いコートの裾の様なものが付属していた。髪は黒いリボンで二つに結ばれている。

エリオは黒のインナーの上に赤い上着と同色の短パン。ブーツに指抜きグローブと白のロングコートという出で立ちだった。動きやす

さを追求しているようだ。

キャロはピンクの上着に白のロングスカートとマント。頭には白い帽子が載せられている。民族衣装の様なデザインだった。

スバルはデザイン自体に変更はあまりなかった。違う点は上着が白くなった事と、ティアナの様に腰に布が装着されている事位か。その長さはティアナの物より長いようで、全体のシルエットはほぼギンガとの色違いというものだった。背中の日輪も健在だ。足元は『マツハキヤリバー』が装着されていた。

「スバルも白って。またキョウ君とお揃いじゃない!！」

「良いでしょ？ ギンねえ」

「まあまあ、ギンガさん。じゃあ、行動を開始しましょう!！」

「そうね、ごめんティアナ。みんな、無理だけはしないように!行
つてきなさい」

「「「「はい!」「」「」」

一同はリニアの中に入ります。

一方のキヨウ達は飛行型のガジェットの大群と対峙していた。なのはとフェイトと別れ、それぞれでせん滅していくようだ。なのはとフェイトは次々とガジェットを破壊していった。

「数が多いな、アギト。俺達も二手に分かれた方が良いな……」

（そうだな。ユニゾンを解いても倒せそうだし）

キヨウ達はユニゾンを解くとガジェットに攻撃を加えていく。

「フレイムシューター!!」

キヨウは拳からストレートを撃ち込むように炎を次々と放つ。拳から加速され打ち出されたそれはガジェットの大群に着弾し破壊していく。

「フレイムシューター!!」

キヨウに似たフォームでアギトも炎を放っていく。その数はキヨウより少なかったが一つ一つが回転しながら飛んでいきガジェットを破壊していった。

二人の放った魔法はスバルの『リボルバーシユート』に酷似していた。アギトが以前クイントにそれを教えてもらっていたのだ。独自にアレンジを加えて使用しているのである。

もちろんギンガも『リボルバーシユート』を会得しているのでキョウ達三人は全員使用できるのだ。

キョウは二人に比べ魔法制御が劣るので回転させず直接打ち出している。オリジナルより威力が劣るのだが、それを数で補っているのだ。事実、回転を加えない分タメが少なくて済み連射が可能になっているのだ。

「うおおおおおお!!!」

「はあああああああ!!!」

二人はなのは達より少々時間をとったが無事全て破壊していた。その後すぐガジェットを殲滅した二人の下にグリフィスから通信が入る。

（キョウ君達も終わった様だね。お疲れ様。二人ともギンガちゃん達の方へ応援に行ってくれないかい？）

「分かったぜ、行こうかアギト」

「応援なんて必要ないんじゃないか？ グリフィス」

（何か起こっても良い様にさ、アギトちゃん）

「分かったぜ!!! って、待てよキョウ!!!」

キョウ達もリニアへ向かう。

「ヴァリアブルシュート!!」

ティアナの『ヴァリアブルシュート』がガジェットを貫く。この技はAMF対策の為に膜状バリアで魔力弾をくるんだ多重弾殻射撃なのである。訓練で編み出された技だ。連射されたそれは多くのガジェットを破壊していく。

「リボルバーキャノン!! 喰らえ!!」

スバルも『リボルバーキャノン』でガジェットを破壊する。この技は『リボルバーシュート』を腕に纏わせたままぶつけるものだ。ス

バルはキヨウの『毒咬み』の動きを組み合わせでさらなる威力の向上を図っており、AMFをもともせずぶち抜く。スバルは『マツハキヤリバー』の助けもあり、次々とガジェットを粉碎した。二人は車両を止めるため、ガジェット殲滅後、ケーブルを破壊する。

(此処は大丈夫なようですな? どうです?)

別の車両でガジェットを破壊していたリインから通信が入る。

「無事せん滅出来ましたが。ダメです、ケーブルの破壊は効果ないようです」

「どうしようティア?」

スバルは少し不安になっているようだ。

(了解、二人は先に進んでください。車両の停止は私に任せるです)

「了解!」

スバル達は別の車両へと足を進めた。

「フリード、ブラストフレア!!」

「きゅく〜!!」

エリオとキャロは新型のガジェットと戦闘を行っていた。球体状のボディからは赤い触手や黒い蛇腹状のアームが伸びている。キャロの指示でフリードの口から火球が放たれるがガジェットに弾かれる。

「うおおおおりゃあああ!!」

エリオが『ストラダー』に電気を纏わせガジェットを切りつける。しかしそれも効果がない様だ。ガジェットはAMFを展開し二人の魔法を打ち消す。

エリオはめげずにガジェットのアームと鏢迫り合いを行う。

「エリオ君!!」

「大丈夫!! 任せて!!」

エリオを心配するキャロが彼に声を掛ける。キャロはエリオを穴のあいたリニアの屋根から見守る。後衛である彼女はAMF下では加勢する事が出来ないのだ。

突然、ガジェットからレーザーが放たれ、エリオは間一髪でそれを回避する。

スバル達と違いこちらは劣勢の様だ。

「エリオ君、キャロちゃん大丈夫？」

ギンガが駆けつける。彼女もリインと同じく単独で別の車両のガジェットを破壊していたのだ。

「ギンガさん！！ エリオ君が！！」

エリオはガジェットのアームによって車両の壁に叩きつけられている。

「まだよ。私が助けに入るのは簡単だけど、まだエリオ君の目は諦めていないわ」

エリオの目は確かにまだ闘志がこもっていた。何とか拘束から方腕だけ抜けだしアームに斬撃を与える。

「たああああ！！」

それによりガジェットからの拘束は解かれる。ガジェットは機能に不備が生じたのか、動きが鈍った。エリオはキャロ達の下に一旦戻る。

「ほらね？キャロちゃん、あなたも出来る事はあるわよ。私も手伝うからやってみて。あなたの魔法はなのはさんが言う通り、みんなを守る力があるってここを此処で見せて」

「みんなを守る力……。私にも出来るんでしょうか？」

「出来るわよ！！」

「そつだよキャラー!!」

ガジェットが行動を再開し三人に襲いかかる。ギンガはガジェットのアームを受け止める。

「AMFか、なかなか厄介ね。でも、たあああああ!!」

ギンガはアームを掴みガジェットを上 to 投げ飛ばす。AMF下でもそれだけのパワーを発揮するギンガの腕力恐るべし。

「これで距離が出来たわ。今なら全力を出すチャンスよ!! 頑張ってキャラちゃん!!」

ギンガの言葉でキャラは決心がついた様だ。力強く答える。

「分かりました。フリード、やるよ。今度は絶対制御するから!!」

「きゆるー!!」

「竜魂召喚!!」

キャラから魔力が放出されそれがフリードを包み込む。魔法陣が描かれフリードがそれをくぐると巨大な白い龍が姿を現す。

「これが私とフリードの力です。行くよフリード!!」

白い巨龍フリードは雄叫びを上げる。

キャラはフリードに乗りガジェットを追った。

「フリード、ブラストレイ!!! フレア!!!」

フリードの口から大きな炎がガジェットに向け放たれる。しかしそれはAMFにより阻まれる。

「あの形状なら僕が!!!」

エリオもギンガの『ウイングロード』でそこに駆けつける。

「お願いキャロ!!!」

「エリオ君!!! 分かった!!!」

キャロはブースト魔法の詠唱を行う。その間、エリオがガジェットの動きを封じる。ギンガが手を貸さないのは二人だけの力で倒せると信じているからだ。『ウイングロード』の上から何時でも助けられるよう二人を見守る。

「行くよエリオ君!!!」

「了解!!! たあああああ!!!」

エリオが一度ガジェットから距離をとり勢いを付けて斬りかかる。

「ツインブースト!!! スラッシュユアンドストライク!!!」

キャロのブースト魔法が『ストライダー』を強化する。エリオはガジェットに斬撃を飛ばし、その触手を破壊した。

「一閃必中!!! てええりゃあああ!!!」

エリオはガジエットの本体に『ストラーダ』を突き刺し斬り上げる。ボデイを貫通したそれは、みごとガジエットを破壊した。ガジエットは黒煙を上げ爆発する。

（ようやったな、二人とも）

隊舎からはやてがガジエットを破壊したエリオ達に通信してきた。エリオとキャロの代わりにギンガがはやてと通信する。

「八神部隊長。戻られていたんですか？」

（そうや。ギンガも手伝ってくれてありがとうな）

「いえ。ほとんど二人の力ですよ」

（ギンガからも二人に声を掛けてあげてな）

ギンガは言葉に従いエリオとキャロの下に降りる。フリードもいつもの大きさに戻っていた。

「ギンガさん、私達、出来ました。フリードも暴走しませんでしたよ」

「何とかガジエットを破壊出来ました。ありがとうございます」

ギンガは膝をつき二人を抱きしめる。

「エリオ君、キャロちゃん。二人ともよくやったね。絶対二人なら大丈夫って信じてたんだから。でも二人とも怪我がないようで良か

った、本当に良かった」

ギンガは二人を抱く両手に力を込める。

「ギンガさん、苦しいです」

「それに僕、恥ずかしいです」

そんな三人の下にリインから通信が入る。ガジエツトは全機撃破し、レリックもスバル達が確保したようだ。車両のコントロールも取り戻せたようだ。

「おい、ガジエツトは？」

「何だよ。一歩遅かったか」

ちょうどその時、キョウ達もギンガ達の下に駆けつける。二人もリインの通信が届いているようだ。

その後リニアは無事停止された。はやての指示でスターズの三人は中央ラボまでレリックをへりで護送し、ライトニングの三人は現地に残りその局員と事後処理の引き継ぎを行うように言われる。

キョウはアギトと共にライトニングの手伝いを、ギンガはスターズの護送についていく事となった。

新人たちの初出勤はひとまず成功したと言える。

そんな彼らをモニターから見ていた者が居る。

「刻印N09護送体制に入りました」

「ふむ」

「追撃なさいますか？」

「やめておこう。レリックは惜しいが彼女達のデータが取れただけで十分さ」

モニター越しにウーノと会話をするスカリエッティであった。

「それにしてもこの案件はやはり素晴らしい。私の研究にとって興味深い素材が揃っている」

スカリエッツェの前のモニターは切り変わり、なのはや新人たちの映像が写る。

「ふふっ。それにこの子たち、動いているプロジェクトFの残子を
手に入れるチャンスも出来たのだから」

彼のその言葉に反応するかのようにまた画面は切り替わり、フェイトとエリオ、それにキョウとナカジマ姉妹の映像が映し出されていた。

Ep43 ファーストアライト後編(後書き)

スバル達は今までの鍛錬のせいか、原作ほど苦戦しませんでした。

リニアから投げ出されるのはエリオではなくガジェットの方でした

www

感動の場面がスポ魂みたいになってしまったorz

キヨウがちゃんと射撃魔法を使ったのは今回が初めてじゃないんだろっか。

普段も身体強化や飛行魔法等を使っていますよ。

読んでいただきありがとうございます。

Ep44 進展？（前書き）

原作をなぞっただけになってしまった感じですが、
文才が欲しいです。

感想や誤字、指摘等募集しておりますのでよろしくお願いします。

Ep44 進展？

新人たちの初出勤から数日が経ち、彼らはその日もシミュレーターで訓練を行っていた。

「行くぞ、スバル！！ たああああああ！！」

「マツハキヤリバー！！ プロテクションを！！」

ヴィータが『グラーフアイゼン』でスバルを殴りかかる。スバルはプロテクションで受け止める。しかし、ヴィータの攻撃の威力で3mほど後退する。

「シールドの強度に問題はねえな。それになかなか足腰も鍛えてるみてえじゃねえか？今の段階で此処まで出来れば上出来だぜ」

「ありがとうございます、ヴィータ副隊長。でも……」

スバルは何やら不満げだった。その原因はヴィータ以外にその場に
いる人物。彼女の姉であるギンガのせいだった。

スバルの前にギンガもお手本として同じ事を行ったのだ。

時は10分程遡る。

「見てるよスバル。今日お前に行く訓練の内容を私とギンガが見せる。準備良いかギンガ？」

「はい、ヴィータさん」

「行くぞ!! はあああああ!!」

ヴィータがギンガに攻撃を放つ。

「トライシールド!! てやあああああ!!」

「うお!! っと、やるじゃねえかギンガ」

「いえ、日ごろの鍛錬の賜物ですよ」

ギンガはあろうことか、ヴィータの『アイゼン』による攻撃を受け止めそれを押し返したのだ。

それを見ていたスバルはヴィータに褒められても素直には喜べなかったのだ。

「スバル、ヴィータさんの言う通りよ。私がスバルと同じ位の頃は今の攻撃を受けていたら、きっと後ろの木の方まで吹き飛ばされていたわ」

「そうだぜ。あれだけ出来れば大したもんだ。普通の魔導師なら受け止めるのも厳しいんだからな」

「焦った所で強くは慣れないんだから、堅実に頑張らないとね？」

「はい!! ヴィータ副隊長、ギンねえ!! 私、自信持って頑張ります」

スバルは二人に励まされ気を取り直す。その後、二人によってフロ

ントアタッカーの役割や戦い方のポイント等の指導が行われた。ギンガは受け止められない攻撃の受け流し方等もスバルに教えていた。

一方でエリオとキャロの指導はというとフェイトとキョウの二人が行っていた。

フェイトは障害物に囲まれた状態での攻撃の避け方を実演して教えていた。訓練用のマシンから次々と攻撃が放たれるのをフェイトは危なげなく避け切り、エリオとキャロの後ろに一瞬で移動する。

「この動きはさっきまでの動きを早回しにただけだよ。訓練を積みめばある程度出来るようになるから」

「こんな風にな？」

キョウがそう言ってエリオ達の隣から移動し、フェイトがさっきまでいた障害物の中に現れる。

彼もフェイトの様に攻撃を避ける。

「スピードが上がると勘やセンスに頼って動くのは危ないの。ただ、長い事訓練を積んだら、ああいった事を出来るようになる人もいるんだ」

フェイトがキヨウの方を見ながら二人に言う。キヨウは目を瞑ったまま攻撃を避け続けているのだ。フェイトがそれを言い終わると同時にキヨウも三人の下に移動する。

「これは相手の攻撃を察知出来るようになって始めて出来る芸当だから、キャロはちょっと厳しいかもしれないけどエリオは覚えても損はない技術だと思うぜ？」

キヨウがエリオの肩に手を置き言う。

「私としてはエリオにはあんまり危ない目に会って欲しくないんだけど、今キヨウ君が行った事も出来るようになったらぐつと被弾率が下がると思うから」

それからキヨウとフェイトはエリオ達にガードウイングとフルバツクの心構えを説いていく。キヨウはポジションが違うのだが、スピードを生かしたヒットアンドアウェイの戦い方をしているので避け方のコツなどを伝授していくのだった。

時を同じくして、ティアナはなのはとアギトから指導を受けていた。ティアナに向けて数多くの魔法弾が放たれている。ティアナは『クロスミラージユ+』でその場から一度も動かずそれらを撃ち落とすていく。

「ティアナ、なかなかやるね。弾丸のセレクトも判断速度と命中精度も良い感じだよ」

「ありがとうございます」

「でも、これはどうする？」

なのはは指先からそれまで放たれていたものより三倍近い速さの魔力弾をティアナに向け放つ。

「クロスミラージユ!!! ウィップモード!!!」

ティアナは右手に持つ『クロスミラージユ+』のグリップを90度回転させ、銃身と一直線になる形に変形させる。そしてトリガーを引く。下に付いている銃口からは黒いワイヤーが射出される。

「ソニックスローター!!! たあああ!!!」

ティアナは自分の至近距離になのはが放った魔法弾が到達したとき、魔力を通したワイヤーを用いてそれをたたき落とした。

「それ、ウィップさんの技じゃ？」

「はあはあ。はい、訓練校時代に伝授されました。私の奥の手です」
ティアナは技で体力を消耗したのか息があがっていた。

「射撃型としてはあまり使って欲しくないんだけど……。でも一歩も動かずに撃ち落とす事も出来ているし、奥の手ならそれもありかな」

「懐に潜り込まれた時の対処に使えるから私はそれ、良いと思うぜ」

「ありがとうございます。なのはさん、アギトさん」

その後、なのは達もティアナにセンターガードの心得等を教えていった。

再び場所は変わり、シュミレーターの外。そこにはシグナムとヴァイスがおり、新人たちの訓練をモニターで眺めていた。

「いやあ、やってますね。新人たち」

「初出勤が良い刺激になったのだろうな。特にスターズの二人は今まで以上の動きを見せているな」

「若いつて良いですね。成長速度も早いですし。シグナム姐さんは参加しないんで？」

「私は人に教えるのには向かん。攻撃の届く距離に近づいて斬れ、位しか言える事がないからな」

「それは凄い奥義ですけど新人たちにはまだ早いでしょ。スバルがもう少し上達したら可能になりそうっすね。それにキョウやギンガはそれを実行していますし」

モニターのディスプレイには訓練用のガジェットをたたき壊すキョウ達の姿が映し出されていた。

「あれで騎士ではなく魔導師なのだから、時代は変わったんだな…」

…」

一同はその後、訓練を終え隊舎に戻る。隊舎の入口に差し掛かった時、はやてがラインを連れてそこに現れる。

「みんな、お疲れさんや」

「お疲れ様です」

「おう。はやてはどうしたんだ？こんな所で？」

部隊長室でなく隊舎の入口に来ていたのでウィータが尋ねた。

「キョウ君達に用があつて来たんや。午後から108陸士部隊に向かうから三人も来てもらおうかと思つてな」

「俺達ですか？もしかして、密輸ルートの……」

「そつや。直接会つて頼むのが、筋つてもんやろつしな？」

「今日は特に仕事も溜まっていますし大丈夫ですよ」

「私もです」

「もちろん、私も!!」

「そうか。なら、お願いするわ。後で此処に集合してな」

「了解です!!」「」

その後、隊長達と別れキヨウ達と新人たちは食堂で食事をとる事となった。人数が多いので二つの机を繋げて使用している。相変わらずナカジマ姉妹とエリオの食事は多いようで、三人はかたまつて座り机の上には山盛りのパスタが置かれていた。シャーリーも空き時間になったのかそこに同席していた。

一同は陸士108部隊の事や機動六課の事について話していた。キヨウは陸士部隊についての質問をキヨウ達にする。だが其れをスバルが何故か答えていた。父や姉や親友、兄貴分の部隊なので、さも自分の事のように話し、キヨウ達は苦笑いをしていた。

はやてがキヨウ達が配属される前に研修を受けていた事等も彼女は話していた。さすが部隊長の娘である。

機動六課についてティアナがシャーリーに質問すると、シャーリーははやて達が幼馴染であるという話をした。そこから発展して自分とグリフィスやキヨウ達の事も喋っていた。シャーリーが話している間、ギンガとスバルはエリオの取り皿に二人でパスタを注ぎ分けていた。

なのは達の出身世界の話にもなり、それからスバルがエリオの出身

を尋ねる。

ティアナとキャロは何か知っているようで顔色が変わった。

エリオの話によると、彼は本局の特別保護施設育ちということだった。スバルはまずい事を聞いたとバツの悪い表情をするがエリオは気にしていない様子だった。そのころからフェイトが保護責任者をしていたらしいとシャーリーが補足をした。エリオはフェイトからどのように世話になったのかを語り、それを聞いて、キョウは実家にいるソウジの事を思い出していた。

「そうか、エリオも俺達に境遇が似ているんだな」

「そうだな、私達も親父に引き取られてここまで育ててもらったんだもんな」

キョウとアギトが言う。

「キョウさん達も保護施設に？」

「いや、俺達は……」

キョウはゼストの事を思い出し表情を曇らせる。その場にいたゼストを知る面々も同じだった。

「私達の事は置いといて、早く食事をすませようぜ？」

「そうだね、ほらエリオ君沢山食べなさいよ」

アギトが強引に流れを変え、ギンガもそれに追従した。エリオは食事を再開する。ティアナはゼストの事を以前キョウ達に聞いた事があり何も言わなかった。何も知らないキャロも空気を読み食事を再

開する。一同はそれから、全く関係ない話題で会話を始め賑やかに食事をとっていった。

食事の後、キヨウ達三人ははやてと合流し隊の公用車で108部隊へと向かった。

「お久しぶりです、ナカジマ三佐」

一同は部隊長室に通され、はやてが代表してゲンヤに挨拶をする。

「新部隊、なかなか調子いいみたいじゃないか。こいつらも迷惑をかけていないか？」

ゲンヤはキヨウ達に視線を一度移し、はやてに聞く。キヨウは、はやての後ろに立って待機をしていた。ギンガはゲンヤとはやてにお茶を入れており、アギトとリインは二人で部屋の中を飛行している。

「三人とも、色々手伝ってくれているので助かってますよ」

「そうだけ、おっちゃん。いえ、ナカジマ三佐」

アギトが途中で言い直す。

「そりゃあ、何よりだ。それで、こっちに来た用件は、あれか？」

「はい、愛弟子から師匠へのちよつとしたお願いです」

はやてはレリックについての情報をゲンヤに公開する。密輸ルート
の捜査協力を頼みたいとのことだった。ゲンヤは事前にキヨウ達か
ら情報を得ていたようで快く引き受ける。キヨウ達の出向も役に立
っているようで、ゲンヤは前もってラッドを捜査主任にチームを編
成していたようだ。

はやては思いのほかあっさりと受け入れられたので拍子抜けしてい
るようだ。

その後、キヨウ達三人はゲンヤの指示でラッドと共に会議室で打ち
合わせを行う事となった。ゲンヤとはやてはそのまま雑談をしてい
く。

会議室にキョウ達がつくと、中にはよく知った顔ばかりが揃っていた。

ラッドが捜査主任であり、彼の補佐としてキョウ達の小隊の隊長だったジヨンの姿もそこにはあった。

その他にも数名の隊員達がいた。ひと月も離れていないのに互いに再会を喜び合う。108部隊はアットホームな雰囲気なのだ。

「やあ、キョウ君、ギンガちゃん、アギトちゃん。元気そうだね？」

「「「「ジヨンさん」「」」」」

「いやあ、君たちの活躍で私も階級が上がってしまって忙しくてね、最近はずいぶん行けなくて困っているんだよ」

ジヨンは相変わらずのようだ。

「ジヨン三尉、いいかな？」

「失礼、ラッド二尉」

それから会議室では捜査についての打ち合わせが行われた。やはりホームという事でキョウ達は肩の力が抜けていて打ち合わせ自体もスムーズに進んだ。

キョウ達が108部隊にいる頃、地上本部ではフェイトとシャリーがガジエットの残骸について調査を行っていた。二人はそこである事を発見する。ガジエットは事件犯罪者、ジエイル・スカリエツティにより製造されている事。新型ガジエットはフェイトとなのはが過去に集めていたジュエルシードを動力に動いているという事を……。

108部隊での用件が終わると、はやては隊舎に戻る途中にゲンヤと食事に行くようなのでキヨウ達も相席する事になった。一同は和食が食べられる料理店で食事をとる。

「こいつら二人はそつちでもよくイチャついているのか？」

「ちょ、おっちゃん？」

「父さん、何言い出すのよ！！」

「へえ。キヨウ君とギンガは付き合ってるんですか？」

ゲンヤははやてに尋ね、キヨウ達はそれに反応する。キヨウ達は機動六課ではある程度自重していたので、交際しているという事はアギト以外にはスバルとティアナにしか知られていなかったのだ。

「知らなかったのか？ もう四年近く付き合ってるんだぜ、こいつら」

「六課ではそういう素振りを見せてませんでしたから。ふうん、そうなんか？ 確かにキヨウ君は私やフェイトちゃんやなのはちゃんをはじめ、他の女性隊員の事をあまり意識してなかったもんな？ そつか、そつか。ギンガがおったからか」

「わ、悪いですか、八神さん」

「いや、面白いネタが見つかったって思ってたなあ」

はやてはニヤニヤとした表情を浮かべる。

「あんまりからかつたりしないで下さい、はやてさん」

「ごめんなあ、ギンガ。でも二人は四年近く付き合っているんやから、当然キスとかも？」

「うちのかみさんと先輩、キヨウの親父さんはな、早く二人が結婚しないか楽しみにしてるんだぜ。もちろん俺もだが。早く孫の顔が見たくてなあ。じいちゃんって俺の事を……」

ゲンヤははやてに説明をしたが途中から妄想が零れ出している。その表情は蕩けきった物になっていた。

「父さん!!」

ギンガがゲンヤに声をかけ正気に戻す。

「おっちゃんも相変わらずだな……」

キヨウは以前と変わらないゲンヤの様子に苦笑いするのだった。

「両家公認なんか。私も応援したるわ、キヨウ君」

「ありがとうございます。でも別に今まで隠していたわけではないんですよ」

「そうかあ？それとキヨウ君のお父さんも管理局員やったんか？」

それからはやては、ゲンヤやキヨウからキヨウの父、ソウジの話を知りたりした。他にもナカジマ姉妹やキヨウとアギトの小さい頃の話もゲンヤから教えてもらった。キヨウ達の馴れ初めも、キヨウと

ギンガから聞き出すことに成功する。特別捜査官恐るべし。

一同が盛り上がっているとき、フェイトから通信が入る。

事件の犯人の手掛かりが手に入ったとのことだった。はやてはキヨウ達と共に隊舎へと引き上げていくのだった。

四人が食事をとっている間、アギトとリインは二人でリイン用の移動部屋の中で眠っていた。

帰りの車の中で三人は二人の様子を微笑ましく見ていたのだった。

キヨウ達は隊舎に到着すると寮に戻っていった。彼らの一日は終了した。

Ep44 進展？（後書き）

次はサウンドステージです。もっとオリジナルティが出せるよう頑張ります。

読んでいただきありがとうございました

Ep45 地球へ1(前書き)

アニメしか見た事がなく、サウンドステージはつべで聞いてみました。展開等、少し違う部分もあります。

後書きにご報告がございますので、目を通していただけると嬉しいです!!

今までアギトがアウトフレームではなく変身魔法で大きくなっていた事、皆さんは覚えていらっしゃいます？

「『派遣任務ですか？』」

キヨウ達が108部隊から戻った数日後、聖王教会から機動六課の隊長陣に派遣任務の要請が来たのだ。

隊長達だけではなく、フォワードの新人達、それに108部隊からの応援要員であるキヨウ達も同行するようにとのことだった。キヨウ達三人は現在部隊長室ではやてからそれを伝えられている。

「そうや、第97管理外世界・地球でロストロギアが見つかったらしくてな。何でも、輸送中にそこに落としてしまったらしいって持ち主からの依頼が入った様なんよ」

「はやてさん、隊長陣全員が出なければいけない程、危険な代物なんでしょうか？」

主要メンバー総出とのことではギンガが尋ねる。

「いや、危険性はないらしい。傷付けず持ち帰って欲しいとのことだったけど」

「それなら俺、残りますよ。隊長達が不在の時に何かあったら拙いでしょう？」

「そうだけ、はやてさん。キヨウが残るなら私も残るよ」

「その心配は無用や。指揮はグリフィス君が執ってくれるし、私の守護獣ザフィーラもおるからな」

はやてはキヨウ達の懸念をバツサリと解消する。

「ザフィーラって守護獣だったんですか？変わったワンちゃんだなとは思っていたんですが」

「ギンガ、それ絶対ザフィーラの前では言わんとき！！結構気にするから」

「はい、気をつけます」

「三人とも六課に来て応援要員なのに働き詰めやったから、たまには別の次元世界で任務を行って気分転換にして欲しいんよ」

事実、キヨウ達は六課に派遣されてから新人たちの訓練の補助や一部のデスクワークの手伝い等を毎日行っていた。空き時間の鍛錬も未だに続けており、更には108部隊との合同捜査の調整や連絡等も行っていたのだ。

「地球って、ナカジマ三佐の御先祖様の出身の惑星やし、何より私自身の故郷やから皆にも来てほしいんよ。な、頼むわ」

「八神部隊長からの直々なお願いならば従うしかないですよ。良いだろ、アギト？」

「おう。分かったぜ」

「それにギンガも、御先祖様の星だから気になってんだろ？」

「う、うん。じゃあ、御一緒させていただきます」

「三人とも来てくれるか。ありがとな。キヨウ君も将来ギンガと一緒にになるんなら、御先祖様の星つて事になるからしっかり見ていてな」

「八神部隊長!」

「あはは、ごめん。二人とも」

はやてはゲンヤに二人の関係を教えられてからこう言った冗談を口にするようになっていた。それだけキヨウ達と親しくなったともいえるだろう。

キヨウ達はその後、はやてと別れ出張の準備を行った。管理外世界という事でキヨウは私服を用意する。その間ははやてもフォワード陣や隊長達に連絡をし、二時間後、一同はヴァイスのヘリの下に集合する事となった。

「なのはさん達の出身世界か。楽しみだね、ティア」

「そうね。魔法文化がない世界らしいけど。あつ、先輩!」

ヘリには新人たちのほかにザフィーラを除いたはやての守護騎士4人、それにははやてとなのは、フェイトが集合していた。キヨウもその場に到着する。

「よう、ティアナ。俺達も参加する事になったぜ。隊長方、遅れて申し訳ありません」

キヨウはティアナに声をかけた後、隊長陣に謝罪をする。

「謝らなくても良いわよ。まだ集合時間には15分位早いのだし」

「ありがとうございます、シヤマル先生」

シヤマルが気にしないようにと声をかける。普段は医務室にいる彼女も今回の任務に同行するのだ。

「あと揃ってないのは、ギンガとアギトの二人だな」

「シヤマルのいう通り、まだ時間じゃねえんだから」

シグナムの言葉にヴィータが返す。

「みなさん、遅くなって申し訳ありません!!」

「待たせたみたいで、ホントすいません!!」

そうしている間にギンガ達が到着する。

「うわあ、ギンガ。そのカッコで行くの?」

「フェイトちゃんの言う通り、それだと目立つちゃわないかな?」

「そうでしょうか?以前父に、地球の女性はこのような服装だと聞いた気がしましたので。母が私に持たせてくれていたんです」

なのはとフェイトがギンガの服装にツツこむ。ギンガの服装は桃色の着物に藤の花がデザインされていたものだった。靴の代わりに白

い足袋と下駄を履いている。まるで良い所のお嬢様の様な雰囲気だった。

「ギンねえ、着物にしたんだ。私もそつちにしとくべきだったかな？」

スバルも同じようにクイントから持たされているようだ。

「ギンガ、ちやうで。今の時代は特別な時以外、着物は着ないんや」

「す、すいません。すぐ着替えてきます！」

「まあ、良いだろう。普段から着物を着ている人間が居ないわけではないし。私も以前、初詣で着た事があるからな」

シグナムがギンガを擁護する。八神家では初詣の際、女性陣は着物を着ていたようだ。ラインヤ、ヴィータ、シャマルもシグナムに賛同した。はやてとなのは、フェイトの三人もそのままいいと伝えた。

「みなさん、ありがとうございます」

ギンガは一同に礼を言う。その後、キョウの方を見ていた。キョウもそれに気付き、言う。

「凄く似合ってる。綺麗だぜ、ギンガ」

「ありがとう、キョウ君」

「ほら、二人ともへりに乗り込むぜ。みんなもう乗っちゃったぞ！」

「!

甘い雰囲気になりかけた二人をアギトは注意し、へりに乗る様に言った。

「はい、リインちゃん」

「シャマル。ありがとうございます」

へりの中ではリインがアウトフレームによって体を大きくしエリオとキヤロを驚かせる。シャマルがはやてのお古の服をリインに渡す。他のメンバーは驚いていない。リインを知る者はもちろんのことだが、スバルとティアナもアギトが大きくなれる事を知っていたので珍しい事ではなかったのだ。

「みなさん、あまり驚かないんですね？」

「そりゃあ、アギトで慣れていているからな」

エリオの問いにキョウウが答える。

「せっかくだからアギトも大きくなれば？その時用の服も母さんから預かっているから」

ギンガが荷物の中から黒のキャミソールとスキニーのデニムとサンダルを取り出しアギトに渡す。

「分かったよ。服、サンキューな」

そう言うとアギトは光に包まれる。光が消えると15歳位の赤い髪をロングにした少女が姿を現す。先ほどギンガが出した服を着ている。

「アウトフレームに変身魔法を組み合わせたらこんな事も出来るんだぜ、リイン」

「うわあ、凄いです！！ アギトちゃん！！」

その少女はアギトだった。いつも結んでいる髪の毛は解いている。アギトはキョウウ達の成長に合わせて、自身の姿も成長したように見える魔法を以前も使っていたが、アウトフレームと組み合わせると普通の大人と同じ位までの大きさに変身出来るのだ。今は親友のスタイルと同じ世代に見えるように調節している。

「アギちゃんのそれ、久しぶりに見たな」

「うっ、アギトさんまで。私とリインさんが一番小さいみたいです」
キヤロはリインが大きくなれるのならアギトも可能だろうとはキョウの言葉もあり分かっていたが、予想以上にその姿が大人っぽいものだったのでショックを受けていた。

「大丈夫、焦らなくてもキヤロはすぐ大きくなるよ」

フェイトが彼女を励ましていた。

その後、トランスポーターに着くと、なのはとフェイトは一同と別れる。少し先になのはとフェイトは現地入りをし地球で合流することだった。はやてはやる事があるらしく、シグナムとシャマルと共に少し遅れるとのことだ。別のトランスポーターで転移することだ。彼女らを除いたメンバーは二人を見送った後、揃って地球に転移するのだった。場所はなのは達の故郷である海鳴市とのことだ。

「地球か。どんな所か楽しみだぜ」

キョウは嬉しそうに呟いていた。

Ep45 地球へ1 (後書き)

私の尊敬している先輩、柳先生とコラボさせていただける事になりました！！

読んでいただきありがとうございました。

Ep46 地球へ2(前書き)

微妙にドラマCDとは異なった展開が出てくるでしょうけど、お付き合いいただけると思います。

執筆中に『リリカルおもちゃ箱』のBGM『Song to You』を初めて聴いたんですが、短いけど良い曲ですね。ニコ動でピアノ演奏をしておられる方がいらっしゃったのでそれを見ました。つべにも上がってました。

『S2U』ってゲーム版で、リンディさんが自分がクロノに歌を歌えないから「Song to you(歌をあなたに)」という意味を込めて贈った杖らしいです。その為、オルゴールの様な機能も付けられているとのことですよ。

曲を聞いた後、この設定を読んだだけで涙腺が崩壊してしまった。そっちのリンディさんって並行世界を守るために自分を犠牲にしようとしたらしいです。母から子への無償の愛情より美しいものってあるだろうか。

「デユランダル」なんてもんを使ってんじゃねえよ。アニメ版とは設定が異なるからこんなこと言っても仕方ないですが……。
ゲーム版やってみてえ。

失礼しました。では本編の方をどうぞ。翠屋での土郎とキョウ達の会話のシーンを読む際に、BGMでそれを聴いてもらうと何か雰囲気出ると思います。

E p 4 6 地球へ2

キヨウ達と新人たち、そして守護騎士の四人は海鳴市に到着した。そこには湖があり、近くにはコテージも見える。

「へえ、ここがなのはさん達の故郷かあ。良いとこだね、アギちゃん」

「ああ。太陽も一つだし、空も青いしな。地球ってミッドに結構近い感じなんだな」

「お、湖がある。釣り具を一式持ってきて良かったぜ。エリオ、後で一緒に釣りしねえか？」

「僕もですか？ やった事ないですけど……」

「キヨウ君、お仕事で来てるんだよ？」

「先輩、相変わらず釣りが大好きなんですな」

「キャラ、どうしたですか？」

「山や水、それに自然のにおい。どれもミッドにそっくりなんですな」

新人達もキヨウ達も初めての地球に興味津津の様だった。仕事そっちのけで釣りを始めそうなキヨウにギンガは釘を刺していたし、キャラに至っては自然の匂い等と言いついていた。

「みんな、着いたみたいだね」

なのはが一同に声をかける。なのはの他にはフェイトと、それに初めて見る女性がその場に居た。

金髪をショートにした、なのは達と同世代に見える美しい女性だった。彼女は車でそこに来ているらしく後ろには車が停められている。

「紹介するね。この人が現地協力者で、私達の友人で幼馴染の」

フェイトがその女性を紹介しようとするが金髪の女性がそれを遮り自己紹介を始めた。

「私がフェイトとなのはの幼馴染のアリサ・バニングスです。みなさんよろしく」

「アリサちゃんがあのコテージの所有者さんです。私達に活動の拠点を提供してくれたです」

「アリサちゃんは今大学生で、私達が地球に戻る事を伝えたら駆けつけて来てくれたんだ」

なのはやリインが彼女の事を補足する。なのはとフェイトは先に到着していてアリサと再会を楽しんでいたようだ。新人達とキヨウ達は彼女に挨拶と自己紹介を行った。当然、ギンガも服装も話題に上がる。

「へえ、あつちにも着物つてあるんだ。なかなか良いじゃない？」

「父からこの世界では女性は着物を着ると教えられていたので。これは母が用意してくれたんです。手作りですよ」

「凄いお母様なのね。着物を自分で織るなんて……」

クイントは退職後、裁縫の腕が前以上に上達をしているようで着物すら織れる程になっているようだ。近所の奥様達を招いて裁縫教室等を平日には開いている。それは有閑マダム達には大評判らしい。

自己紹介が終わるとキヨウ達を含むミッドチルダで育った一同は地球の事についてなのは達に質問等を行っていた。地球はミッドと違い魔法文化はないが科学が発展している等、初めて知る事も多く一同は三人の話を真剣に、それでいて楽しそうに聞き続けた。

そついった話が終わると、次ははやて達の事について質問が行われた。

なのは達の話によるともう一人の幼馴染の月村すずかの家にキヨウ達とは別の転送ポートで転移してくるらしい。まだ到着はしていないとのことで、着き次第こちらに向かうということだった。

はやてたちが到着するまでに一同は任務の確認を行い、スターズとライトニング、それとキヨウ達三人の三組に分かれて街中にサーチャーを設置していくことになった。

原則、フォワード陣が中心となり行っていくことになっているのでキヨウ達は自分達のサーチャーの設置が終了次第、隊長達に連絡を入れてから自由にしてもよいとのことだった。

「ギンねえ達だけズルい」

とスバルが駄々をこねる一幕もあったりしたのだが、ギンガにエリオやキヤロを引き合いに出され注意されていた。

「スバル、エリオ君達を見なさい。我がままなんて言ってないじゃ

ない」

その場に居る者達はナカジマ姉妹のそんなやり取りを見て微笑ましく思うのであった。

その後、キヨウ達三人は海鳴市の繁華街をサーチャーを設置しつつ回っていた。

時折、路地裏に入りサーチャーを放っているのだ。

街を歩く際、ギンガの服装はそこそ目立っていたのだが、それ以上に、彼女の持つ清楚な雰囲気やその美貌に街を歩く男性達は振り返ったり、足を止めたりしていた。

桃色の着物は彼女の青味がかった紫の髪にとてもマッチしていたの

だ。

それだけではない。キョウとギンガ以外にその場にはアギトもいるのだ。

アギトも10代半ばの姿に変身しており、黒のキャミソールにスキニーという出で立ちだ。グラマラスではないがスレンダーで小悪魔的な雰囲気醸し出す美少女なのだ。上半身は露出が多いように思えるが厭らしさはなく、彼女の健康的な魅力を引き出していた。

そんな美少女二人を連れているキョウに対して町の男性達の眼は敵意にみちていた。しかしキョウも10年以上鍛錬を続けており、服の上からでは分かりにくい鍛え上げられた肉体を持っている。歩き方も武道経験者特有の重心がぶれないものだったのでちよっかいをかけようとする者は皆無だった。

彼自身、二人と目立ってはいないがそこそこ整った顔立ちをしていた。ブルーのデニムに革のブーツ、白いTシャツに背中に日輪の紋章が入った黒いライダージャケットという服装だった。

「地球ってなかなか良いところだよな」

「そうだね。ミッドに比べると格段に治安が良いみたいだし」

「私達も頑張って、ミッドをここみたいな住みやすい世界に変えていこうぜ」

「そうだな、アギト。頑張ろうな」

「三人で頑張っていこうね」

三人は鳴海市の治安の良さに驚いていた。其れと共に自分達の住むミッドもこの様に暮らしやすいものにしていこうと決意を新たにするのだった。

「よし。これで終わり。じゃあ、なのはさん達に連絡入れるね」

それから10分ほどで三人はノルマを終えたようで、ギンガがなのはに念話を送る。なのははスターズで行動しているようで、後で『翠屋』という喫茶店で落ち合おうとのことだった。

キヨウ達三人は翠屋に向かった。

幸運な事に、翠屋は念話を送った場所からは10分程の距離にあった様でキヨウ達はすぐに見つける事が出来た。それほど大きな店ではなかったが、なかなかお洒落な雰囲気のお店だった。

派手ではなく内装は落ち着いた感じで、清潔感もあった。店内にはピアノのBGMがかかっており、店の雰囲気にマッチしていた。挽きたてのコーヒー豆の良い香りが店内に広がっている。

中にはやさしそうな黒い髪のマスターが居た。年は三十代だろうか。武術をやっているようで只者ではないと感じられた。しかしそれ以上に良い人であると分かるような空気を放っていた。

「いらっしゃい。三名様ですか？」

「はい。こちらで待ち合わせをしたく思っています」

「じゃあ、カウンターにどうぞ」

三人は席に通された後、それぞれ注文をとった。木で出来たカウンターに数人分の椅子が並んでいた。キヨウはブレンドコーヒーをギンガとアギトは紅茶と本日のお勧めケーキを注文した。

「三人とも学生さんかい？」

注文が届き、それを三人が食べているとマスターが話しかけてきた。

「いえ、私達は仕事でこちらに来ました。これから上司とここで落ち合う事になっているんです」

ギンガが答える。

「そうか。うちの末の娘もね、君達とあまり変わらない位の年なんだが、もう働いていてね。最近は会っていないもんだから、二人を見ると娘を思い出してしまっただけね」

マスターは三人を優しい目で見ながら答える。

「そうなんですか。でも、連絡がないのは元気な証拠って言ったりもしますし」

キヨウがマスターに言う。

「ふふ、そうだね。ありがとう。コーヒーの方は如何だい？」

「すごくおいしいです。香りに深みがあって、良い豆を使っておら

れるのもそうでしょうけど。それだけでこんな美味しいコーヒーは煎れられないですよ」

「嬉しい事を言ってくれるね。おやおや、お嬢ちゃん。ケーキそんなに気に入ったかい？」

アギトはケーキを黙々と食べていた。鼻にはクリームまで付けている。その日のお勧めケーキは生クリームがトッピングされた抹茶のシフォンケーキだった。

「このケーキ凄く美味しい！こんなの今まで食べた事ないよ」

「そうか、ありがとう。うちの店では妻がパティシエールを務めているんだ。まだまだあるから、お代りをしてくれて構わないよ。それだけ気に入ってくれたのなら、お代りの分は只で良いから」

「いえ。そんな、悪いですよ」

アギトが遠慮をする。しかしマスターは笑顔で答える。

「良いんだよ。君達みたいなお客さんと話すのは楽しいからね。それに気に入ってくれたのなら嬉しいよ。楽しいおしゃべりが出来たから、そのお礼さ」

その後も三人はマスターと会話を楽しんだ。奥からは彼の妻がアギトにお代りのケーキを持ってきた。彼女も一緒になって楽しくも穏やかな時間を過ごしていった。マスターの妻は三十代らしいが、とてもそのようには見えず、年齢を聞いた時、三人はとても驚いていた。彼女もマスターと同じように優しい雰囲気を持った茶色い髪の女性だった。

マスターの名は高町士郎といい、妻は桃子という名前だった。

店内はゆったりとした、それでいてほんわかとした空気に包まれていた。窓からは午後の温かい日差しが差し込んでいる。キョウ達は心底リラックスが出来ているようだ。

日常の忙しい日々の疲れをとってくれるような夫妻の笑顔、それと店の雰囲気、キョウは翠屋をとても気に入っていた。

穏やかな空気の中で三人は士郎に尋ねた。武道をやっているかと。士郎は剣術をやっているらしく、キョウ達三人が武道をやっているという事は店に入った瞬間に分かったらしい。

このような会話の時も、店の中の空気には変化がなかった。それ程この翠屋という店は素晴らしいのだろう。その後もキョウ達は仕事の悩みや、色々な事を夫妻に話した。嬉しかった事等を話せば二人は自分の事のように喜び微笑みかけてくれ、悩みなどは親身になって相談に乗ってくれた。のんびりとした時間は過ぎていった。

キョウ達が店に入り、一時間半ほど経過したときに店のドアのベルが鳴った。

「ただいま！」

女性の声がする。この店の娘が帰ってきたようだ。

「ああ、お帰りなのは。キヨウ君達、これがさっき言っていたうちの末娘のなのはだよ」

「なのは？」

キヨウ達が振り返るとよく知った人物の顔があった。後ろにはテイアナとスバルの姿も見える。

「ごめんね、三人とも。かなり待たたでしょ？」

「いえ、そんなには。其れに士郎さんや桃子さんとお話するのは楽しかったですから」

キヨウが答える。事実、三人は時間が経つのを忘れていた。

「おや、三人はうちのなのはと知り合いだったのかい？」

「はい。さっき言っていた上司ってなのはさんの事なんです」

士郎の問いにギンガが答える。

「なのはが迷惑をかけてはいないかしら？」

「もう、お母さん！そんなことないよ」

「そうですよ、桃子さん。なのはさんからは、私達とてもよくしてもらってます。尊敬する先輩ですよ」

桃子の問いにムキになるなのは。アギトが桃子になのはの事を伝える。

「そうなの？アギトちゃん。なのは、良い後輩を持ったわね」

そんな様子を見たスバルとティアナは二人で話していた。

「ねえ、ティアナ？」

「何よ？」

「何かなのはさんが普通の女の子みたいだね」

そんな二人にギンガが声をかける。

「スバル、ティアナ、二人もそこで立ってないで、なのはさんの」
両親に自己紹介しなさい」

「ごめん、ギンねえ。私、なのはさんから教導していただいている、
スバル・ナカジマといいます」

「うちの妹が失礼しました」

「ギンガちゃんの妹さんかい？元気があって良い子じゃないか。私
はなのはの父の高町士郎というんだ。二人ともなのはが色々迷惑を
かけていないかい？」

「「いえ、そんなことは」「」

「もう、お父さんまでそんな事言つの？」

なのはは少しへそを曲げてしまったようだ。

「私はティアナ・ランスターと申します。なのはさんからはいつもお世話になっております」

「あらあら、ご丁寧にどうも。ティアナちゃんね。私は高町桃子です。あの子少し頑固な所もあるけど良い子だから二人とも仲良くしてあげてね」

「はい!!」

「なのはもいい加減、機嫌を直せ。キヨウ君達を始めスバルちゃん達、みんないい子じゃないか。喋っていて分かったよ。良い友達を保持しているようじゃないか。出会いに感謝するんだぞ」

「分かってるってば。みんないい子たちだよ。私の大切なお友達なんだから」

キヨウ達一同なのはから大切な友達といわれ、心の中は嬉しい気持ちでいっぱいになっていた。

それからなのは達とキヨウ達は翠屋を後にした。帰りに桃子がその場に居ないメンバーの為に土産にケーキ等を持たせてくれた。

「なのはさん」

「何？キヨウ君」

「良い御両親をお持ちですね」

「うん!!」

なのはは満開の笑顔で答えたのだった。

Ep46 地球へ2 (後書き)

キヨウ達三人と高町夫妻だけのシーンは書いていて楽しかった。
あんな喫茶店、行ってみたいです。

読んでいただきありがとうございました

EP47 地球へ3(前書き)

何処に需要があるんだっていう、男湯の話WWW

キヨウ達がアリサが提供してくれた待機所に戻ると、はやてやシグナム達副隊長陣もその場に到着していた。其れに加えて、初めて見る四人の女性の姿もあった。

茶色い髪をショートにした20代の女性、黒味がかった茶色の髪をリボンで一つ結びにした眼鏡の女性、蒼いロングヘアに白いカチューシャを付けた女性、それに犬耳のオレンジ色の髪の女の子の姿がそこにはあった。四人とも美人といえる容姿だった。

四人の女性はそれぞれ自己紹介を行った。ショートヘアの女性は機動六課の後見人であり、フェイトの兄であるクロノ・ハラオウン提督の妻、エイミーと名乗った。キヨウ達三人も面識はなかったがクロノの名は知っていたので少々驚いていた。眼鏡の女性はなのはの姉で、美由希というらしい。彼女も武道経験者の様で立ち振舞いに隙が見えなかった。それでいて両親の様に優しい雰囲気を持った女性であった。

カチューシャの女性は月村すずかといい、なのは達の幼馴染とのことだ。アリサと同じように大学生だという。犬耳の少女はフェイトの使い魔で名前はアルフという。以前は前線に出ていたが、現在はエイミーの子育てや家事を手伝っているとのことだった。

その後、キヨウ達や新人フォワードメンバーも彼女達に自己紹介をした。アギトはその時、変身魔法を解き、アウトフレームのみの状態になっていた。長時間の変身は疲れらしい。サイズはリインやアルフと同じ位になった。聞く所に寄るとアルフも大人モードがあるらしい。家事が得意とのことであって、アギトとアルフの二人はすぐに打ち解けていった。

自己紹介が終わると夕食の準備が始まった。料理の得意なはやてが

それを仕切る。献立はバーベキューとのことだった。ギンガとアギトも料理が得意なので戦力になった。ティアナとスバルも料理を手伝う。意外なことだが、スバルもなかなかの腕を持っている。ギンガの様にクイントの手伝いを小さい頃からよく行っていたのだ。ティアナは兄が死んでから一人暮らしだったのだが、全寮制の魔法学校に通っており、料理経験は浪人中だけだったのでスバルより料理の腕が下の様だ。

隊長陣や、現地協力者のアリサ達も料理の腕はなかなかの様でできばきと下ごしらえを行っていく。ただし、シヤマルを除いて……。

「ああ、シヤマル先生！！ 包丁はそんな持ち方しちゃ危ないですよ。スバル！！」

「了解！！ ギンねえ。ささ、シヤマル先生。具材を洗うのをお願いします」

「ええ？ 私だってみんなのお手伝いしたいのに」

「シヤマル、具材を洗うのも重要な作業やで」

「うう、分かりましたよ。はやてちゃん」

「はあ、シヤマルの料理の腕はあんま上達しねえな……」

シヤマルはナカジマ姉妹に包丁を取り上げられ簡単な作業へとまわされる。はやくもシヤマルの料理の腕を嫌という程知っているので、二人の説得に協力する。

其れを見ていたヴィータはため息交じりに呟くのであった。

キョウはその間、エリオとキャロと過ごすように言われたので、念願の釣りをしようと張り切っていた。ラインもそれに同行するようだ。人数も多いので食材調達も兼ねている。

「よし！！ エリオ、釣りするぞ！！ もう一本釣り竿があるからキャロもやろうぜ？」

「はい、キョウさん。初めてなんで色々教えてください」

「私、釣りなんて久しぶりです。エリオ君はやった事ないんだ？」

エリオは初めて経験する釣りに興味シンシンだった。キャロは経験もある様でエリオほどはしゃいだ様子はないが、それでも楽しめという気持ちが伝わってくる様子であった。

「エリオは都会育ちですから、そういう経験ないですもんね。ラインも初めてだから楽しみです。でもキョウさん、釣り竿は何処にあるですか？」

キョウ達についてきたラインがエリオをフォローする。彼女は現在

キヨウの肩の上、アギトの特等席に腰掛けている。
リインの言葉から分かる通りキヨウ達は手ぶらで湖畔に居るのである。

「ああ、釣り具はここだ」

キヨウのデバイス『フランメ・ファウスト?』から光が放たれると三本の釣り竿が現れる。どれもルアーらしきものがついていた。

「私、デバイスの格納領域に釣り具を入れる人初めて見ました」

キャラが苦笑いをしながら言う。

「訓練校のサバイバル演習で食材を調達するのに釣りを行ってからかな。それ以来、釣り具と必要最低限の救急セットと保存食は何時も入れてるぜ」

「キヨウさんはスクライアー族か何かですか?」

エリオが突っ込みを入れる。ミッドでサバイバルといえば遺跡発掘で生計を立てるスクライアー族が有名なのだ。

「それより早くやろうぜ。キャラはルアーの使い方分かるか?」

「普通の餌でしかやった事ないです」

「じゃあ二人に説明するか。まずは……」

キヨウは10分程説明を行うとさっそく釣りを開始する。キャラは釣り経験者なのですぐにルアーを使いこなす。エリオも持ち前の学

習能力に加え、センスがあつたのだろうか初めてとは思えない程の竿捌きを見せていた。

「キヨウさんは何時から釣りをやってるのですか？」

「俺か？ 小学校入る前にギンガんちと俺んちでピクニックに行つてさ。親父とおっちゃんに釣りを教えてもらったんだ」

「お父さんとナカジマ三佐にですか？」

エリオが尋ねる。彼はすでにマスを一匹釣り上げていた。エリオにも釣りのセンスが有つたらしい。

「ああ。其れから時々三人で釣りに行つたりしてたんだ。たまにギンガとスバルも付いてきてたけどな」

「へえ〜。私は釣りっていうとご飯を食べるためにする物ってイメージが強いです」

「キャロって見かけによらず結構遅いんだな。おっ、エリオ！！引いてるぜ」

「あっ、はい！！」

キヨウがキャロに話しかけているときエリオの竿が大きく撓っていた。

「凄い、エリオ君。きっと大物だよ」

「エリオ手を貸すぜ」

「はい！！　ありがとうございます」

キョウはエリオの後ろに回り彼の体を支える。キョウはエリオの手伝いをしながら十分の幼い頃の事を思い出す。今の自分と同様にソウジヤゲンヤが身体を支えてくれていた事を……。まさか自分も同じ事をする様になるとはと、意識せず顔に笑みを浮かべていた。

「頑張るですよ！！　エリオ！！」

「慎重にね！！　もうすぐ釣れそうだから頑張って！！」

リインとキャロの二人が声援を送り、その声にエリオの竿を引く腕にも力がこもる。リールを巻き取ると水面には魚影が見える。

「あと少しだ、行け！！」

「はい、キョウさん！　たああありゃあああり！！！！」

エリオは無事魚を釣り上げる事に成功する。60cmオーバーのブラックバスだった。

それから三人は暫らく釣りを続けた。

「みんな、御飯よ！！　早くいらっしやい！！」

呼びに着たギンガの声で釣りは終了した。

三人は合計で10匹程の魚を釣り上げる。キョウとキャロは四匹ず

つ、エリオは二匹であったが一番の大物を釣り上げた。

彼らの釣った魚は、バーベキューと共に食卓にのる事となる。

「うわあ、大きいね。あの魚ってなんていうんだっけ、フェイトちゃん?」

「確か、ブラックバスだと思う。エリオ凄いじゃない、頑張ったね」
フェイトを始め、その場にいる一同はエリオの釣果を褒めた。もちろんキョウやキャロの分も忘れてはいない。

「テストロツサ、あの魚は確か食べられなかったか?」

「えっ、そうなんですか? シグナム副隊長」

シグナムの言葉でエリオはしょんぼりとする。せつかく釣り上げた大物が食べられないのはやはり残念なのだろう。

「食べられない事はないわよ、ねえ？ はやて」

「そつやな、アリサちゃん。臭いがきついから調理が難しいって聞いた事はあったけど。それより魚を捌ける人、この中に居るんか？」

エリオの様子を見て不憫に思ったアリサがはやてに声を掛ける。実際にブラックバスは処理さえちゃんとすればソテーにして食べられるのである。

「俺、出来ますよ」

「私も出来ます。アギトちゃんも大丈夫だよね？」

「もちろん！！ スバルも手伝ってくれよな」

「了解、アギちゃん」

「へえ、キヨウ君達、魚捌けるんだ」

さすがが感心したように呟く。ナカジマ姉妹とキヨウとアギトは、釣りの日は食卓に魚が並ぶので捌き方をマスターしているのだ。四人に教えたのはクイントではなく、ソウジとゲンヤなのだが……。

四人はそれから慣れた手つきで魚を捌いていった。マスは臭みが少ないとはやてが言っていたのでそのままバーベキューの食材に、マスは切り身にエイミイが持参したハーブや香辛料をまぶして臭みを

誤魔化し、小麦粉とバターでムニエルにされるのだった。
キヨウの料理を初めて目にする面々は意外そうに彼を見ていた。

「じゃあ、いただきまーす!!」

はやての号令で夕食が始まった。その場に居る全員がその時間を楽しんでいた。

「うう。美味しい。スバルだけでなく先輩にも敵わないなんて……」

ティアナは先ほどの調理中に他のメンバーの料理の腕を目の当たりにして、自信を喪失しているようであった。それに魚を捌くキヨウの様子を見てそれが更に進んでしまっていた。

「そうか?」

キヨウは自分の料理の腕が優れているとは感じていなかったのだ、

淡泊な返事を行う。

「ティアナも下手ってわけじゃないじゃない。続ければ誰でも上達するわ。私が教えてあげようか？」

「ありがとうございます。ギンガさん……」

気落ちするティアナをギンガが上手くフォローする。ティアナはギンガの気遣いをとても嬉しく思うのだった。

「でも、シャマルは別だよな。おっ、バスもなかなかイケるな」

「ひどい、ヴィータちゃん。ねえ、ギンガちゃん？シャマル先生にもお料理教えてくれないかしら？お願い」

「え、ええ。構いませんよ」

後日、機動六課ではギンガを講師にティアナとシャマルが料理を教わるという光景が見られる事になる。はやてやアギトが講師として参加する事もあった。ティアナはメキメキと料理の腕をあげていく事となるのだから、シャマルは想像にお任せしよう。

食事が終わると、一同はスーパー銭湯に向かう事となった。コテージにはお風呂が付いていないらしい。男女で別れる際、こんな事があった。

「ねえ、エリオ君。11歳までは男の子も女湯に入って良いみたいだから一緒に入ろうよ!!」

「そうだね、久しぶりにエリオとお風呂に入るのも良いね」

「待つてよキャロ。僕は男湯で良いよ。フェイトさんまで」

エリオは顔を真っ赤にして抵抗する。このままだと女湯に連行されるとなった時、キョウが助け船を出す。

「申し訳ないんですけど、俺一人だと寂しいからエリオを男湯に連れてって良いですか?」

「キョウさん!!ありがとうございます。僕もキョウさんと男湯に入ります」

エリオは嬉しそうだった。彼にとってキョウの一言は天の助けに等しい物だったようだ。フェイトやキャロは少し不服そうだったが、そのまま女湯に入っていた。

「うわあ、大きいお風呂ですね」

「そうだな、俺もこんな風呂は初めてだ」

キョウとエリオは男湯に入っていた。客は彼ら以外にはおらず、貸し切り状態だった。二人は湯船につかる前に体を洗う。注意書きに従っているのだ。

「キョウさん、凄い身体ですね？ 腕だって凄く堅いです」

「エリオだってそのうち、こんな身体になるさ。鍛え続けたらな」

エリオがキョウの二の腕を掴み感想を言う。純粹に彼の肉体に憧れを持ったようだ。

キョウの肉体は引き締まっており、まるでネコ科の猛獣のように、しなやかに鍛えられた筋肉が体を覆っている。俗に言う細マッチョというやつだった。鍛錬により付いたのか、目立ってはいないが様々な傷跡が見える。

「ほら、エリオ。後ろ向け。背中洗ってやるよ」

「ありがとうございます。僕、大人の男の人と一緒に風呂に入るのは初めてで何か楽しいです」

エリオも男子寮に暮らしているのだが、時間帯が違うのか隊員達と入浴した事がないようだ。

「ミッドに帰ったら、寮の風呂と一緒に入ろうぜ。グリフィスやヴアイスさんも誘ってさ」

「うわあ、楽しみです。それにしてもすごい傷の数ですね」

「ああ。俺の未熟さの証さ。アギトやギンガがすぐ治療をしてくれていたから、あんま目立たねえと思うけど」

「キョウさん、この傷は？」

エリオがキョウの腹部に付いた刺し傷の跡について尋ねる。その傷は他の傷と違い目立っている。キョウはその傷について聞かれ、一瞬表情を曇らせるがエリオに話を始める。

「良い機会だしな。教えてやるよ。この傷はな、俺の恩人に付けられたんだ」

「えっ、恩人の人にですか？」

「ああ、半年前に俺達三人が入院した事件を知ってるな？」

「はい、局内でも有名でしたから。地上の英雄といわれたゼスト・グランガイツが……。まさか？」

「そのまさかだ。あの人は俺達三人の憧れだ。何であんな事をしたのか、それを知る近道だと思ってロストロギアを扱うこの機動六課に来たんだ」

「そうだったんですか……」

「ゼストさんと俺の親父、それにレジアス中将は親友でさ。中将から六課に行つて地上との連携をスムーズにして欲しいって」

「レジアス中将つて強硬派の？」

「中将を誤解している。あの人をあまり悪く言わないでくれ。中将は地上の事を、誰よりも考えている人だ。俺の親父とゼストさんの三人で地上の平和を守ろうと誓つて、それを果たそうとしているだけなんだ!!」

キヨウは自分の尊敬するレジアスを悪くいわれ、声に力がこもってしまう。それによりエリオは少し委縮してしまった様だ。

「うっ、すみません」

「いや、俺の方が悪かった。ごめんな」

エリオの声に冷静になりキヨウは話を続ける。流石に自分の行いは大人げないと思つたのだろう。

「知つての通り地上は深刻な人材不足に陥っているんだ。高ランク魔導師は少ないし、予算の面でもかなり厳しいもんがあるんだよ。だから取れる手段が少ないんだ。その事を『海』が中心となつて発足されたこの機動六課メンバーに伝えるのも俺達に与えられた仕事の一つなんだ。忙しくて、話すのも今になつちまつたけど……」

キヨウはエリオに対して現在の地上が置かれている状況や自分達の合流の目的を伝える。それを聞くエリオの顔は真剣その物といった所だった。それから暫らくキヨウはエリオに色々な事を伝える。レジアスの考えている事や、それに対しての周りの反応や温度差など

を。

「キヨウさんのお話で地上の現状が分かって良かったです、それに中将の事も」

キヨウの話によりエリオはレジアスの見方を少しだけ改めて見ようと考えるのだった。今までよりもレジアスの事を知る事が出来たのが大きいだろう。

「ありがとう。俺とギンガとアギトは親父たちの誓いを受け継ぐと鍛錬を続けているんだ。生まれ育ったミッドの平和を守るようになるう。助けを求める人の力になるうって」

「そうだったんですか。だから毎日あんなハードな鍛錬を……」

「ああ。ゼストさんが死んだと思われた八年前の事件の前日、ゼストさんから想いを託されたんだ」

「そんな事が……。それでキヨウさんとゼストさんはどうやって出会ったんですか？」

「それは……」

キヨウは言葉に詰まり目を瞑り少し考えた後、ゆっくりと口を開く。キヨウの様子にエリオも身構えてその言葉を待つ。

「俺ってさ、人造魔導師ってやつなんだ。『プロジェクトF』っていう技術で生み出された」

「そ、そうなんですか？」

エリオの表情が曇る。

「俺はアギトとのユニゾン適性が高い魔導師を生み出すって研究で、古代ベルカ人の遺伝子を用いて作られたみたいなんだ。炎を出せるのもアギトとの親和性を高めるための物だったみたいだ。俺とアギトはゼストさん達に保護されて、そのベルカ人の末裔である親父、ソウジ・アーデルハイドに引き取られたのさ。親父も凄く良い人で、俺に力を与えてくれた。それに安らぎや居場所もな。家族の温かさも教えてくれた。親父には感謝してるよ」

「そうだったんですか……」

エリオも何やら考え込む。彼も何やら秘密を打ち明けるといった雰囲気であった。

「キョウさん。僕も、『プロジェクトF』によって生み出されたんです」

エリオは自身の出生の秘密を語った。彼はすでに死亡している『エリオ・モンドリアル』のクローンとして生み出され、初めはその親の下で生活していたが、管理局に保護され特別保護施設で育ったというのだ。その後、フェイトに引き取られ今に至るとのことだった。

「それじゃ、俺達は兄弟みたいなもんだな」

「それならキョウさんの事を兄さんって呼んでも良いですか？」

キョウは優しい笑みを浮かべエリオの頭を撫でながら答える。

「ああ、もちろんだぜ。弟よ」

「兄さん!!」

エリオはそれからしばらくの間、涙を流していた。自分以外にも同じような産まれ方の人間がいた事を知り、それまで自分では気づかなかった寂しさがあふれ出してしまったのだ。キョウは彼が落ち着くまで頭を撫でていた。

その後二人は揃って湯船につかった。

二人は傍から見れば少し年の離れた兄弟にしか見えないようだった。

Ep47 地球へ3 (後書き)

エリオがゼストを呼び捨てにしたあと、キヨウのセリフに「さんを付ける、デコ助野郎」と書かなかった自分をほめてやりたい。ギンガ呼びに来た時のセリフも「飯だぞ、孟徳」と書きそうになった。

次はお待ちかね、女湯です。

読んでいただきありがとうございました。

E p 4 8 地球へ4 (前書き)

三話程度にしようと思ったのですが、別のアイデアまで浮かんできて、初めに考えていた物と違う物になってしまいました。

粗筋や流れを考えるけど、思いつきもぶち込むのが私流です。

番外編も後で掲載しますので、そちらも読んでいただけると嬉しいです。

おっばい、おっばい！

R - 1 5 は入れるべきか……。

ネタの部分もありますけど、お付き合いください。

キヨウとエリオが男湯で親交を深めているとき、女湯では……。

「うわあ、凄い！！ いろんなお風呂があるね、アギちゃん」

「そうだな。あつ、電気風呂ってあるぜ。ほら、ティアナもギンガも早く入ろうぜ」

「ちょっと、二人とも。お風呂で走ったら危ないわよ」

アギトはスバルと共にはいしゃいであり、そんな二人をギンガがたしなめる。

「ワイン風呂ですって、ギンガさん。お肌に良さそう。一緒に入りましょうよ」

そんなギンガもティアナに手を引かれていた。普段は落ち着いているティアナも、初めての銭湯に対して年相応といった所だった。

「ほら、みんな。お湯の使い方とかお作法とか教えてあげるから、こっちに来て」

なのはが彼女たちを呼び、銭湯での入浴の仕方を説明した。その時もスバルとアギトは早く入りたそうであつた。

「久しぶりに来たら随分と変わったみてえだな」

「本当だな。前と違って湯の種類も増えているようだ。これが仕事

じゃなかったらゆっくり入れたのに、残念だ」

「わあい、大きいお風呂です！！ シャマルも早く来るですよ！！」

「うふふ、みんな嬉しそうね」

副隊長陣も楽しそうだった。お風呂好きなシグナムはとてもしらックスした表情を浮かべていた。

「ふはははは、風呂やあ！！ 私は帰って来たでえ！！ 八神はやて二佐、突貫します！！」

「はやて、何、どこかの軍人みたいな事を言ってるのよ！！ それにどっちか片方にしなさいよね！！」

はやてにアリスが突っ込みを入れる。彼女も久しぶりに友人達と過ごすので楽しそうだ。

「アリスちゃん、元ネタ分かるんだね……」

「すずか、そつとしいてあげよう」

すずかは、はやて達の様子に苦笑いをしていた。フェイトは彼女の肩にそつと手を置き呟く。

それから一同は洗い場で体を洗い、湯船へと入っていった。

「ギンガさん、相変わらず肌がきれいですね。色も白くって、ずっと鍛錬し続けてるなんて思えないです」

「そうかな？ ティアナだつてきれいだと思うけど。ウエストとかも細くって羨ましいわよ。それにシグナムさんだつて凄いきれい」

「私がか？ 余りそんな事は意識した事はなかったんだが……」

ギンガとティアナとシグナムの三人はワイン風呂に浸かっていた。2人の若々しく、きめ細やかな肌は、水をはじいている。それはシグナムも一緒の様で、彼女の肌も二人には決して劣つてはいなかった。

スタイルも二人に勝っている。濡れた髪が鎖骨や首筋に張り付いており、二人にはない色気を放っていた。

「みなさん、スタイルがよくって羨ましいです」

「キャラもこれから大きくなるよ」

「私もフェイトさんみたいになれるでしょうか？」

キャラとフェイトはその隣のジャグジーに入っていた。キャラはただお子様体型だが、フェイトはシグナムに匹敵する程のナイスボディでメリハリのある我がままボディだった。

「戦術レベル、目標確認……」

「きゃっ、はやて部隊長？ いきなり何するんですか？」

はやては突然ギンガの後ろに現れ、低い声で呟きつつ彼女の胸を揉みだす。はやては、なのはとすずかとアリサの四人でワイン風呂ではなく炭酸風呂に入っていたのだが、いつの間にか其処に移動していたようだ。ギンガとシグナムに気付かれずに移動するとは、この部隊長只者ではない。

「はやて！！ それって恭也さんのセリフ！！」

「アリサちゃん！！ うちのお兄ちゃんは、そんなこと言わないよ！！」

「なのはちゃん、突っ込んだら負けだよ……」

すずかはフェイトの影響か、なのはに放っておくようにいった。

他のメンバーもそれぞれでお湯を楽しんでいるようだった。スバルとアギトはラインを様々な風呂に連れまわしていた。ラインも二人と共に楽しんでいるようでテンションが高かった。それ以外のメンバーもサウナや打たせ湯など様々なお風呂を楽しんでいる。

「ギンガもええもん持っとるな。こんだけのもの、キョウ君は一人占めしてるんか」

はやてはニヤニヤながらギンガの胸を揉みながら言う。胸を揉む手は強弱をつけられている。

「ん、あつ。ダメです、や、やめてください。其処は今、敏感になつて……」

ギンガは髪を一筋口に啜え、声を出さないように我慢をしていた。しかしはやてのテクニクにより艶やかな声を漏らしてしまう。彼女の白魚の様な細い指がギンガの肌を這う。

「はっ、はわわわ。シグナム部隊長」

ティアナは二人を見てキャラが壊れてしまったのか、何時もと違う口調でシグナムに声をかける。

「ああ、ティアナ。主はやて、そのへんで止めてください!!」

「ふあつ、あつ、ああ、ダメっ」

シグナムの言葉ではやては手を止める。はやては微妙に名残惜しそつだった。ギンガもなにか大切なものを失いそうだったが無事なようだ。

「すまん、ギンガも本当にすまんかった。思わず暴走してしもうた」

「はあ、はあ。もう、はやて部隊長。今度やつたら怒りますからね!! キヨウ君にだって触られた事ないんですから。シグナムさん、ありがとうございます。助けていただいて」

幸いな事にギンガはそこまで怒ってはいないようではやての謝罪を

受け取る。

「へえ、ギンガとキヨウ君ってそういつ関係なんだ？」

いつの間にかフェイトがワイン風呂にキャロを連れて入ってきていた。

「皆さん知らなかったんですか？」

「もう四年近く付き合ってるんだぜ」

スバル達三人も耳に入ったのかその場に現れる。他の者もそろそろとワイン風呂に向かって来る。恋バナはやはり女性陣には人気の様なのだろう。

「はい、そうですよ。私とキヨウ君はスバルとアギトが言った通り付き合っています」

「そうだったんですか？ 良かったあ」

「何が良かったの、キャロ？」

「フェ、フェイトさん？ 何でもないです」

それから女性陣はギンガに根掘り葉掘り聞き出していく。恋愛経験が少ない者が多いのか、ギンガの言葉には興味津津の様で、告白時の話や、デートの話で様々なリアクションをとっていた。ギンガも初めは恥ずかしそうに話していたが、徐々にヒートアップしたのか次々と喋っていく。

「へえ、キヨウ君そんな所があるんだ。ギンガが羨ましい。私の周りにはそういう男の子って居なかったから」

「なのは、ユーノの前では絶対言っちゃダメだよ」

「展望台で告白って、ロマンチックで良いですね。其れが、キヨウさんのプレゼントの？」

キヤロがギンガが首にかけているネックレスを見ながら言う。ギンガは常にキヨウウから貰った物を『ブリッツキヤリバー』と共に身につけているのだ。

「そっだよ。私の宝物なの」

「……………うわあ、良いなあ……………」

その場に居た者の多くが声を出す。

「残念ながらティアの入り込む余地はないんだよねえ……………」

「ちよ、スバル!!」

「あら、ティアナはキヨウ君の事が好きなの？」

「ち、違いますよ!! シヤマル先生!!」

「何やあ? ティアナ、そこんとこ詳しく教えて欲しいなあ」

「八神部隊長まで……………」

ギンガの話が終わると次はティアナが標的にされるようだ。其処に居る全員が彼女に視線を向ける。

「あ、あたしは別にそんなんじゃないやありません！！先輩には訓練校の頃からずつとお世話になってるんです。尊敬する先輩ですよ。それだけです！」

「その尊敬が何時しか恋心に変わり「スバル！！」ごめん、ティア

「色々教えてくれて、もう一人の兄さんって思えるだけです。特別な感情なんてありません！！ギンガさんもその笑顔を止めてください。怖いです」

「あ、ごめんね。ティアナ。ついつい、またやっちゃった」

ギンガはすさまじいオーラを放ちながらティアナを見ていたが、彼女の言葉で何時もの優しい笑顔に戻る。

「先輩とギンガさんってお似合いだと思っんです。その間に割り込もうなんて思いませんよ。私も二人みたいな恋愛がしてみたいです」

「ありがとう、ティアナ」

「いえ、本心ですから。それより、スバル！！あんただって先輩にすぐ抱きついたりしてるし、どうなのよ？」

「私？ ないない。キョウにいつて私の事を妹としか思っていないし、私もそういう感情はないよ。昔っからこうだったもん。ねえ、アギちゃん」

「そうだけ。何時もキヨウの後ろに私と一緒に行ってたし。スバルが抱きついたりするのって只のスキンシップだよ。あとは、ギンガをからかうため？」

「さっすが、私の親友！！ 分かってる！！」

「そうなんです。キヨウ君も照れ屋だし下の子たちに甘いから、余り注意もしないのでこうなっちゃって。私が、慌てたり怒ったりするのを楽しんでるんですよ。スバルって……」

ギンガはスバルの事を隊長達に訴える。

「昔っから仲良いんだな、お前ら」

「そうですねよ、ヴィータ隊長。私達、幼馴染で兄妹の様に育ったんです」

スバルが胸を張って答える。その後は全員で互いの小さい頃の話等で盛り上がっていった。

「そや、キヤロ。エリオ達の方に行かないでも良いんか？」

「八神部隊長？」

「11歳以下やし、男湯に入っちゃダメとは書いてなかったから、行ってくる控ええやん」

「そうですよね!! 行つてきます!!」

キヤロは露天風呂の方に向っていく。其処には子供風呂があり仕切りもあるのだが行き来出来るような作りになっているのだ。

「大丈夫かな？ 迷惑をかけないと良いけど……」

「大丈夫ですよ、フェイト執務官。キョウウにあって面倒見が良いですし」

場所は変わってここは男湯。キョウとエリオは二人で露天風呂に移動していた。

「はあ、良い湯だな。空が見える風呂って新鮮だぜ」

「ホント、気持ち良いですね。兄さん」

エリオは先ほどキョウと話をしてから、彼の事を兄と呼ぶようになっていた。

「エリオくん!!」

二人が露天風呂を楽しんでいた時、足音と共にキヤロの声が聞こえてきた。二人が振り返るとキヤロが一糸纏わぬ姿で立っていた。

「キヤ、キヤロ？　なんて格好で」

エリオはキヤロの一糸まとわぬ姿を見て慌てだす。

「なんだ、キヤロもこっちに来たのか。湯冷めするといけねえから早くこっちに入れよ」

「はい!!」

「キヤロ!! それに兄さんも!!」

エリオは顔を真っ赤にしていたがキヨウは特に変わった様子もなくキヤロに言った。キヤロもまだ羞恥心がないのか気にする事もなく湯に入る。

「うわあ、キヨウさん筋肉が凄いですね。触っても良いですか」

「おう。さつきエリオも似たような事言ってたな。っておい、エリオ。しっかりしろ」

「平常心!! 平常心!!」

「意外と柔らかいんですね」

「力を入れると「うわ、カチカチだ」だろ？」

エリオは顔を赤らめ『平常心』と呟いていてキヤロはキヨウの二の腕を触っている。キヨウは聞かれてもいないのに筋肉の講釈をたれる。

「何時も堅い筋肉はだめだ。動きも遅くなるし。カんでいない時は女性の様に柔らかい筋肉で無いと……」

「あはは、そうなんですか」

キヨウは暫らく喋り続けたがキヤロは途中で興味を失っていたのか話が終わってからのリアクションは薄かった。

そうしているうちにエリオも慣れたのか普段道理の彼に戻っていく。

「どうしてエリオ君はキョウさんの事を兄さんって呼んでいるんですか？」

暫らく三人で露天風呂を楽しんでいたのだが、キヤロは疑問を口にする。

キョウはそれに笑顔で答えた。

「俺と、エリオの境遇が似ていたからさ。俺も構わないし」

「僕、アギトさんも姉さんって呼んでいいでしょうか？」

「良いと思うぜ。アイツもきつと言ぶよ」

「キョウさん、もっと詳しく教えてください」

「男同士の秘密だ、ごめんなキヤロ」

「ねえ、エリオ君教えてよ！！　ねえ？」

「ごめんなキヤロ。秘密だよ」

「もう、二人だけなんてズルい！！」

キヤロは頬を膨らまして抗議する。

「キヤロはそんな顔しない方が可愛いぜ。許してくれよ。なあ、エリオ？」

「はい！！　そうだよキヤロ！！　何時もの可愛い笑顔を僕達に見

せて欲しいな。キャラの笑顔で僕は元気が湧いてくるんだ。だから、お願い。僕に笑いかけて」

「笑顔が可愛いつて本当？」

「「本当！！ 本当！！」」

二人に煽てられてキャラは機嫌を直す。キョウはエリオに協力する様に言ったのだが、彼はアドリブで口説き文句の様なものを口にする。未恐ろしい少年だ。

その後、キャラとエリオは初出勤の時の事を互いにお礼しあっていた。二人はフェイトに恩返しをしたいと思って六課に来たとキョウに話す。キョウは二人の話を笑顔で聞き続けた。

それから少ししてキャラは女湯へと戻り、キョウ達も風呂から出る事にした。

「良いお湯でしたね、兄さん」

「ああ。また来たいな」

二人は女性陣を入口の前で待っていた。先にながってコーヒー牛乳を購入し飲んでいようだ。女湯の方から声が聞こえてきたので、そろそろみんなが出てきそうである。

「ごめん、二人とも。待ってたでしょ？」

キョウ達に一番早く出てきたギンガが声をかける。彼女の服装は白い浴衣だった。紫陽花の花の柄である。帯は紺色の物をつけ、何時も流している髪はアップにされていた。

「いや、そんなには。其れもクイントさんが用意したのか？凄く似合ってる綺麗だぜ。何時もと髪型も違ってる新鮮だ」

「似合ってるなら良かった、ありがとう。そうだよ、これも母さんが用意したの。それと帰ったら父さんに文句言わなきゃ。お風呂で聞いたけど父さんが言ってたのは御先祖様の時代の事だったみたい」

ギンガからは風呂上がりということまでシャンプーの良い香りが漂う。うなじも見えて何時もより色っぽかった。そんなギンガを見て二人は顔を赤らめていた。

全員が揃うと、サーチャーに反応が出る。機動六課メンバーで反応

のあった場所へ移動した。現地協力者たちは先にコテージに戻る事となる。ギンガも浴衣と下駄とは思えないスピードで現場に駆け付けた。

其処にはスライムのようなものがおり、その核が今回の目的のロストロギアの様だった。

新人達がそれに対応する様で、空戦が可能なもの者達は空のダミーを対処していく。

スバルとエリオの直接攻撃とは相性が悪いようであるが通用しなかったが、ティアナとキャロが中心となり動きを押さえつける事に成功し、エリオとスバルの合体技『ストライクドライバー』が炸裂する。封印はティアナとキャロにより行われた。

見守っていた隊長達は新人の成長を喜んでいた。

完全封印の作業はキャロが行った。彼女は危なげなく封印を成功させる。確認作業はラインがすすませる。

その後、一同はコテージに戻り、現地協力者達に別れのあいさつを済ませミッドに帰っていくのだった。

Ep48 地球へ4（後書き）

フェイトさんと混浴するだけでも？うちの主人公は彼女持ちですよ、
そんな不義なことしませんよ。

今夜中に番外編をあげるつもりです。

クロスは、記念の時に掲載しますので暫らくお待ちいただけると嬉しいです。

読んでいただきありがとうございました。

Ep49 邂逅1 ホテル・アグスタ（前書き）

執筆を始めて早一ヶ月が経ちました。まだまだ未熟な文章ですが精進していきます。

スターズの二人が原作よりパワーアップしているので、話の流れが異なると思います。ご理解いただけるとありがたいです。

ゼストさんもアギトが居ない代わりに単体での力がカオスになってますですけど、今さらですね。

うちのスカさんは悪者です。

地球への派遣任務が終わり、数日が経った。機動六課の主要メンバーとキヨウ達はヴァイスの操縦するヘリである場所に向かっていた。クラナガンの南東にあるホテル・アグスタでロストロギアのオークションが開かれるので、その会場警備の任務が六課に与えられたのである。

キヨウの表情は何時もと違い、少し不満げだった。前回の任務の様に事前に応援部隊の三人は部隊長室で説明を受けていた。その時はやてとのやり取りが原因だった。

「八神部隊長！戦力の集中は危険ではないでしょうか？前回の任務と違い、ザフィーラさんも六課から離れるのでしょうか？ 主要メンバーがいない六課に、何か起こったらどうするんです？」

「心配症やな、キヨウ君は。大丈夫や、それほど遠い場所やないからすぐに戻ってこれる。それに留守を任せるメンバーも優秀やって事、分かるやろ？ 君の親友の二人もいるんやから」

「グリフィスもシャーリーも前線では戦えないんですよ！！ せめて私達三人だけでも残せないのでしょうか？」

「いや、付いてきてもらうで。戦力の一点集中は確かに悪手やけど、それは戦中での事や。今はちやうやろ？ それにロストロギアが関わっているんや。三人の目的の人が現れるかも知れんで？」

「ぐっ……」

キヨウは納得できないのか拳を握りしめる。そんなキヨウをギンガとアギトが窺める。

「キヨウ君、八神部隊長に従おう。ゼストさんの目的を聞き出し、これ以上罪を重ねないように止める事が私達の目標でしょ？」

「そうだけ、キヨウ。親父たちにもあの人を止めろって言われてるだろ？ はやて部隊長、何か起こっても行動の自由は与えられるんですか？」

「基本的には私や隊長陣の指示に従ってもらうけど、六課に何かあった場合はそつちを三人は優先して動いてくれてもええよ」

アギトがキヨウの懸念する点を減らそうとはやてに対して質問をする。はやてもそれに対して考えがあったようだ。その言葉を聞いてキヨウも自分を納得させる。

「わかったよ。ギンガ、アギト。八神部隊長、先ほどは失礼しました。指示に従います。ですが、このような事を続けていたら、いずれ何か起こった場合、取り返しのつかない事にならないか不安です」

「その言葉、心に留めとくよ。ありがとうな、キヨウ君。じゃあ三人とも、みんなでへりで向ってな」

「了解です」「」

三人は退室する。一人部屋に残ったはやては呟いていた。

「わかつとる、でも私は止まってはいかんのや。リスクを背負つても、この六課は私の夢の結晶や。この部隊を絶対成功させんと……」

へりの中では、任務の説明が行われた。その際、ガジェットの利用者で最近のレリック事件に大きく関わっていると思われるジェイル・スカリエッティについての説明もされる。違法研究で広域指名手配を受けている人物だった。彼についてはフェイトが中心に捜査を行っていくらしい。

「フェイトさん、自分達も捜査に加われないでしょうか？108部隊でも密輸ルートの調査を行っていますが、きっとこの先スカリエッティが関わってくる事もあると思うんです」

「ありがとう、キョウ君。でも三人は応援要員なんだから大丈夫だよ。この件は私が追っていく。何かあれば力を貸してもらおうから、

気持ちだけでも貰っておくよ」

「分かりました。その時は遠慮なく使ってください」

キヨウはその後、気持ちを入れ替えたのか表情も普段通りに戻った。任務に対し集中を始めたのかもしれない。ギンガとアギトの二人もキヨウの様子に安心していた。ヘリの中では詳しい任務の説明が進む。前日からシグナムとヴィータが数人の隊員達と警備をしているらしい。なのはとはやて、フェイトの三人は会場の内部を警備する事になっているらしい。シャマルによりパーティ用の衣装も準備されていた。

それから少しして、ホテル・アグスタに到着した一同はそれぞれの持ち場に付く。キヨウ達も新人達と共に会場の外を警備するようだ。副隊長陣が指揮を執るとのこと、三人は遊撃部隊として行動する事となった。

ティアナとスバルは持ち場に付くと念話により会話をしていた。はやての守護騎士たちについての会話だった。スバルはゲンヤから聞いていたのか、ティアナに比べ詳しくかった。

ティアナは考えていた。六課の戦力が異常であるという事、メンバーが全て優秀である事。彼女はもちろんそれに選ばれた自分に自信を持っていたが、それでも僅かだが劣等感を抱く。

「ティアナ、ティアナ？」

会場周辺を回っているギンガがティアナに声をかける。ティアナは考えごとに集中しているのか、声に気付いていない。ギンガは彼女の肩に手をのせ声をかける。

「ティアナ、どうしたの？ 何か考えごと？」

「あ、ギンガさん。すいません。この機動六課って凄い人達ばかりで私だけ凡人なんじゃないかって思ってたまして」

ティアナはギンガに考えていた事を話す。訓練校時代から世話になっている、信頼できる先輩へは素直に心の内を晒せるようだ。

「確かにこの部隊の戦力は異常だよ。でもその戦力にはあなたも含まれているんだよ？」

「そうですね……。エリオ達はフェイトさんの秘蔵っ子だし、スバルを始め先輩達はみんな支え合っただけでここまで来ているじゃないですか」

「自分を忘れてるわよ、あなたも私達と鍛錬を行ってきたじゃない。そっか、劣等感か……。懐かしい」

ティアナは不安そうだがギンガは自分の過去を思い出し笑顔で声を返す。

「私は真剣なんですよ。ギンガさん、酷いです」

そんなギンガの様子にティアナは腹を立てたようだ。

「ごめんね。でも、私も訓練校時代に劣等感を持った事があったから……」

「え？ 黄金世代って言われている代で、学年トップの成績をずっと取り続けていたギンガさんが？」

ティアナは驚いている。キョウ達の代は優秀な人物を多く輩出している当たり年といわれる世代だった。その中でも頂点にいたギンガが劣等感を抱いていたとはとても思えなかったのだ。

ギンガは話した。以前、キョウやケンスウ達との訓練で自分だけ取り残されているように感じた事があったと。それが自分の勘違いであった事。それを乗り越えて今の自分があるという事を。

「それにね、以前キョウ君と一緒におじ様から聞いた事があるの。

この世界は一部の天才だけで動いているわけじゃないって。沢山の人たち、特別な力がない人達の手で成り立っている事が多いんだよ」

「先輩のお父さんから、そんな事を」

「うん。初めは何の事か分からなかったけど、局員として働き出してからそれが良く分かったんだ。私達三人は地上じゃ珍しい高ランクを持っているけど、私達だけじゃ地上の平和は守れないって。沢山の人たちの努力で部隊って成り立っているんだよ。私達が休んでいる時も、沢山の人が平和を守ろうと頑張っているんだ。其れにティアナだって射撃の腕だけじゃなく鞭の腕も凄いじゃない？ 指揮だって執れるのだし、不安になる事なんてないんだよ」

「多くの人たちの努力……」

ティアナはギンガの言葉に感じる部分があつたのかそう呟く。確かに自分達以外の局員の力も有ってミッドやそれ以外の世界の治安は保たれている。むしろ自分達の力の方がはるかに小さい。少し独りよがりな考えになつていたのではないかと自問自答をする。

「私達がティアナと同じ年だった頃はまだ新人で何も知らないひよっこだったんだよ。自信持ちなつて！！ あなたにしか出来ない事も沢山あるんだから、自分に出来る事を精一杯やっていけばいいんだよ」

ギンガが励ます様にティアナの手を握りながら優しく声を掛ける。ティアナはギンガの手の暖かさを知った。この人は自分の事を心から思ってくれているのだと理解する。

「そうですね。自分の出来る事を頑張つていけば。ありがとうございます、ギンガさん。私、自信が持てました。ここで立ち止まつてちゃダメですね！！ きつと死んだ兄さんも、私がこんなんじゃない心配でしょうし」

ティアナは笑顔で答える。どうやら立ち直れたようだ。

それからギンガは去つていった。彼女を見送るティアナの表情は明るい物となつていた。

場所は変わり、ここはホテルの近くの森の中。其処では二人の人物が会話をしていた。一人はゼストであり、もう一人はゼスト隊の一人、メガーヌに似た少女だった。薄い紫色の髪など、メガーヌの面影を残す姿で白いコートを纏っている。

「ルーテシア、お前まで来ることはなかったんだぞ。ここにはお前の探し物はない筈だ。其れにあれを探すのは俺に任せられれば良かったんだ」

ルーテシアと呼ばれた少女が答える。

「ううん、ゼスト。母さんを助ける為に私も何かしたいんだ。ゼストは今まで一人で、ずっと私達の為に働いてくれていたんでしょ？ 私にも手伝わせて」

「ルーテシア……」

スカリエツティにより復活させられた彼は、今までロストロギアの強奪を行っていた。其れはルーテシアと呼ばれた少女や、彼女の母であるメガーヌが人質にされていたからだ。二人の安全のため、彼は自分の心を殺してまでスカリエツティに従っていた。

ゼストは悔しかった。守るべき存在であるルーテシアが前線に投入される事を止められなかった事が。自分はそれまでの行いで罪を負ってしまっている。彼女もこれから罪を犯してしまう。母を救うためとはいえ、母思いの優しい子供まで自分と同じ様に犯罪に手を染めてしまう事がどうしようもなく悲しかった。

一体、何の為の力だ。幼い子供も守れず何が騎士だ、地上の英雄だ。彼の心の中は悲しみに包まれていた。其れは表情にも表れていたようだ。ルーテシアも心配そうにゼストの顔を見つめていた。

「俺は何をやっているのだろうか。ソウジ、レジアス……」

ゼストは空を見上げながら呟く。その時、ルーテシアの下に羽虫の様なものが飛んできた。彼女はそれを指先に乗せる。

「ドクターのおもちやが近付いて来てるって」

ルーテシアの言葉通り、林の中にガジェットが姿を現した。ガジェットは隊列を組みホテルに向かう。

ホテルの屋上にいたシャマルも、自身のデバイス『クラールヴィン

ト』のセンサーに反応がありガジェットを警戒する。シャーリーから通信が入り、ガジェットは陸戦？型が35機、陸戦？型が4機ほどだと詳しい情報が渡った。

一方、シグナムはザフィーラとエリオ、キャロと共に地下に居た。彼女はエリオとキャロに地上に上がり、ティアナの指揮の下で防衛ラインを設置するように言う。自分はザフィーラと共にガジェットを迎撃することだった。

「お前達が守りの要だ、頼むぞ！！」

ザフィーラが初めて喋ったのでエリオとキャロは驚いていた。二人もザフィーラが喋れる事を知らなかったようだ。シグナムがそんな二人をたしなめる。その後、エリオとキャロはシグナムの指示通り地上へと向かう。

地上ではシャマルが騎士甲冑を身に纏い全体に指示を出していた。ティアナは実体ではなく魔力のアンカーを放ちホテルの屋上近くに飛ぶ。そしてシャマルにモニターを『クロスミラージュ+』へと繋いでもらう。

「撃ち抜けーーーー!!!」

上空ではヴィータが鉄球を『グラーファイゼン』でガジェットに放っていた。彼女の魔法『シュワルベフリ・ゲン』である。其れは森の中を進むガジェット陸戦？型のAMFを貫き、次々と破壊していく。

地上では、林の中でシグナムが陸戦？型と対峙していた。シグナムは『レヴァンティン』にカートリッジを一発ロードし、刀身に炎を纏わせる。

「紫電、一閃!!!」

シグナムの斬撃はガジェットのボディを、まるで紙でも裂いているかのように一刀両断する。

別の場所ではザフィーラがガジェット陸戦？型と戦闘を行っていた。

岩肌の様なものが見え、足場の悪い崖の様な場所だったが、四足で立つザフィーラには問題がないようだ。ガジェットから放たれるレーザーを彼は危なげなくバリアーで防いでいた。

「ここは通さん!!」

彼は『鋼の軛』を放つ。其れは地面や横の崖の岩はだから現れる光の牙の様な魔法だった。次々とガジェットを破壊していく。

「喰らえ!! フレイムシューター!!」

「フレイムシュート!! いっけえええ!!」

「リボルバーシュート!!!! たああああ!!」

キョウ達三人も空や地上からガジェットへ攻撃をしていた。キョウとアギトの炎が、ギンガの母譲りの魔法がガジェットを破壊していく。此方も副隊長達とは負けず劣らずの活躍だった。

スバルとティアナは合流し彼らの様子をモニターから見ていた。

「凄いね、副隊長達。あれでリミッター付きなんて……」

「先輩達もリミッターこそ付いていないけど、やっぱり凄いわね。私達も負けてらんないわ、スバル!!」

「そうだね、ティア。私達のコンビの力をギンねえ達にも見せてあげよう!!」

二人とも闘志は十分の様だった。

森の中ではゼストとルーテシアがガジェットの様子を窺っていた。その時、スカリエツティから通信が入る。どうやら会場にレリックはないようだった。だが、スカリエツティはゼストにロストログアを奪ってくるように言う。

「レリックが関わらないのなら俺は貴様に従うつもりはない」

「そんな事を言っても良いのかな？ そうだ、ルーテシア。君に頼もう。お母さんの為に私のお願いを聞いてくれないだろうか？」

「く、この外道が！！ ルーテシアにまで犯罪の片棒を担がせようというのか！！」

ゼストはスカリエッティに怒りを抱く。彼の掌は固く握りしめられ、そこからは血が流れ出している。指が掌に食い込んでいるのだ。ルーテシアは母という言葉に反応しスカリエッティの要求をのむ。

「分かった、ドクター。私がやる」

「助かるよ、ルーテシア。ありがとう。騎士殿も少しは彼女を見習って欲しいものだ。ルーテシア、私の欲しい物は君の『アスクレピオス』にデータを送っておくからね。頼んだよ。それじゃあ、失礼する」

そう言うと、スカリエッティはモニターを消す。ルーテシアのグロブ型デバイス『アスクレピオス』はコアの部分が光り輝いていた。

「やはり、俺がやる。お前まで犯罪者の汚名を被ることはない」

「ダメだよ、ゼストは体の調子があまり良くないんでしょ？半年前に帰って来た時、ドクターが言っていたのを聞いたよ。ゼストの体はあまり戦闘には耐えられないって。私に任せて」

ルーテシアはそう言うと、コートを脱ぎ先ほど自分の指にとまった羽虫と同じものを数多く召喚する。

「ミッション。オブジェクトコントロール」

ルーテシアがそう呟くと彼女に召喚された虫達はガジェットの方へ

と飛んでいった。

「はあああああ！！！！！」

キヨウの攻撃をガジェットが受け止める。ルーテシアが放った虫がガジェットに入り込みその能力を強化し始める。

「キヨウ、自動操縦から手動に切り替わったみてえだぞ」

アギトが伝える。シャマルからも全体に通信が入った。キヨウ達の所の物ばかりではなく、全体でも同様のようだ。

「たとえば手動になろうが、ぶっ壊す！！　ちいつ、燃えるおおおお！！！！」

キヨウは『琴月』でガジェットを破壊する。その直後シャーリーからも通信が入る。召喚師の魔法によりガジェットの動きが良くなっているようだ。

「ねえ、シャーリー。その召喚師のデータ、私達にも送ってくれないかしら？」

「良いけど。ギンガちゃん、詳しい位置とかは特定できていないから魔力の波長位しか送れないよ」

「それでもいいよ。お願い」

シャーリーはキョウ達三人にデータを送る。

「おい、この波長って」

「俺の間違いじゃなかったら、メガー又さんに似ているものだ」

「リボルバーナックルに記録されている物にそっくりだよ。もしかして、メガー又さんが……」

「シャーリー！！ 俺達三人は召喚師の方に向かう、良いか？」

「えっ、一応行動の自由は部隊長から与えられているけど。ギンガちゃんは副隊長達の手伝いをお願いできない？」

「仕方ないな、ギンガ。お前は、残っていてくれ。俺とアギトで行ってくる」

「分かった、怪我しないでね。前みたいなのは絶対嫌だよ」

「私がキョウを無事に連れ帰るから、ギンガはみんなをよろしくな
！！」

「行くぜ、アギト！！」

キョウとギンガは別行動を取る事となる。キョウはアギトとユニゾ

ンし、召喚師を探す。一方、ギンガは『ウイングロード』を展開しホテルの方へ向かった。

「遠隔召喚？ みなさん、来ます！！」

キャラロが召喚魔法を感知する。その言葉に従い他のフォワードメンバーは警戒を強める。

「キャラロ、遠隔召喚って高等技術って聞いたことあるけど」

「そうです、スバルさん。相手の召喚師は優れた技術を持っている様です。そういった召喚師は転送魔法のエキスパートでもあるんです」

ベルカ式の召喚魔法陣からガジェットが新人達の下へ現れる。

「相手がどんなに優れていようと、私達は私達の出来る事をやらなきゃ！！ みんな、迎撃いくわよ！！」

ティアナはどうやらふっきれる事が出来ているようだった。他のメンバーを奮い立たせる為声を張り上げる。

「「「おう！！！！」」」

ティアナの指示で新人達はガジェットとの戦闘を開始する。

「強力な召喚師、私だけでは叩けなくても。せめて姿だけでも確認しないと」

リインは単独で召喚師の方へ向かっていた。リインの方へ召喚された虫達が飛んでくる。

「きゃっ……」

虫はリインに攻撃を加える。彼女はそれでも召喚師の方へ向かうとするが、シャーリーとシャマルに通信で新人達の方へ向かうよう指示される。しかし、その場には沢山の虫がおり、退避するのも困難な状況に追い込まれる。

「ごめんなさいです。はやてちゃん、みんな。リインはここまでの様です」

「ほうりゃあああー!!」

リインが諦めかけたその時、彼女の周りにいる虫を炎が包み込む。

「大丈夫か、リイン？」

「キヨウさん、アギトちゃん!!」

彼女を救ったのは、同じく召喚師へと進んでいたキヨウ達であった。『鬼焼き』で虫達を焼き払ったのだ。キヨウ達はリインに指示通り早く移動するように言う。召喚師は自分達が正体を確かめると。三人は別れ、それぞれの目的の場所に移動していった。

同じ頃、新人達はガジェットと戦闘を行っていた。ティアナは地上から『ヴァリアブルシュート』でガジェットのAMFを貫きどんどん破壊していく。スバルも『ウイングロード』で空中からガジェットを引き付けて、追ってきた物を破壊していった。エリオもキャロの力を借り、ガジェットの数を減らしていく。

「新人のみんな、防衛ラインをもう少し持ちこたえて。そっちにヴィータ副隊長とギンガ曹長が向かっているから」

シヤマルから一同に通信が入る。新人達は、年長の二人が率先してガジェットを叩き、撃ち漏らす物があればそれをエリオが破壊するというなかなかの連携を見せていた。

「下手なバクチは打たない方が賢明よ！！ みんな、自分の持てる力を使って副隊長が来るまで確実に防衛ラインを保つわよ！！ ヴァリアブル・ウィップ！！」

ティアナは通信しつつ、近くに迫ったガジェットをワイヤーで破壊する。『クロスミラージユ+』に搭載された特殊ワイヤーに魔力を通し、AMF下でも威力を発揮できる新魔法『ヴァリアブル・ウィップ』を開発していたのだった。

「そうだね！！ ティア！！ てえりゃああ！！」

スバルもキヨウの『琴月』に似たフォームでガジェットに突進し肘打ちを当てる。其処から魔力を纏わせた両手の拳を組みガジェットへ向け振り下ろす。スバルの拳はガジェットを粉碎する。『ナツクルダスター』と『琴月』を組み合わせた新技を開発していたようだ。

「了解です！！ ティアナさん！！ たああああ！！！！」

エリオも負けじと『ストラーダ』から放出される魔力刃に電気を纏わせ、ガジェットを切りつけ破壊する。以前も使用した『スタールメッサ』という魔法だ。以前よりもキレが増しているようだった。

「私達も頑張ります！！ 行くよ、フリード！！ ブラストフレア！！！！」

「きゅるーーーー！！！！！！」

キャロもフリードに指示を出す。以前は通用しなかったが今回はダメージを与えられているようでガジェットの動きは鈍る。キャロも以前の出勤で自分の力不足を実感しており、それまで以上に訓練に取り組んでいたのだ。その成長の成果が見えてきているのである。キャロがフリードと協力し動きを鈍らせることに成功したガジェットを他の三人がどんどん破壊していく。

新人達は持てる力を十分に発揮しガジェットを追いこんでいくのであった。

それからすぐにヴィータとギンガがその場に到着する。

「みんな、結構やるみたい。日ごろの訓練が活きているみたいですね、ヴィータさん？」

「そうだな、みんなやるべきことを理解して動けてるみたいで安心したぜ。でも、まだまだだな。行くぜ、ギンガ！！」

その後、ヴィータとギンガの協力もあり、新人達はガジェットを殲滅することに成功するのであった。

場所は変わり、ホテルの駐車場。其処には警備員が立っていた。彼は何やら物音がしている事に気付き、音のする方へ足を進める。

「どうしました？　ここは危険ですから、中の方に移動してください」

其処には扉を破壊されたトラックと、ふたが開けられ倒された木製の箱が並んでいた。

「何だこれは？」

箱の中身は空になっているようだった。その場の物陰には人ではないような生き物のシルエツトが移っていた。その生き物は警備員に気付かれる事なくその場から離れていく。

「ガリユー、御苦労さま。そのままドクターに持って行って」

ルーテシアが『アクレイピオス』に向け言葉を放つ。其れは先ほどの生き物に向けて発せられているようだった。彼女の後ろにはゼストが立っていた。彼の手にはルーテシアの脱いだコートが持たれている。ゼストは彼女にコートを渡し、奪った品物について尋ねた。彼女は詳しい事は分かっていないらしく、密輸品であると答える。その後、二人はその場から立ち去ろうとする。しかし……。

「ゼストさん！！ それに、メガーヌさん？」

「キョウ、それにアギトか？」

「この人だね？どうしてゼストやお母さんの事を知っているの？」

Ep49 邂逅1 ホテル・アグスタ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
次回はキヨウとゼストの再戦になります。
楽しみにしていただけると嬉しいです。

Ep50 邂逅2 ホテル・アグスタ（前書き）

バトルがワンパターンになっている気がします。

バトルをかくのは楽しいですけど難しいです。

今日、大学の図書館から帰るときに友人と牛井屋に行っただんですが、その店員さんがめっちゃ声優の中原麻衣さんにそっくりだった。アルフィーの高見沢俊彦さんじゃないですから！

何気なく打ち込み作業を行っていたら『ルーテシア』を何故か『アルテシア』と書いていた。

途中で気付いたから良かったんですが、何故にセイラさん？

若さゆえの過ちでした。

それでは本編の方をどうぞ。

Ep50 邂逅2 ホテル・アグスタ

ジェイル・スカリエツィの指示を受けロストロギアを強奪する事に成功したゼストとルーテシア。

その場から立ち去ろうとする二人だったが、彼らの前にキョウが姿を現す。

「ゼストさん。此処で一体何をしていたんですか？教えてくださいさ
い」

「以前も言った筈だぞ、キョウ。俺にはもう関わるなと」

キョウに向かいゼストは槍を構えつつ答える。キョウも何時でも反応が出来るよう構えをとった。二人の間には緊迫した空気が流れる。そんな中、ゼストの後ろにいたルーテシアが二人の間に立ちキョウに声を投げかける。

「ねえ、あなたは誰？ 何故ゼストやお母さんの事を知っているの？」

「ルーテシア！！」

ゼストはルーテシアへ手を伸ばし自分の後ろに移動させようとするのだが、彼女は其処から動こうとはしない。

キョウとアギトはユニゾンを解きメガーヌの面影を残す少女の問い

に答える。キヨウ達の行動を見てゼストも一旦槍を仕舞う。

「俺の名前はキヨウ・アーデルハイド。それでこっちはアギトっていうんだ。俺とアギトはゼスト隊の皆さんに幼い頃助けられた事があるんだ」

「それ以来、ゼストさんやメガー又さんと付き合いがあるんだぜ。あの八年前の事件までだけだな。お前の母親ってメガー又さんなのか？」

「ねえ、ゼスト。本当？」

「ああ。二人の言っている事は本当だ」

ルーテシアはゼストに真偽を尋ね、彼はキヨウ達の言葉を肯定する。

「私はルーテシア・アルピーノ。メガー又は私のお母さんの名前だよ」

ゼストや自分の母親の知り合いという事でルーテシアはキヨウ達に名前を教えた。対峙している相手に名前を教えたという事にキヨウとアギトは驚いた表情をする。だが、此処に来た目的を思い出しゼストに切りだす。

「ゼストさん、教えてください。ルーテシアちゃんみたいな小さな子を連れてあなたは此処で何をしていたんですか？ 此処からはガジェットを操っていた召喚師の魔力反応がありました。まさか、ルーテシアちゃんか？」

「お前達に話す事はないと言っている。行くぞ、ルーテシア」

ゼストはキヨウの言葉に答える事はなかった。ルーテシアの手を引きその場から去ろうとする。

「お兄ちゃん、ゼストは私やお母さんの為に体に鞭打って頑張ってくれているんだ。邪魔しないで」

ルーテシアはキヨウ達に振り返り言う。

「余計な事を言うな、ルーテシア!!」

ゼストはルーテシアを制止しようとする声を荒げる。そんな彼の様子にアギトは疑問を投げかける。

「メガー又さんに何かあったんですか？ 私達にも何か出来る事はないんですか？」

「それに身体の事って。ゼストさん、話をしてください。事情さえ分かれば俺たちも何か出来ると思うんです。親父やレジアス中將もあなたの事を心配しているんですよ!!」

キヨウも声を荒げたのだが、ゼストは一度眼を閉じたため息をつき口を開く。

「お前達ならそう言うと思っていた。だが、この件はお前達には手に負えない。この俺すら倒せないお前達ではな。どうしても聞きたいなら力づくで聞き出してみろ!!」

ゼストは振り返り再び槍を構える。

「ゼスト！！ ダメだよ」

「離れている、ルーテシア！！」

ルーテシアは彼を止めようとするが、ゼストは彼女を自分から遠ざける。彼女の周りに結界魔法を張りその場から動けないようにする。ルーテシアは結界の中から声をあげているがその言葉は結界に阻まれ届かない。

「この分からずや！！ ゼストさん、前の様には行きません。行くぜ、アギト！！」

キョウもアギトと瞬時にユニゾンしゼストと対峙する。

「いくぞ、キョウ！！ 今回は前の様に手加減はせん！！」

「望むところだ、あなたの目的を今日こそ聞き出して見せる！！」

それから二人は激しく激突する。半年前の闘いではゼストのスピードについて行くことがやっとだったキョウ達だが、今回は彼の振るう槍に対応している。

キョウ達はゼストの振るう槍の軌道を完全に目視出来ている。長物と無手ではやはり攻撃のスピードが違う。しかしゼストの戦闘経験の豊富さは流石といった所で、槍を振った所に攻撃を放とうとするキョウ達の動きにも体術を合わせてくる。

互いの懐に潜り込む超クロスレンジでの応酬ではやはりキョウ達が優勢かとも思われえるが、其処は歴戦の勇士ゼストである。簡単に

は隙をつかせない。

互角の戦いを繰り返しているようだ。

ゼストの槍をキョウは『フランメファウスト?』で受け流し反撃を加える。ゼストもそれを喰らう事なく槍を次々と繰り返して行く。ゼストの攻撃で避けられない物があれば、キョウは距離を詰めダメージを減らすよう打点をずらす。

「以前より、かなり出来る様になっているな」

「「まだまだこれからです!! おらあ!!」」

キョウはゼストの懐に潜り込むとその場から飛び上がる。其処からゼストの頭に向け、先ほどスバルがガジェットに対し放ったような技、組んだ状態での拳を振り下ろす『外式・奈落落とし』を放つ。余談だが、スバルが放った技はこれに『琴月』と『ナックルダスタ』を組み合わせて作られているのだ。キョウの攻撃をゼストは槍の柄で受ける事に成功する。しかしキョウの攻撃はそれだけでは終わらなかった。

「「ふん、てりゃ!! 喰らえ!!!」」

「何? ぐおおっ!!」

攻撃を受け止められたキョウは、着地後にゼストの腹部へ下突きを放つ。ゼストはそれを喰らってしまった大きな隙が出来る。其処にキョウは炎を纏わせた拳の三連撃『毒咬み』から『罰詠み』を命中させる。

ゼストはキョウの攻撃で勢いよく15mほど吹き飛び地面に激突する。

「ぐつ、以前のお前達とは違うということか」

土埃の中からゼストは立ち上がりながら言う。マントもボロボロになっ
ており口からは一筋の血を垂らしていた。キョウの攻撃によりダメージを受けている所が見て取れる。

しかし、キョウは今回のゼストに何か違和感を感じた。

「ゼストさん。あなた、前より動きにキレがなくなっていますか？」

「それはお前達が強くなったからそう感じるだけだろう。行くぞ！」

ゼストは問いかけを否定しキョウ達の方へと距離を詰める。キョウもゼストに向い足を進める。

「あの敗北から俺達が必死で会得した技、受けてもらいます！」

ゼストはキョウに向け逆袈裟に斬りかかる。その速度は先ほどまでと違いすさまじいスピードだった。裂帛の気合が込められている。

「うおおおおお！！」

「これがあ！！草薙の拳だあ！！！！」

キョウは自分の目の前に大きな火柱をあげ、其れによりゼストの攻撃は止められる。

火柱を潜り、全身に炎を纏わせながらキョウは四連撃をゼストに放つ。簡易版『無式』が炸裂した。通常よりも三倍ほど大きい炎を纏

わせた締めめの『毒咬み』を喰らい、ゼストの身体は錐揉みしながら後ろに吹き飛ぶ。後ろにあった大木に身体を打ちつけられるが、それだけでは止まらず、その木をへし折り更に吹き飛んでいく。ゼストが止まったのは木を4本ほどへし折った後だった。

「ぐううおおー!!」

ゼストに大ダメージを与えたようだ。だが彼はふらふらの状態になりながらも立ち上がる。キョウも簡易版とはいえ『無式』を放った反動で魔力、体力ともに消耗しているようだ。

「はあ、はあ。ゼストさん。やっぱり今日のあなたはどこかおかしい。この技は俺の持つ最大の奥義ですけど、以前のあなたならこれほどのダメージは与えられない筈……」

キョウは木に背をもたれるゼストに近付きながら言葉を放つ。

「それはお前達が成長しているということだとさっきも言っただろう。まだ、俺は倒れてはいないぞ。来い!!」

ゼストはそれでも槍を構えキョウ達に向かっていく。

「この一撃で終わりにします!! 受ける!!」

キョウはゼストに向け『百八拾弍式』を放とうと構えを取る。身体を大きく後ろに捻り、力を込める。身体からは炎がオーラの様に噴き出しており、込められた技の威力を物が物語っているようだった。

「お兄ちゃんもゼストも止めて!!!!」

キョウがゼストにとどめの一撃を放とうとしたその時、二人の間にルーテシアが割り込む。自力でゼストの結界から抜け出したようであり彼女のグローブ型デバイス『アスクレピオス』には細かい傷がみえる。

ルーテシアに間に立たれては、これ以上続けられないと判断しキョウとゼストは共に構えを解く。

「がぁっ!!」

構えを解いたその時、ゼストは口から大量の血を吐きだす。

キョウはゼストの突然の吐血に驚きを隠せず驚愕する。ゼストは血を吐き、苦しみに顔を歪めながら片膝をつく。キョウはそんな彼を助け起こそうと駆け寄る。

「どうしたんですか？ゼストさん!! 今、回復魔法を!!」

「構うな!! これはお前達の一撃で受けたものだ」

「ウソ!! どうしてそんなウソをつくの!!」

ルーテシアがゼストに向かい大声を出す。

「「どういう事ですか。ルーテシアちゃんは何か知っているのか？」

「ゼストの身体は闘いには耐えられないんだ。レリックとの適合率が高くないから、もう身体はボロボロなんだよ!!」

「余計な事を言うな!! ルーテシア!!」

「「そんな……。嘘だ。嘘だと言ってくださいよ、ゼストさん！」」

キヨウは声をあげる。彼の中にいるアギトも同様だ。ゼストは誤魔化せないと思い口を開く。

「ルーテシアの言った通りだ。俺の身体はもう以前ほどの力が出せない。一度俺は死んでいるんだ。前に言っただろ？ お前達の知っているゼスト・グランガイツはもう居ないと……」

「「どうして、どうしてそんな事に……」」

キヨウは泣きそうになりながら震えた声でゼストに聞く。

「詳しい事は言えない。お前達にも危険が降りかかるからな。ただ、スカリエツティには気を付ける。今のお前たちではヤツの相手は無理だ」

フラフラになりながらも立ち上がったゼストは、キヨウ達の問いに答えながらルーテシアを自分の下に引き寄せる。

「金輪際、俺達には関わるな！」

「バイバイ、お兄ちゃん」

ルーテシアの足元には転移用の魔法陣が現れている。

「「待ってください！！ うわああ……！！」」

ゼストは自分のもとへ駆け寄るキョウ達に向け閃光魔法を放つ。キョウの目が眩んでいる間にその場から転移魔法で去っていった。

「ふっ、強くなつたな二人とも」

目は見えなかったがゼストの声が二人には聞こえたような気がした。実際、ゼストも転移する際笑顔を浮かべていた。

光が収まると、キョウはその場に立ちつくしていた。

「そんな、ゼストさんが……。うわあああああああああああ
あ！！！！！」

キョウは涙を流しながら空に向け声をあげる。悲しみが抑えきれないようだった。それまで晴れていた空もキョウとアギトの心を表しているかのように曇っていき、雨が降り出す。

その後、キョウとアギトはユニゾンを解き、ずぶ濡れになりながら

六課のメンバーに合流した。その表情は、無事にガジェットを撃退した一同とは違い暗いものだった。

召喚師の正体や其処にゼストがいた事を一同に伝える。キョウ達の言葉に一同は驚いていた。ゼストを知るナカジマ姉妹はその言葉にショックを受けていた。

「えっ？ 嘘だよな？ アギちゃん、キョウにい」

「いや、本当の事だ。確かにゼストさんだった……」

「なんで、何でゼストさんが……。うわああああ」

「落ち着きなさい、スバル！！ 悲しいのはあなただけじゃないんだよ！！」

「そうよ、先輩もアギトさんもギンガさんも辛いんだよ！！ しっかりしなさいよ！！」

取り乱そうとするスバルをギンガとティアナが抑える。ギンガの表情も辛そうだ。彼女の顔も今にも泣きだしそうな物だった。慟哭するスバルと、必死に耐えようとするギンガの姿を見たティアナは今までになく心配そうな顔だった。

その場にいた一同も心配そうな表情を浮かべていた。

「く、詳しい事は隊舎に戻ってから教えて」

「応援部隊の三人は至急戻ってきてくれ。ヴァイス陸曹に伝えておく」

通信越しに聞こえるシャーリーの声も動揺を隠せてはいなかった。

彼女も幼い頃からゼストを知る人間の一人なのだ。

応援部隊の三人はそのまま隊舎に戻ってもよいという指示がグリフイスから渡り、三人はそれに従う事にした。

ヘリに乗っている間、三人は終始無言だった。ヴァイスも心配そうに三人を見ていたが声を掛けることは出来ないでいた。

キョウ達は隊舎に戻ると、すぐに司令室に向かいグリフィス達ロングアーチに詳細を伝えた。ゼスト達とジェイル・スカリエツティが接点を持っているという事も。ゼストの身体については何も話さなかった。

キョウとアギトは話し終わると足早に部屋を出ていった。幼馴染三人は二人の背中を見つめる事しか出来なかった。

「キョウ君達、想像以上に堪えているね。僕たちもショックだったけど、直接対峙した彼らはそれ以上だろう」

「ゼストさんが……。ギンガちゃんも無理しなくて良いよ。早く休んだら？」

「ありがとうシャーリー。でも二人はまだ何か隠している気がするんだ」

「確かに。ギンガちゃん、二人について行ってくれないかい？その事は聞き出さなくても構わない。ただ、二人の落ち込み方は尋常じゃない。僕たちも隊長達が不在で此処を離れられないし、頼まれてくれないかな」

「分かった。二人の分まで私が付いてるよ。行って来るね」

ギンガも指令室を後にしキョウ達を追う。

「この事は僕が隊長達に伝えておくよ」

「うん、グリフィス君も余り無理しないでよ」

グリフィスとシャーリーも辛そうだった。しかし自分達がしつかりしなければと必死に耐えている様子が伝わってくる。他のロングアイチのメンバーも心配そうに彼らを見つめていた。その後、一同は業務を続けていく。

キョウとアギトはシミュレーターの前に来ていた。

其処は海の見える場所だった。キョウは手すりに手をかけ、アギトは彼の方に腰掛けて二人で海を眺めていた。

「此処にいたんだ……」

ギンガが後ろから二人に声をかける。

「ゼストさんの事は二人だけの問題じゃないんだから、自分達だけで全部受け止めなくても良いんだよ」

ギンガはキョウウの隣に立ち言う。

「ゼストさん、クイントさんとルーテシアちゃんのために今まで行動していたらしい」

「それに、身体がボロボロなんだって。それなのに、それなのに私達は……」

キョウウとアギトは泣いていた。ギンガはそんな二人を優しく抱きしめる。

「二人とも辛かったんだね。我慢しなくても良いんだよ……」

ギンガも涙を浮かべていた。キョウウ達はゼストの身体にレリックが埋め込まれている事を話す。一度死んでしまっているという事も。それから三人は海に向かい泣き続ける。恩人であるゼストに降りかかった残酷な運命に対する悲しみを抑えられなかったのだ。

ひとしきり泣き続け、三人は落ち着いていった。海には夕陽が射している。

キョウウは二人に切りだす。

「この事は中將にも報告しようと思つ」

「それで良いと思う。レジアス中将もゼストさんの事を心配しているんだし」

「ジェイル・スカリエツィもこの件に関わっているんだから私も賛成だぜ」

「俺達だけでこの件は解決できない。それでも何か出来る事はある筈だ。ゼストさんは俺達がこの件に関わる事に反対していたけど、親父や中将の願いを絶対に形にしようと思う。力を貸してくれ」

「うん!!」

キョウ達は何とか表面上は立ち直れたようだ。心の中の悲しみがすべて消える事はなかったが、此処で歩みを止めては昔誓った事に反すると感じているのだ。

それから三人はゼストを止めるといふ父達の願い、地上の平和を守るという誓いを再確認していくのだった。

EP50 邂逅2 ホテル・アグスタ（後書き）

オリジナルの展開ですけど、キョウ達が苦悩している間も会場内で楽しんでいた隊長陣って何なんだろうな。

あ、隊長達との不和みたいな展開はないです。
読んでいただきありがとうございました。

EP51 懺悔する漢（前書き）

『KOF』のコンボ動画を見ていたらこんなものを想像してしまいました。

ガジェットを持ちあげ「ナカジマリベンジャー」と叫び頭突きを浴びせるギンガ。胸からビームを打ち出すスバル。
姉妹をマキシマみたいに魔改造すればよかったかもしれない。

『OHANASII』回ですが、オリジナル展開にしてみました。
暗い話は嫌いです。

原作の面影はどこに……。

キヨウ達が隊舎へと戻ってすぐ、フォワード陣と隊長陣は合流した。新人達が無事に任務を成功させた事をなのは達は喜ぶのだった。

キヨウ達が既に戻っているという事はシャーリーから事前に隊長陣へ連絡が入っていた。

当然はやてもそれを許可している。はやてはその頃、会場内で再会したヴェロツサ・アコース捜査官と喫茶店内で会話をしていた。

ゼスト達の事はその時は隊長達三人には伝えられていなかった。シャーリーもグリフィスも、まだ心の整理が付いていなかったのだ。

隊長陣とフォワードの一同が現場検証を行っているときにキヨウとゼストの戦闘の事が伝えられた。

新人達の活躍に喜んでいたら隊長達もゼストとキヨウが戦闘を行ったと伝えられ驚きを隠せなかった。

彼らも面識はなかったのだが管理局時代のゼストの活躍は知っていたのだ。それに彼がキヨウ達に大きな影響を与えているという事もその時のスバルの表情は暗いものだった。そんなスバルを心配したなのは声をかける。

「スバル、ゼストさんが今回の件に関わってるって知ってショックだよ。ちょっと私とお散歩しようか？」

なのははその場のメンバーに抜けると伝えスバルを連れ出す。

その後、スバルとなのははホテルの周りへと足を進める。

スバルはその時、終始無言だった。なのははそんな彼女を気遣い、励ましの声をかけていたのだが返事は元気のない物ばかりだった。

周りに人がいなくなつた所で、十五分程二人は佇んでいた。スバル

はずっと一人で何かを考えているようなそぶりだった。

そうこうしている時、突然スバルはなのはに言葉を放つ。

「なのはさん、訓練の密度をもっと上げてもらえないでしょうか？ エリオ達が居るから今のペースなのは分かります。でも、私はもっと強くならなくちゃいけないんです！！」

スバルは真剣な表情でなのはを見つめる。なのはにはスバルが何か焦っているように感じられた。

「ダメだよスバル。基本を徹底して身につけないと、後で絶対困る事になるから。ゼストさんの事もあって、焦る気持ちも分かるけど」

「私からもお願いします！！」

二人の後ろから声が聞こえた。二人が振り返ると其処にはティアナが立っていた。彼女もなのはとスバルを追って其処に駆けつけて来たのだった。ティアナはスバルの隣に移動する。

「ティアナ、現場検証の方はどうしたの？」

「今はガジェットへの専門的な調査が行われていますので私達に出来る事はもうないとのこと。ヴィータ副隊長から自由時間をいただきました。お願いします、なのはさん。私達二人も先輩達力になりたいんです」

「ティアナ……」

ティアナの言葉にスバルは嬉しくなり言葉をこぼす。

「二人のお願いでも訓練の密度も内容も変更は認められないよ!!
あのメニューはフォワード陣全員の事を考えて作っている物でもあるから」

なのはが強く言い放つ。二人はその言葉に落胆の入りを隠せない。だが、なのはは言葉を続ける。

「でも、その代りに追加メニューでの訓練を付けてあげる」

「えっ、ホントに?」

「本当ですか? なのはさん!!」

なのはの言葉に二人は喜びの表情を浮かべる。なのはもそんな二人を見て笑顔で言う。

「ちゃんと普段の訓練のしつかりやってもらっからね。その日の動きを見てやるかどうか決めるから」

「はい、ありがとうございます。なのはさん!! 訓練も今まで以上に頑張ります!!」

「嬉しい、ありがとうございます。兄さんの妹として恥じない実力を付けて見せます!!」

その後、三人は会話を続けた。なのはは多忙な事もあり、新人達とこの様な機会に恵まれることは余りなかった。だが、これをいい機会にとお喋りをしたのだ。

初めは追加メニューの事について話した。忙しい時はヴィータやシ

グナムに頼めるようお願いするということをなのははスバル達に伝える。訓練の内容は対人戦の場面を想定すると彼女が言くと二人は喜んだ。

訓練の話題が終わると会話は取りとめのない内容に変わった。その様子は管理局員ではなく普通のハイティーンの女の子達といった所だったが三人ともそれを楽しんでた。

それからしばらくして、シャーリーから帰還せよとの通信が入るまでそのお喋りは続いた。

なのはとティアナとスバルの距離はこの事で近付いていくことになった。

「なのはちゃん？ 二人と何かあったん？」

隊舎へ戻るへりの中でも三人は仲良さげに会話をしていた。そんななのはを見て、はやては尋ねる。

「うん、ちょっと三人でお話をしたんだ。ねっ？」

「はい！」「」

帰りのへりの中の雰囲気は三人のおかげか、和気あいあいとしたものとなった。

一同は隊舎へ到着すると、それぞれの業務を始めた。

はやては部隊長室に戻り仕事に取りかかる。暫らく彼女が仕事をしている、先に帰っていたキョウ達三人が部屋に訪ねて来た。三人からはやてはベストとの今回のやり取りを詳しく聞いた。戻ってすぐ、グリフィスから詳細は伝えられていたのだが、死亡していたと思われるいたメガーヌ・アルピーノにルーテシアという娘がいた事やその娘が召喚師である事等を改めて聞かされたのだった。

キョウ達のはやての下を訪れたのはそれ以外にも目的があった。三人は後日、地上本部のレジアスに会いに行こうと考えているので、その為に時間が欲しいとの事だった。

はやては三人とレジアスの関係を知っているのでそれを快諾し、アポイントメントも取っておくと伝える。

キョウ達三人は応援要員という事もあり、新人達の訓練の補佐など六課での仕事自体はそれほど多くないという事も関係しているのだが。

もちろん、それ以外に108部隊との連絡や調整等の仕事は請け負っている事も忘れてはいけない。

キョウ達ははやてに感謝し、深々と礼をして部屋を後にした。

一方、なのはは隊舎についてからフェイトや副隊長達とミーティングを行った。その際、スターズの二人の追加訓練の話をしたのだが、ヴィータもシグナムも快く引き受けてくれた。スバル達は訓練校時代に腕を磨いていた様なので、エリオ達よりは訓練が負担になって

いないと二人も感じていたのだ。それに、フェイトまで時間がある時は訓練を見てくれるとのことだった。

なのは彼女たちに感謝するのだった。

それから今回の出勤の反省等も行われた。ティアナのセンターガードらしからぬ戦い方も話題に上ったが、なのはがその原因について語る一幕も見られた。教導隊の知人が関係していると……。

なのはの話を聞き、一同は納得していった。

スバルの魔法についても、彼女のセンスを一同は評価していた。覚えも早く、独自に技をアレンジする才能は素晴らしいと。新人達の動きも良かったので隊長達からの評価は悪くはないようだ。

スバルとティアナは仕事が終わるとキャロと共に入浴していた。昼間、元気がなかったスバルはなのはと話したことであまく立ち直れたようで何時もと同じく元気だった。

一方、男湯ではキヨウがヴァイスとエリオを誘い三人で入浴をする。三人で互いに背中を流し合ったり、どれだけ長く湯に顔を浸けられるか勝負をしたりしていた。家族以外のそれも信頼している同性との

交流という事もあってエリオは嬉しそうだった。

ホテル・アグスタへの出勤から数日が経ち、キヨウとアギトとギンガは地上本部へと来ていた。移動はもちろんんキヨウのバイクだった。受付からレジアスの居るフロアに三人は通される。そこには気の強そうな女性の姿があった。眼鏡をかけ、茶色い髪をショートにしている。どうやらレジアスの秘書の様だ。

「あなた達が中将と面会を希望している人たち？」

キョウ達は彼女の問いに答え、名前と階級を伝える。その女性はキョウとアギトの名字を聞いた時、それまでしていた厳しそうな表情を一変させる。

「あなた達、アーデルハイドって。ソウジおじさんとこの子供なの？」

「はい、ソウジは俺達の父ですけど……」

キョウが答えると彼女はフレンドリーな雰囲気醸し出した。その女性はオーリス・ゲイズという名で、階級は二佐とのことだ。何とレジアス・ゲイズの娘だという。ソウジの事は小さい頃よく遊んでもらっていたので覚えていたらしい。

「親父ってどんだけ顔が広いんだよ……」

「だよな、キョウ。管理局の人って親父の知り合いばっかじゃん」

「おじ様、凄い人だったんだね」

キョウ達は改めてソウジの顔の広さに驚いていた。

それから三人はオーリスによってレジアスの部屋に通された。オーリスは部屋の外で待つようだ。レジアスはデスクに付き三人を待っていた。挨拶もそこそこにキョウ達は本題を切り出す。

ホテル・アグスタの近くでゼストとの姿を見たという事を。ゼスト隊のメンバーだったメガーヌの娘であるルーテシアについても伝え

た。情報はレジアスも仕入れていたようだったが、キョウ達に直接話を聞いて苦痛な表情を浮かべていた。

「それで、もうお聞きになっておられるかもしれませんが、事件の背後にはジェイル・スカリエッツィの存在もあるようなんです」
ギンガがレジアスに言う。スカリエッツィの名を聞き、レジアスの表情はさらに暗くなる。そんなレジアスにキョウは尋ねた。

「中将、スカリエッツィの事を何か御存じで？」

レジアスは目を閉じ深くため息をつく。それから何か考えごとをしているようだった。彼が口を開くまでキョウ達は長い時間が経ったように感じられた。

「スカリエッツィか。まさか奴がな。お前達は『戦闘機人』と『プロジェクトF』というものを聞いたことはないか？」

レジアスの言葉に三人は驚きの表情を浮かべる。

「お前達三人の事は聞いている。当事者のお前達にそれを聞くのは愚問だったな。これ以上隠し事はしたくない。今からする話をよく聞いてくれ」

それからレジアスは話した。スカリエッツィがそれらの技術を開発したという事を。更には自分が戦闘機人計画や人造魔導師の開発に関わりを持っていたという事も。陸の戦力不足を解消するために犯罪に手を染めていたというのだ。

「どういう事なんですか！！ 遣伝子サンプルは医療センターの汚

職が関係していたのではなかったんですか？」

キヨウが声を荒げる。三人は管理局に入り、ゼスト隊の関わった事件について調べていたのだ。それにより自分達の出生もある程度は知っていた。

「あの時はあれが最良だと思ったのだ。高ランク魔導師が不足する地上ではあの時はこれしか思いつかなかったんだ」

レジアスは続ける。その当時は今以上に戦力不足が深刻な事態で、他にとる手立てがなく、ああする事しか出来なかったと。遺伝子を盗み出す際に口利きを行っていたというのだ。キヨウの誕生についても彼は語った。スカリエッティの下にいた研究者達が独立をし、アギトを何処からか手に入れ研究が行われていたという事を。

キヨウ達が救出されたのはスカリエッティにより、管理局に情報が齎されていたからだというのだ。キヨウ達は8年前の事件についても聞いた。その事には関わってはいなかったらしい。だが、レジアスはゼスト隊の壊滅に責任を感じていた。ずっとその罪悪感に苛まれていたというのだ。彼は自分の過去の行いを心底悔いているようだった。

「あの頃のワシは、ゼストとソウジとの誓いを果たそうとして、決して取ってはならない手段に手を出してしまった。三人とも本当にすまない」

ゼストはキヨウ達に頭を下げる。キヨウはレジアスの胸ぐらを掴みかかる。

「ぐっ。すまない……」

「中将、俺はあなたの事を尊敬しています。でも、あなたの行った行為は犯罪です。あれは地上の事を考えての行為だと胸を張って言えますか？」

キヨウの後ろにいたアギトとギンガは悲しげな表情だった。尊敬していた人物が自分たちを裏切っていたからだ。

「ああ。ワシはひと時たりとも地上の平和の実現という目標を忘れた事はない！！」

レジアスの目は真剣だった。とても嘘を言っているようには思えない。キヨウはレジアスから手を離す。レジアスはその場に座り込んだ。

「過去は変えられません。現に私達はもう産まれて来ているんですから。でもこれ以上私達と同じような子供を増やさないでください！！」

ギンガが声をあげた。彼女は涙も流している。

「許されない事をしたとは分かっている。だが、本当にワシは地上を守りたかっただけなんだ。それだけは信じてくれ！！必ずしかるべき罰は受ける」

それからレジアスは続けた。現在はスカリエッティとは縁を切っているという事、そして今自分は抜けられないという事を。キヨウ達もレジアスに変わる人間は地上には居ないという事を理解していた。其れに自分達が管理局に入る前もその後も、彼の今までの行動で地上の事を真剣に考えているという事は分かっていた。

それから三人は彼の頬を一発ずつ殴る。ソウジの分、ゼストの分、

そして自分達の分と……。

殴られてからのレジアスの表情は憑き物が取れたような表情だった。

「中将、あなたのやった事は確かに許されない。其れに俺達や親父たちを裏切ったんだ。でも、俺はあなたの事を尊敬している。誓いを果たそうとする姿を俺は、俺達は見えていたんだから」

「私達が中将やゼストさん、親父の三人の願いを形にしてやります。だから、これからは私達や親父達を裏切るような事は絶対にしないでください」

「私達はまっとうな手段でやり抜きます。ですから中将、スカリエツティやゼストさんの件が片付いたら罪を償ってください」

「ああ。約束する。必ず罪を償おう」

それからレジアスは椅子に座り言った。研究施設から保護された子供たちに自分の給与から毎月一定額を仕送りしており、時間があれば会いに行っているということ。今、自分が出る償いは残念ながら其れ位しかないとのことだった。事件が解決したら一生をかけて償っていくと彼は言う。

「あなたの事を信じていますからね、中将」

その言葉を残し、キョウ達は去っていった。キョウ達が帰った後、オーリスは部屋の中に入る。

レジアスは頬を腫らしデスクに付いている。

「中将、どうなさったんです？まさか、曹長達が？」

「いや、殴られて当然の事をしたんだ。ワシが悪いんだ。これはその罰だ……。彼らの思いを裏切ることの無いよう、これから頑張っていくぞ！！」

「このバカ野郎が！！」

その日の晩、レジアスはソウジの下を尋ねる。二人は縁側で月を見ながら酒を飲んでいた。奇しくもゼストがソウジの下を最後に訪れた時と同じような光景だった。レジアスはキョウ達にした話をソウジにも行った。ソウジは三人と同じように彼を殴る。

「俺達の誓いは地上に住むみんなが笑顔で居られるような平和な世

界を作るつてもものだっただろうが！！ お前は何やってたんだ！！」

「すまない、ソウジ。だが、見ていてくれ。これからのワシの全てをかけてその誓いを形にしてみせる。ゼストの件が片付いたら必ず罰も受ける」

レジアスの目は本気だった。人生をかけて地上を平和にするという意思が感じられた。

「その言葉、信じていいんじゃない？」

「ああ」

ソウジはレジアスに杯を渡し、レジアスは其れを黙って受け取る。ソウジは其れになみなみと酒を注ぎ言う。

「終わった事はもう良い。さっきのでチャラだ。ワシやゼストの分まで頑張ってくれよ、親友」

「こんなワシをまだ親友と呼んでくれるのか？」

レジアスは涙を流す。自分の許されない行為を情けなく思った。未だに自分を親友と呼んでくれるソウジに対して申し訳がないと感じた。

「爺が泣くななんて、酒が不味くなる。相変わらず泣き虫なヤツじゃない」

ソウジは手酌で杯を空けると、酒の入った容器をレジアスに渡す。レジアスは何も言わず其れを受け取り、ソウジの杯に酒を注いだ。

それから言葉はいらなかった。二人は酒を酌み交わしながら心で語らったのだ。

時間が12時を回った頃、レジアスはソウジの家を後にする。彼の心は来た時よりも少し軽くなったように感じられた。

その後のレジアスは其れまで以上に仕事に励んでいった。オーリスが心配する程に。だが彼は弱音を吐かない。昔誓った友の約束、そして自分達を憧れてくれた次代の若者達の為に精一杯仕事を続けるのだった。

EP51 懺悔する漢（後書き）

ユ一ノ君の「ゆ」の字も出ませんでした。

レジアスさんの件は早めに方を付けたかったので。

キヨウ達が殴るとこは『テイルズオブヴェスペリア』でレイヴンが殴られるとこをイメージしました。

ソウジとのやり取りは私のイメージでは『花の慶次』での結城秀康のエピソードを思い描いていたのですが全然違いましたね。

文才が欲しい。

読んでいただきありがとうございます。

EP52 ガンブレイド(前書き)

ティアナがというより、『クロスミラージユ』が魔改造されていると
感じるかもしれません。

キョウ達がレジアスの下から六課に帰って数日が経った。それからの彼らは何事もなかったかのように通常の業務や訓練を続けていた。そうした中、彼らの下にオーリスから通信が入る。レジアスはこれまで以上に仕事に精を出していると。

オーリスはあの日何が起こったのか聞いてきた。キョウ達はオーリスに詳しい事は話さなかったが、レジアスが自分達に言った事を実行してくれているようで嬉しく思っていた。オーリスはレジアスを心配に思っているようだったので、三人はあまり無理をしないように身体に気を付けてと伝言を頼むのだった。通信の後、自分達も負けてはられないと仕事をする手を早める。訓練にも其れまで以上に力を入れていくのだった。

一方、ホテルで追加訓練の約束をなしていたスターズの二人も、デスクワーク等が終わってから手の空いている隊長陣達から稽古を付けてもらっていた。

「アクセルシューター!!」

「スバル、飛んで!!」

「了解!! てやつ!!」

「クロスファイアシューター!!」

なのはが複数の誘導魔法をスバルに放つ。数は6発程で、なのはに向け接近していたスバルをめがけ、勢いよく飛んでいく。スバルは後ろからティアナに指示を出され、その通りに跳躍する。スバルがさつきまで居た場所にはティアナが放った魔法が通過し、誘導魔法を相殺する。

「てえりゃあああ!!」

飛び上がったスバルは空中からなのはに向かい拳を放つ。重力も利用したそれは破壊力抜群の様だ。喰らったらかなりのダメージを負うであろう一撃だった。

「プロテクション!! 甘いよ、スバル」

なのはは其れを簡単に防いでしまう。だが、彼女は自分の立っていた位置から三步分程後退していた。簡単に受け止められていた昔と比べると大きな進歩である。

「いくよ。ショートバスター!!」

「きゃあ!!」

スバルはなのはの砲撃魔法を至近距離でまともに受けてしまいその場に倒れる。

「ファントムブレイザー!!」

スバルがなのはに攻撃を仕掛けている際にティアナは詠唱を完了させていたようで、なのはに向かい砲撃魔法を放ってきた。なのはは其れに気付き空に逃げる。

「ちゃんとスバルに当らない位置から狙えるなんて、成長してるね。ティアナ。これはご褒美」

なのはの持つ『レイジングハート・エクセリオン』に魔力がチャージされていく。

「うわっ、そんなご褒美いりません!!」

「デイバインバスター……!!!!」

ティアナへ向かい桃色の砲撃魔法が放たれる。なのはの十八番『デイバインバスター』である。とてもご褒美と呼べない代物がティアナを飲み込む。ティアナは攻撃を受け倒れ込んだ。

「うわあ、ティア悲惨……」

スバルは意識があるようだ。なのははちゃんと手加減していたのだ。

「痛たた。酷いですよ、なのはさん!!」

ティアナも同様だった。攻撃を喰らった後、なのはを非難する。

「ごめんね、二人とも。教導隊では、きっちり打ちのめす事が教えられる側の為になるって方針だから」

なのはは笑顔で答える。三人の仲はホテルの一件からかなり近づいた物になったようだ。その後、三人は今の模擬戦の反省を行う。なのはから動きや魔法運用のダメ出しが行われていった。其れはとても丁寧なもので、的確で分かりやすい事もあり二人はなのはから鍛

えてもらえることに喜びを感じていた。

「じゃあ、今日の追加訓練はこれでおしまい。明日も普段通りの訓練があるから、二人とも早く休んでね。無理をして身体を壊すなんて本末転倒だから」

「はい！！　なのはさん、ありがとうございました」

「ありがとうございます、なのはさん。忙しいのに付き合ってもらって」

「どういたしまして、二人とも。でも、あんまり無理しないでね。無理がたたると、どこかでとんでもないミスをしてしまうから。私も経験があるんだ」

「ええ？　なのはさんが？　まさかあ？」

なのはの言葉を信じられないのか、スバルが冗談じゃないのかといったニュアンスで問う。

「本当だよ。私だって人間だもの。そうだ、後でその時の映像をシヤリーに頼んで見せてもらおうか？　二人には私と同じ目には絶対遭って欲しくないから」

なのはは自分の過去の失敗を二人の反面教師とすべく提案をする。二人は其れを快諾し、隊舎に戻ってからなのはと共にその映像を見る事にした。

隊舎に戻ると三人は隊長達がよくミーティングを行う雑談スペースへと移動する。其処は、ソファアが置いてあり大人数も座れそうな場所だった。

「お待たせしました、なのはさん!!」

シャーリーも仕事が終わって手が空いているようで、其処に到着する。シャーリーは端末を操作し、なのはに頼まれた映像を再生しようとした。

「あれ？ みんな何やってるんですか？」

キョウもその場に通りがかる。エリオも一緒にあり二人は風呂上がりの様だ。

彼らになのはは説明する。自分が無茶をして撃墜された時の映像を今から見ようとしていたと。キョウとエリオもその言葉に興味を持ち、見ていいか尋ねた。なのはは其れを快諾し、せっかくだからキョウやギンガ達にも見せようと提案する。無理をしてどうなるかと

いう事をみんなに学んで欲しいとのことだ。

それから15分程してフォワードの新人メンバーと応援部隊が揃い、映像は再生されていく。

其処には幼き頃のなのはが経験した闘いの一部が映し出された。9歳で魔法と出会い、小さい身体で集束砲撃魔法を使用する彼女の姿をみて一同は驚く。『ジユエルシード事件』や『闇の書事件』の映像の中のなのはが子供とは思えない戦いぶりだった。

だが、その激戦はなのはの身体に大きな負担をかけていたのだ。シヤリーはなのはが撃墜される映像を見ながら解説をする。八年前にある事故によって重傷を負っていたのだ。血を流すなのはを抱きかかえるヴィータの姿がモニターに映し出されていた。

それからなのはの病院での様子が映る。歩けなくなる程の重傷だった。リハビリや、周りの友人達の協力により、何とか現場に復帰する事が出来た。そうして今のなのはがあるのだ。

「あの時はみんなに迷惑をかけちゃったんだ。それに自分の力を過信していた。私の周りには心配してくれる沢山の人がいたのに。だからね、スバルもティアナも、エリオもキャラも私と同じ過ちをして欲しくないんだ。」

「なのはさんにそんな事が……」

「あの頃は母さんの、ゼスト隊の事があったから知りませんでした」映像が終わりなのはが口を開く。それに対し、ティアナとスバルが声を返す。

「俺も以前の空港火災の時に、ナカジマ三佐から叱られました。周

りの人間の事を考えろ、自分を犠牲にされても、それで助けられた人間は喜ばないって」

「だから私達は自分の事も大切にするって心に決めているんです」

キヨウとアギトも自身の経験を話しギンガもそれに続く。

「私も二人の事を本当に心配しました。だから私自身も周りの人を心配させないようにと心がけているんです」

「周りにはギンガやアギトを始め、頼りる先輩に後輩、沢山の人たちがいますから。沢山の人たちの力を借りる事は恥ではないですもんね」

キヨウはその場の一同をみながら言う。

「私もその時お説教したよね？」

なのはが悪戯っ子の様な笑顔で二人に声を掛ける。それにより一瞬だがキヨウの身体は硬直してしまう。

「あの時はすいませんでした」

なのはの言葉にキヨウとアギトは声をそろえる。二人ともばつが悪といった様子だった。其処にいたメンバーはその様子が面白かったのか、二人を見て笑いだす。その場は笑いにより明るい雰囲気にも包まれるのだった。

「ああ、そうだった。ティアナには別件で用事があったんだ」
シャーリーが突然声をあげる。彼女はティアナのデバイスの機能についての説明をするとのことだ。なのはが其れを依頼していたようで、ティアナからデバイスを借りる。

「シャーリー、あれのことだよな？」

「はい、なのはさん」

「クロスミラージユ+に何かあるんですか？」

ティアナは気になり不安そうに尋ねる。なのはとシャーリーは心配するなど彼女に言い、クロスミラージユを起動させ解説を行う。ワイヤー以外にもまだ機能があるというのだ。テストモードからセカンドモードを起動させ、ワイヤー射出状態の様に『クロスミラージユ+』を變形させる。赤と黄色の紋章の部分を一度触りトリガーを引くと、グリップの方から魔力刃が形成された。銃身の上の方には新たにグリップが形成される。

「ティアナはお兄さんの様に執務官になりたいんだよね？執務官は個人戦も多くなるから、近接戦用にこういう機能も内蔵されていたんだ」

「さっき、なのはさんから頼まれたんだ。この『ガンブレイドモード』の説明をして欲しいって」

「四人とも、もう少ししたら訓練でセカンドモードを使ってやってもらおうと思ってるんだよ。ティアナのは機能が多いから一足先に説明してもらおうと思ったから」

それから二人により『ガンブレイドモード』についての説明が続けられた。使用時は新しく形成されたグリップを持つようにとのことだ。更にもう一方の『クロスミラージユ+』を同様に變形させ、二刀流が可能だという事、二つを上下逆に連結させれば『ツインエツジモード』になるという事を実演し説明が行われた。

「うわあ、ティアのデバイスって凄いなだね」

「カツコイイです。僕のストラーダも變形機能って無いんですか？」

「ごめんね。エリオ達のはまだ、純粹にリミッターが解除されるだけだから。でも今までは比べ物にならない位にパワーアップするから我慢してね」

エリオはやはり男の子の習性だろうか、ティアナのデバイスの變形を羨ましがりシャーリーに聞いた。

「そうなんですか？」

「エリオ君、ストラーダも格好良いよ。クロスミラージユ+みたいに大掛かりな變形はしなくても今よりもっと強くなれるんだから」

「そうよ、ストラーダは騎士の武器にぴったりじゃない」

キャラとギンガが励ます。

「俺のデバイスは演算以外の機能は何も搭載してないんだぜ。お前のストラーダも強度が必要だから我慢しろよ」

「そうだぜ。シンプルに一つの機能を突き詰めるのも男らしくてカッコイイと思うぜ」

キヨウたちの言葉で納得をし、エリオは『ストラーダ』に謝る。特に『ストラーダ』は気にしていないようだ。

「これからの訓練は今まで以上に厳しくしていくから、みんなしっかりついて来てね」

「……はい！」「……」

新人達は元気良く返事を返す。その日は其れで解散となった。

エリオとキャロの二人も、スターズの二人が今までの訓練に真剣に取り組んでいた姿に影響を受け努力を続けていた。

だが、それまで以上に翌日からの訓練を四人とも励んでいったのだ。なのはの話を聞き、決して無理はしない範囲で頑張るのだった。

フェイトからはエースとストライカーの説明が訓練の後に行われた。四人にはどんな困難も突破できるようなストライカーと呼ばれる魔導師になって欲しいと。

新人達はなのはやフェイトの期待に応えようと心に決める。

彼らはどんどん力を付けていくのだった。

EP52 ガンブレイド（後書き）

元ネタは『ダブルオークアンタ・フルセイバー』です。

ティアナのデバイスの新機能は『GNソード？』や『GNガンブレイド』でググると分かりやすいと思います。

読んでいただきありがとうございました。

EP53 休日の機動六課 前編（前書き）

ちよいと実家に用事があつて帰省していました。
更新の遅くなつてすいません。

日常パートです。原作とはかなり違いますが今さらですね。すいません。

ご意見ご感想、ご指摘の方、よろしく願います。評価等もいた
だけると嬉しいです。

EP53 休日の機動六課 前編

ティアと一緒になのはさん達、隊長からの追加訓練を受けるようになって二週間が過ぎた。私もティアも付いていくのがやっとだったが、力が付いて来ている実感はある。隊長達は私達の動きを的確に指導してくれる。丁寧に、与えられる課題が出来るようになるまで教えてくれてすごく為になってる。

でも、皆さん厳しすぎるよ……。なのはさんは笑顔で砲撃してくるし、ヴィータ副隊長とシグナム隊長は訓練とは思えない威圧感を出してくるし……。フェイト執務官もあ見えて結構スパルタな所があるんだもん。母さんやギンねえ達との訓練がなかつたらきつと弱音を吐いていたかもしれない。だけど、絶対に弱音は吐かない。何時までも守られてるばかりは嫌だから。

エリオやキャロも私達の姿を見て訓練を必死になって行っている。二人ともまだ小さいから、訓練を増やすことはしていないけど、熱意は今までと比べ物にならない。隊長達や、キョウにい達、それに私達にまで色々と質問してくる。普段訓練での動きは別人の様に成長しているみたい。二人には負けられないな。

今日もこれから訓練だ。頑張っていこう。
先ずはティアを起こさないと……。

「ティア!!! 朝だよ!!!」

スバルは寮の自室にある二段ベッドの上から、下に寝ているティアナに声をかける。部隊の寮という事で、私物は少なく、女性の部屋とは思えない程に殺風景な部屋だ。壁もグレーを基調にしてある。だが、訓練校や以前いた陸士386部隊で慣れているのか、彼女達

は入寮以来、戸惑う事なく生活し始めていた。
スバルが声をかけるがティアナは起きそうにない。

「にひひひひ。久しぶりに、あれをやるのかな？ ティアにもギンねえにも最近やってないし」

スバルは悪戯を思いついた時の笑顔で呟く。その顔は幼い頃、アギトと共にソウジに悪戯をしていた時と変わらない無邪気な笑顔だった。

スバルは仰向けに寝ているティアナに近付き言った。

「ラルフ教官、技を借ります。取っておきだぜー！！ ティア、起きてー！！」

訓練校時代の恩師の物まねをしつつ、ティアナに馬乗りになる。彼女はティアナの胸に手を這わせる。彼女の手の動きは、以前銭湯で姉の胸を揉んだ部隊長にも負けていない動きだった。実はその時、その光景を見ていたのだ。スバルの優秀な学習能力は全く要らない部分で役に立ってしまった。その手の動きでティアナは曇った声をあげる。

「ふあ……。あつ、んあつ。はあん」

僅かに艶の籠もっている声が漏れる。仮に男性がその場にいたら前屈みになってしまいそうなティアナの声だった。

「せ、先輩。ダメ、そんな……。ギンガさんに悪いです……」

彼女はキョウの夢を見ているのか、スバルの手を彼の物だと思い声

を出す。

「（やっぱり、ティア……）ほら！！起きなつて！！」

「えっ？ 何、スバル？ ってアンタなんて事してんのよ！！」

ティアナは目が覚め、自分の胸を揉むスバルに向けて怒りの声をあげた。

「ごめん、ティア。スキンシップのつもりなんだけど」

スバルは彼女の上から降り、ベッドのそばに立ち答える。

「アンタ訓練校の頃にもたまにやってたわよね？ ギンガさんも被害に遭ってたって言ってたわよ。お説教してもらおうかしら」

「ごめんなさい、ギンねえには言わないで！！」

スバルはその場で勢いよく土下座をする。父が母に向かい謝る際にやっていた方法だ。御先祖様から伝わる由緒正しい謝り方だと彼女の父は口にしていた。

「分かったんなら良いけど。今度やったら絶対ギンガさんに伝えるからね！！」

ベッドから立ち上がり、腕を組みつつティアナが言う。それほど怒ってはいない様子で、スバルはホツとして土下座を止める。スバルは其れまでの表情を一変させ、ティアナが寝言で呟いていた事に言及する。

「ねえ、ティア。私が悪戯してる時、キヨウにいの事を口に出してたけど。やつぱり……」

ティアナが先輩と呼ぶ人物。其れはスバルの姉の恋人であり幼い頃から兄と慕っていたキヨウの事だ。スバルの声を聞き、ティアナは表情を一瞬曇らせる。そしてそれが嘘だったかのような笑顔で答える。

「違うわよ!! 勘違いしないで。先輩の事はそういう対象じゃないって前も言ったでしょ?」

ティアナが無理をして笑っているように感じ、スバルは声をかける。

「キヨウにはギンねえの彼氏で、本当はこんな事勧めるのは良くないって分かるけど。ティア、自分の気持ちを打ち明けないの?」

自分の気持ちを察したスバルにティアナは返す。

「……相棒のあなたには隠せないわよね。そうよ、先輩の事をそういう風に見ている部分は確かにあるわよ」

「じゃあ、キヨウに「それはダメ!!」えっ? なんで?」

スバルの言葉をティアナは遮る。そして彼女は続ける。

「私が二人の間に入ったら、二人の仲がぎくしゃくするかも知れないじゃない。そういうのは嫌なの。先輩もギンガさんも笑顔で居て欲しいから。其れに想いを伝えるだけじゃない、思いが実らなくても良い。見守るっていう事も愛し方の一つに形だっと思っの……。だから、お願い。誰にも言わないで」

「ティアはそれで良いの？」

「うん。私の事、心配してくれてありがとう。ほら、早く支度しよう！！ 今日私達が訓練の準備の当番だったわよね？」

ティアナは微笑みスバルに伝える。それから二人は早朝の訓練に向かう。なのはやヴィータ、フェイト、其れにキヨウ達三人は新人達に訓練を付ける。ティアナは何時も通り真剣に訓練に打ち込んでいた。スバルはそんな彼女の姿を見て思った。愛し方は人それぞれ。人を愛する事は報われる事ばかりではない。異性を好きになる経験がまだない彼女は、相棒の姿を羨ましく思っていた。

訓練後、隊長達は新人達に話す。デバイスのリミッターを解き、翌日からセカンドモードで訓練をしていくと。新人達はその言葉に喜ぶ。自分達の其れまでの訓練で付けた実力が評価されているからだ。

その日は早朝の訓練以外に仕事はなく、シャーリーの下にデバイスを持っていき、リミットを外してもらうと休日を楽しんで良いと指示が出される。新人達は其れを嬉しく思いはしゃぎだす。

キヨウ達も、その日は108部隊に定期連絡や合同調査の打ち合わせで顔を出す以外に予定がない。新人達のように半休をとって構わないとなのは達に伝えられた。

隊長陣が去った後、新人達とキヨウ達はその日の予定をそこで立て始める。

「せっかくだから、お前ら108部隊を見学してみねえか？ 午前中には用事は終わるからその間だけだ」

「兄さん達の部隊ですか？ 僕行きたいです」

「わ、私もちよつと気になります」

キヨウが提案するとエリオが興味を持ちキャラもそれに同調している。

「私達も良いのかな？ キヨウにい達のお邪魔にならないかな？」

「スバルも久しぶりに父さんに顔を見せないとね。きっと寂しがってる筈だから。お昼からはみんなでクラナガンに遊びに行きましょう」

「それなら。ねえ、ティアも行くよー！！」

スバルがティアナの方を押しつつ言う。

「皆が行くなら、私も行きます。良いです？」

「もちろんだよ、ティアナ！！ そうだ、私の好きな映画が上映されてるんだ。続編だけどみんなも楽しめると思うよ。みんなで見ましょっ？」

「おっ、あれか。かなりお勧めだぜお勧めだぜ。」

「うわっ、映画かよ。私はリインとメンテナンスを行うからまた留守番かぁ」

「ごめんな、アギト。お土産を買ってくるから我慢してくれよ」

キヨウは肩に乗るアギトの頭を撫でつつ謝る。

「分かってるよ。子供扱いすんな」

キヨウとアギトのやり取りでほんわかした雰囲気はその場は包まれていった。

其れから詳細が決められていった。移動はキヨウが運転するバイクと、免許を持つティアナがヴァイスにバイクを借りることで二台で行うようだ。それぞれにサイドカーを付けることで全員で移動する様だ。ティアナはヴァイスに貸してもらえるように交渉しに行き、その際サイドカーの手配も行うという。

キヨウ達三人ははやてに連絡を取る様で、隊長達と朝食をとにもするといいその場を去る。残りの三人は普段通りに朝食を取るつもりのようなのだ。

食堂に移動したキヨウ達は隊長達と共に食事を取る。その際にはやてに改めて許可を貰っていたのだ。シグナムとヴィータも彼らとは別に108部隊に行くようだ。その後は聖王教会に行くとのことで、基本的には午後からは別行動となりそうだった。移動もバイクと車で別である。ヴィータは戦技指導を行わねばならぬようで、少々うんざりしていた。食堂ではテレビが移されており、其処から聞こえ

る声をBGMに一同は食事をしていた。

「はむはむ。おいしいです」

「おい、リイン。口にソースが付いてるぜ？ ほら」

テーブルの上ではリインとアギトが食事を取る。リインははやて達に分けられた食べ物を頼張り、口にソースを付けていた。其れに気付いたアギトが、自分用のサイズに作られているハンカチで拭ってやっていた。

「二人とも、なんか姉妹みたいやわ」

「アギトちゃんは優しいです。はやてちゃんの言う通り、なんかお姉ちゃんみたいです」

「う、五月蠅せえ。リインがだらしないから、同じ融合騎の先輩として世話してやっただけだ」

アギトはリインの言葉に照れ、顔を真っ赤にしながら早口で答える。そんな彼女達の様子が可愛らしく、一同は微笑ましく思いながら眺めていた。

その時、テレビからはある人物の声が聞こえてくる。

『魔法と技術の進歩と進化。素晴らしいものではある。が、しかし！！ それゆえに我々を襲う危機や災害も、10年前と比べ物にならないほど危険度を増している。兵器運営の強化は進化する世界の平和を守るために必要なのだ！！』

レジアス・ゲイズ中将の声だった。映像に映る彼は少し疲れて見えただが、目は以前よりも強い意志を放っていた。その場にいる一同は食事の手を止めテレビに目を向ける。

『首都防衛の手は未だ足りん。非常戦力においても我々の要請さえ通れば、地上の犯罪も発生率20%。検挙率においては35%以上の増加を初年度から見込むことができる!』』

レジアスは非魔導師の隊員に質量兵器を配備させることを要求していた。現在、部分的であるが銃等の兵器の所持はデバイス扱いで認められている。しかし、絶対数が足らず治安維持に支障が出ていると呼びかけていた。

「このおっさんは、まだこんな事を言ってるのな……」

ヴィータがまたかといった感じでうんざりしつつ呟く。その言葉にキョウは反応し言葉を放つ。

「ヴィータ副隊長。地上は以前から深刻な戦力不足に悩まされているんです。中將の言っている案は、其れの解決に一役買うのでは？ 具体的なデータも示されていますし。質量兵器の一部解禁を求める事はそんなにいけない事でしょうか？」

「キョウ君、時空管理局は質量兵器の根絶を目的に組織されてるんだよ？ いくら治安維持の為でもダメじゃない？」

質量兵器の使用を容認すると取れるキョウの発言に対しフェイトが異論を放つ。

「そうでしょうか、フェイトさん。魔法だけでは限界が来ているからミッドの治安は良くないんじゃないんですか。我々も努力していただきますけど、それだけで治安の改善は残念ながらまだ出来ていません。以前行った地球は魔法文化はありませんでしたけど、治安は良かったじゃないですか」

キヨウの言葉を聞き、地球出身のなのはが苦笑いをしながら発言する。

「私達の故郷の日本って国では、管理局の代わりに警察や自衛隊って組織があつて、その人たちは武器を使用しているけど。きちんと管理されていたし、事件もこっちよりは少なかったかな」

「なのは!!!」

フェイトが感情的になり立ち上がろうとする。其れをはやてが止め、席に座らせ言う。

「フェイトちゃん、落ち着き。向こうで暮らしていてなのはちゃんが言ったことは事実やつてこと知ってるやる? キヨウ君、現実問題、質量兵器の解禁は一部にとどまっているしこれ以上は難しいんと違うかな。管理局の発足の理念に関わる問題やし。地上の人員不足が深刻なのは分かるけどな……」

はやても地上に所属する物として現状を理解しているようだ。複雑そうな表情だった。

「魔法も質量兵器もどちらも同じで技術だと思います」

それまでで黙っていたギンガが声を出す。

「ギンガ……」

キョウは彼女の名を呼ぶ。ギンガは話を続けるようで、彼女の方を向き耳を傾ける。他の面々も同様だった。

「其れ自体はただの道具だと思えます。要は其れを使う人たちの問題なのではないでしょうか？ 力を持つ者は其れに責任が伴う。力に振り回されないようにしなければいけない、と母やキョウ君のお父さんがよく口にしていました」

「そうだな、ギンガ。私達、騎士の持つ技も技術には変わらない。魔法も只の技術か……。忘れていたよ、力や技術に善悪などなかった。使う者次第という事を」

シグナムが言う。他の騎士たちも彼女の意見に異論はないようで黙っていた。

「まあ、現場の私達は与えられた仕事をしっかりとやっていきましよう。其れがミッドや次元世界の平和に繋がるでしょうから」

「そうだな、アギト。俺達は俺達の出来る事をやればいいんだ。でも俺はレジアス中将は間違っていないと思います。平和を守るためなら、よほど酷い事をしない限りは色んな手段を用いても良いと思います」

キョウは一度自分達を裏切ったレジアスが、以前よりも更に地上の事を考えて行動している事が分かり嬉しく思っていた。やはりレジアスは尊敬できる地上の英雄なのだと感じていた。

「確かに地球は治安が良かったけど、ミッドも同じように出来るかは不安だな。キョウ君達の言う事も分かるけど、うまくいかなかったら大変な事になると思う」

「フェイトさんの言いたい事も分かります。ただ、地上は余裕がないんです。今出来る事は限られていますし」

キョウとフェイトが意見をぶつけ合う。どちらも間違った事を言っていないのでなかなか意見がまとまらない。

「上との交渉とか難しい話は私に任しとき。みんなはアギトが言ったようにやれる事をやっていけば良いんよ。ほら、みんな早くご飯を食べよ？ 仕事もあるんやから」

はやての言葉で二人は落ち着き、一同も食事を再開しだす。キョウとフェイトも互いの意見は食い違っていたが、険悪な雰囲気はなかった。テレビには三提督が写り、話題はそちらに移る。その後は和気あいあいとした食事風景が続いた。ヴィータは三人を見て老人会などと言いだしていた。キョウとフェイトは食後も暫らく話していたが雰囲気は普段通りだった。どちらも平和を守るという基本の部分は同じなのだから。

場所は変わり、ガレージではヴァイスが自分のバイクにサイドカーを取りつつつティアナと喋っていた。キョウの分は自分で取りつけるようにと通信を送っていた。だが、その場には二台分のサイドカーが用意されており、バイクも出してくれていた。ヴァイスが面倒見が良い部分が見て取れる。まだキョウ達は来ていないようである。場所は二人だけだった。

「最近のお前の動きは凄いな。スバルと一緒に隊長達から追加訓練もやってもらってるらしいじゃねえか」

「そんな、まだまだですよ。皆さんのおかげです。それより、ヴァイス軍曹。一つ聞いて良いですか？」

「何だ？答えられる範囲でなら良いけど。俺に惚れたか？」

「違います！！ あの、軍曹も魔導師経験があられるんです？」

「ああ、武装隊出身だからな。お前よりはもう腕は劣るかもしれないけど、経験を生かしたアドバイスなら出来るぜ」

二人が話している場にキョウも合流する。キョウはテキパキとサイドカーを装着させていく。バイクが趣味の三人は作業しながらバイク談議に花を咲かせていた。何時か三人でツーリングでもしよう等

の約束も交わしていた。その場にギンガはいなかったが、キヨウによるとスバルと共にエリオ達二人を迎えに言っているらしい。

「ハンカチはもった？ IDもなくさないようにね？ お小遣いも足りてる？ 迷子にならないように気を付けるんだよ。ギンガ達の言う事をしっかり聞いて、向こうでもお行儀良くするんだよ」

「大丈夫ですよ、フェイトさん。兄さん達の迷惑にならないようにしますから」

「キヨウ君ばかり兄さんって呼ばれてずるい。私の事もお姉ちゃんって呼んでいいんだよ？」

「恥ずかしいですよ」

ロビーではフェイトがエリオの身支度を確認していた。過保護のようで10歳の少年に向けるには適さないような事も口にしていった。そんなフェイトを後ろで苦笑いしつつスバルは待っていた。

「はあ、キャラとギンねえ早く来ないかな……」

スバルが呟いてすぐ二人はその場に姿を現す。キャロの服装はピンクを基調にしてとても可愛らしいものだった。シャーリーとギンガで選んだらしい。

「どつでしようか？」

「可愛い！！ キャロ、凄く似合っているよ」

キャロの言葉にフェイトは興奮して答える。フェイトの言葉に後ろにいるギンガは得意そうな表情だった。

「ギンねえ、センス良くなったじゃん。昔は私が選んであげてたのに」

「恋をすると乙女は変わるのよ！！ なかなかでしょ？」

「えっ？ ギンガさんってだれか好きな人がいらっしやるんですか？」

キョウとギンガが付き合っている事を知らないエリオは、ナカジマ姉妹に尋ねる。

「エリオってキョウにいとギンねえが付き合ってること知らないんだっけ？ もう4年位になるんだよ」

「スバルさん、その話を振るとギンガさんはのろけモードに入っちゃいますよ」

スバルが答え、キャロは彼女の言葉に注意をする。事実、ギンガは妄想世界に旅出す寸前だ。スバルより先にフェイトが突っ込みを入

れ正気を保たせる。

「そ、そんな……」

エリオはギンガとキヨウが交際していたという事実によりショックを受けた様だ。そんな彼を一同は励ますが、少ししか効果は出ないようだった。エリオの初恋は散った……。

「キヨウにいてもギンねえも少しは周りを見て欲しいよ。エリオ！元氣だなんて！！ エリオにもそういう人は見つかるよ。ギンねえ達も幼馴染だったんだから、意外と近くに居るかもよ？」

「ちよつと、スバルさん！！」

スバルの発言をキャラ口は顔を赤らめて注意する。

「エリオにそういう事は早いよ。エリオが欲しいのなら先ずは私を倒せるくらいの子じゃないと任せられないな」

フェイトはスバルの言葉に反応する。親ばか、ここに極まる。

それから一同は隊舎の玄関に移動する。其処にはキヨウとティアナの姿があった。共通の趣味を持つ二人は其処でもバイクの話題で盛り上がっていた。其処に付く頃にはエリオも元氣を取り戻しているようだった。

それからののはとフェイトが見送りをし一同は108部隊へ向け出発するのであった。

デバイスルームではシャーリーと融合騎二人の姿があった。薄暗い部屋の中にはモニターの光と、ユニゾンデバイス用の調整漕の光が灯っていた。

「最初のリミッター解除がうまく行って良かったですね」

「はい、明日からは四機の調整で忙しくなりますし、なのはさんの『レイジングハート』の限定解除モード、エクシードモードの調整もしておかないといけません」

シャーリーは端末を操作しつつ答える。

「『バルディッシュ』のザンバーもだろ？楽しそうだな、シャーリー」

「」の心地よい忙しさ。ああ、幸せ」

シャーリーはラインに対しては敬語を使うが、ラインと同じ階級の

アギトには幼馴染という事で公の場以外では敬語は使用しない。

「アギトちゃんと違って最近はどうなともユニゾンしないんですね」
シャーリーはリインに声をかける。

「そうですね。はやてちゃん達は私を使う程の状況には先ずならないですから」

「うちは未熟なロードだからな。私が面倒みてやらないと、危なっかしいぜ」

「私はアギトちゃんが羨ましいです。何時もキョウさんと一緒にいられるじゃないですか」

「産まれてずっと一緒なんだぜ、今さらだよ」

「アギトちゃんとシグナムさんは相性よさそうですね。リイン曹長とキョウ君は相性は良くなさそうですね」

「私がキョウさんとユニゾンしたら氷を使った技を考えていましたから少し残念です」

「まあ、この先何が起こるか分かんねえから調整をバッチリにしかねえとな。頼むよ、シャーリー」

それからアギトとリインは服を脱ぎ調整槽へ向かう。同時に行えるよう二台用意されていた。

「うわぁ、アギトちゃんの下着ってヒロヒロです」

リインは白い無地の物を着用していたが、アギトは黒にレースがあらわれた物を纏っていた。

「それって、クイントさんが？」

誰の仕業か見当のついたシャーリーであったが一応聞いておく事にした。

「ああ、年頃の女の子なんだからって……。リイン、サイズは変わんねえみたいだし、欲しいのがあれば幾つかあげようか？」

「本当ですか？ リインもフェロモンバリバリの大人な女性に？
ありがとうございます、アギトちゃん」

それから二人はメンテナンスを行っていくのだった。

EP53 休日の機動六課 前編（後書き）

続きます。

ティアナのセリフの元ネタもやはり『花の慶次』です。

実家で久しぶりに読みました。

実際、ティアナの扱いをどうしようかずっと悩んでいたんですが、答えが出ました。

「答えは得た。大丈夫だよはやて。オレも、これから頑張っていくから」

読んでいただきありがとうございます。

EP54 休日の機動六課 中編（前書き）

詰め込みたい部分が色々あり、原作とは時間がずれています。そこは二次創作という事で大目に見てください。すいません。

「原作はギゼイになったのだ……。未熟な腕で書き続けるサウザー……。その犠牲にな」

失礼しました。

ご意見やご感想を募集しております。よろしく願います。

EP54 休日の機動六課 中編

「へえ、此処が108部隊ですか」

「そうだけ、キャロ。此処が俺達のホームでありギンガ達の親父さん、ゲンヤ・ナカジマ三佐が部隊長を務める部隊だ」

「おお、着いたのかい？キヨウ君、ギンガちゃん」

「ジョンさん！！ 其れにみんなも！！」

「お久しぶりです、みなさん」

キヨウ達は陸士108部隊の隊舎に到着していた。バイクから降り隊舎の正面に一同は立つ。其処にはキヨウ達の先輩であり、彼らの小隊で隊長を務めていたジョン・フーンの姿があり、他にも数名の魔導師の姿があった。彼は合同捜査の打ち合わせのため、キヨウ達を待っていたのだ。まだ到着していないシグナム達にはその場にいるジョン以外の隊員が付く事になっているらしい。

少しの間、キヨウ達は再会を喜ぶ。と言っても一か月も離れてはいないし、ちよくちよく顔を出してはいたのだが……。

ジョンはキヨウ達を会議室へ連れていく。スバル達はジョンと共に居た隊員の一人から案内をされる事になるようだ。

小柄で猫背ぎみの男が自己紹介をする。黒い帽子にサングラスという変わった出で立ちだった。

「ウキョー！！ あっしは、チヨイー等陸士でやんす。今日はみんなを案内するでやんすから、よろしくお願いするでやんす」

「機動六課より来ました、スバル・ナカジマ二等陸士です。何時も父や姉がお世話になっていきます」

「ご丁寧にも。部隊長のお嬢さんでやんすか？ という事はナカジマ曹長の妹さんでやんすね。美人姉妹って噂はホントでやんした。みんなに自慢できるでやんす」

六課の新人一同は彼に挨拶をする。スバルの存在は知っていたようだ。幼い頃にスバルは見学に来た事もあるので知っている人物も多い。実際、部隊内でギンガの隠れファンだったメンバーの中には彼女の妹の存在に関心を向ける一派が居るのだ。108部隊ではナカジマ三佐の美人姉妹は有名の様だ。

それから彼らは部隊の施設見学を始める。

ライトニング組は施設に興味津津の様だ。スターズ組の二人も以前いた部隊との違いや六課との違いを比べながら見学をしていた。

「此処が訓練場でやんす。六課に比べると大した事ないでしょうけど、ここでみんな頑張ってるでやんす」

108部隊の訓練施設は六課の様なシュミレーター等の新しい設備はなかったが、備品などは大切に使われているようだった。その場にも数名の隊員達がおり汗を流していた。

「やっぱり、六課って恵まれているんですね」

「ホントだね、エリオ君。私達も頑張らないといけないね」

「限られた環境に中でも工夫次第ではどんな事も出来るでやんす。みんな地上を守るために努力してるでやんすよ」

「二人とも、勉強になってるみたいね。チヨイ一士、ありがとうございます
ざいます」

「美人に褒められると嬉しいでやんす。ありがとうございます、ラン
スター二士」

一同はチヨイの案内に従い見学を続けていく。

休憩スペースに差し掛かると其処にはゲンヤの姿があった。珍しく部隊長室以外で休憩しているようだった。

「おお、スバル！！ 元気そうだなあ。また背が伸びたみたいじゃ
ねえか」

「ちよ、父さん！！ 恥ずかしいよ、みんな見てるんだし」

ゲンヤは久しぶりに会う娘の姿に嬉しくなり、スバルを抱きしめる。仕事かひと段落して少し休憩しているそうだ。

他のメンバーに気付き彼は挨拶をする。

「俺が此処の部隊長を務めているゲンヤ・ナカジマだ。いつもうちのスバルが迷惑をかけてるだろ？ 済まねえな」

「そんなことありませんよ、ナカジマ三佐。スバルの元気さには何時も助けられています」

「そうかい？ ティアナ。そう言ってくると嬉しいぜ」

ティアナとは面識があった。訓練校の休みの間、ナカジマ家に来た事があるのだ。ライトニング組の二人も初対面である彼に自己紹介をしていった。紹介が一通り終わるとゲンヤはスバルの世話を焼きます。向こうではどうしてる、嫌な事はなかったかなど質問を続ける。ゲンヤはスバルも溺愛しており、隊舎を出る前のフェイトを彷彿とさせるような姿を見せていった。

「ナカジマ三佐って面白い人ですね」

「本当だね。何だかフェイトさんみたい」

「おう、坊主。今日はお前達は見学なんだからそんなに畏まらなくて良いぜ。お嬢ちゃんだってそうだ。今日は楽しんで行ってくれ」

「はい、ありがとうございます」

それから10分程雑談をし、ゲンヤは仕事に戻っていった。

一方、会議室ではシグナム達も合流し捜査の打ち合わせが行われていた。ラッドが中心となり打ち合わせが進む。キョウ達により情報が齎されていたので、打ち合わせはスムーズに進んでいった。

「此方で調査した結果、一部のロストログアの密輸ルートは発見できました。引き続き調査を進めていきますが、ガジェットの方は六課の方でもよろしく願います、シグナム二尉」

「了解した。此方でもテストロッサ隊長を中心に捜査を進めていく。任せてくれ、カルタス二尉」

「最後にですけど、ゼストさんの事は俺達も調査をしても構いませんよな？ ラッド二尉」

「ああ。そちらからの情報で、我々も調査をしている。キヨウ達も行ってくれて構わない。ただ、連絡を忘れるなよ。六課に行ってもお前達は部隊の一員なんだから。では、以上で打ち合わせを終了したいと思います。今後とも機動六課と陸士108部隊がより良い関係で居られるようにお互い頑張りましょう」

打ち合わせはラッドの言葉で終了した。予定されていた時間より早く終わり、キヨウとギンガはスバル達の下へ向かう。その後の予定を話すと、其処にいた一同は笑顔で送り出してくれた。キヨウ達はスバル達に念話を送り隊舎の前で合流しようと伝える。

「108部隊はどうだった？」

「とても勉強になりました。皆さん良い人たちばかりで、とても良くしてもらいました」

「父さんは相変わらずだったけどね……」

「アンタが元気そうで嬉しかったんでしょ、ナカジマ三佐は」

「また、来てみたいです。兄さんやギンガさんの部隊に」

「そうか、エリオ。そう言ってくれると嬉しいぜ。んじゃ、出発しますか!?!」

ギンガの質問にキヤロが答える。スバルは父の姿に少々うんざりしているようで、ティアナがなだめる。エリオも楽しかったようで笑顔だった。それから彼らは再びバイクに乗り込みクラナガン市街地へ向かう。

到着したのはお昼頃だったので、一同はキョウウ達が以前利用したカフェで食事をとる事にした。其処は映画館にも近いので都合だった。相変わらず落ち着いた雰囲気のお店で、そういった場に余り慣れ

ていない新人達はキヨロキヨロと周りを見回していた。一通り見回すと、窓際の席に移動する。人数が多いので、席を繋げて座った。

「此処の雰囲気、気に入ってるんだ。それに此処のパフェって凄く美味しいんだよ」

「其れに普通の食事もなかなかイケるんだぜ。其れに値段も良心的だから、沢山食べても大丈夫そうだけ」

キヨウとギンガは休日にはデートで利用してるようでメニューに詳しくかった。

「うわ、アイスクリームの盛り合わせだって。食後はこれにしよう！」

「スバル、まずは食事でしょ。確かに美味しそうだけど」

「私はこのストロベリーパフェにしようかな？ エリオ君は？」

「僕は、ランチプレートで良いよ。結構ボリュームもあるみたいだし」

キヨウとエリオはすぐに何を頼むか決めたのだが、女性陣は食事よりもデザートに夢中の様で、注文に時間がかかった。注文して暫らく経ち、料理が運ばれてくると一同は雑談をしつつ食事をしていく。

「お洒落で、料理もおいしくって。キヨウさん達はよくここに来てるんですか？」

「ああ。映画館に近いし、休日はよく利用しているぜ」

「このお店ってゆっくり出来るのよ。市街地とは思えないみたい」

「キャラもデートとかに此処を使えば？」

「え、スバルさん！！ 私、まだそんな……」

スバルの言葉にキャラは慌てて反応する。彼女の視線は食事に夢中になっているエリオの方に向いていた。

「キャラちゃんより、スバルは自分の事も心配したら？ 年頃なんだから」

「そうですね、ギンガさん。スバルも浮いた話くらいあればいいのに……」

「ギンねえ、ティア。私は別にいいよ。好きな人とか居ないし。あつ、でもキョウにいと二人で此処にまた来てみたいかな？」

スバルは悪戯つ子の様な笑顔でキョウの腕に抱きつきながら言う。ギンガ程ではないにしても彼女の胸もクイント譲りである程度の大きさに育っている。むにゅっという音が聞こえてきそうだった。

「「ちょっと、スバル！！」」

ギンガとティアナは其れに反応してしまう。スバルはしてやったりの表情だった。また何時もの冗談の様だ。

「あ？ 俺か？ 妹分のデートの予行練習なら付き合ってやるよ」

食後のコーヒを飲んでいたキョウも、慣れた物で軽く引き受ける。彼にとつてスバルは妹分であるし、最近の過激なスキンシップにも、もう慣れてしまった様で特に反応は変わらない様だ。そんな感じで何時もの様に賑やかな食事は進んでいった。

その後、お馴染みの映画館へと一同は移動する。上映されているのはもちろん『北斗星の握り拳』で今回はエピソード3の『ラオ殉愛の章』だった。

キョウとギンガはパンフレットまで購入していた。スバルは二人に勧められて、以前TVの映画番組で見っていた。ティアナも其れに付き合わされていたようで話は分かるようだ。エリオとキヤロは初めての様だったが、映画が始まると其れまでのあらずじが上映されて問題なく見る事が出来そうだった。

キョウ達を始め、スバル達新人メンバーも食い入るように映画を見ていった。どうやら彼らもハマったようだ。

エリオはキョウと同じように、戦闘シーンでは興奮していた。

「行け、そこだー!!」

「え、エリオ君？」

隣に座るキャロの手を握っている事に気付かない程に……。

『【ラオ】が呼んでいる。凜、ボールの棒……』

『どこ何か？』

『ケンシロー、ゴミと潰れる!! 売ればあ!!』

『あああ沢山沢山経過するうつつ!!』

『この私も心を血に染めて、悲しみを背負う事が出来たよ』

『ラオウイ闘気が消えた!!』

『ケン、ユリア氏が。ユリア氏が』

『ブヒブヒー』

『私は一生一面悔んでいません!』』

映画が終わると一同は映画館から出てまた感想を語っていた。

「前は俳優を起用していたけど、今回は一作目のケンシロー役の人が全部一人でやるとは思わなかったぜ。凛の声が違和感ありすぎた」

「また、ユリアさんはブヒブヒしか喋らなかったね。でも面白かったあ」

「ラオ、カツコよすぎだよ。間違えて秘孔を突いた所は可愛かったな」

「確かにラオは良かったわね、スバル。無想前世は凄かったし。キヤロはどうだった?」

スバルとティアナはラオがお気に入り入りの様だ。

「私も楽しめました。それに嬉しかったですし」

キヤロは顔を赤らめつつティアナに答える。映画館の中でエリオは

ずっとキャロの手を握っていたのだ。

「僕もケンシローやラオミみたいな漢になりたいです!!!」

「おつ、エリオ。分かっているねえ。今日から俺達は同士だ!!! 向かい風の中を勢いに負けずに熱く駆け抜けて行こうぜ!!!」

「はい兄さん!!! いえ、兄。燃え続けましょう!!!」

キョウとエリオは映画を通してまた仲良くなっているようだ。二人とも映画に影響を受け、喋り方を真似したりして遊んでいる。それから一同はしばらく街中を散策していく。スバルはアイスクリームの屋台を見つけ購入する場面も見られた。穏やかな休日を彼らは送っていく。

だがそれは突然終わりを告げる。

時間はまだ三時頃でこれからどこに行くかを『サードアヴィニユー』の近くで相談しているときにシャーリーから通信が入った。

108部隊が地下で生体ポッドを発見したというのだ。其処にはガジエットの残骸も残されているとのことだった。其れを聞き彼らは顔色を変える。

彼らが現場に向かおうとしているときに、裏路地の方から物音が聞こえる。其処にキョウ達が向くとマンホールから子供が姿を現した。手には鎖が繋がれ、その先には重そうなケースが繋がられていた。

元は二つ付けられていた様な鎖の結び方であった。一つ外れているように恐らく地下に落ちていると推測される。

「おい、大丈夫かい？」

キヨウはその子供に駆け寄る。五歳位の金髪に赤と緑のオッドアイを持つ女の子だった。着ている服はぼろきれの様なもので、何処からか逃げだしたような雰囲気だった。少女はキヨウに抱きかかえられると気を失う。

「鎖……。誰がこんな幼い子供にこんな事を……」

キヨウの声からは怒りが感じられる。彼は鎖を掴むと炎を手に纏わせ其れを引きちぎる。炎は彼の怒りを表しているかのごとく強く燃え上がっていた。その場にいた一同も少女の姿をみて、彼女に対する仕打ちに怒りを抱く。

それから彼らは少女の事を六課にいる隊長達に連絡し指示を仰ぐ。休日はその処で終わりになった。だが一同は意識を切り替えて魔導師の顔を見せる。

「……久しぶりに本気で頭に來たぜ。小さな子供にこんな真似する奴は許しておけねえ」

「キヨウ君、落ち着いて。冷静さを失っちゃダメだよ。先ずは隊長達の指示に従わないと」

昂っているキヨウをギンガが抑える。キヨウは彼女の声で落ち着きを取り戻す。それから彼らは通信された指示に従い行動を開始するのだった。

とある場所にて一人の男が画面越しに女性と通信を行っていた。ジエイル・スカリエッティである。画面には以前彼からウーノと呼ばれた女性が写っていた。

「レリックを追跡していたガジェット？型は六機とも全て破壊されています」

「ほお、破壊したのは局の魔道師かい？それとも、当たりを引いたのか？」

「どうやら後者と思われる。追跡しますか？」

「ああ、お願いするよ。状況を見て、娘達と愛すべき友人にも力を借りよう」

「ねえ、ドクター！！ それなら私も出たいんだけど」

スカリエツティの後ろから女性の声がする。赤い髪を短髪にし、青を基調とするボディスーツを着用している。

「ノーヴェかい？」

スカリエツティにノーヴェと呼ばれた少女は、出撃したいとの旨を伝える。其れを武器の調整が不十分という理由でウーノが反対する。

「焦らなくても良いよ。いずれアレは此処にやってくるのだから。必ずね」

スカリエツティの言葉を聞きノーヴェは其処から去っていく。その後、スカリエツティはルーテシアに通信を取る。画面には高層ビルの屋上に立つルーテシアの姿が映し出される。

「優しいルーテシア。聞こえるかい？」

「何、ドクター」

ルーテシアは彼からの通信で顔をゆがめる。ゼストや自分を良い様に使う彼に対して、あまり良い感情を抱いてはいないようだ。

「レリック関連で手伝ってもらいたい事があるんだ。頼めるかな？」

「くっ。分かった」

スカリエッティは一体何を企んでいるのだろうか。事件は動き出す。

EP54 休日の機動六課 中編（後書き）

長くなったので分けました。読んでいただきありがとうございます。

EP55 休日の機動六課 後編（前書き）

最近、スランプの様な気がします。

思う様に書けない。

前話を少し修正しました。

アニメを見直していたら重要な部分が抜けていました。申し訳ありません。

アギトがスカさん側にいないので、展開が少々異なります。

EP55 休日の機動六課 後編

キョウ達が休日を楽しんでいる間、聖王教会では二人の人物が会合を行っていた。一人は黒髪の男性で、もう一人は金髪をロングにした女性であった。男性は六課の後見人であるクロノ・ハラウン提督である。女性の方は騎士であり、管理局の理事を務めるカリム・グラシアだった。彼らは雑談を交えつつ六課の運営について話していた。

其処に赤紫の髪を短髪にした女性と共にシグナムが現れる。彼女を連れてきた女性はシャツハ・又エラといい、教会のシスタ・兼カリムの秘書官という肩書である。

彼らはシグナムを交え六課の今後の任務について話し合おうとしていた。その時、カリムの下にはやてから通信が入る。レリックを持った小さな女の子が発見されたとのことで、市街地付近での戦闘に備えて奥の手を用意しなければならぬと伝えていた。シグナムもカリムの指示で戻る様に言われた。

「ありがとうございます、騎士カリム」

シグナムは礼を言い、シャツハと共に部屋を後にした。

一方のキョウ達は少女を保護し、隊長達の指示によりその場に待機

していた。キャロによりケースの封印処理が為されている。隊長二人とシャマル、それに融合騎の二人がヴァイスのヘリでそこに向かっている。五人との合流を待てとのことだった。一時、感情を露わにしていたキョウも冷静さを取り戻している。合流するまで、訓練校時代に習った応急処置を年長者の四人は少女に行った。

それから少しして、隊長達と合流するとシャマルの手により少女への診断が行われた。

「バイタルも安定しているし、心配無いわ。応急処置もちゃんと出来てるみたいだし」

その後、シャマルの指示でなのはが少女をヘリまで搬送する。キョウ達はバリアジャケットを身に纏い出撃に備える。周辺捜査を行う様にとのことだ。

なのはとシャマルがヘリに到着すると、ロングアーチからガジェットへの反応が出たと通信が入る。海上に60機程、地下には20機程の反応があるという。ヴィータも演習を切り上げて此方に向かっていくとのことだった。

キョウとアギトとリインはヴィータと合流して南西方向を、なのはとフェイトは北西方向から海上のガジェットを抑えるようはやてに指示される。ギンガと新人達は地下からレリックの反応があるというところで、其れに向かってくるガジェットを対応せよとのことだ。

彼らは一斉に行動を開始する。

高層ビルの立ち並ぶ中、一人の少女が佇んでいる。紫色の髪をなびかせるその少女はルーテシアだった。彼女の下にウーノから通信が入る。地下のレリックを回収せよとのことだ。

「母さん、ゼスト。待っててね。私が二人を自由にしてあげる。ねえ、ガリュー？」

ルーテシアのデバイスコアからは黒い光が放たれていた。彼女はその光と共に其処から転移していった。

「今日の俺は少し機嫌が悪い。まとめて片付けてやるぜ！... うお おおりゃ あああああ...！」

「熱くなりすぎるなよ、キヨウ！！ フレイムシューート！！」

「はははっ、若いな。シュワルベフリーゲン！！！！」

「何だかんだでキヨウさんもちゃんと周りを見て動いてますね。えいっ、フリジットダガー！！！！」

上空ではキヨウとアギトとヴィータがガジェットと応戦している。キヨウの『鬼焼き』が、アギトの『フレイムシュート』が、ヴィータの『シュワルベフリーゲン』が、そしてリインの『フリジットダガー』が次々とガジェットを破壊していく。キヨウは接近して暴れまわり、アギトはそれを的確にフォローしている。ヴィータとリインは彼らが打ち漏らした分を確実に破壊していった。別の方面ではなのはやフェイトもガジェットの数を減らしているようだ。

「おっし、良い感じだ。さっさと片付けて、他のフォローにも回らねえと」

「やっぱ凄いですね、ヴィータ副隊長。それにリインもアギトも絶好調だな」

キヨウは動き回って頭がすっきりしたのか、いつもと変わらない調子を取り戻したようだった。

「メンテを受けて体調もバッチしなんだ。ガジェットには遅れは取らないぜ」

「はいです！！ リインもアギトちゃんも良い感じですよ。あっ、あれは？」

粗方のガジェットを破壊した四人だったが一息つく暇もなくその場にさらなる増援が現れる。

なのは達の所も同様の様だ。二人だけで多くのガジェットを破壊したなのはとフェイトだったが、まだ余裕はあるようだった。

彼女達のいる位置から少し離れた上空には一人の女性が立っていた。髪を二つ結びのお下げにし、青いボディースーツを着用している。其れは、ノーヴェと呼ばれた女性と同じものだった。その上から白衣を纏い、眼鏡をかけている。

「ふふふっ。クアット口の『インヒューレントスキル・シルバーカーテン』。嘘と幻のイリュージョンで回ってもらいましょ？」

クアット口と名乗る女性は左手から緑色の光を放つ。其れは幻術のようでガジェットの反応がどんどん増えていく。

ロングアーチの一同もレーダーの反応に困惑する。上空で其れと対峙しているキョウ達やなのは達も肉眼で確認出来ると通信を送る。なのはとフェイトはそれでも構わずにガジェットに攻撃を加え、数を減らしていく。

するために。私は無理だったんですけど、ヴィータ副隊長なら可能では？」

アギトがその問いに答える。

「心眼つてやつか。そう言えば、ずっと昔に私もやったことあるぜ。よし！！ うおおおりゃあああ！！」

アギトの答えにヴィータは納得する。彼女は一度息を整えてから魔法を放つ。彼女もキヨウの様に実機のみで攻撃を攻撃していく。流石は経験豊富な古代ベルカの騎士である。

「リインも負けていられないです！！ たああああ！！」

彼らの方もなのは達に負けない位に善戦をしていた。

その時、上空にいる一同に向けてはやてから通信が入る。フェイトは限定解除をしようとしていたのだが、其れをはやてに遮られた。はやては騎士甲冑を纏っている。クロノに限定解除を許可してもらい広域せん滅を行うというのだ。

「なのはちゃんとフェイトちゃんはヘリの護衛に行つて。キヨウ君も何かあった時の為にアギトちゃんとユニゾンして二人についていてな。そっからの方が近いやろうし。ヴィータとリインは地下でフォワード陣と合流して、レリックの確保をお願いするわ」

はやての指示で一同はそれぞれ行動を起こす。一同が安全圏に移動したと分かるとはやては魔法を放つ。

「第一波、いくよ！！ フレースヴェルグ！！」

はやての放つすさまじい魔力の奔流『フレースヴェルグ』はガジエツトの大半を飲み込んでいく。まるで戦略兵器の様な攻撃だった。隊舎のロングアーチではモニターからの解析作業が行われていた。はやての攻撃により消滅するガジエツトからデータを解析し、幻影と実機を見分けられるようにとグリフィスがシャーリー達に指示を出していた。

地下ではギンガと新人達が探索を続けていた。その場の指揮はティアナが任されているようで、ギンガはバックアップに回るようだ。彼女達は地下で見つかったとされる生体ポッドについて話をしていた。

「あの子はきつと人造魔導師の素材として作られたんじゃないかしら……」

「人造魔導師って？」

ギンガが呟き、キャラがそれに対して質問をする。ギンガは少し暗い表情だった。ギンガだけでなくスバルもエリオも同様だ。ティアナが変わりにその問いに答える。

「キャラ、人造魔導師ってのはね……」

ティアナの話によると、人造魔導師とは優秀な遺伝子を用いて人工的に生み出された子供に、投薬や機械の埋め込みによって、後天的に強力な魔力や能力を持たせる物だというのだ。コストや倫理に問題がある、違法技術とのことだった。

キャラもその技術を知りショックを受けていた。

それから少し進み、キャラの『ケリュケイオン』のコアが光り出す。

「ケースの推定位置までもうすぐです」

キャラが『ケリュケイオン』から情報を読み取り一同に伝える。彼女達がレリックに向かい足を勧めていると突如、ガジェットが姿を現す。？型だけではなく、以前エリオとキャラが対峙した？型の姿もあった。一同は一度それぞれで広がり、個別にガジェットとの戦いを開始する。

「この程度、今の私達には」

ティアナは射撃魔法で？型を次々と破壊していく。隊長達との日」

るの鍛錬の成果が表れ始めているようだ。

「てや、っはああ!! 問題ないですね!!」

エリオも『ストラダ』を振るい、ティアナの言葉に答えながらガジェット?型を破壊していた。

「でも、油断は禁物です!! フリードーーーー!!」

キャロもフリードの吐く炎でガジェットを破壊していく。以前はA MFに阻まれ、動きを鈍らせるのがやっとだった彼女もフリードも成長をしている。

ギンガとスバルはガジェット?型の前に立っていた。

「スバル、一撃で決めて見せなさい。出来る?」

「今までもきつい訓練に耐えて来たんだ。ええ、良くつてよ。ギンねえ!!」

どうやらスバルが単身で当るらしい。二人の下へガジェットはレーザーを放つが其れは空を切る。ギンガはステップでかわし、スバルは空中に飛び上がっている。ガジェットは蛇腹状のアームをスバルに向けて伸ばすが、彼女はジャンプ中に錐揉み回転をし其れをかわす。その際、『リボルバーナックル』にカートリッジがロードされ、魔力がリボルバーに連動するようにスバルの手に絡みつく。

「今よ、スバル!! (あれだけの身軽な動き、スバルも成長したのね)」

「デイバインバスター！！ 喰らいいい、やがれえええ！！」

スバルはガジェットボディのボディをAMFごとぶち抜くと、内部へ向けてなのは十八番『デイバインバスター』を放つ。トリガーワードはキョウの影響がみられる。スバルが離れるとガジェットはその場で爆発をした。

「ふっ、アンタじゃ燃えねえな。どう？ ギンねえ？」

スバルは拳に息を吹きかけ、キョウの物まねをしていた。彼の場合には拳ではなく火を灯した人差し指なのだが……。

「やるじゃない、スバル。頑張ったわね！！……でも、あのセリフは何なのかなあ？」

ギンガは笑顔で答えるのだが、後半は明らかに喜び以外の意味が込められているようだ。目のハイライトが消えていた。

「こっちは余裕だったみたいですね、ギンガさんだって居たんだし」

「ティアー！！ 助けてえー！！」

ティアナとエリオとキャロも二人に合流する。豹変した姉の様子に、スバルはティアナに助けを求める。エリオ達はその様子を苦笑いしながら見ていた。

ギンガも冗談のつもりだったようですがすぐに普段の状態に戻り、其れを見てスバルも安心をする。

一同はさらに先へと進んでいく。

広い場所に彼女達が出ると、その中心にはレリックのケースが落ちていた。キャロが其れを見つけて駆け寄る。

「有りましたー!!!」

キャロの声にその場にいたメンバーはホツとする。だが、彼らの後から物音が聞こえてくる。壁を蹴りつつ何者かがその場に向かってくるようだった。その存在はキャロに向かい魔力弾を放つ。黒い魔力の塊が数発、キャロへ向かう。

「きゃあ!!!」

キャロは何とか直撃を避けるが、ケースを落としてしまう。魔力弾を放ったのは、昆虫のような外見で人型の生き物だった。其れはキャロに追撃を放とうとする。

「てえりゃあ!!!」

其れをエリオが飛び込んで阻止する。エリオはキャロとその生き物との間に立ち、キャロを下がらせる。攻撃を阻止した際に、カウンターを貰ったのか、エリオの頬からは血が流れている。

二人がその生き物に意識を向けているときに、後ろから有る人物がケースを回収する。

「ルーテシアちゃん!!」

其の人物とはルーテシアだった。彼女と面識のあるギンガは声をあげる。

「あなたは確か、ギンガさん？」

ルーテシアに気付き、キャロがケースを取り返そうとする。だが、ルーテシアはキャロに向かい魔力弾を放とうとする。

「止めなさい、ルーテシアちゃん!!」

ギンガの声を無視するかのようルーテシアはキャロに向かい手をかざす。

「ごめんなさい。でも、邪魔をしないで……」

「えっ？ プロテクション!!」

ルーテシアはキャロに謝りながらも魔力弾を放った。キャロは何とか防御に成功するのだが、勢いを殺すことは出来ず、後ろにいたエリオと共に柱に叩きつけられる。

「ギンねえ、あの子はメガー又さんの？」

「そうよ。スバル、あなたはティアナと一緒にルーテシアちゃんを止めて。あの生き物の相手は私がする」

「分かりました、ギンガさん!! 行くよ、スバル!!」

「う、うん!!」

ギンガの指示でティアナとスバルはルーテシアの下へ向かい走る。其れを昆虫が他の生物が阻もうとするのだが、其処にギンガが割り込む。二人に向けて拳を放って来たのだが其れをギンガが受け止める。

「言葉が分かるか知らないけど。あなたの相手はこの私よ!!」

「こらあ!! ルーテシアちゃん!! 其れって危険なんだよ。こちに渡して!!」

「あなたは誰? ギンガさんに似ている?」

その場から去ろうとしていたルーテシアはスバルの言葉に足を止め振り返る。

「私はスバル。ギンねえの妹で、あなたのお母さんとも知り合いだよ!! どうしてこんなことするの?」

「そう、スバルさんっていうんだ……。邪魔をしないで。これはお母さんやゼストを助けるために必要なんだ」

「えっ、メガー又さんとゼストさんを……」

ルーテシアの言葉にスバルは呆然とする。其れを見て、ルーテシアは再びその場から去ろうとするのだが、後ろから『クロスミラー ジュ+・ガンブレイドモード』の魔力刃が付きつけられる。

「ごめんね、乱暴な事をして。でもこれって本当に危ない物なんだよ。騎士ゼストやあなたのお母さんの事はスバルから聞いてるけど、其れを渡してくれない？」

「どうしても邪魔をするの？」

ティアナの問いに対して答えるルーテシアの表情はどこか悲しげであつた。

「詳しい事を教えてくれたら、私たちにも何か出来る事があるかもしれないわよ？」

スバルもティアナに続く。

「そうだよ。あなたや、メガー又さん、それにゼストさんの事をみんな心配してるんだよ！！ お願い、話をして！！」

ルーテシアは二人の声を聞き、やはり悲しそうな表情で答える。

「お姉さんたちでは無理だよ。キョウお兄ちゃんやギンガさんだつて、ドクター達には敵わない。私達の事は忘れて。其れがお姉さん達の為だよ」

そう言うとルーテシアはグローブ型デバイス『アスクレピオス』から閃光魔法を放つ。彼女を取り押さえていたティアナは其れに目がくらみ、手を離してしまう。その隙にルーテシアは距離を取った。

「きゃあー!!」

「ティアー!!」

休日にとこつた事件は、新たな場面へと進む。

EP55 休日の機動六課 後編（後書き）

次回はバトル回。ギンガさんを活躍させるつもりです。

感想や意見、指摘、評価等を受け付けております。

戴けると嬉しいです。

読んでいただきありがとうございます。

EP56 Numbers (前書き)

キョウとギンガを仮面ライダーに例えると、技の一号キョウ、力の二号ギンガってな感じですよ。

遅くなって申し訳ありません。

スバルとティアナがルーテシアと対峙している時、ギンガはその場に現れた異形の生物と闘いを繰り広げていた。

「……………!!」

「くっ!!」

人型のその生物はギンガに向けてフック、ジャブ、回し蹴りと様々な攻撃を放っていく。そのどれもがすさまじいスピードで、継ぎ目のない連撃だった。攻撃が放たれるたびに風を切るような音が聞こえてくる。ギンガは其れをじっとガードを固めながら耐えていた。彼女の体には小さな傷が増えていくが、表情はそれほど辛そうではなかった。そう、ギンガはまだクリーンヒットを貰っていなかったのだ。

攻撃が通じない事に焦りが出たのか、その生き物の攻撃が大振りになっていく。右ストレートが放たれた所で、ギンガは其れを左手で受け止める。

「捕まえた。今度はこっちの番だよ。てえりやああ!!」

ギンガは異形の拳を掴み、右の拳を腹部に叩きこむ。身体が浮き上がる程の一撃だった。異形の表情は読めないのだが、確かにダメージがあるようだ。赤く光る目が点滅する。

「意外と脆い？ まだまだ行くわよ。はあああ!!」

「……………!？」

ギンガは掴んでいた手を離し、次々と攻撃を放っていく。スピードは異形に劣るが、技のキレや破壊力では分があるようだ。先ほどの攻撃でダメージを受けた異形はその場に止まっている。ギンガの攻撃を避ける事は出来なかった。ギンガの振るう拳が、蹴りが身体に撃ち込まれていった。

「ストームト」……！！「きゃあ！！」

ギンガが『ストームトウース』を放とうと僅かにタメを作る。そこに異形は隙を見つけ魔力弾を放ち、発動を阻害する。黒い魔力弾はギンガに命中すると爆発し、周囲に土煙りをあげる。異形はその間に煙の中から飛び出し、ギンガから15mほど離れた柱に飛び移る。異形の身体を覆う外骨格はギンガの攻撃により罅が入っていた。

「痛つつう。キョウ君以外にあそこを狙ってくるなんて」

煙が収まると、ギンガはその場に立っていた。とつさの事に直撃を受けてしまっていたが、それほどのダメージは受けていないようだ。バリアジャケットに少し傷が付いている程度だった。

ギンガはキョウほど沢山の技を持っていない。其れに彼よりも数段スピードは劣る。

だが、強靭な肉体と其処から放たれる強力な攻撃、驚異的な耐久力が持ち味なのだ。技は少ないが、そのどれもが日々の鍛錬で研ぎ澄まされている。それに、彼女から放たれる拳や蹴りの一つ一つが必殺になりうる破壊力を秘めているのである。多くの技はなくとも、彼女のポテンシャルの前ではそれは問題ではない。いや、多くの技を必要としないのだ。

異形は先ほどの魔力弾でそれほどのダメージは望めないと思っていたのだが、彼の想像以上にギンガの防御は堅かったようだ。だが目くらましという事には使えた。柱の上からギンガを窺う。

「スピードの速い相手と戦うのは慣れているのよ。来なさい!!」

ギンガは異形に近付きながら声をあげる。其れを挑発と受け取ったのか、異形は彼女の方に飛びかかる。

「もうあなたのスピードには慣れた」

異形はギンガに再び徒手空拳で攻撃を行うが、彼女はそれを触れられか触れないかのギリギリの所で見切っていく。しかも、一歩も後退せずに。先ほどの攻防である程度の動きを見つけた様なのだ。

「……………」

接近戦では分が悪いとみて、異形は空中に飛び其処からギンガに攻撃を加えようとする。

「逃がさない。てやああ!!」

ギンガは其れを追い跳躍する。先ほどスバルがガジェットを破壊する時に見せた跳躍より高く飛び上がり、ギンガは踵落としを放つ。蹴りを喰らった異形は偶然にもスバル達がいる方へ向かった。

「ガリュー!!」

ルーテシアが異形に声をかける。ガリユーという名の様だ。ガリユーは粉塵をあげながら床に叩きつけられる。その場には深さ30?程のクレーターが出来ていた。ガリユーはかなりのダメージを受けているようで、立ち上がりはしたが、足がおぼつかない。

「くっ。ごめんね、ルーテシアちゃん」

ルーテシアの注意がガリユーに向いている際にティアナが素早く駆け寄り彼女からケースを奪う。

「お願い。返して。それが無いとお母さんやゼストが!」

ルーテシアはティアナに向い言う。その時、その場にギンガが『ウイングロード』で降り立つ。壁に叩きつけられていたエリオとキャロもその場に駆けつける。キャロはティアナからすぐさまレリックを渡され封印処理を行う。エリオはガリユ-を警戒している。

「レリック??の封印を完了しました」

「えっ、6番?」

キャロの言葉にルーテシアは反応する。

「ルーテシアちゃん、お願い。詳しい事を話して。私達もメガーヌさんとゼストさんを救いたい」

「ギンねえ!! そうだよ、ルーテシアちゃん!! 私達にも事情を話して。今はまだ力不足だけど、みんなで力を合わせれば、どうにか出来るかもしれないんだよ!!」

「私は二人と面識はないんだけど、困っている人を見過ごせないわ。お願い」

ギンガもスバルもティアナもそれぞれの言葉でルーテシアに説得を試みる。だが、その場にさらなる人物が登場する。三人がルーテシアに夢中になっっている間に床から人差し指を伸ばした腕がルーテシアに向い近づいてくる。ギンガ達はそれに気付いていない。キャロがそれに気付き声をあげる。

「皆さん、何か来ます!!」

「ありがとう、お姉さん達。で「ダメですよ、ルーお嬢様」キャツ、セイン？」

床からは青いボディースーツを着た水色の髪をショートにした女性が現れ、ルーテシアの声を遮りながら手を掴む。

「待つて、止まりなさい!!」

ティアナが『クロスミラージュ+』を構えるがセインはそのままルーテシアを連れて床に潜り始める。ルーテシアに魔法が当たる恐れがあり、ティアナは攻撃が出来ない。

「レリックまで回収すんのは厳しいか……」

「何時か、必ず……」

ルーテシアが言い終わらないうちにそのまま二人は床の中に沈んでいった。

ガリユーはセイン達が逃亡するとさくさにまぎれて姿を消していた。

その後すぐ、天井を破壊しながらヴィータとリインも駆けつける。
一足遅かったので二人は悔しがっていたが、レリックを確保できた
ことを聞き安心していった。

「そうか、封印処理も完了してるのか。良くやった、みんな。早く
上にかかるぞ!!!」

一同は地上に向かう。

海上では、はやてがロングアーチのフォローもありガジェットを殲

滅していく。

そんな彼女の姿を、地上本部のロビーのソファーに腰掛け、モニターから見ていた人物がいる。レジアス・ゲイズ中将だ。彼の傍にはオーリス三佐が控えていた。

「これは、一体何なのだ？」

「本局遺失物捜査部機動六課の戦闘と、そのリアルタイム映像です。撃たれているのは予てより報告の上がっているAMF機能を持つアンノウン、撃っているのは部隊長で魔導師ランクSSの八神はやて二佐と思われませう」

レジアスの問いにオーリスが答える。更に詳しく説明をしようとしたが、レジアスが遮る。

「キョウ達が出向している部隊か。部隊の情報はあいつ等から入っている。八神はやて……。やはり『闇の書事件』の八神はやてか？」

「はい、彼女は執行猶予期間が終わり現在は六課の部隊長として働いています」

「そうか、彼女の様な若い人材も罪を償い……。犯した罪は消えなくとも悔い改める事は出来る。ワシも頑張らなくてはな」

レジアスは、はやての姿を見て何やら考えごとをしながら呟く。

「どうかなさいましたか？ 中将」

オーリスはそんな父の様子に気付き声をかける。

「いや、何でも無い。いずれお前にも話す、ワシの過去の罪を。今は何も聞くな」

「父さん……」

罪という言葉聞きオーリスは場所を忘れて父と呼んでしまう。

「お前に頼みたい事がある。近々、六課へ査察に入ってくれ。いつでも堅苦しい物ではなくキョウ達への激励や連絡なのだが」

レジアスはそう言うと席を立つ。

「了解しました。中将、何処へ？ まだ休憩時間は残っておられる筈では？」

「ワシは地上の防衛予算案を再検討する。若い者達に負けてはおれんし、少しでも顔向けできるようにせねばな」

休憩を返上して仕事に取り掛かろうとするレジアスにオーリスは声をあげる。

「中将、いえ父さん。最近働き過ぎですよ。以前から休日にはどこかに出かけられていますし、業務が終わってからもずっと残業しているじゃないですか！！ このままでは身体が持ちません！！」

「ワシの事は良い。老兵は死なず、ただ消え去るのみだ。その前にお前達、次の世代が少しでも動きやすいようにしなければ。ソウジヤゼストとの誓いを受け継ぐ者たちや、平和を守ろうとする若者達の為に何かを残してやりたいんだ」

レジアスの言葉にオーリスは何も言えなくなる。彼女はレジアスに続きその場を後にする。

セインと共にギンガ達の下から去ったルーテシアは地上の出ていた。ビルの上に佇み、隣にはセインの姿もある。

「お嬢様、『地雷王』の召喚を。今なら「ダメー!」なんで?」

セインの言葉をルーテシアは否定する。

「あのお姉さん達とは戦えない。それに私が探している物とは違っ
た。お願い、今回だけは許して」

「ドクターに何言われても知らないですよ」

「それでも良い。早く移動しよう。もう私の役目はないんでしょ
う？」

ルーテシアの言葉にセインは同意し、彼女と共に『インヒューレン
トスキル（以下IS）・デーパーダイバー』を用いてその場を去る。

有るビルの上ではクアットロと、彼女と同じスーツを着用し茶髪を
一つ結びにした女性が会話をしていた。彼女はクアットロからデイ
エチと呼ばれていた。会話は彼女達の行動についての物で、其処か
ら推測するとクアットロが其処からセインに指示を送り地下に潜ら
せていたようだ。

現在、六課のヘリへの狙撃について具体的な指示が行われていた。

「大丈夫なのか？ クアットロ。ケースは残せるだろうが、マテリアルの方は破壊しちゃうかもしれない」

「ふふふふ、ドクターやウーノ姉さまが言っていた聖王の器が当りだつたら砲撃くらいでは死なないから大丈夫よ。それにまだ何か秘密があつたみたいだけど。血がどうとか？ まあ、心配しなくても良いわ」

その時、二人の下にウーノから通信が入る。ルーテシアがレリックの確保に失敗をし、既に撤退したとのことだ。なのでヘリの方だけでも作戦を成功させるとのことだった。

デイエチはヘリに向かいバスターライフルの様な武器を構える。これは彼女の固有武装『イノーメスカノン』だ。エネルギーがチャージされ発射態勢に入る。

デイエチの反応は六課のロングアーチにも掴まれていた。推定Sランクの物理破壊型攻撃と出勤して居る一同に伝えられる。ヴィータ達も地上に上がっており、反応のある場所に向おうとしていた。へりの状況もモニターが表示をしている。

へりに一番近いのはキヨウだった。なのは達と比べ、スタートした位置が近かったし、ユニゾン状態ではなのはと変わらない位の飛行が可能なのだ。三人とも全速力でへりに向かっている。

「発射!!」

デイエチが砲撃を発射する。赤い閃光はへりに向かい一直線の飛行でいく。

「ローエンフルーク!! 間に合えええええええ!!!!」

キヨウは高速移動魔法『ローエンフルーク』を用いて何とか砲撃とへりの間に身体を割り込ませることに成功する。

(アギト、全力で行くぞ!!)

(ああ、私達で守って見せる!!)

「フレアプロテクション!!!!!!」

キヨウは両手を横向きに倒して正面に突き出し、手首を合わせ炎の障壁を前方に張った。その大きさはへりをすっぽりと包む程だった。

「キヨウ君!! アギトちゃん!!」

モニターを見ながら移動していたギンガが二人の名を叫ぶ。

障壁に当たると砲撃は大きな爆発を引き起こす。へりもその煙に飲み込まれている。其れを見る者達は皆、キヨウもろともへりは撃墜されたと思っていた。だが、煙が晴れると純白のバリアジャケットに身を包んだ女性がキヨウに肩を貸し姿を現す。そう、なのはが間に合ったのだ。彼女は爆発の瞬間にキヨウの障壁の内側にもう一枚自分の障壁を張り、彼を受け止めていたのだった。限定解除を行ったのだらう。

「頑張ったね。キヨウ曹長、アギト曹長」

「はあ、はあ。助かりました、高町一尉」

キヨウ達も消耗しているようだが意識ははっきりしていた。

フェイトはクアットロとデイエチの下にすさまじい速さで駆けつける。キヨウ達よりも数段素早い動きでクアットロ達を追い詰めていく。彼女達は『ISシルバーカーテン』で逃亡を試みるが、その位置もはやてに捕捉され、詠唱を完了していた彼女に広域空間攻撃魔法『デアボリックエミッション』を放たれる。黒い魔力の塊から二人は何とか抜け出すが無処にはなのはとフェイトの攻撃が待ち構えていた。なのはの『エクセリオンバスター』がフェイトの『トライデントスマツシャー』が二人に向け放たれた。

「デイエチ、クアットロ。じっとしている。IS発動、ライドインパルス」

その時、クアットロ達に声が届く。その声の持ち主の彼女らと同じ格好で青い髪を短髪にしていた。

なのは達の攻撃が着弾する寸前でその女性はクアットロ達を救出する。着弾し、モニターで確認していたシャーリーやルキノは歓声をあげるがなのは達がそれを否定した。

救出されたクアットロ達は市街地に着地をしていた。彼女達を救ったのはトーレと呼ばれる女性であった。姉であるらしい。彼女達はスカリツエッティの下に帰還していく。

一方の六課の一同も一度集合し、それから隊舎へ帰還していった。キョウ達が無事だった事が分かった一同はそれを大いに喜んだ。その際ギンガが……。

「バカ！！本当に心配したんだから！！バカバカバカ！！」

キョウに泣きながら抱きつき、彼の胸を殴る場面も見られた。

「うっ、ぐほっ！！ちよっと、ギンガさん？」

普通の女性なら『ポカポカ』という感じで殴るのだろうが、其処はギンガである。身体の芯に響くような打撃音が続く。彼女は『ポカポカ』殴っているつもりで居る。キョウは苦しそだった。

「なあ、ギンガ。もっと優しくしてくれよ、地味に効くんだ」

「五月蠅い、バカ！！」

「はあ、このバカップルは」

スバルの呟きに其処に居る一同は同意するのだった。休日には事件により思わぬ形で終了したがレリックも少女も無事で、被害も抑えられまずまずの物だったと言えるだろう。

「困るなあ、ルーテシア。ちゃんとお願ひしただろう？」

「ごめんなさい、ドクター。でもあれは11番じゃかったから」

ルーテシアはアジトに戻りスカリエッティに報告をしていた。其処は薄暗い研究室の様な場所だった。二人の姿をセイン達『ナンバーズ』が離れた位置から眺めていた。

「次はちゃんと働いてくれたまえ。相手が友人だろうとも。さもなくば君の母親が「その辺にしる！！ スカリエッティ！！」おや、騎士ゼスト。調子はどうかかな？」

スカリエッティの近くに音もなくゼストが現れる。彼はルーテシアを庇うように自分の後ろに移動させる。

「どうせ一度死んだ身だ。長く生きようとは思わない。お前に取り付けられたアレはまだ大丈夫だ」

「そうかい、其れは良かった」

ゼストはスカリエッティから離れ、ルーテシアと向き合う。

「ゼスト……」

「なぜ、お前達だけで行ったんだ」

「ゼストは身体が悪いんだよね？ だから……」

泣き出しそうな顔で言葉を続ける彼女をゼストは抱きしめる。

「すまない、お前に辛い思いをさせ心配まで掛けていたんだな。だが、約束してくれ。もう前線に出ないと。俺が全てに片を付ける」

「ごめんなさい、ゼスト」

ルーテシアもゼストを抱き返す。しかし、その場にはスカリエッティも居た。彼は二人に声をかける。

「いやあ、感動の場面を邪魔するようですまないね。騎士ゼストの意見を受け入れたい所だが、ルーテシアは次の出撃が決まっているんだよ。残念だったね」

「スカリエッティ、小さな子供まで利用するのはやめろ！！ 彼女の分は俺が働く！！」

ゼストがスカリエッティの胸ぐらを掴み声をあげた。だがスカリエッティは彼の発言を受け入れなかった。スカリエッティはメガーヌの存在をちらつかせながら二人に指示を与えていく。

ゼストはアルピーノ母子を守る事が出来るのだろうか。

六課に保護された人造魔導師の少女は聖王医療院に搬送されベッドの上で点滴を受ける。穏やかな寝顔を見せていた。その傍らにはなほがおり、慈愛に満ちた表情で少女を見つめていた。この少女は一体どんな秘密を握っているのだろうか。

Ep56 Numbers (後書き)

ちよつとした補足。

キョウが使った『フレアプロテクション』の発動の際のポーズはベジータの『ファイナルフラッシュ』をイメージしていただけるとありがたいです。

あのシーンは自分の中で劇場版DBZの『危険なふたり！ 超戦士はねむれない』で悟飯がバリアを張る部分をイメージしました。

読んでいただきありがとうございます。

今後とも拙作をよろしく願います。

EP57 被う者、封ずる者（前書き）

お久しぶりです。遅くなりました。

今回は殆ど捏造です。話もほとんど進みません。申し訳ないです。一部読みにくい表現がありますが、そういった仕様ですのでご理解いただけると助かります。

今回は『KOF』成分が多く『なのは』成分はかなり薄くなっています。

出来れば、今回は後書きまで目を通していただけると嬉しいです。

EP57 被う者、封ずる者

キョウは市街地でガジェットとの戦闘を行った日の晩、何時もの様に私室の床についていた。戦闘による疲労もあり、眠りに付くにはそれほどの時間は必要ではなかった。

キョウは、気が付けば何も無い真っ暗な空間で漂っていた。

『メザメヨ、【ハラウモノ】ノワザト、チヲウケツグモノ。ワガマツエイヨ……』

何者かの声が聞こえる。今まで聞いた事のない男の声だった。

「何だ、ここは？ 被う者？ 未裔？ 俺は寮で休んでいた筈だ。ううっ！！」

キョウがその声に対して言葉を発した瞬間、その空間に光が差し込

む。キヨウはその光に目が眩んでしまう。
その声は光の方から聞こえてきている。

『ワガナハ、ヤサカニ。ワガマツエイヨ。ワガカコヲシリ、フルキ
インネンヲタチキルノダ。オマエノテデ』

「御先祖様なのか？あなたの過去になにが！！」

キヨウは光に向かい叫ぶのだが、返事はない。光はキヨウを引き寄せ
ていく。

「な、何だ？ うわあああ！！」

キヨウは抵抗するのだが光から声を発していた人物に実体はないよ
うだ。為すすべなく光に飲み込まれていった。

次にキヨウが目覚めると其処は見た事のない場所だった。

わずかな明かりだけで照らされた部屋で4人の男が何やら会話をし
ている。その部屋は実家の様に木造の和風建築だった。三人は以前
ソウジが着用していた黒い着物に似た服装だった。一人は壮年の男
性で、その前には二十代半ばの青年が二人と十代前半の少年が正座
で座っていた。

「あの、すみません」

キヨウは彼らに声をかけるのだが反応が無い。四人の前に移動し手
や足を大げさに動かすのだが、見えていないのか、やはり彼らに変
化はない。

「ちょっと良いですか？」

キョウが男の一人に触れようとしたのだが、手が男の身体をすり抜けてしまう。

「なん……だと？ 俺の身体は一体？」

キョウが呟くと突然頭の中にヤサカニの声が再び響く。

『コレハワレノキオク。660年マエノセカイ。オマエハイシキダケソンザイシ、コノバノモノニハミエヌ。シンパイスルヒツヨウハナイ。ワレトトモニ、シズカニミトドケヨ。コレハオマエニヒツヨウナコトダ。ミトドケヨ、ワガカコヲ』

キョウは先祖というヤサカニの声に従う事にした。キョウがそうしている間に4人は話を進めていく。

「帝から我が草薙家を二つに分けるとの勅が下った。焔ほむぢ、陽炎かげろう、お前達二人から次の当主を決める。選ばれなかった方は新たに分家として八尺瓊家やさかにを興すよつとのことだ。よいな？」

「承知いたしました、父上」

「兄上と同じく私も承知いたしました」

二十代の青年が壮年の男性に答える。焔と呼ばれた男は長髪を一つ結びにし、陽炎と呼ばれた男は短髪であった。会話の内容から壮年の男性は現草薙家当主で青年二人は兄弟の様だ。

「父上、私は如何様に？」

一人、呼ばれなかった少年が当主に問う。彼ら三人は兄弟であるようだった。

「慌てるな、瞬火^{しゅんか}。お前はまだ元服も済ませてはおらん。今まで通り『草薙の技』を習得するよう励め。それに兄達に何かあればお前が二人の後を継がねばならぬのだ」

「分かりました、父上」

少年は当主の言葉を聞き納得する。当主は言葉が続ける。

「草薙の分家として八尺瓊を興す際は、オロチの封印の監視という役割も負ってもらおう。草薙で独占していた『抜う』力と『封ずる』力は二つの家でそれぞれ引き継いでゆくことになる」

「父上は我らのうち、どちらを草薙の当主にとお考えでしょうか？」

「兄上、やはり長子のあなたが継ぐのでは？ 父上。私、陽炎が八尺瓊家を」

「何を言う、陽炎！！ 草薙流で最も華麗な技を持つと言われるお前が」

兄弟は互いに党首の座を譲り合う。そんな二人の様子を見て当主は口を開く。

「二人とも、慌てるな。ひと月後、宮城にて演武をする事を忘れてしまいな？そこでお前達二人が御前試合を行う許可を得ている。其

処で決めると八咫の当主と話を付けておる。良いな？」

「「分かりました、父上」」

「瞬火よ、他人事ではないぞ。どちらの家も継ぐ事が出来るように、被いの力と封ずる力を使いこなすようになってもらわねばならん。お前も二人の兄達に追いつくように励め」

「はい、父上」

当主は三人に声を掛け、退出していった。

其処からいきなり場面が変わる。深い山の中に古い祠が見える。中心部には青白い光の球が浮かび、周りを縄の様なもので囲まれている。その前で二人の男が会話をしている場面だった。二人から少し離れた場所に瞬火少年の姿も見える。扉の陰から様子を覗っており、どうやら二人の会話を盗み聞きをしているようだ。

二人のうち一人は陽炎で、もう一人は金色の髪をした陽炎と同じく

らしい年齢の男だった。

「陽炎殿、決心はつかれましたかな？ 今のままでは帝やあなたの父上に覚えの良い兄上殿が草薙の当主になられる。私の力であなただを党首の座に付かせて見せましょう」

「荒風殿、オロチの封印を解くことで私に今以上の力を授けて下さるとのお言葉、信じても良いのですね？」

陽炎が男に問うと荒風と呼ばれた男は首を縦に振った。陽炎の目は白く濁っており、何やら暗示を掛けられている様子だった。

「もちろんです。さあ、早くオロチの封印を」

男が催促すると、陽炎は懐から勾玉を取り出す。

「『八尺瓊の勾玉』を父や兄弟達に見つからないよう持ち出すのは苦労しました。兄の様な出来そこないに草薙の当主を名乗らせるのは我慢ならないですからね。『草薙の剣』を手にし、草薙の当主になるのはこの私がふさわしい」

陽炎が勾玉を光に向かいかざすと、しめ縄は千切れ飛び光の輝きが増す。荒風と呼ばれた男はそれを見て口元をゆがめる。

「あと少しですが、この程度の封印なら私が人間から力を収集しそれを利用すれば済む事です。ありがとうございます、陽炎殿」

荒風は手に赤い光を出し、陽炎に差し出す。

「なんて事をなさるのです、兄上！！」

陽炎が赤い光に手を伸ばそうとした瞬間、瞬火が二人の間に割り込む。赤い炎を拳に纏わせ荒風に攻撃を放つがそれはかわされてしまふ。赤い光は陽炎の身体に入っていくが、一部が瞬火の身体にも入り込む。

「ぐつ、これは？ それより、兄上！！ そやつはオロチ一族ではないのですか？」

「うぐつ。貴様、瞬火か？ 何故ここに？」

「ほう、弟君にも力の一部が入りこみましたか？ それに、なかなかの力をお持ちの様だ。興味深い」

瞬火と陽炎は一足飛びで距離をあげる。荒風は陽炎から少し離れて彼の後ろに立っている。瞬火は陽炎の問いに答えた。近頃様子のおかしかった陽炎の後を付けて来ていたと。

「ですが、長居することはできませんね。まだやらねばならない事もありますから。目的は果たせましたし、私は退散しましょう。陽炎殿、口封じを頼みますよ」

「承知しました、荒風殿。瞬火、悪いが死んでもらうぞ」

荒風は陽炎にそう言い残して、風に包まれながら姿を消す。陽炎は瞬火に向かい青い炎を纏いながら攻撃を仕掛けてきた。二人は攻防を繰り返しつつ祠の外に移動する。瞬火は攻撃を捌きつつ問う。

「何故こんな事を？ 兄上！！ その目は、もしか呪術に？」

瞬火も炎を出し応戦する。二人の攻撃はぶつかり合い、その余波で二人の間に距離が出来る。この時、瞬火の炎も紫色に変化していた。

「八尺瓊に伝える草薙の奥義は封印術のみで、大蛇薙すら使用することは許されなくなると父が兄上と私に言っていたのだ。八尺瓊は分家として草薙に仕えねばならないと。それに兄が草薙を継ぐことはすでに決まっている」と父が話しているのを聞いた。ふざけるな！自分より劣る兄の下に付くなど出来ん！！俺は草薙の当主にならねばならない。そのような屈辱を受け入れる事は出来んからな！！」

陽炎が答える。どうやら当主が草薙家と八尺瓊家の関係について話しているようだった。その内容が気に食わなかったのか、陽炎は草薙家の当主の座に固執しているようだ。彼は再び瞬火に攻撃を加えていく。瞬火は何か捌き続けるが身体には傷が増えていっており、劣勢の様だ。顔にも余裕がない。

「だからといって、先祖代々守ってきたオロチの封印を解くなどは。正気に戻ってください！！ 闇払い！！」

「オロチの復活など私にはどうでもよいのだ。はあっ！！」

二人はたがいに闇払いを放つ。

「ぐわああ！！」

瞬火の放った物は陽炎の物と相殺せず、取り込まれて跳ね返ってきた。瞬火はまともに喰らってしまう。

「素晴らしい、これがオロチの力か。頭に新たな技の情報が流れて

くるぞ！！ これで終いにしてやる！！」

闇払いを喰らい怯んでいる瞬火、一方で陽炎は額の前に開いた両手をかざし構えを取っている。其処から陽炎は瞬かに向かい身を屈めて突進してきた。

「速い！！ 何だ、この技は？ ぐわああああ！！！！」

陽炎は瞬火に近付くと爪を使った斬撃を放つ。

「『八稚女』というオロチの技だ。素晴らしい、凄い威力だ」

瞬火の身体つを攻撃しつつ陽炎は口を開く。瞬火は致命傷を避ける様に防いでいるが、血だらけの姿だった。

陽炎は瞬火の頭を掴み止めの一撃を放とうとする。

「泣き叫びながら死ぬがいい、愚弟よ」

「ちいつ、うおおおおああ！！」

「おのれっ！！」

瞬火は強引に鬼焼きを放ち其処から抜け出す。そして陽炎から10mほど距離をとる。攻撃によってかなり消耗しているようだ。

「はあはあ、オロチの力つて。まさかさっきの赤い光が？」

「そうだ。貴様にも入り込んでいるようだが、残りカスだな。見ろ、この青い炎を！！ この力で私は一族の頂点に立って見せる」

陽炎は炎を手に掲げ口を開く。表情は狂気をはらんでいるようだ。

「次こそ、終わりにさせてもらうぞ!!」

陽炎が再び『八稚女』の構えをとる。対して瞬火は炎を纏う左手を掲げる。

「兄上、あなたを止めて見せます。はああああ!!!」

陽炎の『八稚女』と瞬火の『大蛇薙』がぶつかる。その衝撃はすさまじく、二人の身体は大きく吹き飛ぶ。瞬火はそのまま祠の中に突っ込んでいった。陽炎は近くの木に身体を打ち付ける。

「ぐっ、此処は？ 私は今まで何を？ むっ、祠が……」

陽炎は衝撃により正気を取り戻したようで、瞬火が突っ込んだ事により一部が壊れている祠を目にして、そちらへ足を向ける。

「はああ、兄上は一体どうなったんだ？」

瞬火も意識がある様で、祠の中で立ち上がる。

「それよりもマズイ。オロチの封印を何とかしないと」

瞬火は祠の中の青白い光に目を向ける。その時、陽炎も祠の中に入ってきた。どうやら正気に戻っているようだった。瞬火は彼に此処で起こった事を話す。陽炎は自分の行動を悔い、瞬火に頭を下げる。そして何故操られていたのかも瞬火に話した。彼が正気を取り戻し

た事が分かり、二人で封印を試みる。陽炎が再び勾玉を掲げるが何も起こらなかった。陽炎は少し考えた後、瞬火に告げる。

「我らで無式を放つ事は出来ないが、大蛇薙をぶつけてオロチの力を削ぐことは出来ないだろうか？ 本来、対オロチ用の技だと父上は言っていた。力を削ぎ、父上と八咫の当主様に封印をしてもらうしかないさそうだ」

「それでは兄上は、処断されるのでは？」

「私は良い。封印を解いてしまった責任を取らねばならん。心の闇に付け込まれ、操られてしまった罰だ。それにお前を傷付けてしまった」

「誰しも心に闇を持つと父上がおっしゃっていたではありませんか。私は気にしません」

「だが、封印を解いてしまった責任は私がとらねばならん。それに今考え付く手段はこれしかない。放っておけば大変な事になるのは火を見るより明らかだ。瞬火よ、無責任だがお前が八咫瓊家を興してくれ。兄上が草薙の当主につかれるだろう」

「……分かりました。兄上がそうお考えなら従いましょう」

それから二人は光に向け大蛇薙を放つ。其れはキョウウが以前放つた様に身体から炎を吹き上げて放つものだった。だが威力は彼の物とは比べ物にならないくらい大きいものだったが。

大蛇薙喰らった光はその衝撃により大きく震えだす。光は分離し大きい物と其れの半分以下の大きさの物に分かれる。小さい光は周りに黒い空間を広げ始め、近くに居る瞬火を飲み込み始めた。瞬火は

為すすべなく下半身全てを飲み込まれてしまう。

「瞬火、手を取れ！！」

「兄上！！」

陽炎が瞬火に手を伸ばす。瞬火はその手を取るが黒い空間に引きずられてしまう。

「兄上、私は助かりません。これが何処に繋がってえているかは分かりませんが、あの光はこの空間に逃れようとしているのでしょうか。残った方の光は草薙家と八咫家で封印出来ると思います。手を離して下さい、兄上まで飲みこまれてしまいました」

「ダメだ、弟を見捨てることなど出来ん！！」

「お願いします兄上！！ もう時間がありません！！ 八尺瓊家の当主からの願いです！！ 兄上が八尺瓊家を興して、私の代わりに生きてください。兄上の罪は私が引き受けます！！」

「ならん！！ 弟を犠牲にし、更には罪をかぶせて生き続ける等」
「はああああ！！！！」し、瞬火！！」

瞬火は手から炎を放ち陽炎を吹き飛ばす。

「さらばです、兄上。草薙家と八尺瓊家、そしてオロチの封印を頼みます」

「瞬火あああああああ！！！！！！」

黒い空間は瞬火を飲み込み消えていった。

瞬火が次に目覚めると、其処は庭園の様な場所だった。草木や花々が咲き乱れ、楽園の様な光景が目の前に広がっていた。

「あなた、誰？ 何処から来たの？」

瞬火の目の前には金髪の髪で左右の瞳の色が違う10歳位の少女が現れた。その姿はキョウ達が保護した少女に良く似ていた。

そこで映像は終わり、キョウは再び真っ暗な空間に戻る。ヤサカニと名乗った光もその場所に存在していた。キョウはヤサカニに尋ねる。

「あなたは八尺瓊瞬火なのですね？　アーデルハイド家とはどう関係が？」

「アア、ワレガヤサカニシユンカダ。アレモワレノマツエイ。シカシチハウスマリ、ワレトホノオモコトナル」

「オロチはどうなったんです？それにあの少女は？」

「イマハココマデシカミセルコトガデキン。ダガ、オロチノイチブハコノセカイニキテイル。クサナギリユウガ、ベルカヨリツタワツテイルコトガシヨウコダ。イズレワカルトキガクル。ワガマツエイヨ、セイオウノウツワラマモレ。アレガヨリシロニナレバ、オソロシイコトニナル。タノンダゾ……」

「瞬火様！！　聖王の器とは？それに依り代って？　うわあああああああああああ！！！」

キヨウは光に包まれていった。

「がつ、はあはあ。ここは？」

キヨウが目を覚ますと其処は自室のベッドの上だった。眠りに付いたときは様子に変化はないようだ。

「夢……、だったのか？オロチ、それに聖王の器、一体何なんだよ。うっ、ゲホッ」

キヨウは少量吐血をする。今までこのような事は一度もなかった。時間を見れば六時程だったのでキヨウはそのまま着替えを済ませ、普段通りに行動を開始する。

訓練の補助には参加せず、その時間は医務室のシャマルの下を訪ねた。吐血した事を告げ、検査を行ったが異常は見られなかった。念のため病院へ行く事をシャマルに勧められる。

その後、食事の際にはやてや隊長陣と話す機会があり、なのはは保護した少女の様子を見に聖王病院に向かうそうなので其れに同行させてもらう事にした。はやても吐血の事を聞き、其れを許可した。

キヨウが吐血した事を新人達やギンガに話すと一同はとても心配していた。キヨウはシャマルが異常が無いと言ったので、念のため検査を受けるだけだと言い、彼らを落ち着かせる。

夢に出てきた少女と保護された少女には一体どんな関係があるのか

?

EP57 被う者、封ずる者（後書き）

荒風はゲーニッツだと思ってください。

草薙家と八神家の確執の明確な原因って公式でもちゃんと扱われてないですよ。封印を解いてオロチの血を手に入れた。元は草薙の分家だったとか。

1800年前のオロチ戦は弥生時代だし書けそうになかったの、封印を解く時の話にしました。既に両家は分離していた筈ですけど、其処は独自設定という事でお願います。

八尺瓊瞬火の名前は好きなミュージシャンから取りました。

読んでいただきありがとうございました。

EP58 ヴィヴィオとの遭遇（前書き）

前回の事になりますけど、うちのアギトも実験という暗い過去を持っていきます。ですが、友人や家族の存在でかなり原作とは違う人生を歩んでおり、原作通りになりません。

ならば、せつかくだからここでキョウの先祖の話をし出してしまおうと思って書きました。

キョウの炎は何故青紫なのかという事を説明したかったので。そのうちまた過去編は出てきます。

今回は原作沿いの日常回ですが微妙に過去の事も出てきます。捏造満載ですが、よろしくお願いします。

ご意見ご感想ご指摘も受け付けております。

EP58 ヴィヴィオとの遭遇

その日、キヨウはなのはと共に聖王病院へ向かう事となった。キヨウは吐血をしたが、シャマルに診断をしてもらった際に異常は見られなかった。

彼は前線での戦闘も行つたので念のために病院で診てもらつた事になり、保護された少女の様子を見に行くのはと彼女を送るシグナムに同行させてもらつた様になっているのだ。

はやては気を利かせてキヨウに休暇を与える。彼はまだ108部隊に籍があるので溜まつた有給が適用されるとのことだった。ギンガ達も同様である。

キヨウは出発前にギンガとアギトとロビーで会話をしていた。

「じゃあ、行ってくるから。108部隊とレジアス中将への報告書頼んだぜ。検査が早く終われば戻って手伝うから。デスクにある資料をまとめといてくれよ、ギンガ」

「うん、アギトちゃんと一緒にやっつくね。キヨウ君、ホント大丈夫？病気とかじゃないと良いけど……」

キヨウは自分の身体に対して不安に思う部分もあったが、他の部隊員を特にギンガを心配させたくないと思いつつも通りに振舞っていた。ギンガもキヨウの心遣いは分かっているのだったが、やはり不安は隠せなかったのだろう。彼を心配する想いが言葉に出てしまっていた。

「こつちの事や仕事は私達に任せとけて!! お前が居なくても大丈夫だから、安心しろよな。相棒!!」

「心配すんなってギンガ。別にどこか痛いわけでもないし、結果が分かれればすぐ二人に連絡するよ。アギトもありがとうな。頼んだぜ、相棒!!!」

キョウはアギトと拳をぶつけ合う。兄妹であり相棒である、一心同体とも言える間柄のアギトはキョウの思いを汲んでやるために明るく振舞う様に努める。

「アーデルハイド!!! 車の準備が出来たぞ。高町を連れて来い」

その時、隊舎の玄関から声が届く。シグナムが車の用意をしていたのだ。

「了解です。シグナムさん!!! じゃあな、二人ともまた後で!!!」

「うん、行ってらっしゃい」

「なのはさん達に迷惑かけるなよ!!!」

キョウはシグナムに頼まれなのはを呼びに行き、車に乗り込んでいく。車は当初フェイトの物を使う予定だったが、キョウが増えたので六課の公用車を使用する事となった。

シグナムが運転し助手席になのは、後部座席にキョウという配置だ。一同は聖王病院に向け出発していく。

車で移動しながらキヨウ達は少女の事について話していた。検査の結果でその後の身の振り方が決められるらしい。受け入れ先等についてなのはとシグナムが喋っている時にキヨウはあることを提案する。

「あの子は当面六課が教会で預る事になるしかないでしょうね。受け入れ先の長期の安全確認が取れない事には……」

「あの、その子ってギンガのうちで預かるのはダメですか？ クイントさん、いやナカジマ夫人やナカジマ三佐なら快く引き受けてくれると思いますけど？ それに俺の実家の隣ですし何かあっても父が駆けつけるでしょうから安全だと思います。どうですか？」

キヨウの発言に対して疑問を持ったシグナムが運転をしながら問う。隣のなのはも何か聞きたそうな様子だ。

「良いのか？ 一般家庭だろうし安全の面で問題はないか？」

「そうだよ。レリック事件にも関係するかもしれないし、危ないかなかな？」

「安全面は大丈夫だと思います。ナカジマ夫人は前線を退いて長いですけど、元管理局捜査官ですし、激しい戦闘でなければ大丈夫だと思います。何よりギンガ達の師匠ですから実力には問題はないかと……。うちの親父も元管理局員で、俺を鍛えたのも親父ですよ。正直まだ親父に勝てる気がしません」

キヨウは二人に自信満々で答えるのだがシグナムはその案の穴を指摘する。

「お前達の師がいるというのは確かに安心できるのだが、一般住宅という点で施設面での安全性がな……」

「確かに其処がネックですよ、すいません。ナカジマ夫人は専業主婦ですから、あの子にもさびしい思いをさせなくて済みそうかと思っただんですけど」

キヨウは自分の案の穴に気付き謝罪する。なのはは苦笑いしながら彼に言う。

「小さい頃は誰かが一緒に居る方が絶対良いもんね……。それよりもキヨウ君。勝手に話を進めてるけど大丈夫なの？ ナカジマ三佐の所の御迷惑にはならないか不安だよ」

なのは自身、幼い頃に父が大けがをして寂しい思いをした事が有る。それを思い出しての発言だったのだろう。もちろんキヨウに釘をさす事も忘れない。

なのはにもっともな事を言われキヨウも苦笑いをする。

「そうでした。でも、あの人たちなら笑って許してくれそうです。むしろ、進んで里親を引き受けそうな気がしますよ」

「良い人達なんだね。それなら安心そうだ。レリック事件がひと段落したら里親の候補に入れるように掛け合ってみるよ」

「俺の大好きな人たちですよ。じゃあ、俺はギンガに連絡を入れて

「聞いてもらいます」

なのは言葉にキョウは笑顔になる。車は聖王病院に向けどんどん走っていく。キョウは車内でギンガに念話を送り里親の件を伝えるのだった。

その頃ギンガは六課でデスクワークをしていた。出向組の机も新人達の傍に設置されており周りにはスバル達新人の姿もある。ギンガはアギトと共にキャリアウーマン顔負けのスピードで報告書等の仕事を捌いていた。伊達に黄金世代の訓練校を首席で卒業し108部隊で鍛えられた才女ではないと言ったところか。ティアナやアギトも同様に書類をまとめている。スバルはエリオやキャロにアドバイスをする等の手伝いを自分の仕事もしながら行っていた。ギンガは突然仕事の手を止めてスバルに声を掛ける。

「ねえ、スバル。キョウ君から、この間の女の子をうちで預れないか母さんに聞いてって念話が来たんだけど、あなたはと思う。私は良いと思うんだけど……」

「私も良いよ。きっと父さんも母さんも良いって言うに決まってるよ」

「安全面も考慮して、此処最近の事件が解決したら里親の候補にな

って欲しいんだって。スバルが良いなら母さんに連絡するね。父さんは今度の合同捜査の打ち合わせで伝えれば良いし」

「じゃあ、私がお姉ちゃんになるのかあ。実は前から妹が欲しかったんだ」

スバルは嬉しそうに笑っていた。そんな彼女にアギトも笑顔で声をかけた。

「スバルも末っ子卒業かよ、良いなあ」

「アギちゃんにはリイン曹長が居るじゃん」

「アイツは妹っていうより手のかかる後輩って感じだもんな」

「スバルもアギト先輩も嬉しいのは分かりますけど、仕事ですか
ら手を動かしましょう」

「ごめん、ティア（ティアナ）」

「分かればよろしい」

談笑し始める二人にティアナが突っ込みを入れる。委員長気質がありそうなティアナに、二人は声を揃えて謝罪した。そんな二人の様子にその場の一同は笑顔に包まれる。

それからギンガはキョウに念話を送る。クイントにも休憩のときに連絡すると決め、再び仕事に取り掛かった。

再び場面は車内に戻る。キヨウはギンガから色よい返事が貰え、クイントからも貰えそうだとなのは達に伝えた。シグナムもなのはもそれを聞き安心した様子だった。

「そろそろ着くから準備をしとけよ。シスターシャツハもいらつしやるそうだから私が仲介しよう。キヨウは途中で別れるだろうが挨拶はちゃんとしとけよ」

「了解です、シグナムさん」

キヨウは到着するまでシグナムにシャツハについての質問をした。彼女の話では聖王教会でシスターをしながら六課の後見人の騎士カリムの秘書を務める優秀な女性とのことだった。見た目の特徴等も聞き、キヨウは初顔合わせに備えるのだった。

病院の近くまで来た時、彼らの下にそのシャツハから通信が入る。保護されて少女が検査の合間に抜け出したとのことだ。通信が終わると車内ではどうするか相談が開始される。

「どうします？　なのはさん、シグナムさん。やっぱり俺達も探すの手伝いしましょう」

「いや、アーデルハイド。お前は自分の検査を優先しろ。何かあったら困るのではないか？　少女を探すのは私達に任せておけ」

「そつだよ、ギンガ達だって心配していたし。みんなを安心させるためにもキョウ君は自分の検査を優先しなきゃ」

その後、キョウも食いがつたが、最終的に二人に説得され検査を優先する事にした。その代り、検査で異常が見られなかったら捜索に参加するという約束を取り付ける。

病院に到着後、なのはとシグナムはシャツハと合流し少女を探し始める。その際、キョウも簡単に自己紹介を行い三人と別れて検査を受けに診察室へ向かっていく。

診察室は六課の医務室に設置されている物よりも新しい医療機器が数多く並んでいた。そこではキヨウに対して血液検査やスキャンなどが行われた。キヨウが人造魔導師である事は彼がゼスト達から救出されて以来、管理局や医療機関で知られていることだったので特筆することはない。一通りの検査が終わり、キヨウは担当医と症状について話す事となった。

「検査ではコレといった異常は何もなく、いたって健康との結果が出ました。今朝いきなり吐血したそうなんですが、原因は分かりかねますね」

「そうですか、原因は分からずじまいですか……。でも、健康なら良かったです。病気が何かだと周りが騒ぎまして。じゃあ、私は失礼しますね」

「あつ、ちょっと待ってください!!」

キヨウは健康と聞き、安心して席を立とうとするが医者呼びとめられる。医者から再び席に着く様に言われる。医者は一つ思い当たる事があると言い、仮説を立てる。

「アーデルハイドさん、あなたの出生は特殊なものです。多くの魔導師の遺伝子が使われているという事はご存知ですよね？」

「はい。幼少の頃より理解しています。古代ベルカ人と現生ミッド人の遺伝子が組み合わされていると」

「そうです、現代のミッド人でなく古代ベルカ人の遺伝子をベースにされていらつしやる筈です。古代ベルカの血をひく方は現在も多くいらつしやいます。ベルカ地方には多いですし、あなたの父上もその筈です。ですが、あなたには他の方にはない遺伝子があるんですよ。いえ、正確に言えばアーデルハイドの血筋に」

「他の人が持つていない？ どういう事です？」

それから医者の説明を始める。キヨウのもつ遺伝子はミッドでなく第97管理世界出身の人間に近いが、それとも微妙に異なるものだそう。その遺伝子は彼の発火能力とも関係がありアーデルハイド家特有の物と医者は言う。炎熱の変換資質と関係する遺伝子とも似ているが微妙に違うらしい。キヨウ自身、変換資質も持つので彼の炎は魔法と自身の力がブレンドされている。

なぜ、そのように詳しい事が分かるかというところ、アーデルハイド家は元々ベルカの旧家であったからだという。

かなり昔に没落して、ミッドに移り住んだ者の子孫がソウジの家系であるらしい。古くは聖王の時代から存在しているようで、一応ベルカの歴史書にも先祖の姿があるとのことだった。

血筋に関しての詳しい事は聖王教会に行けば分かるらしい。

だが今回の様な症状は過去のアーデルハイド家でも見られない物の様だと医者は言った。

ミッドでは患者のカルテやデータは数代前の先祖の物も医療用データベースに登録されており、遺伝子疾患等の発見に役立っている。医者は自身の持つ端末から其れを見る事が出来るのだが、キヨウの症状は記録の中には無いそう。キヨウはアーデルハイド家の始祖の遺伝子が使われていると推測されており其れが関係しているのではないかと医者は言う。

「そうですね、古代ベルカの遺伝子が……」

「それに数代遡ったデータを見て思ったのですが、炎の色も違いますね。先祖帰りとも違うんですが関係が無いとも言いきれません。生活習慣の事は聞きましたが、他に何か変わった事はなかったですか？」

医者の方に、キヨウは奇妙な夢の話を行った。先祖と名乗る人物が登場し、ミッドと違う世界での闘いの記憶や先日保護された少女に似た女の子の話等を医者に語った。『オロチ』という言葉を出した際、医者は顔色を変えた。

キヨウは気になり医者に尋ねる。彼の話によると『オロチ』という言葉はベルカの古いおとぎ話にでてくる言葉だそうだ。医者は幼い時、寝物語に祖母に聞かされたらしい。

医者はキヨウにその物語を語る。

『オロチ』とは聖王以上の力を持つ怪物で当時の聖王とアーデルハイド家当主により退治されたという。聖王が自分ごと『オロチ』を討たせ退治したというものらしい。

だが、その物語に関する資料や遺跡は見つかっておらず、聖王家とアーデルハイド家の権威を高める作り話だと思われていた。

「おとぎ話ですので事実が分かりませんが、あなたの夢が本当にあった事なら信憑性も出てくると思います。私では専門が違いますので一度教会に足を運んでみると良いでしょう。お力になれず申し訳ありません」

「いえ、先生。ありがとうございます。父や教会の方に聞いてみようと思います。あの、戦闘とかは行っても大丈夫なんですか？」

「其れは大丈夫でしょう。健康状態に異常はありませんから。でも何かあればすぐ連絡してください」

キヨウは礼を言うと医務室を後にするのだった。自分の身体の異常の原因が分かるかもしれないということであらう不安が減ったのか、足取りが少し軽くなっていた。

キヨウは診察が終わると、先ずギンガ達に通信を送る。そしてなのは達三人へ念話を送り異常は見られなかったと伝えた。医者からも戦闘の許可はもらえたが吐血の原因は分からないと伝える。なのもシグナムも医者のお墨付きがあるなら捜索に加わっても構わないと返事が来た。

それからキヨウは病院の庭の様な場所へ足を進める。散歩をする患者の気分転換になる様に、良く手入れのされた庭であった。

キヨウが其処についたとき、茂みの方から物音がする。キヨウが其れに近付くと其処からは保護された少女がウサギのぬいぐるみを持って現れた。

「おっ？ お嬢ちゃん、こんなところに居たのか。みんな心配してるぜ」

「逆巻け、ヴィンデルシャフト！！」

キヨウが少女に声をかけた時、病棟の方から騎士甲冑を纏ったシャツハが飛び出して来る。手にはトンファー状のデバイスも装備され

ており、彼女は着地すると少女に向かい攻撃を放とうとする。

「させるか！！　こんな子供に何やってるんです、シスター！！」

キヨウは一瞬でセツトアップを済ませ、左手を下から突き上げる様にして放つ当て身技、『九百拾式・鵜摘み』で其れを受け止める。デバイスを弾き、攻撃を受け流した。間一髪で間に合ったようだ。少女はキヨウに守られるかのように彼のジャケットの裾を掴み陰に隠れる。

シャツハは対峙しているキヨウへ念話を送る。

（邪魔をしないで、アーデルハイド曹長。その子は人造生命体です。検査で魔力などの数値は子供の範疇でしたが、どんな潜在的な危険を持っているか分からないんです！！）

（人造生命体だからって何だって言うんです。同じ命には変わらないでしょう！！　それに俺も人造生命体です！！）

キヨウの言葉にシャツハのデバイスを込められた力は弱まる。だがそれでも彼女は構えを解かない。キヨウの拳とシャツハのデバイスの押し合いは続く。

（先ほどの発言はすみません、アーデルハイド曹長。だが、あなたとあの子は違います。何か起こってからでは遅いんです。どいてください！！）

（謝罪は受け取ります。それにシスターの考えも分かります。ただ、だけど俺は小さい子供に武器を向ける事を許せません。俺は此処から一步も引きません！！）

「キヨウ君、シスターシャツハ。病院で何やってるんです!!」

キヨウとシャツハが罅迫り合いをしている最中になのはが近くに来ていたようで、二人に声をあげその間に入る。なのはが間に立つてすぐ、シグナムも其処へと駆けつける。

その後キヨウとシャツハは二人から説得され武装を解く。少女に今のところ危険性はない様だとなのはとシグナムは判断を下した。

少女はシャツハの攻撃でびっくりしてぬいぐるみを落としてしまっていた。キヨウはそれを拾い、埃を払うと少女に向かい其れを手渡す。少女はまだ警戒しているのか片方だけ手を離し其れを受け取る。そして小さい声でこう言った。

「ありがとう、お兄ちゃん」

「お礼がちゃんと言えるって偉いね。どういたしまして」

キヨウは少女の頭を偉い偉いと呟きながら撫でる。さらさらとした金髪が揺れる。少女は少し気持ちよさそうな表情をするが、またすぐに警戒の色を見せだす。

「もう大丈夫だかな。怖い思いさせてすまなかった」

少女はまだ少し怖いようでキヨウのジャケットを手が白くなるほど力を込めて掴んでいた。キヨウはしゃがんで彼女の目線を合わせ続ける。

「俺はキヨウ・アーデルハイドって言うんだけど、覚えてるかな？君を保護した時に居ただけだ。君の名前、教えてくれないかい？」

少女は少し警戒を解いたようで小さい声で答える。

「ヴィヴィオ」

「そうか、ヴィヴィオちゃんか。良い名前だね」

キョウはヴィヴィオに向かい微笑みつつ答える。その際に周りの三人に念話を送り自分に任せて欲しいと伝える。幼い頃のスバルで小さい子の相手には慣れていると言うとシグナムとシャツハはそこから去る。もちろんシャツハは少女とキョウに謝罪をして。

なのはは少女の面会に何度か訪れているので自分も一緒に居ると伝えた。そしてヴィヴィオに対して自己紹介を行った。ヴィヴィオはなのに対しては余り警戒を見せていないようだ。

「ヴィヴィオはどっかに行きたかったのか？」

キョウは少女に尋ねる。少女は先ほどより少し大きい声で答える。だがその表情に不安の色は消えていなかった。

「ママが居ないの……」

「それは大変だ。俺となのはさんと一緒にママを探しに行こうか？」

「うん」

「よっし。それじゃあ、高い所から探してみようか？」

「ふえ、高い所？ いいよ。でも危なくない？」

「そっか、それなら安心しろよ。全然危くないから。行くぜ？
よいしょっと」

「ふわああ？」

キヨウはヴィヴィオの返事を聞くと彼女を抱え上げる。所謂肩車の体勢になった。

「どうだ？ 高いだろ？ 怖くないか？」

「うん、ちょっと怖いけど大丈夫」

少女はキヨウの上で先ほどより明るい表情を見せる。

「キヨウ君、本当に小さい子の世話をし慣れてるんだね？」

「はい、スバルによく肩車をねだられたりしてましたし。じゃあ、ヴィヴィオ、ママを探しに行こうか？」

「うん。行こう、お兄ちゃん、なのはさん」

それから三人は暫らく病院内を散歩するのだった。

暫らくしてキヨウ達が隊舎に帰ろうとするとヴィヴィオは別れるのが嫌になりぐずり始める。終いにはキヨウの制服を掴み泣き出してしまふ。

「おいおい、ヴィヴィオ泣くなって……」

キヨウはヴィヴィオに目の高さを合わせて説得するのだが一向に聞き入れられない様だった。仲良くなった人間とはなれる事に対して、ヴィヴィオはまだ慣れていないのだろう。その目からは寂しいという想いが伝わってくる。

「やだやだあ、お兄ちゃん達と一緒にがいい。ヴィヴィオも一緒に行く！！ 絶対、絶対行くもん！！」

「こうなってしまうては……」

「クスッ、仕方がないですね」

少し離れていたシグナムとなのはは折れる事にし、ヴィヴィオを連れ帰る事となった。シグナムは少々呆れ顔といった感じだったが、なのはは二人のやり取りを微笑ましく感じ笑顔を浮かべていた。帰りの車内でヴィヴィオは泣き疲れたのかキヨウの膝の上でぬいぐるみを持ちながら眠りについた。その寝顔は天使のように愛らしいものだった。

「この子みたいなお小さい子の笑顔を守るためにも頑張らないといけないな……」

キヨウはヴィヴィオの寝顔を見ながら呟く。其れはなのは達にも聞こえていたようだ。

「ああ、そうだな。我が剣にかけて……」

「そうだね、みんなの笑顔を守るため。悲しい思いをする人を減らすために」

車は隊舎へと向かった。

EP58 ヴィヴィオとの遭遇（後書き）

何かグダグダですいません。

伏線を張ったり回収したりするのって難しいですね。

拙作を読んでいただきありがとうございます。

EP59 世界を超える伝承（前書き）

バトルや日常が書きたいです。でもストーリー上それ以外も大切なんですよ。

設定に矛盾が出ないようにするのって大変だとしみじみ思う今日この頃です。

今回も難産でした。

キヨウがなのは達と病院に居る間、はやてはフェイトと地上本部からの査察の件で話をしていた。オリス・ゲイズ二佐から週明けに査察を行うとの通達があったのだ。二人はソファーに腰掛け話を進める。

「はやて、地上の査察は厳しいって聞いたけど大丈夫？」

フェイトは心配をしていた。機動六課は高ランク魔導師を多く保持し、隊長格以外は新人も多い。その上、108部隊からの応援でキヨウ達三人も派遣されているのだ。突っ込まれる部分は数多くある。だが、一方のはやては査察について普段道理の表情で話をしていた。心配いらなと言わんばかりに。フェイトはそんな彼女の様子になったのだ。

「そんな不安にならなくてもえええよ。査察って言っても此方の様子を見に来る程度らしいから」

「でも、六課は突っ込み所満載なんだよ。どうしてそんなに落ち着いていられるの？」

フェイトはこの機動六課の事を心から心配している様子だった。フェイトの問いにははやては頬笑みながら答える。

「キヨウ君達がいるのって、地上との連携の強化の意味もあるってこと忘れたん？三人はナカジマ三佐だけじゃなくレジアス中將にもパイプを持つてるんよ。それに定期的に此方の情報も向こうに送ってる。もちろん私が許可してるから情報の内容は心配せんでいいよ。

三人のお陰で今のところ良好な関係を結べてる。陣中見舞い位に捉えてくれて構わないってオーリス二佐も言ってたんよ。大丈夫、悪いようにはならへん」

はやてはフェイトに答え、机にあるコーヒーを口にする。キヨウ達の存在が彼女の余裕の原因だったようだ。はやての話を聞きフェイトも安心する。

「そうか、六課の粗探しとかじゃないんだ。キヨウ君達って裏で結構働いてたんだね。三人の六課での業務の担当が少なかったのにはそういう理由があったんだ」

「そうやで、フェイトちゃん。それに合同捜査の調整もやってくれるし三人には感謝してるんよ」

査察に対しての心配がなくなったフェイトは、はやてにある質問をする。其れは六課設立の本当の理由だった。はやては顔を引き締め、フェイトに答える。この後、聖王教会へなのはと顔を出しに行くのでフェイトにも付いて来て欲しい、そこで話すと答えた。フェイトは教会へ行く事を了承する。

「なのははもう戻ってるのかな？」

話が終わったのでフェイトはなのはの下に通信を開く。其処にはこの間保護した少女の笑顔が大きく写り込んだ。

「わあ、凄い！！ 凄い！！ アギトお姉ちゃん、もっとやって！！」

「おう！！ 任せろ、ヴィヴィオ！！そ うりゃあ！！」

ディスプレイにはなのはの私室が写り、其処には新人達となのは、それにキヨウ達三人の姿も見られた。アギトは花火の様な魔法を使つて少女をあやしているようだった。その少女はキヨウに肩車をさせアギトの魔法を見ている。

「あれ、どうしたのフェイト隊長？」

なのはが通信に気付きフェイトに答える。

「その子は？ 連れ帰ってきたの？」

「うん。キヨウ君に懐いちゃつて。今も肩車されて喜んでるよ」

なのはの後ろからはアギトとスバルの声も聞こえてくる。スバルも少女をあやすのに張り切っているようだ。

「いくぜ、スバル！！」

「うん、アギちゃん！！」

「クロスチェンジャー！！！！」

二人はポーズを取り手から閃光を放つ。スバルとアギトの息はここでもびつたりだった。

「格好良い！！ ヴィヴィオも、ヴィヴィオもピカーンってやりたい！！」

「そうか？　なら、アギト達に後で教えてもらおうな？」

キョウは優しい声でヴィヴィオに答える。その技に興味を持ったのはヴィヴィオだけではなかった。

「あれ良いね、キャロ。僕達も教えてもらおうよ。ねえ、兄さん。僕もやってみたいです」

キョウの隣でスバルとアギトを見ていたエリオもそれに食いついていた。彼はキャロと共にあの技をやってみたいと思っっているようだ。

「ウソでしょ？　私、嫌だよ。エリオ君……」

そんなエリオにキャロは少し呆れているようだった。エリオの独特なセンスを理解できないらしい。

「ギンガさん。あれは、確かラルフ教官とクラーク教官の……」

「うん。二人なら何時かやりそうだと思ったけど、ホントに会得していたなんてね……」

ティアナとギンガは二人を見て苦笑いをしていた。この技は元々、訓練校の教官であるラルフとクラークが使用していた身体強化の魔法の一種であった。アギトとスバルは見た目がコミカルだという事でその技を伝授してもらっていたらしい。自分達の技が余興に使われているとは……。ラルフ達が知ればショックを受けるのではないだろうか。

「なんや、キョウ君達もおったんか？　それなら都合が良いわ」

はやてが通信に割り込む。フェイトとはやてはなのはに用があったらしい。この後、聖王教会に行くのでついて来てもらいたいのとどだった。それとキヨウ達三人の中から一人ついて来てもらいたいとも伝える。これからの事も考えて六課の後見人との顔合わせも行って欲しいとのことだ。

「それなら、俺が付いて行っても良いですか？ 聖王教会で調べた
い事があるんで」

「構わへんけど、せつかくの休みなのに良いん？」

キヨウはその場に居る一同に病院で医者に聞いた話を教えた。吐血の原因も何か掴めるかもしれないという彼に一同は異を唱える事はなかった。

ヴィヴィオを除いて……。

「嫌だ、嫌だ〜！！ お兄ちゃんと一緒に遊ぶの〜！！」

駄々をこねるヴィヴィオを見てフェイトが其処に向かおうかとなのは達に念話を送るのだが、その間にアギトがヴィヴィオの興味を引き付ける事に成功する。

「そつだ、ヴィヴィオ〜！！ 私達と一緒に散歩行こうか？ 面白い場所が此処にはいっぱいあるんだ」

「ふえっ？ お散歩？」

「そつだよ。キヨウ君が帰るまでお姉さん達とお散歩しよう？ エ
リオ君とキャラ口ちゃんも良いよね？」

アギトが声をかけ、ギンガがそれにアシストを入れる。エリオ達もそれに便乗し、みんなが行くならとヴィヴィオはアギトの提案を受け入れる。

（アギトもギンガも慣れてるんだね？ 助かったよ）

（実家に居た時に近所の子たちで慣れてますから）

（私も妹が小さい時に世話した経験がありますし）

（ありがとう、二人とも。私もエリオ達の世話をした経験があるけど、二人も小さい子の相手が上手だね）

なのはとフェイトは彼女達に念話で礼をするのだった。その後、キヨウは新人達を始めとした一同と別れ隊長達三人と聖王教会へ向かう。出発前にはやてがキヨウの同行の許可を教会側に確認した。教会と繋がりのない彼の同行は却下されるのではないかと、なのはやフェイトは少し心配していたのだが其れはすぐに受け入れられた。四人はヘリで聖王教会へと向かうのだった。

教会へ到着するとシスターシャツハがキヨウ達を待っていた。カリムが待つ部屋への案内はシャツハが行うことになっているらしい。初めにキヨウは彼女に対して病院での非礼を詫びた。シャツハも思う所があつた様で部屋に移動する間、二人は互いに謝罪しあつていった。その姿は教会内でも注目を集めており、はやて達は短い間だったが少々息苦しさを感じている様子であつた。

カリムの待つ部屋にはクロノ・ハラウン提督の姿もあつた。キヨウは二人と初対面だったが移動中の車内で彼についてははやて達から色々と教えられていた。それにカリムとクロノは管理局内ではたまたに耳にする名前であつたので、一般局員の平均並みに二人の事は知つていたのである。

無難に自己紹介を済ませて席に着く。だがキヨウが自己紹介をした際、名字を聞いてカリムは一瞬だけ表情を変えた。

「アーデルハイド陸曹長は、あのアーデルハイド家の出身で？」

「どのアーデルハイド家か分かりかねますが、聖王病院の先生の話だとベルカからの移民の家系であるそうですけど……」

「それならば、もしかして草薙流を使われるのでは？」

「はい、よくご存じですね。父から免許皆伝のお墨付きをもらって

います」

カリムの質問に対しキョウは答える。彼の言葉を聞きカリムは驚いた表情を見せる。彼女はそれからアーデルハイド家について話を始めた。アーデルハイド家は古代ベルカの頃より聖王を守る騎士の家であり、グラシア家とも劣らない程の名門であったそうだが、教会設立の際に当時の当主が他の家と対立をし、騎士資格を返上してミッドに移ったようだったことだった。教会内でも一部の人間以外の間では、すでに途絶えた家系と思われているらしい。当時の当主は聖王を神と崇めることに反対だったと資料に残されているという。

「そうだったんですか……。うちの家系については父も教えてくれていなかったので何も知りませんでした」

「ベルカと縁のある家系ですから、何か困った事がありましたら遠慮なく声を掛けてくださいね」

「そろそろ良いかい？ カリム、アーデルハイド陸曹長」

キョウとカリムの話が長引きそうだったのでクロノが注意をする。

二人はバツが悪そうな表情で彼やその場にいたはやて達に謝罪した。

その後、クロノとカリムにより六課設立の理由が話された。キョウは退出すべきか二人に尋ねたが地上の隊員にも理解してもらいたいとのことで同席するようにいわれる。

部屋の明かりが落とされカーテンが閉じられる。そして説明用のウインドウが空中に現れる。

初めに六課の後ろ盾について話された。二人の他にクロノとフェイトの母であるリンディ・ハラオウンが後見人になっているとのこと

だった。この事は公表されているので特に何もなかったが、非公式で管理局の黎明期を支えた三提督もバックについているということ
を明かされた。

そしてその理由にはカリムの持つレアスキルが関わっているとのこ
とだ。

キヨウは六課設立の理由がロストログリア対策と独立性の高い少数部
隊の実験例だと信じていたので二人の話聞き驚いていた。

カリムはその場でレアスキル『プロフェーティン・シュリフテン』
を実演する。カリムは古い紙の束を取り出し封を切る。するとそれ
らは光を放ちながら彼女の周りを取り囲むように回転し始める。彼
女のレアスキルとは早い話、予言なのである。古代ベルカ語で書か
れ、解釈の仕方は何種類もあるとのことだ。的中率や実用性は割と
よく当たる占い程度らしいが、聖王教会や次元航行部隊のトップな
ど管理局の幹部も目を通して物だとクロノが説明を加える。
彼女の予言に数年前からある事件が書きだされているという。カリ
ムはなのはとフェイトとキヨウの目の前に予言の書かれた紙を浮か
べる。

『古い結晶と無限の欲望が集い交わる地。死せる王の下、聖地より、
かの翼が蘇る。死者たちが踊り、
なかつ大地の法の塔はむなしく焼け落ち、それを先駆けにあまたの
海を守る法の船も砕け落ちる』

そう書かれているとカリムが解説をする。彼女はこの事からロスト
ロギアをきつかけに地上本部の壊滅と管理局システムが崩壊するの
ではないかと考えているそうなのだ。それを防ぐ目的が六課設立の
理由とのことだった。

「それだけではないのです。これを見てください。新たにこの様な
文が……」

カリムはキヨウ達だけでなくその場の全員に新たな文を見せる。其
処にはこう書かれていた。

『法の守護者はされど地に伏せず、人の手により災いは去る。神を
欲した欲望は翼をもがれるも死なず。死せる王は実に宿す星の意志
に吞まれ八岐の神へと変わる。神は大地を浄化せしめん』

「新たに加えられた文で今までの解釈に差異が出てきそうなんだ」

クロノが言う。その文章を見てなのはとはやては眩く。

「八岐の……？ 何か聞いた事がありそうだけど」

「せやね、なのはちゃん。何なんやろっ？」

「どうしたの、二人とも？」

二人の呟きに対してフェイトは問う。その時、はやてが何か思いだしたようだ。

「分かった、八岐大蛇や。二人とも、小学校の社会科で習わなかった？」

「オロチだって（ですって）？」

はやての言葉にキヨウとカリムは声を重ねた。キヨウもカリムも心底驚いているようだった。はやての言葉になのはとフェイトは地球の伝承を思い出す。そしてそれを簡単に語った。大昔に八岐大蛇という怪物が地球で暴れまわっていた。日本の権力者である天皇の命によって遣わされた、三人の武人の神器により怪物は退治されたという物でおとぎ話のようなものであるという。

三人の話を聞きカリムとキヨウの顔色は変わる。次にカリムがベルカに伝わるオロチの伝承を話す。それは医者がキヨウに話した内容とほぼ同じものだった。キヨウの先祖が聖王と共にオロチを退治するという地球の伝承に近い物であった。此方もおとぎ話だという。

「まさか、私達の故郷とベルカで似たような伝承が残っているなんて……」

「あの、八神部隊長。自分もそれに関わる夢を見たんですが」

キヨウは昨夜の夢で知らない筈のオロチの事が出てきたと告げる。クロノとカリムは夢の内容を話すように彼に言う。そこでキヨウは夢の中で見た光景や其処に出て来た『ヤサカニ』という人物について語った。そして、夢から覚めた際の吐血の事も。

その話を聞きカリムは驚愕する。『ヤサカニ』とは実在する人物で、

アーデルハイド家の始祖として教会の文献にも登場するというのだ。そして、オロチのおとぎ話のモデルにもなった人物だと伝える。キヨウの吐血がオロチと何か関係があるのではないか調べてくれると彼女は言った。

「カリム理事には悪いんですが、自分は最初、予言なんて信じられませんでした。未来は人の手でつかみ取る物だと思っていましたので……。ですが、これは信じざるをえません。レジアス中将にもこの件を伝えておきます。不測の事態に備える事も重要視される方です。」

キヨウの言葉にクロノとカリムは少しホツとした様子だった。二人によると、レジアスはこの手のレアスキルに良い感情を持っているとのことだった。だが、今回の件は偶然とは思えない程の繋がりがある。キヨウに今回の件についてしっかり伝えて欲しいと二人は念を押した。

「草薙の剣に八尺瓊の勾玉、八咫の鏡。歴史で習った三種の神器と関係があるのかもしれないね。キヨウ君の話ではヤサカ二つて人は次元漂流者みたいやし」

「草薙流の名前も言われてみればこの世界というより、地球の物つて感じがする」

「キヨウ君もこの件には深い関わりがあるのかも……。調べてもらえる？」

「了解です、フェイト執務官。この件については自分も父に聞いてみようと思いましたが」

それから四人は聖王教会を後にする。カリムは調べていく上で何か分かったらキヨウに連絡をしてくれると約束をしていた。帰り際に彼を騎士としてスカウトする一幕もあったが……。

「ベルカでは今まで草薙流は途絶えていると考えられていました。よろしければ教会の騎士団に所属していただけませんか？ アーデルハイド家の復権も叶うかもしれませんよ？」

「お言葉は嬉しいのですが、自分は管理局でやらなければならぬ事があるんです。父や中将の願い。それに友人たちとの誓いもありますから辞退させていただきます」

キヨウはカリムの提案を断った。カリムは其処で了解したと返すが、どこか諦めていない様子だった。余談だが、この後もカリムは時々キヨウを騎士団に誘う姿が見られるようになっていく。

キヨウ達が教会へ居る間、ヴィヴィオの世話をエリオとキャロ、それにギンガが行っていた。ギンガは仕事が早く終わったので世話を

頼まれていた二人の手伝いに来ていたのだ。ライトニングの二人の仕事はスターズの二人が引き受けており、アギトもそちらの手伝いに残っている。

ヴィヴィオとギンガたちは依然なのは達の部屋に居るようだ。ヴィヴィオはベットで寝息をかいており、三人はその寝顔を見守っていた。部屋のテーブルにはお絵かき帳や積木が置かれていた。お絵かき帳にはヴィヴィオが書いたと思われるキョウウの似顔絵があった。その他にギンガにアギト、エリオとキャラの物も並んでいた。ソファーの上には何着かクイント製と思われる洋服がおいてある。恐らくアギトの物であろう。ヴィヴィオにも着れそうな物をギンガが私室から見つくり持って来たようだった。

「やっと落ち着いてくれましたね」

「そうだね、キャラちゃん。可愛いなあ、子供の寝顔って本当に天使用みたいね」

ギンガとキャラはヴィヴィオの姿を微笑みながら眺めていた。だが、エリオは一人だけ深刻そうな表情であった。

「エリオ君、どうかした？」

それに気付いたキャラは彼に声を掛ける。

「いや、何でもないよ」

そう答えるエリオにギンガから念話が届く。

(この子、人造魔導師の素体らしいわ。今は普通の子供と変わらな
いけどこれから色々と苦勞する場面も出てくる。私達みたいにな

(えっ？ どういうことですか?)

(キョウ君からは聞いてると思うけど、彼もプロジェクトFで産まれている。そして私達姉妹も。この子を見て分かる様に人造魔導師やプロジェクトFの研究は今も続いているみたい)

(ギンガさん達も……。どうして僕にそれを?)

(あなたの今の表情が保護される前の私に似ていたから、もしかして私達と同じかもって思ったんだけど)

(そうですね。僕もプロジェクトFで誕生しています。元になった人物の記憶を引き継いで……。僕は人の命を大切にしない研究を許しません。僕達以外に悲しい思いをする子供達を見たくないんです！！)

(そうですね。その為に違法研究を撲滅しなくちゃいけないわ。私達と同じ境遇の子供達を増やさないために！！ お互いに頑張りましょうね、小さなナイトさん)

(はい、ギンガさん！！)

ギンガはエリオに対し笑いかけると部屋を後にした。

一方、ライトニングの仕事を引き受けているスバル達は資料まとめをほとんど終わらせていた。アギトとスバルはモニターで先日の戦闘映像を見ていた。

「はい、おしまい。アギト先輩、スバルはどうです？」

「あつ、ああ。ティアナ。スバルもあと少しで終わりそうだ」

「それって昨日の？」

ティアナの問いに黙って映像を見ていたスバルが答える。

「うん。アルトが記録した詳細データ。魔力とは別系統のエネルギーが使われてるみたい」

「お前達と同じってことか？」

「アギちゃん……。この子たちは一体何を考えて行動してるのか私は知りたいんだ。それにルーテシアちゃんやゼストさん、メガーヌさんがどうしているのかも」

「それは隊長達やロングアーチのスタッフが考える事でしょう？」

スバルの言葉にティアナが返す。

「そうだけど。でも、何もしないで待っているだけは嫌なんだよ。あのガリユーってやつ動きを見た限り私じゃまだ敵わなそうだし。キョウにいやギンねえ、隊長達に守られたばかりは嫌なの」

スバルの言葉を聞き、ティアナは笑顔で言う。

「言うと思った。その為には先ず力をつけないとね。早く仕事を終わらせて自主トレしましょう？ アギト先輩もお願いして良いです」

「？」

「ああ、もちろんだぜ！あと、スバル。焦らないで良いぜ。今のお前達の強さは、同じ年の頃のキョウやギンガ以上だぜ」

アギトの言葉を聞きスバルはやる気が出たようで仕事をギンガ顔負けのスピードで終わらせる。

その日の訓練はアギトも参加してかなり熱のこもった特訓を行っていった。

キョウは隊舎に戻ると教会で聞いた件をレジアスへ報告する。108部隊への報告はギンガが里親の件も絡めてゲンヤへ連絡を取ってくれるようだ。レジアスはその時、オーリスと共に査察についての話をしていたようだった。

「中将、アーデルハイド曹長から通信が」

オーリスが開いた通信へすぐレジアスは応答する。

「どうしたキョウ？」

「中将、カリム理事のレアスキルで伝えたい事がありました」

「そうか。今はワシとオーリスしかおらんから普段の口調で構わん」

「分かったよ、レジーおじさん」

キョウはレジアスへの連絡を今まで何度も行っていたので、愛称とタメ口の許可が出ていた。友人の息子である事もその理由である。キョウは六課設立の裏の理由、予言の事、そして自身の夢とオロチに対しての情報をレジアスへ伝える。

「そうか、そんな事が……。ワシは今まで彼女の予言を信用していなかったが、それが本当なら問題だ。対応策を取ることを約束しよう」

レジアスはキョウからの情報を前向きに検討するようだ。その後、査察に関する話や近況の報告等が行われた。レジアスは身体を壊さないギリギリのラインで仕事を続けてる様だ。キョウは心配したがレジアスは譲らなかつた。だが、今夜久しぶりにソウジの下を訪ねると笑いながら言っていた。良い酒が手に入ったと上機嫌だ。その姿を見てキョウとオーリスは少し安心するのだった。

通信が終わるとレジアスはオーリスと共に査察関係の話を再開する。キョウ達により六課のデータは十分に揃っていた。二人は六課の異常性には気づいていたが、今日から得られた情報で目を瞑る事にした。

査察関連の話が終わるとレジアスは窓からクラナガンの街並みを眺

めつつ言う。

「ワシは近頃、最高評議会の考えが分からん。地上と海との連携を独自で行って正解だったかもしれんな。このミッドを誰もが安心して暮らせる場所にせねば……」

自分を再確認しているようだった。

キョウはレジアスへの通信が終わるとソウジの下にも連絡を入れた。彼は久しぶりにレジアスと晩酌する事を楽しみにしているようだった。

キョウはヤサカニやおロチの話を彼に伝える。それを聞きソウジは驚いていた。やはり何か心当たりがあるようだ。次に時間がとれた時に直接話したいとのことだった。

ソウジからは一体何が語られるのだろうか……。

EP59 世界を超える伝承（後書き）

今までたまにティアナが質問をする時のセリフをエステルっぽく書いた事あったんですが誰か気付いた人いますか？

読んでいただきありがとうございました。

Ep60 六課の風景（前書き）

久々の日常回です。執筆遅れて申し訳ないです。

ナカジマ親子が揃う時、お馴染みのあれが発動するです。

主人公とギンガ、もう結婚して良いと思うな……。

失礼しました。

では、本編の方をどうぞ。

「やだー！！ お兄ちゃんと一緒にが良い！！ お兄ちゃんと一緒に寝るー！！」

ヴィヴィオがキヨウの上着の裾を持ち叫んでいる。

キヨウが聖王教会から戻りレジラスへ連絡を行った後、ヴィヴィオは彼に付きつきりとなっていた。病院で彼に懐いたようでキヨウが食事をする際も後ろを付いていき、入浴の際も一緒という具合だった。其れを見てギンガは「カルガモの親子みたい」と思わず口に出してしまう程だった。周りに居た一同も同じ事を思っていたようで其れを聞き、皆噴き出してしまっていた。

キヨウは小さい子供の面倒を見るのは嫌いではなかったたので悪い気はしていなかったし、むしろかいがいしく世話を焼いているようであった。

入浴後、キヨウが寮へ戻ろうとするとヴィヴィオはそれについて行くこととした。男子寮なのであまり小さい子には適さないと感じた彼は、ヴィヴィオをなのは達に任せようとしたのだが、失敗し現在の様な事態になっているのだった。

「なあ、ヴィヴィオ。明日また朝になれば会えるんだから、我が儘言うなって」

「やだもん、お兄ちゃんと一緒に寝るもん！！」

キヨウは何度目かの説得を試みるがヴィヴィオは聞く耳を持たない。運が悪い事に場所は人通りの少ない通路だったので周りには誰も居なかった。キヨウはヴィヴィオを説得しながらギンガとアギトに念話を送っており、ある意味時間稼ぎをしていると言える。それから

二、三分して頼みの綱である二人が其処に到着する。

「ねえ、ヴィヴィオ。お姉ちゃん達と一緒に寝ましよう？ キョウ君の所は暗くて怖いわよ？ お姉ちゃん達の所はアギトお姉ちゃんも居るし寂しくないよ」

「そうだけ、ヴィヴィオ。私達と寝よう。明日になったらキョウと一緒に居られるから少しだけ我慢しよう？ なっ？」

「ホント？ お兄ちゃんにも会えるの？」

「ああ。明日の朝になったらみんなで一緒にご飯食べような」

三人は巧い事ヴィヴィオを説得する事に成功する。こうしてヴィヴィオが六課にやってきた一日目は終了した。

翌朝、キョウは何時も通り新人達の訓練の補助として活動をしている。そこにはギンガとアギトの姿はなかった。ヴィヴィオの世話をするため欠席となっているのだ。元々人間的に余裕があつたので、なのはたち隊長陣もそれを快く認めた。

キョウは珍しく訓練で直接指導を行っていた。普段はなのはやヴィータの指示下で準備の補助など雑用がメインだったが、今回はヴィータの監督の下スバルとエリオと模擬戦を行っているのだ。

一方のティアナとキャロは別の場所でのなはから訓練を受けている。

「喰らえええ！！！」

キョウが『闇払い』を二人に向け放つ。地を這う炎はゼストとの戦いや様々な任務、日ごろの鍛錬により以前と比べモノにならないスピードで二人の下へ放たれる。込められて威力も前以上の様で青い炎が力強く燃え盛っている。

「プロテクション！！　つく、重い！！　今だよ、エリオ！！」

スバルとエリオはキョウに対峙する際、一点にかたまっていた。其処に向けキョウは炎を放つたのだが、それはスバルのプロテクションで防がれる。何とか防いだというような感じだったが、スバルはエリオへ合図を送る。

「はい！！　兄さん、覚悟！！　はあああああ！！」

「甘い！！」

エリオは自慢のスピードを生かしてキョウへ接近し『ストラダー』を振るう。電気を纏ったエリオの攻撃がキョウに向け放たれるのだが、それは紙一重で避けられる。それから次々と槍を繰り出すのが、キョウはそれを巧みに捌きエリオへ反撃を加えていく。それでもエリオはキョウの攻撃にちゃんと反応をし反撃を試みている。以前の彼だと何もできずに叩き伏せられている筈なのだが、何とか食い下がっていた。

「ボデイがお留守だぜ。エリオ！！」

「ぐっ、っのっ！！」

キョウの『荒咬み』を柄の部分で受け止め、エリオは反撃する。袈

袈切りに槍を振るうがキヨウは一瞬でその間合いから抜けだし『独楽屠り』を放つ。

「こつちだぜ　！！」

「さつせるかあ！！　うおおおりゃあ！！」

キヨウがエリオに向け『独楽屠り』を放つが間にスバルが割り込みそれを防ぐ。それも『鬼焼き』の様に飛び上がりながら。彼女は組み手を行いながらも、自分に向けて注意を払っていたキヨウに隙が出来るのを待っていたようだ。

彼女の拳はキヨウの蹴りを相殺する。二人は着地をするとクロスレンジでの打ち合いを始める。

そこへエリオも合流し二対一での闘いが繰り広げられる。

「今度こそ合わせて、エリオ！！　喰らえ！！」

「はい、スバルさん！！　てやあ、らいじんけん雷靱拳！！」

暫らく打ち合いは続くが、スバルはキヨウに向け得意技の『リボルバーキャノン』を放つ。それはキヨウのバリアを破り、ガードをこじ開ける。身体が開き無防備になったキヨウへ向け、エリオは電気を纏わせた拳を叩き込む。それはキヨウの腹部へ吸い込まれていった。

「こつちい！！　ぐわあああ！！」

二人はキヨウへ有効打を与える事に成功するのだった。その後、ヴィータを交えての先ほどの動きに対する評価が行われた。二人の闘いはおおむね高評価を得たが、もう少し頭を使って隙を生み出す努

力をとの小言も与えられた。
訓練だがスバル達新人達は六課設立当初とは比べ物にならない位に
実力を伸ばしていた。

訓練終了後、ティアナとキヤロも合流し訓練での反省などを行いながら食堂へと向かう。なのはやヴィータは訓練後に少し仕事をすると言い、キョウに新人達を任せた。最近訓練でティアナはなのはに射撃を中心に戦おうと注意されると語り、一同の笑いを誘ったりしていた。本人も自覚があるようで射撃や砲撃の訓練も行っているのだが、近くに飛んでくる魔力弾を『ガンブレイド』や『ウィップ』でつい叩き落としてしまうとのことだった。
それから話題はエリオの模擬戦へと移る。

「エリオ、やるな。さっき使ったのってオリジナル魔法じゃなかったか？ 技の出も速くて、貰っちゃったよ」

「へえ〜。先輩、エリオってオリジナル魔法を編み出したんですか？」

ティアナが感心した様な目でエリオを見ながら尋ねる。

「あれだよね、雷靱拳ってやつ！！ キョウにいにクリーンヒットした」

「エリオ君、凄い！！ キョウさんに攻撃を当てられるようになったんだ」

キョウがエリオの魔法に言及すると新人達はそれに興味シンシンだった。エリオは少し恥ずかしそうにしながら答える。

「兄さんの使っていた『毒咬み』を参考にし、僕なりにアレンジしてみたんです。魔力を更に込めた『雷光拳』というのも考えているんですが、チャージに時間がかかるしカートリッジも使用するしで、まだ完成していません」

「その年でそれだけ出来るって凄いで。昔のスバルを思い出すよ」

「エリオ君カッコイイなあ。そうだキョウさん、スバルさんもって？」

キョウの発言にキャロが問う。キョウは幼い頃のスバルがクイントから習った『シューティングアーツ』に『草薙流』の動きを取り入れアレンジしていた話を行った。

呑み込みが早く、キョウが苦労して覚えた技もスバルは短期間で使いこなしていったとキョウは話す。話を聞いたキャロとエリオはスバルへ尊敬の目を送っていた。自分の事を褒められスバルは気恥ずかしそうな表情だった。其れを誤魔化すためか、話し終えたキョウにスバルは負ぶさる。

「うお？ スバル、いきなり何だよ」

「キョウにい、おんぶ！！ ちょっと疲れたんだもん」

「おいおい。いい加減、それやめろって。もう小さくないんだし」

スバルは幼き頃の様にキョウへ飛び付く。キョウは注意するのだがスバルは悪戯っ子の様な笑顔で答えた。

「にひひ、何が小さくないの？ 詳しく教えて欲しいなあ？」

スバルの発言でキャロとエリオは顔を赤らめる。キヨウも若干顔が赤くなっていたが、もう慣れているのか慌てた様子はなかった。ため息交じりに声を漏らす。

「この姉妹はどうしてこういうことを平気でやるんだ。嫁入り前の娘の姿を見ておっちゃん悲しむぜ」

「スバル、ギンガさんに見つかったら怒られるわよ？」

「良いじゃんちょっと位。キヨウに何も何だかんだで嬉しくない？ そうだ。ティア、変わってあげようか？」

「ちょ、ちょっと。わ、私は良いわよ」

ティアナは慌てた様子でそれを拒否する。キヨウはスバルを降ろしでこピンを一発喰らわして言う。

「いったあ……」

「なあに言っただよ。妹分に欲情する奴が居るかって。おっ、あれってギンガ達じゃん。おーい！！」

そうしているうちに一同は隊舎の近くへ到着していた。隊舎の前にはヴィヴィオの手を引きながら歩くギンガの姿があった。其れを見つけたキヨウはギンガ達の下へと駆けていく。

「あ、おはよう。キヨウ君。訓練任せちゃってごめんね。ほらヴィ

ヴィオ、キョウ君だよ。あいさつ、あいさつ」

「おはよう、ヴィヴィオ!!」

「お兄ちゃん、おはよ」

ギンガと手を繋いだヴィヴィオは若干眠たそうにキョウへ挨拶を返す。ヴィヴィオの服装は白いワンピースだった。キョウは其れに見覚えがあり、ギンガに尋ねる。どうやらクイントが作ったアギトの服のお下がりようだ。アギトの姿はなかったが、ギンガの話によるとはやての下で一日のスケジュール等の調整を行っているらしい。食堂にて合流するようだ。

三人は新人達と合流して食堂へ向かった。

その際、スバルの影響かヴィヴィオもキョウの事を「キョウ兄ちゃん」と呼ぶようになった。

「ほら、ヴィヴィオ。沢山食べて大きくなるんだよ!!」

「ふえっ?」

スバルはヴィヴィオに向けて山盛りのサラダを差し出していた。ヴィヴィオはそれを見て少し驚く。

何時もの様にスバルは大量の料理を机の上に置いている。ギンガとエリオも同様だった。

机の上では合流したアギトが自分用の小さい食器を取りだし食事を

している。時折、フリードに自分のフォークで料理を差し出し食べさせてあげたりしていた。

当のヴィヴィオはキヨウの隣に座っているギンガの膝の上に乗っていた。

「スバル、ヴィヴィオはまだ小さいんだから私達みたいに食べられないわよ。はい、ヴィヴィオ。あーん」

ギンガはヴィヴィオ用に、小皿に次ぎ分けていた料理を彼女の口の前に差し出す。

「あーん」

ヴィヴィオはそれを笑顔で口に運んだ。

「なんかギンねえって母さんに似てきたよね？」

「ホントだな。ヴィヴィオといると親子みたいだぜ」

「ちょっと、キヨウ君、スバル。私ってそんなに老けて見える？」

キヨウ達の言葉にギンガは怖い笑顔で反応する。膝に座るヴィヴィオもビクツと体を硬直させ反応してしまった。まるで小さい子どもがホラー映画を見た時の様に。

「ギンガ、ヴィヴィオが怖がってるよ。其れに良いじゃん、クイントさんに似てるんなら良いお嫁さんになれるぜ。あと、老けてるって言ったのが伝わったらどうなるか分かんねえよ」

アギトがすかさずフォローを入れる。だが、ギンガの発言に何かを

思い出したのか少し震えていた。キヨウとナカジマ姉妹も一度固まる。何かトラウマでもあるかのようだ。再起動したスバルとキヨウはアギトに追従しギンガをおだてる。其れは幼い時からよくある光景だった。

「ギンガみたいな綺麗で優しい子がお嫁さんだったら、きっと幸せだろうなあ」

「ほ、本当？ キヨウ君？ 私がお嫁さんだったら嬉しい？」

「本当、本当！！ ギンガと結婚できたら毎日が楽しいと思っぜ」

キヨウの言葉にギンガは頬を染めつつ上目遣いで聞いてくる。彼女は手のひらを広げて指を交差させていた。キヨウはそんなギンガの姿に少し慌てながらも強く肯定する。何とか彼らはギンガの機嫌を直すことに成功するが決定打はやはりキヨウだったようだ。

「ギンガお姉ちゃんがキヨウ兄ちゃんのお嫁さん？」

「そっだよ、だから私の未来のお兄ちゃんでもあるんだよ」

「「ちょっと、スバル！！」」

ヴィヴィオが無邪気に首をかしげながら言葉をもらし、スバルが其れに答える。キヨウとギンガはそれで顔を一気に赤らめる。その後、その言葉に意識してしまったのか互いに見つめあっていた。二人は甘い空気を醸し出す。

「はあ。兄さん、ギンガさん、早くご飯を食べましょうよ」

食事の手を止めていた二人にエリオが呆れつつ声をかける。

「ごめん、エリオ（君）……」

「グツジョブ、エリオ……」

「お前が原因だろ、スバル？」

スバルはそんなエリオに耳打ちをする。アギトは思わずスバルにツッコみを入れる。ティアナは何も言わず、エリオに向けてニヒルな笑顔で親指を立てていた。

キャラのみ少し残念そうだった。恋愛に興味があるお年頃なのだろうか。

その後、彼らは賑やかに食事を続けていったのだった。

食事の後、彼らは日常の業務へと移る。

ギンガは捜査官資格を持っているのでフェイトと共にライトニングの二人と先日の事件の現場検証に向かうとのことだった。途中で別れてそのまま一度108部隊に戻り、ゲンヤに直接報告等も行う予定とのことだ。

ティアナは放送ではやての下に呼ばれる。はやてが本局へ向かうようで執務官になった時の後学の為にと同行するよう指示を受けた。キョウは数日後に控えた査察用に六課とは別に資料を作成するよう一日デスクでの仕事を行うようだ。

その日は副隊長達はオフシフトで、六課の前線メンバーはなのはとスバルのみ通常の業務を行うとのことだった。

アギトはその日は特に急ぐ仕事もないようでザフィーラと共にヴィヴィオのガードにつく。

へりで事件現場へ向かいながらフェイト達は予言の内容について話をしていた。

予言の内容の詳しい事を知っているのは、その場にいたフェイトとキヨウより情報が齎されたギンガだけだった。一同は質量兵器が使われる事を危惧していた。地上本部は魔法に対する防御では万全だが、質量兵器に対してはそれほどでもないようなのだ。

フェイトは管理局の設立の歴史をディスプレイを用いながらエリオとキヤロに語る。

彼女は質量兵器の保有は認められないが、それを悪と断定する事は早計だとも語っていた。以前キヨウと質量兵器について口論になりそうになっていたが、その後も二人で意見の交換をしていたようなのだ。管理局設立当初からの理念は否定できないが力に善悪はないとの考えを持つようになったと語った。

「力はそれを振るう人次第で善にも悪にもなるの。二人にはその事を忘れて欲しくないな。自分の持つ力の意味をしっかりと考えてこれから行動して行ってね」

「はい、フェイトさん」

フェイトの言葉にエリオとキヤロは返事を揃える。ギンガもその言

葉を噛みしめるのだった。

「でも指先一つでダウンって、この前見た映画みたいですね」

ミッドの歴史の中で質量兵器の説明を受けたエリオはポロっと言葉をこぼす。

「あははは。エリオ君、それちょっと違うと思うな？」

エリオのとぼけた発言にギンガは思わず乾いた笑い声を出し突っ込みを入れる。エリオは何かマズイ事を言ったのかよく分かっていない様子だった。

「映画？ キャロ、どんな映画を見たの？」

「えっ、えっとお……」

フエイトがキャロに質問し情報を聞き出す。ギンガは少しマズイと言った表情をしていた。映画の内容を聞き、それが余り子供むけではない事を知ったフエイトはギンガに少しばかり説教をするのだった。

「良い？ ギンガ。あんまり暴力的な物をこの子たちに見せないでね。情操教育に良くないから」

「はい、申し訳ありません。フエイト執務官……」

「隊舎に戻ったらキョウウ君にも一言、言わなくっちゃ」

キョウウは知らない所で説教される事が確定するのだった。

一方、本局へ赴いたはやてとティアナはカリムの義弟であり査察官のヴェロツサ・アコースとクロノ・ハラウン提督と会談を行うのだった。

話題はカリムの予言にも及んだ。クロノはレジアス・ゲイズ中將が以前と違い、本局とも歩み寄っているので当初想定していた物より事態は好転しそうだと言っていた。

はやてもキヨウからもたらされた情報で中將が前向きに検討してくれるとのことだと二人に伝える。

最悪の状況は回避されそうだが、気を抜かずに備えようと一同は決意する。

隊舎ではヴィヴィオがアギトと共にキョウウの部屋にいた。其処にはザフィーラもあり、寮母のアイナがベッドメイクを行っている。キョウウの部屋は物が少なく、なのは達の部屋より半分程度の広さだった。壁にはレザーのライダースジャケットがかけられ、本棚と机、三人掛け程のソファ―位しか目立った物はなかった。ベッドの脇には数本の釣り竿とフルフェイスのヘルメットが置かれている。ミッドではヘルメット着用は自由なのだが、彼は必ず着用するという謎のこだわりを持っている。

ベッドのそばの壁には大きなコルクボードが張られ、家族写真やナカジマ家と一緒に写った写真、訓練校の同期達と写った写真が飾られていた。

幼い頃のピクニックの時の物や釣った魚を掲げている物、新品のバイクにまたがる者等様々な写真があった。

それと初代『フランメファウスト』が飾られている。シャーリーにより修復され手元に戻ってきているのだ。

想像はつくと思うが、コルクボードの中心に飾られていたのはギンガの写真だった……。

白いブラウスに桃色のカーディガンを纏い花が咲いたような笑顔の写真であった。

ヴィヴィオはソファの座り洗濯物を畳む手伝いをしていた。その隣ではザフィーラが彼女の事を見守っている。その姿はよくしつけられた大型犬その物だった。

アギトは机の上で洋服の畳み方のお手本をヴィヴィオに見せている。ソウジとキョウウの衣食の世話をしていただけにアギトの家事スキル

は専業主婦並みに高いのだ。アイナも感心するほどの腕前だった。

「できた〜」

「あら上手ね、ありがとう。やっぱり先生が良いのかしら？」

「そんな事ないですって、アイナさん。よしヴィヴィオ、今度はこつちをやるつな」

「うん、アギトお姉ちゃん」

ヴィヴィオは六課での生活にうまく馴染めているようだった。

同じ頃、オフィスではなのはとキョウ、そしてスバルがヴィヴィオの今後の身の振り方について話をしていた。三人とも仕事にひと段落が付いているようだ。

「レリック関連の事件が解決するまで、ヴィヴィオは六課で生活する事になるんですか？」

キョウの問いになのはが複雑な表情で答える。

「うん。ナカジマ三佐の所が里親の第一候補だけど、今は何が起るか分からないし迷惑をかけられないから……」

「迷惑じゃないですよ、なのはさん！！ 私、妹が出来るかも知れなくて凄く嬉しいんです。それに父も母も迷惑だなんて絶対に思いませんよー！！」

なのはの言葉をスバルは否定する。彼女はヴィヴィオの事を歓迎しているのだ。スバルの姿を見てなのはは嬉しく思い表情が明るくなる。それから三人は少しばかり自分達の家族関係について語った。スバルとキヨウは幼馴染という事もありなのはに自分達の事を話す。なのはは地球に残す両親や兄夫婦、姉の事について語った。キヨウとスバルもなのはの両親と面識があるのでとても興味を持ちその話を聞いていた。

「それで、うちのお兄ちゃんの前会った親友のすずかちゃんのお姉さんの忍さんと結婚しているんだ」

「へえ、親友と姉妹関係にあるって何か良いですよ。そう言えば、なのはさんって結構私と家族関係似ていますよね？」

「本当だね、末っ子だし。私はお兄ちゃんが親友のお姉ちゃんと結婚してるけど、スバルは自分のお姉ちゃんが親友のお兄ちゃんと付き合ってるんだもんね。何だか前以上に親近感がわくな」

「なのはさんとお揃いみたいで、何だか嬉しいです」

なのはとスバルはキヨウを見ながら会話を楽しむ。

「な、何ですか？ 二人して」

キヨウは少し居辛そうだった。

「アギちゃんも交えてこういってお話をしたら面白そうですね？」

「そうだね。あとフェイトちゃんも入れて『六課妹の会』とか作っ

たら面白いかもしれないね？」

余談ではあるが、なのはとスバルが冗談で言っていた事が後日実現される。『六課妹の会』は他にヴィータとティアナ、キャラを加えて実際に結成されるのだった。プチ会議が主な活動で、自由時間には彼女達がお菓子を持ち寄り、恋バナなどに花を咲かせる姿が食堂等でよく見られるようになっていく。議題で最も多いのは『バカッブルについて』なのだが……。

休憩が終了すると三人は仕事を終わらせ、ヴィヴィオの下へ向かう。キョウも一日掛かると思われていた仕事をすさまじいペースで終わらせる。

その時ヴィヴィオはギンガとアギトの部屋でアギトと共に絵かきをしていた。キョウは女子寮へ行く事を少しためらったが、なのは達の部屋に行った事があるのに何を今更と二人に連れていかれる。ギンガ達の部屋はなのは達の部屋ほどではないが中々の広さだった。しっかり者の二人という事で部屋も整頓され掃除も行きとどいていた。三人掛けのソファが机を囲むように二台置かれ、本棚とデスクがある。

デスクには写真立てが二つ置かれていて、ナカジマ家の家族写真と、キョウとアギトと三人で写った物が飾られていた。

ベッドはアギトも利用するのでシングルサイズよりもわずかに大きい物が置かれていた。其処には青いリボンを首に巻いたティンベアとそれより小さい、赤いリボンを巻いたティンベアが置かれていた。二つとも大事に使われているようで余り痛んでいなかった。

キョウは二つのぬいぐるみを見て懐かしく感じていた。

その場で、ヴィヴィオに対して事件解決後にナカジマ家に引き取ら

れる事が説明された。

昨日のうちにギンガがゲンヤとクイントに確認を取っていたのだ。

二人は快くそれを引き受ける。

クイントは新しい娘にどんな服を作ろうかと楽しみにしているようだ。ギンガは語っていた。

お下がりだけじゃ可哀想だとギンガにヴィヴィオのデータを機密に引っかからない程度送ってもらっており、恐らくは新作の衣装作りに取り掛かっているのではと娘達やキョウ達に思われている。

里親の事を聞いた時、ヴィヴィオは少し不安な表情をしていた。

だが、ギンガとスバルが姉になる事や、キョウとアギトの実家が隣にあるという事を聞き寂しくないという事が分かると一転して笑顔を見せるようになった。

「保護責任者は六課にいる間は私が担当するから。そうだ、ヴィヴィオ。スバルをお姉ちゃんって呼んであげたら？」

なのはの言葉にヴィヴィオは少し考えた後と従う事にする。スバルの下へ近付き彼女の顔を見上げながら言う。

「スバルお姉ちゃん」

「うわあ、可愛い！！ 我慢できない！！」

スバルは思わずヴィヴィオに抱きついてしまう。その状態で今まで未っ子で、「お姉ちゃん」と呼ばれるの夢だったとスバルは語る。嬉しくて仕方がない様子でヴィヴィオを抱き上げていた。ヴィヴィオもスバルの気持ちが伝わったのか嬉しそうな表情だった。

「ヴィヴィオ、キョウにいもそのうち義理のお兄ちゃんになるから寂しくないからね？」

「こら、スバル。小さい子にはまだ早いって!!」

「スバルお姉ちゃん、ギンガお姉ちゃん、アギトお姉ちゃん、キョウウにいちゃん。ヴィヴィオ、兄弟がいつぱいで嬉しい!!」

ヴィヴィオの笑顔を見て一同は温かい気持ちになっていくのだった。

事件現場に到着したライトニングの三人とギンガは調査を進めていった。その後、ギンガは調査結果を108部隊に届けるために三人と別れる。

それから108部隊の部隊長室ではゲンヤとマリエル・アテンザを交えて調査結果の解析が行われた。先日の事件は戦闘機人が関わっているようだ。ギンガは分かっていた事なのだがやはりショックだったようで表情が少し暗くなっていた。

「これもゼスト隊の事件に関係があるんだよな。こら、ギンガ!! 何暗くなつてやがる。辛いのはお前だけじゃないんだぜ。キョウウなんかホテル・アグスタでもゼストさんと戦ったらしいじゃねえか。一人で抱え込もうとすんな、俺や周りの人間を頼る事は恥じゃねえ

って」

「そうだね、父さん。ごめん、ちょっと弱気になってた。私の周りには力を貸してくれる沢山の仲間が居るんだもの。頑張らなきゃ！
！ゼストさん達を止めて地上もみんなの力で守り抜いて見せる！
！」

ゲンヤの言葉でギンガは元気を取り戻す。調査結果の解析がある程度終わると六課へマリーも出向する事になると説明があった。情報の共有の為にゲンヤも六課に顔を出すとのことだ。

「最近キョウ君やスバル、アギトちゃんとも会ってなかったし元気にしてるか気になってたから良い機会だわ」

マリーはキョウ達と会う事を楽しみにしているようだった。それからゲンヤはヴィヴィオの事についても言及した。既にギンガから連絡も受けていたし受け入れも了解している。クイントも受け入れに賛成しており問題は無いようだった。ギンガが連絡をした際、ゲンヤもクイントも娘が増える事を喜んでいた。ゲンヤはヴィヴィオに早く会いたいと言葉を漏らす。

ゲンヤも共に六課へ向かう事となるから、その時に対面も済ませれば良いとギンガは言う。

ヴィヴィオに対してもゲンヤの親バカが発動する可能性は高そうだった。

はやてとティアナが六課に戻ったのは八時頃だった。それより先にギンガ達は六課に到着しており食堂でキヨウとアギトとナカジマ家三人、それにヴィヴィオを加えて食事を取った。エリオとキャラも近くでなのはとフェイトと食事を取っている。彼らに気を利かせたようだ。

キヨウを始め、アギトもナカジマ姉妹もゲンヤと一緒に食事を取るのには久しぶりだったのでとても嬉しそうだった。

ヴィヴィオも初めて会うゲンヤにうまく打ち解けられそうだった。ただ、その場でナカジマ家名物の親子の妄想劇場が繰り広げられてしまった。

ゲンヤがキヨウとギンガが結婚した後の事を妄想しだし、ギンガもそれに引きずられるように妄想を口からこぼし始める。

「むふふふ、じいちゃんだぞ……」

「だめだよ、キヨウ君。みんなが見てるって。でもキヨウ君がどうしてもって言うなら……」

ゲンヤはだらしなくニヤニヤしっぱなしの顔で、ギンガは赤く染まった頬に両手を添えて「いやん、いやん」と声を出しつつ首を振り妄想に浸っていた。

「ねえ、スバルお姉ちゃん？ 二人ともどうかしたの？」

「ほら、ヴィヴィオ。お姉ちゃんと一緒にちょっと目を閉じて耳をふさごうか？ キヨウにい、アギちゃんお願い」

「はあ、了解!!」

アーデルハイド兄妹はゲンヤとギンガを揺すぶり正気に戻す。そん

な彼らの様子を初めて見るなのは達は苦笑いを浮かべていた。

その後、ゲンヤははやてと部隊長室で会談を行って機動六課を後にするのだった。

Ep60 六課の風景（後書き）

鳥人戦隊ジェットマン。人間サイズで五色のジェットガルーダを想像してしまいました。

好きな戦隊はデカレンジャーです。ジャスミン超可愛い。オペー
マもカッコよすぎる。

よく耳コピしてました。

最近だとシンケンジャーかな。五歳の頃から現在まで剣道をやっている幼馴染が放送当時、これで競技人口が増えるとか言っていました。

フェイトさんは少々頭が固いキャラになってしまっています。ファンの方申し訳ありません。

エリオ君とキョウ達の小学校時代の恩師は何ら関係がありません。ただ、『紫電一閃』ではない技を身に着けさせようかと思いましたが、使いました。

読んでいただきありがとうございました。

Ep61 お出でませ、機動六課（前書き）

査察ってアニメでは描かれてないですよ、確か。

原作と時系列にずれがありますが、其処は大目に見てください。

何時かジョン・フーンとザフィーラの声優ネタをやってみたいです。
今回は色々詰め込み過ぎたと思います。

時刻は午前六時。機動六課の隊舎のロビーにキヨウの姿はあった。彼は何時もと同じように、フォワードメンバーの早朝訓練の手伝いの為、行動を開始している。幼い頃は朝が弱かった彼も、アギトに頼らず自分で起きるようになっていた。キヨウは黒いＴシャツとグレーのカーゴパンツという動きやすい服装で柔軟を行っていた。ちょうどその時、女子寮の方からは青紫の髪をした女性と彼女の肩に乗る赤い髪の女の子が此方へ向かってくるのが見えた。アギトとギンガである。

だが、二人以外の姿も其処にはあった。ギンガの背中から金髪が見え隠れしている。その正体はヴィヴィオであった。彼女はギンガに負ぶわれついて来たようなのだ。

ヴィヴィオはアギトのお下がりと思われる水色のパーカーと赤いハーフパンツを着用していた。まだ眠そうな表情で、ギンガの肩に頭を預けていた。

アギトは制服ではなくクイントお手製の黒のホットパンツと赤いキヤミソールを着用していた。彼女は普段着もそれに似たデザインの物を好んで着ている。身体の動きを阻害しないデザインが好きなのだろう。

ギンガはキヨウと色違いの白いＴシャツに同じデザインのカーゴパンツという出で立ちだった。

彼女の着ている物は部隊からの支給品であり、新人達も似たような物を着て訓練を行うのである。

「おはよう、キヨウー!!」

「おう!! おはよう、アギト。ってどうしてヴィヴィオが?」

アギトがギンガの肩からキヨウの肩に飛び移りながら挨拶をする。
キヨウはアギトに何故ヴィヴィオが付いて来ているのか問う。だが、
アギトが答えるより先にギンガが彼に声を掛ける。

「おはようキヨウ君！ ほらヴィヴィオ、お兄ちゃんだよ。ご挨拶は？」

「うーん？ あ、おはよう。キヨウ兄ちゃん」

ヴィヴィオは寝ぼけている様子だった。ギンガの背中から降り、彼女の声に意識を覚醒させキヨウへ挨拶をする。

「おはよう、ヴィヴィオ。ギンガもおはよう。どうしたんだ？ヴィヴィオ。まだ眠ってて良かったのに」

キヨウは屈んでヴィヴィオの目線に合わせて挨拶をする。ヴィヴィオの口元には少しよだれが垂れていたので、キヨウはスポーツタオルを取り出しそれを拭いた。

「朝抜け出す時に見つかっちゃって……」

ギンガが申し訳なさそうな表情で答えた。

昨日ヴィヴィオが居たので早朝訓練を欠席したのだが、今日はヴィヴィオが目覚める前にベッドから抜け出し訓練に向かおうとしていたそうだった。昨晚のうちにザフィーラにヴィヴィオの世話を頼んでいたのだが、ヴィヴィオは彼女のパジャマを握ったまま寝ていて、ベッドから出ようとした際に起きたというのだ。

一応なのは達にも連絡をしており同行させてもよいと許可をもらっているそうだった。シュミレーターの外で見学をさせるとのことらしい。ザフィーラは其処で合流してもらおう事になっているとギンガは言う。

何時もの三人にヴィヴィオを加え一同は柔軟を行う。ヴィヴィオは小さい身体で一生けん命キヨウ達の動きを真似していた。その姿が可愛らしく、三人は自然と笑顔になっていた。

柔軟の後、普段ならなのは達の指示を受け三人で訓練の準備を行うのだが、今回はキヨウとギンガの二人で行おうと柔軟しながら決めるのだった。

柔軟を終え、キヨウとギンガが準備のため移動しようとした時、ロビーに一人の女性が現れた。

「おはようございます、マリーさん！！ どうしたんです？ こんな早くに」

いち早く気づいたキヨウが真つ先に声を掛ける。その女性はマリエル・アテンザだった。朝早くだというのに白衣に身を包んでおり眠そうな表情ではなかった。彼女はキヨウ達の下へとやって来る。

「三人とも早いよね？ おはよう」

アギトとギンガもマリーに挨拶をする。マリーは六課の新人達の訓練を見学しようと思っっているとのことだった。訓練後に新人達との顔合わせを行うとのことだ。

「ほら、ヴィヴィオ。マリーさんにちゃんと挨拶しような？」

ヴィヴィオは初対面の彼女を警戒しているのか、キヨウの足にしがみつきじつと彼女の顔を見つめていた。キヨウはヴィヴィオに挨拶をするよう促す。

「えっと、あなたはヴィヴィオちゃんて良かったかしら？」

マリーはヴィヴィオの近くでしゃがみ、声を掛ける。ヴィヴィオはマリーとキョウの顔を交互に見た後、口を開く。

「マリーさん、おはよう」

「おはよう、ヴィヴィオちゃん。早起き出来て、ちゃんと挨拶も出来て偉いわね」

マリーはヴィヴィオにほほ笑む。ヴィヴィオは褒められて嬉しかったのか、キョウのスポンを掴んだままもじもじしていた。キョウはそんなヴィヴィオの頭を優しく撫でる。ヴィヴィオは少しくすぐったそうだった。

マリーは訓練が始まるまでは時間があるので、アギトと一緒にヴィヴィオの相手をしてくれるとのことだった。キョウとギンガは二人に任せ、訓練の準備に取り掛かるのだった。

「ふっ、てえいや!!」

「ふん!! たあああ!!」

シミュレーターの中に打撃音が響く。キョウとギンガが組み手を行っているのだ。

キョウはギンガに下段突きを放つが、彼女はそれを肘で防ぐ。ギン

ガは反撃に右足で前蹴りを放つのが今度はキヨウがそれに反応しバツクステップで距離をとる。

彼らは準備が終わるとフォワードメンバーが来るまで毎朝自主トレを行っている。それとは別に訓練の時間も取っているのだが、二人は朝早くから身体を動かすことが習慣になっており、なのはたちにお願いして使わせてもらっているのだ。

「フレイムシューター!!」

キヨウがギンガへ向け魔法を放つ。キヨウから放たれる火炎弾をギンガはシールドで受け流すと一気に距離を詰め、チャージしていた魔法をキヨウへ向け放つ。

「貰った!! リボルバーキャノン!!」

ギンガの『リボルバーキャノン』が至近距離からキヨウへ向け放たれる。とっさにプロテクションで防御をするがギンガの攻撃はそれを打ち破りキヨウへと叩き込まれる。

「ぐおっ!!」

キヨウは10mほど吹き飛ばされるが、地面に転がり技の威力を分散させて何とか着地を取る。

「それまで!!」

アギトの声で組み手は終了するのだった。

「私の勝ちだ!! どうだ、キヨウ君」

ギンガは左拳を天に掲げる。キヨウはギンガの下へ歩み寄る。怪我等は無いようだった。

「痛ててて、マネすんなよ。これで240勝243敗56分けか。つちい、最近は負け越してるな」

それから二人はアギト達の待つシミュレーターの外へ向かう。そこでヴィヴィオは二人の組み手を見てはしゃいでいた。

「うわあ、ギンガお姉ちゃん格好良かったよ!!!」

「そう?ありがとう、ヴィヴィオ」

ギンガは笑顔でヴィヴィオに答える。ヴィヴィオは目をキラキラさせていた。

「カッコいい所見せらんかったな」

「キヨウ兄ちゃんも格好良かったよ!!! 火がビューンって凄かった」

ヴィヴィオの言葉にキヨウも笑顔になる。それからキヨウとギンガは互いの反省点を指摘し合うのだった。

「キヨウ君は相変わらず貧弱だからもつと足を使おうよ。あと、とび蹴りからの繋ぎは鬼焼きじゃなくて隼車の方が良かったかも」

「そうか、やっぱり。っていうか俺が貧弱なんじゃなくて、お前が遅しいだ「何か?」いや、何でもない。接近戦での立ち回りで避けられない場合を想定してたんだよ。お前もストームトゥースを出す

時に踏み込みが甘い所があったぜ。下半身のタメをもつと意識した方が良いかもな」

「此処でも二人は相変わらずの様ね？」

「マリーさん、小さい頃からずっとこんなだよ」

そんな二人のやり取りを見たマリーの問いにアギトが答えるのだった。

その後に行われた訓練はなのはが中心となりフォワード陣全員への指導がなされた。その後、ヴィータがティアナへ近接戦闘の指導を行っていく。

キョウ達三人はヴィヴィオとマリーと共にその様子をシュミレーターの外から眺めていた。其処にはシャーリーとザフィーラも合流していた。

「スバルもあれだけ動けるようになるって凄いいじゃない」

「はい、何時も真剣に訓練を受けていますから。私達もつかつかしてられませんよ」

マリーの問いにギンガは誇らしく答える。妹の成長を第三者から褒

められたのが嬉しいようだ。

「それに、ギンガちゃん達に追いつきたいってティアナと一緒に隊長達から追加訓練も受けていますもんね」

シャーリーも付け加える。後輩の頑張りを彼女もしっかりと見ていたのだ。彼女は続ける。

「ティアナもデバイスを使いこなせていますし、エリオもキャロもかなり力をつけてきています」

「キャロの魔法制御は目を見張るものがあるし、昨日なんかエリオは新魔法を編み出したらしいね？ キョウ君？」

「ああ、ギンガ。アイツもスバル並みに才能があるよ」

キョウは昨日エリオの拳が当たった場所を擦りながら答えた。エリオの成長を嬉しく思うのかその顔には笑顔が浮かんでいた。

「そうだ、キョウ君！！ デバイスの改造案があるんだけど、いい加減カートリッジを搭載してみない？」

「そうよね、開発当初は強度の問題もあったけど今の技術ならその問題も克服できるはずよ。あとパイルバンカーっていう兵装があったね……」

シャーリーの言葉にマリーも便乗する。二人は目を輝かせながらキョウへ詰め寄る。『フランメファウスト？』は魔法の情報処理と耐久性を追求したシンプルなデバイスであり、二人はメンテナンスをする際も弄り甲斐が無いとよくこぼしていたのだ。

「えっ？ こいつをですか？」

キヨウは待機状態のブレスレットを見て答える。

「強度の低下は25%に止める事が出来そうなんだよ。それにキヨウ君の最新データから計算したんだけど、カートリッジを組み込むことで現在の70%以上のパワーアップが見込めそうなんだ！！
ねえ、改造しよう？」

シャーリーはキヨウのデバイスへ機能を追加したくてたまらないようだ。彼の手を握り、頼み込む。
だがキヨウはそれを拒否した。

「ありがとう、シャーリー。でもそのデータだと少なくとも俺は今よりも70%は強くなる余地があるんだろ？ なら、自分で力を引き出せるように修行するよ。二人の申し出はありがたいんだけど、これは俺自身でやらなくちゃいけないって思うんだ。一人の武道家としてね」

「でも……」

「その位にしときなさい、シャーリー。キヨウ君には武道家としての矜持があるんだから。キヨウ君、デバイスの強化は何時でも引き受けるから遠慮なく言ってね？」

「はい、すみませんマリーさん。御好意を無駄にしたようにして。シャーリーもせっかくの申し出だけど、ごめんな」

「良いよ。ただ、次のメンテナンスの時に新しいソフトは更新する

からね？処理速度は現行のデバイスの中じゃ最高にしてみせるから」

その後、新人達は訓練を終えてなのはと共にキョウ達の居るシユミレーターの入口へと移動する。そこでマリーの紹介が行われた。

昨日のうちにエリオとキャロは彼女と食堂で顔を合わせていたので初対面はティアナだけだった。その際マリーに扱いが難しいであるう『クロスミラージユ+』を使いこなしている事を褒められ、ティアナは嬉しそうにしていた。

「ギンガお姉ちゃん、お腹すいた〜」

「ごめんね、ヴィヴィオ。じゃあ、ご飯を食べに行きましょうか？」

ギンガはヴィヴィオに答えつつ、隊長達へと念話で確認をとる。それならば、此处で切り上げて食堂へ行こうとなのはが切り出す。そこでギンガはヴィヴィオを抱き上げ移動しようとした。その姿を見てマリーは呟く。

「ギンガはお姉ちゃんっていうより、お母さんみたいね？」

「もう、マリーさんまでそんな事言うんですか？」

一生懸命否定するギンガの姿と、彼女の胸に顔をうずめるヴィヴィオを他の面々は微笑ましく思った。

それから一同は食堂へ移動し食事をとる。その日は特に事件も無く平穩無事に過ぎていった。

その後、数日間も事件は発生せず機動六課では訓練や業務等が滞りなく行われた。その日々でヴィヴィオもある程度人見知りをしなく

なるようになっていった。

数日が経ち、六課へ地上本部からの査察団が派遣される。その日、キヨウはフェイトと共に朝食後に部長室へと通される。二人に査察団への案内を頼みたいとのことだった。フェイトが選ばれたのは執務官という事で上位者との対応に慣れている事とはやてが信頼している人物だからだという。

キヨウが選ばれたのは本来はギンガに頼もうと思っていたが、その日彼女は108部隊へ合同捜査の調整に向かっているため不在だからだとはやてが答える。それにキヨウはギンガと同じく父が管理局と関わりがあるので査察団からの心象も良いのではという考えがあったとのことだ。

その後、二人はロビーで査察団を待つ。

「大丈夫かな？ 此処でシフトの変更とかがあったら六課には大打撃だけど……」

「大丈夫だと思えますよ、フェイトさん。オーリス二佐の話では、陣中見舞いに近いから普段通りにしてくれても構わないそうですし。六課とは別に俺達でも資料を送っていますから特に突っ込まれる事も無いと思います」

それから10分ほど経ち査察団が到着する。五名程の人員だったが、其処には予想していない人物の姿があった。

「本日はレジアス中将の指示で査察へ参りました、オーリス・ゲイズ二佐です」

「お、オーリスさん？ あ、いえ失礼しました。本日みなさんの案内をさせていただきまます、陸士108部隊所属機動六課出向部隊キヨウ・アーデルハイド陸曹長であります」

キヨウは予想外の人物の登場に少しテンパるが、気を取り直し挨拶を行う。フェイトは場慣れしているのか、到着前と違い普段通りに挨拶を行う。はやてが彼女を選んだのは正解だったようだ。

「フェイト・T・ハラオウン執務官です。本日は、ようこそ機動六課へ」

「ハラオウン執務官、アーデルハイド曹長、よろしくお願ひしますね？」

オーリスはキヨウとフェイトにほほ笑む。それからキヨウ達は残りのメンバーと挨拶を行い、六課の施設を案内していく。

隊舎やオフィスに始まり訓練施設等、多くの場所を一同は廻る。オフィスではスターズの二人がライトニングの二人に仕事の面でアドバイスを送っている姿などが見られた。アギトもリイン用の机と同じ物を用意され、キヨウのデスクの隣で仕事を行っている姿があった。

そこでオーリスはスバルとティアナに声を掛ける。

「あなたは、ナカジマ三佐のお嬢さんよね？ それと、あなたは執務官を志望してるっていう」

「はい、ティアナ・ランスター二等陸士であります」

「同じくスバル・ナカジマ二等陸士であります」

「初めまして、オーリス・ゲイズ二佐です。二人とも同僚の手助け偉いわね。その調子で仕事を頑張りなさい。あなた達の様な人材がこれからの管理局を背負っていくのだから、期待しているわよ」

「はい、ありがとうございます」

二人は声を揃え敬礼する。その後二人背筋を伸ばして去っていく。オーリスの後姿を眺め続けるのだった。

オーリスが去った後、オフィスでスバルとティアナは彼女について話をした。

「うわあ、緊張した。何かキャリアウーマンって感じの人だったね？」

「そうね。でも優しそうな人だったじゃない。仕事出来る自立した女性って感じがして、私憧れちゃうな」

「ティアならきつとそのままでもオーリス二佐みたいになれるよ」

「あつ、ありがとう。スバル」

ティアナはスバルにいきなり褒められた事で顔を赤くし、其れがばれないようにそっぽを向きつつ謝辞を述べる。そんな彼女を見てスバルだけでなくエリオやキャロも笑顔になるのだった。

六課からの資料とキヨウ達から提出された資料を見ながら査察団は六課を見て廻った。特に問題がある様には見られず、予定通りに査察は進んでいった。

昼食の時間が近いという事で一同が食堂へ向かうと其処にはヴィヴィオの姿があった。ヴィヴィオはザフィーラと共にソファアに腰掛けていたのだが、キヨウの姿を見て駆け寄り、足に抱きつく。

「おっ、おい？ ヴィヴィオ」

「キヨウ君、その子は？ 髪の色も違うし……。あなたギンガちゃん居るのに浮気を？」

オーリスが真剣な目でキヨウを見ながら質問をする。査察は和やかな雰囲気ですんでいたので本日初めて見せる表情だった。

「違いますよ！！」

キヨウは慌てて否定する。だが彼が先を話すより早くオーリスが言葉続ける。

「ハラオウン執務官と仲が良さげだったから、もしかして？ 髪の色も説明が付くし」

「えっ？ 私？ 違いますよ、オーリス二佐。その子はこの間保護された子です」

自分を見つめながら真顔で言葉を放つオーリスにフェイトも慌てて否定する。オーリスは表情を崩し笑顔で言った。

「ふふふ、ごめんなさい。冗談ですよ。その子の事についてアーデルハイド曹長達からの資料で言及されていましたし。ナカジマ三佐の養女になるんですよね？アーデルハイド曹長とナカジマ曹長が熱々なのはよく知っていますよ」

「オーリス二佐、たちの悪い冗談はやめてくださいよ」

キョウはため息交じりに言う。オーリスはお堅いイメージを持たれる事が多いのだが、割と冗談を言うのが好きで、キョウ達が地上本部に訪ねた際に時間がある時はよく雑談をするのだ。その時もキョウとギンガの仲を「何時結婚するの？」等と言ってからかったりしている。

「もう昼食だから、真面目モードはおしまい。キョウ君の普段通りにして構わないわよ」

「分かったよ、オーリスさん。ほら、ヴィヴィオ。お姉さんや他のお兄さん達にごあいさつしような？」

「ちょっと、アーデルハイド曹長！！オーリス二佐に失礼だよ」

オーリスの変化にフェイトだけはついていけず驚いているのだった。彼女はキョウの言葉遣いを注意する。

「良いんですよ、ハラウン執務官。彼の父上と私の父は友人同士でして、個人的な付き合いもありますから。ヴィヴィオちゃん、私はオーリス・ゲイズっていうの。よろしくね？」

「こんにちは、オーリスさん。私はヴィヴィオです」

「ちゃんと挨拶が出来て偉いね。お姉さん達と一緒にご飯を食べましょうか？」

「うん！！」

ヴィヴィオは笑顔で答える。それから一同はテーブルへと移動するのだった。

キヨウを始め、他の査察団のメンバーはオーリスの慣れているのか、特に変わった様子はなかったがフェイトだけは彼女のギャップになかなか慣れる事が出来ず、食事が始まるまで敬語を使い続けていた。食事が始まると場の雰囲気により彼女も敬語を使わなくなるのだが、食事が終わり、午後に部隊長室ではやてとの会談が行われると査察団は六課を後にするのだった。キヨウは玄関前まで彼らを見送りに行った。

「なかなか良い部隊じゃないですか、曹長。これからも地上と本局の融和のために努力してくださいね？」

「はい、オーリス二佐。これからも平和を守るために粉骨碎身励んでいきます。皆さんも本日は遠い所、ありがとうございます」

これで終われば良かったのだが、オーリスは去り際にキヨウへ向けウインクをしながら言う。

「キヨウ君、いい加減ギンガちゃんとの仲を進めなさいね。いくらあの子が我慢強くてキスだけで満足できるなんてことは無いと思うわよ、経験上！！」

「うっ！！ 何なんっすか、もう……」

キヨウは若干呆れつつもオーリス達を笑顔で見送るのだった。

それからまた数日が経ち、今度はクイントが六課に訪ねてくるとい
う。朝食後、またキヨウははやてに部隊長室へ呼び出される。今度
はギンガとアギトも一緒だった。それに珍しくスバルもその場にい
た。彼女も三人と共に呼ばれているのだ。

「ごめんな、二人とも。ナカジマ夫人はなるだけ四人には教えない
で欲しいって言ってるな。驚かせたいんやって」

はやては苦笑いしながら言う。クイントの六課訪問の目的はヴィヴ
イオとの顔合わせと、八年前の『戦闘機人事件』の生き残りとして
当時の情報を直接聴かせるということだそうだ。

その後、四人はクイントの出迎えを頼まれる。また隊舎の玄関前に
移動し、到着を待つのだった。

「ギンガー、スバルー！！」

六課の前で送迎車から降りると、クイントは手を振りながら四人の

方へ向かう。相変わらず若々しい姿であり、ナカジマ家の長女と言われても違和感が無い容姿だった。彼女は四人に近付くと娘二人を抱きしめるのだった。

「母さん、なかなか会いに行けなくてごめんね」

「うう、母さん。恥ずかしいよ」

「ギンガ、スバル。二人となかなか会えなくって、母さん寂しかったわ。キョウ君もアギトちゃんも元気そうね？」

二人を抱いたままクイントはキョウ達に言葉を掛ける。キョウとアギトも久しぶりに彼女と会い嬉しそうな表情だった。

彼女はギンガとスバルの二人を離し、今度はキョウとアギトを抱きしめる。

キョウはナカジマ姉妹二人に抱き締められるのとは違いクイントに抱きしめられると顔を真っ赤にさせるのだった。

アギトは大好きなクイントに抱きしめられて嬉しそうに笑っていた。

「クイントさん、恥ずかしいです。俺、もう子供じゃないんだし」

「クイントさん、久しぶり。えへへへ」

「キョウ君もアギトちゃんも私の子供みたいなものよ？それに義理の息子にもなってもらうんだから」

「もう、母さん！！ キョウ君が恥ずかしがってるじゃない。そろそろ離して」

三人を見てギンガが声を上げる。彼女はどこか嫉妬をしているよう

にもみえる。

ギンガは整った容姿に同性がうらやむようなプロポーションを持っているのだが、クイントは更に大人の色気を放つ身体を持っているのだ。スバルも母や姉と劣らない程であるが、二つの丘も娘二人より大きな物をクイントは持っている。キヨウの胸にそれは押しつぶされており、ギンガは危機感を持っているのだ。

「あら、ごめんね。ギンガ。愛しのキヨウ君にくっ付いてると良い気はしないわよね?」

キヨウが顔を赤らめるのを見てクイントは彼らを解放する。

「会えてうれしいです、クイントさん。俺もアギトもクイントさんの事は母親だと思っけていますから」

「そうだよ、クイントさん!! 私、クイントさんが大好き!!」

キヨウの言葉を聞きギンガは安心したようで普段の表情へと戻る。アギトはクイントに会えて少々精神年齢が下がっているようだった。

「ありがとう、二人とも」

クイントも優しい笑顔で答える。それから四人はクイントを部隊長室へと案内するのだった。クイントはヴィヴィオ用の服も何着か持ってきておりギンガとスバルがデバイスの格納領域に其れをしまった。

部隊長室にははやて以外にフェイトの姿もあつた。『戦闘機人事件』の情報を直接聞ける機会なので彼女も同席することだ。四人もそのまま部屋に残る様に指示される。事件とは深いかわりがあるからだ。

部隊長室ではクイントの口から八年前の事件の事が語られた。事件については資料が管理局にもあり、その場にいる全員はそれに目を通していた。直接彼女から語られた内容で一同は事件に対しての理解を深めていく。

クイントが語った内容はこうだ。戦闘機人の研究施設へゼスト隊で踏み込んだのだが、その場はもぬけの殻であつたそうなのだ。研究データ等は多くが持ち出されており、他の施設の場所等の有力な情報は得られなかったという。

有る程度のデータを集め、施設の中を詳しく調査している時に、彼女の前に銀色の髪を持った少女がガジェットと共に現れ、襲いかかってきたという。運悪く隊員達はペアで別れての調査を行っていて戦力は分散していた。

クイントはメガーヌと行動していたのだが不意打ちを食らい痛手を負つたのだという。突然飛んできたナイフがわき腹に刺さり、それが爆発したとのことだ。バリアジャケットの上からでも大きなダメージを負つたとクイントは言う。

メガーヌは補助系の魔導師であり、余り戦闘は得意ではないそうなのだがクイントと共に訓練を積みある程度の戦闘を行えるようになっていたそうだ。

だが、ガジェットの『AMF』に魔法をかき消され、彼女もクイントと同じように重傷を負つたという。

二人が止めを刺されそうになった時に、ゼストが駆けつけ少女に對峙した。彼の攻撃で少女は片目を負傷するが、ナイフのような爆発物でゼストと渡り合ったそうなのだ。

クイントはその戦いの余波で気を失い、目覚めたときには病室のベ

ツドの上だったらしい。

「そんな事が……」

「母さんは今まで直接私達にも事件の事を話してくれてなかったけど……」

はやてとギンガが呟く。事件の内容は管理局にある資料とほぼ変わらなかったが銀髪の少女についてはそれよりも詳しいものだった。クイントの話聞きその場に居る一同の表情は暗くなっていた。当事者であるクイントもそうだったが彼女は表情を明るい物に変え声を放つ。

「私はあれから魔導師として戦えなくなっただけど、みんながこの事件を解決してくれる事を願ってるわ。だから、暗くならないで。沈んでたら何事も上手くいかないわよ!!」

クイントの言葉に励まされキョウ達はもちろん、はやてとフェイトも元氣を取り戻す。

「約束します。私達、機動六課で『戦闘機人事件』の決着をつけて見せます!!」

はやてが代表して言葉を放つ。それには強い意志が込められているようだった。キョウも他のメンバーも目に強い意志がこもっていた。

「ありがとう、みんな。そうだ、ヴィヴィオちゃんの件だけど」

それからクイントは雰囲気を変える様にヴィヴィオの話題を出す。彼女についての情報をギンガにより貰っていたのだが、此処で更に

詳しい事を教えられた。ヴィヴィオが人造魔導師の素体であるなど機密に関わる内容だったが、ゲンヤの妻でありヴィヴィオの受け入れ先という事で明かされたのだ。

「産まれがどうであれ、私はヴィヴィオちゃんに愛情を注ぐつもりよ。約束するわ」

クイントは慈愛に満ちた笑顔で答える。その笑顔を見てはやはり安心したように頬笑み彼女にヴィヴィオを頼むと頭を下げるのだった。

それからクイントはヴィヴィオに直面するために移動する。付き添いはナカジマ姉妹が担当することと二人以外は通常に業務に戻るのだった。

ヴィヴィオは現在キョウの部屋でザフィーラと共に遊んでいるとのことで三人は其処へと移動していった。部屋に入るとヴィヴィオに向かいスバルが言う。

「ヴィヴィオ、この人がお姉ちゃん達のお母さんだよ!!」

「ふえ？ お母さん？」

「そうよ。私がギンガとスバルの母親のクイント・ナカジマっていうの。それにあなたのお母さんにもなるんだけど、良い？」

クイントはしゃがんでヴィヴィオと視線を合わせて言う。ヴィヴィオは初めきよんとしていたが、クイントの言葉の意味を理解し目に涙を浮かべ始める。

「本当に？ 本当にヴィヴィオのママになってくれるの？」

「ええ。あなたが嫌じゃなかったら」

クイントの言葉を聞きヴィヴィオは泣きながら彼女に抱きつく。クイントも彼女を優しく抱き包むのだった。ヴィヴィオは「ママ、ママ」と呟きながら彼女の胸に顔を埋める。

「ヴィヴィオ、これからよろしくね？ 私があなたのママになるから。あなたの事を守ってあげるからね？」

クイントはヴィヴィオをギュッと抱きしめ優しく囁く。ギンガとスバルは後ろで目に涙を浮かべ二人して「良かった」と呟いていた。もらい泣きしてしまっただけらしい。

ザフィーラは気を利かせたのかいつの間にか退室していた。それからしばらく四人は親子水入らずでキョウの部屋で過ごすのだった。その間ヴィヴィオはクイントに抱きついたままだった。

ヴィヴィオが泣きやみ落ち着くと、クイントはキョウの部屋を見て廻り始める。コルクボードの写真を見つけるとギンガに嬉しそうな笑顔を向ける。彼女に抱かれているヴィヴィオも良く分かっていない様子だがギンガへ微笑みかけた。

「なっ、何？ 母さん」

「いえ、あなたキヨウ君に愛されてるんだなって思ったから」

「キヨウ兄ちゃんとギンガお姉ちゃんは何時も仲良しさんだよ？」

「そうだね、ヴィヴィオ」

クイントの言葉にヴィヴィオが反応し、それにスバルも便乗する。それから話題はキヨウとギンガの事になっていった。ギンガは母と妹から根掘り葉掘り聞かれる。初めは恥ずかしがっていたのだが、途中からは興が乗ったのか、のろけ話を始めてしまう。其処でもヴィヴィオはよく分かっている様子だったが、三人が笑顔だったので自然と楽しい気持ちになり自分も笑顔を浮かべるのだった。

「あら？ まだキスまでしか済ませてないの？」

「母さん！！ スバルとヴィヴィオも居るんだよ！！」

「ギンねえ、私もそういう事やった事は無いけど、訓練校の同期の子や前の部隊の人から色々聞いたことあるんだよ？ やっぱ二人って遅れてると思うよ」

「そうよね、スバル。母さんもその通りだと思うわあ。ねえギンガ、あなたはこのままでいいの？ もしキヨウ君が他の子に靡いたりしたらどうするの？ 前うちに来たティアナちゃんって子も油断できないと思うわよ？」

「うっ、えつと……」

「母さん、キヨウにいがギンねえ以外の女の人とくっつくところなんて想像できないよ」

「あ、ありがとう。スバル」

スバルの言葉にギンガは笑顔で礼を述べる。だがスバルは続けた。

「でも、ティアなら私は良いかも。それに、いつそのこと私もキヨウにいを狙っちゃおうかな？」

「えっ……」

普段なら強く言い返すギンガであるが今回は違った様で不安げな表情を浮かべる。其れを見てスバルは慌てて自分の発言を一部訂正する。

「私はキヨウにいをそういう目では見れないよ、安心して。でも、ティアは違うかもしれない。最近ギンねえ達って安定した現状に満足してるんじゃない？　そういうのって見ていてちよっと違うと思うんだけど」

「そんな事無いわよ。私はキヨウ君の事が大好きだし、キヨウ君も私の事を好きだって言ってくれてるもん」

ギンガの言葉にスバルは怒りをもったようだ。目じりには涙が浮かぶ。彼女はギンガに詰め寄り方を掴みかかり言う。

「だからって何もしないのは変だよ。ティアは、ティアは二人の事が大好きで、自分が邪魔にならないようにしつつと我慢してるんだよ！！　気持ちも伝えずに、見守るだけで良いって。これじゃ、これじゃティアが可哀想だよ！！」

そういうとスバルは我慢が出来ずに泣き出してしまふ。ギンガは申し訳なさそうな表情だった。彼女も泣きそうになっていた。其れはティアナへの罪悪感から来ているのだろうか。

「スバルは優しい子ね。友達の為に泣けるんだから。ねえ、ギンガ。よく聞きなさい。人は気付かないうちに誰かを傷付けてしまふ事があるの。それは仕方がないことだわ。でもね、原因が分かれば其れを解決しようと行動する事が大切だと思うの。一度、ティアナちゃんと話をした方が良いわよ」

クイントの言葉にギンガは涙を抑えきれず泣き出してしまふ。クイントはヴィヴィオをベッドに降ろしギンガとスバルを抱きしめる。ヴィヴィオも何も言わず、素直にベッドに座る。

「うふう、母さん。私、ティアナに話すよ。私はキヨウ君が大好きで絶対離したくないけど中途半端なままじゃいけないし……」

「きつとティアナちゃんなら分かってくれるわよ。あの子も優しい子なんだし。それで良いでしょ？ スバル」

「……うん。ごめん、ギンねえ。ちょっと言い過ぎたかも」

「良いよ、スバル。あなたの言葉で気付けてんだし」

それから暫らく三人は抱き合っていた。そしてギンガとスバルが落ち着くと四人は部屋を後にするのだった。

その後、何事も無かったかのように四人は食堂へ向かう。ちょうど

お昼の時間だった。其処にはライトニングの二人とキョウとティアナの姿があった。

彼らは合流して同じ食卓につく。それから賑やかな食事の風景が繰り広げられるのだった。

ヴィヴィオはずっとクイントに抱きついたままで彼女に食事の世話をしてもらっていた。さすがに二児の母であるクイントは慣れた物であった。

「クイントさんってギンガさんのお母さんなんだなって思います」

「どうした、エリオ？」

エリオがそんな様子を見て声をこぼし、キョウがそれを聞き取り問う。

「ヴィヴィオを世話している時の優しそうな表情がそっくりなんですもん」

「そうだね、エリオ君。私も何かフェイトさんの所にいた頃を思い出します」

キャロもエリオの言葉に同意する。それから一同は食事を進めていった。

クイントが六課を去る際、ヴィヴィオは素直に彼女から離れた。これは予想外の事だったので見送りに来ていたナカジマ姉妹とキョウ

とアギトは驚いていた。
それには原因があったのだ。

「忘れないでね、ギンガ、スバル、ヴィヴィオ。離れていても家族はつながっているんだから。決して一人じゃないのよ。だから三人で助け合いなさいね」

キョウの部屋から出る時にクイントはそう言葉を送っていたのだ。

「またね、みんな。ヴィヴィオも事件が解決したらうちで暮らすのだから、その準備をして待ってるわ」

「うん、またね。クイントママ!!」

ヴィヴィオは笑顔でクイントに手を振り送り出す。キョウ達も同様だった。

クイントも送迎車に乗り込んだ後も窓から姿が見えなくなるまで手を振り続けた。

Ep61 お出でませ、機動六課（後書き）

そろそろ、決着をつけようかな。

「いい加減、けりをつけようと思うんだ。これは俺がやらなくちゃいけない問題だから。だからさ、待っていてくれないか。俺の帰る場所を守って。帰ってきたらお前に、お帰りって言って欲しいんだ」
死亡フラグ的なセリフ。でも個人的には嫌いじゃないです。
どっかで使いたいなあと思うサウザーでした。
読んでいただきありがとうございます。

E p 6 2 F i r s t L o v e (前書き)

三角関係とか、なったことないから難しかった。

本来は考えていなかった展開ですから結構書くのに苦労しました。

恋愛物読むのは大好きですが、自分で書くのは大変だと実感しました。

修正が入りました。

クイントが六課を去ってから数時間程が経った。

キヨウ達三人も、フォワードメンバーもその日の業務を終えて自由時間となっていた。

ティアナとスバルは何時もの様に隊長陣で手の空いている物と追加訓練を、キヨウはアギトと共にヴィヴィオの面倒を自室で見っていた。ヴィヴィオは楽しそうにクイントの事を話している。ギンガもキヨウ達と過ごしていたが、その時彼女はクイントやスバルの言葉をずっと考えていた。

（私の行動が知らない間にティアナを傷付けていたなんて……。あの子、キヨウ君の事を本気で好きになってたんだ。でも、私もこれだけは絶対譲れない。ティアナとは一度、ちゃんと話をしてみないと……）

自分の今までの行動に思う所があったギンガはティアナへと念話を送る。話したい事があるので訓練後に隊舎の屋上へ来て欲しいと。突然の事だったがティアナはそれを了承する。

訓練終了後、シャワーを浴びてからティアナは屋上へと向かった。彼女は出発する際にスバルにどうしたのかと尋ねられた。ギンガに呼び出されていると教えると、スバルは納得したような表情をしそ

れ以上質問をしなかった。だが、スバルはどこかホツとした様な雰
囲気を放っていた。

ティアナは自室から屋上に向かいながらずっと呼び出された内容に
ついて考えていた。その内容自体には心当たりが有る。自分がキヨ
ウに対して好意を持っているという事だろう。

クイントとの間で何かあったのかは知らないが、彼女が帰ってから
のギンガの様子は何時もと違うと感じていた。発破でも掛けられた
のだろうか……。

自分はキヨウがどう思っているのかは知っているつもりだ。きつと、
口うるさい後輩としか思っていないだろう。

（私を呼び出すって事は、ギンガさんはやっぱり先輩の事で……。
それならさっきのスバルの反応も分かる。でも今更どうして……）

考え事をしながら歩いていたのであつという間に目的地へと到着し
てしまう。ティアナが屋上に到着すると其処にはギンガが街並みを
眺めながら待っていた。六課は海に面しており、彼女の髪は潮風の
靡いていた。

「お待たせしました、ギンガさん」

ティアナが声を掛けると彼女は振り返り近付いてくる。そしていき
なり頭を下げてきた。ティアナは突然の事で何が何だか分からない
様子だった。

「ごめん、ティアナ。私、あなたがキヨウ君の事をどう思っている
か全然考えていなかった。スバルのいつもの冗談だっと思っていた
の。私達の行動があなたを傷付けていたみたいで本当にごめんなさ

い」

頭を下げながらギンガが放った言葉で、ティアナは彼女が自分を此処へ呼び出した理由を理解する。やはり自分がキヨウに抱いていた感情をスバルから聞いたのだろうと。そして其れに決着をつけようとしていると。ティアナは覚悟を決めたような様子でギンガに声を掛ける。

「頭をあげてくださいギンガさん。それと謝らないでください。勝手に横恋慕したのは私なんですから……」

ティアナの言葉にギンガは顔を上げる。それから二人は屋上のフェンス際に並んで立ち、夜の海を見ながら語り合う。

初めにティアナが自分の胸の内を晒した。訓練校時代、親身になって相談を受けてくれたり訓練に付き合ってくれたキヨウを、既に亡くなっている兄と重ね始めていたという事。

そして其れが何時しか憧れから好意へと変わっていたという事を。だが、既にキヨウはギンガと交際をしており自分がその間に入ろう等とは思っていなかった。ただ、キヨウを見守るだけで良いと自分を納得させていたと話す。そして自分の思いがある日スバルにばれてしまい、思いを伝えないのかと言われたとも話した。

「私は良いんです。お二人が仲良くしている所を見てるの、嫌じゃないですし……。きっとスバルが勝手に深読みしてお節介を焼いただけですよ。気にすることじゃないです、ギンガさん」

ティアナは笑顔でそう付け加えるのだがその笑顔はどこか陰りが見えるものだった。

「ティアナ、本当にそれでいいの？ 私が言える立場じゃないって

自分でも思っけど、あなたの気持をキヨウ君に伝えなくて？ 今のあなたは心から笑えていないように見えるよ」

「大丈夫です。お二人の間をかき乱したりしたくないですから。それに、本当にお二人の仲を応援しているんですよ。きっと私なんかの事、先輩はどうとも思っていないと思います」

ギンガにはティアナが無理をしているように見えた。彼女の笑顔はどこか不自然に感じるのだ。まるで自分の気持ちを頭で無理やり納得させようとしている。そんな風に見えたのだ。訓練校から機動六課までの今までの付き合いを通して分かるが、ティアナは冷静に周囲への配慮が出来る人間だ。

自分の感情で人間関係にひびを入れたくない、そんな事になる位なら自分の想いにふたをしよう。そう考えるのだろうとギンガは推測する。

「違うよ、ティアナ。きっとキヨウ君は私と出会っていなかったらあなたを選んでいたと思う。あなたの事をキヨウ君は何時も褒めているんだよ。一生懸命で努力家で、素敵な女の子だって。思いを秘めているだけじゃ、何時かきっとあなたの心は耐えられなくなる」

ギンガは自分の思いを封じ込め、努めて普段通りに振舞おうとするティアナを見ていられなくなったのだ。

そこで自分の思いを彼女へとぶつけるのだが、それが有る事への引き金になった。

「さい……。……。るさい……。五月蠅い！！ ギンガさんに何が分かるんですか！！ 自分が好きになった人にはもうすでに恋人が居て、みんなが羨む位仲がよくなって！！ 好きな人の恋人も自分にとって尊敬できる大好きな先輩だから間に入っちゃダメだって頭では

分かっているのに、先輩の事が好きっていう気持ちが大きくなってきた……。憐みの言葉なんていらなそうです！！先輩もギンガさんの事もどっちも大好きなのに……。もう私、何が何だか分からないよ！！」

ティアナは普段の彼女からは考えられない様な冷静さを欠いた雰囲気です。言葉が爆発しているのだ。言葉が放ちティアナはそこから立ち去ろうとする。

だがギンガは彼女の手を掴みそこに引きとめる。

「待つて、ティアナ！！私の話も聞いて！！」

「聞きたくありません！！離して下さい！！」

ティアナはギンガの腕を振りほどこうとする。しかしギンガもティアナを離すまいとがっちり握り込んでいた。

「これ以上何を話すっていうんですか！！もう惨めな思いはしたくないんです！！先輩はギンガさんの事が好きだっていう事は痛い位に分かっています。どんなに私が先輩の事を想っても、どれだけアピールしてもその気持ちは変わらないことぐらい分かります！！これ以上私に構わないで！！」

「構うよ！！キョウ君も大事な人だけど、ティアナも私にとって大切な先輩なんだよ！！私の所為で、大好きな先輩が辛い思いをしているのは耐えられないの！！」

ギンガも声を荒げる。ギンガとティアナは本音と本音をぶつけ合う。それから暫らくの間、二人の言い合いは続いた。

ある程度言い合いが済み、互いに冷静さを取り戻してきた時にギンガが切り出す。

「私って本当に嫌な女だよ……。欲しい物は手に入れないと嫌だつて我が儘言つて。自分の所為でティアナがこんなに傷付いているのに、やっぱり自分の事を優先させようとして……。子供だよ」

自嘲を含んだ物言いだつた。今まで自分の行動を真剣に省みる事が無かつたり、結局は自分本位で考えてしまっている事をティアナに告げる。

「そんな事ないです！！ ギンガさんは私にとって大人って思える先輩ですもの！！ ギンガさんが子供なら私も子供です！！」

ティアナはギンガの言葉を否定する。彼女にとってギンガは大切な人間なのだ。先ほどは二人とも感情に任せて行動を取ってしまったのだが、少し頭が冷えたのか彼女を励まそうと声を掛ける。

ティアナの言葉で少しギンガも元気が出た様だ。笑顔で口を開く。

「それなら、私達は二人とも子供だね？」

「ふふつ、そうですね」

それからティアナとギンガは互いに顔を見合せて笑いあうのだった。

暫らく笑いあつた後、ギンガはティアナに語つた。

自分がキヨウの事が好きになつたきつかけから、付き合う様になつた事を。幼き頃の出来事から訓練校時代の劣等感の話等、様々な出

来事がギンガの口から語られる。ティアナはそれを静かに聞き続けた。

「ギンガさん、先輩の事が本当に大好きなんですね？」

「うん。この気持ちは誰にも譲れない。たとえティアナでも。ただね、あなたがキョウ君にもし気持ちを打ち明けて、それでキョウ君があなたを選んだとしても私は構わないわ……」

ギンガは真剣な顔でティアナの目を見ながら話す。その言葉にウソはないようだった。ティアナは言葉を放つ。

「分かりました。先輩に思いを打ち明けてみます。結果がどうであれ、いつかこの気持ちに決着をつけなきゃって思っていましたから。でも先輩が私を選んでほめないでくださいね？」

「ええ、もちろん。人を好きになるってことは理性とかそういう物とは関係ないから、もしそうなくても素直に諦める。あなたのやりたいようにして結構よ」

二人は笑顔で握手をする。二人のその時の笑顔は心からの物だった。恋敵だったとしても二人の友情は変わらない様だった。

ティアナが部屋に戻ると其処にはスバルが待っていた。スバルは何も聞いて気なかつたが、ティアナは一言だけ「ありがとう、明日先輩に伝えてみるわ」と言いベッドにもぐりこんだ。

「そっか……。頑張つてね、ティア……」

そう言うとスバルも自分のベットへ向かい、眠りにつくのだった。

その翌日の夜半、今度はキヨウがティアナにより呼び出される。場所は人通りの少ない隊舎の裏だった。ティアナは其処で壁に寄りかかりながらキヨウを待っていた。

「ティアナ、話ってなんだよ？　こんなとこに呼び出して」

キヨウはデスクワークをしていたのか、肩と首を回しながら其処へ現れた。一方のティアナは真剣な表情で口を開く。

「あつあの、先輩！！　いきなりこんなこと言うのおかしいですけど……。私、先輩の事が好きです！！　今までこんな感情を持つのは初めてでした。先輩にはギンガさんが居るのは分かってますけど訓練校で会ってから、先輩はまるで兄さんの様に優しくしてくれて、時には厳しくって……。初めは単なる憧れだったんですけど、一生懸命自分の目標に向けて頑張っている先輩を見て、何時の間にか好きになっていたんです！！」

ティアナの言葉を聞き、キヨウは表情を真剣な物に改めて答える。

「ありがとう、ティアナ。こんな俺を好きになってくれて。でも、

「謝らないでください!!」「えっ?」

「結果や理由も分かっていますし、私の勝手な横恋慕なんですから。ただ、この気持ちに決着をつけたかったです。何時までも引き摺ってたら前に進めないです。私の気持ちをただ伝えたかったですから」

「そうか……」

「ただ一つだけ、お願いがあります。ギンガさんと幸せになってください。約束してください、先輩」

「ああ、もちろん。約束するよ」

キヨウが笑顔でそう答える。その時、彼の顔の前にティアナの顔のアップが映る。そしてキヨウとティアナの唇が触れ合う。

「ごめんなさい、先輩。でもこれだけは許して下さい。明日からは普通の先輩と後輩に戻りますから、だから今だけ。せめてその胸の中で……」

キヨウは何も言わずにティアナをそっと抱きしめる。ティアナはキヨウの胸の中で静かに嗚咽を挙げる。ティアナが泣き続ける間、キヨウは彼女の頭を優しく撫で続ける。

「ティアナ、お前の気持ち嬉しかったぜ。ありがとう」

抱きしめながらティアナに優しく声を掛ける。ティアナが落ち着くまでキヨウは優しく抱擁し続けた。

「もう大丈夫か？」

泣きやんだ後のティアナは普段通りの姿に戻っていた。真面目でよく気が利いて頑張り屋の彼女の姿がそこにあった。

「はい！！ 先輩、明日からも訓練頑張りましょうね！！」

別れ際に、ティアナは満面の笑みでそう言いその場から去っていった。

ティアナは部屋に戻るとスバルに昨日の事、そしてさっきキョウウへ思いを伝えて来た事を話した。

「そう、やっぱりキョウウにはギンねえを選ぶって」

「うん。でも、それで良いわ。やっと先輩への思いに決着をつけれたんだから。初めから結果なんてどうでも良かったの。ありがとう、スバル」

ティアナの言葉に少しだけ無理をしているように思えたスバルは彼女に声を掛ける。

「ティア、今日位は泣いても良いんだよ？」

スバルの言葉にティアナは涙を浮かべる。やはり失恋の痛手はまだ残っていたようだ。ティアナはスバルの胸の中で幼子の様に声を挙げながら泣く。

キョウの前とは違い、親友の前では自分の情けない姿を曝け出した泣いていたのだ。

その後、泣きやんだティアナの表情はすっきりとした物となった。

「明日から、また訓練を頑張るわよスバル！！ 何時か先輩達を追い越して、兄さんが目指した執務官になってみせるんだから！！」

「うん！！ 二人で強くなっていこうね、ティア！！」

それからのティアナは以前よりも更に訓練を励み着々と力をつけていった。

雰囲気も今までとはどこか違うようで多くの隊員達からは大人っぽくなった、綺麗になったと言われるようになる。

ティアナの初恋は終わったが彼女は未来に向けて邁進するのだった。

E p 6 2 F i r s t L o v e (後書き)

なんでだろう、気付いたら北斗のセリフを入れてしまう。分かった人居ますかね？

元ネタはレイVSユダのセリフです。

ティア様は本当に頭の良いお方……。

後書きで、台無しにするのが俺クオリティwwww

今回は今までになく難産でした。こういう話は苦手だと実感しました。

いまの私ではこれが限界です。何時か加筆や改訂します。読んでいただきありがとうございます。

Ep63 里帰り前編（前書き）

投稿が遅れて申し訳ありません。

以前、ギンガの妄想の内容が気になると言われた事があったので、初めて内容を書きました。

二人の子供の名前はこの先コレ通りになるかは分かりませんが、性別も何も決めていませんから。

査察やクイントの来訪から少し経ち、公開意見陳述会まで数日と迫ったある日、キヨウとギンガは早朝にヴィヴィオと共に隊舎の前に立っていた。彼らの近くにはサイドカーを装備したキヨウの愛車が止められている。本来ならキヨウ達はフォワード陣の訓練の補助を行っている筈なのだが、その日はある任務が与えられているのだ。その任務とは……。

「キヨウ兄ちゃん、ギンガお姉ちゃん、アギトお姉ちゃん、早くママの所に行こうよ!!」

「おい、ヴィヴィオ慌てんなって。クイントさんは逃げねえよ」

「そうだよヴィヴィオ。ちょっと待ってあげよう？荷物だってあるんだからキヨウ君を急がせたらダメだよ？」

「キヨウもギンガも所帯じみてきたな……」

そう、ヴィヴィオを引き取り先であるナカジマ邸に連れていくことだ。

一度、ナカジマ邸に連れて行きヴィヴィオがそこに馴染みやすくするという事が第一の目的である。ヴィヴィオは二日間、ナカジマ邸に滞在するのだ。

ヴィヴィオはクイントに会えるのが嬉しくて仕方がないといった様子であった。そんな彼女の姿にキヨウとギンガとアギトも心が温かくなるように感じていた。

もちろん、今回の外出にはそれ以外にも目的が存在した。

キヨウは以前見た夢の内容とカリムの予言の内容の関係性を調べた

いと思い、ソウジの話を書くため実家に戻ろうとしているのだ。仕事の一部も持ってきているし急ぎの物も無かったので、その面の心配はいらない。はよてからもちゃんと許可が下りているのだ。キヨウはヴァイスにヘルメットを借りており、ギンガがヴィヴィオに其れを被せる。キヨウはサイドカーに荷物を積むと愛車に跨る。ギンガは特等席のタンDEMシートに、ヴィヴィオはアギトと共にサイドカーへと乗り込む。

「ほら、此処をしっかりと持って」

アギトがサイドカーの乗り方をヴィヴィオにレクチャーする。

「ありがとう、アギトお姉ちゃん。ヴィヴィオ、バイク初めて!!
楽しみ」

「そうか!! なら、かつ飛ばして行こうか？」

「ダメだよキヨウ君、安全運転だよ!! ヴィヴィオはまだ小さいんだから」

ギンガが調子に乗ろうとしたキヨウに対して釘をさす。ヴィヴィオはまだ何の事だか分かっていない様だった。それよりも早く出発したいという事で頭の中がいっぱいになっていたのかも知れない。それから一同はナカジマ邸に向けて出発するのだった。

三人は隊舎を出発し無事に目的地であるナカジマ邸に到着する。ギンガがインターフォンを鳴らすと其処からはクイントの元気な声が聞こえ、間をおかずに彼女が玄関先に出てくる。

「おかえりなさい、ギンガ。それにヴィヴィオ。キヨウ君達もありがとう、この子達を送ってくれて」

「クイントママ!!」

クイントの姿を見てヴィヴィオは彼女に抱きつく。とても嬉しそうな表情で、クイントもそれは同様だった。キヨウはヴィヴィオとギンガの荷物を玄関の中へと運ぶ。

「うふふ、よく来たわね、ヴィヴィオ。キヨウ君もありがとう、二人の荷物まで運ばせて」

「ごめんね、キヨウ君」

「良いっすよ、これ位は。ギンガも気にすんなって」

ギンガが申し訳なさそうにしていたのでキヨウは彼女に笑いかける。キヨウが玄関の中に荷物を運び終えたので、クイントが声を掛ける。

「キヨウ君もアギトちゃんも上がったら?」

「まだ、親父に顔見せてないから私達は後でまた来るよ」

「そうなの？ 先輩も二人が帰ってくるのを楽しみにしていたから早く行ってあげなきゃだめよ」

それから四人はナカジマ家とアーデルハイド家で別れるのだった。

「お邪魔します!!」

ヴィヴィオがナカジマ邸に入る際に言った一言にギンガとクイントが反応する。ギンガは自分とヴィヴィオの荷物を運ぶ足を止めて言う。

「違うよ、ヴィヴィオ。此処はあなたのうちでもあるんだから、ただいまって言うの。ねえ、母さん？」

「ええ、そうよ。ヴィヴィオはうちの子になるんだから。ほらヴィヴィオ？」

「うん。ただいま!!」

ヴィヴィオの言葉をクイントとギンガは微笑ましく思うのだった。

それからクイントはヴィヴィオ用に用意した部屋へと二人を通す。其処は夫婦の寢室の隣で、スバルの部屋の正面の部屋だった。

白い壁紙にフローリングの床。壁際にはキャラクターの布団が乗ったシングルベッドがあり、その上にはウサギや熊のぬいぐるみが並んでいた。反対の壁にはギンガのお下がりと思われる机が置かれている。

「ここがヴィヴィオの部屋よ。この部屋を用意するのにゲンヤさんと先輩に手伝ってもらったわ。ゲンヤさんったら、ヴィヴィオのためにつけて張り切って腰を痛めるまで頑張ってたんだから。それで先輩の手を借りたの」

クイントは笑いながら二人に教える。ギンガもそれを聞いてその絵が浮かぶのか笑みを浮かべていた。

「父さん、何やってんのよ。もう若くないのに」

口ではこう言っているが、その言葉は優しい雰囲気をはらんでいた。妹のために重い荷物を運んだであろう父に感謝をしているようだ。

「ねえ、ママ？先輩って誰？キョウ兄ちゃん？」

クイントの言葉に出た先輩という単語にヴィヴィオは疑問を抱く。

「違うわよ。先輩っていうのはキョウ君のお父さんでお隣さんのソウジ・アーデルハイドさんの事よ。でも、どうしてキョウ君って？」

「ティアナがキョウ君の事を先輩って呼ぶから、きつと勘違いしたんじゃないかな？」

クイントはヴィヴィオの発言と其れを補足するギンガの言葉を聞き噴き出してしまふ。そしてその笑いの輪はギンガに伝わる。ヴィヴィオのみ、何が何だか分からない様子だった。どうやら自分が笑われていると分かり拗ねてしまふ。

「もう、ママもギンガお姉ちゃんも笑うなんてひどいよ」

「ごめん、ごめんって。ヴィヴィオ」

「そうね。ごめんなさい、ヴィヴィオ。先輩には後で会えるわよ。お昼はうちで食べる事になっているから。そうだ、ギンガ。久しぶりにお昼の支度を手伝いなさい。花嫁修業よ！！」

「ちよつと、花嫁修業って」

「お手伝い？ ヴィヴィオもお姉ちゃんと一緒にママのお手伝いする！！」

「ありがとう、ヴィヴィオ。じゃあ、準備をしましょうね。エプロンもスバルが小さい頃に使っていた物があるから」

ギンガはクイントの言葉で赤面する。ヴィヴィオは二人の謝罪により機嫌を直し、自分も手伝いたいと言い始める。クイントはそれを快諾するのだった。

荷物を運び終わると、三人は台所へと向かい昼食の支度を始める。包丁などはヴィヴィオに触らせないようにし、食材を洗ったり食器を運ばせたりしていた。ヴィヴィオは二人の手伝いが出来て楽しいのか終始笑顔だった。

「可愛いわね、ヴィヴィオ。あなた達が小さい頃を思い出すわ」

クイントは食材を切る手を止め、隣で同じく鍋の様子を見ていたギンガに声を掛ける。

「そうかな？ でも、本当にヴィヴィオは可愛いって私も思うよ」

「ギンガもキヨウ君と一緒にあって、早く孫の顔を見せてちょうだい。女の子だったら素敵だと思わない？ ヴィヴィオと一緒に私達のお手伝いをするの。ママ、おばあちゃんって」

「母さん、気が早すぎるよ！！ でも、キヨウ君との子供か……」

ギンガは頭の中で父譲りの妄想を膨らませる。

其処はナカジマ家の台所だった。その場所では四人の人物が居た。一人は現在とあまり変わらない姿のクイント。もう一人は10歳位に成長し髪をポニーテールに結んだ金髪の少女、ヴィヴィオ。そしてピンクのエプロンをつけ少し大人っぽくなり若奥様然としたギンガ。最後に紫がかかった黒い髪をスバルの様な髪型にした五歳位の少女の姿があった。

「ねえ。ママ、お祖母ちゃん。このお皿は？」

少女は大きい皿をヴィヴィオと共に一枚ずつ運んでくる。

「ありがとう、イオリ。ヴィヴィオもありがとう。それはこっちに頂戴」

「うふふ、お手伝い偉いわね。イオリちゃん、ヴィヴィオ。ありが

とう」

クイントがイオリと呼ばれた少女とヴィヴィオの頭を撫でる。二人はそれをくすぐったそうにして目を細める。ギンガは受け取った皿に完成した料理を載せる。

「じゃあ、これをヴィヴィオお姉ちゃんと一緒にテーブルまで運んでね。熱いから気をつけるのよ」

「はい、ママー!!」

「了解!!! 任されたよ、ギンガおねえちゃん。行こう、イオリ」

「うん、ヴィヴィオお姉ちゃん!!」

二人が移動すると其処には少し大人っぽくなったキョウと少々老化したゲンヤとソウジ。それに大人モードに変身したアギトの姿があった。四人は席についてテレビを見ていた。そのテレビには少し髪が長くなったスバルの姿が映っている。災害での救助活動が評価され、レジアスにより表彰をされている映像が流れていた。

「スバル、随分と頑張ってるみたいだな？」

「そうですね、父として鼻が高いですよ」

「パパ、アギトお姉ちゃん、お祖父ちゃん達、お料理出来たよ」

「イオリ、急いだら危ないよ？」

台所から姿を現す二人。イオリは少し急いだように早足で、ヴィヴ

イオはその後ろから転ばないように注意を促しながらやってくる。

「おっ、ヴィヴィオとイオリ！！ お手伝い偉いな！！」

二人の姿を見てアギトが嬉しそうにほほ笑い声を掛ける。

「二人ともありがとうな」

キョウはそういうとヴィヴィオ達の頭を撫でる。イオリは嬉しそうに、ヴィヴィオは嬉しそうだが少し拗ねたように言葉を放つ。

「うん！！ パパ、イオリ偉いでしょ！！」

「もう、キョウ兄ちゃん。ヴィヴィオを何時までも子供扱いしないでよ。レディーに対する扱いじゃないよ」

キョウは苦笑いを浮かべながらヴィヴィオに謝罪する。そんな様子をクイントとギンガは台所から笑顔で眺めているのだった。

「……………。優しい旦那様に、可愛らしい私達の子供。それに家族のみんな……………。良い、凄く良いわ！！」

「こら、ギンガ！！ 料理の最中に妄想するのはやめなさい。また口から洩れていたわよ！！」

クイントがギンガを注意する。やはり何時もの事なのか、若干呆れて居る表情だった。

「ごめんなさい、母さん。あつ、もうだいぶ火も通ってきたみたいだし、そろそろ次の具材を入れても良いと思うけど、どうかな？」

ナカジマ家では平穏な時間が流れるのだった。

一方、少し時間は戻りアーデルハイド家ではキヨウとギンガが早世したソウジの妻、ユキ・アーデルハイドに花を供えていた。二人の後ろでは何時もの着流し姿のソウジが佇んでいる。キヨウは振り返るとソウジに声を放つ。

「なあ、親父。前に話した夢の件で聞きたい事があつたんだけど、教えてくれないか？」

「慌てるな、キヨウ。お前が見た夢はこのミッドでの『草薙流』の成り立ちに関わっている物じゃと思う。昼飯を食べてから道場に来い。うちに伝わる古文書を用意しているから、詳しい事はそこで話してやる。それまでは久しぶりに家族団欒を楽しもうじゃないか？

「昼はお隣にお呼ばれしているからの」

「そうだが、キヨウ。久しぶりなんだし、親父の言う通り少し肩の力を抜けよ。ってクイントさんの料理か！！ 久しぶりで楽しみだなあ」

キヨウの言葉を聞きソウジが答え、アギトもそれに続く。二人の言葉を受けてキヨウも雰囲気を変えて久しぶりの我が家を楽しむ事にするようだった。

それから三人は居間へ移動し、近況報告等の雑談をしていく。ちゃぶ台が置かれ、畳張りになっている其処は、現代の地球でも珍しい様な純和風の雰囲気だった。

アギトは戸棚から茶碗を取り出し、最近ミッドでも流通した日本茶を煎れる。その手つきは慣れた物で小さい体ながら、まるで地球の主婦の様に洗練されていた。

三人は爽やかなお茶の香りを楽しみながら会話に花を咲かせていく。六課での事、レジアスの事、ゼストやメガーヌの娘のルーテシアの事等、話題は多岐にわたった。其れをソウジは静かに聞き続けた。一時は暗い雰囲気になる事もあったがその後、キヨウとギンガの事等について話される時は場の雰囲気はとても明るい物になっていた。

「そうか、仲良くやっているみたいじゃな。だが、まだキスまでしかしとらんとは……。ワシがお前と同じ位の頃はハイデルンと共に訓練校で浮名を流していたんだがお」

「ウソだろ、親父？ あのハイデルン教官がかよ？」

「だよな、キヨウ。あの堅物の教官がいくらなんでも」

「アイツは若い頃は今と違ってはっちゃんけていたんじゃよ。それに

管理局に入ってからもゼストやレジアスと一緒に遊びまわったもんじゃわい。レジアスもその頃はスマートな若手キャリアとして女性局員に大人気だったんじゃないぞ。ゼストもクールでカッコいいとよく言われとったし……。そう言えばレジアスとアイツの嫁さんが出会ったのもその頃だったな」

キョウとアギトはソウジから自分達の尊敬する人物達の若い頃の話を聞かされた。どんなバカな事を行ったのか等、ソウジは赤裸々に話をしていった。後輩のゲンヤに対する悪戯等の話も行われた。キョウ達はその話を笑いながら聞いて行くのだった。

三人が話を始めて暫らく経ち、そろそろお昼という所で玄関から女性の声と少女の声が聞こえてくる。その声はキョウとアギトにとってはなじみ深い声だった。

三人が玄関へ移動すると其処にはギンガとヴィヴィオの姿があった。呼びに来てくれたらしい。

「お久しぶりです、おじ様。もうお昼の準備が出来ましたから、迎えに来ました。ほら、ヴィヴィオ。おじ様にご挨拶は？」

「うん、ギンガお姉ちゃん！！ こんにちは。私はヴィヴィオ・ナカジマです」

「おお、ギンガちゃん。少し見ない間にきれいになったのお。それに、ヴィヴィオちゃんか？ ワシはキョウとアギトの父のソウジ・アーデルハイドじゃ。よろしくな」

ソウジは笑顔でヴィヴィオに挨拶をする。ヴィヴィオはソウジの好々爺とした雰囲気警戒を解いていた。

「やですわ、おじ様ったら。お口がお上手で！！」

「うぐお!?!」

ソウジの言葉にギンガはテレ隠しでレバーブローを放つ。腰の回転が生かされ体重の乗った其れはソウジの身体に吸い込まれるように叩き込まれるのだった。

「キ、キヨウ、ギンガちゃんはまたパワーアップしたんじゃないかねえのか?」

「ああ、前以上のキレと破壊力だ。一緒に組み手をするおかげで俺はタフさに磨きが掛かったぜ。大抵の攻撃はぶち抜けないようなシールドも覚える事が出来た。命がけだったけど……」

「やっぱり、ギンガはクイントさんに似て来てるよ。絶対!」

「おじちゃん、大丈夫?」

「ごめんなさい、おじ様!」

それから五人はナカジマ邸へと移動した。

食堂には様々な料理が並んでいた。メニューは地球からの漂流者の子孫だけでなく和食中心だった。ギンガの手作りの鶏肉と野菜の照り煮やヴィヴィオが手伝ったというサラダ。ギンガとクイントの合作の肉じゃがにクイントお手製の魚のつみれの入ったお澄まし等が並べられていた。

「ギンガちゃんも料理の腕前が上がったな。すぐでもうちのキヨウの嫁に来てもらいたいぜ」

「そうですね、先輩」

「ちょっと、親父！！クイントさんまで」

「二人とも、恥ずかしいよ……」

「はい、ヴィヴィオ。あぐん。熱いから気をつけるよ」

「ありがとう、アギトお姉ちゃん。あぐん。美味しい〜！！」

キヨウ達は久しぶりにアーデルハイド家とナカジマ家の賑やかな食事会を楽しんで行くのだった。

Ep63 里帰り前編（後書き）

どうでもいい事ですが、たまに「少女」と打ったつもりが「処女」
になっている時があり慌てて訂正をするサウザーです。

何やってんだろう、俺。

皆さんもそうだったミスした事ないですか？

ギンガの妄想みたいなホームドラマが書きたいです。久しぶりに番
外編をやるうかと少し思ったりしていますが、どうでしょう？

読んでいただきありがとうございます。

E p 6 4 里帰り後編（前書き）

前話のナンバリングをミスっていました。

番外編のせいで話数にずれがあるので、やってしまいました。

申し訳ありません。

凄く捏造があります。原作ファンの方、お許しください。

これが拙作です。

キヨウとギンガが後半でどうなったのか気になる方は『烈火の拳聖

ダークネス』をどうぞ！！

ナカジマ家での昼食会が終わると、キョウはソウジと共に自宅の道場へと移動した。

アギトはそのままナカジマ邸に残り、ヴィヴィオと共にクイントの新作衣装を試着させられる事になっている。

道場の中心には古い木箱が置かれ、其れを挟むようにキョウとソウジが向き合って座っている。ソウジの服装は日輪の紋章が袖に入った黒い着物と緑がかかった袴だった。其れは免許皆伝の際に着用した物と同様の物で、キョウもソウジと同じ着物を纏っていた。

「この中に『草薙流』とアーデルハイド家についての文献が入っている。これは正式に伝承者として認められた物しか見る事は叶わん」
ソウジは重々しい雰囲気ですう言い、箱のふたを開ける。その中には現代のミッドでは珍しい紙媒体で書かれた古文書が入っていた。古来ベルカ語で書かれている文字が並ぶ。

「これが……？」

「うむ。これがうちに伝わる秘伝書じゃ」

キョウが古文書に手を伸ばそうとした時、ソウジは彼から箱を遠ざけ蓋を閉じる。

「言ったじゃろ？ 伝承者にしか見せられん」

「でも親父、この中にはこれから起こる事件や、今までの事件にも関わりのある事が書かれて居るかもしれないんだぜ？ それに、聖王教会なら詳しく調べられるかもしれないし」

「だから、お前が伝承者になればいいんじゃない。お前は免許皆伝じゃあ？ ちと早いとも思うが、これもいい機会じゃ。伝承者になってから、どうするかお前が決める。古文書の扱いはその代の伝承者が決めていいんじゃないよ。だから教会に持つていっても構わん。ただし、ワシを倒せたらな？」

キョウの反論を一蹴するとソウジは身体から闘気と魔力を放出させる。其れは以前の免許皆伝を賭けて立ち合いを行った時よりも大きく強いものだった。ソウジから感じられるプレッシャーはキョウへと叩きつけられる。キョウはその気当りをはじき返し、それに呑まれることなく言い放つ。

「そうかい、親父。本気みたいじゃねえか？ 良いぜ、やってやるよ！ー！」

キョウとソウジは立ち上がり構えをとる。キョウはバリアジャケットを展開せずに闘うようでありソウジも同様だった。これは魔導師としてではなく、武道家としての立会という事なのだ。

「今日のワシは今までとは違うぞ。手加減をせぬからな。怖気づいたか？」

「へっ、言ってる。今日こそ俺は親父を超えてやるよ！！ 行くぜ！！！」

「来い！！ キョウ！！」

キョウは草薙流の伝承者を賭けた立ち合いを始める。キョウはソウジに接近しジャブを放つ。しかし、それをソウジは予想していたかの如く手で払い落とし、左手で抜き手を放つ。其れはキョウの喉元に向かうが、彼はそれを右に半歩移動して交わす。其処からキョウはひざ蹴りを放つのだが、ソウジは距離を詰め威力が乗り切る前に其れを受け止める。

「行くぞ、ほうりゃあああ！！」

「っちい！！」

ソウジはキョウへ『鬼焼き』を放つのだが、キョウはそれをバックステップでかわす。しかし攻撃が掠っているのか、彼の着物の袖は焼け焦げていた。

「チャンス！！ てえいやああ！！」

「甘いわ！！ ふん！！」

キョウは『鬼焼き』を空振り空中に飛び上がっているソウジに向け『独楽屠り』を放つ。キョウの撓る蹴りがソウジの身体に迫るのだが、ソウジはそれを両手でブロックする。

二人は空中でぶつかり合った後、5mほど距離を取り着地する。

「以前よりも体術に磨きがかかるとるな。鈍って無いようで安心したぞ」

「へっ、そうかい？ 親父も相変わらず鍛錬を続けてるみてえじゃ

ねえか？」

二人は其処で構えをとりつつ言葉を交わす。二人の間にはピリピリとした空気が流れていた。隙は存在せずどんな攻撃が来ようとも即座に対応できるよう互いに備えていた。

「お前に今まで見せなかったワシの技を見せてやろう。行くぞ、キヨウ！」

ソウジは腕に炎を纏わせ、それを自分に向かい放つ。その瞬間、彼の身体からは今までとは比べ物にならない程の魔力とプレッシャーが放たれる。

「な、何だよそれ？」

「『外式・鳳凰錬気』といってな。ワシのオリジナルじゃ。うりゃああー！！」

ソウジは自分にブーストをかけているようだ。キヨウはその姿に僅かながら怯んだ様子を見せる。ソウジはすさまじいスピードで接近し、炎を纏う掌底を打ち上げる『炎重』をキヨウへと放つ。

「くっ！！　なんて威力だ」

「これで終わりではないぞ！！　はあああああ！！」

キヨウはそれを間一髪で防ぐがソウジは其処からキヨウへと連撃を放つ。重く素早い攻撃だった。両腕で状態を覆うキヨウのガードの隙間を狙い、手刀や抜き手が放たれる。キヨウは反撃する暇もなかったのだが、防御に集中してすっかりガードを固めて其れを防ぎ続

ける。キヨウは内心、年齢を感じさせないソウジのラッシュに舌を巻いていた。

「うおおおおお!!」

「何!!」

防御しているだけでは勝利は出来ないとキヨウは自身の身体から火柱を放ち、強引にソウジの攻撃に割り込む。戦闘経験の豊富さからソウジはそれをかわし、キヨウから距離をあける。

「『無式』の応用か？ 自分を巻き込む火柱など誰も考えんぞ」

「はあはあ。こうでもしねえと、親父の攻撃は止めらんねえからな」
キヨウは負担のかかる『無式』の一部を自分をも巻き込みながら使ったので、ダメージを受けている様子だった。

「良い発想じゃが、これはどうする？」

ソウジはそう言うと、キヨウの周りから様々な攻撃を放つ。目にもとまらぬようなスピードで移動しながらキヨウに向け『荒咬み』や『毒咬み』等の技や、裏拳、足刀、手刀を放っていく。
再びキヨウは防戦一方となった。

「ぐおっ!! ってい!! くっ!! (無式は今のダメージと残りの魔力を考えると厳しいか……。親父のスピードがこれ程とは想定外だったぜ。俺のスピードじゃあれに追いつくのは無理だ。どうする……)」

キヨウが攻撃を防ぎつつ打開策を考えている時にソウジのアップーがキヨウの防御を抜ける。

「其処じゃ！！ ほうらあ！！！」

「ぐわあー！！」

キヨウはソウジの攻撃を受けガードを開いてしまい、彼のアップーを顎に受けてしまう。其れを見逃すようなソウジではなく、腹部へ拳を叩き込みキヨウの動きを鈍らせる。キヨウが怯んでいる隙に彼は両手を胸の前に掲げ、手の間に炎を浮かべる。

「これで……終わりじゃあー！！」

ソウジは『大蛇薙』をキヨウへと放つ。この技は溜めに時間がかかるのだが、ソウジ独自の技『鳳凰錬気』による物なのか、通常では考えられないスピードで技が完成された。それに炎の大きさも今までの組み手で放たれた物より大きかった。

「うわあああああああー！！」

キヨウは『大蛇薙』をまともに喰らい、道場の壁にめり込む。ソウジは残心を取ると、キヨウに向け声を放つ。

「どうした、キヨウ！！ 立て！！ その程度で終わる様な男に育てた覚えはないぞ！！」

ソウジの言葉に反応し、キヨウは壁から抜け出す。彼は額から血を流していたが、その目にはまだ闘志がこもっていた。

口からも血が流れており、内臓を傷付けているようだ。

「ぺっ。やっぱ、強ええな。親父」

「立ったか。そうでなくてはな！！ほおおおお！！」

ソウジは再びキョウに向かい連撃を放つ。キョウはそれを防ごうとするが、ダメージによって動きが鈍っており先ほどと違い何発か被弾してしまふ。

「ぐはあ！！（重く速い攻撃に対して俺はどうすればいい。このままじゃさつきと同じ事になっちまう）」

「どうした、キョウ？ 打ってこんか！！」

「くっ！！（目で見てもダメだ。ガジェットに対しても心眼が使えたんだ。親父にだって通用する筈だ）」

キョウはソウジの攻撃を受けつつ、目を閉じる。ソウジは依然攻撃の手を緩めずキョウを打ちのめしていく。

「どうした、どうした！！（ほう、ワシの気配を読む気か）」

「（感じた！！此処だ！！）行くぜ、親父！！」

キョウは攻撃を加えるために近付いたソウジの胸ぐらを掴む事に成功する。

「何と！！」

「遊びは終わりだ！！ 俺からは逃げられねえぜ！！」

彼を床に座らせ自分も目の前に腰を下ろす。初めに道場に入った時の様に。

「親父、ありがとうございます!」

それからキヨウはソウジに向けて深々と頭を下げ礼を述べる。ソウジはそれを嬉しそうに見つめるのだった。息子の成長が嬉しいと感じているのであろう。

その後すぐ、キヨウは隣からギンガとアギトを呼んで治療を頼む。幸いな事にソウジもキヨウもそれほど酷い怪我ではなかったようである。

その後は、ソウジが自身の技をソウジに伝授し始める。初めて見せた『外式・鳳凰錬気』をキヨウに身に着けさせようというのだ。二人は立ち合いの後も鍛錬を続けていく。

アギトもギンガも二人が鍛錬を続ける事に特に反対せずナカジマ邸へと戻る。夕飯を二人で作るらしい。ギンガ達にとってはキヨウ達の行動は別に珍しい事ではないようだった。

ギンガ達が去ってから少し経ち、キヨウとソウジは道場に立っていた。ソウジは普段とあまり変わらない様子でキヨウに指導をしていた。

「これ位にしとくか? 後はいかに自分を羽と意識して動けるかどうかじゃ。この技は消耗が激しいから長時間の使用は控えるんじゃないぞ

「!!」

「あつ、ああ。分かったよ、親父」

キヨウは消耗しているのか膝に手を添え、肩で息をしていた。

「ほら、古文書じゃ。失くすなよ、我が家の家宝なんじゃから!!
良いか、絶対じゃぞ!!」

「サンキユ、親父。つて、分かってるよ!!」

ソウジはキヨウに声をかけると、古文書を手渡す。キヨウはそれを大切そうに受け取る。

二人は鍛錬を終えて居間へと移動していくのだった。

「なあ、親父。教会でカリム理事って人から、アーデルハイド家について話を聞かせてもらったんだけど。詳しく教えてくれないか？」

キヨウとソウジはちゃぶ台につき、お茶をすすりながら話をしていた。キヨウの言葉を聞き、ソウジはちゃぶ台の上に置かれた古文書を見つめながらアーデルハイド家についての話を始める。

ソウジは古代ベルカ語を先代である父から教えられていたのだという。キヨウ自身もほんの少しではあるが古代ベルカ語をソウジから習っている。だが、多少読める程度の物だった。

アーデルハイド家は聖王の近衛兵を務めた『シユンカ・Y・アーデルハイド』の子孫であり、代々聖王を守る一族であった。聖王が戦に出る際は常に同行し共に闘っていたという。

それだけではベルカに存在する旧家と変わらないのだが、アーデルハイド家の仕事はそれだけではなかった。ベルカに流れた『オロチ』の魂の一部を封印することが真の目的だったのだ。

始祖がベルカに流れ着き、それを保護したのが聖王だったという。彼は聖王と共に戦場を駆けながらも、『オロチ』の魂を探し求めたそうである。

それからはベルカに伝わる昔話と同じ内容だった。始祖は『オロチ』を見つけるのだが、その力は強大であり歯が立たなかった。そこで、同行していた聖王がどうにかしてそれを取り込み、自分ごと討たせたのだという。

『オロチ』は聖王の身体から飛び出すと赤い宝石に変化したという。その宝石を守護するのがアーデルハイド家の代々伝わる使命であったが、幾度の戦乱の中でそれは失われてしまったというのだ。

それからはカリムの話通りで、数代下った後に聖王を祭るかどうかの意見で他の家々と対立をして、ミッドに移り住んだのが現在のアーデルハイド家であるとのことだった。

「赤い宝石？ それって、まさかレリックじゃ」

「さあ、ワシにも分からん。だが過去に『オロチ』の力を制御する研究が行われていたようだ」と文献には有った。聖王の力を更に増大させようとしたんじゃないかと。その頃は聖王の力も強く、当時の御先祖は従っしかなかったようじゃ」

「そうか。ありがとう、親父。教会にもこの事を話しても良いんだろ？」

「ああ、お前が必要だと思っんならな」

話が終わると、ちょうど夕飯時になっており昼と同様にヴィヴィオが二人を呼びに来た。それからナカジマ家で夕食会が開かれるのだった。

夕飯のメニューはギンガとアギトが作ったビーフシチューとローストチキン。ヴィヴィオが手伝ったというコールスローと昼とは違い洋風の物だった。

夕食の中で、一同にキョウが正式に『草薙流』の伝承者になったという事がソウジの口から語られた。

クイントもヴィヴィオもとても喜んでキョウを祝う。ギンガとアギトに至っては目に涙を浮かべてその事を喜ぶのだった。

「アギトお姉ちゃん、泊まって行ってよー!!」

夕飯が終わるとヴィヴィオがアギトに泊まっていくようにいう。昼間に一緒に過ごして、別れるのが寂しくなった様なのだ。クイントも快諾したのでアギトはナカジマ邸に泊まる事にする。ヴィヴィオはクイントと共に寝るそうである。それにアギトも加わるようだ。

「久しぶりにキョウの部屋で寝られると思ったのに……」

「良いじゃねえか、アギト。久しぶりにクイントさんと一緒に寝るんだろ？」

アギトはキヨウの言葉に少し顔を赤らめる。大好きなクイントと一緒に眠れる事が嬉しかったのだが、ヴィヴィオの前で其れを認めてしまう事が恥ずかし様だった。

「うるせえよ」

「照れんなって。じゃあ、アギトお世話になります!!」

そう言うとキヨウは自宅へと戻ろうと玄関に向かう。ソウジはすでに酔っており先に家に帰っていた。

キヨウが玄関先へと移動するとギンガが後をつけてくる。

「どうしたんだよ？ ギンガ？」

キヨウが彼女に声をかけるが、ギンガは何も言わず抱きつき唇を重ねてくる。

「お、おい。どうしたんだよ？ 突然」

ギンガはキヨウの耳元でささやく。

「私からのお祝いだよ。えっと……。それとね、キヨウ君。今夜、お邪魔して良い？」

「はあ？ それって、まさか……」

「言わせないでよ!! もう!! それで……、良いの?」

「あ、ああ。うん。分かった」

「じゃ、じゃあ、後だね」

それからキヨウとギンガは別れそれぞれの家へ戻っていく。

時間も十二時をまわった頃、キヨウは入浴などを済ませ自室に一人佇んでいた。ソウジは酒も入っていたので、キヨウが家につくと既に眠っていた。

窓の方からは足音が聞こえてくる。ギンガが来たのであろう。キヨウは窓を開け彼女を部屋に招き入れる。

「な、何か、はしたないよね。こんな時間に男の子の部屋に来るなんて……」

ギンガはキヨウの隣に座り言う。彼女からはシャンプーの良い香りが漂っており、キヨウは思わず生唾を飲み込む。

「ほ、本当に良いのか？」

「……うん。私、キヨウ君の事、ずっと大好きだから。昔から、それにこれからも。誰にも渡したくないよ」

「ありがとう、ギンガ。俺も、お前の事を絶対離さない。ずっと一緒だぜ」

それから二人は唇を重ねる。今までと違い、その口付けはとても深いものだった。まるでお互いを求め合うかのようだ。

キヨウとギンガはその後、互いの思いを伝えあう。自分という存在のすべてをかけて。

二人はその晩、結びつきを深めるのだった。

翌日、ギンガはアーデルハイド家の台所に立っていた。アギトがナカジマ家に泊まったので朝食は彼女が作る事になっていたらしい。朝、ソウジに会い彼女はそう説明した。

「ギンガちゃん、前よりもきれいになってないかの？」

「そうですか？」

「昨日、何か有ったのかい？」

「い、いえ。べつ、別にそんな事は……」

「そうか、なら良いわい。そうじゃ、キヨウを起こしてきてくれるか？アイツはうちに帰ると昔みたいに寝過ぎるよっじゃ」

「はい、分かりました。おじ様！！」

ギンガは慌ててキヨウの部屋に向かう。その歩き方はどこかぎこちないようだった。それを見てソウジは嬉しそうな声で呟く。

「これは、ゲンヤとクイントに報告せねばならんなあ」

ギンガはキヨウの部屋に移動すると、布団にくるまる彼に口づけをして声をかける。

「キヨウ君、起きて。もう朝ごはんだよ」

「むにゃ？ ギンガあ？」

キヨウは寝ぼけていたが彼女の顔を見て意識を覚醒させる。そして昨夜の事を思い出し赤面しだす。ギンガも同様で、キヨウと同じタイミングで頬を染めるのだった。

「ほ、ほらキヨウ君。早く着替えて来てね」

そう言うと彼女は部屋を後にするのだった。その後の食事でのキョウとギンガの二人は、終始顔を赤らめ無言だった。そんな二人をソウジはニヤニヤしながら眺めていた。

「ギンガ、醤油とって」

「はい、キョウ君」

二人は醤油を渡す際に手が触れ合い更に顔を赤らめる。そのような感じで朝食は進んで行くのだった。

その後、キョウとギンガはアギトとヴィヴィオと共に機動六課に向かう。

出発の際、ソウジとクイントはとても嬉しそうな笑顔で四人を送り出すのだった。その笑顔の多くはキョウとギンガに向けられていたのだが……。

「おじちゃんとママ、どうしたのかな？ 凄く嬉しそうだったね？」
バイクで移動している際にヴィヴィオがアギトに尋ねる。アギトは笑いながら答える。

「ヴィヴィオにはまだ早いけど、昨日の夜に何か良い事があったんだよ。なあ、キョウ、ギンガ？」

「うっ！ー！ おっ、おい、アギト！ー！ー！」

「なっ、何を言うのよ、アギトちゃん!!」

二人は慌てだす。キョウは運転をミスしそうになるのだった。

それから四人は無事に機動六課に帰りつき普段通りの日常へと戻っていく。

キョウとギンガの下にはその日、ゲンヤからメールが届く事になる。内容は二人にしか分からなかったが、後日三人が108部隊に行った時、ゲンヤのその時の様子をラッドが二人に語った。

「どこか嬉しそうでもあり、寂しそうでもあったよ。部隊長の背中から哀愁が漂っていた。その日は私もジョンも飲み屋に連れまわされたなあ。何時も以上に酒の量が多かったよ。何か有ったのかい？」

Ep64 里帰り後編（後書き）

ついにやってやったぞ、畜生……。
主人公、俺と変わってくれorz

失礼しました。

ソウジのオリジナル技のイメージは『幽遊白書』の飛影の『邪王炎
殺黒龍波』です。

キョウが使った技は『伍百式拾四式・神塵』^{かむくじ}という技です。
拙作ではキョウが編み出した事にしております。

アーデルハイド家の下りは完全に捏造です。

私は『Strikers』までしか知りませんから『Vivid』
とか『Force』には繋がりません。申し訳ありません。
読んでいただき、ありがとございました。

Ep65 穏やかな日々と (前書き)

ギャグ回です。そうとしか言いようがないです。
伏線に気付かれないと気分が良いです。

緩い雰囲気で書こうとするのに気付けばシリアスになりかけて、キ
ョウとエリオのセリフはなかなか決められませんでした。

今回、私の中でのタブーを一つ犯します。

この先、シリアスな展開が多くなりますので、ちょっとはっちゃけ
気味です。

メタな発言も多いので不快に思われるかもしれませんが、ご了承承
ださい。

ご意見、ご感想、ご指摘等を募集しております。

気軽に書きこんでいただけたら嬉しいです。

キヨウとギンガが里帰りをする少し前にさかのぼる。時期で言えばヴィヴィオが六課に保護されたばかりの頃だ。

薄暗い部屋の中で、二人の人物がニヤニヤしながらキーボードにデータを打ち込んでいる。それはデバイスのデータの様であった。その二人の目の前のウィンドウにはグローブ型デバイスと銃型デバイスのデータが表示されている。

「ふふふ、フランメ・ファウストの修復も粗方終わったわ。それにエリオもストラダに機能が隠されているって知らないし。ああ、早く言いたい。『こんな事もあるうかと』を！！」

「シャーリー、君はその為だけにエリオ君にモードチェンジの事を黙っていたのかい？ 確かに技術者としてはその台詞に懂れるだろうけど……」

その二人の人物とはシャリオ・フィニーノとグリフィス・ロウランであった。シャーリーはキヨウの先代デバイス『フランメ・ファウスト』の修復作業を、エリオの『ストラダ』のメンテナンスと並行して行っていたのだ。二つのデバイスはデスクの上に並んで置かれている。後は渡すだけの状態の様だ。

グリフィスは休憩時間に彼女に捕まり付き合われているようである。マイペースなシャーリーに付き合わされている彼の顔には、少しだけ疲れの色が浮かんでいた。

「その為に黙っていたわけじゃないよ。説明する前にキヨウ君達の話を打ち切っちゃって、タイミングを逃しただけ。みんなストラ

ダは無骨なデバイスだと思いこんじゃって、しかもストラダ本人もそれを気に入っちゃっているから」

シャーリーに言葉に『ストラダ』は反応し、コアを輝かせながら言葉を放つ。その声は穏やかながら威厳に満ちた物だった。

『その通りです。自分、不器用ですから……』

「あれ、シャーリー？ デバイスの言語設定変わってない？ それに音声が凄く渋い感じがするんだけど」

グリフィスは苦笑いしつつ少々あきれ気味でシャーリーに尋ねる。聞かれたシャーリーは特に変わった様子もなく答える。

「何処をどう間違ったのか、自己学習してこうなっちゃったんだよね。しかも男は黙って背中では語ってというのがモットーらしいよ？ 本人曰く」

「だから他のデバイスと比べて無口なんだ？」

『自分、不器用ですから……』

尋ねてもいないのに『ストラダ』は二人の会話に割り込む。二人はそれを華麗にスルーして話を続ける。

「それにエリオはモードチェンジに気付かずに槍術の腕をどんどん上達させていつてるから、黙っていても良いかもとか思ったりして……」

「ダメじゃないか。デバイスの性能を完璧に引き出してもらおう様に

なつてもらわないといけないのに。もし、それで何か問題が起こつたらどうするんだよ」

「こんな事もあるのかと！ あつ、使っちゃった。基本的には今までのフォームとそれほど変化が無いんだよ。通常のスピアフォームから推進力を強化したデューゼンフォーム、エリオの電気変換資質を最大限に生かせるウンヴェッターフォームに変形するんだけど。基本的に求められるのは槍術の腕なんだから。慣れるのに時間が掛からない様になっているから」

「それなら良いけど。じゃあ僕はそろそろ休憩が終わるから戻る事にするよ。余りやり過ぎないようにね？」

グリフィスはデバイスルームから退出する。シャーリーは顔をディスプレイに向けたまま手を振り、彼を送り出すのだった。

それから10分程してキョウとエリオがデバイスの受け取りにやってくる。シャーリーはそれをいい機会だと思い、エリオに『ストラード』の機能の補足をするのだった。

キョウは渡した際にちゃんと説明しとけと呆れつつ注意をする。

『自分、不器用ですから……』

デバイスルームでキョウ達が話をしている間も『ストラード』は一人呟くのであった。

デバイスを受け取るとキョウとエリオは夕食の時間だったので食堂へと移動する。その日はシャーリーとのやり取りで、少し時間が遅くなってしまいギンガ達は食事を先に終えているようだった。そこでキョウとエリオは男同士二人で夕食をとる事にする。

「兄さんと二人で食事するのって初めてな気がします」

「そうか？ そりゃあ、何時もみんなと一緒に食べてるもんな。でも、悪くないだろ？ 落ち着いて食事が出るんだし」

「はい、何か新鮮です」

キョウとエリオの付くテーブルの上には山盛りの料理が並んでいた。もちろんエリオの分である。二人は普段と違い穏やかに食事を進める。互いに様々な話を話しながらゆっくりとした時間を過ごすのだった。

「そうだ、兄さん。僕に稽古をつけてくださいよ。ストラダーの機能も把握したいですし、明日とかお願いできませんか？」

「うん？ 別に良いけど……。それよりも偉いな、エリオ。新しい技術を身につけるために努力することは結構きついのに分かっているんで願い出るなんて」

キョウは嬉しそうに笑いながらエリオの頭をガシガシと撫でながら言い、エリオも照れたように笑う。

「僕も強くなりたいんです。もっと強くなって大切な人たちを守るようになりたいですし……」

エリオはそこまで言うと言つと真剣な表情で言葉を続けた。キヨウも雰囲気を感じて頭から手をどけて真剣な表情でそれを聞く。

「僕達と同じ思いをする子たちを減らしたい。いえ、辛いことから守ってあげたいんです」

「そうか……。でも、焦る事はないんだぜ。お前もまだ守られても良い年なんだから。俺達が何とか頑張ってみて、それでもダメだったら、次にお前が俺達の後を継いで頑張ってくれりゃ良いんだ。今はしっかりと土台を作っていかなきゃな？　なのはさん達の指導もその為のもんだし」

キヨウはエリオに優しく微笑みながら言う。彼はエリオに自分達の後を継ぐ者として期待をしているようだ。

「はい……。分かりました」

エリオは子供扱いされた事が悔しいのか少し元気が無い様子で返事をする。

「でも、ちゃんと稽古は付き合っただけよ。使いこなさないと『ストラダー』も可哀想だしな」

「本当ですね？　やったあ、頑張ります！」

キヨウの言葉にエリオは元気を取り戻す。やはりエリオも子供なのだろう、表情が目まぐるしく変わる。

「自分、不器用ですから」

『ストラーダ』の発言によりその場の空気は緩い物になってしまったのだ。それから二人は再び食事を続けていく。その時、食堂にヴァイスと見慣れない男性の姿が現れる。ヴァイスと共に現れたのは筋肉質で青いノースリーブを纏った男性だった。その耳には犬耳を生やしている。

「ねえ、兄さん。あの人ってどなたですか？」

「さあ、俺も初めて見る人だ。エリオ、気になったら即行動だ。おい、ヴァイスさん！！良かったら一緒に食事をとりませんか？お連れの方も一緒に！！」

キヨウは二人に向けて声を掛ける。ヴァイスはキヨウの申し出を快く受け取り同席する事にする。

「おう、キヨウとエリオだけでの夕飯か。珍しいな、いつもの綺麗どころが居ないなんて」

「ヴァイスさん、からかわないでくださいよ。って、そちらの方はどなたですか？」

キヨウはヴァイスの言葉を受け流し見慣れない人物の事を質問する。ヴァイスはスルーされて少し落ち込んだ様子を見せる。

「私が誰だか分からないのか？ いつも一緒に居るぞ」

「えっと、すみません。（おい、エリオ。お前、あの人が誰か分かるか）」

キョウはその人物に謝りつつエリオに念話を送る。エリオはヴァイスの肩をポンポンと叩き、励ましている最中だった。

「はっ、はい？ ご、ごめんなさい。僕も分かりません」

「私だ。ザフィーラだ」

「ええええ？ ザフィーラ（さん）？」

その男とはザフィーラだった。キョウとエリオは驚愕の声を重ねる。それから、謎の男の正体も分かりヴァイスも機嫌を直したところで、四人は食事をしていく。その際、キョウがザフィーラを呼び捨てにするエリオへと注意する一幕もあった。

「こら、エリオ。ザフィーラさんは局員じゃないけど年長者なんだし、目上の人なんだからちゃんと敬語を使えよ。呼び捨てじゃなく『さん』をつける、デコ助野郎」

「えつと、そうですね。ごめんなさい、兄さん。ザフィーラさんもすいませんでした」

「気にするな、エリオ。今まで通りで構わん。キョウも変に気を使わなくて良い」

ザフィーラはキョウの意見を否定する。今まで通り親しみをもった喋りの方が好ましいと彼は付け加える。

「分かりました、ザフィーラさん。エリオ、ごめんな。ちょっと言い過ぎたわ」

「いえ、良いですよ。兄さん」

キヨウもザフィーラの言葉で意見を撤回し、エリオに謝罪する。エリオは特に気にしていなかった。ある一部を除いて……。
キヨウはザフィーラの事を以前から『さん』付で呼んでいた。それについてはその後も言及されなかった。

「って、あの、僕のデコって目立ちます?」

「大丈夫、目立ってないぜ。あと数十年後はどうだか知らないけどな?」

「そつ、そんな?」

エリオはキヨウの発言が気になり一同に意見を求める。それをヴァイスはニヤニヤしながら答えるのだった。キヨウとザフィーラも二人の様子を見て笑顔になる。四人は互いに冗談を言い合い親睦を深めていく。

途中、キヨウが自分の上司のジョンとザフィーラの声が似ている事を指摘する。ジョンの事が気になり三人はキヨウに質問をする。キヨウはデバイスの格納領域から以前ジョンに貰った法被を取り出して彼に対しての説明をする。仕事も出来て、面倒見も良いしルックスも整っている。だが、アイドルオタクであり、そのせいで女つ気が無いと。

「おい、キヨウ。お前も何だかんだ言っただけでそれを持っているんだから人の事言えないぜ?」

「違いますよ、ヴァイスさん!! これは戴き物ですし、部屋に置くのも何かあれだったんでデバイスに仕舞っていただけです!!」

「ホントかあ〜?」

「兄さんに、そんな趣味が……。兄さん、僕もそのユカリン様のコンサートに行ってみたいです」

「エリオ、いくらキヨウを慕っているからといっても何でもまねしようとするのは余り良い事ではないぞ」

「そうかな? ザファイラ」

「違う、誤解だあー!!! あっ、エリオ。この間、ジョンさんに誘われたからお前が変わりに行って来てくれないか? 物販のポスターを頼む」

『自分の気持ちにまっすぐで、いいんじゃないですか』

キヨウも何だかんだ否定しつつもファンになっていたようだ。彼は人知れず音楽プレイヤーでジョンから渡されたCDを聞いているようである。此処でも、誰も聞いていないのに『ストラーダ』から洪い声が聞こえてくる。

こういった感じで男だけの夕食会は続いていったのだった。

翌日、キヨウはエリオと共に空き時間にシミュレーターの中に入っていた。アギトも見学としてついて来ていた。そこは市街地ではなく訓練施設の様な風景に設定されていた。キヨウは珍しく自分の身長ほどある鉄の棒を手に持っていた。

「キヨウが棒術を使うのって何年ぶりだろ？」

「あれ？ 兄さん。今日は無手じゃないんですか？」

「ああ。今日は棒術で立ち合おうと思ってな。って、どうした？ そんな意外そうな顔して」

「いえ、兄さんが棒術の心得があつたなんて知りませんでしたから」
キヨウはエリオに何故、棒術が使えるのか説明した。ソウジが武器を持った相手と無手で戦う時のためにキヨウに教えたというのだ。相手の間合いを知るためにはそれを学ぶ事が役に立つという考えの下、棒術を学んだとのことだ。当然、アギトも手ほどきを受けている。

その日は訓練機材の中にたまたまそれを見つけたので、せっかくだから使ってみようと思ったとキヨウは語った。

「突けば槍みたいに使えるし、払えばハルバードみたいにも使える。

短く持てば剣の様に使えるし、棒術って意外と役に立つんだぜ。それに武道に共通する、重心を保つ事の訓練にも役に立ったからな。まあ、基礎を学ぶ過程でちょっと齧っただけだし、俺の腕は大したことないぜ?」

「でも、どうして今まで使わなかったんです」

「うっ。それはだな……」

エリオの質問にキヨウは言葉を詰まらせ、アギトが変わりにその問いに答える。

「キヨウって、拳法よりも棒術の方がセンスあるって親父から言われて、いじけてた事があったんだよ。こいつ、拳法家としてのプライドが高い所があるからな」

「うっ、うるせえ。ほら、エリオ。始めようぜ」

キヨウは強引に流れを打ち切りエリオと立ち合いを始める。

彼の棒捌きは確かに様になっていた。一流とは呼べないがそこそこ使えており、『ストラダ』の機能に慣れるために全力で戦えないエリオと、割と良い勝負を繰り広げていくのだった。

「くられ、エリオ!! ヒートブランディング!!」

「くっ、重い!!」

キヨウは棒の先端に炎を纏わせ飛び上がり、エリオに向けて急降下しながら突きを放つ。エリオはそれを受け止める事に成功するがキヨウは更に連撃を放とうとする。

「超火炎旋風棍！！ ファイヤー！！」

キョウはエリオに肉薄した状態で炎を纏わせた棒を回転させる。そして掛け声の下、その炎をエリオへ放つ。本来の得物でないのが影響してか、その炎の大きさは『毒咬み』と同じ位のものだった。

「せやあ！！！」

エリオは『デューゼンフォルム』を使いそれをかわし、キョウから距離をとる。

その時、シュミレーターの中に声が響く。

「ほお。棒術か、面白いな。キョウ、私と手合わせしてもらおう！！」

「シグナムだけずるいです。私も参加したいです！！」

「シグナムさん？ それに、リインも？」

キョウが声を放った先にはシグナムとリインの姿があった。キョウ達は立ち合いを中断する。

二人も自由時間らしく訓練をしに来たそうなのだ。そこでキョウとエリオの仕合を見かけて声をかけたのだという。

「すまん、エリオ。せつかくの鍛錬の邪魔をして」

「いえ、シグナムさん。兄さんのお陰でかなり感覚をつかめたんで、後は自分で何とか出来そうですから」

シグナムの謝罪をエリオは受け入れる。出来た少年である。

「せっかくなんで、リインはキョウさんとユニゾンしてみたいです。良いですか？」

「私は闘えるなら別にかまわん。キョウ、アギト、お前達はとうだ」

「私は別に良いですけど、大丈夫ですか？」

「俺とリインの融合適性って確か最悪だろ？ 融合事故が起こるかもしれねえよ？」

「リインはこう見えて、人知れずキョウさんとのユニゾンのために調整を続けていたです。融合適性の足りない分は勇気で補えば良いってどこかの偉い人も言っていたです！！」

リインはキョウとアギトの心配をよそに、自信満々に胸を張りながら言い放つ。

「誰だよ、そんな事言ったの……」

アギトは思わずリインに突っ込みを入れてしまふのだった。

「まあ、やるだけやってみるか。リイン、行くぞ！！」

「はいです！！」

「」「ユニゾン・イン！！」「」

キヨウとリインがユニゾンを開始する。まばゆい光に二人は包まれる。どうやらユニゾンすること自体は出来たようだ。だが、光が収まると誰も予想しなかった者が姿を現す。

「えっ？ 女の子？」

「誰だよ、あれ」

「まさか、融合事故か？」

光が収まると、そこには14歳位の少女が立っていた。ストレートで水色の髪を腰まで伸ばし、紫のタイトなスーツを身に纏っている。両手には『フランメ・ファウスト？』とは違う黄色いグローブがはめられていた。

シグナムが代表して声を掛ける。

「お前はキヨウか？ それともリインか？」

少女は首をかしげながら答える。

「キヨウ？ リイン？ お姉ちゃん、それって誰？ 私はクーラだよ」

「クーラ？」

思わず三人は声を重ねてしまう。少女は三人を無視して準備運動を始める。棒は地面に投げ捨てられていた。

「お姉ちゃん、私と闘うんでしょ？ 早く闘おうよ」

「ふえ？ あっ、ああ。そうだな」

少女に声を掛けられシグナムは普段の彼女からは想像できないような声を出してしまふ。しかし、何事もなかったかのように構えをとる。

それから二人は立ち合いを始める。クーラから感じられる魔力はキョウ単体の時よりも小さかった。融合事故のせいであろう。だが、その闘い方はキョウともリインとも全く違った。

口から氷の息を吐いたり、地面から氷柱を放つなど、どちらとも違う戦い方だったのだ。

「フッ！！」

「ふん！！」

氷の息をシグナムは切り払う。そして斬撃を加えようと距離を詰めるのだがクーラは足に冷気を纏わせ、フィギュアスケートの選手のように回転しながら蹴りを放ってくる。

「ククルクルつと！！」

クーラはトリツキーな動きでシグナムを翻弄する。正統派と呼べるような剣士であるシグナムは確かに戦い辛そうな様子であった。

シグナムは一度様子を見るために空中へ飛び上がる。それをクーラも追った。キョウとリインはどちらも空戦適性があるのでシグナムも、そしてアギトもエリオも空を飛ぶと思っていた。だが、クーラのとった方法は意外なものだった。

氷をまるでナカジマ姉妹の『ウイングロード』の様に展開し、それを滑りながら登って来たのだ。

しかもすさまじいスピードで。あっという間にシグナムとの距離を詰めてしまふ。

「「いつくよ、お姉ちゃん!!」」

クーラはそう言うとシグナムに飛びかかり、彼女の背に飛び乗る。そして立ったまま、両手を自分の頭の上で叩きトリガーワードを発する。

「「ハイ!! ハイ!! ラ カチョーラ!! ハイ!! ハイ!!」」

「うわああああ（何だ、魔力が抜けていく）」

クーラはシグナムから飛び降りると氷の道の上に着地をする。

「今度は私から行くぞ!! はああああ!!」

シグナムがクーラに切りかかろうと『レヴァンティン』を振り上げる。だがその時、クーラの身体からはまばゆい光が放たれる。

「うわっ?なんだ?」

「あれ、私は今まで何してたですか?」

光が収まるとクーラが立っていた場所にキョウウとリインが姿を現す。

「もう良い。私は疲れた……」

シグナムは戦意を喪失してしまった様で、立ち合いはそこで終わり

になった。確認したところ、キヨウとリインはユニゾン中の記憶が全くないらしい。明らかな融合事故なので二人のユニゾンは封印される事となった。

「ユニゾン中、俺達はどうなってたんだ？ エリオ？」

「確かに気になるです!!」

「えっ、えっですすね。兄さんはリイン曹長とユニゾンしてクリアって言う女の子に変身してました(ちよっと可愛かったな、って僕は一体何を考えているんだ。あれは兄さん。あれは兄さんなんだ!!)」

「マジかよ……。悪いけどリイン、もうユニゾンはしないでおこげせ」

「そうですね。残念ですけど、融合事故も起こってしまいましたし」

エリオは超えてはいけない一線に足を進めそうになり、自分に言い聞かせる。一方、キヨウとリインは別段変わった様子はなかった。その後、キヨウはシャマルによる診断を受け、リインはシャーリーによるメンテナンスを受けるのだが、双方とも何の後遺症も見られなかった。

そして融合事故の原因も分からずじまいだった。

頑張れエリオ、負けるなエリオ。君の傍には超優良物件が居るのだぞ。其処に早く気付くんだ。

機動六課はその日も平和だった。

Ep65 穏やかな日々と (後書き)

ストラーダが健さんになっちまった。

私の中でのタブー。それは『TS』です。もう金輪際やらないと思います。

今回キヨウは棍を使用しましたが、今後は一切使用しないです。技の元ネタはアレとアレです。ってか二つ目はそのまんまでしたけど。

クーラの元ネタは『KOF』から『クーラ・ダイヤモンド』です。この子、超可愛いんですww

『ラ カチョーラ』が前からやってみたかったです。我慢できずに、ついやってしまいました。

ダイアナ役にシグナム（刀繋がり）、フォクシー役にフェイト（同じく）、キャンディー役にギンガオースバル（戦闘機人とアンドロイドで）という配役も考えていたんです。そのメンバーで『ラ カチョーラ』をやるうかと……。

ですが対戦相手が思いつかず、結局はシグナム姐さんをお願いしました。

今回は番外編に近かったかもしれませんが本編と繋がっています。

読んでいただきありがとうございました。

Ep66 古の厄災と過去の記憶 前編（前書き）

うちのスカさんは闘います。

今回はすっごい急ぎ足ですし大量の捏造があります。申し訳ないです。

ミッドの某所にあるスカリエッティのアジト。其処には人が入った生体ポッドが並んでいる。その中の一つに、ゼスト隊の一員であるメガーヌ・アルピーノの姿もあつた。彼女の生体ポッドの前には二人の人物が立っていた。

ゼスト・グランガイツとルーテシア・アルピーノである。二人はメガーヌの姿を眺めながら、もう何度目になるか分からない、スカリエッティの支配から逃れる方法を話していた。

「やっと終わった。ねえ、ゼスト。母さんの身体を持ちだして、管理局に保護してもらったら、ドクターに頼らずに母さんを救えるかもしれないよ。母さんの生体ポッドの転移術式はばれていないみたいだし。キョウ兄ちゃん達ならきつと悪いようにはしないと思う」

ルーテシアは母の眠るポッドを撫でながら言う。彼女は以前からナンバーズやスカリエッティの前でも、母の生体ポッドに縋るつく様なしぐさをしていた。その際、ポッドに目立たないように少しずつ転移魔法の術式を書き込んでいた様なのだ。後は転移させる場所を書き込めば完成、という段階に漕ぎ着けたようだ。

「そうだな、ルーテシア。メガーヌの復活には11番のレリックが必要だとスカリエッティは言っているが、どこまで本当のことか分からない。11番も手に入ったことだし此処から去る良い機会かもしれない。あいつ等は公開意見陳述会への襲撃を計画しているようだ。その時はナンバーズからの監視の目も薄くなるだろう。そのタイミングで行動を起こすのがベストの筈だ。ぐっ、ゴハッ!」

「だっ、大丈夫?ゼスト!」

ゼストは突然血を吐きだし、その場に倒れ伏せる。ルーテシアが声を掛けるが反応はない。呼吸はしていたので気を失っただけの様だ。その後、彼はルーテシアから連絡を受けたガジェットにより生体ポッドの中に入れられる。

ゼストはメガーヌとルーテシアの為に身体に鞭を打ってレリックの搜索を続けており、疲労が溜まっていたようだ。眠る様に生体ポッドの中を漂うのだった。

「ウーノ、君はオロチという物を知っているかい？」

「オロチですか？ ドクター。確か、ベルカ地方に伝わる怪物の名前かと……。おとぎ話に登場する様なものですし、実在しないのでは？」

時を同じくして、ジェイル・スカリエツィはウーノと会話をしていた。彼らの居る場所は巨大なモニターがある場所で、以前ヴィヴィオが保護された事件で使用されていた部屋だった。その場には二

人以外にクアットロの姿も見える。

「ウーノ姉さま、ドクターが今回の作戦に何も関係ないことをおっしゃるとお思いで？ オロチの伝承の下になった話になる一族が、今もミッドに存在している事と関係があるのですよね？ ドクター」

彼女は端末を操作しながら二人の会話に割って入る。クアットロの言葉を聞き、スカリエッティは口元を歪め、言葉を続ける。

「そうだよ、クアットロ。アーデルハイド家といってベルカの古い家だ。次元漂流者の子孫で、一族の始祖がこの世界に『オロチ』を連れて来たらしい。その始祖が当時の聖王と共に『オロチ』を封印したのが例のおとぎ話さ」

「それと今回の計画と何の関係が？」

ウーノは若干イラつき、声を荒げつつ尋ねる。スカリエッティはそれを面白そうに見ながら話す。

「そう慌てないでくれたまえ、ウーノ。十数年前、私に対抗してプロジェクトFの研究を行っていた一派があったのを覚えているかい？」

「はい。古代ベルカの炎熱変換資質を持った人物を蘇らせ、『烈火の剣精』と呼ばれる融合騎との融合適性を高めた人造魔導師を生み出す研究だった筈です。ですが、ゼスト隊の手によりその研究は中止されたと……」

「そうさ。そしてその人造魔導師が、あの機動六課に所属しているんだ。融合騎とタイプゼロの二体と共にね。しかも、彼の基になっ

た人物というのが、その始祖なんだよ。あの一派がどうやったのかわからないが始祖の遺伝子情報を手に入れたみたいなんだ」

そう言うとスカリエツティはウィンドウにキヨウとアギト、そしてナカジマ姉妹の姿を映し出す。同時に別枠でレリックの映像も。

「古代ベルカでは『オロチ』の力を研究されていたのさ。その研究の名残があレリックだよ。聖王や有力な騎士たちが『オロチ』の力を制御できるようにするため、生み出されたのがレリックさ。その実験自体は上手くいかなかったのか文献にも残っていない」

スカリエツティの話に興味が出たのか、クアットロが目を輝かせる。

「ドクター？　もしかして、その『オロチ』の力を手に入れる事が本当の目的なんですか？」

「それは少し違うな」

クアットロの言葉をスカリエツティは否定する。そして右手から赤い光を放つ。それは光の筈だがまるで血液の様な様相だった。

「まあ、綺麗〜！！」

「ド、ドクター……。それは？」

「『オロチ』の力自体は既に手に入れているのさ。レリックから抽出し再現したんでね。だけど、レリックからでは不完全なのか制御が出来なくてね。想定していた程の能力は発揮できないのさ。だが、伝承の中で聖王が自身の身体に『オロチ』を宿し、アーデルハイドに封印をさせたと残っているだろう？　聖王の血を引く『器』とア

「デルハイドの始祖のクローンの身体を調べること、この力を制御する事が出来るかもしれないじゃないか」

「では、ゆりかごや襲撃は？」

「ウーノ、私は今更ゆりかご何かに興味はないんだよ。この神の力を持って、私が新たな神になるうというのだから。ハハハハハハハ！！！」

スカリエツティは笑い声を上げる。彼の背中からは髑髏を模った様なオーラが上がるのだった。

帰省してから少し経ったある日の晩、キョウは一日の業務を終えて、何時もと同じ時間に布団に入っていた。

その日、彼は夢の中で、再び何も無い真つ暗な空間に漂っていた。其処では以前と同じようにある人物の声が聞こえてくる。八尺瓊瞬火の声だ。

『キヨウよ。我が血を引きし者、キヨウ・アーデルハイドよ』

「うっ、あなたは？ 御先祖様！！」

その姿は以前と同じ光の球の様な姿だったが言葉は以前よりはつきりしている。その光は強く輝いたかと思うと人の形をとる。瞬火の姿は以前見た時より成長しキヨウに良く似た青年の姿だった。

彼は再び自身の過去をキヨウに見せるという。キヨウは二度目の事なのでそれをすぐ受け入れる事にする。

だが、その前にある質問をした。前回の吐血の事だ。病院でも原因が分からなかったので、瞬火なら何か知っているかもしれない思っただの。

『それは『オロチの血』の呪いだ。我が兄に宿った力の一部が、我にも流れ込んだのは知っていますか？ お前以外にも『オロチの血』を引く者がこのミッドに存在している。その者の影響もある。それ以上に『オロチ』復活が近い事も起因している』

「『オロチ』が復活？ どういうことですか？ 確か伝承では、あなたと聖王がオロチを封じたとあった筈です」

瞬火は語る。『オロチ』を滅することに成功はしたが、その力に魅せられた古代ベルカ人の子孫たちが『オロチ』を再現し、その時の聖王にさらなる力を与えようとしていたと。『オロチ』の残濁であるレリックの研究を行い、聖王や騎士にさらなる強化を図っていたというのだ。そしてその研究を現代でも引き継ごうとする者がいる

と瞬火は言う。

「それは、もしかして……。ジェイル・スカリエツィ」

「ああ。無限の欲望、ジェイル・スカリエツィだ。その者が『オロチ』の力を手に入れようと画策している。もし万が一『オロチ』が復活したら魔導師では太刀打ちが出来ん。だからお前には私の過去を見て、その対処法を学んで欲しいのだ。『被う』力を持つ『草薙流』の伝承者として」

「魔導師では太刀打ちできない？ 『オロチ』とは一体どういう存在なんですか？」

キョウの質問に対して瞬火は答える。

『オロチ』とは地球意志であり肉体を持たない魂魄の集合体の様なものだ。人が誕生するはるか昔から存在し、生きとし生けるものすべてを見守る存在であった。だが傲慢になった人類に対して敵対するようになったとのことだった。ミッドの『オロチ』は封印されていた魂の一部が逃れたものだったが、その力は地球のバックアップが無い状態でも恐るべきものだったらしい。

『言葉で語るより、実際に見た方が早い。我に意識を委ねよ』

「分かりました。『草薙流』伝承者として見届けさせてもらいます」

キョウは瞬火に導かれるように光に包まれていくのだった。

場面は以前の夢の続きからの様だ。ヴィヴィオに似た少女と瞬火の邂逅する様子が眼前に広がる。

「あなたは誰？ どうやって此処に？」

少女が瞬火に声を掛ける。瞬火は兄との戦いのすぐ後の状態でありボロボロだった。

「こっ、此処は？ 君、赤い光を見なかったかい？」

「赤い光なら、あなたが此処に現れるすぐ前に私の方に飛んできて慌てて振り払ったらそのまま空の方に飛んでいったけど」

「なん……だと。君は何ともないのか？」

少女の言葉を聞き、瞬火は彼女を心配そうな顔で見つめる。しかし少女は元気な笑顔で答える。

「ちょっとびっくりしただけ。別に何ともないよ？」

「そうか。それなら良かった。だが、こうしてはられない。早く

追わないと！！　ぐわああ」

瞬火は傷ついた身体を無視してその場から移動しようとするのだが、傷ついた身体では無理があったようだ。その少女に動きを止められる。幼い子供に止められるほど衰弱しているようであった。

「お兄さん、動いちゃダメだよ。酷い怪我をしているみたいなんだから。屋敷から人を呼んでくるから此処で待ってて」

そう言うと少女は屋敷に戻り人を連れてくる。10名程の騎士が現れ、少女を瞬火から引き離し彼を取り囲むようにして武器を向ける。全員青を基調にした服を纏い、シルバーのプレートメイルの様な甲冑とマントを纏っていた。その中から瞬火とあまり変わらない年齢の赤い髪の女性騎士が一步進んで出てくる。そしてその騎士は瞬火に声を掛ける。

「貴様、何処から此処に忍び込んだ？　答えによっては、この劍精キハーダ・アーデルハイドの劍の錆にしてくれる！！」

「待て、妹よ。そやつはボロボロではないか。騎士としてそのような相手に劍を向けるのは恥だと思わんのか？」

その騎士の後ろからリーダー格と思われる同じく赤い髪の騎士が声を掛けてくる。その姿は夜天の守護騎士シグナムとそっくりだった。

「シグナム姉さま！！　だって、こいつが姫様に何か危害を加えては……」

「その姫様が、そやつを保護しろと仰せなのだぞ。バカ者が！！　おい貴様、名前は何と言う？　見たところ武器も持っていないよう

だから、屋敷に通してやる」

シグナムと呼ばれた女性は、妹と思わしき騎士に一喝すると瞬火に声を掛ける。

「私は草薙、いや八尺瓊瞬火と言います。此処へは我が一族の敵を追いやつてきました。お心遣いはありますが、遠慮しときます。早くアレを追わないと、この世界が滅ぼされるかもしれないです」

瞬火は名乗るとその場から去ろうとする。しかしそれはシグナムにより遮られる。

「そのような身体でどうしようというのだ？ それに世界を滅ぼすだど？ それほどの相手なら余計に傷を癒さねば相手になるまい。いいから来い！！」

それから瞬火は騎士たちにより部屋に連れて行かれ治療を受けるのだった。

再び場面が変わる。其処には傷が癒えた瞬火の姿と彼を見つけた少女の姿があった。

瞬火の服装は彼を連れていった騎士たちと似たようなものを纏っており、城の謁見用の広間で王座に座る人物に話している場面だっ

た。

姫と呼ばれた少女は次期聖王だったようで、彼女に気に入られ仕官する事になったとのことだった。

名前はローラン・ゼーゲブレヒトというらしい。

当時は彼女の父シャルル・ゼーゲブレヒトが聖王を務めており、異世界人である瞬火は彼にも気に入られた。

意識を取り戻してすぐ、自分が此処に来た目的をシャルルやローラン、そしてアーデルハイド姉妹達騎士に話したのだという。兄との戦いや『オロチ』の事を。

ローランの赤い光の証言もあり疑われるどころか、一人で追ってきたその意思を評価されたとのことだった。

そして瞬火はローランの護衛と話し相手として聖王に仕えていくことになったのである。

それから暫らくは穏やかな日々が続いていった。その頃のベルカはまだ戦乱が起こっていないかったようだ。瞬火はアーデルハイド姉妹と共に護衛として、そして友人としてローランと付き合っていく。『オロチ』の情報は聖王の部下たちが集めるのを手伝ってくれていた。

そうした日々の中でローランは美しく成長し、聖王を継ぐ。そして瞬火もキハーダと恋に落ち、アーデルハイド家に婿入りすることになる。その前にシグナムとの三角関係に発展する場面もあったが……。アーデルハイド家は炎熱を掌る家系であり、瞬火は受け入れられていく。

ローランが聖王を継いでから暫らく経ち、ベルカでは戦乱が起こり始める。瞬火はローランや妻、義姉、同僚の騎士たちと共に戦場を駆け抜けていく。そういった中で仲間達はどんどん傷つき倒れていく。
義姉も敵対する国の新型魔導兵器『夜天の書』との戦いで命を落とす等、悲しい出来事も経験していく。
もちろん悲しいことばかりではなく嬉しい出来事もあった。瞬火とキハーダの間に子どもが誕生するのだ。戦乱の中で少しの穏やかな時間を楽しむ様子もキヨウの目の前に映し出される。

多くの闘いの光景が流れた。そして最も重要な闘いの光景が映し出される。『オロチ』との戦いだ。

火山のふもとの様なマグマの流れる場所で白髪の男が宙に浮かんでいた。上半身は裸で。胸には黒い紋章が描かれていた。その男の前には瞬火とローラン、キハーダの姿がある。

「瞬火、あれがオロチ？ あれって隣国の王じゃない？」

「ええ、姫。ヤツが私の一族の宿敵、オロチです。ヤツは人の身体を乗っ取ると言われているんです。きっと王は身体を奪われたのだと思います」

「瞬火、私達で倒せるかな？」

「大丈夫だ、キハーダ。奴を倒して子供達の所へ帰ろう」

『我に仇為す一族の者よ。長きにわたる宿命を今清算しよう』
瞬火達とオロチの闘いが始まる。

E p 6 6 古の厄災と過去の記憶 前編（後書き）

今回はオロチとの決戦と、オリヴィエの代での出来事を描きます。
さらっとですが……。

過去編が終わり次第、本編も進めます。

ローランの名前の由来は『ローランのうた』からです。オリヴィエの其処から取られているようです。

シャルルはもちろんシャルルマーニュですよ。

キハーダは楽器の名前ですが、どういう楽器が分かれば本編のキャラとの関係も見えてくると思います。

読んでいただきありがとうございます。

E p 6 7 古の厄災と過去の記憶 中編（前書き）

お待たせしました。遅くなり申し訳がないです。

ちよつと体調を崩していました。

書いていたら長くなってしまいましたので、また分割させてしまいました。

もう少しお付き合ってください。

オロチと対峙する瞬火達三人。彼らの周りには他には誰も人はいなかった。

活火山によるむせかえる熱気に彼らが現在立つ場所は包まれている。その場所では生き物の気配が彼ら以外は感じられない。黒い土と真っ赤に溶けだすマグマ、そして火山の火口から噴き出す煙という風景が広がっている。

『アレがオロチ……』

キヨウは自身を其処へ誘った方の瞬火に語りかける。

現在彼は、以前瞬火の記憶を覗いた時と同様に幽霊の様にその場の全てと干渉できない精神体として存在している。それはキヨウを其処へ誘った方の瞬火も同じである。

『アレが我が【草薙】、そして【アーデルハイド】一族の敵であるオロチだ。あれでもまだ完全な姿ではないがな』

キヨウは瞬火の言葉を聞き、改めて『オロチ』の姿を見る。

『オロチ』は真っ白の髪に、爬虫類の様な瞳を持ち、無表情で宙に浮かんでいる。上半身は裸であり、黒い円から蛇の頭が伸びている様な模様が見える。その肉体は鍛え上げられており無駄な肉は付いていないようだった。

キヨウはオロチに対して恐怖を抱いていた。当時の他国の王の身体

を乗っ取っているだけありその身体から感じられる魔力量はすさまじい。以前、リミッターを一部解放したはやてを目にしたが、それと比べても軽く10倍以上に感じられる。

だが彼が感じる恐怖はそういうものではなかった。魔力とは違う、もっと『死のイメージ』に直結するような禍々しいオーラが感じられるのだ。細胞の一つ一つから「アレと闘ってはならない。今すぐに逃げろ」と危険信号が発せられているような感覚に彼は包まれているようだった。心臓を鷲掴みにされているような気さえしている。

『アレで全力じゃないなんて……。それも魂の欠片が憑依しただけであのプレッシャーですか……』

キョウは頬に冷や汗を垂らしながら光の姿を取る瞬火に問いかける。

『そうだ。前に見た通り、アレはこの世界に逃れた魂の欠片だ。依り代として選ばれた人間の能力にその力は左右されるが、それだけではない。オロチの力は様々な自然現象を掌ると言われている。炎や雷、重力等のな。オロチ自身は【無】の力を操るのだ』

『無の力？ 何なんですそれは？』

『古来より草薙家ではそう伝えられてきた。何に分類されるのかよく分かっていない力だ……。だが、その力は強大だ。とにかく見届ける、過去の私達の闘いを。頭で考えるな、感じるんだ』

キョウはその言葉通りに過去の瞬火達の闘いに意識を向ける。

瞬火達三人と対峙していたオロチは身体から青白いエネルギーの奔流を放つ。それは光の柱となり、天に向かい伸びていく。その衝撃波は15mほど離れて立っていた三人のもとへも届く。瞬火達は衝撃波をガードを固めてしのぐ。

『蛹を破り、蝶は舞う』

オロチは光を放った後、少年の様なソプラノヴォイスで一言そう言葉を放つ。

「他の兵たちを連れてこなくて正解でした。あのような怪物相手には、闘うどころか犠牲が増えるだけになっていたかもしれせん」

ローランが呟く。瞬火とキハーダもその言葉に頷き同意をする。

「ですが、あのような者を野放しにしておくことは出来ません。二人とも、行きますよ!!!」

「「御意!!!」」

ローランの言葉に瞬火とキハーダは答え、オロチに向かい突っ込んで行く。三人のスピードはかなりの物で、それはキヨウが以前見た限定解除中のフェイトのスピードと匹敵する程のものだった。

右からは剣型のアームデバイスに炎を纏わせたキハーダが、左からは両手の拳に紫の炎を纏わせた瞬火が、そして正面の上方からは

虹色の光を身体に纏わせたローランがオロチに飛びかかる。

だがオロチは攻撃に備えて構えようとはしない。一番初めにキハーダの攻撃がオロチを捕えようとする。キハーダは逆袈裟気味にオロチを切りつける。その剣速は音が後から付いてくるようなすさまじいものだった。だがオロチには軌道が見えているのか、無言でキハーダの前に人差し指を伸ばした右手を向ける。

「はああああああああ!!」

キハーダの攻撃が当ろうとした瞬間、彼女とオロチの間には鏡のような物体が現れ、キハーダの攻撃を受け止める。

「何？　これは？」

キハーダの残撃を受け止めた鏡はそのまま彼女の方へ進み、身体に接触をする。そして彼女の身体を持ちあげ始める。

「えっ？　ちよつと、離しなさいよ!!」

「キハーダ、危ない!!」

瞬火が声を上げた瞬間、その鏡は割れキハーダの身体を吹き飛ばす。瞬火は攻撃を打ち切りキハーダをキャッチするように抱きつく。それでもキハーダと瞬火はオロチの攻撃により吹き飛ばされ後方にある岩肌叩きつけられる。

「きゃあああ!!」　「ぐはああああ!!」

二人が叩きつけられた岩肌には、その衝撃により直径10m程のクレーターが出来上がる。キハーダは岸壁の下に倒れ、瞬火はその岸

壁に少し身体をめり込ませていた。

キハーダは瞬火がクツションになったのかそれほどダメージは受けていないようで、すぐに立ち上がる。そして自身を身体を張って助けた瞬火の手を掴み壁から引き出す。

「瞬火、大丈夫？ しっかりして」

「ああ、大丈夫だ。キハーダ。それより姫が危ない！！」

「二人とも！！ よくも……。てええりやあああ！！！！」

飛び上がったいたローランはオロチに対し魔力を込めた蹴りを浴びせようとする。魔力により加速を行い、更に重力に従って打ち出されるその蹴りは、かなりの威力が込められているようだった。

オロチは先ほどのキハーダの攻撃を防いだ時の様にローランの蹴りに対しても鏡を張り、それを受け止める。

「こつちにも対応するの？ うわあああああ！！」

ローランも二人の様に割れた鏡に吹き飛ばされる。そして二人がいる方へと突っ込んで行く。瞬火達は二人がかりで何とかローランの身体をキャッチし、岸壁に叩きつけられる事を防ぐ。

「大丈夫ですか、姫様！！」

「助かりました、キハーダ。瞬火もありがとう」

「いえ。ですが近接では分が悪そうですね。此処は遠距離から攻撃を加えてみましょう。私が隙を作りますから、キハーダと姫でオロチに攻撃を」

三人は今度は魔法による攻撃に切り替える。瞬火はオロチの意識を自分に集め、おとりになるために接近を試みる。その間にローランは魔法の詠唱を、キハーダはデバイスを変形させ弓の形にし矢をつがえる。

瞬火はオロチの周りを高速で移動しながら『闇払い』や『爪櫛』など身体から離れた位置に発する炎で攻撃を加えていく。しかしそれではオロチに対しての決定打には成りえず、オロチは攻撃を受けつつも瞬火に向かい地面から青い光の柱を放ち続ける。その光は直径1m程の物で、一発でも喰らえば大打撃になるような物だった。

瞬火はそれを紙一重で避け続ける。光は瞬火を捕えようと彼の傍で何度も噴き上がる。

「長くは持ちそうにない。二人とも急いでくれ!!」

瞬火がオロチを引き付けている間にローランとキハーダは詠唱を終える。二人からは強い魔力が放出していた。

「姉さま、私に力を貸して。駆けよ大鷲!! シュツルムアドラ
ー!!!」

「聖王の名の基に悪しき魂を打ち砕かん。カイザーーウエー
ーイブー!!」

キハーダは炎を纏った矢を、ローランは両手にチャージした巨大な

魔力の塊を胸の前で一つにしてオロチに向けて放つ。
瞬火は二人が魔法を放つを見て、オロチから距離をとる。

二人が放った魔法はオロチに向け風を切り裂きながら近づいていく。
攻撃を目にしたオロチは二つの魔法を正面に捉え両手を下に広げ、
胸を張る。オロチの身体は青白い光で点滅する。

「ヤツは何をするつもりだ……」

距離をあけた瞬火はオロチの不可解な行動に首をかしげる。
同じ頃、ローランとキハーダも自分達の放った攻撃がオロチに通用
するかどうかをじっと見ていた。

「これで決まれば良いですが……」

「瞬火が上手く引き付けてくれたんです。きっと大丈夫ですよ、姫
様」

青白く光るオロチの身体に到達した2発の魔法は彼の目の前でかき
消える。それを観て、瞬火達3人は驚きの声を上げる。

「なっ、なん……だと？」

「シュツルムアーグラァ……」

「まさか聖王の一撃をかき消す等……」

攻撃をかき消したかと思われたオロチの身体からはローランとキハーダの魔力が感じられた。その瞬間、オロチの身体からは自分の身体と同じ位の大きさの青い魔法弾がローランとキハーダの下に発射される。それは二人が先ほど放った魔法よりも速い速度で打ち出された。

(二人とも、逃げて!!)

二人よりもオロチの近くにいた瞬火は大声でローランたちに攻撃を知らせる。瞬火の声を聞いた二人はその場からすぐさま移動し空に飛び上がる。

二人が移動してすぐ、それまで彼女達が立っていた場所にオロチの攻撃が到達する。それは後ろの岩盤を砕き岩雪崩れを発生させる様な威力だった。

空に逃げた二人は瞬火と合流しオロチから50mほど離れた高台に移動する。

「何という怪物ですか、オロチとは……。瞬火、よくあなたの先祖はアレを封じられましたね」

「完全に化け物じゃない。接近もダメ、魔法も打ち返してくるし」

「あれでも全力ではないんです。以前言いましたが、あれはこの世界に逃れた魂の一部ですから。うちに伝わった伝承では、先祖の一人と八咫家の当主がオロチの動きを止めて其処に『大蛇糞』を放ち封印に成功したそうです」

「前聞かせてもらった様にその方法が有効なのでしょうね。私がオロチの動きを制限してみます」

「姫！！ 危険ですよ。あんな怪物相手に」

「ですが、『大蛇薙』を放てるのは瞬火しか居ないではないですか！！ あなた達の子供が大きくなり技を会得するまでオロチを放っておくことは出来ません。それより早く、きつとオロチはベル力を滅ぼしてしまうのではないですか？」

「それなら、私も行きます。瞬火、私と姫でオロチを食い止めるから、あなたは『大蛇薙』でオロチを攻撃して」

「ああ。絶対成功させる！！ なっ、何？」

その時、3人が相談をしている場にオロチが転移をしてくる。音もなく近付きてきたオロチは、右手の指先から瞬火に向かい黒い波動を放つ。其れは水面の波紋が三つ広がった様な衝撃波で、弦を弾いたような音とともに近付いてくる。

「喰らえ！！」

瞬火はそれを相殺しようとしてつさに『闇払い』を放つ。地を這う炎は衝撃波に向かうが簡単にかき消されてしまう。衝撃波が瞬火の身に到達しようとした瞬間、彼の目の前にキハーダが覆いかぶさる。

「キハーダ！！」

「きゃあああああああああ！！」

衝撃波はキハーダの身体に叩きこまれる。キハーダは衝撃波から瞬火を庇い空中へと吹き飛ばされる。

瞬火はキハーダの身体を跳躍し抱きとめる。

「よくもキハーダを!!! てりゃああ!!!」

その間にローランはオロチへと向かい怒涛の連撃を放つ。目にも止まらぬ速さで拳や蹴りをオロチへと放つていく。その姿はまるで竜巻の様であった。だがオロチはその攻撃を依然無表情のまま捌いていく。ローランは怒りに身を任せているのか攻撃が単調になり、要らない力みが入っているのだ。

オロチは彼女の連撃に隙を見つけ出し、そこに弧を描く様な蹴りを放つ。その蹴りはローランの腹部を捕え、彼女を吹き飛ばす。蹴りの通った後には青白い光の軌道が描かれる。

「姫!!! キハーダ!!! うわああああああああ!!!」

瞬火はキャッチしたキハーダを地面に寝かせ、ローランの援護に加わろうとする。だがオロチに蹴りとばされたローランが彼の方へと飛んでくる。彼は慌てて体勢を整えローランを抱きとめることに成功する。

キハーダとローランはオロチの攻撃で気を失っているようだった。凄まじい反撃を受けたのだが幸いな事に二人とも呼吸はしていたのだ。

「オロチ……。よくも二人を」

瞬火が言葉を発した瞬間、彼は自身の鼓動の音を感じる。其れは『ドクン』と彼の身体全体に広がるように感じられた。

『負の感情に囚われたか。それこそわが力の源』

た。

『見苦しい。所詮は人間か……。儂く散らせてやる』

そう言うとおロチの身体は再び青い光に包まれる。そしてオロチは瞬火から手を離し、彼を自分の目の前に浮かべる。

オロチは無言で瞬火の心臓の位置へと右手をのばしていく。まるで今から瞬火の心臓を引きずり出そうとでもするかのような動きだった。

だが瞬火の左胸におロチの手が触れようとしたその時、オロチの手に赤い炎が命中する。其れによりオロチの手は瞬火の身体を逸れる。そしてオロチがその攻撃で体勢を崩している隙に虹色の光が瞬火を助け出す。

「しつかりしなさい！！ 瞬火！！ アンタが正気を失ってどうすんのよ！！」

「そうですよ、瞬火。私達は何とか無事です。意識を取り戻しなさい！！」

瞬火を救ったのはローランとキハーダだった。彼女達は共に肩で息をし、口からは一筋血を垂らしていた。先ほどのオロチの攻撃のダメージによるものである。ローランは冷静さを取り戻し、瞬火をキハーダの下に投げるとオロチと再び闘いを始める。

『まだ掛かってくるか、人間。死ぬのが早くなるだけだ』

「それでも私はこのベルカを守りたいのです。私はこの世界が好きです。生きとし生けるもの全てを滅ぼそうとするあなたを絶対に倒して見せる！！」

ローランはオロチへと攻撃を放ちつつ彼の言葉の答える。その動きは先ほどとは違い洗練されており、少ずつだがオロチの身体に傷を与えていく。

「ハアハア。ウオオオオオオオオオオオオ！！」

助け出された瞬火は未だ正気を取り戻さず、キハーダに向け襲いかかるうとする。

鋭い爪による攻撃で彼女を引き裂こうとした瞬間、キハーダは瞬火に抱きつき口付けをする。

「いい加減目を覚ましなさいよ、バカあ！！！」

口付けの直前に発したキハーダの声は震えていた。彼女の目には涙が浮かんでいる。瞬火はキハーダからの口付けを黙って受け続ける。口付けの最中、彼の瞳は正気を取り戻したのか澄んだ物へと変わり、髪も普段通りの黒い物へと戻る。

「ぶはっ。わっ、私は一体？」

「アンタは私と姫が攻撃を受けて理性を失っていたのよ。ほら、ぼさつとしない。早く姫の援護に回りなさいよ！！！」

「あっ、ああ。分かった」

キハーダは瞬火の臀部へと蹴りを放ち、彼をローランの援護へと向かわせる。

「もう、心配かけないでよ……。それより私も援護しないと」

瞬火はローランと共にオロチに接近戦を挑む。二人同時の攻撃によりオロチへ技を放つ隙を与えない。そしてそこにキハーダも加わり3対1での闘いは激化していく。瞬火とローランの体術、キハーダの剣技は冴えわたりオロチへとダメージを与えていくのだった。

瞬火にはリンカーコアはありません。高速で移動しているのは純粹な体術です。

『とらはる』の神速みたいなものだと考えてください。

拙作の読者の方でカイザーウェイブが分からない方は少ないと思いますが、一応説明を。

『餓狼伝説』のクラウザーの技です。ルガールにパクられています。

発動フォームはベジータのファイナルフラッシュに似ています。

尊敬するブルース・リーのセリフを借りている部分があるんですが、お分かりいただけただけでしょうか？

私はジャッキー派ですがリーも大好きです。

読んでいただきありがとうございます。

E p 6 8 古の厄災と過去の記憶 後編（前書き）

今回、拙作の劇中で初めて人が死にます。以前、活動報告にも書きましたが無駄死にはないです。

死者が出たので残酷描写タグを付けましたが、R - 1 5 も必要でしょうか？

読者の皆様の意見が頂けると嬉しいです。

捏造設定ばつかで申し訳がないです。

今回は色々伏線を回収します。

「鬼焼き！！ でえりゃああああああああ！！」

「火竜巢閃！！ たああああああああ！！」

「カイザーテンペスト！！ せいやああああああああ！！」

キハーダによつて正気を取り戻した瞬火は、彼女と共にローランの援護に入る。

瞬火の炎を纏う肘打ちからの裏拳『鬼焼き』でオロチの意識を上を引き付け、その隙にキハーダが燃え盛る剣の連撃、『火竜巢閃』を放つ。

キハーダの剣は上下左右とあらゆる方向から目にもとまらぬ速さで放たれ、其れによりオロチの体には切り傷が増えていく。炎によるダメージと斬撃によるダメージが同時に加えられていった。

そしてキハーダの連撃が途切れた所にローランの『カイザーテンペスト』が炸裂する。魔力の籠もった拳から放たれるその攻撃は『テンペスト』の名の通り『嵐』の様な連撃である。オロチの身体を取り囲むよう円の動きで移動しながらローランの拳は放たれる。彼女の裂帛の気合が込められた攻撃は風を裂き、オロチの身体に次々と叩き込まれていった。

三人の息の合った高速の連撃はオロチに反撃のチャンスを与えなかった。

「瞬火、今です！！」 「いつけえええ、瞬火！！」

二人の攻撃がオロチに加えられている間、瞬火は後ろである技を放とうとしていた。左手を上に掲げ、全身に炎を溜め込む。そして限

界以上まで溜められた炎は行き場を失い彼の身体から溢れ始める。瞬火はローランとキハーダの声を合図に、その炎をオロチに撃ち込もうと駆け寄る。『草薙流奥義・裏百八式・大蛇薙』である。

「はあああああ！　これで終いだあああああ！　！」

『くっ、これは！！　あああああああああ！！！！』

瞬火の身体を覆ってしまう程に膨れ上がった炎がオロチに叩きこまれる。その炎は撃ち込まれる際の衝撃に加え、身体に燃え移る炎によってダメージをオロチに与える。終始無表情だったオロチもこの攻撃でたまらず声を上げてしまう。

『大蛇薙』はその名の通り、瞬火の先祖がオロチを封印する際に放った文字通り『大蛇を薙ぐ』大技なのである。

瞬火は兄との闘いの際、オロチの力をその身に受けてしまったことが影響したのか炎は紫色に染まっていた。だが、オロチに対しての攻撃にはその事は影響ないようで大ダメージを与えることに成功するのだった。

瞬火の『大蛇薙』による衝撃の大部分はオロチの身体に浸透したのか、僅か5m程後退しその場にオロチは倒れ伏すのだった。

「はあ。これで……どうだ」

瞬火は技を放った場所に片膝を付き眩く。彼の身体は小さきまなな傷が付いており、その戦いの激しさを象徴しているようだった。オロチは瞬火の攻撃を喰らってから倒れたままであり力尽きている様子であった。

「やったわね、瞬火」

「見事でしたよ、我が騎士。瞬火・Y・アーデルハイド」

キハーダとローランも瞬かと同様にボロボロの姿だったが、ふらふらしながらも彼の傍によりねぎらいの言葉を掛ける。

「二人のお陰です。姫様、見事な攻撃でした。キハーダも助かったよ」

瞬火は二人に笑顔を浮かべつつ礼を述べる。

三人が互いを労っているその時だった。倒れているオロチの身体からソフトボールほどの大きさの赤い光が瞬火に向かい飛んできたのだ。瞬火は膝をついた状態から立ち上がり、とつさに反応する事が出来なかった。その光が瞬火の身体を貫こうとした瞬間、彼の前にキハーダが割り込む。

「危ない！！ 瞬火！！」

キハーダは両手を広げ瞬火を庇うように光の前に立つ。その光は無情にも瞬火でなくキハーダの胸を貫いた。

「キハーダアアアアアアアアアアアア！！！！」

キハーダの姿を見て瞬火は叫ぶ。キハーダを貫いた光は軌道を変えて後ろにいた瞬火でなく、彼の傍にいたローランの身体に入り込む。

「きゃあああああ！！！！」

「ゴホツ!! しゅ、瞬火……」

胸を貫かれ重傷を負ったキハーダは、瞬火の腕の中で弱弱しく言葉を発する。口からは血を流し、胸の傷からも少くない血が流れ出ていた。

「喋るな、キハーダ。傷に障るぞ!」

瞬火はキハーダに安静にするように言う。だがその言葉に対してキハーダは首を横に振り言葉を続けようとすする。

「うつ、この傷じゃあ助からないわ……。ねえ聞いて……」

「そんなことない!! 絶対助けて見せる」いつ、言いから聞きなさい……」くつ、ああ」

瞬火の言葉をキハーダは遮る。その言葉は力ない物だったが、諭す様な口調であった。

「瞬火……。私は、ゴホツ。あなたに……。出会えて、幸せだったよ。あなたと過ごす日々は本当に楽しかった……。騎士として……。お願いする。ひつ、姫を助けて……」

キハーダは咳で血を吐きつつ喋る。瞬火はそれを一文字も聴き逃さぬように聴いていた。

「ああ、助ける。だから弱気になるな……」

瞬火はキハーダの手のひらを掴み言葉を返す。

「それと、あなたの妻としてお願い……。子供たちを頼んだわよ……。オロチを倒して、この世界を守って……」

「もちろんだとも。なあ、オロチを倒してまたみんなで遠乗りに出かけよう。子供達を連れて、お前が作った弁当を持って。姫様や他の騎士たちも一緒にさ……」

瞬火の声は震えていた。彼の掴んでいるキハーダの手からは徐々に体温が失われていく。瞬火は今にも泣き出しそうになりながらも笑顔で言葉を放つのだった。

「たっ、楽しそうね……。ゴホツ。あなたと一緒になれて私は幸せだったわ……。ヤダな、目の前が真っ暗だよ……」

「おい、しっかりしろ。私がそばにいるから!!」

瞬火はキハーダの手を強く握りながら声を上げる。彼の目からは涙が流れだしていた。

「もっと、一緒に居たかったな。ごめんね、先に姉さんの所に行くわ……。愛していたわよ、瞬火……」

そう言うとキハーダは静かに目を閉じる。

「なあ、ウソだろキハーダ？ キハーダ!! キハーダアアアアアアアアアアアアアアアア!!」

キハーダはその生涯を愛する夫の腕の中で終えるのだった。瞬火が掴んでいたキハーダの手はどんどん冷たくなっていき、指の力も感

じられなくなるのだった。

『どうやら最後の別れは済んだようだな。だが安心しろ。お前もすぐに後を追わせてやる』

瞬火がキハーダを見取り涙を流す間に、オロチが彼のすぐ後ろへ転移してきた。その声は嬉しそくに発せられており瞬火の怒りを誘うかの様だった。

瞬火はキハーダを地面に寝かせ、彼女の手を胸の前に組ませゆつくりと振り返る。

「オロチ……。私はお前を絶対に許さない!!」

『そうか？　だが一人で何ができる』

瞬火はオロチに殴りかかる。ローランの身体を乗っ取っているとしても彼はその怒りを抑えられずにいた。『荒咬み』、『九傷』、『八錆』とオロチに向かい連撃を放つ。オロチはそれをことごとく防ぐのだが、拳に込められた衝撃はすさまじいようで、瞬火から大きく距離をとる。

「逃げるなああああああ!!」

瞬火はオロチを追いその傍まで駆け寄っていく。オロチはキハーダの亡骸から30mほど離れた場所に移動するが、瞬火は瞬く間に其処へ移動する。そして肩からの体当たり『鳳麟』をオロチに放つ。だがオロチはそれを読んでいたかの如く、ローランを痛めつけた光を放つ蹴りを瞬火に浴びせる。

「ぐわああ!!」

それはカウンター気味に瞬火にヒットし、彼を二mほど吹き飛ばす。

『さあ、無に帰ろっ』

オロチは顔の前に両手を組み、頭上から緑色の光を放つ。その光はオロチを中心に半径10mほどの円に広がっていき、瞬火にダメージを与える。

「まだ、まだ終われない!!」

瞬火は光のダメージを受けつつも、空中で体制を整え途中からその攻撃を防ぎ着地する。しかし、先ほどまでの闘いのダメージもあり、全身がボロボロで立っているのが不思議な程の状態であった。

『しぶとさだけは褒めてやろう。だがいい加減、楽になったらどうだ?』

オロチは瞬火に向けて右手をのびし人差し指をさす。その構えは先ほど黒い衝撃破を放った時と同様の物だった。

「私は倒れない!! おまえを倒し、姫を救えとキハーダに頼まれたのだ。絶対倒れるものか!!」

『黙れ下郎。今、お前の妻の下に……。何っ、きつ貴様!!』

瞬火に向けて止めの一撃を放とうとしたオロチは、突然頭を抱えてもがき始める。

『貴様、まだ意識を!! 消えろ!! 消えろおお!!』

オロチがもがき苦しみながら大声で叫ぶ。そして次の瞬間、瞬火が
よく聞き慣れている声がオロチから聞こえてくる。

『瞬火、私です。ローランです。今私はオロチの中から動きを抑え
ています。早く私ごとオロチを討ちなさい』

ローランが肉体の主導権を取り返したようなのだ。彼女の身体は虹
色の光に包まれていた。

オロチは直立不動で宙に浮かび瞬火に声を掛ける。

「姫様？　しかし、それでは姫様も……」

『私の事は良いのです。このままオロチを野放しには出来ないと繰
り返し申し上げていた筈です。撃ちなさい、瞬火。その草薙の拳を。
キハーダの死を無駄にするのですか……！』

「姫様……。うわあああああああああ！！　これがっ！！　草
薙のおおおお、拳だあああああああ！！」

瞬火はローランの言葉を聞き、残った力を振り絞り攻撃を放つ。身
体に炎を纏わせつつオロチに突っ込み、火柱をその場に吹き上げさ
せる。そして渾身の『毒咬み』を叩き込んだのだった。オロチは目
を閉じて穏やかな表情でその拳を受ける。

『それで良いのです、瞬火……』

瞬火の放った技はキヨウが修行を重ね会得した『最終決戦奥義・無
式』とよく似た物だった。その拳を受けたローランの身体から赤い
光が逃げ出す。

「逃がさない！！ 止まれええええ」

瞬火は『闇払い』を放つ。其れは地を這う炎だが、光の下に着くと細い火柱を上げる。以前アギトが放った『八酒杯』にそっくりであった。その炎は光の動きを引きとめるかのごとく燃え続ける。

「うっ、うっ。逃しませんよ……。その力を封印します！！」

瞬火の攻撃を受けたローランはどうか無事だったようで、瞬火が『八酒杯』を放った際に立ちあがり、足を引きずりながら光に向けて進んで行く。そして持てる力を振り絞り封印魔法をはなつのだった。

ローランの魔法を受けた光はひときわ大きく輝くと直径30cm程の赤い宝石の様に姿を変えるのだった。

オロチとの戦いが終わると瞬火とローランはその場に倒れ伏す。それから程なくして二人はローラン配下の騎士たちの手により救出されるのだった。

オロチとの戦いの後、ローランと瞬火はその戦いの傷が元で前線を退くことになる。

ローランはその後、他の王家から婿養子を取り婚姻を結び数年後に子を成す。

瞬火は保護された後、キハーダを弔った。キハーダは聖王の部下の騎士として国民達から慕われており、その葬儀はローランの手により国葬として盛大に行われた。

騎士を退いた瞬火は、再婚することなく自身の子供たちに『草薙流』を教えながらある研究に手を貸していく。

其れは融合騎という他国で実用化され始めている技術だった。

オロチとの戦いから数十年が経過した後、ある研究施設で一体の融合騎が誕生する。

赤い髪を持ち、炎を操る美しい姿の女性の融合騎だった。

年老いた瞬火は研究者と共にその姿を見守っていた。黒かった髪は白髪に変わり、杖を持ち何とか立っているという様子だった。

「さあ、目覚めておいで。烈火の剣精よ……」

瞬火は目に涙を浮かべ、いとおいしい者に語りかけるように声を発する。瞬火の言葉に反応するかのように融合騎は瞼を開ける。その顔は彼の死に別れた妻、キハーダと瓜二つであった。

『御先祖様、もしかして……。あの融合騎はアギトですか？』

オロチの闘いやその後の瞬火の生き方を見つめていたキヨウは光の姿の瞬火に声を掛ける。

『ああ。私は亡き妻の面影を追い彼女を生み出してしまった……。妻と似た容姿、妻に似た能力を持たせて……』

その後、融合騎はアーデルハイド家に所属し瞬火の子供達と共に戦場を駆け抜けていった。この戦争はオロチに操られていた王が引き起こした物だそうだ。瞬火の子供達やローランの次の聖王の代でそれは無事終結した。

そして瞬火の死の以降、墓守として彼と妻のキハーダの墓を守り続けていくのだった。

アギトが墓守に就任した場面から再び場面が変わる。其処は屋敷の広間の様な場所だった。壮年の黒髪の騎士が数名の騎士たちに宝箱の様なものを渡している場面だった。瞬火の言葉によると十数代後の子孫の様子らしい。黒髪の騎士は箱のふたを開ける。箱の中身は古文書にあった赤い宝石だった。

其れは研究施設に運ばれ21分割されていく。瞬火は語る。其れはオロチの力を再現しようとする研究であると。その場にはヴィヴィオによく似た女性の姿もあった。この研究は聖王や有力騎士たちにさらなる力を与える為の研究らしい。当時は戦乱の世であった様でこの研究が必要になりアーデルハイド家から引き渡されたそうなのだ。

それからの映像は多くの闘いの場面が広がっていった。古代ベルカの戦乱の映像でありアーデルハイド家や瞬火達の墓もその戦乱の影響で荒れていく。

アギトはアーデルハイドの家の者たちと共に傷付きながらも墓を守り切りその役目を終える。彼女はその後、その墓へと埋葬される。聖王は研究の成果もあり、配下の騎士たちと共に闘いに勝利をして

いく。それでも騎士たちは一人、また一人と力尽きていき、赤い宝石の欠片も戦乱の中で紛失していった。

その後は、キヨウがカリムに聞いた話や古文書の内容に酷似した物だった。

時代が下ると、聖王を神として祭るかどうかで、その代の当主が他の騎士の子孫たちと対立し、ベル力を去る映像等が流れる。

その映像を最後に、キヨウは初めに居た暗い空間へと引き戻される。瞬火はキヨウへと声を掛ける。

『これが私の過去とアーデルハイドの歴史だ』

『瞬火様、アギトは……。アギトは何故記憶を持たないのです？』

『あれから幾星霜の時間が流れその記憶は失われていったのだ。それに一度、その役目を終えている事も関係している。今のあ奴は文字通り二度目の人生を歩んでおるのだ』

『俺は瞬火様の遺伝子が使われているんですよね？アギトとの出会いは何か運命的な物を感じます……。それにヴィヴィオに似た女性もやはり俺と何か関係が？』

『お前と聖王の器にはオロチの因子が含まれている。本来どちらも世代が下るにつれて薄まっていったが、お前と器は特に強い因子を持つ。器は先祖帰りをした者の遺伝子が使われている。器を絶対に守り抜け。でなければオロチを復活させようとする者の意のままとなる』

『そのオロチを復活させようとする者がスカリエツティ……』

『如何にも。これからの闘い、必ずアギトと共に戦え。あ奴の身体には暴走を防ぐ力を込めておる。我が子孫にオロチの因子を継ぐ者が現れた時に再び目覚めるようにしていたからな。其れを開発するのが難航しあれほどの時間が掛かったのだ』

『アギトにそんな秘密が……』

『頼んだぞ、我が力を継ぎし者。キヨウ・アーデルハイドよ』

そう言うと瞬火は大きな光を放ちその場から消えてしまう。

「はあ、はあ。アレも夢……。えっ、なんでこれが？」

キヨウは再び自室のベッドの上で目覚める。彼の枕元にはソウジから譲り受けた古文書が広げられた状態で置かれていた。其れを見てキヨウは首をかしげる。キヨウは古文書を部屋に備え付けられている貴重品用の保管庫に収納していたのだ。それにそのパスワードは自分以外の誰にも教えていない。

「瞬火様が俺の夢に出て来たのは、ひょっとしてコイツが……」

キヨウは古文書を持ちながらそう呟くのだった。

公開意見陳述会の日は近い……。

Ep68 古の厄災と過去の記憶 後編（後書き）

『火竜巢閃』は某十字傷のお待さんのアレのオマージユです。

『カイザーテンペスト』はとにかく速いパンチ。モデルを強いて拳げるなら『支那虎』さんちの秘伝の技に近いかと思います。

殆ど原型はないですけど……。

キハーダが死ぬときにオロチが攻撃を仕掛けなかったのはお約束だ
と
思
っ
て
く
だ
さ
い。

後半はちよつと駆け足になってしまいました。

読んでいただきありがとうございました。

Ep69 特別任務？夏祭り1（前書き）

本編なのにオリジナルで申し訳ありません。

せっかく七夕なんだから季節ものをやるうかと思ひまして、書き下ろしです。後半は日付が変わらないうちに掲載します！！

「夏祭りの潜入捜査ですか？」

キヨウとアギト、ギンガの三人は、新人達の訓練が終了してすぐ、はやてに呼び出され部隊長室に来ていた。キヨウとギンガは、新人達と模擬戦を行っていたのか、衣服には汚れが目立っていた。はやてに任務を与えられ、キヨウが声を発した。それは通常の業務では考えられない物だったからだ。アギトとギンガもキヨウの隣で驚いた表情をしていた。

「せやで、夏祭りや。ミッドでは多くの世界からの移民が多いやろ？毎年、色んな世界の夏祭りを再現される催しが行われてるのは三人とも知ってると思うけど……」

はやての言葉通り、ミッドは異なる次元世界からの移民や次元漂流者の子孫が存在し、その数は少なくない。実際、ナカジマ家やアーデルハイド家もそれに含まれている。年に一度、持ち回りで他の世界の夏祭りがクラナガンでは催されているのだ。

「今年は私達の出身の第97管理世界、地球の夏祭りが再現されるんや。でもな、この夏祭りで……」

はやてはそう言いながら、端末を操作し始める。キヨウ達の目の前にはディスプレイが現れる。其処には最近ミッドを騒がせる『ロストロギア』の密輸組織のデータが表示された。それを基にはやてが三人に説明する。この夏祭りで人ごみを利用して密輸組織が『ロストロギア』の受け渡しをするかもしれないという情報が齎されているというのだ。他の部隊がその組織の構成員を逮捕して、その情報

を手に入れたらしい。

「それで、どうして私達が……」

自分たちがなぜ呼ばれたのかギンガが問う。六課には執務官であるフェイトを始め、有数な人材が揃っているのだ。ギンガも捜査官資格は持っているが、なのはやシグナム、ヴィータ達先輩がこれに参加しないのかと疑問を持ったのだ。

「それがな……。なのはちゃん達は別件でデスクワークや新人達の指導が組まれているし、私の騎士たちもキヨウ君がみた『夢』の事で、聖王教会に行ってるんですよ。キヨウ君の話と教会の資料を照らし合わせるのに、古代ベルカの知識があるシグナム達は適任やる？ 公開意見陳述会も近いっていうのにホント、タイミングが悪いわ」

はやてはため息をつき、デスクに置かれたコーヒーを口に含む。キヨウは瞬火によって見せられた夢の内容を隊長陣に話していた。カリムの予言を知るなのは達はキヨウの夢に出た『オロチ』に対して警戒感を抱いたのだ。『オロチ』に対しての情報収集は以前から教会で行われていたが、新しく夢に出た内容とそれを照らし合わせ、何か発見が無いか更に深く調査するためにシグナムとヴィータが派遣されているのだ。

「それで、108部隊から出向する私達独立小隊に白羽の矢が立ったと……」

「せやで、アギト曹長。流石やな。それに三人が選ばれた理由はそれだけじゃないんですよ。キヨウとギンガは派遣任務以外にも地球に行った事があつたやろ？ 隊長陣を除けば二人が一番地球の文化に接していると思うんですよ。それに御先祖様も地球出身やし、習俗を受け

「継いでいる部分もあるんじゃない？ 着物で地球に行く位やし」

「はやてはニヤニヤとギンガに対して笑顔を向ける。以前の派遣任務で彼女が着物を着て来た事をからかっているのだ。ギンガはその時の失敗を思い出し答える。」

「あつ、あの時はナカジマ三佐がいい加減な知識を私に教えたのがいけないんです！！ それで、その捜査つてやっぱり今夜ですか？ 日付だと毎年この日に行われている様ですけど」

「そうや、ごめんな。急に他の部隊から応援要請が来たもんでな。三人とも、お願い出来るか？」

「はやてがキヨウ達へと頭を下げる。いきなり入った任務という事で事前の準備があまり出来ない事も起因している。」

「頭を上げてください、八神部隊長。自分は、その任務を引き受けます。誰も手が空いていないなら、使ってください。それにせつかくのお祭りで犯罪行為を行おうとするヤツらは許してはおけないですから。良いだろ？ 二人とも？」

「キヨウが指の関節を鳴らしながらはやてに答えた。クラナガン市民の楽しみを邪魔する密輸組織に怒りを抱いている様子がその仕草から伝わってくる。」

「私も了解です。部隊長に頭を下げられたら断れませんか……」

「ギンガもキヨウに続く。久しぶりの捜査にやる気は十分の様だった。」

「二人は私が付いていないと暴走するかもしれないですし、同行し

ますよ。このチームのリーダーは私ですから!!」

アギトもキョウの方の上に立ち、胸を張っている。小さい身体で精一杯アピールをするアギトを見て、はやては微笑ましく思うのだった。

三人は、はやての事情も考慮し、それを引き受ける事にした。

「それなら、昼食後にまた此处に来てもらえると助かるわ。渡したい物とかあるからな。潜入捜査のやり方は流石にギンガもわかるやる?」

「はい、一応。捜査官資格を取得する際の試験問題にも出ましたし、108部隊でも近い事は経験しています」

「自分もギンガとアギトと共に捜査を進める上で、カモフラージュには慣れましたから大丈夫です」

「私も、もちろん大丈夫です。現場の指揮は任せてください」

三人の答えを聞き、はやては方の荷が下りたのか、椅子の背もたれに身体を預ける。

「向こうでは他の部隊と連携して動いてもらうから、そのところはよろしくな? 詳しい事はまた後で伝えるから、三人とも通常の業務に戻ってええよ。ほんとにありがとう」

はやては笑顔でそう三人に言葉を掛ける。キョウ達は敬礼をし、部隊長室を後にするのだった。

「へえ。先輩達で潜入捜査をするんですか？」

午前中のデスクワーク等が終わると、キヨウ達は何時もの様に新人達と昼食を摂っていた。其処にはヴィヴィオも合流しており、ギンガの膝の上に腰掛けている。ギンガはスバルと共に、末の妹であるヴィヴィオの口にスプーンで料理を運んでいた。

キヨウ達の任務の話聞いてティアナが興味を持ったのか質問をする。

「モグモグ。そうなんだよ。隊長達は忙しいみたいだし、私達が派遣される事になったんだ」

アギトが小さく切られたパンを口にしながらそれに答える。その日はリインは同席していないようで、テーブルの上には彼女しか座っていないかった。

「そろそろ公開意見陳述会も近いですし、フェイトさんも忙しそうですもんね」

「そうだね、キャラ。フェイトさんって、ちょっと頑張りすぎる所
がありから体調を崩さないか心配だよ」

フェイトの被保護者であるキャラとエリオが口をあける。二人とも
フェイトの事が心配の様だった。それでもエリオの食事の量は何時
も通りの山盛りであり、そのせいで少々説得力に欠けるのだが……。

「それを言うなら、なのはさんもだけど。でも、二人とも大人の女
性なんだから、その辺はきっちりやると思うぜ。俺たちよりもずつ
と前から管理局に居るんだし、ノウハウは分かっているだろうから心
配すんなって、二人とも」

それまで黙々と食事をとっていたキョウが、エリオとキャラを安心
させるように声を掛ける。

「きゅくる〜」

フリードもキャラを励ますように彼女の頬をぺろりと舐める。キョ
ウとフリードに励まされてキャラは表情を明るくする。

「もう、フリード。くすぐりたいよ……。でも、そうですね。フ
ェイトさんってカッコいい大人のお姉さんですから。キョウさん、
フリード、ありがとうございます」

「エリオもフェイトさんが心配なら、何か手伝う事ないか？ とか、
声を掛けてみたらどうだ？ きつとフェイトさん、喜ぶと思うぜ？」

「……それだけでですか？」

キョウの言葉にエリオは首をかしげる。とてもそれだけでは役に立

てないと感じているのだ。そんなエリオに、キヨウは手を伸ばし頭を撫でつつ答える。

「エリオ、それにキャラも。二人ともフェイトさんにとっては大切な存在なんだ。そんなお前達に心配されてるって分かったら、きつと無理はしないと思うぜ。それにすごく喜ぶと思うけどな？ たったそれだけのことでフェイトさんに元気を与えられるのは、お前達二人にしか出来ないことだと思うぜ」

キヨウの言葉を聞き、エリオも表情を明るくする。それはキャラも同様だった。二人にしか出来ない事と言われたのが嬉しいようだった。

「そうですね、兄さん。僕、後でフェイトさんとお話してみます。良いよね？ キャロ」

「うん！！ もちろんだよ、エリオ君！！ 私と一緒にフェイトさんを元気づけて見せるよ」

何時もの調子に戻ったエリオとキャラを見て、その場にいる一同は微笑ましく思うのだった。

「でも良いなあ、アギちゃん達。仕事とはいえお祭りに行けるんですよ？ 今年は確か地球のお祭りの再現が行われるってテレビで言ってたけど、私も行きたかったなあ……」

スバルがヴィヴィオの口をハンカチで拭きながらそう言葉を放つ。彼女もやはりクイントの娘である。今までは末っ子で面倒を見られる立場だったが、新しくヴィヴィオという妹が出来た事により、世話を焼くようになっていたのだった。

「お祭り？ スバルお姉ちゃん、お祭りって何？」

ギンガの膝に座るヴィヴィオは、初めて聞くお祭りという言葉に首をかしげる。

「お祭りってというのはね、ヴィヴィオ。沢山のお店があつて、そこで買い物をしたり出来るとっても楽しい事なんだよ。ずるいよねえ、ギンねえ達だけで行くんだって」

「こら、スバル。中途半端に教えないの。それに仕事なんだから楽しむ暇なんてないわよ。あのね、ヴィヴィオ。お祭りってというのはね、その年に起こった良かった事とか幸せだった事を神様にありがとうって伝える事なんだよ」

ギンガはスバルがヴィヴィオに教えた内容に補足を行う。ヴィヴィオにも分かりやすい様になるだけ簡単な言葉を使い説明するのだった。

「良いなあ……。ヴィヴィオもお祭りに行ってみたい。ねえ、ギンねえちゃん。ヴィヴィオも連れて行ってよ」

スバルの言葉にヴィヴィオはお祭りに興味を持ってしまい駄々をこね始める。それを見て、ティアナが助け船を出す。

「ヴィヴィオ、お祭りって一年に何度かあるんだよ。今日のお祭りはお兄さんもお姉さんもお仕事だから、私達と一緒に留守番をしよう？ 別のお祭りにみんなで行けば、すつごく楽しいと思うんだけどな？ それに、お兄さんがお土産を買ってきてくれるはずだよ。ですよね、先輩？」

ティアナがキヨウに絶妙なパスを渡す。キヨウはそれを受け取り頷くと、彼女に続く。

「そうだけ、ヴィヴィオ。次のお祭りはみんなで行こう。今日のお祭りは俺たちだけだからきつと寂しいぜ？ それにお土産をたっくさん買って来てやるから、お留守番な？」

「ええ。でも、ヴィヴィオ行きたい！！！」

キヨウとティアナの提案でもヴィヴィオはまだあきらめきれない様子だった。仕方なくアギトもそれに加わる。

「なあ、ヴィヴィオ。今夜のお祭りは悪い人が来るんだ。お姉ちゃん達はその人たちをメツつてしに行くんだよ。そんな所に可愛いヴィヴィオが来たらどうする？ あんまり可愛いから悪い人達がヴィヴィオを攫って行っちゃうかもしれないぜ？ お姉ちゃん達だけだとそれを防げないかもしれない。だからみんなが揃ってる時に行こう？ なっ？」

「悪い人って、怖いのか？」

アギトの言葉を聞き、ヴィヴィオは少し不安がる。彼女の不安を取り除くように、ギンガが頭を撫でながら優しく声を掛ける。

「私達はヴィヴィオが心配なだけだよ。だから、ヴィヴィオ。今日はお留守番をしようね。次にあるお祭りには絶対連れて行くって約束するから。ほら、指きりしましょ？」

「指きり？」

ヴィヴィオは『指きり』という物が分からず不思議そうな表情をする。それに対してギンガが説明を行う。小指を組んで歌を歌いながら約束をすることだと。ナカジマ姉妹は父であるゲンヤに『指きり』を幼い頃教えてもらっていた。もちろん幼馴染であるアーデルハイド兄妹もそれを教えられている。

「指きりげんまん　　ウソついたらハリセンボンの　　ます　　」

ヴィヴィオはギンガと共に『指きり』を行う。早速教えてもらった歌と動作を笑顔で真似していく。純粹に『指きり』という行為が楽しいようだ。

「じゃあ、約束したからね？　ヴィヴィオ」

「うん、ギンねえちゃん。ヴィヴィオ、良い子で待ってるね」

ヴィヴィオは満面の笑顔に変わっていた。ギンガはヴィヴィオの扱いがかなりうまくなっているようだ。クイントの領域に届くまであと僅かといったところであろうか……。

そんな二人の様子を見て、キョウとティアナ、アギトはホッとすのだった。

その後、一同は和気あいあいと食事を続けていくのだった。

遅れてしまいました。しかも二部構成とか……。

べつ、別にまたギンガの浴衣が書きたくなっただって訳じゃないんだから。

失礼。

読んでいただきありがとうございます。

ご意見、ご感想等受け付けておりますのでよろしく願います。

E p 7 0 特別任務？夏祭り2（前書き）

すみません、改訂作業と並行していたらまた遅れてしまいました。本当に申し訳ありません。

こっちを書きつつ活動報告で一発ネタを書いてみました。

そっちは勢いで書いたヤツですが、結構自信作ですのでよろしければ読んでいただけると嬉しいです。

今回は懐かしいキャラが少し出てきます。みなさん、覚えてらっしゃいますでしょうか？それでは本編をどうぞ。

Ep70 特別任務？夏祭り2

昼食を取り終えたキヨウ達三人は、再び部隊長室へと足を運んだ。はやてが潜入捜査の細々とした説明を行うためだ。その場にはシャルの姿もあつた。以前、『ホテルアグスタ』に行った時の様に、衣装が入っているであろう箱を手に持っていた。それから暫らくして、はやてによってその日の任務の説明が行われる。

キヨウ達は一般客を装いつつ不審な人物を探して欲しいとのことだ。向こうで合流する部隊に要注意人物のデータ等が揃っているらしい。受け渡し現場に遭遇したら、その部隊と連携を取りつつ速やかに取り押さえたいとのことだった。説明が終わると話題は別の事に移る。

「シャル先生、やっぱりそれって？」

シャルが持っていた箱が気になったのか、ギンガがそれを指さしつつ尋ねる。

「うふふ。そうよ、この中には三人に来てもらう衣装が入っているの。だって、管理局の制服だと目立つじゃない？ アギトちゃんも普通の人間サイズになれるんだから用意してみたのよ」

そう言いつつ、シャルは箱の蓋を取る。その中には白地に朝顔の柄がプリントされた浴衣と、黒地に金の蝶の柄がプリントされた二着の浴衣が入っていた。帯と下駄も中に入れている。その二つは共通のデザインの物で紺色の帯と、赤い鼻緒の付いた物だった。

「それで、キヨウ君のはこっちや」

はやてもシャマルから箱を受け取りその蓋を開く。中には紺色の甚平が入っていた。はやてがそれを取り出し、キョウに見えるように広げる。

その甚平には背中の部分に金色の日輪の紋章が描かれていた。

「キョウ君のトレードマークって言ったらやっぱりこれやしな。支給された衣装に付け加えたんよ。それでも似たようなデザインの物は多いやろうし、そこまで目立つたりはせんと思っけど……」

「なんか気を使わせてみたいで、すいません。でも、そのお心遣い嬉しいです。ありがとうございます、八神部隊長」

今日ははやてに笑顔で礼をする。はやても感謝されて悪い気分ではなさそうだった。

「此処で伝える事はもう終わりやから、向こうでしっかり頑張ってきてな、三人とも」

キョウ達は声を揃えて敬礼をし、部隊長室を後にする。

「あつ、キョウ君。良い所に!!」

廊下を歩いていたキョウ達にシャーリーが声をかけ、近付いてくる。手には15センチ四方のケースを持っていた。

「ほら、これ。前、頼んでた発信機がようやく完成したんだ」

シャーリーはケースを開け、キヨウに中身を見せる。その中にはアギトの親指の爪程のサイズのテントウ虫に似た形の発信機が10個ほど入っていた。キヨウとアギトはそれが何なのか分かっているようにシャーリーに礼を述べる。

「ねえ、何時の間にそんな物を？」

一人取り残されたギンガがシャーリーに問う。シャーリーはすぐさま説明を開始する。この発信機はアーデルハイド兄妹に頼まれて作っていた物だと。キヨウとアギトは離れていなければ、多少互いの位置を感じる事が出来る。そのメカニズムを研究して応用が出来ないかと二人に頼まれていたのだ。

キヨウとアギトの脳波の波長から、二人専用の発信機を作った様である。

「これの凄い所は、電波や魔力を発しないからキヨウ君とアギトちゃん以外には気付く事が難しいってところなんだよ。こんなに小さいんだし。それに二人のどちらかがこれを持っていてだけで、離れた場所でも其の位置が分かるんだ。二人の脳波を増幅して発信出来るんだよ。更にはメガー又さんの娘のえつと、ルーちゃんだったかな？ あの子が使役する虫みたいに自律駆動も可能なんだよ。短時間だけど……」

シャーリーが一気に説明をする。自分の開発した物に対してとても熱意の伝わる物だった。

「流石だぜ、シャーリー」

キヨウは驚きの表情を隠せずにいた。自分が望んでいた以上の物を用意した幼馴染に称賛を贈る。

「ホントだよ、これだけの物を作ってくれるなんて。スゲーな」

アギトも同様だった。発信機の一つを手に取り、眺めつつ口を開く。それから暫しシャーリーが補足を加える。動力は空気中の魔力で最大三日間の連続使用が可能らしい。使用時はキヨウとアギト、どちらから一方の意志があれば起動することだ。キヨウはそれを渡されるとデバイスの格納領域に仕舞いこむ。アギトもシャーリーから自分サイズのウエストポーチを渡され、それに幾つかを収納する。

「サンキューな。これからどんな事が起こるか分かんないから、こういう装備は助かるよ」

「どういたしまして。ああ、それとね。初代フランメを貸してもらえない？ 少し改良を加えたいんだけど？」

礼を言うキヨウに対してシャーリーが頼み込む。彼女はまだアイデアが尽きないのだろう。

「構わないぜ？ あれだけの物を作ってくれたしな。それにフランメの改良も何時か役に立つんだろ？」

「当然！！ シャーリー様に不可能はないのだ！！」

彼女の好意を無碍には出来ないし、キヨウはそれを受け入れるのだ。キヨウの許可を得たシャーリーは見ていて清々しくなるような笑顔で答える。その後、三人はシャーリーと別れバイクを取りに向かうのだった。

キヨウ達が祭りの会場に着くと、そこは沢山の人で溢れ返っていた。ほとんどの人が浴衣等の装いであり、制服を着ている三人は少し浮いていた。

「ターゲットに気付かれちゃいけないから、早く移動して着替えましょう」

ギンガの提案でキヨウ達は時空管理局の部隊の詰所へと移動する。移動した先の詰所には三十人ばかりの隊員達が待機していた。

今回出動する部隊の一つが彼らの様だ。其処には居ないが、会場内を他の部隊の隊員達が警備や警戒を行っているらしい。キヨウ達は詰所にいる部隊の責任者に挨拶をし、その日の行動についての指示を受ける。受け渡し現場を見つけ次第、この詰所本部へ連絡し、対応できそうなら行動してくれと指示を受ける。そして今回のターゲットの顔をそこで確認する。

今回の最重要人物は男性と女性であった。男性の方はダロームという名の色白の肌と赤い目を持ち、女性の方はヴィシユムという名の若い美人であった。

その二人を見つけたら気付かれない様に後を付けるとのことだ。三人はロッカールームへ向かいシャマル達に渡された衣装に着替える。その後キヨウが一番に着替えを終わらせ、詰所の入口で二人を待つ。彼は白い手ぬぐいを訓練校時代のバリアジャケットの物の様に鉢巻きにしていた。

「ごめん、キヨウ君。待ったでしょ？」

「悪いな、キョウ。ギンガに着付けを手伝ってもらってたんだ」

奥の方からはカランコロン解けたの足音が聞こえてくる。キョウが振り向くと、浴衣を着たギンガとアギトがそこに立っていた。

ギンガは白い方の浴衣を身に纏いリボンの代わりに赤いかんざしを挿していた。青い髪と白い浴衣が彼女の清楚さを引き立たせている。紫の朝顔と赤いかんざしがアクセントになっていた。

アギトはアウトフレームと変身魔法の組み合わせでキョウ達と同年代の姿に変身する。彼女の赤い髪と黒い着物が非常にマッチしていた。珍しく髪を一つ結びのポニーテールにしている。そのせいで遠くから見ればシグナムと勘違いされるのではないかという印象だった。

「二人とも、凄く似合ってるぜ。ギンガも爽やかかって感じがするし、アギトも……何かエロい」

「本当？　ありがとう、キョウ君！！」

ギンガはキョウの言葉に嬉しくなり彼の右手に抱きつく。一方のアギトは……。

「そっか、似合ってるか……。って、エロいって何だよ！！」

初めは褒められた事に照れていたが、途中から眉間にしわを寄せキョウに抗議をする。

「アギトも似合ってる可愛いぜ。でも他の男が寄ってこないか兄としては心配だぜ……」

キヨウは言葉通り、普段と違い妖艶な雰囲気を放つアギトが心配の様であった。アギトもキヨウの思いが分かっており、それ以上追及する事はなかった。

「さあ、取り敢えずこれ位にして捜査を開始しよう。お祭りには少し時間があるけど、その間にターゲットが接触したらマズいし」

ギンガの言葉を合図にキヨウ達は行動を開始する。

それから三人は会場内を歩き回る。まだ祭りが始まってもないのに、そこには沢山の人々が居た。出店等も早い物は既に営業を開始していた。

子供連れの家族やカップルなど、沢山の人たちが楽しんでいる様子だった。

三人が歩いているとギンガとアギトがナンパをされるといふ場面も見られた。この二人の容姿は鼻屑目に見なくとも美人と呼べるものであるのだ。

「ねえ、お姉さん達？ 今、暇？」

二人に三人組の男が声を掛ける。ギンガは流石に人ごみでキヨウと腕を組むことはしていなかった。キヨウ自身はそれほど目立つ格好ではないので男達は彼に気付いていない様なのだ。

「ごめんなさい、私には彼が居るから」

そう言いつつギンガはキヨウの左手に抱きつく。

「それに妹にも声を掛けるのは止めてくれないかい？」

キョウはアギトを庇うように彼女の前に立ち、男達にそう答える。

「そんな地味なヤツと付き合うより俺達と遊ぶ方が楽しいって！」

それでも男達は引き下がらない。キョウを罵倒する様な事を言われたので、ギンガは拳を握りこむ。それを目にしたアギトは、仕方ないといった表情で男達の前に移動する。

「私は陸士108部隊のアギト・アーデルハイド曹長だ。あんまりしつこいと詰所まで同行してもらうぜ？」

アギトの発言により男達は退散する。相手が管理局員なので問題を起こすのはマズイと判断した様だった。

「ありがとつな、アギト。ギンガを止める為にああ言ったんだろ？」

「ごめんね、アギトちゃん。私、ちょっと頭に来ちゃって……。あそこで手を出しちゃダメって分かってるんだけど、一瞬手が出そうになっちゃって。それを防いでくれてありがとう」

キョウとギンガがアギトに礼を言う。アギトは少し照れつつ鼻がしらを人差し指で書きながら答える。

「いや、お前が地味なのは事実だろ？ それにギンガ、何年の付き合いだと思ってるんだよ。お前が頭に来るポイントくらいわかるよ」

アギトの発言を見てキョウとギンガは笑顔を浮かべる。キョウはア

ギトに近寄り、彼女の右手を握る。

「なっ、何だよ？ いきなり」

「ほら、こうすればお前の男避けになるだろ？ 俺と手を繋ぐのは嫌かもしれないけど……」

「そうだね。じゃあ、私はこっち。これなら少し動きにくくはなるけど、すぐに離れられるし大丈夫じゃないかな？」

ギンガはそう言うと、キヨウの腕を離しアギトの左手を握る。

「ばっ、バカ野郎。ふっ、二人とも早く廻ろうぜ。事件は待つてはくれないんだから」

アギトはキヨウ達の手を引き歩きだす。その頬は僅かに赤く染まっていた。どうやら照れ隠しの様であり、そんな彼女の様子を見たキヨウとギンガは顔を見合わせて微笑むのだった。

それからしばらくは平穏な時間が流れた。しかし、それは突然終わる。

「ひったくりだ〜!!」

人ごみの方からそう声が聞こえて来たのだ。三人は声の方へと駆け出す。しかし、それは無駄足に終わる。

「悪は許さん!! 飛燕斬!!」

人ごみの中を走り去ろうとする犯人と思わしき人物に、子供を二人連れていた父親が蹴りを放ったのだ。バツク宙をするように飛び上がりながら父親らしき人物の蹴りが炸裂する。かなりのキレがあり、それは吸い込まれるかのように逃げる男の身体に叩きこまれるのだ。蹴りを喰らった男は周囲の人々により取り押さえられる。蹴りを放った人物は荷物を取り返し、奪われた人にそれを返していた。その蹴りを放った人物とは……。

「……キム先生！……！」

「やあ、君たちは……！」

キヨウ達は声を揃える。そう、その人物とはキヨウとギンガの小学校時代の恩師の一人、キムだったのだ。彼は当時より少し老けていて口元に皺があったが、相変わらず爽やかで、齒をキラリと輝かせながらキヨウ達に手を振る。

「久しぶりだね、キヨウ君、ギンガ君。そして……、君はキヨウ君の妹さんだったね？ 三人とも元気そうじゃないか」

「お久しぶりです。キム先生。お元気そうでなによりです！！」

「キム先生もお変わりがないようで。お会い出来てうれしいです」

「アギト・アーデルハイドです。ご無沙汰してます。兄がお世話になりました」

キヨウとギンガは再会を喜ぶ。アギトは体育祭等の行事でしか彼に会った事が無かったのだが、キムが自分の事を覚えていてくれた事

が嬉しく、頭を下げる。

四人が再会を喜び、近況報告をしているとキムの下には彼の二人の子供が歩み寄る。キムは二人の事をキヨウ達へと紹介する。

「これがうちの息子のドンファンとジェイファンだ。ほら、二人とも」

「こんにちは、キム・ジェイファンです」

「キム・ドンファンです。よろしくお願いします」

流石、キムの息子だけあり二人とも丁寧にお辞儀をする。キヨウ達は二人に上手に挨拶が出来て偉いと頭を撫でて褒める。キムの息子達は少しくすぐったそうに、はにかむのだった。

キムは息子二人にせがまれてこの祭りに足を運んだのだそうだ。加えて、この様な場では青少年が非行に走る事が多いので、それを防ぐための見回りをしようとも思っていたと彼は答える。

「ジョン君から三人の事はよく聞いているよ。管理局でも頑張っているみたいだね。巣立った教え子たちが頑張っているというのを耳にするのは、とても嬉しい事だよ」

キムはキヨウ達に笑いかける。キヨウは彼の言葉で思わず涙ぐんでしまう。卒業して以来、会っていなかったのに自分の事を気にしてくれていた彼の心遣いが嬉しかったのだ。

「はっ、はい。ありがとうございます……」

キヨウは臉を腕でこすり、その言葉を返した。

「キム先生って、ジョンさんと兄弟弟子なんですよね？」ストライ

クアーツ』の一派の「

「ああ、そうだよアギト君。彼は君達三人の事をよく褒めていたよ。実力もさることながら、ミッドの治安を良くしようと頑張っている」と、彼は自分の事の様子に話していたんだ」

「ジョンさん……」

普段はそんなそぶりを見せない先輩がそのように自分達の事を評価してくれていたという事を知り、嬉しくなつてギンガは彼の名前を呟く。今度会つた時には礼を言おうと心に決めるのだった。

それから少し談笑した後、彼らと別れキョウ達は任務を続行する。取り押さえられた犯人を連行するために、近くにいた局員がそこに来たのでそれを切つ掛けにしたのである。

僅かばかりの再会の時間だったが、三人はとても楽しい時間を過ごしたのだった。

それから三人は再び会場を回る。そしてやっとターゲットの一人であるヴィシウムを発見するのだった。ヴィシウムは『浴衣美人コンテスト』のエントリー会場に立っていた。其処は大きな広場に設置されたステージのすぐ傍だった。資料にあつた姿とは違い、変装をしているようだったのだが、戦闘機人の能力による物なのかギンガが彼女の顔を完全に把握しており、変えられない特徴を見つけ彼女を断定するのだった。

「敢えて目立つ場所に姿を現すことで、私達管理局の盲点を突こうと考えてるんだろうな」

「そうかもな。つとすると、もしかしてもう一人のダロームってヤ

「ッもこれの実行委員に混ぜてるかもしれないねえ」

「それなら、私とアギトちゃんであレにエントリーして、ヴィシユムを見張った方が良くないかしら？」

「いや、私が行くよ。もし会場にダロムが居た場合、すぐに取り押さえられるだろ？それにコレがあるし、早速役に立つてもらおうか」

アギトが、此処に来る前シャーリーに手渡された発信機の入ったポーチを手に乗せつつそう言い放つ。発信機はキヨウとアギトの脳波による物だから気付かれにくいし、複数で行動するより単独の方がバレ辛いからだ。二人はアギトの意見を受け入れ、詰所に通信を送る。コンテスト会場に人員を派遣してもらえるように要請をするのだ。その要請はすぐに受理され、キヨウ達は局員達が到着すると、情報を提供し行動を開始するのだった。

Ep70 特別任務？夏祭り2（後書き）

ごめんなさい、まだ続きます。

浴衣美人コンテストに出場するアギト。彼女は犯人達に気付かれずに上手く立ちまわれる事が出来るのか？

次回の彼女の活躍にご期待下さい。

読んでいただきありがとうございます。

E p 7 1 特別任務？夏祭り3（前書き）

「エラー・ポッターとヴァ……の囚人」失礼しました。

友人たちと居酒屋で飲んだ後に、ビデオ屋に寄って面白いタイトルの物を見つけた奴が勝ちって遊びを何度かやった事がありましたw

w
w

ちょっとジャンプネタとライダーネタがございます。

ご意見、ご感想、ご指摘を募集しておりますので、よろしく願いいたします。

Ep71 特別任務？夏祭り3

キョウ達と別れ、今回の任務のターゲットの一人であるヴィシユムに近づく事になったアギト。彼女はヴィシユムがエントリーしようとしていた浴衣美人コンテストに、自らもエントリーする。

コンテストは30分後に行われるようで、アギトは出場者用の待合室でヴィシユムの様子を窺う事にするのだった。

「ここが控室か……」

控室には五枚程の鏡が壁に備え付けられ、そこでメイクが出来るようになっていた。その後ろには折り畳みのイスと机が置いてあり、出場者であるう女性たちが寛いでいた。

目的のヴィシユムというと、数名の女性たちに混じり鏡の前で化粧直しをしているようであった。

幸運な事に彼女の隣は空いており、アギトは其処へと足を進める。

アギトは不自然に思われぬよう、エントリー前に連絡を送った局員達に化粧ポーチを用意させていた。それを手に持ちながらヴィシユムへと声を掛ける。

「あの、隣を使ってもよろしいですか？」

「ええ、構いませんわ」

ヴィシユムはアギトの申し出をすんなりと受け入れる。ヴィシユムはウエーブの掛かったブロードヘアを肩まで伸ばし、色白い肌と切れ長の目を持つ美人であった。だが、どこか冷たそうな雰囲気も漂わせていた。

アギトはヴィシユムの隣で化粧を始める。彼女は基本的にすっぴん

で過ごす事が多いのだが、ギンガと共に女の嗜みとして、クイントから化粧の仕方を教わっていたのだ。今回はその経験が役に立ったようだ。

元々アギトは顔も整っており、目鼻立ちのすっきりして唇も健康な薄桃色だった。厭らしくない程度に薄く化粧を施していく。化粧無しでは美しさの中に僅かな幼さを残していたが、化粧後は大人っぽい雰囲気漂う、まさに美女と呼べる姿に変身するのだった。

「あつ、ビューラーが……。拾ってもらってもよろしいですか？」

「ええ。はいどうぞ」

「ありがとうございます（よし、気付かれなかったか）」

アギトは化粧道具をポーチに仕舞う際、わざとヴィシユムの方にビューラーを落としそれを拾わせる。手渡される瞬間にヴィシユムの浴衣の袖ヘテントウ虫型の発信機を取り付ける。もし彼女を見失ってしまった時の保険とするためだ。どうやら気付かれずに取りつける事が出来たようだ。

その後、アギトはヴィシユムの動向に注意しつつ、コンテストの開始を待つのだった。

一方のキョウ達はというと、コンテスト会場の中にいた。ステージ最前列付近に立ち、余り目立たぬように気を使いつつ周囲を警戒していた。周りから見ればキョウとギンガはコンテストを見ようとする若いカップルとしか映らないであろう。

呼び出された局員たちも、会場警備の名目で警戒を行う。民間の警備会社にも話を通しており、違和感なくその場に溶け込んでいた。

「ねえ、キヨウ君。ヴィシユムは見つかったけどダロームは何処に居るんだろう。この中に混ざっていたら、探すのは大変だね……。まあ、遅かれ早かれ二人が接触するだろうから、そのタイミングを見逃さないようにしないと」

「確かに……。それにしてもこのコンテストの賞品の『織姫の髪飾り』ってというのは何なんだろうな？」

キヨウは浴衣コンテストのパンフレットを見ながらギンガと喋っていた。キヨウの言葉でギンガは何か気付いたようだ。

「キヨウ君、それって確か数ヶ月前に盗難したって言われている口ストロギアと関係があるんじゃない？……。『六花のヘアピン』だったかな？ 実際にそんな能力があるのか分かんないけど、『あらゆる物を拒絶して次元断層すら発生させたり修復したり出来る』って、ある管理世界で言い伝えが残ってるみたいな情報を見た事があるんだけど」

「もしかして、それを商品にカモフラージュして出場したヴィシユムに渡そうとしているのか？商品としての名目があれば、怪しまれないだろうし」

「もしかして実行委員の中にダロームが紛れ込んでいるんじゃない？それなら票を操作してヴィシユムに一位を取らせる事も出来るよ。その後でヴィシユムがそれを持ち去り売ってなら話が繋がるね」

「詰所に連絡して、実行委員を洗ってもらおう。その予想が当たってるかもしれないから、念のためにな」

二人は詰所に通信を送る。その後、すぐにステージの幕が開き浴衣美人コンテストは開催されてしまうのだった。

「みなさん、ようこそお越しくださいました。それでは、今より『浴衣美人コンテスト』を開催いたします」

ステージの上では司会の男が開始の声を上げる。ステージ脇には審査員らしき人物たちの姿もある。この祭りの主催者や今年の担当責任者等であり、どれも身元がはっきりしている人物たちであった。

「それでは今回のゲスト審査員をお呼びします。美のカリスマ、メイクアップアーティストのGORIさんです！！」

視界に紹介され登場したのは猿の様に毛深い男だった。この男はメイクアップパーとして若い女性に人気の人物である。

「あつ、あの人が知ってるよ！！ スバルが持つてるファッション誌に時々出ている人だよ。何でも元局員で、足の怪我がもとで引退した後、メイクアップアーティストになっただって」

ギンガも知っているようで、キョウウの隣で指をさしながらそう言葉を放つ。意外かとも思われるがナカジマ姉妹でファッションに興味があるのはスバルなのだ。覚えている方もおられると思うが、以前キョウウとギンガのデートの時にギンガの服を選んだのはスバルである。

「ガハハハ。今日はお呼びいただきありがとうございます。どんな女性たちが登場するのか楽しみにさせてもらおう」

ステージ上でGORIが挨拶を行う。職業の割に、彼の話し方は粗野な印象を見受けられた。彼が席に着くとコンテストは開始されていくのだった。

このコンテストは審査員の票と観客から選ばれた100人程の票で結果が決まる様だ。選ばれた観客達は最前列の椅子に腰掛けている。審査員の持ち点は一人10点で観客代表達は1点ずつ。観客は気に入った物に投票し、審査員はその都度コメントと点数を発表するという形式の様だった。キョウとギンガは最前列付近にあり、選ばれた観客の中にダロームが居ないか、初めのうちは目を光らせていたのだ。だが、先ほどの会話でその可能性が低くなったと感じている。しかし周りに人が多く、その場から動くのは骨が折れそうであった。

コンテストはどんどん進んでいく。審査が終了した出場者達は、そのままステージの後ろのひな壇で待機する様な形だった。登場はエントリー順である様で、アギトとヴィシユムの番は終盤の様だった。キョウとギンガは人込みをかき分け、何とか移動を行っていく。その間、ヴィシユムがステージに登場する。

「それではエントリー？20番、モヤサヨさん登場してください」

ヴィシユムは偽名を使っているようだ。彼女の登場にステージの下からは歓声上がる。白地に翼竜の柄の付いた浴衣を纏い、ブロンドの髪をシニヨンに纏めていた。司会が彼女の経歴を紹介する。そしてそれが終わると彼女は音楽に合わせてステージで様々なポーズをとっていく。パフォーマンスが終了すると、三人の審査員達から札が上がる。

三人とも満点を付けていた。代表でGORIが視界からコメントを求められる。

「非常にムラムラします」

下品なコメントであった。他の審査員も苦笑いをしていた。その次に、アギトの番が回ってくる。

「それでは最後の出場者です。エントリー？21番、アギト・アーデルハイドさんです」

アギトの登場で、ヴィシユムの時と同じ位に歓声上がる。アギトはアダルトな雰囲気を持ちつつ無邪気な笑顔を浮かべている。まさに小悪魔と呼べるような姿であった。

「アギトさんは家事手伝いをされておられ、父親と兄の面倒をみる家庭的なお嬢さんだそうです」

「アギト・アーデルハイドです。みなさん、よろしく〜!!」

アギトは司会からの紹介の後に投げキッスを飛ばす。ステージ下からは「アギトちゃん、結婚してくれ〜」との声や、彼女の投げキッスで舞い上がってその場に倒れる男性の姿も見られた。

キョウとギンガは何か人ごみから脱出する事に成功をする。だが、観客の声を聞いた時にキョウはその中に戻ろうとする。

「結婚してくれだ〜？ どのどいつだ、そんな事言いやがったのは？ ごめんギンガ、ちょっと『OHANASI』してくる〜!!」

「待つてキョウ君!! 今はそんなことしてる場合じゃないでしょ!! ほら、早くステージに行くよ〜!!」

キヨウは甚平の襟を掴まれ、ギンガに制止される。今にも引き連れて行きそうなギンガの様子にキヨウは正気を取り戻すのだった。

キヨウ達がステージに向かっていている間、アギトは流れる音楽に合わせてパフォーマンスを行う。幼い頃からキヨウ達と共に鍛錬をしていた事もあって、姿勢や動作が美しく多くの人々を魅了していくのだった。

「むぐむぐ!!」

「えっ、この人は!!」

キヨウ達がステージ脇に到着すると、柱の裏から物音が聞こえる。

二人は警備の係りに管理局員用の身分証を見せ、ステージに入る事を許されたのである。

ステージの音楽に混じりかなり聞き取りづらい物であったが、ギンガが其れを聴きとる。戦闘機人特有の、常人以上の身体能力はこの様な場面でも役に立ったようだ。其処には身ぐるみをはがされ、猿ぐつわを付けられたGORIが後ろ手に縛られていた。彼の右足には深い傷跡が見える。それで本人だと判断したキヨウとギンガは彼を解放する。

「はあはあ、助かったよ二人とも。ありがとう」

「どうしてあなたが此処に？ ステージに入るのは……」

ギンガの質問にGORIは縛られていた腕を擦りつつ答える。

「突然後ろから殴られて、気が付いたら縛られていたんだ。残念ながら犯人の姿はすっかりと見ていないんだが、気を失う中で赤い目が印象に残ったんだよ」

「赤い目？ 確かダロームの瞳も赤かった気がするぜ」

「じゃあ、ステージに入るのはGORIさんに化けたダロームなのかも？ 早くアギトちゃんに知らせないと！！」

キョウとギンガはGORIを警備の係りに託すと、ステージへと駆けっていく。

「それでは審査員のみなさん、札を上げてください」

司会の言葉でアギトの審査が開始される。三人の挙げた札は、ヴィシウムと同様に満点であった。

「では、GORIさんにコメントを」

「本気でムラムラします！！」

「えっと……。ありがとうございました。それでは、審査結果の発表を行って行こうと思います」

司会は内心呆れていたが、冷静にGORIのコメントをスルーし票を集計するのだった。観客からの票に集計には魔法技術が使用されており、短時間で発表が可能になっている様なのだ。

「待て！！ そのGORIさんは偽物だ！！」

「本物のGORIさんはステージ脇の陰に縛られてたんだよ。さっき私達が救出したのが証拠よ！！」

其の時、キョウとギンガがステージ脇からアギトに声を挙げる。

GORIも二人の後を追って来たようで、コートを纏い後ろから歩いてくる。

「GORIは私だ。其処に入るのは偽物だ。その証拠にそいつには足の傷が無い！！」

GORIはステージに登場すると、自身のコートの裾をめくり足の傷を露わにする。

「くそつ、始末しておくべきだったか」

審査員席にいた偽物は立ち上がり、その場から逃げようとする。ステージの後ろに立っていたヴィシムも同様に気付かれない様にその場から去ろうとしていた。

「逃がさねえぜ、二人とも！！」
『アギト流・八酒杯やさかすき 双破そつは』
「！！」

アギトは両手に炎を出現させ、それを『闇払い』の様に放つ。この技は以前、犯人を確保する際に使用したバインド付きの炎『八酒杯』の改良型のような。両手をアンダースローの様に振り、同時に炎を放ってその手の胸の前に交差する。

アギトから放たれた炎は、かなりのスピードで床を這いつつ偽物とヴィシユムへと迫っていく。フェイトと同じ位のスピードが無いと避けられそうにない様な物だった。

「ぎゃあー!!」

「きゃあー!!」

炎は二人に接触すると火柱を上げ、バインドで二人を拘束する。アギトは偽物に近付きこう言い放つ。

「時空管理局、陸士108部隊所属のアギト・アーデルハイド曹長だ。あなたにはGORI氏への暴行の疑いがかけられている。ついて来てもらっぞー!!」

ヴィシユムの方もキョウとギンガの手によって確保がされていた。ステージ上で起こった突然の逮捕劇に、観客たちは始めポカーンとしていたが、次第に声援を送る者が出ていき、その声はかなりの大ききさになっていった。

逮捕劇の裏では票の集計が終了していた様で、司会が空気を読んだのか読んでいないのか、それを発表し始める。

「みなさん、お静かに!! それでは発表いたします。今回の浴衣美人コンテストでグランプリを獲得したのは……。エントリー? 21番、アギト・アーデルハイド嬢です!!」

「えっ？ 私？」

《《うわ~~~~~!!!!!!》》

観客たちからは更に大きな声援が上がる。偽物を連行しようとしていたアギトは、自分が選ばれると思っていなかったのか、気の抜けた声を出してしまう。

「ほら、アギトちゃん。後は私達が引き継いでおくから、あなたは向こうに入ってきたら？」

「でも、ギンガ……」

「めったにない機会だし、女の子なんだから。ほら、早く！！みんながアギトちゃんを呼んでいるよ？」

客席からはギンガの指摘通りアギトに対するコールが上がっていた。アギトは渋々ながらステージの中心へと向かう。

そして、本物のGORI氏から表彰状と、賞品の『織姫の髪飾り』を手渡されるのだった。

「ありがとう、アギトちゃん。君の同僚の人たちから助けていただいたよ。本当に感謝している」

「いえ、職務に従っただけですので……」

GORIから礼を言われ、アギトは苦笑いをしながらそれに答える。GORIは更に言葉を続ける。

「ほら、観客のみんなにも答えてあげて」

彼に促され、アギトは司会からマイクを受け取ると観客たちへと声を放つ。

「みなさん、身分を偽っていたのにこの様な賞を受賞させていただいて、本当に嬉しいです！！　ありがとうございます！！」

《《うお~~~~~！！アギトちゃ~~~~~ん！！》》

観客たちは、そんなことは気にしていない様だった。観客の様子を見て、その間に駆けつけて来た局員達へ偽物とヴィシウムを引き渡したキヨウはこう考えていた。「まるで、ユカリン様のファンの様だ」と……。

その後、詰所で簡単な取り調べが行われた。やはり偽のGORIはダロームが化けていた物であった。特殊メイクを使い顔を変えていたようだ。ダロームとヴィシウムの供述から、祭り会場に潜んでいた共犯者達の情報も得られ、それらはすぐに一網打尽にされるのだった。

三人の潜入捜査は祭りの終了までには完了する事が出来た。細々とした事は他の部隊が引き継ぐようで、三人は早めに帰還する事が出来る様だ。

キヨウ達はヴィヴィオと約束をしていたお土産を買うために出店を回る事にする。ヴィヴィオだけでなく六課のみんなに渡せるようにかなり大量に注文をしていくのだった。

キョウは両手に袋いっぱい詰められた『たこ焼き』やら『りんご飴』やらその他色々なお土産を持たされていた。アギトとギンガは二人で山のような『綿あめ』を運んでいる。軽いし、どちらも片手を開けていた。

「なあ、二人とも。俺だけ荷物が多くないか？ それに重い物ばかりだし」

「男の子なんだから当然でしょ？ ねえ、アギトちゃん？」

「だよな、ギンガ。ほら、キョウ！ 早くしないと置いていくぞ？」

「理不尽だ〜〜〜〜！！！！」

人ごみの中でキョウは声を上げるが、それは喧噪のなかに消えていく。頑張れ、荷物持ち……。

三人が会場を後にしようとした時、空には花火が上がった。三人が見上げると、夜空には大小色取り取りの花火が打ち上げられていく。黒いキャンバスにいくつもの花々が書きこまれていくようであった。

「うわあ、綺麗だね〜！！ 今度はみんなで一緒に見たいね？」

「本当だな。次は純粹に祭りを楽しみたいぜ。ってどうした？ アギト」

キョウはギンガの言葉に答えつつ、じっと賞品の入れられた箱を見

つめるアギトに声を掛ける。

「何でもね〜よ!!!」

「アギトちゃん、せっかくだから、一度付けてみたら?」

ギンガはアギトの気持ちを察した様であった。アギトは頷くと髪飾りを取り出し、自分の髪につける。

「どっ、どっかな?」

アギトは照れ臭そうにキョウとギンガに意見を求める。頬を染め、手を腰の後ろに組み、上目遣いで効いてくるのだ。それを見てキョウは不覚にもドキツとしてしまふ。ギンガも、同性なのに心の中では抱きつきたい衝動に駆られるのだった。

「良い感じだと思っぜ?」

「うん!! すっごく可愛いよ、アギトちゃん」

「本当か? ありがとうな、二人とも!!」

アギトは空に上がる花火の様に満面の笑顔で二人に礼を告げるのだった。

暫らく三人はその場で花火を楽しんでいく。ギンガは『ブリッツキヤリバー』で映像に残していた。六課に戻ってからみんなで見ようと考えているらしい。

花火が終わるとアギトは髪飾りを外し、普段のサイズへと戻る。同時に浴衣も箱の中にしまいこむ。ギンガもキョウ達と一度別れて、

詰所に戻り制服に着替えてくる。

それから三人はキヨウのバイクで六課へと戻っていくのだった。バイクの上でキヨウはその日の事を振り返っていた。

お祭りでは多くの人々の笑顔が見られた。クラナガンの治安はある程度守られているが、それでも涙を浮かべる人々は少なからずいる。そういった人の涙を止めてやり、ここで見た沢山の人々の笑顔を守っていけるようになりたいと彼は思うのであった。

その考えが、アギトとギンガにも伝わったのだろうか。二人はキヨウに声を掛ける。

「お祭りではみんな楽しそうだったね、大人も子供も。あの人たちみたいに笑えるような人を守るように頑張らないといけないね」

「それに、悲しんでいる人を助けてあげられる様にならないとな？ 三人だけではきついかも分かんないけど、他の人たちと協力して頑張っていこうぜ！！」

「そうだな、二人とも！！ よっしゃあ、まずは公開意見陳述会を成功させないといけないな。頼りにしてるぜ、ギンガ、アギト！！」

「うん（おう）！！」

六課に到着すると、ヴィヴィオもまだ起きており三人の帰りを待ち続けていた。キヨウ達はヴィヴィオを始め、隊長陣や、スバル達フオワードメンバー、それに他の部隊員たちへとお土産を渡してまわった。それが終わると食堂でお馴染みのメンバーでギンガが撮影した花火を見ながらお土産を食べていった。

「綿あめもりんご飴も甘くておいしい!! ありがとう、キョウ兄ちゃん、ギンねえちゃん、アギトお姉ちゃん!!」

「兄さん達、ありがとうございます。僕、このりんご飴って初めて食べましたが、大好きになりました!!」

「この綿あめもすっごく美味しいです、ありがとうございます。ねえ、フリード?」

「きゅくる〜!!」

「私達にまですいません、先輩方。このチョコバナナって、凄く美味しいです!!」

「はし巻きなんて食べるの久しぶりだよ!! ありがとう!! アギちゃん、ギンねえ、キョウウにい!!」

「綿あめのおふとんです〜!! リイン、感激です!! 三人ともありがとうです〜」

そこでは多くの笑顔が見られ、三人は嬉しい気持ちに包まれるのだった。

アギトが獲得した賞品は、後日管理局を通して元の持ち主に返還された。祭りでの捜査とそれに絡んだ事件は無事に一件落着となったのだった。

E p 7 1 特別任務？夏祭り3（後書き）

こんな感じになりました。「鯰」やら「銀魂」やらのネタが入っておりましたが分かりました？犯人の名は「ライダー」から拝借いたしました。

読んでいただきありがとうございました。

E p 7 2 公開意見陳述会1（前書き）

今回は久しぶりに登場するキャラや、新キャラ等が出てきます。長らくお待たせしてしまいましたでした。

これから、活動報告でもお知らせをしていました他の先生方とのクロスの方を書いていきますので、更新ペースは下がると思っています。申し訳ございません。

出来るだけ面白い話にしようと頑張りますので、そちらも読んでいただけると嬉しいです。

キャラをお貸しくださる先生方は活動報告にて紹介させていただいておりますので、そちらの方も目を通していただけたらありがたいです。

ご意見ご感想ご指摘、募集しております。

クロスの中でこういう話が見たいという意見も感想等にて受け付けておりますのでお気軽にお申し付けください。

E p 7 2 公開意見陳述会 1

ここは時空管理局地上本部。レジアス・ゲイズ中將が、自身の執務室にて何やら文書を作成している。傍には彼の副官であるオーリス・ゲイズ三佐が控えていた。暫らくしてレジアスは作業が終了したのか、端末を閉じデスクの上にあるコーヒーマシンを一口啜る。

「ふむ、草案はこれでよいな。後は公開意見陳述会を待つだけか……」

「中將、この案は受け入れられるでしょうか？ 管理局の根本を揺るがしかねない物であると私は感じますが……」

レジアスが先に控える公開意見陳述会で論じようとしている計画。それに対してオーリスは不安を抱いていたのだ。

「確かにこの案は管理局の理念に反する部分が多々ある。しかし、これによって地上の戦力不足のみならず、災害救助や治安維持など様々な面で効果が上がると考えている。人造魔導師計画など、倫理的な問題がある技術よりもな……」

「中將……」

レジアスは表情を曇らせつつデスクの方へ視線を伏せる。

キョウ達に自身が関わっていた違法行為を暴露して暫らく経ったある日、娘であるオーリスに対して、それを打ち明けていたのである。その時のオーリスは大変取り乱した。地上の為に粉骨砕身していた父に裏切られたという感情もあつたのである。彼の話の途中で彼女は、その場から去ろうとした。しかしレジアスは引きとめて、自

分の考えを全て語った。その後、落ち着きを取り戻したオーリスは父の考えを知り、彼が何故今まで以上に仕事に励んできたかも理解をした。

そして自身の罪を受け入れた父が、為すべき事をやり遂げるまでそれをサポートしようと考えたのである。

「中将、確かにあなたが過去に行った事は許されない事だと思います。ですが、あまり自分を責めないでください。当時はそうする他なかったのでしょうか？ 不幸な生い立ちを持つ子供達への支援も、今までずつと行って来ているではありませんか？」

以前も述べたが、レジアスは仕事の無い日に実験で産まれた身寄りがない人造魔導師達に支援を行っているのだ。それは『闇の書事件』の際の八神はやたとギル・グレアムの間接的関係を彷彿とさせる様な物だった。

「ワシの所為で、多くの子供達が不幸な目に遭っているのだぞ。これでも足りない位だ……。ワシが居る間に、自身の悪行の数々を清算せねばならない。次代を担うお前達に、迷惑はかけたくないのだ。この案が受け入れられ、計画が動き出したらワシは罪を償う。残りの一生を贖罪に使いたいのだ。分かってくれ、オーリス。ワシが去った後、地上の事を頼んだぞ……」

「……はい。父さん」

公開意見陳述会の前夜、機動六課ではなのはとヴィータに加えライトニングとスターズの四人、それとキョウウにリインがヘリに乗り込もうとしていた。ギンガに抱かれたヴィヴィオや、はやてを始めとする主要メンバー達が彼らを見送ろうとヘリポートに来ていた。

「うちらは後から行く事になってるけど、警備の方をしっかりと頼むな。みんな」

「なのは、ヴィータ、キョウウ君。私達が行くまで新人達の事、頼んだよ」

「六課の方は私達に任せとけて!! 頑張つてこいよ、相棒!!」

「キョウウにいちゃん、スバルねえちゃん、それみんな、いつていらっしやい!!」

「キョウウ君、私は少し遅れるけどしっかりと会場を守つてね」

それぞれが先発隊へとメッセージを送る。その時、場を和ませようと思ったのか、はやてがギンガの肩に手を置き声を掛ける。

「そや、ギンガ!! キョウウ君にいつてらっしやいのチュウはせえへんの?」

からかう気満々という笑顔で彼女は言う。場を和ませる事には成功しているようで、その場の面々からは笑顔が浮かび始める。苦笑交じりではあったが……。

「えっ、ちよっ？はやてさん！！ そんな事するわけないじゃないですか！！」

「ええ？ ホンマ？」

ギンガがはやての言葉に対し、慌てた様なリアクションで返す。

「そうです！！ それにもう、さっきキヨウ君の部屋でキ「おい！！ ギンガ！！ 墓穴を掘ってる！！」えっ、あっ……」

ギンガははやての言葉に律義に答えてしまいそうになっており、キヨウが慌ててそれを遮る。キヨウの声で自分が何を口走ったのか気付いたギンガは、赤面して黙り込んでしまう。キヨウに対しても周りからの視線が集まってしまい、ギンガと同様に赤面をしてしまうのだった。

「あゝああ。お熱い様で、ほんま妬ましいわあ。私達が気付かんとこでもいちゃついてるなんて。これはナカジマ三佐にも報告せないかんわあ」

はやてはわざとらしくて顔を扇ぎつつそう言葉を発する。それにより、キヨウとギンガは少しづつが悪そうな顔をする。

「あのね、キヨウ君、ギンガ……。二人で仲良くするのは良いけど、六課にはエリオやキャロやヴィヴィオみたいに小さい子も居るんだ

から、その……。悪い影響が出ない様にそういう事は自重してね？」

フェイトはキョウ達の話聞いて何を想像したのか分からないが、頬を赤く染めもじもじしつつ二人にそう伝える。何だかんだ言つて彼女も年頃の女性である。色恋沙汰にも多少の興味はあるのだろう。何かイケナイ想像でもしているかのような様子だった。

「テストロッサ、お前が何を想像しているかは知らんが、家ではないんだし流石に二人とも分別ある行動を取ると思うぞ……」

シグナムが珍しく、にやにやとフェイトをからかう様な調子で話しかける。少なからずはやての影響があるのだろう。

「へっ？ えつと、その……。とっ、とにかく先発隊のみんなは頑張つて行つてきてね！」

フェイトはシグナムの言葉で自分と周りの認識にずれがあると感じ、更に顔を真っ赤にする。そして強引に話題を切り替えるのだった。彼女の天然交じりのリアクションによつて、その場の空気はリラックスマードへ移行する。新人達も肩に変な力が入っていないようではやての目論見は成功したと言えよう。

「それじゃあ、みんな！！ 行つてくるね！！ キョウ君達の事もへりの中で詳しく『お話』してもらおうから。スバル、ティアナ！！」

「はい！！ なのはさん！！」

「ちよっ？ お前ら、待て！！ いや、待つてください！！ なのはさん、二人に変な事吹き込まないでくださいよ！！」

なのはが見送りをする一同へと声を返す。と同時にスバルとティアナに合図を出し、キヨウの両手を掴ませヘリへと引き摺りこむ。三人はとても良い笑顔だった。それを見てエリオとキャロとフリードは身震いをしてしまう。

ヘリのパイロットであるヴァイスはそんなキヨウを「ザマあみろ」と言わんばかりの笑顔で眺めていた。

先発隊の一同はヘリに乗り込み公開意見陳述会へと向かう。ヘリの中では高町なのは達師弟により、キヨウはギンガとの仲を根掘り葉掘り聞かれるのだった。

エリオはキヨウに対して哀れみの目を送っていたが、キャロは三人と一緒にキヨウの話聞き出そうと躍起になっていた。六課は女性が強いようだ……。

ヘリが会場に到着すると、なのはとヴィータは警備の面で仕事の確認がある様でその場を離れる事となり、キヨウは新人達とともに外で待たされる事となった。キヨウも、それに後から合流する事になっているギンガも会場の外を警備する事になっている。

まだ陳述会も始まっておらず、多くの局員達はリラックスしながらも警備の目を光らせていた。キヨウ達もいつでも動けるよう準備をしつつ、ドリンクを片手に雑談を楽しんでいる様子だった。

その時、彼らの方へと近づいてくる者たちが現れる。

「Hey!! キヨウ!! 元気にしてたか?」

キヨウはその声に笑顔で振り返る。彼にはその声に聞き覚えがあったのだ。ティアナやスバルも同様の様であった。その声の持ち主とは……。

「おっ? テリー!! 久しぶりじゃねえか!!」

キョウ達と訓練校で同期だったテリー・ボガードその人であった。彼はブロンドの髪をボブにした美人と共にキョウ達のもとに近づく。テリーは以前の様に金髪を伸ばしていたが、その日は結んでおらず、きちんと制服に身を包んでいた。

「テリーさん、お久しぶりです!!」

「久しぶり!! スバル!!」

スバルはテリーに対して拳を突きだし、それに対してテリーも拳を当て挨拶をかわす。拳と拳をぶつけるとは、まるで男同士の再会の様だった。

「スバル、あんた先輩に対して失礼よ!! テリー先輩、お久しぶりです。スバルがすいません」

「久しぶりだな、ティアナ。相変わらず真面目みたいだな……」

テリーは苦笑しながらティアナにも声を掛ける。テリーはキョウ達の訓練にこそ参加はしていなかったが、当時のクラスメイトの中ではキョウ達と仲が良かった方で、スバルやティアナとも面識があり食事を共にした事も何度かあったのだ。

彼は訓練校を卒業後、自然保護官として赴任をしていた筈なのだが、この場に姿を現しているのでキョウ達は疑問に思っていた。

キョウはスバル達と挨拶を終えたテリーと、肩を組みつつ彼に質問を投げかける。

「それよりもどうしたんだよ? 部署が違うんじゃないか?」

「ああ、それはな。レジアス中將が可能な限り人員を集めているみたいで俺達も応援に派遣されているのさ。この公開意見陳述会を是が非でも成功させたいみたいだ」

テリーの話によると、レジアスがまるで機動六課を発足させたはやてのように無理をしつつも人員を集めているらしい。テリーの他にも同期の人間が動員されているとのことだった。

その話が終わると、キョウはエリオとキャロをテリーに紹介しようと思い、彼と肩をほどき二人の肩に手を添えて前に進める。

「それでこっちが同僚の」

「エリオ・モンディアルです。よろしくお願いします!!」

「キャロ・ル・ルシエです。こっちが私の守護竜のフリードです。よろしくお願いしますね」

「きゅくる〜!!」

「可愛らしい子たちだな。エリオとキャロとフリードか。俺はテリー・ボガードだ。よろしくな!!」

テリーは人懐っこい笑顔で彼らに挨拶をする。しかし、彼と共に其処に現れた女性がしびれを切らし会話に割り込む。

「ねえ、テリー？ 再会を楽しむのは良いんだけど、いい加減私に彼を紹介してもらっても良いかしら？」

「Oh!! 悪い、マリー。キョウ、それにスバル、ティアナ。此

方は今俺とペアを組んでいる「マリー・S・ライオンよ」マリーだ。マリー、こいつが俺の同級生のキョウでこっちの二人が後輩のスバルとティアナだ。優等生がティアナで、そっちのボーイッシュな娘がキョウの義妹のスバルだぜ」

「おい、テリー。義妹ってどういふ事だよ……」

「良いじゃん、キョウにい。遅かれ早かれそうなるんだろうし」

「あなたが、テリーの話に良く出ていたキョウね。よろしく!!
ティアナもスバルもよろしくね。私の事はマリーって呼んで!!」

「ああ、よろしく!!」

「「よろしくお願いします!!」」

マリーはキョウと挨拶をしつつ握手を行う。スバル達は彼女に対して声を揃えて返すのだった。

「にしてもマリーか……」

「何？ 私の名前がどうかしたの？」

キョウが苦笑して呟き、それに対してマリーが問う。キョウ達はその理由を説明した。スバルやギンガの身体の事やアギトのメンテナンスで昔からお世話になっているデバイスマスター、マリエル・アテンザも通称がマリーだという事を。三人の話を聞いてテリーとマリーは納得がいったという表情をする。部署が部署なので同時に顔を合わせる事もあまりない様なのでキョウ達は彼女の言葉通りマリーと呼ぶ事にする。その後、その場の面々のあいさつは滞りなく

終わり共に談笑をしていく。

「そう言えば、ケンスウって元気してるのか？ それにアテナも」

「あいつらもこっちに来てるらしいぜ。って、言ってる傍から」

「お〜い！！ キョウは〜ん！！ テリーは〜ん！！」

キョウとテリーが話題に挙げた人物、シイ・ケンスウが手を振りながら近づいてくる。大声で歩いてくる彼に、周りにいた局員達の注目が集まるのだった。

「おお、ケンスウ！！ 久しぶりじゃんか！！」

「ケンスウは相変わらずみたいだな？ Hey！！」

「二人とも元気そうじゃんかあ。ハイ！！ テリーはん」

ケンスウとテリーはハイタッチを交わす。ケンスウは以前よりも背が伸びており、キョウよりもわずかに低い程になっていた。新しく現れたケンスウの事もエリオやキャロ等初対面組に紹介し、彼を加えてキョウ達は談笑をしていく。

「スバルちゃんもティアナちゃんも綺麗になったな。それにテリーはんの同僚のマリーはんも別嬪さんや！！ なあ、お兄さんと後で遊びにいかへんか？」

「え〜！！ ケンスウさんって何かイヤラシイことしそつだもん」

「あははは……。ケンスウ先輩は相変わらずみたいですね。アテナ

さんにはれても知りませんよ?」

「テリーから聞いていたけど、本当にユニークな性格の人なのね…」

「ワイは紳士やさかい、そないなことせえへんよ。スバルちゃん。それにテイアナちゃん、大丈夫や!! アテナはこつちに気付いてへんから!! せやから、な? ワいと「ケンスウ」!! サイコボール!!」ぎゃゝ、堪忍や!! アテナ!!」

三人を口説こうとするケンスウの頭に桃色の魔力弾が命中する。そしてその場に紫のロングヘアの小柄な女性が現れる。アテナ・アサミヤその人である。

「みなさん、お久しぶりです!!」

アテナらしい登場の仕方だった。キヨウは陸士訓練校で初めて彼女と会った時の事を思い出していた。アテナの紹介も済ませると、キヨウは同期の面々と話をしていく。

「何か兄さん楽しそうですね?」

「ケンスウさん達はキヨウにい達が訓練校に通っていた時に一番仲良くしていた人たちだから、久しぶりに会ってはしゃいでるんだよ」

「私も訓練校に行ってみたいです。お友達が沢山出来て楽しそうですね」

「キャラ口は可愛いから男子生徒に大人気になるんじゃない?」

ティアナはキャロに悪戯っ子の様な笑顔を浮かべて答える。可愛いと言われたキャロは顔を赤くして俯いてしまうのだが、満更ではない様子だった。

一方のキヨウ達はというと……。

「そう言えばギンガはんは？ アギトはんもおらへんけど？」

「確かに。キヨウと言えばその二人とセットってイメージがあるもんな」

「私、二人に会うのを凄く楽しみにしていたんですけど……。来られないんですか？」

「ギンガはこっちに来るんだけど、アギトは六課の守備に回ってもらってるんだ。ごめんな、アテナ」

初めは互いの近況報告などを行っていたが、その話題が終わると、この様なような感じで雑談をしていた。久しぶりに会う友人たちのお陰で、キヨウは終始笑顔だった。

その後も特筆すべき事態が起こったりもせず、時間は過ぎていった。なのは達が戻るとキヨウ達は彼女達から会場警備の具体的な指示を受けて行動を開始する。

それからまた時間が経ち、ギンガも合流すると、キヨウは彼女へアテナ達も動員されているという事を伝える。

休憩時間を利用して彼らは再会を果たし、話に花を咲かせていくのだった。

休憩が終わるとキヨウとギンガはライトニングやスターズの面々と共に警備に戻る。スバルは会場内に入るのは達からデバイスを手渡されそれを預かる事となった。

間もなく公開意見陳述会が始まる……。

EP72 公開意見陳述会1（後書き）

殆ど話が進んでなくてすみません。

ケンスウ達にはこの後、頑張ってもらおう事になります。

読んでいただきありがとうございます。

【35万PV記念クロス】 世界をまたぐ夏休み（準備編）（前書き）

30万PVの記念にするつもりが、執筆が遅れてしまい35万記念に変更してしまいました。

今回の話はぶつちやけるとクロスとの関係性は薄いです。

クロスの前にキョウ達がどのような事をしたのかっていう動きを書いた物ですので……。

nukosan先生、マグネス先生、イツキ先生、柳先生、スモーク先生、いかじゅん先生、クロスの許可を戴き本当にありがとうございます。

それでは本編をどうぞ。

【35万PV記念クロス】 世界をまたぐ夏休み（準備編）

「……」休暇ですか？「……」

炎天下の中。外は照りつける太陽の所為で其処に暮らす人々の体力を奪って行く。夏真っ盛りのある日、キョウ達三人と新人メンバー達は朝の訓練が終了した際に、なのはやフェイト達隊長陣から休暇を言い渡された。キョウ達も新人達もハードな訓練を行っていたのか、服には土ぼこりなどの汚れが目立っていた。

「そうだよ？前の休暇はヴィヴィオの一件やガジェットとの戦闘でつぶれちゃったし……」

なのはが笑顔でそう言い放つ。事実、キョウ達出向組の手助けも有り新人達の成長速度は当初の予定よりも早くなっていた。なのは達の監修のもとに行われるスバルやティアナの追加訓練や、技を盗む際に長けたエリオの新技。周囲のモチベーションによりメンタル面で良い影響が出たのか、訓練に対する熱で優秀な成績を出し始めたキャラ。

このような面を省みて、なのはは嬉しく思っているのである。

「何時もみんなは訓練を頑張っているから、私達からのご褒美。たまには楽しんでくると良いよ」

「そうだけ。お前達も最近根詰めてやってる様だから、リフレッシュしてこいよ。有給自体も溜まってるしな」

フェイトとヴィータも休暇を勧めている。エリオやキャラは純粹に嬉しそうなアクションを取っていたが、年長組の五人は少々複雑

そんな表情を浮かべていた。

「休暇の予定日は隊長陣全員が部隊に残る。お前達新人が居なくとも問題は無い。もちろん、何か有ればすぐに戻ってきてもらうがな」

五人の心情を読みとつたのか、シグナムが付け加える。最後の方では少し意地悪な笑みを浮かべていた。非常に珍しい光景であり、一同は注目してしまっていた。

「動く時は動く。休む時はしっかり休む。このメリハリが大切なだよ？ それでキョウ君達には引率をお願いしたいんだ」

「テストロッサの言う通りだ。コンデイションを整える事も大切な仕事だからな。ヴィヴィオもお前達と過ごせる時間が増えて喜ぶんじゃないのか？」

「休暇は今週末の二日間だから。準備も含めたら必要でしょ？ それまではビシビシ鍛えていくからしっかりと来てね？」

なのはが笑顔で告げる。週末の休みというご褒美を提示されたのでキョウ達を含む新人達一同はヤル気をみなぎらせるのだった。

それからの数日間、新人達は訓練もデスクワークもそれまで以上に精を出していった。何だかんだでキョウ達三人も楽しみなのか仕事をどんどん捌いていった。

特にアギトは楽しみで仕方ないらしく、仕事でも笑顔が浮かべる事も多く、休憩中は主に女性陣と休暇の予定を計画する姿なども見られるのだった。

本人はそれを否定していたのだが……。
エリオもエリオで、キヨウから釣りなどの屋外の遊びの話聞いてワクワクを押さえるので精一杯になっている部分があった。
休暇に向かう中でたった二人の男という事で少々肩身が狭い思いをするかとも予想されたが、そうでもないらしい。
ヴィヴィオもこういった外出は初めてという事でとても楽しみな様子だった。

そんなこんなで数日が過ぎ、一同が楽しみにしていった休暇が訪れる。休暇の予定としては、一日目に準備の買い物みんなで言い、二日目に海水浴（orキャンプ）に向かうという物だった。二日目は日帰りの外出だが、それでも一同は楽しみにしていた。
エリオとキャロはそういった遊びの経験があまりなく、年相応な様子でとてもはしゃいでいた。

その中でティアアナもウキウキした気持ちを隠せずにいた。彼女も家庭の事情で幼い頃にこのようなイベントに恵まれていなかったからだ。

一方のアーデルハイド兄妹とナカジマ姉妹は、幼い頃から家族ぐるみでキャンプやハイキング、海水浴等の外出を行っていたのでどのような物が必要かなどのアドバイスをしていた。実質、小旅行の幹事というポジションに付いているのである。

今から一同は翌日の外出に向けた準備のために買い出しへと出かけようとしているのだった。以前の休暇と同様にキヨウとティアアナがバイクを出し、二台ともサイドカーを付けて移動する様である。
ヴィヴィオはキャロと共にキヨウ達のバイクのサイドカーに乗り込む。小柄な二人なので十分に乗り込めたのだ。

そつでないったら、そつでない!!

「ギンねえ、このお菓子も買って」

「ヴィヴィオもこのお菓子が欲しい!!」

スバルとヴィヴィオがお菓子を抱えてカートを押すギンガの下へとやってくる。カートには野菜や肉類などが数多く積まれていた。ナカジマ姉妹やエリオが居るのでその量は仕方が無いのだろう。ティアナもギンガと同様にカートに様々な食料を詰め込んでいた。

「こら、スバル!! ヴィヴィオは小さいから分かるけど、アンタまでお菓子を選ぶとか……。年上としての自覚をもつたら?」

「良いじゃん、ティア。こういうのは沢山あった方が楽しいんだしねえ、ヴィヴィオ?」

「そつだね、スバルお姉ちゃん!!」

ナカジマ家の次女と三女は顔を見合せて笑っている。こういう部分でフィーリングの合う二人だった。

「はいはい、分かったわよ二人とも。ほら、かごに載せて? ティアナも注意してくれて、ありがとう。二人ともはしゃいじゃって、

私だけだと收拾が付かなくなっていたかもしれないから助かるよ」

「ギンガさんだけだと大変そうですね。もしこっちに先輩がいたとしても、スバルやヴィヴィオには甘いから好きな物は何でも買ってあげそうですね……」

「そうですね。きっとお菓子の山になっちゃったりして」

ギンガもティアナと共にその光景を思い浮かべてクスリと笑う。しつかり者のコンビと妹コンビという感じで上手く役割分担が出来ているようだ。

「ティアナも好きなお菓子とか買っても良いんだよ。二人だけだとずるいしね？ 私はこのアーモンドチョコをと」

ギンガも何だかんだでお菓子に手を伸ばす。甘い物が好きなのは女の子としては仕方の無い部分なのだろう。

「じゃあ、お言葉に甘えて……」

ティアナもお菓子の棚から袋入りのキャンディーを取りだす。様々な味が有りみんなが楽しめる様な物を選んでくるあたり、ティアナの性格が読みとれる。

その間もスバルはヴィヴィオと一緒に買って買い物を楽しんでいた。傍から見れば無邪気な子供が二人居る様な光景だった。

「あんまり買い過ぎちゃダメだからね？ ヴィヴィオも走って転んでも知らないから」

「大丈夫だよ、ギンねえ！！ 妹はしっかりと見るのが姉としての

役割なんだから!！」

スバルが振り返りながらギンガに答える。ヴィヴィオはスバルの手を引きながら新しいお菓子を物色していた。

「先輩達もちゃんと買い物ができるの良いんですけど……」

「きつと大丈夫よ、ティアナ。キョウ君って何だかんだでしっかりしているし、アギトちゃんだって居るんだから……。エリオやキャラに何か買い与えようとしても、きつとセーブさせている筈だよ」

同じ頃、キョウ達はというとアウトドアコーナーで様々な品物を購入入していた。キョウがカートを押し、エリオとキャラが商品を持ってくるといふ役割訳が為されている。アギトはというと、年少組二人の荷物運びを手伝ったり何が必要なかをチェックしていた。

「兄さん、これは何に使う物なんですか？」

エリオが笑顔を浮かべながら箱に詰められた固形物をキョウに差し

出す。そこそこ重たそうな物だったが日頃から訓練を行っている彼にとつてはさほど苦にならない様だ。初めて見る物ばかりの様で、エリオも目を輝かせて年相応にはしゃいでいるのが見て取れる。

「それは燃料だと思うぜ？　でも俺が居るから必要無いって思うぞ？」

「確かに……。それに私もいるから火種っていう点はまず問題にはならないな」

今日の隣に佇んでいたアギトもそれに付け加える。髪の色も容姿も全く似ていないアーデルハイド兄妹は、傍から見ればカップルにか見えないようだ。

「そういう意味じゃキョウさんやアギトさんって言い方は悪いですけど、便利な能力を持っていますよね？　野外で火を起こすのって結構大変な所も有りますから」

ふむふむと頷きつつキャラロが口を開く。

「確かに戦闘だけじゃなくこういう面でも炎って役に立つんだよな。むしろ闘いなんかよりもそういう使い方をする方がずっと良いってなあ？　キョウ？」

キャラロの頭を撫でながらアギトは笑顔でそう答えるのだった。キャラロはくすぐったそうな表情をし、一方のキョウは笑顔で頷きアギトの言葉を肯定する。

「キャラロ！　何か面白い物が有るよ！！　何に使うんだらう？　おいでよ……」

興味をひかれる物が有ったのか、エリオがキャラコを呼ぶ。フロアにいた他の客たちも彼の姿を見て微笑ましく感じているようであった。

「キャラコ、行つて来いよ。エリオだけじゃなくお前も楽しまなきや意味が無いぜ?」

「そうだな、キョウの言う通りだ。大体買う物は揃つたし、集合時間まではまだあるから色々と廻つてこいよ?」

「じゃあ、お言葉に甘えて……。今行くから待つてよ!! エリオく〜ん!」

キャラコも楽しそうにエリオの方へと向かつて行く。キョウとアギトはその姿を目を細めつつ眺めるのだった。

【ルート 海】

集合し昼食を取った後、翌日の海水浴の為に女性陣は水着売り場へと足を進めた。

キョウとエリオは別のブロックにある男子水着用の売り場でさつさと買い物を済ませ、女性陣の買い物が終わるまでベンチで休憩を取る事にした。もちろん荷物番という役割も負わされているのだが……。

「やっぱり女の人の買い物って時間が掛かるんですね……。昔フェ

イトさん達と買い物に行った時の事を思い出します。リンディさんもエイミーさんも中々戻ってきませんでしたから……」

途中で購入したジュースを飲みつつ、エリオは隣に腰掛けるキヨウへと話を振る。

「仕方ねえって。でも、女の買い物を黙って待つのが男の甲斐性ってもんだと思うぜ？ お前には少し早いかもしれないけど」

慣れてはいるようだが、少々疲れを顔に浮かべてキヨウが答える。彼の後ろには先ほど買った品物が山積みされていた。

「まあ、確かに長くはあるな。俺もギンガとスバルとアギトの買い物で一時間近く一人で待たされた事があるし……。それに、クイントさんまで加わったらもつと長くなるんだぜ……」

「そつ、そうなんですか……」

エリオは何やら憐れむような目でキヨウを眺める。心なしかキヨウの身体からは哀愁を帯びたオーラが発せられている様だった。

エリオが周りを見渡すと、家族連れの姿も多く見られた。母親と子供達の多くは、目を輝かせて買い物を楽しんでいた。その後ろからは荷物を運ばされている父親たちの姿が目につく。特に、殆どの父親からはキヨウと同じオーラが出ているように彼の眼に映っていた。

「（僕も何時かはあんな風になるんだろうか……）」

「「はあ、みんな早く戻ってこないかな……」」

キヨウとエリオはため息交じりに言葉を重ねてしまっていた。

「どうか……。派手すぎない？」

女性陣は水着の試着を楽しんでいた。現在はギンガの水着が他のメンバーから評価を受けている。

「うわあ、ギンガさんってやっぱりスタイル良いんですね……」

キャロの呟きを聞き、ティアナは自分の胸に手を当て少し落ち込み始めていた。

「（流石、ギンガさん……。年上ってことも有るけど色気が凄い……。普段は清楚ってイメージが有るからこのギャップはヤバいわ）」

「確かに似合ってるけど、ちょっとおとなし過ぎる気がする。どう？ アギちゃん？」

「そうだな。もっと露出が有っても良いと思うぜ？」

「だよね？ ギンねえ、こっちの方が良いって！！ きっとキヨウにも気に入ると思うよ……」

「でも、露出が多過ぎる気がするけど……」

スバルがギンガに別の水着を手渡す。先ほどの物よりも若干露出が増えている物だった。ギンガは頬を赤らめつつその水着に着替える。

「ギンガお姉ちゃん、似合っ！！」

「そう？　ありがとう、ヴィヴィオ」

新しく選ばれた方の評価は上々の様であった。ヴィヴィオやキャロ、そしてティアナからは羨望の眼差しが向けられるだった。

「じゃっじゃーん！！　どうだ！！！」

次はスバルの番だった。もじもじしていたギンガと違い、カーテンを勢いよく開ける。腰に手を当てポーズまで取っている。青いビキニにローライズのホットパンツ風のデザインという健康的で活発な彼女の魅力を引き出すような水着のチョイスであり、文句なしに似合っていた。流石に姉のデートのコーディネートを任されるだけあり、そのセンスは素晴らしい様だ。

「（くっ……。ナカジマ家の遺伝子は化け物か……。そう言えばクイントさんもスタイル良かったもんな）」

ティアナはどこかのV。に自信のあるアイドルの様な表情を浮かべていた。

他のメンツはというとスバルのチョイスを褒めている様子であった。

「スバルお姉ちゃん似合ってるね？」

「そうだね、ヴィヴィオ。私達も早く大きくなりたいね？」

年少組は素直に憧れている様子だ。二人の言葉を聞き、スバルは自慢げに胸を張るのだった。

「普段とあんまり変わり映えはしねえだろうけどさ。どうよ？」

スバルの次はアギトが試着を行った。彼女のプロポーションは先日の夏祭りのミスコンで優勝することからも分かるだろうが、非常に優れており他の客も息を飲んでるようだ。まさにモデルと言っても差し支えない様であった。その件で自信も付いたのか、特に恥ずかしがる様子もなく水着姿を晒す。

「（くっ……。アギトさんもやっぱり凄い……。何？ あの足の長さ。反則じゃない……）」

「うわあ、大人っぽいね、ヴィヴィオちゃん？」

「そうだね、キャロちゃん。アギトお姉ちゃんも格好良いね」

「アギちゃんのスタイルはズルいなあ……。ウエストもすっごく細いし」

「アギトちゃん、大胆だね……」

彼女の水着は大人っぽいというより、エロいという表現がふさわしい物であった。

周りの客で彼女等に関心する物を買って来ている様な男性陣からは前屈みになる物も出てきていた。

「どっ、どっでしょうか？」

「どうかな？ 似合ってる？」

アギトの次はキャラとヴィヴィオの番だった。二人は同じデザインの色違いの水着を選んでいた。当然ヴィヴィオの方がサイズは小さい物である。フリルがあしらわれたワンピースタイプの、可愛らしいという表現にぴったりの水着であった。

胸元にはリボンが付けられており、二人の可愛らしさをさらに引き出している。

キャラは少し照れつつ、一方のヴィヴィオはヒマワリのような笑顔で水着姿を披露する。ヴィヴィオは明るいイエローの、キャラは薄い桃色の水着を纏っていた。

「っわあ、可愛い！！」

ナカジマ姉妹は互いの手を握り合い声を八もらせる。何だかんだでギンガとスバルは似ている部分が多い様だ。殆ど母親の影響だろうが……。二人とも目をキラキラさせていた。

「確かに、凄く可愛いわね、二人とも（お子様には流石に負けないわよ。そうよ、自信を持つのよ、ティアナー！！）」

ティアナは何故か年少組にまで対抗意識を燃やしていた。

「本当に可愛いな。クイントさんも好きそうなデザインだぜ……」

アギトは少し苦笑いを浮かべていた。幼い頃、クイントとメガリーヌに着せ替え人形にされた事を思い出してるようだ。

「どっ、どっ?」

最後はティアナが水着を披露する。赤と白のストライプが入ったビキニタイプの水着であった。ナカジマ姉妹やアギトに対しスタイル面でコンプレックスを持っているようだが、彼女のスタイルも決して悪くは無かった。出る所も出て、ひっこむ所もひっこむというメリハリあるボディである。

若干スレンダーかもしれないが、他の女性からは羨ましがられるようなプロポーションであった。
事実……。

「うわあ。ティアナってスタイルいいね。ウエストもすごく細いし、羨ましいな」

「確かに……。足も長いし色も白くって、水着も似合ってるよな」
ギンガとアギトが唸るようなスタイルである。その言葉でティアナは気を良くしたのか、スバルの様にポーズを取る。少し恥ずかしいのか顔を赤らめて入るのだが……。

「ティアの胸も中々大きいんだよね。揉みごたえも素晴らし」
変な事言うな!!! スバル!!!」
「ごっ、ごめん!!! ティア」

スバルの言葉を遮りティアナが一喝する。スバルはというと舌を出し、頭をかきつつ平謝りをする。余り反省してはいない様だった。

「ティアナさんもすっごく似合っていると思います」

「ティアナお姉ちゃん、可愛い!!」

「そっ、そう？　ありがとうね、二人とも!!」

キャロとヴィヴィオの言葉で、ティアナは満面の笑顔を浮かべるのだった。

その後、15分程して女性陣はキョウ達の下へと集合する。キョウとエリオは完全に待ちくたびれている様子だった。エリオは舟を漕ぎだしそんな勢いだった。

【ルート 山】

「キョウ兄さん、見てください!!　このテント、すっごくカッコイイです!!」

合流した一同は、先ほどキョウ達が居たサバイバル用品とは別のフロアでキャンプ用品を見て廻っていた。此方の方が専門的な物が売られており、品ぞろえも充実しているようだ。

「それは最新モデルのテントみたいだな？　その古い奴ならゲンヤのおっちゃんが持っていたから、次の機会に貸してもらおうぜ。そうだな、泊まりがけで釣りなんてどうだ？」

「本当ですか！！　うわあ、僕とっても楽しみです！！」

エリオは都会っ子なので、キャンプ用品に触れる機会が少なく目を輝かせている。

「キヨウ兄ちゃん、これって何に使うの？」

ヴィヴィオも初めて目にする品物を手に掴み、わくわくした様子でキヨウに尋ねる。

「おお、ヴィヴィオ！！　それはご飯を炊く時に使う飯盒って奴だぜ？　これで炊くと何時もより美味しいご飯が食べられるんだ。その横の一番大きいヤツを取ってくれ。沢山食べる人が居るからさ」

「沢山食べる人って誰かなあ？」

キヨウの後ろから女性二人の声が聞こえる。もしかしなくともギンガの物だった。キヨウは冷や汗を流しながら必死に弁解をする。

その姿は相変わらず情けない物であり、他の面々の笑いを誘うのだった。

「エリオ君、何を見てるの？」

「うわっ？ キャロ？ びっくりしたな……」

キヨウがギンガの機嫌を直した後も買い物は続いた。エリオは釣り用品の売り場でルアーを無心で眺めていた。キャロに声をかけられるまで気付かない程に……。

「この新発売のルアーが欲しくってね。何時までも兄さんに釣り具を借りるのも悪いと思うし。それにナカジマ三佐達と釣りに行く時には自分の物も持っていたいからさ」

「ふうん。このルアー『シャチカイザー』って名前なんだ。変わった名前だね？」

エリオの持つかごの中には既に釣り竿も入っていた。竿は選び終えているようで、それにつけるルアーに目が向いているのだ。

キャロは聞いたは良いがそれほど興味が無い素振りであった。やはり女の子にはこういった物はウケないのだろう。

「先輩、一人で大丈夫ですか？ 何だったら、持つの手伝いますけど？」

「ありがとう、ティアナ。でも大丈夫だぜ？ これ位、平気さ！！」

キヨウはバーベキューに使う鉄板を一人で抱えていた。大人数用の大きさで、一人で持つのは骨が折れそうな代物だったが、彼にとっ

ては苦にならない様だ。

キヨウの代わりにアギトが追加されたサバイバル用品をカートに載せ運んでいる。ティアナとスバルもかごに入りきらない分を手にかけていた。

それまで購入した分の品物は全員のデバイスの格納領域に分けて収納されている。

魔法文化様々である。こういう使い方をする人間は少ないだろうが……。

「それじゃあ、そろそろ買い物を終了しましょうか？」

ギンガの声で買い物は終了する運びとなる様だ。彼女はというと、先ほどまではしゃいでいたヴィヴィオが疲れて眠ってしまったので、胸に抱きかかえていた。

髪の色は違うが、その姿は母親と幼い子供のようにも見える。ヴィヴィオの寝顔はとても安らかで、見ているだけで癒される様なとても可愛らしい物だった。

「そうだな、買う分は全部揃ったみたいだし。キヨウはエリオとキヤロを呼びに行ってくれ」

「私が行くよ、アギちゃん！！　おゝい、エリオ、キヤロ！！　帰るよゝー！！」

スバルが二人の下へと駆けだす。その姿は幼いころとあまり変わらないように、キヨウとアギト、それにギンガとティアナも苦笑いを見ながらその背中を眺めていた。

一同は集合し、駐車場へと向かう。

買い物が終わってからもエリオは購入した釣り竿を大切に胸に抱えていた。その様子を他の面々は可愛らしく思いながら見つめていた。キヤロはギンガに寄り添い、眠っているヴィヴィオの顔を優しい笑顔で浮かべつつ見守っていた。

【ルート end】

その後、一同は買った物をデバイスに収納し、入りきらなかった物はサイドカーに積み込んで機動六課の隊舎へと戻っていくのだった。今回の休暇の一日目は何の邪魔も入らずに無事に終了するのだった。

ミッドとは異なる某所。その世界とは異なる次元の座標軸に7人の人間が立っていた。どれも輪郭のみしか分からず、本当に人間なのかも怪しい存在だった。

「ふっふっふっ。いよいよ、このロストロギア『精神と時の部屋D X』を使う時が来たようだ」

「って、××先生。その名前は流石にまずいですよ!」

「それなら『エヴァンジェリンの別荘』とかはどうでしょう?」

「だから他の作品から取ってくるのはダメでしょう、先生。

先生が言う様に……」

「じゃあ、先生。『アルハザードGX』ってのは? 『無限城』ってのも?」

「先生も悪乗りしないでください。って『GB』とかこのサイトじゃマイナーですよ」

「いや、別に良いですよ。先生。クロスなんで、細げえこたあ良いんです。ぶっちゃけ名前なんて全然考えていないですし……」

「……………適当だなあ、おい……………」

「それじゃあ、この『インフィニットシリンダー』を設置してきますね!! ユクゾツ!!」

「流石、聖帝……。マイペースだな……。ネーミングも思いっきりパクリだし」

「……………はあ……。そうですね……………」

その後、このアイテムが七つの世界でちょっとした騒動を巻き起す。

それは別のお話で……。

t
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.....
.

【35万PV記念クロス】 世界をまたぐ夏休み（準備編）（後書き）

次回は海編を掲載します。

盆休み前には掲載する予定ですので、楽しみにしていただけると嬉しいです。

水着はちょっとした私からの暑中お見舞いですwww

具体的描写の無かったギンガとアギトの水着はクロスの時に公開します。期待にこか……、もとい胸を膨らませていただけると嬉しいです。

期待に添えるかは別ですが……。

「勘違いするなよ、カロット！！ ティアナのセリフは『アニメス』のちーちゃんを見て思いついた訳じゃない」

最後の会話はネタですので突っ込まないで戴けると嬉しいです。

読んでいただきありがとうございます。

感想や意見をお持ちしております。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（海編1）（前書き）

今回は海編です。

nukosan先生の『リリカルなのはStrikers 己の拳
にかける道』から真田竜児君。

イツキ先生の『魔法少女リリカルなのはStrikers 護るた
めの力を持つ者』からコルト・リバティ君とブルズ・アルフィー
ド君。

マグネス先生の『魔法少女リリカルなのはStrikers 罪を
背負いし墮天の翼』からツバサ・ランスローくとメイナ・シ
ュトロゼツクさん。

以上の五名がゲストとして登場していただいております。他の先生
方のキャラ達を上手く書けているか不安ですが、楽しんでいただけ
ると嬉しいです。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（海編1）

キョウ達が休暇を取った1日目の夜、ミッドの夜空に真つ赤な彗星が観測された。

それは、翌日に彼らが向かう観光地付近に落ちた。

管理局のリーダーにて観測されたが、魔力的な要素は見つからず単なる隕石だと観測していた局員達に判断される。

ミッドに彗星が現れた頃、キョウ達の住む世界とは異なつた世界にも同様の彗星が観測される。

別次元のミッドチルダや、キョウ達が過ごす時代よりも1800年近く昔の時代の97管理世界、地球のユーラシア大陸にも……。

《他の世界に転移した『影分身』も上手くやってるな。大した奴だ……。サスケエー！！ にははははは。これで準備OK！！ あとはなる様になるんじゃないか。アルハツズラット（仮）の設置も無事終了！！》

彗星が落ちた世界全てで、黒いローブを纏つた男が落下地点を見つめつつそう呟く。

彼は先ほど聖帝と呼ばれた、人にあらざる者たちの一人である。

この彗星を各世界に呼び込んだ張本人なのだ。

《俺の出番はあと僅かだな。異次元の英雄たちに会うのが楽しみだ。オオオでも食って待ってこよう》

彼はそう言つと、地表に落下した隕石の中にお菓子とジャップ

片手に持ち吸い込まれていった。七つの世界でこの現象は同時に起こる。彼の言う『アルハズラット』とは……。

隕石がミッドに落下した翌日、キヨウ達は海水浴場の近くに落ちた隕石の落下地点へ検証に来ていた。休暇中という事でスバルら新人達は先に海水浴場へ行かせ、キヨウ、ギンガ、アギトの3人のみで現場へと向かった。アギトは海水浴までパワーを温存するため、何時も通りアウトフレームを使わずキヨウの肩に座り移動をしている。出発前に一応現場を見て来いとはやてに指示を受けていたのだ。現場では他の局員達が既に現場検証を終えており資料を貰って現場を見るという至って簡単なものとなっていた。

バカンス中という事で三人は私服で外出をしていたので、バリアジアケットを展開し現場で説明を受ける事となった。説明を行う局員の話では、危険な放射線や病原菌等は一切検出されなかったらしい。一般人が立ち入らない様、結界が張られた現場にはルビーの様に真っ赤な隕石が鎮座していた。大人一人をすっぽりと隠してしまうほどの大きさで、不可解な事に地面にはクレーターが見つからなかった。

「真っ赤だよな……」

「ホントに真っ赤だね、アギトちゃん。宝石みたいに透き通って綺麗だね」

「隕石なのにクレーターが出来ないとか……。どうなってんだ？」

三人は隕石へと近づく。危険性が無い事とバリアジャケットを展開しているという事も有り、隕石に触れられるほどに距離を詰める。

「ぐお?」「きゃっ?」「うわあ?」

三人が近付いた時、隕石からまばゆい光が放たれ周りにいた局員達は目を瞑ってしまう。

そして彼らが目を開けた時、その場から三人の姿が消えていた。

三人が消えた瞬間、彼らが存在する次元とは異なる世界で隕石による消失事件が発生する。

「あっちいゝ。早く調査を終えて帰ろっぜ?」

「そう言うならちゃんと手伝ってよ、ブルズ!!! って、何だよこの光は?」

「うおっ? コルトー!!!」

他者の為に力を振るう二人の少年が姿を消す。

「単独任務なんて珍しいな……。さつさと終わらせて六課に戻るか。今日のメニユーも全部は消化できてねえし……。うん？ この光は？ うわああ！！」

その拳に魂を乗せた青年も……。

「ねえ、ツバサ！！ この綺麗な岩って何だろ？ 大きいね」

「あんまり近付かない方が良いつて、メイナ。一見ルビーの鉱石みたいだけど……。つて、危ない！！」

「きゃあああ！！」

数奇な運命に翻弄される少年と少女も、光に包まれ姿を消すのだった。

「うつ……。さっきの光は何だったんだ……」

キョウが目を覚ますと、其処は白い砂浜と青い海が広がる場所であった。見上げると雲ひとつない青空が広がり、いつもと変わらない照りつける太陽も存在していた。

彼のすぐ隣にはアギトとギンガが倒れており、50mばかり離れた場所にはロッジの様な建物も存在していた。

その建物は、以前海鳴市でも派遣任務で使用したアリサの別荘に良く似ていた。

自分達以外に人の気配のない、完全なプライベートビーチと呼べるような場所だった。

キョウは周囲を見回した後、自分の状況について確認した。バリアジャケットは展開されたままであり、身体面で違和感は無かった。

念のためにデバイスに異常が無いか確認し、機動六課に向け念話と通信を送ってみる。しかし反応が無い。他の場所や知人にも念話を送るがどうやらこの場所は範囲外の様だった。

キョウは気を取り直し、周囲の状況を見る為にサーチ用のスフィアを展開する。

「おい、ギンガ!! アギト!!」

キョウは自身の状態確認を終えスフィアを放つと、砂浜に倒れ伏す二人に声をかける。外見上は怪我や攻撃を受けた跡も無い様だった。

「うつん? キョウくん? アギトちゃんは?」

「……んん? キョウ、ギンガ、大丈夫か?」

二人はキョウの声に反応し目を覚ます。意識もしっかりしているようで、問題はあるようになかった。念のため、すぐに身体に異常な

いかデバイス等を使い各自で確認作業を行う。

二人が確認を行っている間、キヨウは一足先に飛ばしていたスフィアによって周囲の状況を観る。

500m程の範囲を見まわすが、三人以外に人間の存在は無い様だった。海中にもスフィアを飛ばした所、魚類等の生き物は生息しているという反応が出る。

「私もアギトちゃんも無事みたいだけど、此処って何処だろう？」

念には念を入れ、ギンガもサーチ用のスフィアを放ちキヨウに尋ねる。

「初めて来る場所だよ……。この近くには俺達以外の人間は居ないみたいだ。一応、其処にはロツジが有る……」

「私も通信と念話を飛ばしてみたけど反応が無いみたいだ……。どうすんだよ、キヨウ？ スバル達が心配してるんじゃないか？」

「だよ……。場所も分からないし連絡も取れない。あの隕石の光が俺達を転移させたとして考えられないな」

三人が途方に暮れていると、彼らのすぐそばに突然、赤い光が現れる。

何も無い空間から大人一人分程の大きさの光が現れ、その光が収まったかと思うと中からは見た事のない青年が姿を現す。

その青年はキヨウ達よりも幾つか年上の様で、管理局の制服を身に纏っていた。彼も意識は無く、砂浜の上に倒れ込む。

「局員？ 何なんだよ、これって……」

「そんな事より、取り敢えずあの人を介抱しようぜ？」

「そつだよ。私達みたいに何かに巻き込まれたのかもしれないんだし？」

キヨウは突然の事に放心状態になってしまいが、アギトとギンガに注意され青年の下へ向かう。外傷はない様で、キヨウ達と同じ状況という線が強くなる。

「えつと、大丈夫ですか？」

いきなり現れた青年はギンガの声に反応しすぐに起き上がる。動きから推測して、彼も身体に異常が無い様だった。

「はあ……。何なんだ、あの光は？　つて、あんたは確か108部隊のナカジマ陸曹？」

「えつ？　陸曹？　えつと、管理局の方ですよ？　私達と同じで」

ギンガは彼の顔を覗き込む。青年はギンガの事を知っているようだ。彼女の顔を見て驚く。

「ああ、これは失礼。俺は真田竜児。機動六課に所属する三等陸士さ。それで、後ろにいる君たちは……」

上半身を起こしギンガに礼を言った竜児はキヨウ達の方へと視線を向ける。

「ウソだろ……。なんでギンガちゃんと一緒に草薙京が？　それにリンとは違う融合騎？」

竜児はキヨウとアギトを観て、再び驚きの表情を浮かべる。

「えっ？ 機動六課に？ どういう事だろう？ それに草薙京って……」

「何でだ？ 六課に竜児って人、居たか？ 初めて聞いたぜ、そんな名前……」

「また俺の事を誰かと間違う人が居るなんて……。草薙京って誰だよ……」

竜児の言葉を聞き、ギンガとアギトも戸惑う。彼のように日本風の名前だと、ミッドでは目立つので一度聞けば忘れる筈がないからだ。それに機動六課のメンバーに真田竜児という名前は見た事が無かった。キヨウは以前、夢の中で邂逅した紀霊にも間違われた草薙京という名前についてぼやき始める。

「えっと、そこでぶつぶつ言っている君の名前を教えてくださいませんか？」

「ああ、すいません。自分は陸士108部隊所属のキヨウ・アーデルハイド陸曹長であります。それで、こっちは知っている様ですが妹のアギトで……」

「ギンガ・ナカジマ陸曹長です。機動六課には出向任務中です」

「同じくアギト・アーデルハイド陸曹長です。よろしくお願いします……」

キヨウは慌てて意識を戻し自己紹介を行う。ギンガとアギトもキヨウに続いて自己紹介を行った。

「はぁ？ 機動六課だった？ どうなってるんだ？」

三人の言葉を聞き、竜児も首をかしげる。

その時、また彼らの近くに赤い光が現れる。今度は二つの光が現れ、中からはキヨウ達と同世代の少年が姿を現す。

「話しは後にしましょう。また私達みたいにこの場所に転移させられた人が来たみたいですから」

ギンガの言葉のより、四人は少年たちの下へと向かう。少年たちも怪我を負ってはいない様だった。

「おゝい。大丈夫か？」

アギトが少年達に声をかける。二人ともその声に気付き、すぐに目を覚ます。

「うう、ブルズ？ 居る？」

「さっきのは何だったんだ？ なあ、コルト。ここ何処だ？」

二人は目が覚めると辺りを見回し始める。

「二人とも管理局員みたいだな？ 私はアギト・アーデルハイド陸曹長だ。アンタ達以外にもここに連れてこられた人間が居るんだ。動けそうか？」

「あなたは騎士ゼストの融合騎！？ 陸曹長だなんて、管理局員なんですか？」

少年はアギトやゼストの事を知っているようだ。彼女の顔を見て驚きの表情を浮かべる。

「ゼストさんの事を知ってるのか？ それに私が融合騎だってことも……。まあ、この姿を見れば分かるか」

アギトの後ろからキヨウが少年たちに声をかける。

「アギトは俺の妹であり融合騎なんだ。それにゼストさんは俺達の恩人さ。俺は108部隊から機動六課に出向中のキヨウ・アーデルハイド陸曹長。二人とも身体の方は大丈夫か？」

「（キヨウウって人、機動六課にいたっけ？ 僕たちの知っている事と違う……）えっと、僕は大丈夫です。ブルズは？」

「俺も勿論大丈夫だが、キヨウさん。ここにいるみんなも俺達みたいに転移させられたんすか？」

ブルズと呼ばれた少年の言葉にその場の一同は肯定の意味を込めて頷く。その後、立ち上がった二人が自己紹介を始める。

「僕は機動六課ファンング分隊所属、ファンング3のコルト・リバティです。こっちが……」

「同じく機動六課ファンング分隊所属、ブルズ・アルフィードっす！」

彼らも機動六課に所属する隊員らしい。二人の言葉にキョウ達だけでなく竜児も首をかしげる。

「六課にフアング分隊なんてあったか？ アーデルハイド曹長殿？」

「竜児さん、キョウで結構ですつて。そうっすね、うちにもフアングなんて分隊はありませんでしたよ」

「あれ？ ギンガさんじゃないっすか？ 久しぶりっすね？」

キョウと竜児が話している間に、ブルズは後ろの方で佇んでいたギンガに気付き声を掛ける。

「えっ？ ブルズくんも私の事を知ってるの？ どこかで会った事ある？」

「ギンガさん、僕たちの事を知らないんですか？ 一緒にスカリエツティ一味と闘いましたよね？」

「酷いぜ、ギンガさん。将来、義弟になるく「ブルズ！！ 変な事言うなよ！！」良いじゃん、別に……」

「ほう……」

ブルズの言葉を聞き、キョウが笑顔を浮かべつつ彼の肩に手を掛け話しかける。

「スバルの彼氏だって言ったかい？ その話を詳しく教えてもらいたいな？ 大事な妹分に関する事だし……」

キヨウの身体からは瘴気のような物が溢れる。それを見て、ギンガが慌てて制止する。

「こらー！！ キヨウ君ー！！ 二人とも引いてるじゃない。ごめんね、彼つて昔つから過保護だから。もつと二人の話を聞かせてもらえなかな？ ここよりもあの建物の近くが良いと思うから移動しましよつ？」

ギンガの提案によりロッジの近くに移動した一同はそれぞれに自己紹介を行い、自分の所属する『機動六課』について話を出す。それぞれ同じ部分も有り、全く違う部分も有り、異世界という表現がぴつたりとはまる様な状況だった。

「これは本当に異世界に迷い込んだのかもしれない……」

竜児が重苦しい表情でそう呟き、その言葉に一同の注目が集まる。

「竜児さん、異世界つてどついう事なんだ？」

「ブルズ、初対面なのに失礼だよー！！」

「いや、気にすんな。コルトだったか？ お前も敬語を使わなくとも構わないぜ？ 階級も同じなんだし」

「そんなら、上官命令です。竜児さんはこの原因に心当たりでもあるんですか？ 話してもらえませんか？」

僅かに場の雰囲気は緩むのだが、話しがそれだったのでアギトが釘をさす。竜児は苦笑いしつつ話を始める。

「そつだな。詳しい事は言えないが、みんなは神の存在を信じるか？」

「神って？ 宗教とかそういう物の神様ですか？」

「ああ、そつだぜ。ナカジマ曹長。俺は一度、神に会った事が有る。四年ほど昔にな……。そういった人の常識を超えた存在が居るってことは知ってるつもりだ」

竜児の話が始まるとその場の空気はピンつと張り詰めた。普段では考えられない様な場面に遭遇してしまっているので、荒唐無稽とも取れる内容でも何か手掛かりが見つかるかもしれないとその場の全員が感じているのだ。

「神か……。本当にそんな奴がこの空間を作り出したっていつのか？」

「俺はそつだと思っぜ、キョウ。自分達の住む世界で、こんな現象を引き起こせるような存在はいるか？ ロストロギアを使った異世界移動なんてもんでさえ、俺は聞いた事が無いぞ」

キョウと竜児が会話をしている最中、三度光が現れる。今度は少々距離が離れているようだ。光は砂浜ではなく海面へと現れる。

「みなさん！！ あつちに赤い光が！！」

「本当だね、コルト君。じゃあ、キョウ君、行って来て！！」

「はいよ、ギンガ。そんじゃ、ブルズつつたっけ？ ボード型のデバイスを持つてるってんなら、ついて来てくれるか？」

「良いっすよ、キョウ曹長。そっちこそ、ついてこれます?」

「これでも六課じゃフェイトさんの次に速いって自負してるんだ。行くぜ!」

キョウとブルズが光が現れた場所へと飛び立つ。

その間、残ったメンバーは情報交換を続けるのだった。キョウとギンガの放ったサーチャーからの情報により、付近には人間が居ないという事、危険な生物が見当たらない事等が伝えられる。ギンガとアギトの話聞きつつ、竜児とコルトは自身の状態を確認するなどして、二人が戻るのを待つのがだった。

「うん。さっきの光は? ねえ、ツバサ! 起きて、起きてよ!」

キョウ達が光の現れた場所に到着すると自分達と同年代の少年と少女の姿を発見する。少女の方は意識が戻っており、隣で海に漂う少年にしがみつき声を掛け続けていた。

「おい、君!! 大丈夫かい?」

「ねえ、ツバサが目を覚まさないの!! 助けて!!」

少女は声をかけても一向に起きる気配が無い少年を心配して不安そうな声を挙げる。

「こつちの兄ちゃん俺が運びますから、キヨウさんはその子を頼みます」

「了解、ブルズ。すまないけど俺達とついて来てもらえないかい？俺達もこの世界に転移させられたんだ。俺も彼も管理局員だし怪しい者じゃない。良いかな？」

キヨウの管理局という言葉に少女は反応する。しかし、現状では彼らに頼ることが最善だと判断し、キヨウ達についていく事にするのだった。

「ねえ、ツバサはどうなるの？」

ギンガ達と合流したキヨウ達一行。

先ほど保護したツバサと呼ばれる少年は未だ目覚めなかった。到着後、間もなく一同は自己紹介を終え少女と情報交換を行った。少女の名はメイナ・シュトロゼックといい、眠り続ける少年の名はツバサ・ランスローとの事だった。メイナはツバサを心底心配しているようで、助けを求め縋りつく様にキヨウ達に声を掛ける。

「こんな状態で現れるなんて初めてだな……。キヨウ」

「そうですね、竜見さん。特に外傷もないですし脈拍も安定しています……」

「この腕輪って何でしょうか？ 繋ぎ目も無いみたいですし……」

コルトがツバサの腕の装着された腕輪に注目する。彼の言葉通り繋ぎ目が見当たらず、取り外す事が出来ないような作りだった。

「本当だな。どうやって付けたんだ、それ？」

「その口ぶりからすると、竜児さん達の世界にもこういう物は無いみたいですね」

見慣れない腕輪に興味を示すキヨウ達。それを見てメイナはわずかに顔を曇らせる。

「メイナちゃん、どうかした？ あの腕輪に何かあるの？」

「うっ、えっと……」

メイナの表情の変化に気付いたギンガが声を掛けるのだが、彼女は言葉を詰まらせる。

「彼が目覚めない事とこの腕輪と何か関係でもあるのか？ それ以外に変わった部分は見当たらないし……」

「じゃあ、キヨウさん。それをちゃんと調べてみようぜ？ メイナって子の様子からして無関係じゃなさそうだし」

『待てえい!!』

ブルズがツバサの腕輪に手を伸ばそうとしたその時、何処からともなくアコースティックギターの音色が流れ始め、その行動を制止する声が響いた。

声はロツジの屋根の上から届いた。その場にいる全員がロツジの方へと視線を集める。

其処には腕を組んだ男が立っており、逆光によってシルエットのみしか確認できなかった。

何処から流れ得てくるのか分からないBGMと共に、屋根に立つ男が話を始める。

『都合の悪い状況を打破するために、無茶苦茶な設定で強引に流れを押し通す。人、それを「ご都合主義」と言っ』

「……何奴!?」「……」

ツバサを除く、この場所に転移させられた人間全員が自分の意志と関係なくその台詞を叫ばされる。

一同の言葉が発せられると同時に逆光が消え、屋根の上の男の姿が露わになる。その姿は中国風の衣装を着た金髪オールバックの男だった。

『貴様らに名乗る名は無い!! とあああつ!!』

金髪（仮）は屋根から掛け声とともに飛び降りる。しかも、とび蹴りの様なフォームで……。

その狙いはツバサの様であった。とつさの事に誰ひとり反応する事が出来ない。

『サンダーボルトスクリュー!!』

とび蹴りはもろにツバサの腹部へとヒットする。重力+体重の乗った蹴りでツバサの身体は『く』の字に折れ曲がる。

「てめえ、何しやがる!!」

『黙れ、下郎ども!! これは治療だ。次は仕上げだ。とああああ!! 奥義を受ける!! ゴッドハンド・スマッシュ!!』

あるうことが金髪はキョウの制止の声を振り切ってツバサに追い打ちを掛ける。金髪の拳が次々とツバサの身体に叩きこまれ、強烈な右アッパーが放たれる。台風のようなラッシュであった。アッパーによりツバサの身体は1mほど浮き上がり、地面に叩きつけられる前に金髪（仮）から抱きとめられる。

「ぐはっ!!」

金髪（仮）の腕の中でツバサが苦悶の声を挙げる。金髪（仮）は何やらやり遂げたような表情だった。

『これでもう安心だ……。さあ、行って来い』

意識を取り戻したツバサを金髪（仮）は解放する。

「ツバサー!!!!」

メイナがツバサに駆け寄る。ツバサもメイナの方へと駆けだす。その足取りはしつかりとっていて、先ほどまで意識の無かった人間とは思えない物だった。

駆け寄ったツバサとメイナはお互いの無事を喜び合う。

「メイナ!! 大丈夫だったか? 光に呑みこまれて……。此処は一体?」

「さつき変な人がツバサに酷い事をして。ツバサが眠ったままで…。
…。えつと何ともないの？」

メイナはツバサが目覚めた事が嬉しかったのか、慌てた様子で彼に質問をした。

「ああ、俺は何ともないよ。うん？ 変な人って？」

ツバサが先ほどの金髪（仮）に目を見を向けると、其処には二人を除く全員にデバイスを構えられ取り囲まれた男の姿が有った。

『おお、怖い怖い。秘孔を突いて助けてあげただけじゃないか？』

「結果的には助かったみたいだけど、方法が許せない。いこう、ブルズー！」

「ああ、コルトー！！」

「ギンガ、アギト、やるぞ？」

「うん、キョウ君ー！！」

「ぎつたんぎつたんにしてやるぜー！！」

「ハリケーンボルトとギャラクティカ・マグナム……。どちらがお望みだ？」

一触即発の空気だった。すぐにも全員が飛びかかるという雰囲気の中でも男はうすら笑いを浮かべていた。

『俺は敵じゃない。俺はこの世界の管理者だ』

「そんな言葉が信用できるか!! アギト、ユニゾンだ!!」

キヨウは金髪（仮）に攻撃をしようとアギトに合図を送る。ツバサ達を含めたその場にいる全員が、彼に胡散臭い物を見るような目を向ける。

『黙れ!! そして、聞け!! 今からこの聖帝がとても重要な事を話すんだから』

金髪（以下、聖帝）はそう言うと、その場にいる人間すべての身体を自由を奪う。それぞれ抵抗をするが、聖帝の力は強大であり為すべが無かった。

この時、キヨウとコルトは竜児の言葉を思い出していた。『神』と呼ばれる存在に会ったという事を……。

聖帝は一同の頭の中に直接言葉を流して説明をする。

この世界はそれぞれの世界の管理者達が力を出し合って作られた仮想空間『アルハズラット』であると。ちなみに聖帝はキヨウ達の世界の管理者らしい。ここに呼び出された全員で、日常のストレスを忘れて楽しんで欲しいと、この世界はつくられたそうなのだ。

ロッジの中には海水浴で使えるグッズ等も用意されているらしい。この世界は時間が経てば消滅し、特別な事をすることなく元の世界へと戻れるとの事だった。光に呑みこまれる瞬間に引き戻されるらしい。

記憶に関してはこの世界を出る際にほとんど失ってしまうとの事だ。

『ちなみにこの姿は古代中国の武将、司馬懿の弟の姿を借りている。司馬進って奴だ』

「はあ!?!」

この中で、唯一地球出身だった竜児が素っ頓狂な声を放ってしまふ。聖帝はこの後、どうでもいい話をする。仲間を助けようと登山中に縄を切った司馬進の姿に感動したのどうのと……。

竜児は心の中で思っていた。完全に『ウルトラセ ン』のパクリじやねえかと。

『と言う訳で、ちょっとした我々からのプレゼントだから。存分に楽しめよ、下郎ども!! 以上、解散!! 散れ!!』

そう言い残すと、聖帝はその場から消え去るのだった。

「あの人、何だったんだろう……」

「気にするだけ無駄だと思うぜ、ナカジマ曹長」

アクの強い聖帝の姿に軽く引いていたギンガを竜児が慰める。

「取り敢えず、この現象は危険性が無いってことは分かったな。えっとツバサさんで良いんですね? 俺はキヨウ・アーデルハイドつていいいます。これから一緒に過ごす事になるだろうから自己紹介も兼ねて、みんなで食事でもどうです?」

キヨウはツバサに右手を差し出し声を掛ける。

「俺はツバサ・ランスローっていいいます。年も同じ位なんで敬語は良いですよ。一応、元機動六課の三等空士でした。それじゃあ、一緒にさせていただきます」

ツバサはキヨウの手を取り握手をする。

「弁当はギンガの『ブリッツキヤリバー』に収納してるから」

アギトの言葉にキヨウとギンガ以外の面々は驚く。デバイスの格納領域をそんな使い方するなんて聞いた事が無かったからだ。

「デバイスに弁当って……」

「えっ？ 格納領域なんだから物を仕舞っとく所でしょ、竜児さん？ 一応フォワードのみんなで食べようとした物だけど、まあ良いか」

呆れている竜児をアギトがバツサリと切り捨てる。

「アギトさん、弁当あるんですか？」

「こら、ブルズー！！ 図々しいよ、そういうの」

「良いつて、コルト。弁当は私とギンガの手作りなんだぜ！！ ギンガ、支度しよう？」

「了解、アギトちゃん！！」

「ギンガさんとアギトさんの手作りなの？　楽しみ〜！！」

「メイナさんの口に合うかは分からないけど、楽しみにしてくれるならうれしいな。メイナさんも手伝ってくれる？」

「うん！！」

女性陣はギンガの指示で行動を開始する様だった。

「ギンガもアギトも料理が上手いんだぜ？」

「「キヨウ（君）、ハードル上げるな（ないで）！！」」

「ごめん！！　じゃあ、俺は席を用意しますんで。今日は新人達と海水浴する予定だったんで荷物はあるんですよ」

キヨウはバリアジャケットを解いた後、『フランメ・ファウスト？』からレジャーシートとビーチパラソルを取り出す。流石に二度目と言う事で、他のメンバーは何も言わなかった。

その後、彼らは昼食を楽しんだ。食事中は様々な話題で盛り上がり、彼らは打ち解けていく。

昼食中の話題にはツバサの腕輪も上がったが、彼は物心つく前に両親から貰った物だと説明を行う。

「それで、二人はどういう関係なの？」

ギンガがツバサとメイナに笑顔でそう尋ねる。ツバサを心配するメイナの姿を見て、そういう関係なのかと邪推しているようだ。

「えっと、俺達は幼馴染なんだ（メイナ、話しを合わせてくれ）」
ツバサは念話を送る。

「（分かった）うん、ツバサは私の幼馴染なんだ。えっと幼馴染って？」

「おっ、おい！！ みんなごめん、コイツ天然な所があるからさ！！」

ツバサがぼろを出しそうなメイナを慌ててフォローする。他の面々は特にそれを気にする様な事も無かった。

「そうなんだ。私達と一緒にだね。私とキョウ君、アギトちゃんも幼馴染なんだ」

「此処にいないけど、私とスバルは小さい頃からの親友なんだぜ」
アギトの口からスバルと言う名を聞き、コルトが反応をする。

「アイツはキョウウの事も本当の兄貴だと思って懐いてるんだぜ。なあ、キョウウ？」

「ああ、そうだな。アギト。そう言えば、さっきは途中までしか聞けなかったけど、コルトとスバルの関係を教えて欲しいなあ？」

「えっ？ 僕とスバルですか？ キョウさんの世界のスバルとは別人だと思っんですけど？」

「世界が変わろうがスバルはスバルだ。もしかしてスバルと付き合っていたりするの？」

キョウは笑顔で黒いオーラを再度放ち始める。

「もう、キョウ君！！ 何度もごめんね、コルト君。彼っつてば身内に甘いつていうか、シスコンな所があるから……」

「酷い時は私に声をかけて来た男に対しても殺気を飛ばしたりするんだよ……」

アギトがため息交じりに呟く。

「ふっ、シスコンか。どっかの世界チャンプと同じだな……」

竜児はコーヒーを飲みつつキョウ達のやり取りを眺める。

穏やかでゆったりとした時間が流れた。

ギンガとアギトの料理は好評の様で、残さず全員の腹の中に収まるのだった。

この後の予定を全員で話し合ったところ、午後？からはこの不思議な世界で海水浴が行われる事となるようだ。

後半へ続く……。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（海編1）（後書き）

一万字を超えたので前後編に分けました。

ギンガとアギトの水着は次回のお楽しみに……。

メタ発言はクロスの華！！

失礼。読んでいただきありがとうございました。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（海編2）（前書き）

大変遅くなって申し訳ありませんでした。

今回で海編は完結です。

キャラを貸していただいたnukosan先生、イツキ先生、マグネス先生、本当にありがとうございました。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（海編2）

昼食を取り終えた後、一同は砂浜に立つロッジの中に入ってみる事にした。聖帝の言葉を信じるなら、その中にはこの休暇を楽しむためのグッズが収められている事になる。

中に入ると、空調設備が見当たらないのに快適な室温が保たれていた。

室内は外観からは想像が付かない程広く、20畳ほどの広さだった。部屋の中心には十人程が並んで座れる程の大きな木製のテーブルと八人分の椅子が置かれてた。

部屋の奥には簡易キッチンのような物も有り、其処には業務用の冷蔵庫も鎮座していた。

ギンガとアギトが冷蔵庫の中身を確認した所、様々な種類の野菜や調味料が収められていた。肉類も僅かばかりあったが何故か魚介類は入っていないかった。

「魚が無いって事は自分たちで獲れって事かな、アギトちゃん？」

「そつなんじゃないか？ キョウウが居るし……」

二人がキッチンで会話をしている一方で他の面々は椅子に腰かけ雑談に耽っていた。

内容と云えばその後の海水浴の話題であった。

「俺達は元々海水浴の予定だったから水着とかの準備は出来てるけど……。みんなは？」

「僕とブルズは突然のことだったんで……」

「だよな、コルト！！　まあ、俺たちは水着が無くつても十分楽しむことは出来るツスよ」

キョウの問いかけにコルトは戸惑いの表情を浮かべながら、ブルズはそんな事些細な問題たといった感じで笑いながら答える。

「海水浴かあ。でも、海水浴って何？」

「海水浴っていうのは、海で色んな遊びを楽しむ事だよ。メイナ。でも、俺達も遊んだりしていいのか……」

メイナは初めて耳にする海水浴という言葉にワクワクを抑えきれない様子だった。一方のツバサは今まで自分達が過ごしてきた世界と違いお気楽なムードの漂うこの世界に戸惑っている様子だった。

「たまには良いさ、まだお前も10代。遊びたい盛りなんじゃないか？　日常のしがらみなんか忘れて楽しんだ方が良いぜ？」

それを見かねた竜児が肘で彼の腕をつつきそう声を掛ける。

「子供扱いしないでください、竜児さん」

「いやあ、俺から見ればお前は子供だよ。メイナちゃんみたいにたまには羽目をはずして楽しもうぜ？　此処にいるヤツらはそれぞれの世界で闘いやら何やら色んな物を背負ってるんだ。こういう機会に上手くガス抜きをしないと潰れちゃうぜ？」

竜児の態度に少々カチンと来たのか、ツバサはムキになったようだ。しかし竜児はそれを物ともせず、彼の頭をガシガシ撫でながら言葉

を返した。

「そんな物ですか？」

「ああ、そんなもんさー!!」

その後ツバサも竜児の言葉を聞きふっ切れたのか、同年代であるコルトとブルズの下に合流し三人でワイワイと会話を楽しみ始めるのだった。

「竜児さん、ありがとうございます」

竜児の後ろからキョウウが声を掛ける。先ほどまではコルト達と共にいたのだが何時の間にか抜け出していたようだ。冷蔵庫から取り出したのか、その手にはコーヒーの缶が持たれておりそれを竜児に手渡す。

「お礼を言われる様な事はやってねえけど？」

「いや、ツバサくんの笑顔を見れば分かりますよ。彼は俺達の中でも特に大きな物を背負っているように感じましたから。そんな彼が竜児さんと話した後何処にでもいる少年の様な雰囲気変わったんだから、何かあったと思うのは当然でしょう？」

キョウウは缶コーヒーを一口飲みツバサ達へと視線を向けつつ、竜児にそう言葉を放つ。竜児の言葉で何やらふっきれているように見え、キョウウは自然と笑顔になっていた。

「キヨウさんも竜児さんも、なんかオジサンっぽいね?」

「オジサンって……。メイナちゃん、俺はあっちの方で盛り上がってる三人とそんなに歳は変わらないよ」

「オジサンはよしてくれよ。俺はこう見えてもまだ二十代なんだぜ?」

先ほどから姿を見せなかったメイナの突然の言葉にキヨウと竜児はシヨックを受ける。少し落ち込んでしまったキヨウをよそに、コルト、ブルズ、ツバサの三人は何やら盛り上がっている様子だった。

「それより見て!! あっちに水着が有ったんだ!! これメイナのだって!!」

メイナが手に水着を持ちつつ部屋の隅の方を指さす。其処にはビーチボール等の遊具と共に紙袋が並んでいた。

キヨウ達が喋っている間にキツチンから移動していたのか、ギンガとアギトの二人が紙袋を吟味しているようだった。

「私とキヨウ君とアギトちゃんのを除いた全員分が用意されているみたいだよ? 袋にはそれぞれ名前が書いてあるし」

ギンガが袋の一つを手に取り、そう伝える。

「これも全部さっきの聖帝ってヤツとその仲間が用意した物なんだろうな? 男物は良いとして、メイナの分のサイズまで把握してるとか変態か?」

アギトは少し呆れたように呟く。

ギンガとアギトの声を聞きつけて、先ほどまで雑談に耽っていたコルト、ブルズ、ツバサの三人は荷物の方へと駆けよる。

この世界に来た当初よりも三人とも精神年齢が下がっている様な印象だった。

自分達の分まで用意された水着やサイズの事等、突っ込むべき部分は多々あるのだが、これぞご都合主義である。

「都合良く水着も用意されてるみたいだし、早速海水浴の準備でもしましょうか？」

「oooooooooooo!!!」

キヨウの掛け声に一同は声を揃える。

初めは男性陣が時間もかからないという事でロッジの中で先に水着に着替える事になった。男の水着を描写する程無駄な事は無いので割愛する。

五人ともバミューダタイプの水着とサンダル、色違いのアロハという出で立ちに着替えロッジの外で女性陣を待つ事となった。

時間の無駄をなくすためその間に男性陣はパラソルを立てたりシートを敷いたり浮き輪を膨らませたりなどの雑用をやる事となった。

荷物は着替える前に外に出されていたのだ。

「プハッ!! どうだ、ツバサ!! 俺の方が速くシャチの浮き輪を膨らませられたろ？」

「プハッ!! ほんのちよつとの差じゃないか? 俺のボートの方がでかいんだから遅くて当たり前前だろ？」

ブルズとツバサはどちらが早く浮き輪を膨らませられるか勝負をしていたようだ。二人とも酸欠に近いのか顔が真っ赤であった。

「ツバサもブルズもしょうもない事で張り合わないでよ。普通に空気入れあつたじゃん……」

コルトはそんな二人に呆れている様だった。彼の手には浮き輪と共によく見かけるチープな空気入れが持たれていた。黄色い足踏み式のアレである。

「竜児さん、終わったんならサボらずに手伝ってくださいよ。まだ用意する物ありますよ?」

「ん? おお、ワリいな。キョウウ」

三人とは別に、組み立てられたばかりのビーチチェアで寛ぐ竜児が隣でパラソルを立てるキョウウから注意を受けていた。

一方、ロッジの中の女性陣はというと……。

「うわあ、ギンガっておっぱい大きいね?」

「ちょっと、メイナちゃん? 何処触ってるの!! 着替えの途中だから離しなさい」

メイナによつてギンガがブラの上から胸を鷲掴みにされていた。ギンガのたわわに実った胸が後ろから組みついたメイナにより揉みしだかれている。ちなみにギンガのブラは薄い青でレースの装飾が施されていた。

「その辺にしとけよ、メイナ。外じゃ男どもが待ちくたびれてるぜ？」

アギトがギンガの胸をムニムニ揉みしだくメイナに注意する。それによつてメイナの矛先がアギトへと変更になる。

「アギトもすつごくスタイル良いね。羨ましい〜」

今度はアギトの胸が餌食となるのだった。そのようなやり取りが行われた後、三人は外の男性陣のもとへと向かうのだった。

「じゃ〜ん！！ どうだ、みんな？」

ロッジの扉を開け、アギトが以前スバルがやった様にポーズを決めてその水着姿を披露する。アギトの水着は黒いビキニだった。肩ひもや腰の横の部分は金色のチェーンで作られている。なんともアダルトイナ水着であった。水着の上から前開きの白いパーカーを羽織っている。髪もいつもとは違いポニーテールに結われている。

白いうなじが色っぽいと男性陣は口には出していなかったが、心の

中で眩くのだった。

「ふにゃ〜……。アギトさん」

「おっ、おいコルト!!! しっかりしろ!!!」

アギトの扇情的な姿により、刺激に耐えられなくなったのかコルトはKOされてしまった。相棒のブルズにより介抱が為される。コルトがブルズの肩を借りている間に、今度はメイナが外に出てくる。

「どうかな? 似合ってる?」

メイナは白い2ピースの水着だった。上は臍の近くまで隠れフリルのついた可愛らしいといえるデザインだったのだが、背中が大きく開いている。

下はブルーの生地で出来ており、ホットパンツの様に見える様なデザインだった。

アギトのセクシー路線とは違い、清純路線と言ったところか? 特に物怖じせず、堂々と水着姿を晒していた。元気いっぱいという印象である。

「可愛らしいじゃねえか? ツバサ、こんな可愛い子と一緒にいるなんて羨ましいぜ」

「たっ、確かに可愛いと思いますよ……。って竜見さん、俺達はそんなじゃないですよ!!!」

「そうかあ?」

ツバサは竜見によってからかわれ始める。この中では最年長である

筈の竜児もどこか幼くなっているようだ。
竜児とツバサが騒いでいる間に次はいよいよギンガの番となった。

「えっと、どうかな……」

ギンガは少し恥ずかしいのか頬を赤らめつつロツジから出てきた。彼女の水着は白いビキニに青いパレオという組み合わせだった。母親譲りの抜群のプロポーションを惜しみなく晒す。アギトをスレンドー系だとするとギンガはグラマラス寄りという感じだった。流石にシグナムやフェイトには敵わないであろうが……。それでも出る所は出て、ひっこむ所は引っ込むというメリハリのあるボディだった。何時もは後ろに結んであるリボンが解かれており、その代わりに赤いハイビスカスの髪飾りが添えられていた。

「ほへえ〜」

キョウはギンガの水着姿を見て妙な声を発しながら顔をとりけさせていた。普段の彼を知る物が居たら度肝を抜いていたかもしれない。

「こら！！ 気持ち悪い声を出してないで、何か言つてやれよ」

キョウの隣に移動したアギトが肘で彼を小突きながらツッコミを入れる。それには放心していたキョウも正気に戻らざるを得ない。

「そうだった……。ありがとな、アギト。えっとさ、ギンガ!!
その、あれだ……。すっごく似合ってるって思うぜ」

キョウが照れてしどろもどろになりながらもギンガに向けてそう言葉を放つ。

「えっ……。あ、ありがとう。良かった、似合ってるって言ってもらえて……」

ギンガも照れ笑いをしつつ礼を言う。久しぶりに照れ合う二人を見たので、アギトは笑いをこらえるのに必死になっていた。他の面々は砂糖を吐きだしそうな表情に変わっていた。

メイナ以外だが……。

「うわあ、キヨウもギンガも仲良しなんだね？」

「それは違うと思うよ、メイナちゃん。アレはカップルって事だと思っ」

一人だけ異なつた受け取り方をするメイナにコルトがキヨウ達のことを教える。昼食中もキヨウとギンガは自分達が知らないうちにイチヤついてしまっていたのだ。

二人の仲はメイナ以外のその場にいる全員に既に知れ渡っている。

「だな、コルト。カップルもカップル。アレはバカップルって奴だ」

ブルズもコルトの言葉に続く。合流した一同はこれから海水浴を開始する。

キヨウとコルトは二人で釣りをしようという話をしていたようで、

都合良く波打ち際に打ち上げられていたボートに乗り込み少し沖の方へと移動する。

他のメンバーは浜辺の近くで遊ぶようだ。ちと、キョウ達はマイペース過ぎやしないだろうか……。

「スツゲ、何だあれ？」

ブルズが驚いた顔で海上を指さす。指の先には波の上に浮かぶボクシングのリングが用意されていた。他の面々もそれに驚いている様だった。昼食まではそのようなものは存在していなかった。

「これは香取石松の……」

「どうしたんですか？ 竜児さん。アレ、知ってるんですか？」

先ほどまでのやり取りで竜児と打ち解けたツバサが声を掛ける。竜児は何かひらめいたといった感じの笑顔を浮かべツバサの手を取る。

「そうだ、せっかくだし俺とボクシングっていうスポーツをやってみないか？」

「ボクシング？ マリンスポーツの一種ですか？」

当然、ミッド育ちのツバサにはボクシングという物が分からない。

竜児は地球の格闘技だという事と基本的なルールを教える。

ツバサ以外の面々も興味津津といった様子だった。

「じゃあ、俺とツバサがスパarringをやってみるわ。みんなは見ていてくれ」

竜児はそのまま彼をリングの上へと連れていった。リング上には、丁寧グローブとヘッドギア、マウスピースが用意されていた。

「本当にやるんですか？」

ツバサは明らかに嫌そうな表情だった。一方の竜児は乗り気の様で、仕方なく準備を整えスパーを開始する事となる。

「頑張つてね！！ 竜児さんもツバサ君も！！」

「ボクシング！！ 次はメイナもやってみたい！！」

ギンガが二人にエールを送る中、メイナはボクシングに興味を持てしまったようだ。

ワクワクといった感じで目を輝かせている。

「流石にメイナはやめといた方が良くないか？ せつかくの綺麗な肌に傷が付くって……」

「え、アギト！！ 私達もやろうよ！！」

メイナはめげずにアギトを手を握り、ブンブンと振るって駄々をこねる。アギトは少し困ったような顔をしていた。

「私よりも殴り合いならギンガの方が得意だぜ？ ギンガ、代わってよ」

「ちょっと、厳しいかも。だって水着だし……。メイナちゃんまず

は二人を応援しよう。その後決めても良いじゃない。それとか、ほら？　こういうので遊んでも楽しいと思うよ？」

ギンガもあまり乗り気ではない様だ。その代わりにシャチの浮き輪を指さす。シャチに視線を移したメイナの興味はそつちに逸れたようだ。

「私、これで遊んでみる！！」

応援するという事を忘れ、シャチを掴み海の方へと走るのだった。

ヒュッっという風切音がツバサの耳に届く。竜児の鍛え上げられた拳が彼の顔の横を通過したのだ。それは一撃では終わらない。

手加減しているという事は表情や動きから読みとれるのだが、それでもかわす事がやっつと言える程の鋭さを持ち続けていた。

最速のパンチといわれる『ジャブ』である。

ツバサは真剣な表情で竜児のラッシュを避け続けていた。

「基本のパンチとも言えるもんだぜ。避けるの上手じゃないか」

どうやら実演指導をしていたようだ。竜児はロープ際にツバサを追い込むと拳を止める。

「地球の格闘技もミッドと共通する部分があるんですね。打ち方とか昔の訓練を思い出しますよ」

「他にも沢山の種類のパンチがあるんだぜ？　こういうのとかな」

そう言うと竜児はツバサに背を向け左手一本でストレートを放つ。目にもとまらぬ速さだった。一瞬の出来事で、残像が残る程の動きを竜児は見せる。

「0.1秒間に5発のストレートを放つ『スペシャルローリングサウダー』って技だ。ある程度極めるところこういう芸当も出来る様になるんだぜ？」

「……いや、ないない」「」

リングの外で浮き輪に乗りつつ観戦していたギンガとアギト、そして竜児の技を間近で見たツバサが声を重ねる。三人は打ち合わせでもしたかのように、揃って顔の前で手を横に振る。

「不安定な足場で鍛錬を積みれば下半身の強化にも繋がるぜ。他のパンチも教えるからやってみるよ」

「え、今日は海水浴ですよ？ 泳いだりしましょうよ」

ツバサは若干うんざりしている様だった。一方の竜児はそんな事お構いなしといった所である。強引にパンチの打ち方の指導を始めてしまう。

「確かにこういう場所だと足腰の鍛錬には良いね……」

「お前もかよ……」

ギンガがぼそつと呟く。その目は海水浴に似つかわしくない真剣な物になっていた。その呟きにアギトは呆れつつもツツコミを入れる

のだった。

沖の方へ釣りに出かけたキョウとコルトはというと……。

「ほいつ！！ これで二匹目ゲット！！」

キョウが魚を釣り上げていた。彼の隣では釣り竿を貸してもらったコルトが糸を垂らしている。

「中々上手いですね。僕も負けてらんないな」

「親父やゲンヤのおっちゃんと小さい頃からよく釣りをしていたからな」

30cmほどある魚を持ちキョウは笑顔を向ける。手なれた感じで針を外すと先に釣りあげていた魚と一緒にボートにあったバケツの中に放す。今晚の夕食に使う様だ。

「ゲンヤさんですか？ そつえばギンガさん達とは幼馴染なんですよね？」

「ああ、家が隣でさ。それよりもコルト。そつちの世界でお前とスバルはどういう関係なんだ？ 詳しく教えて欲しいなあ」

キヨウがコルトに接近する。その顔は笑っているのだが、目だけは真剣だった。完全にシスコンが妹の彼氏に尋問をしているという様子だ。

コルトは観念したように自分とスバルについての関係を話す。空港火災の時に出会い、共になのはによって救出された事。機動六課では同じ部隊員として訓練を共にし事件解決の為に奔走している事等を。キヨウも話の合間に普段はどういう付き合い方をしているのか根掘り葉掘り聞き出していた。世界が違っても彼にとってスバルは可愛い妹分なのだ。

「だからキヨウさんが心配している様な事はありませんって!!
それよりキヨウさんとギンガさんはどうなんです？ お付き合いしてるんですよね？」

「うーん、まあな。ガキの頃からの付き合いだし、なるべくしてな
ったって感じだぜ？」

コルトは反撃のつもりでやってはいけない質問をしてしまった。お
分かりの通りキヨウとギンガはバカップルである。そう、コルトは
延々と惚気話を聞かされる事となったのだ。

キヨウは六課にいる時は自重している（つもり）なので、枷が外れ
たかのように自分とギンガの馴れ初めやどういいうデートをしている
のか等を赤裸々に語った。

自分達の仲がどこまで進んでいるのかまでも……。

「ふわあ……。そつ、そんなとこまで……」

コルトには少々刺激が強すぎた部分があったようだ。キヨウの話
を聞いて茹でダコのように顔を真っ赤にしてしまっている。話を聞いて
いて恥ずかしくてたまらないのだろう。

一方のキヨウは平然としていた。むしろ我慢せずに喋ったのですっきりしているとも取れる顔をしていた。

「ワリい、ちよっと刺激が強すぎたか……。っってお前の竿も引いてるぜー！」

「あつ、ホントだ。よ〜し」

話に夢中になっていう間にコルトの竿にも当たりが来ていたようだ。声を掛けられ意識を竿に向ける。切り替えの速さが素晴らしい。

コルトは竿を持ちあげリールを巻き取っていく。隣ではキヨウがアドバイスを送る。言葉に従いコルトはどんどん糸を巻き取る。魚を逃すまいとコルトの表情は真剣そのものだった。

「やったー！ 僕も釣れましたよー！ ほらっー！」

コルトは釣り上げた魚を持ち、キヨウの方へと向ける。魚を見せびらかす彼の顔には年相応な無邪気な笑顔が浮かんでいた。魚が釣れたことで嬉しい気持ちでいっぱいといった様子だった。

「結構人数いるし、もっと釣らないとな？ 向こうのギンガもスバルと同じでいっぱい食べるんだろ？」

「スバルは確かに沢山食べますね……。ギンガさんのお昼の食事量には驚きましたよ。確かにもっと釣らないといけませんね」

「「はあ……………」」

ため息が重なる。どちらも肩が煤けていた。二人はそのまま釣りを続けるのだった。

「きゃははははは！！ 凄い！！ 凄いよブルズ！！」

「『ウインドバックラー』はスゲエだろ？ じっくりぜ〜！！」

ブルズは自分のデバイス『ウインドバックラー』をボードモードに変形させ、メイナの乗るシャチの浮き輪を後ろにくくりつけて海面を疾走していた。

使いなれたデバイスを使用している事も有りサーファーと言われても通用するほどの腕前だった。

メイナは歓声を挙げ非常に楽しんでいる様子だった。

「もっと、もっと速く〜！！」

「了解！！ おらあ〜！！」

更にスピードを上げる。競艇のボートも真つ青な位のスピードまで加速をしていた。メイナの浮き輪が通った後には白い水しぶきが上がっている。

「こつこつという使い方たまには良いな……」

ブルズはメイナの満面の笑顔を見ながらそう呟くのだった。

ビーチパラソルで出来た木陰の下にはチェアに寝そべる美女の姿が有った。均整のとれた身体と黒いビキニから分かる通りアギトである。

珍しくサングラスなどを掛け、そばに置かれたデスクの上からトロピカルジュースを手に取り一口飲む。

初めはギンガと共に竜児とツバサの海上リングでのスパーを観戦していたのだが、どうやら途中で飽きてしまったらしく日光浴に切り替えた様なのだ。

心底リラックスしている様子だ。彼女なりにこの状況を楽しんでいるのだろう。

「あゝ、楽しかった！！ アギトちゃん、起きてる？」

アギトが眠りにつきそうになっている時、すぐ傍からギンガの声が聞こえてきた。彼女の後ろからは赤面した竜児とツバサがついて来ている。

三人の話によるとその後、結局ギンガもスパーに参加してしまった様なのだ。アギトが去った後、一人じゃつまらないという事で彼女も参戦したとのことだ。

二人がなぜ顔を赤らめているかという点、気付いた方も居るだろうが現在ギンガは水着姿なのだ。実戦などの真剣勝負ならいざ知らず、このような場面では彼女の姿は気になって仕方が無かったのだろう。

10代のツバサには目の毒だった筈だ。ギンガ自身整った容姿と恵

まれたプロポジションを持っているので流石の竜児も照れを隠せなかつた様だ。

「良い気分転換になりました、二人ともありがとうございました」

「いや、対シューティングアーツの良い経験になったよ。所々違う流派の動きもあったし（あの胸は反則だろ、ツバサ？ 集中すんのが大変だったぜ）」

「ミッドではあまり見かけない体系の格闘術でしたよね。素手で戦う機会は余り無いですけど勉強にはなりましたよ（それには全面的に同意できますよ、竜児さん。自覚が無いのって罪ですよね……）」

ギンガは気付いていなかったが、竜児とツバサは念話を使い彼女についての感想を言い合っていた。ギンガの存在が二人の結びつきを強める形になった様である。

「そういえば、すいかもあつたから皆に戻ってきてもらってスイカ割りでもやんねえ？」

先ほどまで休んでいたアギトが三人に提案する。三人ともその意見に賛成の様だ。全員魔術師という事も有り、それぞれその場にいないメンバーに念話を送る。

念話が届いてすぐ、他のメンバー達はアギト達のもとへと合流した。此処で役に立ったのもブルズのデバイスである。沖の方に出ていた

キョウ達を迎えに行き、メイナをキョウ達のボートに載せてけん引してきたのだ。シャチの浮き輪は空気を抜かれ、ボートに載せられているのでご安心を。

「すごいな、ウインドバツクラァだっけ？ 浜辺まであつという間だったぜ」

キョウは合流後、けん引されていた感想を口にする。それを耳にしてブルズは得意げといった表情を浮かべる。

「でしょ？ 凄いやね、えっへん!!」

「いや、お前のじゃないだろ……」

何故かメイナもドヤ顔で胸を張る。彼女の保護者であるツバサがツッコミを入れる。その様子を見て他の面々は可笑しくなって笑いを浮かべてしまふのだった。

「こっちこっち!! もつと右だつてばコルト!!」

メイナが元気よく声をあげる。くじ引きの後、はずれを引いたコルトが目隠しをしてスイカ割りをやっているのだ。彼から10mほど

離れた場所にスイカが置かれている。他のメンバーはすぐ近くで声援を送っている。

そのまままっすぐ歩けば割る事が可能という位置関係だった。コルトは期待通りにフラフラになっている。

「コルト、もつと左に歩けって!!」

「ブルズは嘘教えんなよ。そっちは海だぞ!!」

「ばらすなよ、ツバサ」

ブルズの教えたでたらめ通りにコルトはよろよろと海に向かっていったのだがツバサの言葉で足を止める。

「コルト、向きを一回転してそのまままっすぐ歩けよ」

「まっすぐですね、竜児さん!! うおりゃ」

竜児がコルトを誘導する。その方向とはブルズのいる場所だった。コルトは掛け声と供いにそちらに向けて移動を始める。

「コルトのヤツ、走りやがった!? ってこっちに來てるし」

「ブルズ、お前が悪い。黙って反撃されてる」

「薄情っすよ、キョウさん!! 鬼、悪魔!!」

キョウはブルズを後ろから羽交い絞めにして逃げられない様に抑えつけている。

「足場の悪い砂浜で、目隠ししながら走っても転ばないつのはスゲエよな」

「そうだね、アギトちゃん。コルト君、そのままだよ」

ギンガとアギトは完全に他人事だった。というかアギトが注目している点がおかしい。

「もう！！ スイカはそっちじゃないのに」

ちゃんと誘導していたメイナは不満そうだ。コルトは一直線にスイカでは無くブルズの方へと進んでいく、筈だった……。

《ぶによん》

「えっ？ やわらかい？ 何これ？」

「きゃっ？」

「ギ、ギンガ！！」

コルトはブルズに一撃を与える為に棒を上段に構えながら進んでいた。そんな状態で彼は何やら軟らかい物に顔を埋めてしまっているのだ。

もうお分かりであろう。そう、其れはギンガの胸であった。彼女はブルズを羽交い絞めに行っているキョウウの隣に立っていたのだ。キョウウが思わず叫んでしまう。

「良い匂い……。ってギンガさん？」

コルトはギンガの胸から顔を離し目隠しを外す。彼の目の前には顔を真っ赤にしたまま固まっているギンガの姿があった。

「小便是済ませたか？」

彼の隣からキョウウが殺気を放ちながら言葉を放つ。既にブルズを解放していた。

「神様へのお祈りは？」

ツバサも続く。目のハイライトが消えていた。

「白い砂浜で俺たちにボコボコにされる心の準備はOK？」

拳を鳴らしながら竜児も二人に続いた。

「なあなあ、コルト。どんな気分？」

ブルズは面白い物を見たといった笑顔だった。

「気持ち良かった。って何言わせるんだよ、ブルズ！！ こっ、これは事故です！！」

男性陣は声を重ね、それぞれ自分の得物デバイスを起動する。

「『『『『死刑！！！！』』』』」

「ふっ、不幸だ~~~~~！！！！」

お約束のハプニングの後、コルトが折檻を受けるという事は無かった。事故だったしキョウ達はただ彼をビビらせたただけだった。

「すみません、本当にすみません」

「いいよ、気にしないでつて。わざとじゃないんだから」

現在コルトはギンガに凄い勢いで土下座を行っていた。何度も額を付けて謝っているがギンガは既に許しているようだった。

「次は俺がやる。誰もギンガに指一本触れさせないために（ギンガの胸は俺の物だ）」

「いや、キョウ。俺がやるよ。棒の回転くらいじゃ俺の三半器官はやられない（ラッキースケベってヤツか、羨ましい）」

「またまた、俺がやるっすよ童児さん（コルトだけズルいな。俺にだってご褒美が）」

「此処は俺が！！」

キョウと童児とブルズは次のスイカ割りは自分がやると申し出る。

三人とも何かを期待している様な顔だった。心の声がダダ漏れといった様子である。そこに、まさかのツバサまで……。

「……えっ？ マジで？ ツバサ？」

「……いや、やっぱりいい」

真面目だと思った彼まで言いだしたので三人は驚きの表情を浮かべる。そのせいでツバサは自分の言葉を取り下げたのだ。ちよつとヘタレっぽい。

「そこだ、メイナ！！」

「分かったよアギト！！ とりゃ〜！！」

男性陣が不毛な行動をやっている間にアギトに誘導されたメイナがスイカを割ってしまった。

それから全員でそのスイカを食べて過ごすのだった。

そうしている間にこの不思議な空間も夕方になっていた。太陽っぽい光源も海の方へと沈みつつあり、夕暮れと変わらない風景が広がる。

海に沈む夕日を一同は楽しむのだった。

夕飯はロツジの中にあつたバーベキューセットを使い支度する事になつた。男性陣は鉄板や墨などの用意、会場設営を担当させられた。火の当番は当然といつた流れでキョウウが担当させられる。料理は女性陣の担当で、ロツジのキッチンで下ごしらえを行つていた。キョウウとコルトの釣りあげた魚もその日の食卓に並ぶ事になる。キッチンではアギトとギンガによるメイナへのお料理指導が行われていた。

「こうやれば簡単に皮が離れるんだぜ」

「包丁の使い方には気を付けてね？ 左手は猫の手で……」

「こんな感じ？」

野菜の下ごしらえや……。

「それでね、ここを取ると骨と身が残るの」

「こつちはスープの出汁に使えるから捨てちゃダメだぜ？」

「うわあ、二人とも上手だね！！」

魚の捌き方や頭や骨の利用法を実演しながらギンガとアギトはメイナに教えるのだった。小さい頃から料理をやつていた二人の手つきは慣れた物だった。メイナも慣れないながらも二人の技術を吸収していく。センスが有るのかその腕前はどんどん上達していった。

それから暫らくして外ではバーベキューが行われた。

訓練校時代に家電扱いされたキョウも火種という面では重宝されるのだった。本人はブツクサ言いながらも働いていたのだが……。メニューはバーベキューとブイヤベースだった。その場にいる一同は皆「美味しい!!」と歓声を上げつつ食事を楽しんでいった。ブイヤベースはアギト監修の元、メイナが中心となって作られた物だった。

その評価も上々で、寸胴鍋で作られていたのだがそれも残らず空っぽになるのだった。

食事が終わると全員で片付けが行われ、元の世界へ帰る支度が始まる。聖帝の言葉ではその日のうちに元の世界に帰る事になるからだ。一同が荷物をまとめ終わると光と共に聖帝がロッジの屋根に登場した。

『どうだア、楽しめたかア？ 三下ども』

姿は変わっていなかったが、口調が変わっている。何処の学園都市の第一位だ。

「おかげで楽しめたぜ、聖帝。他の世界から来た友人も出来て良い経験になったよ」

「私もキョウ君と一緒にです。みんなで過ごすのは楽しかった!!」

「機会があればまたみんなが集まって遊びたいぜ」

キョウ、ギンガ、アギトは笑顔で聖帝に応える。

「たまにはこういうのも悪くないな。楽しかったぜ！！」

竜児も……。

「これからまた日常に戻る事になるだろうけど、ここで体験したことは忘れたくないな」

「メイナ、みんなと離れたくないよ……」

ツバサとメイナも……。

「本当に楽しかったです。何時かまたこんな感じで遊びたいですよ」

「本当に休日を満喫できたツス」

コルトとブルズも。全員名残惜しそうであり、それでいて満足そうでもあるといった表情だった。

『ここでの出来事は忘れちまうんだア。でもなア、記憶には残らなくても「心」には残るんじゃないかねエのか？ また、何時かこういう日が来るかもしんねエし。最後に俺からのプレゼントだア』

そう言うと聖帝は一同を集合させる。どうやら写真を取るようだ。全員が並んだ姿を確認し、懐から取り出したデジカメで撮影をする。そして人数分の集合写真を一瞬で作成し一人ひとりに手渡して行く。

『これ位なら元の世界に与える影響は小さいだろうしなア？ そんなじゃ手短に別れを済ませてくれエ』

それからこの世界に来た面々は別れを告げあう。肩を抱きまたいつか会おうと。男性陣は固い握手を交わしていた。言葉は発する物が居ない。その握手だけで十分の様だ。

女性陣はそれぞれハグを行っていた。メイナは感極まって目に涙を浮かべており、不覚にもギンガとアギトもそれにもらい泣きしてしまっていた。

『それじゃあ、解散！！ 散れ！！』

聖帝の言葉を合図に全員が赤い光に包まれていく。謎の力によって再び元の世界に戻っていくのだった。

彼らの短い『夏休み』は終了する。それぞれが日常へと帰っていくのだ。

気が付くとキョウは海水浴場にいた。其処はフォワードメンバー達と行く筈だった場所であった。自分の隣にはギンガとアギトの姿がある。

前を向くとティアナとキャロの手を引くスバルの姿と釣りをするのが楽しみと言ってはしゃぐエリオの姿もあった。

「そうか、海水浴だったよな。でもさっきまで大勢で海水浴をやっていた気がするんだけど……」

「キョウ君も？ 私も此処とは別の場所で海水浴をやっていた気がする」

「二人もか？ 私も海で遊んだ感じがしてるぜ。ってこれ、何だ？」

アギトのギンガもキョウと同様に海水浴を行った感じがしているという。アギトは懐から一枚の写真を取り出す。其処には今まで見た事のない人間達と自分達が笑顔で写っている姿があった。

「メイナ、竜児……」

アギトが写真を見ながら呟く。

「コルト君、ツバサ君……」

ギンガも同様に……。

「ブルズ……。分かる、分かるぜ。みんなで海水浴に行ったんだよな」

キョウも自然と名前を口にしていった。三人は写真によって異世界での友人たちの事を思い出したのだ。

この写真は大切な友人と撮った物だと三人は理解する。

「キョウにい、ギンねえ、アギちゃん！！ そんなところで固まっちゃないで早くきなよ！！」

スバルの声が聞こえてくる。三人はその声に応え足を進めるのだった。彼らの二度目の海水浴が始まる。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（海編2）（後書き）

出番のバランスを考えるのが難しかったです。

今回は山編を掲載します。

こっちのクロスには柳先生、スモーク先生、いかじゅん先生の作品のキャラ達が登場します。

出来るだけ早く完成させるように頑張ります。

読んでいただきありがとうございます。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（山編1）（前書き）

予定よりも大幅に遅れてすいませんでした。色々と用事が有りまして久々の更新となりました。

今回のクロスはいかじゅん先生の『魔法少女リリカルなのは 時空の双剣士とたった一つ守りたい物』から八神刹那さんと斬月さん。

柳先生の『真・恋姫†無双〜ジョインジョインジョインキレイ〜』から二度目の登場、紀霊くん。

スモーク先生の『彼と彼女の百年物語』からヒロキ・アカギさんとリーチエ・アウラードさん。

この五名が出演してもらっています。本当に遅筆で申し訳ないです。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（山編1）

キョウ達が休暇を取った1日目の夜、ミッドの夜空に真つ赤な彗星が観測された。

それは、翌日に彼らが向かう観光地付近に落ちた。

管理局のリーダーにて観測されたが、魔力的な要素は見つからず単なる隕石だと観測していた局員達に判断される。

ミッドに彗星が現れた頃、キョウ達の住む世界とは異なった世界にも同様の彗星が観測される。

別次元のミッドチルダや、キョウ達が過ごす時代よりも1800年近く昔の時代の97管理世界、地球のユーラシア大陸にも……。

《クワガタ、カマキリ、バッタ！！ やっぱライダーは昆虫だな……

……。さてと、分身たちには頑張ってきてもらいましょうか》

彗星が落ちた世界全てで、黒いローブを纏った男が落下地点を見つめつつそう呟く。

彼は先ほど聖帝と呼ばれた、人にあらざる者たちの一人である。

この彗星を各世界に呼び込んだ張本人なのだ。

《これで準備はOKつと。こっちの世界はあの人たちか……。そういえば自力で次元を超える奴が一人居たな……。無理やり縛り上げて引つ張ってくれば良いか》

彼はそう言うと、地表に落下した隕石の中にサイダーのペットボトルとノートパソコンを持ち吸い込まれていった。七つの世界でこの

現象は同時に起こる。彼の言う『アルハズラット』とは……。

「ねえ、ティアー！！ 早く行こう！！ キョウにい達が居ない間に私達で準備を終わらせて、三人を驚かしちゃおうよ！！」

「待ちなさいよ、スバル！！ 私はアンタほど体力バカじゃないんだから」

スバルはキャロとエリオの手を繋ぎキャンプ場へと続く山道を歩いていた。スバルの背中にはデバイスに収納しきれなかった分の荷物がリュックサックに入れられ背負われていた。リュックがパンパンになる程の量が詰められていたのだが、その足取りは軽かった。日ごろの鍛錬の成果もあるのだろうが、早くキャンプ場で遊びたいという思いも影響しているであろう。彼女と同様に、手を引かれるエリオとキャロも早く遊びたいといった年相応の表情を浮かべていた。

三人の後ろから続くティアナのみが少々疲れを見せていた。荷物自体はスバルの物より少ないのだが、訓練で体力が向上しているとはいえ慣れない山道に流石の彼女も疲労の色を隠せないであろう。この場合、疲れの度合いは精神年齢にも関連しているのではないだろうか……。

その日、キヨウ達三人と新人達はミッド郊外にあるキャンプ場で休暇を楽しむ事となっていた。しかし昨夜の隕石落下の所為でキヨウとギンガとアギトの三人はスバル達と別れて現場を調査せよとはやてからの指示が下りているのである。

その隕石はキャンプ場に続く山道からほど近い山岳部に落下していた。三人は途中で別れ、調査の終了後に再び合流する事となつてるのである。

三人にとっては専門が違う分野なので、簡単な報告をするだけで良いとはやては判断したのだ。事件性は無い物なので一応現場を見て来いという程度の任務であった。

キヨウ達三人は山中に落下した隕石へと足を運ぶ。彼ら以外にも管理局員たちがおり、現場検証を行っていた。

キヨウ達の服装は休暇話楽しむための私服だった為、場違いになると判断し現場に着く前にバリアジャケットを展開していた。それでも制服を着た局員たちの中ではかなり目立っていたのだが……。

現場は一般人が立ち入らない様に結界が張られており、その結界の中心にはルビーの様に見つ赤な隕石が鎮座していた。大人一人をすっぽりと隠してしまうほどの大きさで、不可解な事に地面にはクレーターが見つからなかった。

「スングエ赤いな……」

アギトがポツリと呟く。

「確かに真っ赤だね、アギトちゃん。まるで宝石みたい……」

「可笑しくないか？ 隕石なのにクレーターが出来ていないなんて

さ

キョウはこの不思議な隕石に首を傾げていたのだが、アギトとギンガに促されそれに近付いていく。危険性が無い事とバリアジャケットを展開しているという事も有り、隕石に触れられるほどに距離を詰める。

「ぐお？」 「きゃっ？」 「うわぁ？」

三人が近付いた時、隕石からまばゆい光が放たれ周りにいた局員達は目を瞑ってしまふ。

そして彼らが目を開けた時、その場から三人の姿が消えていた。

三人が消えた瞬間、彼らが存在する次元とは異なる世界で隕石による消失事件が発生する。

一人の男が大勢の女性たちから追いかけていた。その男も彼を追いかける女性たちも皆一様に中華風の衣装を身につけている。荷馬車が行きかう城下町を駆け抜け、男は隕石が落下した付近へとたどり着く。

すると、隕石から彼の前に聖帝が道をふさぐように姿を現した。

「おい！！ どけ、社！！ 姉者たちに捕まったらお前も酷い目にあわされるぞ！！」

男は聖帝を自分の知り合いだと思い声をかける。そう、その男は紀霊。聖帝が姿を借りる司馬進の友人なのである。

《この俺を社と勘違いしているのか。来い、顕！！ 俺が逃がしてやる。説明はしてやるから安心しろ》

「なっ？ うおおお！！？」

聖帝は紀霊の手を取り彼を隕石の中へと引きずり込む。紀霊の存在がその世界から消え去るのだった。

紀霊が隕石に吸い込まれた直後、その場には四人の美しい女性が到着する。彼女達は紀霊を追いかける集団の先頭グループにいた。銀髪のショートヘアの女性、青いショートヘアの女性、紫の髪に胸にさらしを巻いた女性、赤い髪をショートにした褐色の肌を持つ女性の四人である。

「顕！！ 何処だ？ お姉ちゃんと一緒にいるのが嫌なのか！！！！」

「主よ、何処に居られるのです！！ 私とめくるめく愛欲の日々を……」

「何処に行つたんや、ウチら三人が一番乗りやと思つたのに」

銀髪の女性は華雄、紀霊の姉弟子であり婚約者でもある。青髪の女性は趙雲、紀霊の家臣であり変態の称号を得た淑女（笑）。関西弁を話す紫の髪の女性は張遼、彼女も紀霊を取りあう争奪戦に参加しているお姉さんだ。

「此処から頭の気配がする……。近いけどずっと遠くに居る。恋、ここで待つてる……」

赤い髪の女性が隕石の前に座り込む。彼女の名は呂布。紀霊の妹分であり彼に淡い想いを抱く一人だ。恋の言葉を聞き華雄は隕石を叩き割ろうとするのだが、趙雲と張遼に制止される。紀霊がこの中に居るのならいずれ出てくるであろう。それに何か刺激を与えたら善からぬ事が起こりそうだと、華雄以外の三人には感じられたのだ。それから四人は隕石の前で紀霊の帰りを待つ事にするのだった。

場面は変わり、閑静な住宅街。

よく晴れた昼下がりに、其処では二人の男女がスーパーに寄つたのか紙袋を抱えて歩いていった。彼らのいる町の風景は海鳴市によく似ていた。いや、海鳴市その物と言って良いだろう。お分かりだろうが、

彼らの住む海鳴市はキヨウ達の世界にある海鳴市とは別の物だ。この世界の海鳴市の郊外にも赤い隕石は落下している。

「ねえ、ヒロキ。今日も依頼が無かったね？ 今週依頼があったのは行方不明の猫を捜索するのが一件と、荷物の運搬の一件。たった二件だよ？」

赤い髪の少女が隣を歩く黒髪の少年へと声をかける。少年はやれやれといった表情で少女の頭を撫でる。

「それだけ平和だってことだろ、リーチエ？ それに俺達『Will Card』は便利屋だぜ？ 依頼があればどんな仕事でも引き受けるのがモットーだ。それより早く帰って食事の支度でもしようぜ？」

ヒロキとリーチエが平穏な日常を謳歌していたその時、彼らの前にも聖帝が姿を現す。聖帝は南斗鳳凰拳独特の間合いを殺す踏み込みで二人のすぐそばまで接近する。一瞬の移動はまさに『縮地』と呼べるほどのものだった。

《よし、お前ら二人も休暇だ！！ ついて来い！！》

聖帝はヒロキとリーチエの手を掴むと、一切の説明も無しに隕石のもとへと転移させる。

とっさの事で二人は抵抗する事が出来なかった。

隕石の近くまで転送させられた後、ヒロキがリーチエの手を取り聖帝から距離を空ける。彼は聖帝という不審な人物に対して警戒心を持っているようで、何時でも攻撃できるよう構えを取っていた。リーチエを自分の後ろに隠しつつ聖帝に問う。

「お前、俺達をどうするつもりだ！！ 休暇とか言ってたけど本当の目的は何なんだ！！」

《目的って、だから休暇？》

聖帝はだらけ切った様子でそれに応える。何、分かりきった事を聞いているんだと言わんばかりの表情であった。それは明らかに自分達を舐めている様子であり、ヒロキは聖帝に対して良い感情を持っていなかった。

隙あらば聖帝へ攻撃を試みようとしていたのだが、気を発しようとした瞬間、聖帝からプレッシャーが放たれた。

聖帝から放たれたプレッシャーは彼が今まで対峙した者とは比べ物にならない程の物だった。まるで心臓を鷲掴みにされた様な気さえる。

《だから休暇だって。俺は別次元の神的な存在で、お前達の世界の神から許可取ってんの！！ 分かった？》

聖帝は二人に対しダルそうにしながらよく分からない説明をする。

《今からある世界に転送させるからそこで休暇をしてきてね。転送中に説明するから！！ ほらとつとと行け、三下！！》

聖帝は乱暴にヒロキとリーチエを隕石に方へと吹き飛ばす。二人はそのままの勢いで隕石の中へと吸い込まれていくのだった。

「はやてや相棒達が家で待ってるんだから、早く調査を終えないといけませんね……。うん？ 斬月、この反応つてもしかして……」

更に別の世界では金のロングヘアを持った女性と思われる魔導師と黒い髪を持つ男性の魔導師が、赤い隕石を調査していた。

『ああ、主。主の予想通り、この隕石はどうやら次元を跳躍して此処に現れたようだ……。』

斬月と呼ばれた男性が女性らしき魔導師の問いに応える。

金髪の魔導師の名は八神刹那。こう見えても男性である。刹那は先ほど聖帝が言及していた自力で次元を跳躍する事が可能な人物なのである。

自分達の取る方法とは全く別の次元跳躍が行われていると二人は推測しており、隕石に残るエネルギー反応を調べているのだ。

刹那は隕石に触れる程の距離まで近づく。バリアジアケットを展開しており、不測の事態にも対処できるように備えていた。

だが、それでも甘かったようだ……。

「この隕石は一体どこから……。って、ふにゃ!?」

《しゃらくせえ!!》

刹那が隕石に触れようと手を伸ばした瞬間、其処に聖帝が姿を現す。

彼はどこぞのマフィアの様な掛け声で刹那の手を掴むと、隕石の中へと引き摺りこむのであった。

刹那が引きずり込まれた隕石の内部は赤い液体の入ったプールのような空間だった。見渡す限り何も無く、刹那は只一人その空間に漂っていた。

《おい、意識ははっきりしているか？ 坊主？》

彼の前に再び聖帝が姿を現し声をかける。刹那は警戒し、聖帝の動きに注意を払う。

《手荒な真似をしたのは悪かったと思う。実に申し訳なく思っている。だって、お前は自分で次元を超えられるんだろ？ 今回俺がお前を此処に連れて来たのは、異次元の人間達と休暇を取って欲しかったからなんだ》

「何を訳の分からない事を……。行きますよ、斬月！！」

『了解だ、主！！』

刹那は聖帝に対して攻撃を加えようと斬月に声をかける。この斬月、実は刹那の持つデバイスなのである。現在は人の型を取っているが、本当の姿は黒い刀身を持つ短刀なのだ。斬月は自身の姿を変化させようとするのだが、何故か変化が起こらなかった。

『どづいづことだ？』

「大丈夫？ 斬月！！ こういう時に相棒がいてくれれば……」

不測の事態に直面した刹那は八神邸で自分の帰りを待つもう一つのデバイス、裏月の事を連れてこなかった事に後悔していた。

《悪いが斬月とかいうデバイスの力は俺が封印させてもらった。休暇に物騒な力は要らないだろ？ まあ、斬月は特別に人間形態での同行を許可する。もちろん能力は制限させてもらっけどな》

「まさか、手も足も出ないだと……」

「ああ、もう！！ だったら、クアンタ！！ 《だから無駄だってお前自身の力も封印させてもらうぞ？ その力も今回は不要だ。あと、休暇が終われば元に戻してやるから心配すんなって》 ぐっ、なっ何を！？」

刹那は更に別のデバイスで聖帝を攻撃しようと試みたのだがそれも不可能の様だった。聖帝は彼の言葉を遮りつつ、掌にオレンジ色の光球を発生させる。

前に跳ねつつ拳を突き出し、その光球を刹那の腹部へと叩き込むのであった。フォームとしては八極拳の絶招歩法ぜっしゅうほほうに近いだろうか。

《その力、封じます！！》

その瞬間、刹那の身体を青白いオーラが包み込む。

「うっ……。ちっ、力が……」

《次元を勝手に越えられるのは厄介だからな。お前の世界の神に力の制限をかける許可を貰ったんだ。取り敢えず俺の話聞け》

オーラは刹那の身体を包みこむとその力と動きを制限する。聖帝は刹那の身体を自由を奪った状態で自分の目的を話すのだった。自分は此処とは別の世界の神であり、異世界の人間たちを自分たちで作った世界に集めて交流をもたせること。戦闘やしがらみから解放させ、純粹に休暇を楽しんで欲しい事を刹那に伝えた。時間がくれば拉致された直後の世界に戻るし、転移後の世界の記憶も残らないから世界に及ぼす影響も少ないだろうと話す。

余談だが、聖帝は紀霊、ヒロキ、リーチェにも転送中にこの説明を行った。ご都合主義だが、聖帝の説明を受けた人間は全員納得をするのだった。

もちろんキョウ達へも聖帝からの説明は行われる筈なのだが……。

《お前らは面倒だから、そりゃ!!》

聖帝は隕石に吸い込まれ、『アルハズラッド』に転送されるキョウ達へ両手を前に突き出し『天将奔烈』のフォームで金色の光を放つ。

問答無用で放たれた光は三人の身体を包み込む。光に包まれたキョウ

ウ達は意識を失っている様であった。

《お前らは異世界の自分の記憶を植え付けてやった。手抜きって言うなよ。これが一番手っ取り早いんだから》

聖帝の言葉と共に三人の身体から光が消え、意識を取り戻して行く。

「アンタは聖帝か……。また俺達を異世界に飛ばすんだな？」

《ああ、その通り！！》

キヨウが聖帝へ問う。聖帝はうすら笑いを浮かべつつそれに応えるのだった。

その後三人へは、他の世界の人間たちに比べて簡単な説明が行われた。アギトもギンガも異世界の自分の記憶でどのような事が起こるのか理解していたので、その事実を割とすんなり受け入れるのであった。抵抗しても無駄だし、危険性が無いという事を理解しているようだ。

《じゃあ、ぼちぼち目的地につくから楽しんできなされ。キヨウとギンガは知ってる人もいると思うから楽しみにしろよ》

「知っている人だつて？ まさかあの人か？」

「異世界から来る知り合いって、もしかして……」

「二人だけで納得すんなよ。誰だ？ 知り合いって」

三人が話している間に赤い空間に出口らしいものが出現する。それはまばゆい光を放っており、暗いトンネルから出口を覗いた様な光

景であった。

キヨウ達はその光の穴へと再度吸い込まれていく。聖帝は赤い世界の中で彼らに手を振りながら見送りをするのだった。

光を抜けるとキヨウ達はキャンプ場に似た場所へと転移させられた。そこは200m四方の広場であり、一件のロッジが建てられている。そのロッジは海水浴の際に見かけた物と酷似していた。広場には屋根つきの釜戸が設置されているスペースもあり、ごく普通のキャンプ場と言っても過言ではなさそうだった。

広場の周囲は鬱蒼と木々が茂る林になっているようで、一步踏み込めばサバイバル体験も出しそうな光景だった。三人が周囲の状況を確認している最中、その場に四つの赤い光が現れる。

そう、聖帝に呼び出された者たちだ。

「今回も聖帝に巻き込まれた人が居たんだな……」

キヨウが少しにやけながらアギトに声をかける。別次元の自分が一度経験した事態であるし、聖帝の言葉を信じる気になっているようだ。

「そうだな……。異世界の記憶と似た展開になってるし……」

其れはアギトも同様だった。彼女も何処かリラックスした表情を浮かべていた。

「ねえキヨウ君、アギトちゃん。以前と同じとは限らないから、一応警戒だけはしとかないと!!」

少々お気楽ムードになりかけていたキヨウとアギトに対してギンガが釘をさす。三人がそのようなやり取りをしているうちに赤い光は消え、四人の人間がそこに姿を現すのだった。

「いきなり転移させとか、こっちの都合も考えろよな。社、いや聖帝の野郎め……」

其処にはキヨウとギンガの二人と面識が有る紀霊の姿もあつた。聖帝に対する悪態をつきながら現れた紀霊にキヨウは駆け寄る。

「顕さんじゃないですか!! お久しぶりです!!」

「おっ? 燃え太郎くんじゃないか。ちょっと、火貸してくれ」

「その呼び方は止めてください!! あっ、はい。どうぞ」

紀霊は早速煙草を取り出す。キヨウはまるでヤンキーが先輩に会つた時の様にその煙草に火を付ける。

もちろん自身の指先からだつたが……。紀霊は転生者であり、こういつたトンデモ現象には常人よりも耐性が有るようだ。マイペースを崩していない。

キヨウと紀霊が再会を喜び合う間、ギンガが行動を起こす。

「ねえ、ヒロキ。此処って何処?」

「さっきの聖帝って野郎の話からすると、休暇用の施設なんだろ?

あの野郎、何時か絶対ぶっ飛ばす」

紀霊の隣にはヒロキとリーチエが転送された。ヒロキはふてぶてしい態度だった聖帝に対しての怒りがまだおさまっていない様だ。そんな二人に対し、ギンガが恐る恐る声をかける。ヒロキの様子にビビっているのかもしれない。

「えっと、私は陸士108部隊所属のギンガ・ナカジマ陸曹長ですけど。お二人も此処に転送されたんですね？」

「ん？ ああ、すみません。俺はヒロキ・アカギって言います。地球で便利屋の『Wild Card』を営んでる者です。そこでこっちが相棒で従業員の……」

「私はリーチエ・アウラードです。よろしくね、ギンガさん？」

ギンガとヒロキ達二人は割と良好な関係を気付けそうな雰囲気だった。一方アギトは、もっとも聖帝に被害を与えられたであろう刹那と斬月に声をかける。

何故そうだと言えるか？ 其れは刹那達二人が連れてこられた四人の中で一番疲れの表情を浮かべていたからだ。

「あなた達も聖帝に無理やり連れてこられた口ですよ。私はアギト・アーデルハイド陸曹長です。そっちで喋っているギンガと同じです。ので安心して下さいね？ お二人のお名前を伺っても？」

斬月は刹那を庇う様に立っていたが、アギトの身元がはっきりしているという事もあり危険性は薄いと判断し簡単な自己紹介を行う。

「私は斬月というしがない魔導師だ。アギトで良かったか？ よろ

しく頼む』

斬月はアギトに対し右手を差し出す。アギトはその手を取り握手を交わす。友好関係が築けるかもしれない。

「はい、よろしく願います。それで、そちらの方は？」

「はっ！？ 此処は？ あっ、私ですか？ 私は八神刹那と言います。一応魔導師ですけど、管理局に派所属していませんよ。それと、私は男です」

アギトに自分の事を聞かれた刹那は少々驚きの表情を浮かべつつ答える。しかし彼の口から出た言葉は衝撃的な物だった。

「……………はあああああ！？ 男！？」「……………」

その場に居る刹那以外のメンバーの声重なった。其れまで別々に話していたのだが、この世界に来て初めて考えが一つにまとまった瞬間だった。「その容姿で男とかウソだろ？」と……………。

「刹那さんって綺麗な人だね……………」

「確かに刹那って人は整った容姿だろうけど、俺にとってギンガが一番さ」

「キョウくん……………」 「ギンガ……………」

キョウが齒の浮くようなセリフをギンガへと投げかける。このバカップルはどの世界でも自重しないのであるつか。肩を寄せ合いイチヤツコウとし始める。

「二人とも相変わらず仲が良いみたいだな……。 (今回は姉者抜きか……。 居たら居たでギンガちゃんと乙女の妄想を繰り広げそうだし、たまには良いか)」

紀霊がそう二人に対して声をかける。その声でキヨウとギンガは自分達の行動に気付き、顔を赤らめてサツと距離を空ける。一方の紀霊は心の中で、元の世界に置いてきた華雄の事を想っているようだ。

全員、異世界でのキャンプが行われるという事を聖帝に伝えられていたのでその後はスムーズに自己紹介が行われていった。

聖帝の言葉への裏付けとして、キヨウ達三人は自分達の異世界での記憶を植え付けられたという事を話した。

刹那も自分やデバイスの力を封じる程の力を持つ聖帝に対し、不信感を持ちつつも従うしかないかと自分を納得させるのだった。

ヒロキは聖帝に対しての不信感を隠せてはいなかったが、キヨウ達の話の聞き刹那と同様に自分を納得させる。

リーチェと紀霊は聖帝に対して特に思う部分は無かったのかキャンプを早く始めようぜと言わんばかりの様子であった。

それから一同はギンガとアギトが用意していた弁当を食べ、親睦を深めていく。

「タバスコかけ過ぎだろう、リーチェ!! それじゃ、作ったギンガさん達に失礼だろう?」

「良いじゃん、ヒロキ。こっちの方がもっと美味しくなるんだから」

リーチエは辛党であり、ギンガとアギトが作ったサンドイッチに大量のタバスコをかけ、それを見たヒロキに注意を受けていた。

「良いですよ、ヒロキさん。リーチエさんもどんどん食べてくださいね？」

「自分が美味しいって思う食べ方で食べてくれて良いぜ。美味しそうな顔を見せてくれるなら作った甲斐が有ったって思えるし」

アギトもギンガもそれほど気にしていない様子であった。アギトはいつの間にか普段通りのタメ口を使用している。

「二人が良いって言ってるんだから、別に良いじゃん」

「はあ、仕方ねえな……」

リーチエの姿を見てヒロキは呆れていた。そのような二人のやり取りが更に場を和ませていき、この世界に連れてこられた一同の距離はどんどん近くなっていく。

彼らは食事を通して互いの警戒心を解いていき、このような和やかな雰囲気広がって行くのだった。

後半へ続く……。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（山編1）（後書き）

35万PV記念なのに冗談で言っていた40万にマジで食い込んで
しまいそうですorz

残す所、クロス回もあと一回で終了します。

その次はいよいよ本編が進んでいきます。

読んでいただきありがとうございました。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（山編2）（前書き）

なかなか更新できず、すいませんでした。

今回で記念クロスは終了です。

山ルートに参加していただいたいかじゅん先生、スモーク先生、柳先生にこの場を借りまして御礼申し上げます。

海ルートで協力していただいたnukosan先生、マグネス先生、イツキ先生も本当にありがとうございます。

今回はパロディてんこ盛りになっています。

メタ発言も出てきますがクロスなんで「細けえ事は良いんだよww」と笑い飛ばしていただけると嬉しいです。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（山編2）

昼食を摂り終えたキョウ達一行。彼らは聖帝によって召喚されたこの異世界でどのように過ごすかをロツジの中で相談し合っていた。ロツジの中は別次元の浜辺に建てられていた物と同様の造りであり、ダイニングキッチンと巨大な木製のテーブルが備え付けられていた。部屋の壁際には聖帝が用意したであろうアウトドアグッズが山積みされている。

「山なんだし、狩りで良いじゃん。俺は曲がりなりにも武将だから弓の腕は悪くないって思うぜ？」

「俺も紀霊さんの意見に賛成だな。こういう所でしか食べられないものだってあるし、修行時代は食べる物を自分で獲ったりしていたからさ。久しぶりに狩りをするのも良いと思ってるぜ」

紀霊とヒロキは狩りをやりたいらしく、周りの面々に其れを提案していた。二人の表情からは余裕が感じられており、その腕前は期待できそうだ。

先ほどキョウ達が周囲をサーチしてみた所、森の中には生命反応が有り狩猟する事が出来そうだったのだ。

それにロツジの荷物には“此処にいる生き物はト コクラスに美味しい物も居るから、ガツガツ狩っても構わんよ。山菜やキノコも豊富にあるし、毒が有る物はないから”と書かれた手紙が添えられていたのだ。当然、聖帝によるものである。

「俺も訓練校のサバイバル以来、ハンティングはやっていないから久しぶりにやってみても良いかな……。刹那君は？」

「私もそういつた機会はあまり無いですから、やってみたいですね」

「主も乗り気ならやってみても良いと思うぞ？」

キヨウや刹那と斬月も二人の意見に興味を示しているようで、男性陣は狩りを行う事に決まりそうだ。

「じゃあ、狩りで良いですね！！ キヨウ君も紀霊さんも経験があるなら夕飯は安心だな。必要な分しか狩りはしない様に時間は二時間位でやってみましょうか？」

「私もそれで良いと思います。悪戯に命を奪う事はやってはいけな
いと思いますし……」

『私は主のサポートをするだけだ。力が万全の状態ではないからな』

ヒロキの提案に刹那が賛成する。

刹那は聖帝によって力を封じられているらしく少々不安を抱いていたが、斬月がフォローにまわると宣言していた。刹那も彼を信頼している事が表情から伝わってくる。この主従なら問題はなさそうだと他のメンバー達は判断する。

「刹那達が大丈夫そうなら良いよな？ ヒロキ、キヨウ、インドアな現代人には負けないぜ？」

紀霊が煙草の煙でワツカを作りながら答える。彼が1800年ほど前の地球から転移させられているという事は食後にその場にいる面々へと伝えられていた。キヨウとギンガは以前彼と邂逅していたのでその説明に協力を行っていた。

「キヨウや刹那には負けなげ。気の扱いなら紀霊さんにだって負けてませんからね。誰が一番先に獲物を獲るか勝負だ!!」

「今度は俺が勝たせてもらいますよ、顕さん!! ヒロキ君にだって勝ってみせるさ」

キヨウもヒロキも勝負事になったのでやる気をみなぎらせていた。刹那も笑顔を浮かべヒロキの声に応える。

「男の人って本当にそういうこと好きだよね……。私達はどうしようか？」

男性陣の様子を見て、ため息をつきつつギンガがその言葉を放つ。リーチェもアギトもギンガと同様にあまり狩りに乗り気ではなさそうだ。

「私達は山菜とかキノコを採集しようか？ 聖帝曰く食べられない物は無いみたいだし……」

「じゃあ、私達はそうしましょうか。ギンガもアギトもお昼は御馳走してくれたんだから、夜は私も腕を振るうよ」

「リーチェも料理出来るのか!! 楽しみだな。聞いたか、男衆!! 今夜は私達三人の料理を御馳走してやるからな!!」

ギンガの代替案にリーチェもアギトも賛成のようだ。アギトは大きな声で狩りに向けてテンションの拳がっている男性陣へと其れを伝える。

男性陣の方からは「よっしゃ!!」「楽しみ!!」等の声が上が

がるのだった。彼らは完全に胃袋を掌握されているのではなからうか……。

「じゃあ、二時間後にこの広場で会おうぜ。デカイ獲物をしとめてくるから期待してくれよ」

「うん、頑張つてね。キョウ君。皆さんもファイトです」

キョウは別れ際にもギンガの頭を撫でてイチャついていた。キョウを始めとする男性陣は聖帝が用意したであろう弓を装備していた。一方のギンガ達女性陣は、同じく聖帝が用意したと思われるかごを背中にしょっている。

紀霊はバカツプルの様子に若干呆れつつも、手を振りながら彼女の応援に声を返す。

「おうおう、見せつけてくれるな……。まあ、期待していてくれよ、ギンガちゃん。（はあ、俺も姉者が一緒だったら……）」

「ドンマイですよ、紀霊さん。ああ、私も急にシグナムに逢いたくなくなってしまったよ……。でも、ここから帰れば会えるんですし楽しみましょう！！　まずは狩りを頑張らないと」

同情からか共感からか、刹那が紀霊の肩に手を置き慰める。待つ人

が居るといふ事が二人の共通点となっている。

「そつだな、刹那君。君は良い男になるよ」

「えっ、ああ。はい。ありがとうございます」

紀霊は爽やかな笑顔を浮かべるのだが、刹那は少しだけ引きつった笑顔を浮かべる。こういうノリにあまり慣れていないのだろう。だが、二人の間にはちよつとした友情が芽生えそうではあるようだ。まったくタイプの違う二人だが、以外と相性がいいのではないだろうか……。刹那の相棒である斬月はそんな主の姿を苦笑しつつ眺めていた。

「リーチエ、二人に迷惑はかけるなよ!!」

「分かってるってヒロキ!! それに私が一番年長者なんだから二人の面倒はちゃんと見るよ」

「ホントか? 不安だぜ、俺は……」

「大丈夫だ、安心しなつて!! そつちこそキョウの面倒を頼むぜ。私やギンガが居ないとすぐに無茶をしたがる奴だからさ」

ヒロキは意外と過保護の様だ。自分の目の付かない所でリーチエが何かしてかさないか不安を抱いている様である。其れをアギトが上手く宥めている様なので一先ず安心できるのではなからうか。

「よつしゃあ、みんな行くぜ!!」

「「「「おつ!!」」」」

ギンガ分を補給して更にテンションが上がったキヨウが号令をかける。他の男性陣は右手を掲げ、雄々しく其れに応える。17歳という年相応なはしゃぎ方をするキヨウも珍しいが、クールな雰囲気、刹那も声を上げているというのは珍しいのではなからうか。狩りを提案した紀霊とヒロキはみんなの親睦が深まりそうだと、顔を見合わせて笑う。

「じゃあ、私達も行くよ！！　ギンガちゃん、アギトちゃん！！　お姉さんについてきなさい！！」

「はい！！　行きましょう、リーチェさん」

「こっちは心配いらなから、楽しんでこいよ！！　男ども！！」

女性陣はリーチェが号令をかける。普段は新人達の姉というポジションに収まっているギンガは、自分よりも年長の女性と遊ぶという機会にあまり恵まれていないのでワクワクしていた。しっかり者の妹アギトが巧く二人を御するだろう。

それから男性陣と女性陣は二手に分かれて森の中へと入っていった。どちらのグループも自分の身を守る力を持ち合わせている者たちばかりだったので特に不安要素は無いようだ。

男性陣と別れたアギト、ギンガ、リーチエの三人はお喋りに興じながら森の中を進んでいった。森の中は高い木が生い茂り、足元には苔が生えている。木々の葉の間からは日の光が差し込んでおりそれほど暗くも無く、豊かな自然を堪能できるような風景が三人の目の前に広がっていた。時々、小鳥の囀りも聞こえてくる。

「なんか癒されるね、こういうの。空気も澄んでいて、気持ち良い」

リーチエが伸びをしながら歩を進める。彼女の隣にはアギトとギンガも並んでおり、三人は和気藹々といった雰囲気だった。

「本当に癒されますよね、リーチエさん。ふふっ、アギトちゃんも笑顔ですし」

「わっ、悪いかよギンガ。たまにはこういう自然にあふれた場所も良いなって思っただけだよ」

アギトが表情を指摘され、若干照れながらギンガに答える。

「笑っちゃってごめんね、アギトちゃん。確かにミッドは発展していて、こういう風景には出会えないからね」

ギンガが頬笑みを浮かべつつ謝罪をする。アギトも本気で怒っていない訳ではない。幼馴染同士で軽口を叩きあう様なちよっとしたスキンシップなのだ。

「こつて前にテレビで見た、狼に育てられた少女が出てくるアニメの森の中みたい。大きいイノシシとか出てきたら私達で捕まえようよ」

「えっ、そんなアニメが日本には有るんですか？」

リーチエの言ったアニメの話にギンガが喰いつく。ミッドと地球では似た部分も多いが、流石に宮 アニメは放送されていないのだ。

「うん。金曜日の夜にたまにやってるよ。私は森の中に住む妖精と小さな女の子が交流する話が一番お気に入りだけどね」

「ふん、デカイイノシシ位なら私達でも余裕じゃねえの？ イノシシって意外と臭いは無いみたいだし、栄養も豊富だから夕飯には良いかもな」

「良いねえ、アギトちゃん！！ それならギンガちゃんの胃袋も満足できるだろうし」

リーチエとアギトは巨大イノシシ狩りをやってみみたい様だ。この森に巨大イノシシが居るかどうかは激しく疑問であるが……。

「もう、リーチエさん。私は普通の女の子より少しだけ食が太いだけですよ。そんな大食いみたいに言わないでください。それにアギトちゃんも笑わないでよ」

「はははっ、ごめんな。それよりなあ、ほら。あそこに有るのってキノコじゃねえか？ サバイバルで食べられる種類って習ったろ？」

「あつ、ホントだ。ほらギンガちゃんも行くよー!!」

「うう。分かりましたからリーチェさんは手を引つ張らないでくださいよ」

ギンガに突つ込まれていたアギトだが、視線の先にきのこの生えた木を発見し其方へと移動する。ギンガもリーチェに手を引かれて其処へと向かうのだった。二人により強引に話題を変えられてしまったのだが、ギンガは楽しそうであった。

それから三人は森の中の食材を三つの籠がいつぱいになるまで採集する事に成功する。何気に強運な三人組である。

暫らく森の中を進んだ後、アギトが再び何かを発見する。

「なあ、二人とも。あつちに有るのって花畑じゃないか？ まだ時間もあるし行ってみようぜ？」

「良いね、そこで集合まで時間つぶしますか？」

リーチェは目を輝かせて賛成する。

「久しぶりに花畑で遊ぶのも良いね。私も賛成!!」

それはギンガも同様だった。

アギトが発見した花畑は森の木々に囲まれる中、開けた場所に広がっていた。森の中は割と明るめなのだが、その場所だけは木々の葉に日光を全くと言って良い程遮られていなかった。

桃色の花弁を五つ付けた桃色の花が一面に広がり、桃の様な甘い香りを周囲に放っている。

リーチエはアギトと共に花のじゅうたんの中に飛び込み、ギンガは母のクイントの様に二人を見守る様にその傍へと腰を落とすのだった。

「久しぶりに花の冠でも作ってみようかな？」

「それ良いな。私もやってみるか、クイントさん直伝の腕も鈍らないようにしたいし」

ギンガとアギトは幼い頃クイントに習った花飾りを作成するつもりのようにした。

「二人ともそんなの出来るの？ 私にも教えてよ」

当然リーチエも参加する事になる。三人は周りに広がる桃色の花で冠やブレスレット等を作り始める。初めてのリーチエに対し、アギトとギンガは見本を見せたりしつつ作り方を伝授していく。

完成すると三人はそれぞれ自分が作った物を頭に飾り、それから男性陣へのお土産用にも幾つか作成するのだった。

「よっし、完成!!!」

三十分ほど経過し今まで作っていた花飾りが完成すると、リーチエは胸を張って立ち上がりその出来栄をギンガとアギトに見せつける。「へへん!!!」と言わんばかりに得意げな表情だった。

「リーチエ、上手になったな!!!」

「本当だよ。もう私達で教える事は無いね」

アギトとギンガは素直に彼女の腕前を褒める。事実リーチエは短期間で上達していったのだ。元々器用なのだろう。

「へへっ、でしょう？ これはヒロキにプレゼントしてあげるんだ」
童心に帰った様にリーチエは無邪気な笑みを顔に浮かべる。誉められて喜ぶ彼女の笑顔を見て、ギンガとアギトにも笑顔が広がる。それから三人は集合時間までの間、この花畑で仮眠をとるのだった。

一方の男性陣はというと……。

「なっ、なんだ〜!! あの化け物は!!」

紀霊の叫び声が聞こえる。彼の後ろからは20mほどある巨体に黒い鱗、二本の角と翼を持った龍が地響きを立てながら追いかけてきた。紀霊は時折「ナギッ!!」という声とともに龍の前足による攻撃などを巧く回避し続ける。

「なっ、何でアレがこんな所に!？」

キヨウはその龍を見た瞬間、驚きの表情を浮かべる。紀霊に襲いかかる龍、其れはキヨウが訓練校時代に対峙した龍と瓜二つだったからだ。当時、逃げるのがやっとだった怪物と再び相まみえたのでその時の恐怖が蘇ってしまい立ち竦む。

「キヨウ、あの龍を知っているのか？」

顔色の悪くなったキヨウに対し、彼の隣に立っていたヒロキが心配そうに声をかける。

「話している余裕なんてないですよ!! 紀霊さんを助け出して一度距離を取りましょう!! 斬月、フォーローをお願い!!」

刹那と斬月は冷静さを失っていないかった。刹那は一人だけ飛行能力を持たない紀霊を助け出そうと、斬月に指示を出し龍の方へと向かう。

『了解だ、主!! キヨウ、ヒロキ!! お前達もぼさっとしてないで手伝ってくれ!!』

「はっ? ああ、分かった!! すまない、斬月さん。ヒロキ、俺達も行こう!!」

龍の姿を見てトラウマが発症し立ち竦んでいたキヨウは残月の声により気が付き、紀霊を救出するために行動を開始する。

「大丈夫か、キヨウ? 無理はすんなよ」

少し様子がおかしいキョウをフォローしようとヒロキもキョウと共に紀霊の方へと飛び立つのだった。

「斬月、行くよ」 『承知した、主!!』

刹那は斬月を刀の姿に戻し、空中から龍へと攻撃を試みる。斬月が変化した刀の刀身に魔力がチャージされていく。その量は聖帝に力を制限されているとはいえSランクに届く程の物となっていた。

「月牙天衝!!!!!!」

刹那が逆袈裟気味に斬月を振るうと彼の身長の三倍程ある巨大な魔力の塊が龍に向け放たれた。まるで砲撃魔法とも思えるその斬撃を龍は頭に受け、動きが鈍る。

「今のうちです!! キョウ君、ヒロキ君!!」

「サンキュー、刹那!! いくぜ、キョウ!!」

「ああ。顕さん、手を取って!!」

刹那からの合図でキョウとヒロキは紀霊の両手を掴み空へと飛び上がる。その間も刹那は単独で龍に対し攻撃を行っていた。

「早く助けてくれ、俺はお前らみたいに飛べないんだから!!」

紀霊にはまだ軽口を叩けるだけの余裕が有る様だった。魔法が無い

世界出身だが、日頃からチート掛かった強さの姉妹弟子たちと訓練を行っていた彼の身体能力は恐るべきもので有るようだ。

刹那と斬月のコンビが龍に対して攻撃を放って時間を稼ぎ、その間にキョウとヒロキが紀霊に接触するという即席のコンビネーションは無事に成功する。キョウ達は紀霊と共に龍から距離を取る。

「顕さんは怪我とかないみたいですね？」

「ああ、お陰様で何とか……。それにしても何なんだよ、あの龍は？ いきなり現れやがったしこれも聖帝の仕業か？ アレを弓で倒すのはモンンでもない限り無理だわ」

「取り敢えずベースキャンプに近付かせないようにしないとな。一度刹那君達と合流しよう！！」

それから三人は空中から岩場を見つけ、そこを集合場所にしようと刹那に念話を送り移動をする。刹那も深追いはせず、隙を見て合流すると念話を送り三人と別れるのだった。

「ふう、かなりタフな相手ですね。力が万全に使えない事は本当にもどかしいです」

『そうだな、主。それにあれほどの龍なら蒐集した場合、かなりページが埋まりそうだ』

キヨウ達から遅れて数分、刹那と斬月は無事に集合場所へ到着する。斬月は人型に戻っており、二人とも怪我等は無い様だった。

集合場所に着いた二人が目にしたのは龍に対するトラウマで、らしいくない様に怯えるキヨウの姿だった。ヒロキはキヨウの肩に手を置き励ましている最中のようだ。

「もうダメだ……。おしまいだ……。殺される、みんな殺されるぞ……。アイツは伝説のスーパースーお前は何処の野菜王子だよ!!」
「そげぶっ!?!」

弱音を吐くキヨウに対し、紀霊がツツコミを入れる。彼の放った拳がキヨウの左ほほに吸い込まれ、キヨウは二三歩程後退してしまう。ナチュラルに突っ込みつづも「何故この場に転生キャラは紀霊しか居ない。紀霊は突っ込みつづも「何故このネタをキヨウが知っているんだ」と疑問に思っていた。だが、大かた聖帝にでもネタを仕込まれたのか、トラウマによって暴走しているだけだろうと紀霊は自分の中で結論を出す。

「なあ、キヨウ。あの龍って何なんだよ。教えてくれないか? 其れに今のお前の情けない姿を見たら、ギンガちゃんは愛想を尽かすんじゃないか? ギンガちゃんやアギトちゃん、リーチエを守る為

にもアイツを俺達で倒そうぜ!!」

キヨウを慰めていたヒロキがそう声をかける。ヒロキの身体からは『気』のオーラが溢れており戦闘態勢が整っていた。同様に、紀霊は『闘気』を刹那は『魔力』を身体に纏わせ彼の言葉に同意するよう頷く。

「何故だ、勝てるわけがないよ……。何故分らない」「歯くいしばれ!!」「あべしっ!!」「諦めてはダメです!!」「たわばっ!!」「俺たちがやらなきゃ誰がやる!!」「ひでぶっ!!」

なおも弱音を吐くキヨウに、紀霊、刹那、ヒロキの順で拳をお見舞いしていく。右左右と両頬に三発のパンチが決まる。戦闘状態の三人のパンチを食らったキヨウはその衝撃で後ろに倒れ伏してしまう。

「お前一人で闘う訳じゃないんだ」

紀霊が……。

「俺達が力を合わせればきっと勝てるさ」

ヒロキが……。

「力を借りることは恥ではないですよ」

刹那が……。

三人がキヨウに向かい手を差し伸べる。その場の空気がスポコンの様になってしまっており、斬月は今までにない程の居心地の悪さを感じていた。

「ありがとう、みんな！！　そうだよな。俺達正義のアイドル超人の友情パ」だからそういう発言はやめろって「ぐおっ！！　何をする紀霊マンビッグボデイ！？」

キヨウの暴走はまだ治らないらしい。それでも先ほどよりも落ち着いていたので四人は彼からあの龍の情報を聞き出すのだった。キヨウはその際も紀霊マンビッグボデイやらヒロキマンゼブラ、刹那マンスーパーフェニックス、斬月マンソルジャー等と訳のわからない呼び方を続けていたが4人は突っ込む事に諦めてしまいそのまま続けさせた。

「って訳だ。アレより小さい個体でも、飛翔の神の力を借りたこのクサ雑マンマリポーサが逃げるだけで精一杯だったんだ。でも俺達ならやれるさ。いや、やってやるう！！」

話している間に勇気がわいてきたのか、キヨウは普段の調子を取り戻す事に成功する。一部でどうしようもない事になってしまっているが……。

彼が話を終えた時、その場に「MUSCLE」という単語を一文ずつばらしたハスキーな歌声と、トランペットとシンセの伴奏というBGMが流れてくる。キヨウ以外の四人は嫌な予感がしていた。こんなアホな登場をする人間はヤツしか居ないと分かってしまったからだ。

『貴様は聖て「聖帝カメハメ！！　いや、聖帝マングレート！！」はあ……。キヨウ、いい加減にしてくれ……』

斬月の声を遮り、キヨウが聖帝へと声をかける。斬月はこめかみに手を添えて呆れていた。

《ああ、ごめんな。コイツ異世界の電波を受信してちょっとおかし
くなってるな。すぐに直すから。俺の子の手が光って唸る（中略）
目を覚ませ、キヨウ！！ シャイニン・フィンガー！！》

聖帝は姿を現すと同時にキヨウの頭を掴み、謎のエネルギーを流し
込む。其れによりキヨウはようやく正気を取り戻すのだった。キヨ
ウが元に戻った事で4人はホッと胸をなでおろす。

「それで聖帝さんよ、何しに来たんだ？ 俺たちをこんなトコに攫
ってきておいて」

聖帝に対し警戒心を持っているヒロキが彼をにらみつつ口を開く。
聖帝により力を封じられた刹那と斬月も同様で、何時でも攻撃がで
きる様に身構える。

《別に取って食う訳じゃないんだし心配しなさんなって。俺はこれ
を持ってきただけだ。ほら紀霊君、受け取りな！！》

聖帝は何処からともなく三又の槍を取りだすと紀霊に向けて其れを
投げ渡す。

「って危ねえ！！ ん？ これって俺の得物の『三華尖』じゃねえ
か」

《それと刹那君にはこれだ！！》

「えっ？ これって？」

聖帝は再び何も無い所から武器を取りだし、今度は刹那に向けて投

げ渡す。彼が投げた武器は身長ほどの長さの青い刀身に緑色の刃の付いたバスターソードだった。

《GNソード？だ。クアンタは今回お休みしてもらうからコイツを使ってくれ。べつ、別に部屋に飾っているクアンタフルセイバーを眺めていて作ったわけじゃねえから。力の制限は解かないけど、これで其れなりに闘えると思うぜ？ 『月牙天衝』も撃てるし、斬月と融合できる様になっているから》

聖帝は刹那に用意したGNソード？の説明をする。この剣自体は只の剣で有り斬月の力を増幅させる機能が有るだけだと。戦闘時は刀モードの斬月と融合させる事により機能が万全に使えると伝えた。と言ってもビット機能はオミットされており、巨大なバスターソードとしてしか使えないらしいのだが……。

続いて聖帝は紀霊に『三華尖』の説明を行う。今回渡した物は紀霊が日ごろ使用している物の力を引き出した『真・三華尖』と呼べるものらしい。

インテリジェントとデバイスの様に会話する力も持っているそうだが、ただし紀霊との間のみだが……。

《鯽じゃないが、刀と会話して上手く使いこなしてくれ。あれだ、昔マガンに載ってたKYOみたいな感じ！！ 身体能力や技の威力が上がるから注意しろよ。つゝか、槍だから紅虎っぽくってカツコよくな？》

「ああ、あれか。知ってる知ってる。じゃあ、よろしくな三華尖！
」

紀霊は早速三華尖に話しかける。しかし返ってきた声はそっけない物だった。

……よろしく……

何処のファーストチルドレンだって感じの女性の声が紀霊の脳内に響く。

《お前の世界の神からリクエストで、クーデレってヤツにしてくれって頼まれたからさ。お前の周りじゃ恋ちゃん位しか居ないから新鮮だろ?》

「あつ、ああ……。刹那と斬月に負けない様に頑張ろうぜ、三華尖?」

……ええ……

会話が続かねええええええ!!

紀霊は三華尖との距離の取り方に戸惑っていた。

「それで、聖帝さんよ。あの龍が現れたのもアンタのせいなんだから?」

ヒロキが肝心な話題を切り出す。其れに対して聖帝は飄々としながら説明するのだった。

彼の話によるとあの龍は非常に旨い肉を持っているらしい。何でも聖帝の友人とト コの話をしていてジュエルミートが喰いたいって盛り上がった際にあの龍を産み出したととんでもない裏話を暴露する。

《だから、アレを夕食にしてくれ。言っ飛ばせばあの龍は全身ジュエルミートみたいなもんだから。命を奪うのが嫌なら尻尾だけ切

つても十分な量になると思うぜ？ 修行時代の悟飯みたいにな。今のお前達でも十分倒せるから自信持てよ！！ あと、俺様が回収しとくから後始末は任せろ！！」

聖帝はまた自分勝手に話を進める。キョウ達はもう諦めるしかない。と覚悟を決めるのだった。戦力自体は彼からもたらされた武器などで上昇している。彼らはその場でいかにして龍を倒すのか作戦を練るのだった。

《それでイケると思うぜ？ じゃあ、ちょうだいな！！ バイバイ！！》

作戦が決まると、聖帝は言いたいだけ言った後に手を振りつつ消えていく。その場のメンバーは「やっといなくなったか」と心の中で声を揃えるのだった。

「じゃあ、龍退治に行きますか！！」

「「「おつよ！！！！」」」

紀霊が三華尖を掲げ号令を取る。三華尖は紀霊の声に反応し、刀身からまばゆい光を放つ。刹那は斬月とGNソード？を掲げ、キョウ

とヒロキは右手を掲げて其れに応えるのだった。

それから四人は龍の元へと移動する。龍は刹那によって足止めされた位置からあまり動いてはいなかった。これぞ都合主義であるが、この世界自体ご都合主義で出来ている様なものだから仕方がない。

「一気に決めるぜ!! キョウ、紀霊さん頼みますよ!!」

「了解だ、ヒロキ!!」

「お兄さんに任せなさいって。やるぞ、三華尖!!」

………了解した………

初めにキョウと紀霊が龍の正面に降り立つ。

「うおおおお!!!!!!!!!!」

キョウは右手を掲げ魔力と炎を練り上げる。お分かりであろう。彼の得意技で単体では最強の威力を誇る『草薙流奥義・大蛇薙』である。何の因果か、相手は蛇の上位種とも呼べる龍である。キョウは以前観た瞬火の『大蛇薙』に匹敵する程の力を込めるのだった。

「喰らいやがれええええ!!!!!!!!」

キヨウは自身の身体を覆い隠す程の炎の塊を龍の頭に向けて叩きつける。キヨウの放った『大蛇薙』は龍にダメージを与える事に成功する。龍はその炎に焼かれ、痛みにより転げまわるのだった。キヨウはその間に空へと舞い、龍の攻撃範囲から抜ける。

「前観た時とは比べ物にならない位パワーアップしてるな。今戦ったら勝てるか分からねえ。って、そんな事より俺も攻撃だ!!」

……マスター、私は何時でも行ける……

「やるぜ、三華尖!! 臨・兵・闘・者・皆・陳・列・在・前!!
(一回この技をやってみたかつたんだよね)」

紀霊はキヨウが攻撃を放って出来た隙に三華尖を構え、九字を唱える。彼が九字を唱えるとその姿は八つに分身し、龍の身体を取り囲む。

「見よう見真似『神影流秘奥義 裏・八寸』!! うおおおらあ
あ!!」

分身した紀霊は龍に向かい残像が残る程のスピードで一斉に突きを放つ。紀霊の身体は音速の壁を超え龍に衝撃波をぶつけるのだった。攻撃を喰らった龍は目に見えない衝撃波によって内臓を傷付けられたのか、口から大量の血を吐きだす。

「お前も聞いたろ、風の声をつてね。ヒロキ、刹那、頼んだぜ!!」

「顕さん、手を!!」

「おう、サンキュー!!!」

紀霊は龍の後ろから空中に浮かぶヒロキと刹那に合図を送る。今回の作戦はキョウと紀霊が地上から龍の動きを鈍らせ、空中からヒロキと刹那の攻撃で止めを刺すという物だった。キョウが紀霊の手を取り空に浮かび上がる。

「あのサイズなら思いっきり打たないと通らないだろうな。はあああああああ!!!!!!」

ヒロキは開いた両手を腰の右に合わせる様に添えて魔力をチャージする。彼の手の間からはまばゆい光が放たれ始める。

「か〜め〜は〜め〜」

ヒロキは両手を身体の前に突き出す。説明は不要だろう。幾度となく地球の危機を救った宇宙最強の格闘家の必殺技だ。

「波あああああああ!!!!!!」

なのはの『エクセリオンバスター』に匹敵、いやそれ以上の砲撃が龍に襲いかかる。ヒロキが放つ魔力の奔流は龍の背中に叩きこまれる。攻撃により龍の身体は10mほど地面にめり込む。龍はその痛みにより苦悶の声を上げるのだった。

「最後は私達に任せてください!!! イケるよね、斬月?」

『ああ。この姿には慣れないが、問題は無いぞ。主よ』

刹那は斬月と融合したGNソード?を青眼に構え、魔力を込める。

刹那の周りでは彼自身の魔力と聖帝に渡されたGNソードと斬月の力によつて魔力が竜巻の様に駆け巡るのだった。

「これならやれそうですね！！ 行きます！！ 月牙天衝！！！！！！」

刹那が振り下ろした剣から20m程の斬撃が放たれる。音を置き去りにする程のスピードで斬撃は龍の尾の付け根へと飛んでいく。そしてその斬撃は龍の尾をバツサリと切断するのだった。余りの切れ味に傷の断面からは遅れて血が流れ始める。その斬撃の余波により地面には深い亀裂が刻まれるのだった。

刹那の技で尾を切られても尚、龍は暴れ続けていた。痛みにより凶暴さが増しているようにも見える。ヒロキと刹那、人型に戻った斬月が切断した尾を回収した後、空中で待つキョウ達と共に龍の様子を窺うのだった。

《よくやったな、お前ら。そんじゃコイツは持ち帰るから！！》

そんな時、彼らの前に音も無く聖帝が現れる。今回はBGMは無いようだ。

《あとGNソードと三華尖も回収しまーす》

聖帝が指を鳴らすと龍の姿は初めから無かったように消え去る。同時に紀霊の持つ三華尖、刹那の持つGNソード？も書き消える様に姿を消すのだった。

《後は迎えまで現れないから。そんじゃ楽しんでな》

一言言い残し、聖帝は再び姿を消すのだった。本当に勝手過ぎる。

もうヤダ、アイツ……。

五人とも勝利の余韻より聖帝の傍若無人さに辟易していた。それからキヨウ達五人は龍の皮を剥ぎ、調理しやすい様にぶつ切りにして持ち帰るのだった。

収納はもちろん、シャーリーにより格納領域を改造されホイイカプセルの様に使用できるキヨウの『フランメ・ファウスト』によって行われるのだった。

「便利ですね、キヨウ君のデバイスは……」

「だろ？ まだまだこんなもんじゃないけどな」

キヨウは呆れ交じりの刹那に対して、得意げに答える。

「激しく使い方を間違ってる気がするけどな……」

『同感だ、ヒロキ……。』（良かった。主が真似したいとか言い出したら私はデバイスを辞めていたかもしれない……）

斬月は刹那の様子を見てほっと胸をなでおろすのだった。

それから五人は元来た道を戻りベースキャンプへと移動する。龍との戦闘で時間もちょうど良い頃合いになっていたのだ。

男性陣から遅れる事10分、女性陣もベースキャンプへ戻ってくる。それぞれのように行動したかを話したが、訓練校時代に遭遇した龍と男性陣が再び対峙したという話を聞き、ギンガとアギトは

非常に驚いていた。

「アレと闘ってよく無事だったな？　アレと遭遇するなんて災難以外の何物でもねえよ」

「皆さん怪我がない様でなによりです。正直アレとは二度と闘いたくないですから……」

アギトとギンガの言葉に男性陣は首を縦に振り同意する。しかし、その場で龍の姿を見ていないリーチエだけが違う反応をしていた。

「良いなあ〜！！　私もその龍と闘ってもみたかった！！」

「冗談じゃねえよ……。このメンバーでも仕留めきれないとか、俺は勘弁だぜ……」

リーチエの保護者としてヒロキが彼女をなだめる。しかし彼の眼は本気だった。本当に闘いたくないらしい。

「キヨウ君がその龍の肉を持ち帰っているから、其れを夕飯にしましょう。聖帝の言葉通りだとしても美味しいでしょうから」

「其れホント、刹那？　なら良いや。今夜は私とアギトとギンガが腕を振るうからね！！　ん〜、楽しみだな。ちょっと見せてくれないう？」

リーチエの興味はその龍の肉に移ったようだ。其れにはヒロキも苦笑いをしてしまう。

「ああ、良いぜ。ほら」

キヨウはデバイスから獲得した肉を取り出す。その肉は赤身のみだがキラキラと宝石の様な光を放っていた。聖帝の言っていたジューエルミートという言葉に相応しい肉だった。

「肉は良いけどさ。まだ夕飯には時間が有るし、何か遊びをしないか？」

「私も紀霊さんの意見に同意します。せつかくの機会ですし童心に帰って楽しみたいとも思いますから……」

肉を眺めている女性陣とキヨウ、ヒロキ、斬月に対して紀霊と刹那が提案する。斬月は相変わらず刹那を守る様に傍らに立ってるのかと思われたが、肉を眺める輪に加わっていた。

「じゃあ、収穫した食材をキッチンに運んでから、何かレクレーションでもやりましょうか？」

肉を持っていたキヨウの声で一同はその場を移動し始めるのだった。その際、女性陣が作った花の飾りが男性陣に手渡されていく。男性陣は皆、思いがけないプレゼントに頬が緩むのだった。

それからこの場に居るメンバーでバドミントンが行われる事となった。ロッジの中には聖帝が羽とラケットを用意していた様なのだ。チーム分けはじゃんけんによって決められる。

キヨウとアギト、ギンガ以外のメンバーは地球組でありじゃんけん

がどのような物か知っているので三人にレクチャーを行うのだった。決まったペアはキヨウ・刹那組、紀霊・ヒロキ組、アギト・リーチエ組、斬月・ギンガ組という組み合わせになった。

「草薙流古武術、キヨウ・アーデルハイド。参る！！」

「赤城一刀流剣術、ヒロキ・アカギ。行くぜ！！」

「北斗神拳に死角は無い。紀周英、ユクゾー！！」

「この流れはキツイですよ。誰か変わってください！！」

初めは所謂主人公組の対戦だった。彼らの仕合は気や魔力が使用され、どこのテニヌだよと言いたくなるような内容だった。コートはスマッシュの余波でえぐれ、強化された羽は音速に達する。

羽はスピアを用意されていたのだが次々とダメにしてしまう。結果はキヨウ・刹那ペアの勝利で終わった。刹那以外の三人が必殺技の様なスマッシュしか打たなかったのだが、彼が最後の良心となり点を決めていたからだ。勝利の決め手は悪乗りしない自制心というイマイチ締まらない物だった。

その後、他のペアの試合も行われたのだが優勝したのは斬月とギンガの常識人コンビだった。アギト・リーチエ組も悪乗りして必殺技を使用していたがギンガと斬月は冷静に撃ち返し点を決めていったのだ。キヨウ・刹那組との戦いでは純粋な技量の差で勝利を収めるのだった。

スポーツで汗を流した後、一同はそれぞれ手に入れた食材を使い夕飯を作っていく。

ロッジの中にキッチンが有ったのだが、外には炊事場も有ったのでせっかくだからそこを使おうという事になった。

こうだった場合は火起こし等が重労働になるだろうが、訓練校時代の友人たちに「一家に一人欲しい」と言わしめたキョウの存在が有ったのでその辺は楽チンだった。

キョウは闘い以外で自分達の力が役に立つという事をとても気に入っているので、憎まれ口を叩きつつも進んで作業していく。

料理は得意だと申し出た紀霊とギンガ、アギト、リーチエによって調理が行われた。その間、刹那、ヒロキ、残月の三人でロッジの中から机やいすを運んだりなどの会場設営を行った。

「……完成!!」「」「」

調理開始から二時間程たった時、紀霊とアギト、ギンガ、リーチエの声が挙がる。夕飯の献立はジェルミートっぽい肉で作られたローストドラゴンと、回鍋肉、山菜とキノコを使ったスパイシージャンバラヤ風炒飯という物だった。

誰が何を作ったかは想像がつくだろう。

『うむ、うまそうだな。はやてが作る料理とはまた違った趣が有る』

「ギンガとアギトの料理の腕前は昼に食べた弁当で分かっているだろう、斬月?」

『そうだな、キョウ。だが、意外だな。紀霊とリーチエも料理が出

来るとは……』

キヨウと斬月は先にテーブルに着き料理を話題に雑談していた。彼らの向かいにはヒロキと刹那も腰掛けている。

「本格的な中華がこういう場所で食べられるなんて思いませんでしたよ」

「まあ、本場から来てるからな。味も保障するぜ？」

刹那の呟きに料理運びつつ紀霊が答える。調理場からは「見かけによらず凄く手つきが良かった」などの声が聞こえてくる。実際、彼の調理場での動きをみて女性陣は評価していたのだ。

「辛さが足りなかったら言ってね。ちゃんとスパイスも持参してるから」

リーチエがジャンバラヤを机に置き、懐からタバスコの瓶や香辛料の入った筒を取り出す。

其れを見てキヨウ、斬月は引き笑いを浮かべてしまう。

「安心してくれよ、みんな。リーチエは辛党だけど料理の腕は凄いらんだぜ？」

「そうだが、ヒロキの言う通りだ。リーチエの手際も凄く良かったからな」

「だよな、紀霊さん。食材の扱いも凄く丁寧だったし」

「うん。母さんと匹敵するほどの腕前だったよ。私やアギトちゃん

「じゃ敵わない位だもん」

ヒロキ、アギト、ギンガ、紀霊の4人がリーチエを擁護する。リーチエは4人に褒められて満更でもない様子だった。

「あの、スパイス貰えます？」

此処で想いもしない言葉を発する人物が一人……。刹那である。彼はどうかやら辛党の様だ。

「辛い料理の素晴らしさを分かってくれる人が居るなんて私、感激だな。良いよ刹那！！ どうぞ」

リーチエは『死』と書かれた瓶を彼に手渡す。二人の姿を見て他の面々はドン引きするのだった。

それから一同は席につき食事を開始する。夕飯に並んだメニューはどれも素晴らしい出来で、全員で「美味い！！」と声を上げつつ食事が進んでいった。

共に過ごした時間の分だけ一同の距離は近付いたようで、和気藹々といった雰囲気ですべてが進んでいった。

其れでもギンガの食事の量は目を引いていたのだったが……。

同様にタバスコや香辛料を大量に消費する刹那とリーチエも注目の的になっていた。

食後のデザートには女性陣がキノコや山菜と共に採ったリンゴ等の果物が机に並んだ。どれも普段食べる物とは比べ物にならない程の美味しさを発揮していた。

食事が終わると全員で片付けが行われ、元の世界へ帰る支度が始まる。聖帝の言葉ではその日のうちに元の世界に帰る事になるからだ。キヨウとギンガも前回の経験でその事を理解していた。そこで、指定が現れる前に記念撮影を済ませておこうと一同に提案する。

「写真なんて撮るのはホント久しぶりだぜ」

「紀霊さんの時代ならしょうがないっしょ」

「だよな、ヒロキ。ほら、刹那君も笑顔笑顔」

「ハハハッ。そうだよな、キヨウ君（皆さんを見てるのは本当に飽きませんね）。ってヒロキ君も紀霊さんも押さないですよ」

刹那はいつの間にか敬語ではなくタメ口で話すようになっていた。そんな彼の姿を見て、新月は子供の成長を喜ぶ親の様な優しい笑顔を浮かべるのだった。

「タイマーのセットはOKだよ！！　ギンガ、アギト！！　間を空けて！！！」

シャッターを押すのはリーチエの役割だったようだ。彼女はアギトとギンガの間に走って入り込む。

「きゃあ、リーチエさん！！　勢い付け過ぎですよ！！！」

「うわあ！！　押すなって！！！」

ギンガとアギトはリーチエにより体勢を崩してしまう。其れにより

密集していた男性陣も将棋倒しの様に体勢を崩す。一同がおかしなポーズになっているその瞬間にカメラのシャッターが切られるのだった。

その後で撮り直しも行われるかと思われたが、この写真の方が自分達らしいという紀霊の意見により其れは行われなかった。

実際に写真を見たメンバーは皆、そこに写る自分達の姿に笑いを堪えきれなかった。

こうして一風変わった思い出の品が誕生した。

記念撮影が終わってすぐ、聖帝が空気を読んだ様に現れ、写真を人数分用意する。散々彼のチート能力を見せつけられていたので誰も突っ込む事は無かった。

《俺の力に常識は通用しねえ！！ 楽しんでもらえたか？ この休暇を》

今回の聖帝は学園都市の第2位に影響されているようだ。

「ああ。思いがけない再会も出来たし、新しい友人たちとも知り合えて楽しかったぜ」

「私もそう思うぜ。初めてだったけどスツゲー楽しかった！！」

「私も二人と同意見だな。またみんなで遊びたいもの」

キョウウ達三人は大満足の様だった。

「初めは戸惑ったけど皆いいヤツらだし楽しめたぜ。なあ、リーチエ？」

「うっ、うん。でももうお別れか……。寂しいな……」

ヒロキも同様に満足げだったが、リーチエは寂しさを隠せない様子だった。

「安心しな、リーチエ。俺だってキョウ達と会うのはこれで二度目なんだから、もしかしたらまた会えるかもしれないぜ？ 次は姉者も一緒だと最高だけどさ。其処ん所頼むぜ、聖帝さんよ」

この場の最年長らしく紀霊がリーチエを上手く励ます。

「力が制限されて不憫だとは思いましたが、今回の様な場面では力なんていらなんて思いましたよ。楽しめました」

『主がこう言っているから私は特に言う事は無いな。でも。まあ。楽しくは有った』

刹那も満足そうだった。斬月は似合わないツンデレの様なリアクションを取っていたが、楽しんでいたようだ。

それから全員はハグし合い、別れのあいさつを行う。

《じゃあ、もう行こうか？ もしかしたらまた会えるかもしれないから、その時を楽しみにしとけよ！！ 以上、解散！！ 散れ！！》

聖帝の言葉を合図に全員が赤い光に包まれていく。謎の力によって再び元の世界に戻っていくのだった。

彼らの短い『夏休み』は終了する。それぞれが日常へと帰っていくのだ。

気が付くとキヨウはキャンプ場に続く階段の途中にいた。其処を登った先はフォワードメンバー達と行く筈だった場所であった。自分の隣にはギンガとアギトの姿がある。

階段はもう終わりに近く、その上に有るキャンプ場からはスバルやティアナ、エリオやキャロの楽しげな声が聞こえてきていた。

「今回は記憶がそのままみたいだな。それに海に行った時の記憶までも残ってるもたいだ……」

キヨウは胸元から二枚の写真と花飾りを取り出しつつ呟く。其処には先ほど撮った山での写真と、記憶に残る海での写真が有った。どちらの写真も笑顔でいっぱいの楽しげな写真だった。そして桃色の花は優しい匂いを放っている。

「さっきまでののは夢だったのか？ 紀霊にヒロキに刹那。リーチエに斬月と過ごした時間は……」

キヨウの後ろからは戸惑いを含んだアギトの声が聞こえてくる。

「夢じゃないよ。あの瞬間、みんなあの場に居たんだ。そうだよね、キヨウ君？」

ギンガが優しい笑みを浮かべてキヨウの顔を見つめつつそう口を開く。

「そうだが、アギト。夢じゃないさ。それに、何時かまたみんなで騒げるかもしれない。聖帝次第だけどな……」

「そっか。うん！！ よっし、じゃあ今度は私達の世界での休暇を楽しみますか！！ 行くぜ、二人とも！！」

キョウとギンガの言葉でアギトも元氣を取り戻したようだ。彼女は駆け足でキャンプ場へと続く階段を上っていく。彼らの4度目の休暇はこれからだ……。

【35万PV記念クロス】世界をまたぐ夏休み（山編2）（後書き）

お待たせしました。次回からはやっと公開意見陳述会の続きになります。

何時も通り最新話が挙がり次第、番外編は移動させますのでご注意ください。

ちよつとだけネタバレ

「Are you OK? バスターウルフ!!!!!!」

読んでいただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6706s/>

『烈火の拳聖』 魔法少女リリカルなのはStrikerS

2011年9月27日02時11分発行